

ジャン・パウル著『見えないロツジ』翻訳

パウル, ジャン

恒吉, 法海

九州大学大学院言語文化研究院 : 名誉教授 : ドイツ文学

<https://hdl.handle.net/2324/1786448>

出版情報 : ジャン・パウル 研究書・翻訳書, pp.1-312, 2016-12-10
バージョン :
権利関係 :

『見えないロジ』(1793年)

ある伝記

Die unsichtbare Loge

Eine Lebensbeschreibung

ジャン・パウル著

恒吉法海訳

恒吉法海・九州大学リポジトリ翻訳研究 11

2016年12月10日

モットー

人間は自然の本の中の大いなるダッシュ[思索線]である。

『悪魔の文書からの抜粋』

[副題] ミイラ [Mumien]

目次

(第一部)

『見えないロジック』に関して 全集の読者に対するお詫び	5
第二版への序言	6
序言者 或る紀行記の形式による	12
第一扇形 婚約のチェス ー 大学を卒業した新兵 ー 仲介の猫	18
第二扇形、あるいは切片 先祖卸商の先祖の価格[家格]表 ー 種馬と叙爵書	26
第一の号外 私の伯爵領が大旅行からの私の帰郷後になした祝典	28
第三扇形、あるいは切片 地下の教室 ー 最良のヘルンフート信者とプードル[むく犬]	30
第四扇形、あるいは切片 百合 ー 獵笛 ー 眺望は死の告示	34
第五扇形、あるいは切片 復活	36
第六扇形、あるいは切片 美しい顔の強引な拉致 ー 重要な肖像画	37
第二の号外 ある宗教局書記の麦藁冠奉呈辞、この辞の中で、書記とその辞は不義密通と離婚は許されるべきもとであると証明する。	41
第七扇形、あるいは切片 ロービッシュ ー 椋鳥 ー 先の猫の代わりに子羊	45
第八扇形 旅立ち ー 女性の気まぐれ ー 切り裂かれた両目	48
第九扇形 体のない内蔵 ー シェーラウ	53
第十扇形 上部シェーラウ、下部シェーラウ ー ホッペディーツェル ー 植物標本集 ー 訪問者の咽喉炎 ー 侯爵のペン	55
シェーラウのすべての女性達が見知らぬレディーを目撃した際に陥る訪問の咽喉炎についての特別行	59
支配者の親指についての特別エッセイ	61
第十一扇形 アマンドゥスの目 ー 目隠し遊び	62
第十二扇形 コンサート ー 主人公は作法ある家庭教師を得る	64
第十三扇形 悪漢達の国喪 ー シェーラウの侯爵 ー 侯爵の負債	66
第十四扇形 結婚生活の神明裁判 ー 五人の騙された詐欺師	69
第十五扇形、あるいは切片 十五番目の扇形、あるいは切片	74
第十六扇形 教育の手本[プログラム]	75
号外 私は何故グスタフに機知と墮落した作家達を許し、そして 古典的作家、つまりギリシアやローマの作家を禁ずるのか。	79
第十七扇形 聖餐 ー その後の愛餐と愛の接吻	83
第十八扇形 シェーラウのモルッカ諸島 ー レーパー ー ベアータ ー 薬用女性服 ー エーフェル	89

第十九扇形 [世襲領主への]忠誠の誓い ー 私、ベアータ、エーフェル	102
第二十扇形 人生の十年代[二番目の十年] ー 幽霊話 ー 夜の場面、人生の諸規則	107
第二十一扇形、あるいはミカエル祭[九月二十九日]の扇形 読者と伝記作者の新たな契約 ー グスタフの手紙	112
第二十二扇形、あるいは第十九の聖三位一体の祝日の扇形 真の刑法学者 ー 私の領主裁判所長職 ー 誕生日と穀物の密輸入	117
第二十三扇形、あるいは第二十の聖三位一体祭の扇形 別の喧嘩 ー 静かな国 ー ベアータの手紙 ー 和解 ー グイードの肖像画	122
第二十四扇形、あるいは第二十一の聖三位一体祭の扇形 エーフェルの陰謀 ー 名誉剥奪 ー 別れ	129
第二十五扇形、あるいは第二十二の聖三位一体祭の扇形 オットマルの手紙	136
号外 高い人間について ー 情熱は第二の生にふさわしく、ストア主義はこの世の生にふさわしいことの証明	139
第二十六扇形、あるいは第二十の聖三位一体祭の扇形 学校教師の許での正餐 (第二部)	141
第二十七扇形、あるいは第二十一の聖三位一体祭の扇形 グスタフの手紙 ー 侯爵とその調髪用櫛	146
第二十八扇形、あるいはシモンとユダの扇形 絵画 ー 弁理公使夫人	153
第二十九扇形、あるいは第二十二の聖三位一体祭の扇形 大臣夫人とその失神 ー 等々	158
第三十扇形、あるいは第二十三の聖三位一体祭 晩餐会と家畜の鈴	164
第三十一扇形、あるいは第二十四の聖三位一体祭の扇形 病床 ー 月食 ー ピラミッド	173
第三十二扇形、あるいは十一月十六日の扇形 肺結核 ー 「静かな国」の教会での弔辞 ー オットマル	181
第三十三扇形、あるいは第二十五の聖三位一体祭の扇形 愛の大きなアロエの花、あるいは墓場 ー 夢 ー オルガンと私の卒中、毛皮長靴、氷の学生頭巾	185
第三十四扇形、あるいは第一待降節の扇形 オットマル ー 教会 ー オルガン	190
第三十五扇形、あるいは聖アンドレアスの日[十一月三十日]の扇形 愛の日々 ー エーフェルの愛 ー オットマルの館と蠟人形	195
第三十六扇形、あるいは第二の待降節の扇形 上品な肉体からの円錐曲線 ー 誕生日のドラマ ー 鏡の中のランデヴー (あるいはカンペの言では逢引)	203
第三十七扇形、あるいは聖クリスマスの扇形 恋文 ー 喜劇 ー 晩餐 ー 正装舞踏会 ー 二つの危険な真夜中の場面 ー 教訓	210
人形についての言葉	214
第三十八扇形、あるいは新年の扇形 小夜曲 ー 別れの手紙 ー 私の諍いと病	225
第三十九扇形、あるいは第一の顕現日[一月六日後の最初の日曜日]の扇形	231
第四十扇形、あるいは第二の顕現日[第一の一週間後]	231
第四十一扇形、あるいは第三の顕現日の扇形	231
第四十二扇形、あるいは第四の顕現日の扇形	231
第四十三扇形、あるいは第五、第六の顕現日の扇形	232
第四十四扇形、あるいは復活祭前九番目の日曜日の扇形	232
第四十五扇形、あるいは復活祭前八番目の日曜日の扇形	232

第四十六扇形、あるいは四旬節前の最後の日曜日の扇形	232
第四十七扇形、あるいは四旬節第一主日の扇形	233
第四十八扇形、あるいは五月の扇形 とんとん叩く従兄弟 ― 治癒 ― 湯治のキャラバン	233
第四十九扇形、あるいは第一の歓喜の扇形 霧 ― リーリエンバート	241
第五十扇形、あるいは第二の歓喜の扇形 鉱泉 ― 愛の嘆き	242
第五十一扇形、あるいは第三の喜びの扇形 日曜日の朝 ― 野外の食事 ― 雷雨 ― 愛	246
教会の間違った建築様式についての号外	248
第四の歓喜の扇形 天国の夢 ― フェンクの手紙	252
第五十三の扇形、あるいは最大の歓喜の扇形 あるいは誕生日の、あるいはティドレ島の扇形	254
第五十四扇形、あるいは第六の喜びの扇形 この夜の翌日 ― ベアータの手紙 ― 珍しいこと	264
最後の扇形 ††††††††††††	267
アウエンタールの満足した学校教師マリア・ヴッツの生涯 ― 一種の牧歌	270
伝記と牧歌の読者に対する終わり鐘、あるいは七つの最後の言葉	296
六月二十一日、あるいは夏至の日	
解説	301
あとがき	312

(第一部)

『見えないロジ』に関して
全集の読者に対するお詫び

『ロジ』は私の見解や約束にもかかわらず、生来の廢墟のままである。三十年前であれば、私は結末を冒頭のあらゆる熱意と共にもたすことができたであろう。しかし老齢となると大胆な若者が始めたことを完成させることはできず、単に繕うことができるだけである。創作の全力を弱めずに適用してさえも、もはや昔の出来事や紛糾、情感は継続に値するようには見えないことであろう。それ故、シラーの『ドン・カルロス』においてさえも、二つの時代、二つの声が聞き取れるのである。

『ある巨人女性の頭蓋下での伝記の楽しみ』という作品が更に、屋根も棟梁竣工挨拶もなしにこの全集に加わることになっている — これも最終版である。 — 二つの未完の小さな家も、あらゆる種類の建物の街路の中で — 園亭や — 教会は付いていない大きな祭具室や — 精神病院とか市庁舎や — 小さな講義室や — 住居や — 屋根裏部屋や — 出窓や — イタリア式地下室[酒場]の街路の中で許されないものだろうか。 — 何故ある作品が完成しなかったのか尋ねるとしても、何故その作品は始まったのか尋ねさえしなければ、なお結構なことであろう。世の中の人生で中断されないものがあるだろうか。未完に終わった長編小説では、クンツの二番目の恋愛とエルゼのそれに対する絶望がどうなったか、そしてどのようにしてハンスは地方裁判所判事の魔の手を逃れ、ファウストはメフィストから逃れたか知らされていないと人々は嘆くとしても、人間というものは現在の状態では結び目[葛藤]しか見えないのであるということでご慢して貰うしかない — 墓場を後にして始めて解決が見えるのである — 世界史全体が人間にとっては未完の長編小説である。 —

バイロイト、一八二五年十月

ジャン・パウル・フリードリヒ・リヒター

第二版への序言

作家達の小さなお祝い、いや書齋のお祝いに若干の好意的関心を抱く者は、きっと第二版への彼らの序言に満足して目を通すことだろう。というのはこの序言の中で作家達は本の記念祭を祝うからであり、その中では最も快適なこと、つまり自らについての他にはほとんど何も言うべきことはないからである。作家は試しの版の序言では大変草臥れておらずおと振る舞わなければならない、極端な、しかし欠かすわけにいかない謙譲さから多くの不安や懐疑を（それは自らの才能に関与していて）白日に晒さなければならないというとき、これに対して記念祭の著者の通過の後では何と束縛もなく快活に、初版の序言の闘う教会から第二版の序言の凱旋の教会へ移り、記念祭の男は自ら不安もなくセレナーデを歌い、その万歳と活気をもたらすのである。

現著者はこの全紙で自ら記念祭を行う用意があり、その最愛の子供達の一人、一 まさにこの本、長編小説の長子と共に家庭的お祝いを一 挙行する用意があつて、ここで第二版の序言を述べている。

一 しかしお祝いの最中、筆者のような著者はこのような具合では仕舞には本よりももっと多く序言をなしてしまうと考え一 例えば三度通過して『ヘスペルス』では曙光として三つの序言をなしており一 従つて製作よりもおしゃべりが多いと考えてしまう。いずれにせよ老齢では自らについてよく語る。しかしまさに老齢と共に残念ながら新たな版が増え、かくて自らについて何でも話してしまう序言も増えてしまう。

ここで私が自らについて言うべきわずかなことは、通常の序言者の自己称賛に限定され、また称賛の裏箔として置かれた自己非難に限定される。

私のすべての版の持続的改善はここでも、のらくらもの、言語泥棒、異国語の国外追放、本からの追放であり、間違つた属格の s や ung の根絶であつた。一 更に、必要なすべての頁で、明かりや影や色彩が高められたり、深められたりしたが、しかしほんの弱い程度になされた、それも大抵は喜劇的箇所であつた。というのは一 自賛を続けると一 自然や愛や偉大なものが、我々の中であるいは我々を越えて、描くかの真面目な箇所を強めたり、変えようと思つたとしても、これは私の晩年には不可能なことであつたからである。私はかの箇所では私がともかくまず最初に書いたということを神に感謝せざるを得ないのである。一 かくて四回印刷された『生意気盛り』の後でも、私が歳月を有する限り、更に新たな巻をもっと好んで容易になすことであろうが、一 この『ロッジ』の第三巻あるいは最終巻をいつか築かなければならないとしたら、この困惑はまず正しいものと明らかにならう。私は衷心から私のどこかの模倣者が私自身よりもその重荷を引き受けて欲しいと願う。

というのはその諸理由は明白なものだからである。現筆者は十九歳のとき書かれたスケッチの後で更に九年間その諷刺的酔工場に留まり働いた（薔薇の酔漬け、酔蜜をその工場から『悪魔の文書からの抜粋』が供した）。そしてようやく一七九〇年十二月に『小学校

教師ヴッツ』^{*原注 1}のまだ若干酔蜜的人生を通じて『見えないロッジ』への至福の移行をなすことになった。従ってその間、ホラチウス風の九年間の間ずっと、この青年の心は諷刺によって封鎖されていて、自分の中で聖なるもの脈打つものすべてが、波打ち、愛し、泣くものすべてが閉ざされているのを見ざるを得なかった。さてようやく二十八歳のとき自らを打ち明け、流通することを許されると、それは容易に穏やかに太陽の下の温かい涌き上がる雲のように流出することになった。 — 私は単に放任して、流れを見守るだけでよかった。そして裸のままの考えは何もなくて、どの考えもその言葉をまもっていて、然るべき生育で芸術[技法]の缺を必要とせずにあつた。まさに長いこと押さえられていた過剰な心は、その満潮の中でも、その引き潮の中で次の本の見本市のために波の跳躍をせざるを得ない絶えず告白している、空しい流れの心よりももっと正しいもの抑制されたものを維持していたのである。いやはや。すべての最良のもの、殊に感情の最良のものはただ一度発するべきであろう。 — 力強い樹木の花は小さくて、ほんの二つの単純な色彩を有する、白と赤の色で、無垢と羞恥の色である。これに対して細い茎の上の草花の花は茎よりも大きくて、輝かしい色彩で飾っている。 — しかしどの最初の感情も一つの明けの明星で、これは沈むことはなく、直にその魔法のほの白い輝きを失うが、日中隠れたまま青空の中を移っていくのである。...

私はここで言及することによって同じ華麗な狼藉を働いている。しかしまさにまた言及された理由によってであり、私は新鮮な感情が初めて話すときの乙女らしい力強さと美しさについて、すでに何度も、殊に序言では語ってきたからである。(私は『ミイラ』のこの第二版のための序言の中で、『グリーンランド訴訟』の第二版のための最新の序言を指摘しておく)。かくてこの命題の正しさはすでにその命題の語られる様で証明されている。

筆者がその最初の長編小説を二年も早く執筆したこと、つまりすでに二十八歳のときに執筆したことはひょっとしたら大目に見られるかもしれない。しかし筆者自身告白するが、全体に長編小説は、昔のドイツ人がその小説を演じて、その後すぐ結婚によって史実へと変えた年齢の前、つまり三十歳の前には書くべきではなかろう。リチャードソンやルソー、ゲーテ（これは抒情的な『ヴェルター』の場合ではなく、長編小説的『マイスター』の場合である）、フィールディングや多くの者の許でこの命題の正しさが証されている。 —

『見えないロッジ』の筆者はリヒテンベルクによるドイツ人長編小説作家の人間に対する無知への説教を読んだ、つまり現実並びに人物に対する大いなる無知を難ずるもので、筆者は幸いにも二十八歳以前には長編小説に挑戦する勇気を持てなかったのである。筆者は、詩人達は、画家や棟梁同様に、わずかではあっても若干のことを知っていなければならないと常に案じていた。いや詩人は（この件を更に高めて）境界の学問についてさえ（勿論すべての学問が詩と境界を接している）幾多のことを知らなければならない、画家が解剖学や化学、神学、その他について知らなければならないようなものであると思ってきた。

— 実際ゲーテほどに — 彼はすべての著名な詩人達の中で最も多くの根底的知識を

*原注 1 『ヴッツ』は『ロッジ』の第二巻の最後にある。しかし『ロッジ』より早く出来た。小学校教師はフリーメーソン親方、老大家、先導の羊として私の長編小説の主人公、グスタフやヴィクトル、アルバーノ等を導いていた。

束ねていて、帝国実務や法学に始まってすべての技芸を通じて、鉱山学や植物学、すべての自然科学に至り、一 原理の確固たる荘厳な支柱として打ち立てた者はいなかったのであり、あれこれの件に関して明察を有する詩人にして初めて語って聞かせていいのであり、かくてここでは詩文はかの植物と同様な関係にあつて、この植物はどんなに温かく、湿っている大気の栄養素があろうとも、太陽光という明るさがなければ、味も可燃物も欠けることになるのである。

幸いにもそれ以来 一 つまりリヒテンベルクや他の散文家達の辞した説教職以来 一 多くのことが変わり、それも詩人達のまことの利となるように変わった。主に人間観察が詩人達に対して芸術通や貸本読者達によって好意的に免除されている、そしてそれだけに一層彼らに対してロマンチックなことが期待され、要求されている。それ故に所謂性格というものは 一 ゲーテの場合の例えば立派な性格とか、シェークスピアにおけるまさに立派なもの、いやほんのレッシングの場合のようなものでも 一 まさに当世の長編小説作家がまさに最も意を用いない性格となっており、彼らにとっては 一 他に然るべきロマンチックなものがありさえすれば 一 性格というものは単に半端に何かを表している、全体的には何も意味していなくても、それで十分なのである。彼らの性格あるいは人間模様は、立派な菓子像、あるいは砂糖像で、すべての砂糖漬け人形や練り菓子人形同様にはなはだ不似合いに、いや不恰好に、しかしそれだけに一層甘く砕けて、舌の上に優しく溶けるのである。彼らの描かれた頭部はさながら、このより高次の製紙工場の紙の印[すかし]で、原物との類似性は、プロイセンやザクセンの草案の紙の上のプロイセンやザクセンの王の頭部よりも大きな類似性を必要としない、その頭部や頭部の非類似性は一全紙光に当てるとよく分かるのである。さてまさにシェークスピアに比肩する気がないのであれば、新たな性格は創造するのに難しく、わずかしか創造され得ないので、逆に新しい物語は容易に作成され得るので、この物語の合成にはすでに恣意の規定された最終韻が有機的な小球、あるいは蛙の卵を提供しているので、かくて諸性格の永続的雲の形姿によって、この形姿は眺めているうちに流動的に変わったり、生じたり、自ら一エレ増えたり減じたりするのであるが、創作の際の詩人の途方もない苦労や時間を節約してくれて、詩人はその労苦や時間をもっと有益に出来事に関して応用することになる。詩人はどの見本市であれ、新しい出来事と古い諸性格の新鮮な富と共に登場できるのである。詩人は（北方の神話の）料理人アンドリマーで、鍋のエルドリマーを有し、豚のゼーリマーを料理する。この豚は毎晩生き返るのであり、詩人はかくてヴァルハラ英雄達を毎日もてなすのである。

このロマン派的精神は今や長編小説や悲劇において、ある高み、完成を得ていて、これを越え出るとは自己消滅なしにはほとんど出来ないことであり、これは芸術の言葉では言えなくても、全く卑俗な言葉では馬鹿とか非常識と名付けることのできるものである。いずれにせよ分別が豊かとは言えないヴェルナー[Werner, 1768-1823]の悲劇に始まって、分別の過剰なミュルナー[Müllner, 1774-1829]のイングルトやアルバニア人女性に至るまで、奇妙な、蜃気楼的な、大地を必要としない非常識が諸性格を支配していて、かくて物語の一部をも支配している。この物語の舞台は本来無限なものである。狂った、あるいは狂いそうな諸性格が人々の欲する筋をすべて動機付け、動かすことができるからである。他の民族や以前の時代の最も偉大な天才達の場合でさえも、分別の芸術的ずれや歪み、ア

ナグラムをいたずらに探し出せて、例えば上述の改宗者のルターやアッティラの場合とかである。ソフォクレスのような人でさえも、遺産に依存している子供達にもうろくしていると訴えられたら、この子供達を『エディプス』のようなはなはだ分別豊かな悲劇で打ち負かそうと思ったものである。しかし我々の時代であれば、多分ドイツのソフォクレスたる人は裁判で、自分の分別の証明を、自分の主人公達にその分別を奪ったような詩に他ならないもので行うことだろう。

このロマン派的芸術の非常識は幸い涕泣に限定されず、諧謔とか気まぐれと呼ばれる笑いにまで及んでいる。私はここでは序言の制限故に単に、力強いフリードリヒ[E.T.A.]・ホフマンを引き合いに出すことにする。彼の『カロー風の空想』を以前私は、彼がとても高くとは言えないが、私にはるかに近くいるときに特別な序言で推薦し、称えたものである。最近では勿論彼は諧謔的諸性格を — 殊にもはや純粋な日中の光や堅固な大地を受け入れないその朝方の幽霊や日中や夕方、夜の幽霊の紛糾した混在の中で — 一つのロマン派的高みへと押し上げる術を心得ていて、諧謔はまことに真の非常識を備えている。これはアリストファネスやラブレー、シェークスピアには見られない代物である。快活なティークも初期の作品ではこの諧謔家的ベラドンナ[狂った桜桃]を求めて若干幸運な跳躍をなしているが、しかし狐として後にそれを届かないままにしている、快樂のバッカスの果実の葡萄摘みで満足している。

これらわずかなことを示せば、筆者は現今の文学の高い見地や動揺点をいかに好意的に喜んで認めているか足りるであろう。今やベラドンナが(狂った桜桃のことをそう呼ぶが)我らのミューズであり、プリマドンナ、聖母であることは疑いなく、我々は詩的な狂った桜桃祭の中に暮らしている。それだけに、読者界もこの詩的な上昇気分を喜ばしいやり方で関心を示して好意的であるのは更に喜ばしいことであり、読者界は東洋同様に狂人を聖者として敬い、彼らの述べることを天啓と見なしている。そもそも素晴らしい月桂冠の時代、桜桃冠の時代である。

新たな第二版にもかかわらず、喜んで立派に改訂しようと望んでいる筆者にとって新たに苦痛に思われるのは、その詩文の一つとして、諸性格や物語や言語について包括的で入念な芸術批評をかつて受けたことがないということである。誇張にまで至る一般的な称賛や更に大きな誇張に至る同様な非難では正直な芸術家には応分なものでなく役立たない。当然なことに第二版は更に初版よりも判断や吟味は少なかった。筆者は毎晩自身に対する厳格さの称賛を求めて空しかった。どんなに筆者が好んで改善し、削除しているか — 単に他人の作品を分解してしまうウィーンの舞台支配人よりも更になお改善しているか — そして茨の非難や棘のある非難から、それは薔薇であれ雀蜂であれ、改善の蜜をいかに執心して吸い込んでいるか、このことは芸術批評家なら二冊の本しか読まなくても知ることができよう。つまり初版の傍らの第二版の本である。いや一冊の本からでさえ、出版者殿に初版の、賢明な皺や印刷インクやインクの墨で同時に溝のできた古い版を好意で見せて貰いさえすれば、すべてを察知できよう。その方はまさにその本を手し、出版社の中で改善点に驚くことだろう。

しかし残念ながら申したように、現在ドイツでは文芸はほとんど批評されない。懐中暦がここでは多分に重要な唯一の例外で、つまりこれには様々な小論文とそれに対する様々な小さな判断が示されている。

私が二十八年後によくこの本の両タイトルの意味を述べようとするのは、本来かなり遅れたことである。『見えないロッジ』というのは一つの秘密結社に関連することを表していることになっているが、しかし勿論私が第三巻か結末の巻で明るみに出すか、世に出現させるまで隠されたままである。二番目のタイトル『ミイラ』の意味はもっと明瞭に説明される。『ミイラ』はもっと私の気分を暗示しており、『見えないロッジ』の方はもっと物語を暗示している。つまりこの作品の至る所で現世のはかなさ、脆さのイメージが、エジプトのミイラやギリシアの工芸の骸骨のように陽気さや饗宴の中で置かれているのである。しかしまあ詩は消滅よりは生起を示し、創るべきで、生の上の骸骨よりも、死の上の生をもっと描くべきであろう。ミューズの山は最高に高い山、すべての雲の上にそびえる山を、我々に天と地とをより明るく眺めさせる山、同時に星座や花盛りの谷を間近にさせる山をもたらしべきで、これが水の中で働く、難破した人類のアラト山となるべきであろう。神話^{*原注 2}の中でデウカリオンとピュラがノアの洪水のときパルナソス山に逃れて助かったようなものである。このようなことを特に我々のゲーテは欲しており、それを目指して詩作している。詩文は単に明るく照らすべきであり、暗く雲で覆うべきではないのである。私もそう思う。いや生来の思わず知らずの — まさに希望とか思い出と呼ばれるものが — なければ、現実は耐えられないであろうし、少なくとも享受できないだろう。 —

しかしまさに青春は、この生きた詩は、その花盛りの枝の中で（しかしこれは青春にとっては果実の枝であるが）、そして陽の当たる温かい丘の上で好んで詩作し、詩作されたものを読むのは、夜の想いの他にはないというのは同様に確かなことである。愛に病む乙女の前にはばかりでなく、愛で強壮な青年の前にも — それ故青年は老人よりはるかに熱狂して戦争での散華に向かうものであるが — 墓地が空中の吊り庭として漂っているものである。そして彼らは見上げて憧れる。青春は単に緑の花盛りの墓塚を知っている、しかし老年が知っているのは緑壁のない墓塚である。

この若々しい見解が、まだ自分にとっても若々しい年齢のときに執筆した著者にとって、この作品における余りに頻繁な埋葬や無常の夜の絵にもかかわらず役だって欲しいものである。 — しかしここでは余りに臆した正当化は必要ない。というのは我々は皆いつかは、絶えず破滅させ、破滅させられる時の中を泳ぎ続けて、分秒ごとの小さな墓塚に乗って最期の時の大きな墓塚に乗り込まなければならないからである。かくてここではおぼろげとした詩の脇見ではなく — これは単に個々人を襲い単に一時的に襲うような厄災の際に妥当するものであるが、ただ勇敢に上方を見上げることが詩的であり勇気付けることができるのである。詩はただ大胆に墓地を開けるべきであるが、また詩は、いかに墓は二つの天の半分の間にあって、我々はどのようにして覆われた天から開かれた天へ向かうか示すべきでもある。 — たとえ我々が単に戯れる一日限りの寿命の蚊として、本来は一夕限りの蚊として、沈む太陽の光線の中で陽を浴び、そして沈んでいくとしても、単に蚊のみが没するのではなく、太陽も没するのである。しかし大地が存在しない創造の広大な自由の中では、諸太陽と諸精霊は没せず、墓を有しない。

*原注 2 オウィディウス『変身物語』VI.

かくてこの二つのミイラは、ここかしこ印の帯で別様にくるまれる他、永続のために新たな香料を香油として塗られることは少ないのであるが、再び、読者の饗宴のために以前の魅力と招待を得て欲しいものである。そして第三の、あるいは最後のミイラが追加されて欲しい — 美しいギリシア的意味での第三のパルカ[運命の女神]として、 — ミイラの父親自身がその前に大きなミイラとなる運命を有しない時の話である。従っていずれの場合にも、第三の最後のミイラが欠けることはないであろう。

バイロイト、一八二一年六月二十四日

ジャン・パウル・Fr. リヒター

序言者
或る紀行記の形式による

私は最初「序言者」をヴォンジーデル近郊のズィヒャースロイトかアレクサンダーバートで仕上げるつもりだった。私はただこの本によって余りに深く私の体の中へ書き上げてしまった足痛風をまた、湯に入って、足先へ押し下げようと思ったのであった。しかし私はすでに一年前から楽しみにしているこの「序言者」をまことに理にかなった理由で今日まで取っておいた。まことに理にかなった理由というのは、私が今まさに通行中のフィヒテルベルクのことである。 — 今私は、運行中写字板や客馬車から外を見ないようにしてこの序言を書かなければならない、つまり私は上部の果てしない眺望を、春のように立法ルーテに従い、奔流をエレ尺に従い、森をクラフター[尋]に従い、山を船舶ポンドに従って私の馬で碎いて得るのではなく、自然の大いなる円形競技場、パレード広場を一気に中のすべての奔流や山々と共に広げた魂の中に受け入れたいのである。それ故この「序言者」はオクセンコプフから遠からぬ所、シェーネベルク山上で終わる他ないのである。

しかしこのため、途中私は「序言者」の中で多くの人々と会話をし、「序言者」と共にオクセンコプフ上に達してしまうようにせざるを得ない。私は少なくとも、書評家達 — 紳士達 — オランダ人達 — 侯爵達 — 製本屋達 — 一本足とホーフの町 — 審美家達、美しい魂達、つまり九つの党派と話さなければならない。私がここで、そう見えるように、私の馬のクライマックスの中へ詩人達のクライマックスを編み込むのは私の損にはならないことだろう。

馬車は筆者をはなはだ揺らして、そこで筆者は第一番の書評家達とは何ら理性的なことを話そうとせず、単に筆者の善良なる老いた養父の行うこと、つまり毎日のそのしたたかな殺害、殺人を語ることにするしかない。多くの養父が結核性であり得ることを私は認める。しかし私の養父ほどに薬用性があり、砒素性のあるものは少ないので、私は家では私の養父を — これは結核患者はその息で蠅を殺せると最初ハラー[Haller, 1708-77]の『生理学』第二巻から知ったのであるが — 害のあるベニテングタケ[蠅海綿]の代わりに有効に利用している。この結核患者は細切れにはされず、単にちょっと努力して、朝全体を一伝染病の代わりに私の部屋で流行病にさせ、その燃素性の息のシロッコ熱風で肺から蠅どもの肺に吹き付けるのである。書評家達は、ピラトル・ド・ロジエ氏の毒よけの呼吸マスクを着用できない卑小な人物や鼻がこのような恐ろしいガスに耐えられるものか容易に察することができよう。蠅どもは — 蠅のように死に絶えてしまう。そしてこれまで蚊を飼っていたけれども、私は単にこの善良な有毒の養父を扶養することにする。これは蚊に対して蚊の友ハイン[死神]として付き合うのである。さて私は、立派な書評家をこのような毒と価値を有する養父と同等に置くことが許されよう。いや私は書評家の手を握って、流行性結核患者を指し示して、焚きつけ、こう尋ねたいと思う。「貴殿自身は少しも軽蔑されるべきではなく、貴殿は — 結核患者がその肺翼で最も繊細に必要な瘴気を蠅どもに吹きかけながら、自然博物史の中で高貴な稀なる部分を代表しているのであれば — 同様に文学史の中で有益な部分を形成しているとお気付きではないか。貴殿が、学者共和国の中であちこち忍び歩きながら、ぶんぶんいう昆虫の翼をその侵食性の息で的確に吹き付けて、それがイナゴの群のように死に絶えるようにするとき、このことをお気付きでは

ないか、そして更に良いことにお気付きではないか、つまり私は書評家にお尋ねしたいが、このことから貴殿は結論付けなさるのではないか、『見えないロジック』の「序言者」はこのことを十倍もくたくたくするつもりではないか」と。 —

しかし「序言者」は勿論はるかに手短にする、さもないと紳士達にさえ触れないうちに、いわんや他の者達に触れないうちに序言の最中オクセンコプフ山上に到着してしまうからである。

さて私の「漸層法」の第二番、第二段は紳士達に触れようと思っている — カンペ [Campe, 1746-1818、言語浄化主義者]はこの「漸層法」という言葉で器用にクライマックスという言葉で彼の書や私の書から追放しているわけであるが、 — しかし私は私の作品では、あたかも徳操や、しばしば熱狂と呼ばれているかの陶醉から、立派なものを作り出しているかのような振りを余りに頻繁にしていることの正当化の他には余り紳士達に苦情を述べるつもりはない。物分りのよい人々が私の振りを真面目に考えることに対し実際心配していない。徳操という名前の代わりに徳操そのものを有したいと思うことの滑稽さは我々双方とも承知していると期待している。 — 今日では我々の中の誰も(『ガリヴァー旅行記』の)ラガードの狂った哲学者達の一人とはならないだろう、彼らは自分達の肺に対する敬意から、命名よりも事物そのものを使って、いつでも自分達が話題にしようと思う対象をバッグや袋に持ち込んでいたのである。しかし事柄そのものより大いに流行しているとは言えない、「神や永遠」という名前のように、作法のサークルで好んで避けられる名前を、私がしばしば使用していることに関して、必ずしも悪く受け取られているわけでないかどうかは、議論の余地があろう。しかし私は他面ではこうも見ている。つまり徳操という言葉はラテン語と同じようなもので、ラテン語は今ではもはや話されることはなくて、しかし書き言葉としては認められていて、それ故夙に口頭から筆に移ったのである、と。そもそも私は洞察力ある書評家にこう尋ねたい、我々詩作家は徳操的志操なしに、これを我々は詩的な機械として寓話的神話と全く同じように使用しているわけであるが、一時間でも切り抜けることができるか、我々は執筆のために必要な徳操を、我々の(印刷された)諸性格のジャッキ、鑑[あぶみ]、モンゴルフィエ式気球、跳び棒として有しなければならないのではないかと。さもないと我々は一匹の猫にも気に入られないのである。これは哀れな俳優達の場合も変わらない。政治や、経済や、諸宮廷について書く諸作家は勿論まさに反対の手段で興味を引き起こす。まさにこのようにして、詩人や女達はその心と呼ぶものを自らの諸性格の中に綴じ込む執筆家は埋め合わせをする。心は温かいにせよ、そうでないにせよ、心は性格の中に掛かっているなければならない。(描写された人間の中ばかりでなく、生きた人間の中でも)。同様に銃工は空気銃に銃同様に[飾りの]点火管を付ける、これは単に[圧縮された]空気で作られるけれども。...まことにフィヒテルベルクの中で、丁度私の馬車が八月中旬に進んでいるまさにこの林道ほどに風が冷たい音をたてる所はない。...

三番目のオランダ人に関しては、私は安馬車の中で彼らの詩的趣味の欠如故に喧嘩しようと思う。これがすべてである。彼らにとっては荷造り人が詩篇作者よりも大事であって、魂の画家よりも水夫[奴隷]売買人が大事であること、また東インド会社は単なる老オルフェウス以外には一人の詩人にも年金を払いそうにないことを非難したい。オルフェウスの詩は歌われると流れをとめてしまつて、従つて彼のシャルマイやミューズはベルギーのダ

ムに使えるからというわけである。私はネーデルランド人から美と利益の間の商人的区別を奪って、彼らにこう保証したい。つまり軍とか工場、家、農場、耕地、家畜は、彼らが、人間のすべての行為が目指すことになる若干の感情を刺激し、高め、表明するときの手段たる単なる魂の執筆道具、仕事道具にすぎない、また東インド会社にとって船とか島々は、詩人にとって韻律や筆の役目のような役をしているのであり、そして哲学や詩文は認識の樹における本来の果実や花であるが、しかしすべての実学、経済学、国家学、財政通信や帝国新報は単なる吸入する葉であり、白木質、根のきづた、木の下で芽生える腐肉と保証したい。 — 私はそう言いたい、しかし放っておいた、というのはドイツ人がオランダ人というのは単に我々自身のことであると気付くかもしれないと案じたからである。というのは他にどうしたら茶であく抜きをしたベルギー製のナイトガウンをまとえるであろう。 — いずれにせよ、運行の距離は短く、まだ多く仕上げなければならないのである。

私はヨーロッパの国会に、私の作品の四番目を一人の侯爵に渡すことを禁ずる、さもないと侯爵は眠り込んでしまうからである。侯爵の眠りはホメロスの眠り[立派なホメロスが眠るたびに、私は腹が立つ。ホラティス『詩論』]の半分も面白くないから、ヨーロッパの国会が Arcuccio^{*原注 1} のような法を領民の上に築いて、領主が眠って領民を押し潰すことができないようになれば、私は侯爵が眠るがままに任せようと思う。侯爵はその中で好きなように横になったり、背にもたれたり、腹ばいになったりするがよいのである。

第五番の百名もの製本工が、私を何週も前に、切り揃え、圧縮するというよりは読むために、私を腋の下や両手にかかえて行こうとするであろうから — 立派な書評家達はきっとこの逆をするであろうが、 — 立派な書評家は製本工を待たなければならず、読者は書評家を、私は読者を待たなければならない。かくて一人の厄災者がいれば、いわば我々皆をけしかけ、沼に引き入れることが許されることになる。しかしこのことを製本工達に禁ずることができるのは私の他にあらうか。私はこの製本工への報告でこのような製本工に対して私の本を自らの手で差し押さえることにする。

第六番の一本足と、約束したように大いに話すことは何の甲斐もない。私とその者本人であって、その上一本足の著者という者であるからである。私が住んでいるところのホーフ人達は（第七番のホーフの町の住民のこと）、私にこの非叙事的名前の綽名を付けなければならなかった。私の左の脚は周知のように一方の脚よりもかなり短く、その上足先にあるのは立方体の足というよりは平方体の足なのである。東インドのざりがにのように長い鋏の隣に短い鋏を有する人間は、子供達が脱ぐ履物を利用すれば結構であると勿論私は承知している。しかし足痛風がこのような男の両足を苦しめていて、かつて被告人が履いていた忌々しいスペイン製の靴[足枷]を締め付けられているのは否認し難い。

私はフォークトランドの私の親愛なるホーフと文書でフィヒテルベルクで話そうと思うと言ふべきではなかったであろう。私は口頭でできるし、私はそこ出身の奴なのである。このような本の私の願いや目的は単に次のことであり、変わらない。つまりこの高齢の老

*原注 1 これはフィレンツェのボックスで — クリュエニッツの『家政的百科辞典』第二巻に描かれている。その中に母親は、罰則の規定の下、授乳する際乳児を置かなければならない、微睡んで押し潰すことのないようにするためである。

いた町は、私がこの本の中で鷺鳥の固い羽根ペン誘い込もうとする眠りを、鷺鳥の柔らかい羽根の上で享受して欲しいということである。

ー とうとうオクセンコプフに着いた。

この行は詩ではなく、私が上に着いて、いろいろしたことの一つの印にすぎない。私の駕籠が留め金を外されて、私は目を閉ざしたまま案内された。私はシェーネベルクで初めて、つまりフィヒテルベルクの円蓋[ドーム]で周りを見ようと思っているのである。降りるとき、私の顔にエーテル的な朝の風が吹き寄せてきた。その風は喪の扇のうっとおしい西風で私を圧迫することはなく、自由の旗の息吹で私を持ち上げた。...まことに私は気球船の下で、現今の世とは全く違う別の叙事詩を、潜水器の下で全く別の封建法を書きたいと思った。...

第八番の審美家達は私の駕籠と一緒に運ばれてきて、彼らの両手を握れたらと私は願う。私は握手してこう言うことだろう。審美家達は書評家達とは、裁判官が死刑執行人と違うように区別される、と。ー 私は彼らの趣味に対して祝意を表することだろう。つまり、その趣味は、天才の趣味のように、コスモポリタンの趣味に似ていて、単なる一つの美に対して香を焚くのではなくー ー 例え繊細さや強さ、機知に対して香を焚くのではなく、ー その合同神殿、パンテオンの中で最も風変わりな聖人達に対して祭壇や蠟燭を捧げ、クロプシュトックやクレビヨン[Crébillon, 1707-77]、プラトン、スウィフトに対して捧げるということに対して祝うことだろう。...ある種の美を、ある種の真実のようにー 我々死ぬ定めのある者はこの両者をまだ別のことと思うがー 眺めるためには、心を頭脳同様に広げて純化していかなければならない。...天と地の間には水晶の大きな鏡が掛かっている、その中で隠された新しい世界がその大きな諸像を写すのである。しかしただ汚れのない子供の目のみはその像に気付く、汚れた動物の目はその鏡すら見ることはない。...本年は私の心が敬うただ一人の公の裁判官を私に贈って欲しい、たとえ私に反対する党派的な人であれ、その人が欲しい。というのはこの種の党派的な人は平日的カースト出身の非党派の人よりも教訓豊かな判決を下すからである。

ある長編小説の計画については（これは諸性格についてではないが）すでに第一巻から判断する資格を人は有しなければならない。続く諸巻がいかに美しく丸くその計画を遂行しようとも、その計画が第一巻で有した失敗や飛躍を取り除くことはない。私はそもそも著者が読者を怒らせていいような巻や冊子知らない。シェーネベルクが間近になって、フランス人の物語り方（例えば『カンディード』の物語り方）は世界で最も厭わしいものであること、そして単に、丁寧な、ホメロスとかフォス[Voß, 1751-1826]、あるいは普通の男から学んだやり方が最も興味深いものである、ということを証明する暇がない。更に次のことをほんの半分だけでも証明しないうちに私はシェーネベルクに着いてしまうことだろう、つまり我々通俗作家は（いやな名前である）総じて確かにアリストテレスを我らの「決定の師」[スコラ学者 Lombardus (1160 年没) のこと]と見なし、彼の戒律を我々の三十九の「箇条」[1563 年の英国教会の教義要項]、五十の「決定」[529-32 年のユスティニアヌスの決定]と見なすべきであろうが、しかし我々が中でも大いに敬意を払うべきは彼の三一一致（美的な比例法）を措いてなく、これに対しては長編小説すら反すべきではないということである。人間は単に近隣と現在にのみ関心がある。自分から時間と空間の点で離れている出来事は最も大事なものであれ、人間にとっては自分の傍らの最も些細な出

来事よりもどうでもいい。人間は出来事を体験してもそうであり、従って出来事を読んでもそうである。時と所の一致はここに基づいている。従って、ある物語の最中での発端、その最中から始まりの発端に戻るとしても — それに諸場面の時間の混乱した混在 — エピソード — 並びに幾つかの主要な葛藤の結合、いやそれどころか長編小説の中でこの旅、これは機械仕掛けの神々に自由な、しかし無私の遊びを許すものであるが — 要するに『トム・ジョーンズ』や『クラリサ』の中のすべての脇道はアリストテレスの三和音における二度音程となり、七度音程となる。天才は確かにすべてを償うことができる。しかし償うことは最良のすることではない。輝かしく神々しい傷跡は結局神々しい体における穴なのである。幾多の天才が、犯した規則違反の償いに当てなければならない力を規則の順守の中で発揮させていたら、二百六を下回らない奇蹟を行った聖マルティン以上の奇蹟を行うことだろう。 — 『イフィゲーニエ』におけるゲーテ、『メディア』におけるクリンガー[Klinger, 1752-1831]はひょっとしたら聖マルティン以上の奇蹟を行っているのかもしれない。...

— 目下一本足（私のこと）はフィヒテル湖の上、二つの柱の上を運ばれている、これは橋の代わりに苔むした砂漠の上にかかっている。私を乗せている駕籠かきが二歩間違えることが生ずると一人の男がフィヒテルの沼に落ちることになる。この男は駕籠の中で「序言者」にかかっている、八組の人間達と語っていて、その作品は幸いもうベルリンにあるのである。...峨々たる山々が今や神々のように大地からそびえ、山脈はその支脈を一層長く伸ばし、大地が太陽のように昇り、それからその広大な輝きを一人の人間の視線が捉えて、私の魂はその焦点の下で輝くことだろう。...数歩進み、数語書くと、私は長いこと楽しみにしてきた序言が終わり、まずは目指しているシュネーベルクに着くことになる。 — 一人の人間が自分の生涯の出来事を奇妙に組み合わせて、全く矛盾する願い、つまり「序言者」が続き、それでいてシュネーベルクに着くという願いを懐くことは結構なことである。

— この一帯では万物が静かで、崇高な人間達の内部の如くである。しかしより深く、谷の方では、人間達の墓場の間近で大地の重い大気が沈んで行く胸の上にあって、下の人間達の方に雲が大きな滴と稲妻と共に忍び寄ってきて、下の方では溜め息と汗とが住んでいる。私もまた下へ行くことになり、私は同時に下の方と上の方とに憧れる。というのは迷いがちな人間は — エジプトの神のようなもので、動物の頭と人間の胴体の作品であって — その両手を別々の方へ伸ばす、つまり最初の生の方と二番目の生の方へ伸ばすからである。その精神を精霊と肉体とが率いて行く。そのように月は太陽と地球とに同時に率いられているが、しかし地球が月にその鎖を付けるとすれば、太陽は単に月を退くように強いる。死すべき定めの方が片付けるものではないこの争いを、親愛なる読者よ、御身も、この紙上に見いだすことだろう。しかし私が大目に見ているように、御身も大目に見て欲しい。同様に不調和の形成物に対しても人間通の思いやりを示して欲しい。目に見えない手が人間とその諸力に調律の槌を叩いていて — その手は弦を締め付けすぎたり、緩めたりし — しばしば最初に極く繊細な弦を切断してしまったり — 時にはそこからせわしい三和音を引き出したり — やっと最後にすべての諸力をメロディーの音階に高めたら、その見えない手はメロディー的魂をより高いコンサートに運んでしまい、かくてこの魂はこの地上ではわずかの間しか鳴らなかつたことになる。 — — —

...私は今一時間と書きはしなかった。私は今やシュネーベルクにいる、しかしまだ駕籠の中である。崇高な樂園が私の周囲に隠れて横たわっている、丁度人間精神とより高貴なその母国との間の扉に囲まれた人間精神の中に薄暗い人間肉体があるようなものである。しかし私はとても悲しい気分で、自然が山脈から山脈にかけてなしている轟くトランペットの祝祭、[ユダヤ人の]幕屋祭の中へ踏み込む気になれなかった。まず太陽がより深く天へ落ちて、その光の奔流の中へ大地の影の奔流が落下してようやく、黙した影の下へ、更に一つの新たな至福な静かな影が進むことだろう。―― もっと率直に話すと、私は単に諸君達から――君達より美しい読者方よ、君達の夢想され、時に目撃された形姿が守護霊のように美しいもの偉大なものの高みでさまよい、合図するのを私は目にしてきたが――諸君達から別れることができないのである。私は今しばらく君達の許に留まる。我々の魂が散って行く葉[紙]越しに握手する瞬間がいつ再来するか、再来するものかどうか誰が知ろう。――ひょっとしたら私が先に逝くかもしれないし、ひょっとしたら君が先かもしれない。馴染みのあるいは未知の貴重な魂よ、君について、死が通りかかり、穀粒と雨滴の下で垂れた穂を目にしたら、こう言うかもしれないのである。すでに潮時だ、と。それでも私はかの魂達に別れの瞬間に、その瞬間には人々は千もの言葉を費やしたくて、まさにそれ故にただまじまじと見つめるのであるが、更になおこの魂達に対する私の永遠の願いを次のように言う他なく、次のように言う術しか知らない。つまりこの（我々によって地球と名付けられた）、花が咲くよりは草に覆われている有機的な小球の上で、その周りに掛かっている、霧の中のわずかな花々を見いだし給え。――君達の天上的な夢想で満足してその実現や具体化を（つまり骨化を）求めるなかれ。というのは地上では実現された夢はいずれにせよ単に反復された夢にすぎないのだから――外部は、君達の肉体同様に大地で生命化され、単に内部だけ、天で生命化され給え。そして君達を軽蔑する人間達を愛する方が、君達を憎む者を愛することよりも難しく、より大事なことだと思うことである――そして夕方が来たら、我々の人生の太陽を（今日この外部の太陽のように）地上の大地から放って別れて行く光線を高い黄金の雲に投げかけ、そして（道しるべとして）より高い太陽に投げかけることである。人生の疲れた昼の後では我々の夜には星が輝いて欲しいし、昼の暑い霧は沈殿して、冷たく明るい地平線上にはゆっくりと北方の周りに夕焼けが棚引いて欲しい。そして北東では我々のために新しい朝焼けが燃え上がって欲しい。...

... さて大地の太陽も大地の山脈に踏み込んで、この岩の層からその聖なる墓地へ沈んで行く。無限の大地はその大いなる肢体を眠りのために伸ばして、千ものその目が次々に閉ざされて行く。何という明かりや、影、高みや深み、色彩や雲が外の方では戦い、戯れ、そして天を地と結び付けるであろうことか。――私が外に出たら（まだ一瞬間、私と樂園の間には残っている）、すべての山々が溶けた黄金の層、つまり太陽によって注がれていて――黄金の鉱脈が黒い夜の鉱滓の上に泳いでいて、その下では町や谷が[夕陽の中に]あり、――山脈はその頂と共に天を眺めていて、その堅固な何マイルもの腕を花と咲く大地の周りに置き、山脈が岸辺のない海からそびえて以来、そこから奔流が滴っている。――国々は次々に眠り、そして不動の森が順次眠り、休む巨人達の寝床の上ではさまよう夜の蝶[蛾]や飛び跳ねる明かりが戯れ、この大いなる場面の周りでは我々の生の周りのように高い霧が移って行く。――今や私は外に出て、瀕死の太陽と眠り込む大地

の許に伏すことにする。

私は外に出た。 ー

フィヒテルベルク [山地]にて、一七九二年収穫の月 [八月]

ジャン・パウル

第一扇形

婚約のチェス ー 大学を卒業した新兵 ー 仲介の猫

私見によれば、最上級森林官のフォン・クネールが絶えずただチェスのことだけを考えていたのは、年に一度だけ猟区監督官達の客人、聖なる同朋 [スペイン警官]、大事な特例文書製作者となる他することがなかったからである。勿論読者は彼の道楽ほどに放恣なものを耳にしたことはなかったであろう。彼がすべての従者をシュトレーペニークの村から雇った、即ち貴族がザクセンの議会で無税を得ているように、チェスでそれに匹敵する無税を得ている村から雇って、(カトーの意味とは別の意味で) 従者同様に多くの敵を得ているというのは言うに及ばないことである ー また彼とズヴォルにあるオーバーエイセルの貴族とが、チェスを二五〇マイル離れて指で指すよりも、筆で行って、旅するよりもっと郵便料金を払うことになったということも言うに及ばない。また彼とケンペレのチェス機械が手紙の遣り取りをして、木製の回教徒の寄宿生、副官たるケンペレ氏はムーゼルマン [回教徒] の名でライプツィヒのホイ通りから私のいる前で、自分は [王と飛車の] 位置を取り替えると返事したことも人は甘受し得ることであろう。 ー 更にこう思いを致す人があろう。つまり彼は二年と経たない前にパリへ出発して、パレ・ロワイヤルとチェスのサロン協会へ行って、チェスの挑戦者として座し、チェスの勝利者としてまた飛び上がることになったけれども、その後民主主義的露地でしたたかに殴られることになった、彼が眠っているときにこう叫んだからである。女王を守り給え、と。 ー 次のことは単に二、三の者に怪しく思われるだけであろう。彼の娘は新しい帽子とか新しい小間使いを彼から勝ち取るには同時にチェスに勝つ以外にはできなかったのである。 ー ー しかし私の読者は皆、男女を問わず、老若を問わず、次のことには驚き、怒ることだろう。つまり最上級森林官はこう誓ったのである。彼の娘は騎士全体の中で、彼女の心を得る他に、チェスで勝つ奴でなければやれない ー それも七週間以内である、と。

彼の結論、連鎖推理はこうであった。「立派な数学者は立派なチェスの指し手である、つまりその逆でもある。 ー 立派な数学者は惨めな数学者よりも十分良く微分を理解する ー 立派な微分の名手は軍展開や旋回^{*原注 1}を理解する者同様に理解し、従ってその中

*原注 1 彼はこのことを新たな戦術家達、ハーン氏やミラー氏から得ているのでなければ、知らないことだろう。彼らは若い将校に会戦の最中に展開や旋回の際に角度を計算することが容易になるようにしている。 ー 同様に私は百回も、一冊の本を書いて、哀れに照準を定めている玉突きプレーヤーが、ただ、力学とちょっと高度な数学から若干解きさえすれば、目を閉じたまま当てる状態になるようにしたいと思ったものである。

隊を（自分の妻は勿論）いつでも指揮できる — そのように巧みな、経験のある将校に自分の一人娘を与えないことがあるか」。読者はきっと早速チェス盤に腰を下ろしてこう考えたことであろう。このチェス盤から、最上級森林官の娘のような大当たりを引くことはとても簡単なことだ、と。しかし父親自身が椅子の背後に待ち構えていて、彼女が自分の王と操を読者に対して守ることになる指し手を指示することになると、これは忌々しいほど難しいことになる。

これを耳にした者は、何故最上級森林官夫人は、彼女は長いことエーバースドルフ伯爵夫人のお相手役をしていたのであるが、その繊細な感情、敬虔さにもかかわらず、このような獵師の気まぐれを容認しているのか合点が行かなかった。しかし彼女はヘルンフト派的気まぐれを遂行することにしていた。これは彼女の娘エルネスティーネの第一子は天上のために育てられるべきである、つまり八年間地下で育てられるべきであるというものであった。「八十年でも構わない」と老父は言った。

娘に対する予約を誘うものであろうと、追い払うものであろうと、いずれにせよ娘というものは厄介なものであるが、しかしクネールはこの件で、 — すべて彼のエルネスティーネを攻めて負けてしまった多くのチェスの騎士達の許で — 現世における真の天国を有していた。というのは父親が明かりを点した頭脳を有し、母親が徳操を導いた心を有する彼女は征服されるよりも容易に征服したからである。それ故結婚の気のある青年貴族の旅団全体が彼女の許で賭けにでて立腹し、半ば死ぬことになった。それでもその人々の中には近隣の宮殿全体で甘美な紳士の名を名乗っていい人々がいた。彼らは海水との比較で我々の気の抜けた真水[甘美な水]をそう呼んでいるように、 — 水夫の[粗野な]風習を有しなかったからである。

しかし私と読者は賭けにでる中隊全体を飛び越えて、フォン・ファルケンベルク騎兵大尉の隣に立ちたいと思う。彼は父親の許に立っていて、結婚する気である。この将校は、

— 勇気と善意に満ちた男で、名誉心以外の原則は何も有せず、普通いさか根に持つ者であれば受けた侮辱の黒板や割り符となる遺恨を抱かず、むしろ心得違いのキリスト教徒を殴り、言葉より行動が立派で、その半身像はこの二つのダッシュには収めきれないので — 彼自身がエルネスティーネに求められたいと思うまで、この一帯で新兵を募っていた。彼はことのほかチェスとヘルンフト教を憎んでいた。しかしクネールは彼に言った。「そなたが望んだのであるから、七週間の比武のチェスが夜の十二時に始まった。七週間後の十二時にチェスの戦場から花嫁の床に勝って導き入れることができなければ、お気の毒なことだ。八年間の教育もそうなれば考えなくていいことになる」。

最初の二週間は実際ぞんざいな試合で、 — 愛された。しかし当時は他の利発な人々も、私自身も、若い人々をして我々が（我々に責任があるが）、愛のきしみ、熱く流れる循環暖炉に投げ入れ、若者は愛の余り散って、石灰化し、結婚後はもはや熱くならないようにする現今の長編小説を書くものではなかった。エルネスティーネはこう命じられるとそれに従う娘達の一人であった。「次の日曜日、神の意志で、A-Z氏が来たら、その人に丁度四時に — 惚れなさい」。騎兵大尉はそもそも愛の項目では身体的愛の発酵する黒パンにも、パリ風の愛の白い、力のない小麦パンにも — プラトンの愛のマルメロのパン、天国のパン[マナ]にも噛みつかず、結婚生活の愛の可愛い一切れの奉公人用パンをかじった。彼は三十七歳であった。

十六年前に彼は上述の黒パンを一口食したことがあった。彼の愛人と二人の間の息子はその後、立派な商業代理人のレーパーと結婚生活を送ることになった。

これに対して我々通俗作家は、ある日の午後、かの四種のパンを一度に切り分けたら、我々の胃と胃膜にとって結構なことであることを、我々の長編小説の際利用したらいい。というのはどんな悪漢をも描くためには、我々はどんな悪漢にもならなくてはならないからである。我々が同じ月、同じ心から、同じ書店からのように（ここでアーデリング氏を「同じ」という言葉で苛立たせることになるが）嘲笑詩 — 称賛詩 — 夜の想い — 夜の情景 — 戦歌 — 牧歌 — わいせつな歌 — 弔歌を提供するはめになって、かくて我々の後と前では一つの屋根の下での万神殿、万魔殿に驚くというとき、他にどうしようがあるか — これはガレー船を漕ぐ奴隷 Bazile の残された胃を上回るものである。この胃には三十五の作用をもつ動産があったもので、例えばパイプの皿、革、ガラス片等である。

二人の若い者が二人の別離の壁か懸け橋となるはずのチェス盤の許に座していたとき、父親はいつも採点係として居合わせた。しかしそれは実際必要なかった。 — 騎兵大尉はとても下手で、その相手の女性はとてもフィリドールの[チェスの名手]に指したばかりでなく、また、女性の服装規定がいずれにせよ、だらしなく[王手詰めになる]、あるいは惚れることを彼女に禁じたからでもない。（というのは結局女性や漕ぎ手は漕ぎ進もうとする岸边にいつでも背を向けるからである）。 — 補助の森林官を要しなかったのは更に格別の理由があった。エルネスティーネはつまりどうしてもチェスをやめてしまいたい[王手詰めになりたい]と思っていた、まさにそれ故に彼女は上手に指した。というのはためらいがちな運命への復讐から人々はまさに運命にかかっている事柄に対して意図的に逆らうからであり、それでいてその事柄を願うのである。戦う両軍は、互いに失うことを恐れていたが故に互いをますます好きになったが、それでも両者の願いに反することになる指し手をただ放棄することが女性の側ではできなかった。五週間経っても徴募士官は女王に王手と言うことさえできなかった。女達はいずれにせよこの王手操作を（他の王侯操作同様に）まことに上手に行う。...しかしこれは自然の逸脱に見えながら、実はそうではないので、作家として脱線をこのことに関してできようが、しかし第二十扇形でようやく行うことにする。まずは二、三ヵ月執筆しなければならないからで、それまでは私は読者を大いに手玉にとって、好きなように投げ飛ばせるようにもっていきたい。

騎兵大尉の恋が当世の巨大な恋の一種であって、花をほころばせる西風のようなものではなく、突風のように揺すって哀れな薄い花を、つまり通俗小説の暴風には適応できない花を捉えてしまう恋であったならば、彼がかろうじてできることは即刻悪魔と化すことであつたろうが、しかし彼は単に、 — 父親にではなく、娘に腹を立てただけであつた。それも彼女がチェス盤を自分の手と心の呈上盆にしていないとか、自分に対して上手に戦っていることに腹を立てたのではなく、いつも勝っていることに腹を立てたのであつた。人間はそのようなものである。 — 私の騎兵大尉を笑い飛ばさないように人々をお願いしたい。 — 私が女性的魅力を有し、エルネスティーネの役割を有し、対案を考えている彼の狼狽した顔を目にし、彼の丸い口にいわれなき侮辱への苦痛が浮かんでいたら、これは復讐の痛風結石とか発疹に歪むことがない勇敢な男達の場合感動的眺めであるが、私は赤面して、まさに率直に女王と共に（それに私も一緒に）降参していたことだろう。厳

しい自己懺悔より他に私の好むものがあつたらうか。

エルネスティーネは六月十六日、彼女の手紙から窺えるようにほとんどこの犠牲を行うところであった。というのは勿論女性というものは、二十四時間の二倍一人の男性に対して（しかし他の男性にはできないが）、この男性について自分の美しい頭脳の中にそのイメージだけを有する場合、同一の志操を抱けるからである。しかしその男性自身が複製でなしに彼女の前に五フィートの高さで立っていると、もうそうはできない。―― 陽光の下の蚊柱のように戯れる彼女の情感を上述の男性の許の指貫一杯の髪粉が余りに多く、あるいは余りに少なく、混乱させ渦巻かせた。―― 彼の上体の傾きが―― 余りに深く切った指の爪が―― ひび割れてむけた下唇が―― 上着の背後の弁髪に髪粉の縁や隙間が―― 長い頬ひげが―― 一切のものがそのような思いにさせた。私はここで百もの理由から不作法な読者の眼前で首都シェーラウにいる退職した宮廷女官に宛てたエルネスティーネの手紙を披露することにする。彼女はこの女官宛に毎週書かざるを得なかった。女官の相続をすと思われていたし、エルネスティーネ自身かつて長いこと女官の許、その町にいたことがあって、まことによく一万一千もの手管を持ち帰ることができたからである―― つまり三週間いたのであった。

＜先週は貴女に昔の歌の他には本当に何も書くことはありませんでした。私どものお手合わせは本当に退屈です。騎兵大尉はお気の毒でなりません。でも私の父に話しても何にもなりません。父はチェスをしている人を見ると夢中になってしまうのです。騎兵大尉様は私どもの奉公人部屋で一日中いびきをかいている自分の御者を起こして、馬の用意をさせ、退出なさるのがよろしいのではないのでしょうか。日曜日からは一局に難渋していて、私は肘を付いたまま草臥れてしまいました―― 夕方には終わることになっています。

夜の十二時です。大尉は自分のナイト[桂馬]と私の女王のせいですっかり負けてしまいました。彼がいつか結婚したら、彼にその下策と私の上策とを説明することにしましょう。本当にうんざりです、叔母様。

六月十六日。四日したら私はチェスの相手方とチェス盤から解放されます。大尉が疲れて無邪気に肘鉄を付く羽目の女性相手にどのように振る舞ったか貴女に報告するまでは封をしないつもりです。今日私どもは上の中国式小家屋でお手合わせしました。丁度彼の顔にかかった夕焼けがチェス盤の下に色々な影を投げかけ、サーベルの一撃を受けて赤い線となって、チェス盤縁に置かれた右手の人差し指を気の毒に思っていたら、ぼんやりして本当に私の女王を失ってしまい、中国式カリヨン[組鐘]の忌々しい幼児洗礼の鐘のせいでもほとんど何も考えられなくなりました―― 幸いまた私の父がやって来て、少し私を助けてくれました。私はその後小森の私どもの新しい設備を案内しました。そのとき大尉は私にその傷跡のある指の話をしてくれたように思います。この方は男性に対してはとても野蛮ですが、それでいて女性にはとても丁重です。

六月十八日。昨日から私どもは皆若干より陽気になっています。夕方二人の下士官が五人の新兵を連れてきました。その中に敗戦の一軍全体を笑わせるような人間が混じっていると聞きましたので、私どもは皆降りて行きました。下ではまさにその人間が別の新兵の耳にさりげなく囁いていました。自分は門歯ばかりの義歯の入れ歯を持っているが、菓莢に噛みつく、隅の一本の歯を除いてすべて落ちてしまうのだ。単に新兵支度金が欲しかっただけなのだが、と。私どもが来ると彼は頭から、帽子に手を掛けましたが、しかし眉

毛の上にまで深く被っていた白い縁なし帽をさらに深く押し下げました。『帽子を取ったら』と彼は言いました、「金輪際連隊に入れない」。一人の下士官が笑い始めて、言いました。「その下に三つの醜い母斑があるからそうしているだけで、他意はない」。 —
そして一人の連れがこっそり背後から縁なし帽を押し下げました。そこから驚いたことに両こめかみに二つのどぎつい母斑を示す頭部が、つまり本物の弁髪と向かい合って二つの臭猫の尾のあるシルエットが出現したかと思うと、更にもっと驚いたことに騎兵大尉がその描かれたような頭部をわしづかみにして、実の兄弟であるかのように激しく彼に接吻して、笑う余り、喜ぶ余り死にそうな按配でした。「他ならぬフェンク博士ではないか」と彼は言いました。騎兵大尉ととても昵懇な人に相違なく、直接上部シェーラウから来た方です。御存じないですか。侯爵はこの方を植物学者、お供として、庶出の御子息、オットマル大尉と一緒にスイスとイタリアに旅行させているとのこと、すでに御存じのことでしょうけれども。この方が請け合っていること、これは自分の二十一番目の変装で、同様の年月を経ているということが本当なら、大変いたずら好きな方です。この方は不機嫌に見えます。この方自身言っています。自分の顎はビーバーの尾のように反り返っていて、床屋は二つの髭を剃る按配で、平面の半分の方は実は無料で剃ることになる、と。 — この方の唇は臼歯のところまで切れていて、その小さな目は一日中輝いています。この方は自分と同類でない人に対しても冗談を言い、余りに自由な方です>。 — —

— エルネステーネはここで博士の外的人間のシルエットを描いている。博士は多くのインドの樹のように外部の棘や茨の葉の下に極めて友好的な心という柔らかな得難い果実を隠しているのである。しかし私でもこの文通の女性同様に博士のことを描けよう。彼のような諧謔家はめったに美しいことはなく — 女性の諧謔家は更に美しくはないが — それに精神と顔とは同時に笑い合うもので、それで、極上の衣服は人間に何か役立つことはなく — 自分自身や美人には最も役に立たず、 — 単に反物小売りに役立つにすぎない、と彼は言っていた。それ故、彼の被服は二つの部門から成り立っていて、高価なもの（自分が惨めな服を貧乏故に着ているのではないと知って貰うため）、まさにこの惨めな服で、大抵これを高価なものと一緒に身に着けていた。いつもほとんど毛の換羽期で草臥れきった狐色の外套から極上の刺繍のチョッキの垂れた帆が突き出ていなかっただろうか。1.5 ルイ金貨の帽子の下からは汚い弁髪が掛けられていなかっただろうか。これは当地の三かけ六クロイツァー以下で求めたものだった。勿論これは半ば頭部のこの無趣味なザリガニの尾に対する怒りから、つまり第四の思念に満ちた望遠鏡のように伸縮するうなじのこの懸垂物に対する怒りから半ば生じたものであった。彼の執筆文具は食器よりも立派でなくてはならず、彼の紙は下着よりも上等でなくてはならなかった。単に帽子の上では殊に劣等な小さな羽根を好んでいて、帽子は彼のベッドのせいで — それに独身者の生来の無頓着さで — いわば貴族の羽根飾り帽子に改善されていた。しかし彼は髪の本物の羽根に立派な羽茎[オランダ製羽根ペン]を添えて脇の耳に置いた — 皇帝代理が帝国議会で恭しく耳に差しておけたであろうものである。

しかし衣装の変わり者、衣服の分離主義者とならないために、毎年彼は道化ジャーナルの最良のファッションの真似をして、自分、あるいは自分の半身像はひょっとしたら最新の上品さと歩調を同じくしているかもしれないと人々に示さざるを得ないのだと弁解するのだった。 — 彼の外套の下の縁は人間同様しばしば土でできていた。しかし彼は自分

が本当に靴下製造人のように振る舞ったらどうということになるか教えて欲しいと言っていた、その経緯を早速語って、せめていくばくかの倫理を記すことにしたい。即ちこの製造人は外套に付着した汚れた縁を、背に靴下を負って町に運ぶとき、決してブラシで剥き取ったり、擦り落としたりせずに、大きな鋏を取ってきて、それで汚れたカラーとか糞土の裾をそのたびに察して切り落とすという善的奇癖を有していたのであった。一 雨が長く降れば降るほど、一層その燕尾服は短くなっていて、冬至にはこの抜粋著者は前代未聞の天候のせいで最も短い外套で歩き回った。以前の長いフォリオ判に対する可愛い十六折り判になっていたのである。私がこれから取り出せる倫理は次の質問であろう。利発な国家というものは、すべての靴下製造人を合わせたよりもきつと七十倍利発であろうから、製造人自身単に国家の一員なのであり、国家もまたそのきたない部分（盗人とか不義密通者等々）を長いことこすったり、きれいに磨いたりせずに、刀とかその他のものでさっぱりと切り落としたり、縁縫いの靴下製造人に最も良く追いつけるものではなかろうかというものである。

フエンク博士は友人の騎兵大尉が溜め息代わりに吐いた孤独な呪いに風変わりな慰めを言って聞かせた。彼は言った、自分は彼の指した特別に良い手に対して、一度ならずエルネスティーネが喜びの驚きに他ならないものを示すのに気付いた。自分は彼女が彼を愛しているからには、階段を花嫁の床に造り変えるであろう策を頭の中で温めているということに自分の旅費を賭けたい、と。一 彼は彼に助言して、彼が彼女の策の思案を捉えて、邪魔をすることのないようぼんやりとしてうっかりしている振りをするように言った。一 彼は彼に尋ねた、「愛のささやかな奉仕というのを十分に良く知っているか」と尋ねた。一 騎兵大尉ほど隠喩を解することが少ないドイツ人はいなかった。「つまりだ」と彼は続けた、「君は生来策謀に長けたやつじゃないかねということだ。一 君は君の指すチェス像を長く握って、君の手を長いこと君のチェスの民兵隊の上に置いて、その手で女性元帥を惑乱させ、惚れ込むようにできないのか。一 君は君の位置を一分ごとにこの女性に対して変え、特に高く見えるようにできないのか、立っている男は座っている女性に対して、立っている女性に対するよりも立派に見えるのだから。私と彼女とは試合中君があるときは椅子の上で背を反らして、あるときは前方にかがんで、あるときは左手に、あるときは右手に傾いで、あるときは影の中において、あるときは彼女の手、あるときは彼女の口に目を留めているのを見たいものだ。いや君は三、四の百姓[歩]を部屋に突き落として、拾い上げるためにかがみ込んで、そうして例えば君の間近の顔が彼女の心に印象を残すとか、君と彼女の頭に同時に血が昇るようにして欲しいものだ。君の弁髪を後頭部に対して八分の一エレほど間近にあるいはより遠くに結んだらどうかね。この結び方、このエレが今まで君達の結婚の邪魔になっていたというのであれば」。哀れな騎兵大尉はこの奉仕規則全体皆目理解できなかったが、博士にとってはそれだけ好ましかった。というのは彼は諧謔から馬耳東風の相手に語りかけるのを好んだからである。エルネスティーネは彼女の手紙をこう続けている。

<明日有り難いことに私の復活祭前週[受難週]も終わります。毎日より傷付きやすくなっている騎兵大尉にとって、博士が居合わせているのは本当に幸いなことです。どんな手が指されてもこの方は洒落をおっしゃいます。この方は、自分の機知は、自分自身チェスは下手であることを証している、上手な指し手は試合中や試合については決して洒落は言

えないのであるからと語っています。

六月二十日、三時。今日の夜十二時に私はとうとうチェスの足枷から解放されます。彼はこの最終試合に ― そうフェンクは呼んでいます ― 一日中を賭けるつもりです。しかし彼は日中の戦いから夜の戦いの経過を察して、夜に馬車と御者を指示なさっています。早速亡骸のごとく悲しく旅立たれることとなります。一緒に下手なチェスをすることはできません。しかし彼は万事せっかちで、すべての案に耳を閉ざしています。

夜の十二時。私は我を忘れています。誰が私の父がしたことを信じられることでしょうか。私の試合はこれより上はないように見えました。 ― チェス盤の横の私の父の秒針時計はすでに十一時半を大部過ぎていました。 ― 彼は三つの将校[歩以外の駒]を有するのみで、私はまだすべての将校を有していました ― 奇蹟でも起こらない限り、十八分経ったら彼は王手詰めとなるころでした ― 彼の顔一面に赤みが一度浮かんで次々移って行きました ― 私どもは最後にそれはもう重苦しい気分になって、博士さえ一言も冗談を仰有らず ― 私の小さな雌猫だけがチェス盤の縁でのどを鳴らしながら歩き回っていました ― 勿論猫のことは誰も考えていません ― 彼が試合で私に最初の王手をしました ― すると彼は（それとも私だったかしら。時に私もテーブルの上でこのような上方回音を立てるものですから）指でもって一つの上方回音を縁の上で立てたと思います

― 稲妻のようにその猫は、鼠に違いないと思って、それに飛びかかり、私どもの試合全体をひっくり返してしまい、私どもは座ったままびっくりしています。考えてみてください。私はこの仲介者が形式上の肘鉄という恥辱を彼から奪ってくれたことに半ば喜んでいました ― 彼は失意と怒りに満ちた顔で、 ― 私の父は当惑と怒りに満ちた顔で ― 博士は部屋の中を、十本の指をばちんとはじきながら回り、誓って言いました。「騎兵大尉が勝っていたに違いないのだ、アーメン同様に確実なことだ」と。誰もその場から足を動かさず、博士は一刻もその場に留まっていず、私どもの当惑した静寂をますます際立たせる或る熱中した様子でとうとう白いアモールの胸像の前、私の父の細密画の肖像の前、鏡の中の御自分の像の前で跪いて、祈りました。「聖なるフォン・クネール殿、聖なるアモール、聖なるフェンクよ、騎兵大尉のために祈り、猫をぶち殺し給え。御身ら三つの像が生き返れば、アモールはきっとフェンク博士の形姿となって、生命を得たアモールは生命を得たクネールの手を掴んで、その手に指し手の女性の手を与えることだろう。 ― 彼の手はそれから彼女の手をひよっとしたら更に次へとわたすかもしれない。御身ら聖なる者達よ、勝利したであろう騎兵大尉のために祈り給え」 ― しかしこれは本当のことではありませんが、しかしただ不幸なことに新しい手合わせのためには時間が短か過ぎたのです。...

さて臭猫の博士[ドクトル]は（私自身が著者として再び語るが）立ち上がって、本当にクネールの手をエルネスティーネの手に置いて、自分はアモールであると言ったので

― そもそも博士の請け合いと試合の不成立のために、傷付きやすく、人間と猫とでからかわれた指し手[ファルケンベルク]の名誉とその恋愛とが同時に失われることになったので

― ファルケンベルクは国中で最古の貴族であったとある部分の扇形全体の中で私は示しており ― それに幸い最上級森林官は（幾つかの田舎貴族の場合と同様に）粗い教育による倫理を、より上品な交際という習俗[倫理]のワニスの下、流行の家具の中に古い家具を有するように隠して持っていたので、博士の電氣的熱中は大きな火花となって父親の

胸に移り、クネールは夢中になってエルネスティーネの手を、彼女は見せかけ上驚いていたが、騎兵大尉の手に置いた。彼は本当に驚いていた。 — そして新郎は感謝の嵐の中で新生の養父の首筋に迫って、身を押し付けた。その後彼は、自分の恋愛よりも自分の名誉が勝利したので、幾らかより冷たく、これまでこの二重の勝利をくれないでいた巧みな女性の手追加の接吻をした。 — — —

それはないでしょうとこの手の所有の女性は思った。しかしまたそれはないでしょうと私は彼女に言いたい。何の根拠があつて、誰の魂も、自分自身の魂もほとんど、女性の魂ときたら決して推察しない男性に、その知恵齒と哲学者の髭とが異常に長く育って、親愛なる読者同様の按配であると彼女は期待したいのか。勿論読者方にはここで活字として披露される必要はないであろう。 — すでに三時間前にはもう十分に、この取り持ちの猫の背後には何かかひそんでいる、つまりエルネスティーネ自身が隠れていると察していたであろう。

それが事実であつた。...しかし読者にほとんど報ずる必要はないだろう。読者は夙に承知していたのだから、エルネスティーネはパテ用、仮綴じの猫を四晩前から極く内密にテーブルに置いて、指が震え動いたら指に飛びかかるよう躡けていた、と。 — 更に読者の鋭い感覚は凡庸なものではなく、更にこう推察していることを私は喜ぶものである。つまり彼女は果たして最後の晩に猫の糊小ウナギ[滴虫類]を鵜竿として忍び込ませ、十一時半になるまで膝の中に隠して、ようやく膝を上げて、この媒介項が然るべきことをなしたのであつた。 — 哀れな騎兵大尉よ。

しかしつらつら思うべきことである。というのはこのようにして女達が偶然のために指令を、指令のために偶然を、利用する術を知るようになると — すでに婚約前に（従つてそれ以降ではもっと増して）男達に対する最前線に、エジプト人に対するカンビセス^{*原注 2}のように、同盟の猫を配置し、この猫どもが機械仕掛けの下位神々のように、男達の勝負を負かし、女達の勝負を最負するようになると — 百人の人間のうち動物の猫とかそれどころか人間的猫に耐えられる男どもは五人しかいず、耐えられない女達はわずか十人しかいないとなると — 従つて全く明白に最良の女達は恐るべき束の男達への罾を腋の下に所有する、兎の罾、雲雀罾、張り網、鶉罾、鳥罾の網を所有するとなると、一本足^{*原注 3}には何ができよう。この一本足はある長編小説を書き始めたその日に、同時にある長編小説を演じ始めて、その両方を連弾のように互い違いに終わりまで遂行しようと思つたのである。私の妻が一日中熊の罾のところに立っていて、私がよろけて入るよう罾の上へ枝を振るとき、最も分別あることは、私が — 熊[武骨者]にならないことで、猿[洒落者]にもならないことである。その通り。君達、柔軟で圧迫された女達よ。私は今一度決

*原注 2 カンビセスは突撃でペルシウムを征服した。彼は兵士達の間には神聖な動物ども猫等を混ぜ入れたからである。これらに対してエジプトの軍は射る勇氣を持たず、矢の代わりに祈りを送つたのである。

*原注 3 一本足は私自身である。私は読み飛ばされたであろう序言と、読み飛ばすわけにいかないこの注を作成した。余りに短い方の脚を除くと私は一本の脚しか有しないということ、それに私の一帯では、私はジャン・パウルという名であるけれども、一本足とか一本足の著者としか呼ばれていないということを一たび周知させるためである。洗礼証と序言参照のこと。

心して、君達のうち一人にここで公に印刷して誓う。それでも私が一人の女性を蜜月の後、苦しめようと思うようなことがあったら、単にこの扇形の章を取りだして読み、次の君達の夫たるピラト達の画像を見て、感じ入ることにする。そのために画像をここに運んでいるのである。 — つまり何と最も愚かな男が自分を最も利口な妻よりも利口であると思っていることか。何とこの妻は、夫の前で、夫はひょっとしたら家の外で幸せになるために、一人の女神、一人の崇拜女性の前で跪くかもしれないのだが、ラクダに似て、荷を乗せるために跪かなくてはならないことか。何と夫は、自分の帝国大審院の認識、自分の平民決議を、極めて穏やかな、ただ疑念の声で負けたようになされる反対理由を聞いた後で、ただ「いたしかたないのであれば」と甘く言う他ないことか。何と花嫁の自由な目の中にあるときには魅惑された涙がまさに、結婚した女性の目から落ちるときには、味のない全くいまいましいものになることか。アラブの童話ではすべての魅惑と失望とが水をまくことで生ずるようなものである。 — まことにそれでも唯一の善なることは、君達が夫をまことによく騙すということである。いやはや。何とこのことをこのような結婚の熊の夫はしでかすに相違ないことか。君達はとうとう、熊の夫に食べられないようにするために（野生の熊の場合と同様に）死んだ振りまでするに至るということをまず私は思い浮かべて見る。この熊の夫は仮死の女性の周りのをのそのそと前足で動き回るのである。

「私の年になったら一本足はきっと別な口笛を吹くことだろう」と結婚している読者は言うことだろう。しかし私自身読者より九歳年上で、その上結婚していないのである。

第二扇形、あるいは切片

先祖御商の先祖の価格[家格]表 — 種馬と叙爵書

発見された世界中で、第一扇形を書くことほど忌々しい仕事はない。私の生涯で他に扇形を、第二、第十、第千の扇形を書かないでいいのであれば、私は美的関係の本よりはむしろ対数とか円関係式の出版のものを書きたい。逆に第二章とか扇形では著者はまた正気に戻って、ひょっとしたら存在する中、最も高貴なサークルの中で（私のサークルにはロシアの侯爵達がいる）、自分は執筆の手でどう始めたらいいか、帽子、頭、機知、深い意味、一切のものをどう使っていいかまことに良く承知している。

チェスと猫による婚約から我々全員が戻ってきたところであるが、この夫婦を通じて私が九ヵ月後にこの本の主人公を紹介するに当たり、まずもって示さなければならないのは、私は無分別に漫然と仕入れているのではなく、私の商品（即ち私の主人公）を、商人的に話して、まことに良い筋の家から、紋章学的に話して、まことに古い家から買い入れているということである。というのは帝国直属の騎士階級、領主や貴族にとっては他ならぬここで言及され、証明されなければならないからである。つまり私の主人公調達者、フォン・ファルケンベルク氏はこの人々皆と同様にかなり古くからの貴族であって、それも偽の貴族であるということである。

即ち一六二五年がマリア受胎の時、彼の曾祖父がはなはだ酩酊したのであるが、それでも籤壺から何かとてつもないものを一杯手にして、つまり二度目の叙爵書を取りだしたのであった。というのは彼と一緒に飲んだのが、七倍強く飲んだのが、ヴェストファーレン出身の気の利いた馬喰で、同じフォン・ファルケンベルク氏とか言う人である。単に名

前が同じなのであった。彼らの両系統樹は根毛の方も葉の方も触れ合い、合流することはなかった。このヴェストファーレン男の系図は人生の風雪にとても古く長く晒されてきたもので、彼はレバノンやエトナの山地の多くの古兵と一緒に大地から出現したように見えたけれども、要するにこの馬喰は六十四人の枝の先祖を有していたけれども、曾祖父の方は自分にとって最も恥ずかしいことに、そしてこの曾祖父を長編小説に取り入れる者にとって恥ずかしいことに、実際齒と同数の数の先祖しか、つまり三十二人しか有していなかった。即ち、老ヴェストファーレン人は嫡男で、かつ章末の飾り、そのすべての歴史的肖像画廊のホガース風[最後の]尻尾作品であった。我々皆が従兄弟を有していて、遺産を引き継ぐ両インドにすら一人も従兄弟を有していなかった。彼からその叙爵書を呪いつつ請い求めて、それを自分のものと称しようとした曾祖父は、そのことを当てにしていた。「誰に分かるか。おまえさんにはそれは何の役にも立たない、私のにくっ付けよう」と彼は言った。いやこの先祖編集者、曾祖父はキリスト教徒らしく振る舞おうと思って、馬喰、先祖商人に叙爵書と引き換えにとつもなく立派な種馬を申し出た。近接する馬のハーレムにおける余り見られない堂々たる大サルタン、婚姻の代官を申し出た。しかしこの嫡男はゆっくりと頭を左右に回して、冷たく言った。「そうしたくはない」、そしてツェルプストの瓶ビールを飲んだ。彼がクヴェードリンブルクの白ビールを二、三杯単に試したとき、すでにこの思い付きについて呪い、叱りつけ始めた。これはすでに何か期待できるものであった。彼がその後、若干のケーニッヒスルッターのドックシュタイン・ビールを追加したとき（というのはファルケンベルクはマイボームのビールの本全部を、つまり彼のビールを貯蔵庫に有していたからで）、自分の拒否に若干の理由を考えるまでに至っていた。希望はとても高まった。

彼がとうとうブレスラウの白ビールがグラスの中、あるいは頭の中で素敵に乳液を出しているのを見たとき、彼は惨めな種馬の腐肉を中庭に連れ出せと命じた。――彼はこれが二、三度跳びかかるのを見てみたいと思ったので、彼は曾祖父と握手して、同時にその手に百二十八人の先祖を渡すことになった。さてファルケンベルクの曾祖父は買い求めたその貴族勅書を、これは千もの枝分かれした衣蛾の何人かの子孫によってほとんど嚙り取られていて、蝶の羽根のように多孔性のものとなっていたので、膏薬のへらで新しい羊皮紙に塗りつけ、貼り付けた。勿論製本用糊を使った。かくて容易に考えられることであるが、彼の先の貴族の全世界の羊皮紙はヴェストファーレンでその種馬が馬の後世に果たしたのと同じ高貴化の仕事を果たして、一滴の血ももはや高貴なものとなし得ない百人もの埋葬された者を通じて、少なくとも貴族の骨となるに至った。従って、私も、どこかの修道女も、我々が将来のファルケンベルクの若殿と将来もしかして付き合いをすることに恥じ入ることはない。――ちなみに私はこの逸話が更に知れ渡ることを望んでいないし、分別ある読者の方々にこのことは言及する必要もないことであろう。

結婚式の[古代ローマの]ルペルカーリア祭を、その最も長い一日と最も短い一夜と共に私は決してここに述べようとは思わなかった。――しかしその後の到着については十分に書こうと思っていた。しかし昨日不幸なことに、今日の朝チェスのカップル、夫妻を三筆で新婚の床から結婚生活の床へと、十九時間離れているその床へ、つまりファルケンベルクの騎士領地アウエンタールに導こうと計画してベッドへ入ったので――全く当然なことに単に三つのささやかな合図で、立派なアウエンタールの人々が恵み深い新婚のカッ

ブルを出迎えたときのわずかな口笛や乗馬、火薬という些細な事を描こうと思っていたので、一晩中私の頭の中では次の夢があちこち生ずることになった。つまり私自身が帰郷する帝国伯爵、帝国・世襲・道化であって、私の家臣どもから、私を十五年間一日も見えない人々から喜びの余り、ほとんど射殺される按配であるという夢である。私の伯爵領では当然ファルケンベルクの封土におけるよりも千倍もの歓迎の騒動と栄誉がなされた。それ故騎兵大尉に対する栄誉は放っておいて、単に私の栄誉を記すことにしよう。

第一の号外

私の伯爵領が大旅行からの私の帰郷後になした祝典

伯爵の家臣達が伯爵からその六つの非自然的な事柄を奪うとき、これ以上どう家臣達は伯爵を迎えていいか、私は知らない。私の家臣達は私に一つとして非自然的な事柄^{*原注1}を許さなかった。

彼らはいずれにせよ私から最初の非自然的な事柄、つまり睡眠を奪った。私はシャロンからシュトラースブルクへ、身重でもあるかのように、ゆらゆらゆっくりと馬車で進んで行き、そこから座るといよりは跳ねるように、進んで、雷鳴のように音を立てて、私の飛脚[先陣]を引き倒してしまったので、フレルツヒューベルのあたりでは（私の伯爵領の最初の市場）誓って眠りこけて飛び過ぎて（夢の中ではこれは容易なことではなかったろうか）行きたいと思っていた。しかし国境の橋のところで、私が山の下に向かって目を開け、山の上に向かって目を閉ざしたとき、私は十六人の酔った者達の発するものによって、殺人的にではなく、音楽的に襲われたのであった。この者達は朝の七時から音楽的がらくた、耳をつんざくもので、ここで待機していて、私と私の馬車を丁度るとき太鼓と口笛とで祝福することになっていた。幸い突撃の芸術家達は一日中前もって冗談と退屈さから、後で本気で愛情でもってするよりも大いに鳴らしていたのであった。オーケストラと兵舎とが私の馬の隣を行く間、その途次ずっと、私は、私が十七年前フレルツヒューベルを一つの都市へと昇格させ、学位を授けていたことに悪態をつけていた。私は自分に言った、「後で領主の勅令でフレルツヒューベルから都市の権利が、その警察隊からは制服がまた奪われた、ということを行っているのではない。あるいは我々が剰余の軍服をカッセルで競売にかけようとした[兵士売買]ということではない。— やつらが今私を眠らせようとしなからである。眠りはだって第一の非自然な事柄なのだから」。

食事を彼らは私に全く許さなかった。これは支配の君主の第二の非自然な事柄であるからである。私のために私の伯爵領の料理し、煮立てた寡婦分全体を火にかけていたフレルツヒューベルの料理の主人はまさに馬車の踏み台のところで、食べて欲しいと要求しなかつたらどうか。そして私は彼に — 我々偉い者は垂涎のご馳走にそっぽ向いて平民を腹ぺこの驚きに至らしめるのが嫌いではなく — 自らの口で単にビール入りスープを所望したので、料亭の主人は見栄を張って、こう言わなかつたらどうか。「ホテル中そんなも

*原注 1 非自然的なものとして医師は1) 覚醒と睡眠、2) 食事と飲むこと、3) 動き、4) 呼吸、5) 排泄、6) 情熱のことを言っている。

のはありません。それにもし有ったとしても、将来の料理人達にこう後から言われたくありません。自分は多くのブイヨンがある中で領主殿にただ一鉢のビール入りスープを差し上げた」と。

第三のもの、動きと休みとを同時に、すんでのところで私の埋葬地の村の凱旋門は奪うところであった。私はほとんど叩きのめされそうになった。合奏の一团が私の後尾の従者のすぐ背後でひっくり返ってきたが、しかし伯爵領にとって幸いなことに一人として怪我はなくただ床屋[外科医]のグラス放血器が割れただけであった。床屋はそれを凱旋門に置いて、突き出すようにしていたが、何か下げて、そこにちょっとした照明を差し込む算段であった。私はそれ自体諷刺的放血器に、何か有頂天になる思いがした。私はこの瓶を全面的世襲欲と封建制の血管の私の伯爵的吸血に対する諷刺的タイプ、模倣と解しようとした。私は町長に、私は機知を真に解さないとするか尋ねた。しかし彼らは皆誓って言った、凱旋門全体に機知の意図は何もなかったのだ、と。

空気[呼吸]、帝国・世襲・道化の第四の非自然の事柄、これを本当に得るところであった。というのは楽器と私の臣下の肺がこの素晴らしい要素[空気]を使う単なる短い乱用のせいで、現実にもそうしたように、私は自身と私の周りの空気の扇形を固く馬車の中に密閉することはなかつたろう。一 私はこのことをはっきりと申し上げなければならない。善良なケルツハイムの楽長にこう思われてはかなわないのである。私に向かって彼の音楽的銃砲、彼のトランペットが彼の教会の塔と彼の体の二重の響穴からはなはだ突き刺してきて、両者からのメロディーの大気の波が私に対して四アッカーほどになって出迎えたこと、その上更に塔の下では彼の妻が鐘を搾り出して、あたかも私が歓迎を受けるのではなく、埋葬され、別れるような按配であったことを私が憤慨していたとか思われたくない。

一 申し述べたように音楽的夫妻のせいで私は馬車を閉ざそうとしたのでは全くなかつた。そうではなく、命にかかわる危険のせいであった。というのは喜んだ前哨中隊の夫役農夫達が十七の鳥銃と二、三の小型空気銃から、礼砲並びに若干の柵杖とを私に放ったからである。

伯爵たる者が一度四つの非自然的な事柄を奪われて座しているとなると、五番目のもの、つまり排泄は全く考えられなくなる。すべての括約筋が、最大の穴の括約筋でさえその馬車の扉をすべて閉ざしてしまう。何らかの穴に向かって「開けごま」を言えなくなって、私が激してこう言ったのも不思議ではなかつた。「忌々しくもレーゲンスブルク[議会]の伯爵ベンチに座っていたせいで、ここ馬車の席にしゃがみ込んでいても、何も出せない、...すら出せない」。

人間の第六の非自然な事柄である真の情熱については、繻子製の犬用クッションによるほど簡単に窒息させられることはない。帝国・世襲・道化の有する限りの牧師や、教師、役人が、そこに記させた歌を彼に渡すのである。というのはこれについては笑うことも、がみがみ言うことも、叱ることも、称えることも、話すこともできないからである。私から、私の六つの非自然な事柄を取り上げた私の家臣や家来はまさにそのことによって第一の非自然な事柄の片割れ、つまり覚醒を私に与えた。一 しかし彼らは私のせいで汗をかいていて、私も彼らのせいで汗をかくことになった。私は目覚めたとき、最初これは夢であろうと思った。しかし幾度か目覚めてみて、私は、これが名前は別にして、私の近隣の地からの盗作の話に他ならないことに気付いた。勿論照明や音楽的騒音は私のために

なされていて、家臣達はこれらを単に、その偉い、あるいは偉くない支配者を反吐や不平でその旅へと追いやるといふ邪悪な意図でなしているかのように思われて腹が立ってならない。これは明らかに彼らがオリエントの隊商から学びとったことで、隊商も同様に太鼓や砲火で野獣を追い払うのである。

第三扇形、あるいは切片

地下の教室 ― 最良のヘルンフト信者とプードル[むく犬]

今からようやく私の物語が始まる。場面はアウエンタール、あるいはむしろ、そこから数アッカー離れているファルケンベルクの山の宮殿である。チェスのアマゾン女傑とチェスにおける瀕死の剣闘士たる騎兵大尉の最初の子供はグスタフであって、これは崇高なスウェーデンの英雄ではなく、私の主人公である。可愛い少年よ、このぼろ紙、このぼろ人生の舞台によくこそ。私は君の生涯全体を前もって承知している。それ故に君の最初の瞬間での泣き声にはなほだ感動させられる。私には君の人生の幾多の年月に涙の滴のかかるのが見える。それ故にまだ乾いた君の目を見ると哀れでならない。単に君の体が痛くてならないのだから。 ― 微笑を浮かべずに人間はやって来て、微笑を浮かべずに去って行く。須臾の三分間嬉しかっただけである。それ故、親愛なるグスタフよ、十分に前もって考慮して、君の青春の新鮮な五月を、これについて私は一編の風景画をつまらぬ吸い取り紙に刻印する予定であるが、季節の五月にまで延期して、今や毎日が自然の創作日であるので、私の日々もそれに添加することにした。そして今、呼吸のことごとくが鉄剤治療であり、歩む歩幅は四インチ更に広がって、目は瞼で覆われることがより少ないので、素早い筆致で記述し、柔軟な胸郭を呼吸と血液で一杯にすることにした。

幸い、五月二日から二十七日までは（それ以上長くはこれについて私は執筆しない）申し分なく素敵な天候のはずである。というのは私は少しばかり気象学的千里眼で、私の短い一方の脚と私の長い顔[しょげた顔]はこの地の最良の天気[予報の]腸弦であるからである。

教育というものは家庭教師の思いほどに内部の人間を変えることができるよりは（はるかに外部の人間を変えることができる）ので、グスタフの場合まさにその逆が生じたということに人々は驚くことだろう。というのは彼の生涯全体が彼の超現世的、即ち地下的教育のコーラスの音色に従って響くことになったからである。つまり読者はその第一の扇形からまだ覚えておいでに相違ないだろうが、クネールのヘルンフト派的志操の最上級森林官夫人は娘エルネスティーネにチェスの勝負を次の条件の下でのみ許したのであった。即ち勝利を収める新郎は最初の子供を八年間地下で教育させ、地下に隠すことにして、子供が自然の美と人間の歪みに対して同時に鈍感にならぬよう結婚条項として約束することというものであった。騎兵大尉がエルネスティーネにこう提案しても無駄であった。「そんなことをしたら義母は兵士をねんねの娘にしてしまう。娘っ子になるのを待つようなものだ」。彼も何人かの夫達のように義母に対する不満を全く妻にぶつけたのであった。しかし老母はすでに洗礼前に天上的に美しい青年をバルビーから手配していた。騎兵大尉はすべての力強い人々がそうであるようにヘルンフト派の漸次弱が我慢ならなかった。最も頻繁に、彼らは余り話さないと彼は語っていた。ヘルンフト派の料亭の主人達が彼を

欺くのではなく、余りに先回りすることさえも彼の意に染まなかった。

しかし精霊は — この素敵な名前を差し当たりすべての紙上で有することになるが — ヘルムフト主義のかの心をねじ込む痙攣に病んでいず、その主義から単に穏やかなもの単純なものを取りだしていた。彼の陶酔的に酩酊した目の上には落ち着いて無垢な額が滑らかに見られ、四十歳となっても十四歳の者同様に皺はなく、五線も見られなかった。彼は悪徳に碎かれるような、毒が宝石を砕くように、碎かれる心を有していた。すでに他人の罪にさいなまれ、植え付けられた顔を見るだけで彼の胸は苦しく詰まり、彼の内面は現存する汚れた魂の前で蒼白になった。サファイアが不純な者の指で触れられるとその青い輝きを失うと言われるようなものである。

それでも一人の子供のためにこのように何年も犠牲にすることはヘルムフト派の者の美しい魂にさえ重く厳しく圧迫するに違いなかった。しかし彼は言った。「何という得難い機会を得ていることか。きっと神の御加護で期待通りに花咲くであろうグスタフに、信頼してその機会をこれから先委ねるだけだ。真に深い大地の生活への自分の見かけ上の自己犠牲を誰も驚くことはない」 — 実際より繊細な読者方は、広く考えて、驚くことはなく、むしろこのような教育上の英雄行為はまことに自然なことと思うかのように振る舞うであろうことを願う。ちなみに多分大抵の人間の徳操はむしろ自分達の新聞生活、日常生活における単なる号外とか慶弔の機会詩にすぎない。しかし二、三人とかそれ以上の天才達がそれでも存在していて、彼らの叙事詩的生活で徳操は主人公であり、その他のすべては単に副次的役割やエピソードにすぎず、その登場が人々によって不思議に思われているというよりは驚嘆されることになる。

最初の薄暗い数年をグスタフは自分の守護天使と共にまだ地上の上の部屋で暮らした。守護天使は彼を単に少年時代の救いがたい偽金造りの女達から隔離した。この者達にかかると我々は萎えた脚と共に萎えた心を頂きかねない。 — 小間使いや乳母のことである。こうした不忠者達は我々を二年目よりは二番目の十年代に教育して欲しいと思う。

その後精霊はグスタフと共に宮殿の庭の古い壁で囲まれた空き部屋に移った。騎兵大尉は夙にそこを埋めておかなかったことを遺憾に思った。地下室の階段は左手は岩の地下室に通じ、右手はこの空き部屋に通じていて、ここは三つの小部屋を有するカルトゥジオ修道院となっていて、人々はこれを古い言い伝えのせいで三僧侶のカルトゥジオ会修道院と呼んでいた。床に三人の石像の僧侶がいて、彼らは彫刻された両手を永遠に組み合わせていた。ひょっとしたらこの模像の下に黙した原像そのものが無常の世に対する滅した溜め息と共に眠っていたのかもしれない。ここで単に美しい精霊が少年を見守っていて、少年の芽生えてくる小枝を高貴な人間的形姿へと育て上げた。

つまらぬ瑣事、例えば下着やベッド、食事の供給者については女性方は省略を喜んで許して下さるであろう。しかしどのように精霊は教育したかについては知りたいことだろう。まことに結構なことに、彼は命ずることをせず、単に習慣付け、物語ったとだけ申し上げる。彼は自分とも子供とも矛盾しなかった。いや彼は矛盾を償う、最も偉大な秘薬を有していた — 彼自身がその秘薬であった。この秘薬がなければ自分自身と同様に悪魔を家庭教師に雇いかねないであろう。劣等な母親達の娘がその例である。ちなみに精霊は最初の秘蹟の際（洗礼）、心の涵養が始まり、第二の秘蹟の際（聖餐）、頭の涵養が始まると信じていた。

立派な人間について聞くことは立派な人間の許で暮らすのと同じようなものである。ブルタルコス英雄伝は倫理哲学の応用のための — 大学の教師達の最良の教科書よりも深く影響を及ぼす。子供達にとっては全く、手本より他に、物語の手本であれ目撃する手本であれ、別の道徳はない。根拠を通じて、子供達にこの根拠を与えようとせず、これらの根拠に従うべき意志と力とを与えようとするのは教育学的に愚かなことである。三級教師や教育の傍らの私より千倍も幸せな具合に、グスタフよ、君は君の大事な精霊の膝の上や、腕の中、唇の許にいたことか。滴る雲の許の飲み込むアルプスの花のような按配で、君は立派な人間についての物語を吸って心を育てた。精霊は皆これらの人物をグスタフ達とか「浄福な者達」と呼んでいたが、なぜ括弧付きで彼らが印刷されているのか、彼らについて直に我々は知ることになる。彼は上手に描いたので、彼はホドヴィエツキ [Chodowiecki, 1726-1801] が長編小説作家に対してのように、かの物語のスケッチを見せて、少年を立派な人間の世界図絵で囲んだ。全能の聖霊が我々を偉大な自然で囲んでいるようなものである。しかし彼は子供にスケッチを叙述の前に見せることはせず、叙述の後に見せた。子供達をより強く引き付けるのは見るために聞くことであって、聞くために見ることではないからである。別の者ならばこの教育学的鉄槌子として烏口の代わりにバイオリンの弓やピアノのキーを用いたことだろう。しかし精霊はそうしなかった。絵画に対する感覚は味覚同様にはなはだ後に成長するもので、従って教育の介助を必要とする。それは最も早期に発展させるに値する。その感覚は我々を美しい自然から分離している格子を取り払うからであり、その感覚は空想する魂を再び外部の事物の下に追い出すからであり、その感覚はドイツ人の目を、美しい形式を理解すべき難しい業へと鍛えるからである。これに対し音楽はすでに極く幼い心の中に（野蛮な民族の場合と同様に）反響する弦を見いだす。いや音楽の全能性は練習や年月のせいでむしろ失われてしまう。それ故グスタフは聾啞の者としてその聾啞の洞窟の中で上手に描く術を学んだので、すでに十三年経つと彼の家庭教師 [ジャン・パウル] がモデルとして座ることになった。ハンサムな男で、本の更に先の方で登場するに相違ないものである。

そこで両者にとって彼らの生活は穏やかにカタコンベの中で泉のようにそこから流れて行った。少年は幸せであった。というのは彼の願いは彼の知識を越え出るものではなく、喧嘩したり、恐怖したりして、彼の静かな魂が引き裂かれることはなかったからである。精霊は幸せであった。というのはこの十年要す建築の遂行はこの建築の決意をすることよりも易しかったからである。決意のときはすべての困難さや不足が一気に魂の前に迫ってくる。しかし遂行のときにはそれらの困難さは四散して、まずはそのことへの興味を我々に格別の喜びでもって与えてくれる。この喜びがなければ、数千の事柄の際に耐えられないであろうもので — つまり自らの手の許で日々何かが育つことを目にするという喜びである。

両者にとって、下界のこの倫理的温室の中でグスタフの同級生と一緒に住んでいたということは結構なことであって、これは同時に精霊の半ば協力者であり、助手であった。しかし教育全体の中ではその心のある種の欠乏のせいで単に劣等な利点を引き出していただけにすぎないが、もっともグスタフ同様に二つの心室と温かい血を有する動物には違いなかった。 — この協力者の最大の欠点は、これが火酒を飲もうとしないことであつたと私が申し上げるならば、これはグスタフのようによくは育てられず、小さく育てられるで

あろうことがお分かり頂けよう。これはかつて地上で白い胸と共に跳ね回っていたものの中で最も可愛い、最も黒い — プードル[むく犬]であったからである。この分別ある犬の助教師はしばしば遊びのとき上級教師と交替した。第二に大抵の徳操はこの犬によってというよりはこの犬に対してグスタフにより遂行され得たのであり、その上この犬は必要な、分母の異なる悪徳を用意したのである。 — 眠っているときこの同級生は自分の生きた脚を軽く噛み、目覚めているときは、引きちぎられた脚[骨]を噛んだ。

この下界のアメリカで、三つの対極者達はその日中を有していた。即ち上の我々のもとで夜のとき、明かりが点された。 — 夜を、即ち眠りを彼らが有したのは、我々のもとで太陽が輝いているときであった。美しい精霊は外部の騒音と日中の外出のせいでそう定めた。それで少年は、その教師が外気と人間とを享受するとき、下のカルトウジオ修道院で、目を覆われて寝ていた。偶然とか地下室の扉とか油断ならなかったからである。時折精霊は眠って、目を覆われたこの天使を新鮮な大気と生氣ある陽光の下へ運び出した。蟻がその蛹を太陽の孵化の翼の下へ置くようなものである。まことに私が第二、あるいは第三のホドヴィエツキであれば、私は今や立ち上がって、私自身の本のためにその登場をスウェーデン産の銅版画として描くことだろう。単に我々の運び出された薄赤い寵児が目隠しされたまま格子状の薔薇の影の下でまどろむ様、亡くなった天使に似て、自然の無限の神殿の中で静かにその小さい洞穴のささやかな夢と共に我々の前に横たわっている様ばかりではない。 — 更にもっと素敵なものがある。グスタフよ、君は君の両親を有する。君は両親を見ていない。愛情で暗くなった目をして君の横に立っていて、小さな胸を動かしているより純粋な呼吸のことを喜び、そのことで、君の教育の仕様について忘れている君の父親を見ていない。 — そして君の母親を見ていない。母親は、孤独と子供時代の二重の無垢が宿っている君の顔へ、愛に飢えた両唇を寄せている。これは語る事が許されず、あやすことが許されないので、満たされぬ思いがしているものだ。...しかし彼女は君をまどろみから起こしてしまい、君はしばらくしたらまた君のプラトンの洞窟へ下がって行かなければならない。

精霊は彼に長いことその聖なる墓地からの復活を準備させていた。彼は彼に言った。「君が本当に良い子で、せっかちでなく、私とむく犬とを本当に愛しているならば、死んでよろしい。君が死んだら、私も一緒に死のう、そして我々は天国に入るのだ」(天国とは地球の表面のことであった) — 「そこは本当に愛らしく、華美なところだ。そこでは日中蠟燭は点さない。私の頭ほどの明かりが君の上の大気の中にあって、毎日美しく君の周りを回転するのだ — 天井は青く高く、それで千もの梯子を使っても誰もそこには届かない — 床は柔らかく、緑で、更に美しい。むく犬どもは我々の部屋ほどの大きさだ — 天国は皆浄福者達[故人]で一杯で、私が君によく語ってきた皆善良な人々がおり、君の両親は」(その肖像画を長いこと彼は彼に見せてきていた)、「私同様に君を愛していて、君にすべてを与えようと欲している。しかしお利口してはならないよ」。 — 「いつ死ぬことになるの」と少年は尋ねた。そして彼の中で燃えるような空想が働いた。彼はこのような描写がなされるたびに、一枚の風景画に駆け寄って、その中の先端を一つ一つ触ったり、調べたりした。

子供に対しては、夕方にならないとまだ実現しないような脅威や期待ほどインパクトのないものはない。 — 将来の試験とか成長した年齢について前もって語られるその間の

み、効果はある。それ故多くの者がこの前もっての語りを繰り返すけれども、一瞬の印象以上のものは残せない。それで精霊はより小さな報酬から最大の報酬への遠回りの道を組み合わせた。これらより小さな報酬すべてが大きな報酬の印象と確信を強めることになって、これらは次の扇形で語られることになる。

ちなみに、私は繰り返し言わざるを得ないが、教育と子供にとってすべての厄災の中で、これに較べれば弾劾されている綴り方や殴打は黄金と言えるが、一 フランス人女性家庭教師ほどに、毒のある者、より不健康な毒砂、貪欲な教育上の真田虫はない。

第四扇形、あるいは切片

百合 一 獵笛 一 眺望は死の告示

すべての私の記憶の繊維上に（この多くの劣等な衣類の思考の糸、葉脈上に）眠っているもので、コルヴァイ修道院の伝説ほどに[Corvey、グリム、『ドイツ伝説』264]、素敵な伝説はない。一 その修道院から死の天使が一人の僧侶を召し出すとき、天使はその到着の印として僧侶の合唱席に一本の白い百合を置いたのである。私はこの迷信を信じたいと思う。我々の穏やかな精霊はこの死の天使を真似て、少年に言った。「我々が一本の百合を見いだしたら、我々はもうじき死ぬのだ」。するとまだ百合を見たことのない天国志望者はいつでもそれを探さなくなった。あるとき、精霊が彼に宇宙の聖霊を形而上学的ロビネの判じ絵としてではなく[Robinet(1735-68)は神の属性を述べない]、地上の最も偉大な最良の人間として描いたとき、彼らの周りに今まで見られなかったような芳香が漂ってきた。少年は感じたが、しかし分からなかった。彼は幽居の敷居に行った 一 三本の百合があった。彼はこの白い六月の子供たる百合を知らなかった。しかし精霊はうっとりとして彼からそれを取り上げて言った。「これは百合だ。天国から来たのだ。我々は間違いなく死ぬことになる」。永遠にその感動は後年になってどの百合を見ようとグスタフの心の中で震えることになった。きっといつか彼の真の死のときに、一本の百合が消えゆく月遊星の最後の輝く弦として彼の前に現れることであろう。

精霊は、彼をその誕生日の六月一日に地下から出す計画であった。しかし彼の魂をもっと高く緊張させるために（ひょっとしたら高すぎたかもしれない）、彼は彼に最後の週に更に二つの聖なる前日祭を体験させた。一 つまり彼は彼に天国の、即ち地上の至福を自分の舌で、そして自分の視覚で、殊に天国の音楽、天球の諧調を描いて見せたとき、しばしばすでにまだ上に来ていない瀕死の者達の許に人間の心のこの木霊が下界に鳴り響いてきて、瀕死の者達はそれで柔らかい心が溶けるが故に、先に死んでしまうという報告をして締め括った。少年の耳に音楽、この大気の詩は、まだ聞こえたことがなかった。彼の師は夙に所謂弔歌[臨終の歌]を作っていた。この歌を聞いて当然グスタフは、この歌が第二の生について述べていることすべてを、第一の生と関連付けて、彼らはその歌を歌わずにしばしば朗読した。しかし最後の週になってようやく精霊は突然、自分の穏やかな教師の声をヘルンフト派の教会音楽の更にもっと柔らかな歌声へと変容させ、憧れの弔歌を朗詠し始めた。その際準備しておいた上方からの獵笛 一 つまり憧れのこのフルートによって伴奏させたのであった。響くアダージョの嘆きは弱音器の大地を通じて彼らの耳と心に真の雨のように降ってきた。...

グスタフの目は最初歓喜の涙に濡れていた。― 彼の心は断腸の思いがし、― 彼は、今やもう音色のせいで死ぬであろうと思った。

音楽よ。遠く離れた調和的世界からの余韻よ。我々の中の天使の溜め息よ。言葉が無言であるとき、そして抱擁や目や、泣きぬれた目が無言であるとき、そして胸の格子の背後の我々の黙した心が孤独に横たわっているとき、汝のみを通じて心はその牢獄の中で互いに呼び合い、その離れ離れの溜め息をその砂漠の中で和合させるのである。―

真の死の場合と同様に精霊はその教え子をこの模倣の死のとき五感の梯子の上で天国に近付けた。彼は見せかけの死を真の死の利点となるようすべての魅力と共に飾った。グスタフはとにかく我々の誰よりも恍惚となって死ぬことになる。他の者ならば我々に地獄が開いているのを見せるであろうが、精霊は彼にこう約束した。彼はステファノ[使徒言行録、7, 55/56]のようにその命日に天国がすでに開いているのを、天国に昇る前に見るであろう、と。実際そうになった。彼らの下界のヨシャファトの谷[ヨエル記 4,2]は先に述べた地下階段の他に更に長い水平の十字通路を有していて、山の麓で谷とその中の村に出口を有し、その通路は様々な間隔で両扉によって閉ざされていた。この扉を彼は六月一日の前夜に、ただ白い三日月が地平線上に昇り、老白髪の顔のように太陽が沈んだ後の青い夜の中に生じたとき、祈りを捧げながらこっそりと開け放った。――― ところで、グスタフよ、君は君の生涯で初めて、そして跪いて、人間の受難と行為の広大な、九百万平方マイルの広さの劇場を目にすることになった。しかし単に我々が夜の幼年時代、母親が我々を蚊から守るために掛けてやる紗の下で目をやるように、君は夜の海を眺めることになった。その海は君の前で揺れる花々や、星々の傍らを動いているように見える赤翅虫や、創造の混在全体と共に果てしなく広がっていた。――― いやはや、幸せなグスタフよ。この夜景画は長く年月を経た後でも君の魂の中に海の中で沈んだ青い鳥のように深い影の背後に臥し続けることになり、君を、憧れながら、夙に過ぎ去った喜ばしい永遠のように見つめることになる。...しかし数分経つと精霊は彼を引き寄せて。その探る目を自分の胸で覆ってしまった。気付かぬうちに天国への扉は再び閉ざされて、彼から春を奪った。

十二時間して彼はその中に立つことになる。しかし私はこの穏やかな復活に近づくほどに、心がまことに重苦しくなる。私がただ私の生涯で初めて、グスタフの誕生日のように天国に値する誕生日を私の頭の中で昇らせ、没するようにさせることが一生に一度だけできること、その熱気を私の脈拍に感じ、これについては紙上にはその反照しか写せない一日をそのようにできること、重苦しきは単にこのことのせいではない。― また単に、その後美しい精霊が人知れず著者と読者の前から去ったことのせいでもない。― 最大の原因は次のことであって、つまり私は私のグスタフを静かなダイヤモンド坑から、そこでは彼の心のダイヤモンドが透明に、輝くように、汚れも羽毛もなく合成されていたのに、熱い世界へと投げ出すことになるのである。この世界は直に彼の上に凹面鏡をかざして砕くことになろうし、情熱の風の海から所謂天国へ、浄福な者達の傍らに同等の数の忌まわしい者達が歩んでいる天国へと投げ出されるのである。― しかしそうなると、彼は偉大な自然の顔をまじまじと見つめることが許されて、そうなると私が重苦しい気分になるのは彼の運命ばかりでなく、私や他人の運命もそうである。我々の教師は我々の内部の人間を罪人のごとく、何という糞土で、立ち上がりを許される前、磨くことかと私は考え込んでしまう。いやピタゴラスのような人が、ラテン語やシリアの歴史の代わりに、我々の

心を穏やかに震える風奏琴へと、自然が奏し、その感情を表現する風奏琴へとならしめるべきで、すべての情熱の騒がしいティンパニーへはならしめるべきではなかったであろう。

一 天才は限界を有するけれども、徳操には限界がなく、すべての純なる者、善なる者をもっと純なるものになれるのであるから 一 いかにか我々は遠く離れていることだろう。

グスタフが一夜待っているように、私も描写を一夜延期して、明日私の魂のすべての悦楽と共に描くことにしたい。

第五扇形、あるいは切片

復活

自然の広大な大聖堂には四人の司祭が立っていて、神の祭壇、つまり山々の麓で祈っている。一 霜白の冬はその雪のように白い[聖歌隊]白長衣を着て 一 収集の秋は腋に収穫をかかえ、その収穫を神の祭壇に置いて、人間にそれを取ることを許す 一 炎のような青年の夏は、夜まで働いて、犠牲を捧げ 一 最後に子供らしい春が花々のその白い教会の飾りをまとっている。春は子供のように花々や花の萼を崇高な精神の周りに置いて、春が祈ると春の祈りを聞いているものすべてが共に祈る。一 然り、人間という子供にとっては春は最も美しい司祭である。

この花の司祭を幼いグスタフは初めて祭壇で見た。六月一日の（下界は夕方であった）日の出前に精霊は黙って跪いて、目と黙して震える唇とでグスタフのために祈りを捧げた。祈りはその大胆な人生全体の上に翼を広げた。一つのフルートの音が上方で内密の愛らしい呼びかけを始めて、精霊は、自ら圧倒されて、言った。「大地の下から出るようにとの呼び声だ。上の天国へ私と行こう、グスタフよ」。少年は歓喜と不安の余り震えた。フルートの音が響き続けた。一 彼らは天国への梯子の夜の通路を上がっていった。一 二人の不安げな心は鼓動と共にほとんど胸が砕けそうであった。一 精霊は門扉を押し開けた、その先に世界がある。一 彼はその子供を地上へ持ち上げ、天の下へ連れ出した。...すると生き生きとした海の高い波がグスタフの上に押し寄せ 一 息を詰まらせながら、目を圧迫され、魂を乱されて、彼は自然の見通し難い顔の前に立っていて、震えながらひしと自分の精霊に掴まっていた。...しかし彼が最初の凝固の後、自分の精神をこの奔流に対して広げ、引き裂いたとき 一 宇宙の高貴な魂が自分をかき抱いている千もの腕を彼が感じたとき 一 彼が自分の周りの緑色の酩酊した花々の生命を目にし、そして自分の百合よりも生気があるように見える頷く百合を目にすることができたとき、そして彼が震える花を踏み潰しかねないと恐れたとき 一 彼の再び上方に向けられた目が深い天、無限なものの開口部に吸い込まれたとき 一 そして彼が行き交う暗赤色の雲の峰々と自分の頭上で漂う国々とが壊れて落ちて来るのではないかと恐れたとき 一 山々が我々の大地の上に新たな大地のように横たわっているのを見たとき 一 そして無限の生命が、雲の傍らを羽毛を付けて飛んでいる生命や、足許のぶんぶん言う生命、すべての葉の上で這っている黄金色の生命、巨大な木々の生き生きとして、自分に目配せしている腕や頭部が彼を取り巻いたとき 一 そして朝の風がやって来る聖霊の大きな息吹に思え、風になびく木陰道が語りかけ、林檎の木が彼の頬を一枚の冷たい葉で触れたとき 一 最後

に彼の圧迫された目が、夏の鳥[蝶の意も]の白い羽根を追って行き、その鳥[蝶]が音もなくひっそりと多彩な花々の上を越えて、広い緑色の葉に薔薇の耳飾りのように銀色に止まったとき、...天は燃え始め、去って行く夜からは夜の外套の後追いの縁が燃えながら消え、そして大地の端には、神々しい王座から沈んだ神の王冠のように、太陽が横たわっていた。グスタフは叫んだ。「神がそこにいます」。そして眩惑された目と精神と共に、そしてまだ子供らして十歳の胸で言えるかぎりの最大の祈りと共に、花々へ駆け寄っていった。...

可愛い者よ、目をまた開けるがいい。君はもはや灼熱の溶岩の球を覗き込んではいない。君は君の母親の影となる胸に休んでいる。胸の中の彼女の愛する心が君の太陽であり、君の神だ。 — 初めて、言いようもなく優しく、女性らしくて、母親らしい微笑を見るがいい。初めて両親の声を聞くがいい。というのは天国で君を出迎える最初の二人の浄福な者達は君の両親だからである。何という天上的な時か。太陽が輝き、その下ですべての露が煌めき、四人の歓喜の涙がより穏やかな太陽の像と共に落下する。そして四人ははなはだ天から離れている大地の上で浄福に感動して立っている。覆われた運命よ、我々の死はグスタフの死のようなものであろうか。覆われた運命よ、運命は我々の地上の背後に、仮面の背後にいる按配に座していて、我々に — 存在する猶予を与えている。 — いやはや。死が我々を砕き、大いなる聖霊が我々を洞窟から天へと押し上げたとき、そしてその太陽と歓喜とが我々の魂を圧倒するとき、汝はそのときもやはり、我々が弱った目を向けることのできる馴染みの人間の胸を与えてくれるのだろうか。運命よ、汝は我々にまた、我々が決して此岸で忘れることのできないものを与えるのか。此岸で哀悼するものがなく、彼岸でまた再会すべきものを有しない目はこの紙面を見ることはないだろう。いや、この死者に満ちたこの生の後、我々がようこそと向かって言えるような馴染みの人に会えないのであろうか。...

運命は仮面の背後に黙して立っている。人間の涙は暗く墓場の上にある。太陽は涙の中に射し込まない。 — しかし我々の愛する心は不滅の中で死ぬことはなく、神の顔の前で死ぬことはない。

第六扇形、あるいは切片

美しい顔の強引な拉致 — 重要な肖像画

一日中グスタフの緊張を次々に強いた対象に対する彼の驚きと、睡眠の欠乏のせいで、その最初の天国での一日を彼は或る熱に浮かされた夕べで締め括った。その夕べ彼は理由もなく泣いたことだろう。しかし一つの理由があった。彼の聖霊が庭での喧噪の間、無言の接吻をしてその寵児から立ち去っていて、母親に一枚の小紙片だけを残していた。つまり彼は譜面を二つに切り裂いていて、一方の譜面にはメロディーの不協和音とそれについてのテキストの問いかけが記され、他方の譜面には解決とその答えが記されていた。協和しない半分の方をグスタフは得ることになっていて、もう一方は精霊が有した。「私と私の友は」と彼は言った、「いつかこの砂漠の世界で、私が答えを有する問いかけを友が有しているということで、互いに知り合うことになる」と。次第に大きく成長するむく犬も彼は連れて行った。...未知の美しい陶酔者の若者よ、どこで我々は君と再会するのであろう。君は君の孤児となった教え子が夕方君を求めて叫び、むせび泣いていること、新しい

星々の天国は、彼にとって君と一緒に部屋の天井ほどに気に入るものではないこと、明かりの蠟燭はどの部屋をも、彼が君を愛し、君が彼を愛した静かな洞穴へと描き変えていることを君は知らない。同様に我々は人生の黄昏に、我々より他に誰も悼む人のない我々の以前の友人達の古い墓場でかがみ込むことだろう。そしてようやく愛する仲間達からの最後の老人が見知らぬ若者によって埋葬されるに至る。しかし誰一人としてこの最後の老人の美しい青春時代を思い出さない。 —

彼はまた朝には元気に、快活になった。太陽は彼の目を乾かし、彼の精霊の霧にかかった像は昨夜に隠されて、遠くに退いていった。彼が、極めて痛々しい憧れの夕べの時を除いて、少しばかり安易すぎるほどに友人の像を間近の像のせいで背後に押しやったことを、彼の年齢と彼の性格のせいにせざるを得ないのは残念なことである。すべての花々が今や彼にとって玩具となり、すべての動物が、遊び友達、すべての人間が不死鳥となった。天の移り変わりのそれぞれ、日没のそれぞれ、一刻一秒が彼には新しく見えた。

彼は田舎へ出掛ける上流の子弟の按配であった。新しい大地、新しい天国の中で、彼らはすべてを覗き、触り、すべてに駆け寄る。というのは貴族の子供達にとって、彼らの両親が、いつもは自然を気につけないのに、子供達をそれでも高い部屋と高い家々の間で、つまり天の三十八平方フィートを見えなくする家々の間で、高い壁に囲まれた温室の中で育てる具合に育てて、自然を彼らの両親同様に彼らの目に触れないようにするのは、言いようもない幸せであるからである。そのことによって自然と両親に対する彼らの感情が大地に対して、あたかも大地の下で育てられるかのように無感覚になることがなくなるからである。いや彼らは日の出をグスタフよりも初めて見るのがほとんどちょっと後になる — 郵便馬車やカールスバートで見ることになる。

彼の両親は彼を新生児として側から離すのを好まなかった。ほとんど館の庭や山の麓に行かせなかった。麓では郵便道路が危険であった。それに彼は地下の学門校[シュールプフォルタ]から一種の当惑を携えて来ていた。平均的な人間ならば、それに彼の父もほとんど、素朴なやつと見なすもので、しかしより高度な人間ならば、ぼんやりしているのではなく、過剰な陶酔的な目と一緒に、その当惑が彼の場合のように出現すると、その教団の十字勲章と見なすものである。それでも、彼の両親は、その後一週間して、彼を閉じ込めておかず、外出させたことを後悔することになった。

フォン・クネール最上級森林官夫人と一束のヘルンフト派の男達、女達が夫人と一緒に、塚での教え子に耳を貸すためにやって来た。オールド・ミスの[二番刈り]干し草の山がすでに四週間前に前もって訪ねてきていた。そして今再び単にこのように不思議な子供を見物するためにこの山も来ていた。ヘルンフト派の男の同志[僧侶]は上品に活発で自由であった。尼僧達は皆大型時計の周りに集まっていて、時計のケースはホルン奏者の天使達で縁取られていて — 尼僧達はこの奏者達の許から離れないでいた。彼女達には何を言っても無駄であった。口と目もやはり開けずについて、騎兵大尉は怒りを抑えて真っ赤になっていた。ようやく一人の尼僧が唇をワイン・グラスに付けると、他の尼僧達も倣って付けた。 — 一人の唇がビスケットをかみ切ると、別の者達も砕いた。 — 一つの同じ痙攣がこの二本足の羊達の通奏の一行全体に見られた。これに対してオールド・ミスの山はすべてのものに切りかかっていた。この山は両生類のごとく、流体にも固体にも馴染んでいた。彼女達は嚙んだり、ぺちやくちやする人生の中で舌より他に何か動かしたこ

とがなかった。 — さてしかしこのような多くの観客のために不思議な動物の出番となったとき、これが — いなかった。すべてがほじくられ、長く失われていたものが掘り出され、すべての中に呼びかけがなされ、すべての隅、藪で探されたが、 — グスタフはいない。騎兵大尉は、彼の最初の悲しみはいつも一種の怒りの形になるのであったが、見たがっている女達を全員座らせた。騎兵大尉夫人は、その悲しみはもっと優しい形をとって、女達に対して愛撫するように腰を下ろした。しかしすべての不安げな、問い質し、掛けて行く顔が皆、ますます途方にくれて帰ってきて、それどころか開いた館の門の背後に、少年が小さな、影になった苗床に引きちぎった花を差し込んで、この花が水を注がれてまだ濡れている状態で発見されたとき、絶望で両親の顔が潰されてしまった。「天使のあの子はライン川にきっと落ちたのだわ」と彼女は言った。しかし彼はこれに何も反論しなかった。別の時であれば、彼はこのような誤謬には地団駄踏んでいたことだろう。ライン川は館から半時間ほど離れたところを流れていたからである。しかしこのとき両者は、希望よりはるかにとんでもない跳躍をする不安に襲われていた。それ故私はここで別な時の話をする。いつもは騎兵大尉はどんな具合か私は承知しているからである。つまり同情から、苦しんでいる者自身に対して激昂するのである。例えば自分の妻に対して、妻が病気のときほどに彼の表情が呪いで満ちることはなかったのである（ほんの唯一つの素早い血球でも彼女を突き倒していたであろう）。 — それでも彼女は全く訴えてはならなかった — そうしたら、溜め息もならなかった — 溜め息もつかなくても、苦しい表情一つしてもならなかった — 彼女が聞いていると、そもそも全く病気であってはならなかった。彼は閑雅な上品な人々の愚行を有していた。彼はいつも楽しげであることを欲していた。

しかしこのとき、とにかく彼の籬壺が砕けていたので、他人の溜め息は彼自身の溜め息を甘美にし、注意の足りない召使い達や、干涸らびた尼僧達や干し草どもの山に対する彼の怒りを甘美にした。

子供が一夜見えず、午前中の間、見えず、それどころか森の舗装道路で彼の小さな帽子が見つかったとき、不安の一刺しは、この刺し傷の化膿し続ける痛みが変わった。不安に対するほどに、心の動揺への反証を挙げるのが難しいものはない。それ故私は数年前から一つの反証も持ち出さず、不安の主張する最も困ったものを早速唯々諾々と認め、心配された最も困ったものから生じ得る別な情動に対してただこう尋ねて、構えるだけである。「そうになったらどうなる」。

森の中のすべてのベニテングダケが踏み潰され、すべての啄木鳥が追い立てられ、帽子の持ち主が探された。 — しかし無駄であった。 — そして三日目に騎兵大尉は、その顔は痛みの腐食銅版であったが、探すあてもなく深く森の中に迷い込み、それで茂みの中をトランクと従者を乗せた旅行馬車が飛び過ぎて行くのを見逃すところであったが、その馬車から歓喜の雷鳴のように失踪した息子の声を聞いて驚くことになった。彼は後を追いつ、馬車は先に駆け、野外で彼は馬車がすでに自分の館の裏を埃を立てて行くのを見た。我を忘れて彼は館の中の中庭に駆け寄り、後を追おうとして、それを — 中止した。というのは上の家の戸口で糸玉のように集まってきた館の一団がすでにグスタフを取り囲んでいて、館の犬どもがわけが分からずに吠えて、皆が語り、尋ねていて、それで少年の答えが何も聞き取れずにいたからである。そばを飛び過ぎて行く馬車が彼を降ろしていたの

であった。その首には黒い紐で自分の肖像画が下がっていた。その目は帰りたい気持ちで苛まれ、充血し、湿っていた。彼は長い長い家々について語った。それを路地と考えていた。誰一人としてその話を理解できなかつたろうが、しかし料理人が一枚の葉書がその足許に舞い落ちているのを見いだすことになった。この葉書を騎兵大尉が読んで、これを読むべきは自分でなく、彼の妻が読むべきものであると悟った。彼はそれを女性の筆跡のイタリア語から次のように翻訳した。

「一人の母親が一人の母親に対してかくも長くその子供を奪っていたことをお詫びできますでしょうか。貴女がたとえ私の過ちをお許しにならなくても、私はその過ちを後悔していません。私はあなたの可愛い子供さんが三日前森で迷っているのに出会いました。そこで私は子供さんを馬車に乗せました。より劣等な盗人達から守り、その両親を探し出すためでした。一 いやこれだけは申し添えたいと思いますが、この両方のつもりではなくても、やはり子供さんを引き入れたことでしょう。とてもこの世ならぬほど可愛いからというのではなく、全く、それも髪の毛に至るまで、私の大事な、行方不明のグイードに似ているから、放っておけなかつたのです。運命がとても奇妙な具合に最愛の私の子供を生きのまま私の膝から奪い取って、すでに何年もなります。貴女の子供さんは今日再び戻ってきます。私の子供はひょっとしたら決して戻ってくることはないでしょう。一 首の飾り物はお許してください。その肖像画を子供さんと思われることでしょう。子供さんは私の息子と酷似しています。しかしそれは私のグイードの肖像画です。子供さん自身の肖像画も私は描かせて、私の愛しい子の似姿を二重に有するためにそれを保持しています。いつか花と咲く貴女のグスタフを目にすることがあったら、長いことまじまじと見つめて、こう思うことでしょう。私のグイードも今やこう見えるに違いない、彼もこれほどの無垢を目に浮かべていて、とても同じように気に入られることだろう、と。一 私の幼い娘は、遊び友達がまた去ることになって、泣いています。娘はただ兄を返すだけですが、しかし私は息子を返すこととなります。貴女と子供さんが一層幸せになられますように。一 私の名前はお察しください」。

人々は皆これを書いた女性についてあれこれ推測した。騎兵大尉だけが悲しげに何も言わなかつた。自分の最初の行方不明の息子を思い出しての苦痛の故なのか、それとも私と同じようにこの件全体のことを考えていたのか、それは分からない。即ち私は、この行方不明のグイードはまさに彼自身の子供であると推測しているのである。そして手紙を書いた女性は恋人で、この恋人を貿易仲介業者のレーパーが彼の手から奪ったのである、と。何故そうなのか、後で語ることにしよう。

グスタフの美しさはまず理知的にあるいは前方から描けるし、次に背後から描ける。彼を育て、覆っていた彼の温室のせいで、全く当然なことに彼の百合の肌は白い生地へと漂白されて、そこに青白い薔薇の両頬とか単なるその反照、それに上唇のより濃く、固い、薔薇の蕾が生じていた。彼の目は開いた天で、千人もの五歳児の目とか、単に十人の五十歳の者の目に見られるようなものであった。この目はその上更に、長い睫と、何か陶酔的なもので覆われているというか美化されていた。最後に言う緊張とか情熱のせいでその伐採刻印ハンマーと印の鋭い字がこの美しい作物に打ち込まれてはいず、伐採を示す死刑判決はまだその樹皮には刻まれていなかったのである。すべて美しいものは穏やかである。それ故最も美しい民族は最も静かな民族である。それ故激しい労働は貧しい子供達や貧し

い民族を歪める。

私がグスタフの美しさを背後から証明できるようになって、まだ一年とならない。というのは当時競売人が私の親密な友であって、彼は私のためにいたずらを思い付いて、絵画や銅版画を丁度、仮装舞踏会のせいで下部シェーラウの偉いさん達が誰も、私を除いて、参加できない日に競売することにしたのであった。私は悪銭で千もの品を手に入れた。町や郊外全体からこの家具の塵芥の山に集まってきて、売り手にして買い手という具合であった、このオークションにはすべてのヨーロッパの君主達が登場したが、しかし下手に描かれ、色彩が施されていた。ある分別ある貴族がその両親を売りに出していたが、立派な半身像として金と替えるつもりであった。 — ローマでは逆に両親が子供達を扱っていたが、しかしこれは生身のものであった。その貴族は、私とその父と母に手をだすのを期待していた。しかし私が競り落としたのは、グスタフの肖像画で、彼はそれも呈示していた。貴族は — レーパーという名で、先に述べた一日にして夫にして継父となった男であった。

そして今ここに、グスタフよ、君は私と私の書き物机に向かい合って掛かっている。そして私が何か思案をするときには、私の目はいつも君に留まる。幼い私の主人公よ、多くの者が私を非難して言う、君をここシェークスピアとヴィンケルマン（パウゼ作）の間に釘で留めている、と。しかし君は — そのことに思いをいたす者は少ないが — 難しく高貴な思念が休らうアーチ形の鼻を、しばしば死の手の許で更に美しい形となるそのような鼻を有していないか。そして骨の台輪の許に広い目を、それを通じて自然が凱旋門を通るように魂の中へ入ってくる目を有していないか。そして精神のドーム状の家を、それに銅版画に描かれた[偉人の]隣人に匹敵し、負けない一切を有していないか。

読者には、今なぜ私が、私の扇形を突然終えて、閉鎖しなければならぬか伝えたい（しかしこれはずっと先のことになる）[説明はされない、ペーレントの注]。...

第二の号外

ある宗教局書記の麦藁冠奉呈辞、この辞の中で、書記とその辞は不義密通と離婚は許されるべきもとであると証明する。

ここで告白すると、我々の啓蒙された世紀は不義密通の世紀と呼ばれるべきであろうと思う。勿論かつて私は、マルセイユの広場で、不義密通という代物は正しいと述べたことがある。すでにミュンヘンから遠く離れたところで、結婚生活という中央教会には更に結婚生活の支部を附属させるべきであると述べた。 — 上部ザクセンではこう言った。かの伯爵夫人が丸一年生み続けた、毎日何かを生み続けたのであれば、今ではなお伯爵夫人達は少なくとも前年の成果を有することになろう — 十ものドイツの圏で私は確かに十もの様々なやり方で表現を変えてきた。 — ー しかし当時は、ただここに見られるほど、この件を明確に生理学から表現できる地はなかった。

サントーリオ[サンクトリウス]その人^{*原注¹}が、デルフォイ的寢室用便座に腰掛けて、人間は十一年ごとに新しい肉体をまとうことになっているという真理を孵化した — 古い肉体はドイツ帝国の領土のように部分的に消滅して行き、全ミイラのうち残っているのは、薬剤師が小さくスプーンで掬い取るぐらいのものである。ベルヌリはこの男に全く異議を称えて、サントーリオは間違っている、十一年ではなく三年で双生児の片割れは消えて行き、別の片割れを結晶させると我々に見せている。要するにロシア人やフランス人は体のシャツよりも頻繁に体そのものを変えているのであり、ある管区はいつも新しい肉体と新しい管区長を共々三年したら、申し上げたように得ているのである。

この件は全くどうでもいいことではない。というのはかくなると、婚姻記念祭を行うある禿げ頭が、自分の全身の一片の肌を一文銭大示してこう述べることはできなくなるからである。「このぼろ肌と共に私も二十五年前祭壇の前に立っていて、残りの部分と共に私の記念祭を迎える妻と一緒にあったわけだ」と。このことを記念祭の王はできなくなる。結婚指輪は確かに落ちてはいない。しかし指輪を有していた指はとくに落ちている。根本的にはこれはすべてのいたずらを上回るいたずらである。私は別の宗教局書記達を引き合いに出そう。というのは哀れな花嫁は喜んで新郎の体という戦車の立像と共にベッドの天蓋の下に入って、こう思うからである。 — 立派な生理学なんて知らないのであり — この体の許で自分は何か堅固なもの、鉄製のもの、不動産、要するに髪の毛のある頭部を得ていて、この髪の毛についていつかこう言えるのだ、私の髪の毛の許、私の頭巾の許でこれらは白髪になった、と。こう彼女は願う。しかし彼女のこの希望の下で悪漢は一つの肉体から全ての肢体を、学生が負債の学生財をそうするように、三年間極く微小ずつ夜陰に乗じて運び去り続けるのである。彼女が新年を迎える夜、向き直ると、夫婦のベッドには単に彼女の横にはある石膏像、あるいは第二版が横たわっていて、それは先の肉体が自分の中から残したもので、そこには古い版の一枚も残っていないのである。新婚のベッドの容積と夫婦生活のベッドの容積とがかくも異なるとき、一人の女性は魂についてどう考えたらいいのか。 — つまり、例えば女性の宗教局全体（例えば宗教局局長夫人、副局長夫人、宗教局書記夫人）が三年後枕元に、結婚生活を約束して溶け去った宗教局とは全く別の男性の宗教局に出会ったら、一人の女性は何をしでかすだろうか。即ち、宗教局の片方であるからには権利関係に詳しいこの女性は何をするだろうか。申し上げるが、彼女は食事の間、数百度、こう聞いたにちがいないのである。男性の体のこのような消失は忌まわしい悪意の不在(*desertio malitiosa*)であり、女性をその夫婦生活の義務から全く解放放つものである、と。 — 全くこのような[夫が旅の]一時やもめは『結婚生活について』のルターを読んでいて、こう思い付くことができよう。ルターは邪悪に放っておかれた女性に一年後あるいは半年後に新たに結婚することを禁じていない、と。...前述の新たな結婚生活に赴くことは、明らかに、このような放っておかれた女性の最初の義務であり、意図であろう。しかし新たに残っている夫の肉体は蒸発してしまった肉体とは関係が

*原注 1 ハラーの『大生理学』には、人間はサントーリオによれば十一年ごとに古い肉体を脱すると扱われている。 — ベルヌリとブルーメンバッハによれば三年ごとであり — 解剖学者のキールによれば一年ごとである。

ないので、彼女はそのことを、彼が傷付かないよう、彼が例えば取引所にいるときとか
— あるいは演壇にいるとき — 市にいるとき — あるいは船上にいるとき — 会議室のテーブルに着いているとき、あるいはその他のとき不在のうちに、彼の知らないうちに、復讐心も交えずに行う。

しかし夫は馬鹿ではなく、いつでも生理学のことを大いに承知していて、妻もその体をその女中同様に頻りに交替すると知っている。従って彼は何も待機する必要はない。新勅法第 22、第 25 章によれば、彼女が一夜、彼から去ったとき、すでに離婚の権利を得ている。ここではしか宗教局参事官夫人は永久に蒸発していて、その上三年ごとにこの蒸発を繰り返すのである、— 彼女はそれでもランゲの『聖職者の法』によれば、この法そのものを自分の文庫に有する宗教局参事官に、この参事官が国外追放となった場合、随伴しなければならないのであり、たとえそれどころか結婚条項では家に留まるよう定められていても、随伴しなければならないことになっているのである。ランゲは夫達に関してその件をそう語っている。真の貞淑さと、博識、従って生理学もお手のものである。偉いさんの世界では、この点を夙に上品に分別をもって定めていて、良心的に大いに努めている。というのは夫というものはいつでもその妻の許で結婚式の後三年で一葉局ロートの血も、そこで流れる薄い静脈の一つも、もはや古い血の痕跡は期待できなくなるので、従って、自分の良き妻の消え去った部分は、彼女自身よりは別の女性の許でいつでもはるかにより速やかにより確実に再発見できると思うので、それ故むしろ絆のある女性に対する愛が、その女性の許での、その女性と一緒にの本来の不義密通に当たると思わざるを得ないので、それに厳密に考えれば、やはりそうであり、それで今や純然たる倫理が問題となるからである。それ故彼は確かに鼓動や神経節、指の爪、そして人々が普通に彼の妻と呼んでいるより高貴な諸部分のかの総体に、彼の名前、彼の信用の半分、彼の子供の半분을承認しているけれども、それはそもそも偉いさんの世界では公然たる結合を廃止することは好まれず、むしろ仕舞には千もの大気で編まれた鎖の許に赴くからであるが、しかしながら別の体を有する一人の女性と、一つの同じ住まいに住み、同じ食卓、同じ社交を有するということは、倫理と観客に対する彼の尊敬の念が許さない。彼はそれどころか（これはひょっとしたら余りに小心翼翼たることかもしれないが）彼女と共に公然と現れることを好まず、少なくとも家の中では、彼とか[去勢した]オリゲネスが不能にした一切のことを控えるのである。

肉体は消滅しても婚姻した魂は残るであろうと私に論駁し得るとしたら、それは劣等な色褪せた演説である。というのは魂とは（従って記憶や、思考能力や、倫理的能力等々と）今日ではわずかしか、あるいは全く結婚し得ず、魂の周りのものと結婚し得るからである。第二にどの物質主義者の許でもその哲学的取引所で経験できるように、魂は肉体の徒長杖に他ならず、従ってこの肉体は男女の許、肉体と共に同時に消失して行くのである。そう言わなくても、単にヒュームに賛同しさえすればいい、彼はこう書いている。魂は無でしかなく、単なる思念が蛙の卵のように互いに並んでいて、そのように頭の中を這ってきて、自ら考えるのである、と。このような事情であれば、新婚のカップルが、接合された魂を、二人のペアが結婚舞踏会の踊りの手袋を保つような期間だけ保とうとするならば、カップルは有り難いことと思えよう。人々もハネムーンの後の午前にそのことに気付いている。

従って、申し上げたように、すべての教会法学者は、夫と妻が不義密通に進んで良い週

を婚約後の四年目より先にしか引き延ばせられないのである。しかし世慣れぬ身分の高い人々にとってこれは厳しく、余りに厳格にすぎることである。殊に「キール」〔Keill,1673-1719〕解剖学者)を読んで、すでに一年経つと古い肉体全体が、一単にわずか十六ポンドの重さの肉を除いて、溶け去っていると承知しているとき、厳しすぎる。それ故しばしば私はこう考える。私が不義密通をすでに一年目に行うにしても(多くの者がそうしているように)、百七ポンドの重さの私の妻のほんのわずかな部分に対して、つまりまだ残っている十六ポンド分に対して実際不誠実であるにすぎない、と。

自分の不義密通を正当化し得る上述の肉体交替で、宗教局はその決定を根拠付けなければならない。というのは人々がしばしば結婚後九年、十八年して、まだ結婚生活で一緒にいて、然るにすべての生理学者が、二人の新しい結婚の肉体が存在していて、しかも司祭の祝福なしに同棲していると承知しているとき、今や宗教局の義務は、これに介入し、攻撃し、二人の異なる肉体を、二、三の命令で引き離すことであるからである。それ故、良心的な宗教局が、すでに結婚生活を行っているキリスト教徒を離婚させるに難儀するとは実際耳にしたことはないのである。しかしまた他方、宗教局は、結婚を互いに単に約束しただけの人々を、何の苦もなく別れさせるということもほとんど耳にしない。一 まさに当然なことである。というのは、先の長い結婚生活では真の不義密通は、結婚していない肉体が存する故に離婚命令によって避けられるからである。しかし後の婚約の場合では、契約をなした肉体はまだ完全に存しており、離婚の資格を得るまで、まず長く結婚生活を送らなければならないのである。これが見かけ上の矛盾の真の解決である。この矛盾のために、宗教局における我々すべてを、手数料依存者、私を[ビリヤード]採点係、我々の緑色の会議テーブルを緑色のビリヤードと見なし、この台の周りを会長や参事官が長いキューを持って、一局プレイするためぶらついていると多くのぼんやり者が間違っただけで考えている。まことに宗教局書記はいずれにせよ金よりももっと筆を調べている[金を稼いでいる]。

そもそも何故牧師達は我々に、三年を越えて一緒に寝ていた教区民の夫婦すべてについて報告しないのか。丁度どきに離婚させられるというのに。このような離婚は、二人が長いこと一緒であったという理由だけで十分なのであるが、すべての国々において、二人を後でまたきちんと更新された肉体と共に結婚させるという意図以上のものを有するものでない。宗教局と私は、新しい大臣が王座に昇っても、この件が何ら改善されない場合ほど致命傷を受けることはない。まことに、このような聖職者の州議会はしばしば長い鋸を当てて、夫婦どもが二十一年間一緒であった婚姻の台、ベッドを引き切るものである。二十一年間という長い時間では少なくとも(三年間ごとに不義密通と離婚は満期になる)七回離婚し、結婚し得たのである。何という手数料の損失か。我々は離婚費用を、七倍にできたというのに、四倍にしなければならなかったのである。いずれにせよこのような離婚清算は大したことではない。これは周知のように緩和されるからであり、それも宗教局自身によって緩和されるからである。その上、宗教局の部屋では用心や親切が見られて、私はいつも、離婚した夫婦が支払ったら、その手数料請求書を十五年や二十年後にまた引き出して、宗教局の使者や収税吏に新たに渡すのである、手数料を二度得るためというよりは(これは副次的なことである)、二度その領収書を書くためである。別れた夫婦が最初の領収書を失っているかもしれないし、それに三回目の支払いに夫婦を備えさせるため

もある。夫婦に何度かに分け期間を長くして支払わせて、夫婦が万事し易くなるようにするつもりなのである。

...そして今日三年前私自身も結婚した。...しかし当時の麦藁冠奉呈の辞は劣等に過ぎた。...

第七扇形、あるいは切片

ロービッシュ — 棕鳥 — 先の猫の代わりに子羊

このような誘拐の後、グスタフの遊戯劇場、行楽地は全く館の墨壁に限られた。波打つ平野部、館から十七分の一ドイツ・マイルほど離れている小村のアウエンタールへは単に — 覗き見ることだけが許された。この花咲く高台の島の周りを彼は一日中回って、赤い甲虫の一匹一匹を倒し、大理石模様の蝸牛の一匹一匹を葉から落とし、そもそも六本足でばたばたするものすべてを捕らえて、自分の牢獄へ入れた。自分の慣れない指を犠牲にして最初彼は蜂をその喜びの花の萼から、腹部を押さえて、引き出そうとした。色とりどりの捕囚のものをすべて今や — 侯爵達がすべての階層の人間を首都に押し込めるように — 彼は厚紙でできた壁よりももっと窓の多い美しいソロモンの神殿、あるいはジルバーシュラクのノアの箱舟に押し込んだ。この第四のソロモンの神殿の棟梁は、最初の神殿のときのように、悪魔とか虫のリス[Lis]^{*原注 1}ではなく、少しその両者に似た一人の人間、所謂害獣駆除者のロービッシュであった。この騎士の小農は毎年土地全体の最良の部屋や庭園を訪ねて、部屋や庭園を、最悪の住民というよりは最小の住民から守って駆除した。 — つまり鼠やモグラから守った。私はともかく学者達の共和国にこう説くつもりはない。つまりこの鼠駆除者がこの世から地下のモグラを追い出したその数は、丁度この世に入ってくる作家のモグラの数と同じで、こいつらは後足で腰掛けて、それから前足で、これは両モグラ類でも人間の手に似ているのだが、書架やライプツィヒの書籍市に土塊の小山を小さなミュージアの山として投げ込むのだと説くつもりはない。 — それでもロービッシュは、この害獣駆除者がすべての害獣を駆除したかのように、まさにその分の支払いを受けた。というのは齧歯類の毒殺杯者を怒らせて、支払いをしなかったら、この者はモーゼの奇蹟を真似て[出エジプト記、8,17以降]、立ち去った植民地に、その支配権、強権を奪い取られた害獣の数を二倍にすると人々に思われていたからである。私はこう書いたら、これ以上私のグスタフに近付くべきでないこの泥土の魂からは目をそらすつもりである。つまり彼はよくファルケンベルクの家に来て、客がいるときは、特別な従者、臨時の従者となり、猟獣狩のときには騎兵大尉にとって先導犬となり、幼いグスタフの許にはその製品をもって寄って来たということである。このような子供への釣り針は両親のような子供らしさがなければいかかわしい。しかし子供というものは特に従者達を愛するものである。グスタフは全くもってそうで、彼は後年になっても全く、自分が子供時代好きであった誰かを憎むことはできなかった。ロービッシュが彼に対してなしたどんな悪さをもってしても、墨壁を空にした惨めな昆虫牢獄に対する感謝の絆が切れることはなかつ

*原注 1 ラビ達によると悪魔が神殿の建設の加勢をした。虫は石をかじって真っ直ぐにしたそうである。

た。

ソロモンの宮殿教会にいて、ぶんぶん言っているものはすべて砂糖を食わされるはめになった。子供達は砂糖を前菜、デザートと見なしているからである。最も素晴らしい幽閉の者どもは、その代官たるグスタフが害獣駆除者から更に一羽の椋鳥を贈られることがなかったら、餓死していたことだろう。というのは彼は椋鳥もこのパンテオンの中に放ったからである。椋鳥は、食べるものが何もなかったもの[昆虫]すべてを食べた。...私がここで昆虫の翅鞘の下で、そして椋鳥の嘴の中で最も緊密な反省と最も大胆な暗示を隠しているとすれば、人々はこのようなことを結構なことと考えるよう私は期待する。

私を除けば、多分グスタフの名前を椋鳥ほど頻繁に嘴に乗せるものはなかったであろう。椋鳥は廷臣同様一つの固有名詞しか頭の中にはなかった。少年はこう考えた、椋鳥は考えがあって、ロービッシュ同様に人間であり、自分を何よりも愛している、と。それで椋鳥の許で聞いたり愛したりするのに飽きなかった。ただ生き物だけが彼の玩具であった。その上小農が黒い子羊を連れてきて、彼は赤い紐とパンの耳とで子羊を壘壁周辺に連れ回した。子羊は村の喜劇役者同様すべての役をこなさなければならなかった。あるときは精霊、あるときはむく犬、あるときはグスタフ、あるときはロービッシュでなければならなかった。従って我らの友人はその最初の地上での端役をソロで演じ、同時に監督であり、プロンプターであり、脚本家であった。子供達が互いに行うこのような喜劇は、子供達が演ずる喜劇よりも千倍も有益である。それがヴァイセ[Weiße,1726-1801]の執筆したものであれ、それより有益である。いずれにせよ、人間全体が端役で、その徳操は客演で、その感受性は抒情詩であるようになっている我々の時代では、哀れな子供の魂をこのように脱臼させることは全く危険である。しかし時にはこれも本当ではない。というのは私は申し分のないかさま師を私の人生でただ一度か二回、あるいは三回、私が最初に告解をする以前になお本当に行ったことがあるからである。

彼を館のある山から下りさせないないという指示は、我らの超越的両親、つまり当局の指示とは、その指示がまずは当事者に周知させられること、第二にその指示が二週間にわたって維持されることという点で立派に異なるものであった。グスタフはその人生で、自らと子羊とを壘壁から下の山の麓で放牧させたかったことだろう。一 さて騎兵大尉はクヴィストルプの刑事法論考から、監禁や幽閉（壘壁に閉じ込めること）の代わりに地方退去、あるいは所払いを行えると知っていたので、先の刑罰の代わりに後の刑罰を指示して、言った、「小農の子羊をレーゲル（レギーナ）と一緒に預けてはどうかね。レギーナが山で放牧している間のことだ。私が少年を視野に入れては限っては、少年が一緒に放牧しても構わない」。帝国騎士階級の名誉会員が、即ち私の主人公が、午後の四時にいつも長い榛[はしばみ]の若枝を折り取って、かくて牛飼いの若者となり、十一歳の坑夫のレギーナの隣で、羊の群と牛の群、紐に結ばれた子羊を、大いに得意に思って、はなはだジュピターの眉毛をして放牧して、それで自分は家畜小屋全体を差配していて、帝国騎士階級は今や自分に従いさえすればいいと軽くほめかしていたという点について騎士階級は何と言うか、あるいは記すであろうか予断を許さないことである。

ただ千年至福説の国にのみ、グスタフが高台で、さながら地球の懐で有するかのように有したそのような午後が見られるものである。私の父には私を美術学校へ入れて欲しかったと思う。今頃私はこの風景全体をインクの流れではなく、色彩の流れで捉えて写し出す

ことができるであろうに思う。まことに私はどの茂みもそこをすりと抜ける鳥と共に読者の目に写し出すことができ、岩の傾斜に見られる唇の色をしたどのイチゴも、綿毛に覆われたどの羊も、リスがかじって砕けた樅の球果の散らばっているどの木も写し出すことができることだろう。しかしながらまた絵筆の臭猫の毛で刷いてもむなしいが、しかし私の鷺ペンからは美しく流れ出るそうした事柄がある。 — グスタフの享受を求めて揺れる目は、子羊と、影の先端を有する明るい花壇、レギーナの魔法の顔の間で暗くあちこち漂い、他はよそ見する必要がないのである。

普通の顔なのに、私は何故魔法の顔と言ったのか。 — 私の小さなアポロンにして羊飼いは吸い込む目をしてこの顔の上に花の上に飛ぶように飛んだからである。彼のような頭蓋の下では、そこでは一日中空想の白い炎が燃え上がって、粘液質の青い火酒の小さな炎が燃え上がることはないのであるが、どの女性の顔も金鍍金の魅力と共に神々しい色彩を放つに違いなく、死者の色を見せることはないのである。その上すべての美人は彼の許では、その美人を十年前から見ているのではなく、十日前から見ているという利点を有していた。しかしながらこれは彼の初恋ではなく、単に何らかの初恋の早期礼拝、前夜祭、原初福音書にすぎないのである。

丸二週間彼は子羊を放牧して、それから勇気が募って、彼は — 彼女の編み物道具の横に腰掛けたというわけではなく、これは人間の力を越えることで、単によく彼は — 羊を彼の恋の使者たる紐で留めた。子羊をレギーナの許へ引っ張って行くためではなく、自ら子羊に引かれて行くためであった。というのは最良の恋は最もうつけた[内気な]ものであるからである。最悪の恋が最も大胆なものであるようなものである。授乳中の月のように、彼女が彼の目の中よりも思念の中にもっといようになると、彼女の像が彼の夢想中の魂に寄り添って来て、それで彼には十分であった。 — 彼女の見習いになるという彼の第二の手段は、より低く下の方で揺れている菩提樹の丸い影で、その背後では夕陽がブラインドの戸の背後でのように散っているのであった。この影と共に今や彼はレギーナにますます近寄っていった。一方の太陽を避けるという口実の下、彼は別のより赤い太陽に迫っていった。このように小さな悪行から恋が生じてくる。しかしこの悪行はすべて見抜かれて、許される。しばしばこの悪行は意識よりも本能から生まれている。勿論夕方がゆっくりと谷の方から高みへ移って行き — 微睡む自然がねぐらへ帰った鳥の途切れ途切れの鳴き声でなお浅い眠りの中で、二、三の言葉を発し — 平原の喜びの無垢の花々をむしり取る家畜の群の首もとの組鐘と、単調な郭公とざわついた夕方の物音とがごく秘かな弦のキーを押したとき、彼の勇気と彼の愛は顕著に、それもしばしば次の程度に増大して、彼は彼女のために隠していた菓子を、公然とポケットから取りだして、躊躇せず — 草の中に置いて、本当に彼女にこの焼き菓子のプレゼントをした、薄明かりの中 — 館の門のところまで、二人が別れざるを得ない時のことである。ここで彼は彼女にあわてて混乱しながらプレゼントの場所を告げて、嬉しく赤面しながら飛び去った。彼女にこの夕方の生け贄を暗示することがうまく行くと、彼の動脈組織の動悸はすべて、有頂天に脈打つ心臓となった（というのは彼の恋の言葉と喜びは贈与であったからで）、そしてベッドの掛け布団の下、彼は一晩中翌日の大胆な計画を練った。それは午後の鐘の槌がすべて四回打つと — その直根まで — つまり地面に打ち込むものであった。彼女はいつも母親の幅広いネッカチーフをまとっていた。そのことから分別ある哲学者ならこう

推論するに違いない。彼は後にレディーの大きなネッカチーフを好むであろう、と。私自身は先の首の飾り前掛けよりはレディーが好みであるが。同じ理由で彼も私も広いヘアバンドと幅の広い前掛けを好むであろう、と。私はすでに哲学者達とロンブル[古いトランプ遊び]をしたことがあって、彼らは逆にこう主張していた。こうしたもの一切が彼の気に入るのは、美人の許に（レギーナの許に）その織物があったからではなく、その織物の許に美人がいたからである、と。

私は実は恥ずかしく思っているが、ここで私は、どんなに滅茶苦茶な得業士でもペンを執ると、他の得業士達に対して王妃達や侯爵夫人達の極上の婚約の贈り物を描くというのに、私の書く材料は二人の子供の放牧と恋に向けられている。この両者は秋が深まるまで続き、私はそれを描きたい。しかし申したように、得業士達に対して恥ずかしい。――それでも私は、小さな夢想家よ、君に恵みたい、大いに君の山の麓での君の人生のこの白い日向、それに君の子羊と君の目とを。そして私は喜んで、君の前を通り過ぎて行きながら、君の小さな膝に花々を重ねて行く日々を立ち止まらせて、君の膝から奪って行く背後の武装した日々の葬儀の列を止まるようにさせたい――君の喜びの小さな林を間伐し――君の子羊を銅版画にし――君のレギーナに女中としての奉公金を与えたい。

しかし十月には皆が下部シェーラウへ行く。そして子供達はまだ唇や接吻というものがあるということを知らない。

萌しの恋の週よ。何故我々は我々の後々の愚行よりもその週を軽侮するのか。いや、君達のすべての七日の日々、それは七分のように短く見えるものだが、我々は無邪気で、利己心がなく、愛に満ちていた。君達素敵な週よ。君達は、先の見知らぬ一年^{*原注 2}を越冬してきて、我々の人生の春を舞って見せてくれる蝶に他ならない。私は君達のことを以前同様になお熱を込めて考えたい。音楽も希望も境界を知らない君達のことを考えたい。――

汝、哀れな人間よ、汝の子供時代の華奢で白い、全自然を魔法化する霧が下に降りると、汝は陽の光の許に長くいることはなく、降下した霧はまた這って昇り、厚い雷雲となって青空の下で輪を描き、青年の正午には汝は、汝の情熱という稲光と雷の下に立つことになる。――そして夕方には汝の千々に裂けた天はなお降雨し続ける。――

第八扇形

旅立ち――女性の気まぐれ――切り裂かれた両目

貴族と森の鼠は、夏は田舎に、冬は町に住むので、騎兵大尉も同じようにした。というのは美しい自然は（そう大尉とその領主裁判所長は考えた）結局百姓達の財産目録という首尾になるからである。つまり百姓達の肘や股は半ば麻布、半ば繕った革の鞆の中に収まっていて、沼地や休閑地、家畜の豚へと行きつき、そこでは臭いしか感じられない。――

これに対して町では一片の肉にありつけ、フランス風なカード遊び、若干の真の楽しみ事、人間なるものが見られる。音楽と一帯に対して何の感情も抱かない男に対して、他人の苦しみや名誉心に対する感情も見られないと、特に騎兵大尉に対してそう判断すること

*原注 2 春の蝶は（独身で）先の年から生き延びてきたものである。秋の蝶はその年の子供である。

は未熟な不寛容である。

更にもっと重要な理由があつて、彼はシェーラウに駆り立てられていた。彼は 1, 3000 帝国ターラーとかなりの数の新兵、それに一人の家庭教師を求めていた。まず家庭教師の件。彼の妻が言った。「グスタフには誰かが必要。まだ作法を学ばないと」。しかし作法に欠ける家庭教師はいない — 神学校からのこれらの王子達は、説教壇のみが唯一の高みで、彼らは、自分の教え子が支配する教区の牧師に任命されるまでその若い貴族の牧師 [魂の羊飼] を務めるのであつて、この教育の造型家は、 — 父親が期待するように — 若い貴族の頭脳だけでなく — 母親が期待するように — 若い貴族の胴体も — まことに良く象り、磨くことができ、まずは自らの光沢なしに、第二に授業中に、第三に言葉で — 第四に女性達なしに、第五に、家庭教師が広大極まる獅子の心を軟弱な穴熊の心に縮めるという第六番目のやり方でそうするのである。

騎兵大尉を町へ駆り立てた第二の金属的拍車はお金であつた。彼ほど容易に債権者にして債務者となる事情に陥る者はいなかつた。彼は自らにも他者にも何か拒むことはなかつたので、近隣の者達を最後には彼の客人にして債務者に変えていた。しかし今やそのことで、領主が彼の消滅してしまつた金の山を再び築いてやらなければ、自らがほとんど自らその両者 [客人にして債務者] に変わつてしまつていた。従つて彼は首都の上部シェーラウへ行って、難しい頼み事をしなければならなかつた。つまり領主は彼に 1, 3000 帝国ターラーを贈るとか貸すというのではなく — これならばできたであろうが — 七年間の資本として、支払つて欲しいという依頼であつた。即ち、シェーラウのゾフィー [ペルシア国王の称号] は、恋人を退位させるとき、彼女に莊園、あるいは連隊、あるいは勲章の付いた男を添えてやる習慣であつた。 — 彼は恋人にいつも大いに残して、それで姦婦の夫のために、立派な妻ができるほどで、丁度鷲やライオンが (これも動物どもの侯爵) いつも獲物の一片を手を付けずに他の獣に残しておくようなものである。それで彼は彼の庶出の息子の — フォン・オットマル大尉の母親とも — 騎士領ルーエシュタットで別れた。この領地は彼が一日で (ファルケンベルクの金で) 買って、贈つたものであつた。

第三に騎兵大尉はシェーラウで彼の下士官達に、彼らは大抵そこでは寝ていて、若干の速歩を免除してやろうと思つていた。というのは彼は確かに杖で容易に、レディー達が扇でもつてそうするように、打ちかかつたけれども、しかしイナゴの第六番目の脚を砕くことは好まず、それ故それより四本少ない家臣の脚はそれだけに一層大事にしていた。

ようやく彼らは荷をまとめた。ファルケンベルクの人々のことである。その様を見てみよう。ファルケンベルクの魂は、時計や馬のように、旅の途次だけは遅滞しなかつたので、彼は出発の朝、最も楽しげで、最も迅速であつた。秒速 [二度] の進展は好まず、九度の音程を好んだ。館の手足のすべてを、それらが飛ばないからと言って呪つた。女性の家財をより素早い両手で、次の箱へ押し込み、詰め込んでいった。彼のいらいらした退屈を紛らす [排膿の] 串線法としては、地団駄踏む彼の両足と、それに両手の他になかつた。彼はこの両手で、御者を、御者が馬を殴るときと同じ理由で可愛がり、館に残っている者達すべてにまことによく贈り物をした。

しかし騎兵大尉夫人はすべてを完璧に理性的に行う術を心得ていたので、何も片付かなかつた。ずしんと落ちて来る月を避けるために三回跳躍しなければならないとしたら、彼女はそれでも跳ぶ前に、なお窓のカーテンの襷を取りだして伸ばすことだろう — アイ

ロンをかけるとなると、もっと面倒なことになろう。学者達に似て、彼女はパンのための学問の他に副専攻の学問や付属物に没頭していて、どの件であれ、隣接する事柄と一緒にいった。「とにかく私は他の女性達のようにだらしなくはできない」と彼女はまさに歯ざしりしている夫に向かって言った。夫は八分間黙って彼女を見守っていた。「悪魔の名にかけて願いたい。おまえがすべての特権的騎士階級の中で最もだらしのない女だといひ」

— と彼は言った。彼女は嵐や不正に見舞われると、単に他人の怒った誇張法に注目するので、私もしばしば控訴院法律顧問としてそうせざるを得ないが、今回も彼女は巧みに証明して見せた、「だらしのない女に用はない」 — そして熱くなった騎兵大尉を更に激昂させるのは、自分が全く否認できないものの誇り高い証明を措いてなかったので — かくていつものようなことになった — 舌による喧嘩打撃が始動し — 彼の唾液腺と彼女の涙腺と、胆嚢を有す両者の肝臓は大いに分泌して、キリスト教の夫婦の時間に分離されなければならないほどの量となった。 — しかし十五分して、十五の梱包をするとすべてのこうした夫婦生活の分泌はまた静脈のように吸い込まれた。旅立ちのときには誰も立腹する時間を有しない。

— 彼女は私の名誉にかけてまことに立派な女性であった。しかしただいつもそうとは限らず、例えば旅立ちのときは最もいけなかった。 — 彼女はまず家に残りがたって、耳のある者皆にがみがみ言った。第二に外出したがった。彼女の夫が朝自分と自分の犬に首飾りをして、訪問しようとする、彼女は決して同道を欲しなかった（同道が全く不可能であると見通される場合は別である）。しかし二日目に夫と一緒に居合わせたあるレイディーについて一言でも発したら、彼女は夫に不満を訴えるのであった。「私ども女は一夏中家から忍び出せないのです」。夫が彼女を次の機会連れ出そうとすると、大層なすべきことが出来て、漂白したり、草取りしたり、塩漬け肉樽やナプキン・プレス機をねじで締めたり、洗濯物伝票や一切のことをしなければならなくなった。あるいは次のことを口実にすることになった。「子供のそばにいるのが最もいい」と。しかし、わずかな者にしか分からない彼女の意図は単に、一度に二箇所にいること、家の中と外にいることであった。 — 我々の哲学者や夫達が、すでにカトリックの哲学者や夫達、コインブラ人、アリアガ、ベカーヌスが察知していたことをそれほど察知していないのは、我々の女性達にとって不都合なことである。即ち^{*原注 1}、同一の肉体が容易に同一の分秒に二箇所あるいは数箇所一度に座ったり、離したり、主張したりするばかりでなく、また別の町が感受していながら、またその別な町で考えていることができる — 同時に教会で笑っていながら、劇場で泣いていたりできる、ということである。

*原注 1 「彼らは請け合う、二つの場所にいる同じ肉体が、両所で完全な独立した形姿を取り得て、それでその肉体がこちらでは動き、向こうでは動かず、こちらでは温かく、向こうでは冷たく等々であり、...かくてその肉体はこちらでは死に、向こうでは生き、こちらでは肉体的であったり、精神的であったりする活動を行い、向こうではそうしないことになる、と」。ウオエティウス、『神学教義要項』、第一巻、四三二頁。ベカーヌスは『哲学的明察』で以下のように制限している、即ち、「このような肉体は — つまり一人の女性は — ある箇所で敬虔であり、同時に別の箇所で瀆神的ではあり得ない」と。これは私にも分かる。

小号外

女達は女性教皇か

この小号外の質問はすべて、敬虔な者よりは貨幣をむしろ造らせる或る尼僧院長に対してなしたものである。教皇の三重の王冠は今や、四重、五重の王冠として女性の頭上にあつて、その帽子は犬の日[盛夏]のサラダ菜のように高く伸びていないでしょうか。女性達自身すでに自分達は教皇の如く誤謬のないものであると承知していないでしょうか。ヤンセン派の人々が信じているように、教皇は歴史的事柄よりは教条的事柄において誤謬のない存在であるとすれば、女性教皇の場合、これは逆ではないでしょうか。 — 誰が、自分の結婚していない女性を論駁する勇氣を持てましょう。フェリヌス^{*原注¹}を信ずれば、教皇は神の副王であり、それどころか神自身です。しかし女性教皇は周知の女神達ではないでしょうか。 — 勿論教皇自身が、クレメンス六世のことですが、自分は天使達に、どんな輩でも、煉獄から天国へ送るよう命ずることができると言っています^{*原注²}。しかし我らの女性教皇はそのために天使を必要とするのでしょうか。我々を煉獄に送るには女性教皇は単に一週間要するだけで、我々を天国に戻すには一時間要するだけです。 — マリアヌス・ソキヌス^{*原注³}は、教皇は無から何かを造り、不正から正義を、どんな刑吏からもどのような刑吏をも造りだせると主張していますが、我らの女性教皇もそれができないとは思えもしません。女性教皇の秘密懺悔を彼は思い出せないのでしょうか。 — 誰が異端をより頻繁に破門にしたり、あるいは正統信仰の者達に赦免を与えるのでしょうか。教皇でしょうか、女性教皇でしょうか。 — そして誰が今日、高貴な尼僧院長様、より全能な目による赦免状、唇による証文を与えるのでしょうか。誰がより多くの聖人、より多くの浄福者、より多くの全権大使達を選出するのでしょうか。ペトロの後継者の方でしょうか。ペトロの女性後継者の方でしょうか。 — 教皇は以前いつでも王国を余所に贈ったり、取り上げたりしたそうです。女性教皇はこれらの王国を支配していないのでしょうか。教皇はアメリカに関しては名前の他には何も贈れなかったのです。しかし何人かの女性教皇がこの国に関して私どもに知らせてくれるものは何かもっとリアルなもの[梅毒?]ではないでしょうか。 — 以前教皇に苦しめられていた王達は、今や女性教皇のお蔭で幸せに恵まれています。教皇がせいぜい一人あるいは二、三人の国王を創ったとすれば、女性教皇達によって大抵の王座[天蓋]の下の国王達が創られることとなります。それも可愛いポケット判で、洗礼盤から次第次第に大きくなって、遂には私とかその王座ほどの背丈となります。私どもは聖列の父の上靴よりも頻繁に女性教皇の上靴に接吻しないでしょうか。パドゥヴァのモスカーティ教授によって二本の上腕は夙に前足と見なされていて、その上の革とか絹の靴[手袋]には毎週私どもの唇を押しあてているわけです。教皇と女性教皇は、王座に昇進するとき古い名前を棄てないでしょうか。教皇は高齢によって、女性教皇は若さ

*原注 1 ヨーハン・ヴォルフ、『注目すべき秘本の十六世紀』、九九四頁。

*原注 2 同。

*原注 3 同。

によってその王座を望むときの事です。 — 教皇と女性教皇は元来は単にある属州の（一人の夫の）僧正の予定であり、良きヨハンナの他には一人の女性教皇もないというのが真実であれば、私はまさにその反対のことを公然と小号外で、あるいはこっそりと、尊敬する尼僧院長様、貴女に敢えて申し上げている次第となります。

小号外の終わり

先の扇形の続き

私が尼僧院長に問い合わせている間、私は不機嫌な騎兵大尉夫人から離れていた。私か読者かが彼女と結婚したと仮定したい。すると私どもは確かに彼女の指輪指[薬指]に私どもの輝く指輪を固定したことを神に感謝することだろう。しかし私どもは日々、納得されるように、彼女と言いつくことになろう。女性的悪徳というのではなく、女性的気まぐれというものが、婚姻の臥所に多くの馬の埃や灰を撒き散らして、それでしばしば悪魔がその臥所に横たわりたいと思うにいたるの確かなことである。

多くのものを引きずってくるグスタフがいなくても、十分前に館から出発することはできなかつたことであろう。私の読者は、私が期待に反して、全く間違つて、つまり悲しげであると思ひ描いていよう。彼は自分の少年時代の大地の揺り籠から、自分のアダムの園から、自分のタベの山から別れることになるのだから、と。これは間違いである。 —

別の読者は喜んでいふことだろう。子供にとっては、まだ別の場面はすべて新しい場面であつて、旅は新しい天と新しい地の創造であるからであり、子供の空想はまだ悲哀の空想ではないからである、と。シェーラウは彼の推測ではただ長い家々の続く町に違ひなく、そこで彼は自分の妹と遊んだのであつた。その上更に — すべての子供にとって一つの帰化文書に他ならないが — 彼の絵本[玩具箱]が積み込まれた。ソロモンの支部教会における揺すられた教主としてあちこち飛ぶ椋鳥さえも突き動く膝の上に支えていた。館のどの角をも、館の中のものすべてと共に、一緒に乗り込めないことを残念に思つていた。この貝類の殻全体が彼にはとても窮屈に、使い古され、色褪せて思えた。余り旅したことのない人々は自分の部屋を旅立ちの瞬間と — 到着の瞬間 — それにその他の瞬間とで三つの異なる感情を抱いて見つめるものである。しかし[旅慣れた]イナゴの群や渡り鳥にとっては舗道や首都の通りは単に部屋と部屋の間通路に過ぎない。

すでに三十分彼はむき出しの馬車の荷箱に前もつて座つていて、荷の間に脚を突っ込み、いつ馬が最初の蹴りを入れるかそわそわ期待していた。ようやく馬車の扉が閉じられ、皆がごろごろと転がって行つた。山を下り、共有の牧草地を上がつて行つた。牧草地では、白く皮を剥かれた木があつて、これは教会堂開基祭には赤の旗やリボンの吹き流しと共に今一度大地に立てられる予定であるが、我らのグスタフの目には全く厭わしく思えた。今や彼はシェーラウの百倍もより美しい五月柱や教会堂開基祭に向かつているのだった。

— しかし彼の山の喜びでは実り多い一帯を通り過ぎて行くとき、亡くなつた午後の喪の棺台から、つまり頂上で草を食む鈴の付けられた家畜から、自分の好きでなかつた放牧助手から、自分の子羊の入れられた石組みの囲いから、子羊は今や紐も付けられず愛情も抱かれずにそこに立っていたが、そして最後に境界石から、いつもは彼の馴染みの女の子、彼の美女が座つて編み物をしていたその石から、振り返る視線をゆつくりと、憧れながら、外していった。「いや」と彼は考えた、「誰がこれから君にレモンケーキを、僕の子羊に

パンの皮を与えるのだろう。でも僕はきっと毎日君達に沢山送るつもりだ」。

生粋の十月の朝であった。霧は曇々と天の足許にあつて、飛び行く夏はその青い翼と共にまだ高く夏を担ってきた枝と花の上に漂っていて、広大な、静かに温める太陽の目と共に、夏から別れることになった人間を見守っていた。グスタフは馬車から、露に濡れて飛び行く夏を、優しく紡がれて人間生活を覆うように地球を覆ってきた夏をまとめて巻き、持って行きたい思いであった。しかし汝、人間は、しばしば悪臭を放つペストの雲、霧の雲として純粋な自然に垂れかかっている。

それというのも、彼らが乗って行ってから一時間もしないうちであつたらうか、その後彼はすでにどの村をもシェーラウと見なしていたのであつたが。…しかし私はまずそれがどこであつたか知らせよう。イッシヒの近くの森の中で彼は叫び声を上げた。「おや、そこで黒い腕が伸びてきて、僕を引き出すかもしれない」。本当に木々の間から伸びてきたように見える[道案内の]横木があるのを子供がどうして知っているのかまだ父親が不思議に思っているうちに、突然その背後で叫び声が上がった。「嗚呼、僕の目が、僕の目が」。恐怖で少年と母親が固まった。しかし騎兵大尉は馬車の中から、馬車を通して突進して行き、ガラス板を砕いて、森の中へ飛び込んだ。 — そして跪いた華奢な子供を見つけた。子供の潰された両眼から涙や液体が流れていた。「僕をいじめないで、僕はもう見えない」と子供は言つて、両手で、膝のところにあるランセットを取り払おうと、自分の周囲を探っていた。「誰がおまえにそんなことをしたんだ」と彼は極めて穏やかな声で、とても激しい同情で途切れながら言つた。しかし子供が語らないうちに、一人の老いた無残な乞食女が近寄つて来て言つた。茂みに一人の乞食の男が駆け込んで行つた。この乞食は子供の目を潰して、それで乞食をするつもりだったのだ、と。しかしその子供はもっと大きく痙攣しながら、彼の手にしがみついて言つた。「おや、この女は僕をまた傷付けるつもりだ」。騎兵大尉は悪行を察知して、手近の枝を折り取つて、やり場のない怒りに任せて、卑劣な女の顔を鞭打つて、腋に盲目の子供をかかえて、おびえている馬車の許へ駆けて来た。それは、ぼろを着た上品な顔つきと動作の、そして赤くしわくちゃの目をした、無垢の子供という心潰れる光景であつた。 —

第九扇形

体のない内蔵 — シェーラウ

嘘吐きや[トランプの]ロンブル遊びの者ばかりでなく、長編小説の読者も良い記憶力を有しなければならない。最初の十あるいは十二扇形をさながら名詞変化、動詞変化として暗記するため、これらの扇形なしには説明の点で進歩できないからである。私の場合一行も無駄なものはない。私の本と私の体には脾臓の部分が掛かっている。しかしこの内蔵の有益性はきっと間もなく解明されることだろう。 — 長編小説作家は宮廷人同様に、単に、自分の友の主人公を倒し、充電された雷雲に導くよう計らなければならないので、私は三ヵ月前から天にこちらでは消えて行く灰色の小雲、あちらでは砕ける小雲を配している。しかし私がとうとう地平線のすべての小房を人知れず帯電させたら、悪魔全体を一つの雷雲にまとめ上げることになる。 — 十四全紙の印刷の後には植字工は雷音をすでに耳にし、植字することができよう。 — 実は勿論一言も本当ではない。しかし他の

作家達は彼らの長編小説を好んで伝記と称するので、私の場合、時に私の伝記に長編小説の見せかけを配することが許されよう。

その子供は自分の来歴の代わりに自分の来歴に対する嘆きだけを話した。その子供は七歳を越えて見え、ドイツ語をイタリア語風のアクセントで話した。彼の病気がちの華奢な、薄赤い体が、その魂を包んでいた。小さな虫を淡い薔薇の花弁が中に閉じ込めている按配であった。彼の父はツォッポ博士と言い、パヴィア出身で、イタリアからドイツに植物採集に来て、途中子供達に黄色い花を摘ませたのであった。盲目のアモンドゥスはこの森で薬草も採りたかった。しかし悪魔の眼科女医が彼と出会って、彼が黄色の花を見つける加勢をし、かくて森の奥深く彼を誘い出し、彼の衣服と目を奪い取ったのであった。

グスタフは彼にまだ見えないのかとしきりに尋ねて、もう泣かないように彼に朝食のパンを贈った。そして彼の目が見開けていたので、その盲目が理解できなかった。次の地方都市でファルケンベルクは髭を剃ってもらい、アモンドゥスに包帯をさせた。私はかつてライプツィヒの直前の宿駅で一人の娘がとても魅力的に額と目にかけて斜めの帯をしているのを見たことがあり、私の妻も時々そこが傷付けられたらいい、可愛く見えるからと願ったことがある。これに対してアモンドゥスは両目の包帯のせいで嘆きの子供となっていた。

アモンドゥスはより上等の服を着て、悲しい包帯と共に馬車の中に座っていたので、グスタフは少しも泣き止むことができず、椋鳥を取りだして彼に贈ろうとした。というのは苦難の大きさではなく、その姿が同情を決めるからである。

シェーラウへ行くわずかな人は、その二時間手前で残余の人間を含まない孤独な胃に出会うという奇妙な僥倖を得るかもしれない。ファルケンベルクと、彼の家の人々、それに馬はこの僥倖を得た。胃、小腸、大腸、肝臓、ここでは侯爵達が胆汁[怒り]を沸かすのである、それに肺、その気胞は侯爵的胆嚢となるのであり、気管はその胆管となるのであるが、それに心臓とがやって来たのである。しかし死骸は一緒ではなかった。というのは死骸、シェーラウの支配の君主はすでに地下納骨所に収まっていたからである。この胃全体は彼の良心同様に沢山、即ちこの国の全フーフェ[7 - 15 ヘクタール]を消化していた。彼の鈍い頭よりもよく消化していた。この頭脳にとっては真理とか苦情は難しい料理だった。パパン風粉骨器の機械的この男は高齢になっても、すでに他のすべては子供っぽくなっていたのに、健啖であった。彼は、死の直前、何時間も、 — 自分の好きな侍従に馬乗りになっていた。それでも彼は全く分別ある者の如く、皿やグラスを、その中に昔の豊かな内容物がなかったら、押しのけていた。内臓の棺の背後では — 下半身のこの聖遺物小箱の背後では — コック長、何人かの副コック、宮廷貯蔵庫助手、それに宮廷のもっと偉大な部分 — 例えば医学参事官のフェンクが馬車で続いていた。フェンクとファルケンベルクは互いに気付かなかった。ファルケンベルクは今日全く珍しいものに出会っていた。イタリアにいるものと思っていた博士と、まだ生きていると思っていた侯爵に出会っていたのであった。このようにして金を支払わない王座の破産した内臓は、今や彼を王座の後継者との債権者争いに巻き込むことになった。

侯爵の腸の葬列はホプフ僧院へ向かった。そこはこれらの侯爵の肢体の代々の墓地で、これらの肢体は — プラトンの言葉を信ずるならば — 真の家畜で、この肢体のせいで人間は — それらを勲章の綬や革紐で縛っても、いつも地獄の苦しみを味わっている

のである。私はこの腸の小箱を三歩だけ追いかけることにしたい。例の医学参事官が今や
— どこにしようと、芝居の座敷や教会の席、旅館であれ、執筆する彼の陽気な習慣に
従って、ただ書斎では書かないのであるが、— 内臓の埋葬教会で自分のメモ帳を広げ
て、書き込んだからである。まことに次のような次第。「侯爵達は、幾多の場所で同時に
生きていたように、そのように埋葬もさせるので、私もそれに倣い— ただ次の如くし
たい。私の胃は主教教会に埋葬され— 私の肝臓はその苦い胆嚢と共に宮廷教会に—
大腸はユダヤ人礼拝所に— 肺葉は各派共同教会あるいは大学教会に— 心臓は凱
旋教会に、脾臓は支部教会に埋葬されるべきであろうと思う。しかし私が王座の下半身の
第一葬儀説教師となるのであれば、私は別の順に述べよう。私は— 弔辞の冒頭に喉を
持って来て、盲腸を末尾に持ってくることだろう。私は弔辞の三つの部分において、三つ
の凹面を通過して、体のより高貴な部分は少しだけ触れて、最後に肉体のお仕舞いの途上、
泣きながら、称えながら、逃亡することができないだろうか。この世ではこのように冗談
を言う習慣なのだから」。詩的狂気というものがある。しかしまたスターン風の諧謔的狂
気もある。しかし単に完全な趣味の読者のみが極度の緊迫さを過度の緊迫さと見なさない。
ファルケンベルクの旅の一行は夕方シェーラウに着いた。夕方は到着に最も素敵な時間
で、それ故多くの者が夕方に別世界へ到着している。グスタフは誘拐されている間そこに
いたように見える。しかし私の読者では美貌のせいでシェーラウへ誘拐された者は極めて
少なく、従って読者はその町を知らないので、第十扇形（切片）で紹介することにしよう。

第十扇形

上部シェーラウ、下部シェーラウ— ホッペディーツェル— 植物標本集— 訪
問者の咽喉炎— 侯爵のペン

ビュッシング[Büsching, 1724-93]氏の出会った不幸はまだどの地理学者、上級宗教局評
定官の経験したことがないもので、つまり彼は地形学的地図において、ヴェッテラウの伯
爵[帝国議会]席に席があつて、シェーラウという立派な伯爵領全体を見逃していたのであ
つた。これは帝国出兵分担見積もりによれば、馬で8/9、徒で9・2/3用意し、大審
院租税で21フローリン・1/19クロイツァー払うもので、— カール四世の下で侯
爵領となり— 五つの立派な領邦等族を有し、これらは勿論自由にものが言えて、行う
義務は何もなく、つまりドイツ騎士団の管区長、大学、貴族、町、村で— 住民の中
には私も含まれている領地である。私は、普段地理学的鏡を持って、どんな袋小路の中にも
這って行き、それを写し出しながら、しかしここでは五つの麻痺した領邦等族と共に全侯
爵領をすっかり飛び越してしまったこのような執筆者の代わりをしたくない。これは彼を
侮辱することになると承知しているが、世間に対してこのことを話してしまった今、彼を
助けることはできない。

首都シェーラウは本来二つの町、侯爵が居を構えている新、あるいは上部シェーラウと、
騎兵大尉が泊まっている旧、あるいは下部シェーラウから成り立っている。当方としては
夙にこう確信している、つまりザクセンハウゼンの人々はフランクフルトの人々とは旧シ
ェーラウの人々が新シェーラウの人々と調子、顔つき、食物、すべての点で際立って離れ
ていることその半分も及ばない、と。新シェーラウの人々は十分に宮廷の調子を有して、

家庭外の喜びへの作法、借金、熱中を有し、それでいてまた余りに多くの事務的調子をも（すべての最高位の地方行政官が居合わせているので）有して、いつでも硬直した服従を認めるか、要求するかし、侍従から事務局員や会計検査官に降格する。このことを旧シェーラウの人々は洞察している。これに対し、新シェーラウの人々が洞察していることは、旧シェーラウ人が次のような特徴を持っているということである。中国では会食者一同の口はピアノ連弾のときのように同時に動かなければならないし、モノキタパ[アフリカの国]では国民は皇帝のくしゃみを真似る習慣であるとすれば、はるかにもっとそのことが良く行われている旧シェーラウへ人は行ってみたい。同じ分秒にすべての露地で人々は泣き、咳をし、祈り、下剤をかけ、憎み、小便をしなければならないのである。

— 彼らの行状等は総譜のように見え、その総譜から皆が同じ作品を、ただ異なる楽器と声とで演奏するのである。 — （ただ音楽の中で若干の真の自由精神が彼らを支配しており、誰一人としてその肘やバイオリンの弓やタンジェント[打弦部]を奴隸的に隣人のそれに縛り付けていない） — 彼らは文芸を自分達同様に互いに憎んでおり — 社交的満足を欠くことも、催すことも、享受することもできず — 挑戦することも、互いに公然と憎むことも、愛することも、耐えることもできず、互いに自分達の金の山に突入し、公然と最も富める者を尊敬し、秘かに親戚の者を尊敬するか、あるいは全く誰も尊敬しない — 趣味もなく、愛国心もなく、読書もしない。 ...

しかし私は余りに奇矯なものにしている。読者は誰一人、騎兵大尉の後を一步も下部シェーラウへ追って行こうと思わないだろう。彼らの最大の欠点は何の役にも立たないことである。しかしそれ以外では彼らは勤勉で、ただの商売人で一杯で、節約して、路地や顔を可愛く掃除している。首都の町は宮廷同様に家族の類似性を有する。しかし地方の町は

— どの果汁がより多いか、商人的果汁か、軍事的、法学的、鉱山的、海員の果汁がそこに流れ込んでいるかによって、 — 異なる全面的顔や横顔を有する。

倫理学の教授のホッペディーツェルのブリッキを張った玄関の前で、ファルケンベルクの船の一行はその駆ける方舟から降りた。一行は教授の三階で冬の宿営をする習慣であった。玄関のすぐ奥で騎兵大尉は頓狂なメロドラマに出会った。即ち、箴監督官のポイシェルが壁に寄りかかって、反吐を吐き、悪態をつき、この二つを規則的にペンターメター[五歩格]とヘクサーメター[六歩格]のように交互に繰り返していた。 — 倫理学の教授はインクに浸していない指で、壁に次のような言葉の印を静かに書き付けていて、それを絶えず朗読していた。「反吐が出そうだ、全く反吐が出そうだ」。 — ファルケンベルクのような旧知の友が入ってきたら、余人なら早速この場面全体がお仕舞いになっていたことだろう。しかし教授は冗談を切り上げず、抱擁を変わらぬ調子での現在の出来事の報告で始めた。「当箴監督官殿は」とホッペディーツェルは始めた、「痛飲が好きで、つまりワイン好きで — 監督官夫人が試みても役に立たなかったのであるが」（ — というのはホッペディーツェルの唇には思いやる慎重さが見られないからである — ）「生きた蛙を彼のワインに忍び込ませて、彼を改善しようとしたのだった」。それ故自分自身が今日着手して、酒を嗜むのが嫌になるようにした。それというのも、自分は幸運にも膀胱結石を — マスカット梨大のものを — 大学の死骸から切り取ってきていたからである。自分はそれを飲用の杯にくり抜いて、ポイシェル殿にこう告げた。これは溶岩からできていると。今日自分は反吐を吐いている友に真のハンガリーのアウスブルフ[完熟]・ワ

インをこの杯で飲ませたのだ。反吐を吐きたくなり、別種のアウスブルフ[突発]に至るようになるために、自分は数分前にこの患者に明確に説明した。火山性の細長いグラスは実は膀胱結石もしくは腎石であったと。自分はこの友が尿性の陶器をしばらくは忘れて欲しくない願っている」。教授は監督官に向かって行き、是非とも、反吐が収まったら、今晚騎兵大尉殿の一行との粗飯に同席して頂きたいと申し出た。

ある種の家々によく行って見るといい。すべてが校閲され、変更され、転覆されているのを見るものである。しかしホッペディーツェル家が最もそうであった。騎兵大尉の冬の宿営はいつも冬の東屋のように見えた。繊細な感情の人間は他人のささいな困窮に一種丁寧な注目を向けることによって、他人のごく内密な願望を推し測り、自分自身の願望はいつも犠牲にすることによって、愛想によって、その絹製の編み物は偉大な善行というくつきりした愛の綱よりもより堅固に、より穏やかに我々の心の周りに巻き付くのであるが、そういうものによって魅惑する。 — ホッペディーツェルは編み物も綱も利用せず、何も問い合わせなかった。これは繊細な感情の欠如ではなく、その感情に対する不服従であって、彼は — 騎兵大尉が最初の週、宿営と大家に悪態をつくると、そのことを笑うのだった。

華奢なアマンドゥスはその夕方ずっと病床にあって、グスタフは彼の側に忍んで行って、彼と一緒に遊んだ。憎しみの世界という石だらけのアラビアにあって、子供達は何と再び我々を元気づけてくれることだろう。子供達は互いに愛して、その善良で小さな目と小さな唇と小さな手はまだ仮面を被っていない。

翌日は偶然のせいで二人の子供はまた別々になった。騎兵大尉は、町のすべての露地を、さながら画廊を通るように通って二人を案内して、最後に二人の乳兄弟と一緒に自分の友人、フェンク博士の家前で止まり、なつかしげにその家の絵画を見つめた。 — 一人の医師が中にある医療馬車を描いてあって、轅につながれた死が前方にいて、雄山羊に座った悪魔が上にいた。 — 「奴さんも」と彼は考えた、「いつかイタリアを離れて、友人を喜ばせてくれることだろう」。彼はフェンクの到来については何も知らなかったからである。「アマンドゥス、アマンドゥス。駆け上がってきて」と突然上の方で騒がしく少女が叫んだ。そして自ら跳んできて、少年を引っ張り、覗き込んだ。気のよい騎兵大尉は喜んで広い一階から子供達に従って馴染みの家へ入って行った。フェンクの帰還が確かに見えると驚いていると、飛び込んでくるドクトル自身と出会うことになった。ドクトルは抱擁を身構えている途中、幼い盲目の子供に振り返って跳び、涙し、接吻しながら包帯を外して、 — 両目を長いこと窓際で見つめて — 深く — 呼吸した後で言った。「やれやれ有り難い。盲目にはなるまい」。そして今ようやくドクトルは温かさを倍にして、両腕を友人に回した。「すまぬ、私の子供だ」。それでもまた彼はアマンドゥスを光の許に連れ出して、もっと長く子供を観察して、眉毛をつり上げて言った。「ただ強膜だけが傷付けられているように見える。女眼科医は湿った液体を取りだしてしまった。パヴィアで私は毎週、歯科医が（我々の医学上の封土従兄弟[継承縁者]だが）その目を切開して、下らぬ軟膏を塗りつけている犬に出会ったものだ。後で湿った液体と視力が自ずと蘇ったら、それは軟膏のお蔭ということだった」。

私は両友人の言葉を交わしながらの喜んだ威勢のいい奔流は無視することにする。ほとんど彼らはもはや他に聞いておらず、見ていなかった。少なくとも時計は気にしていなか

った。 — 「いや、彼らが来る」とフェンクが言った。つまり客人のことだった。 —

私の読者方は十分に分別があるので、読者方が怒りの鞭をドクトルの比喩的尻にこっそり向ける前に、私に語り尽くすのを許されるであろうと期待している。

彼ほど下部シェーラウ人の狭小さ、辛抱のなさ、小都市風を鋭く嫌っている者は誰もいなかった。彼らはそのようにして短い人生を短くし、酸っぱい人生を酸っぱいものにしていった。 — 「奴等に称えられると反吐がでる」と彼は言ったばかりでなく、また好んで自分の至純の道徳の劣等極まる調子で、皆を片端から続々と怒らせた。しかし彼は心の柔和さゆえに一般に町全体を怒らせるだけで、個人一人を怒らせることはなかった。それ故彼は到着した二日目の朝には家々を次々とインフルエンザのように襲って行って、すべての伯母、従姉妹、不倶戴天の敵、つまり愛しいキリスト教の他は何の関係もない人々、例えば筏監督官のポイシエル、富籤局長のエッケルト、その四人の遅摘みの梨[オールド・ミス]の娘達、およそ下部シェーラウで呼吸する限りの人々を皆一緒に午後へと、珍しい旅行土産、即ち植物標本へと招待し、これを見せようと思っていた。「生の植物標本ではない、全く珍しいものだ。氷河からの最良のものだ」。

この人々が今やまさに皆やって来た。 — 植物標本は皆目注目していなかった。それも見たいとは思っていたが、ついでに妻のいないドクトルの家政を見たかったからである。私はヨーロッパの諸宮廷にこう白状せざるを得ない。つまり土地の人々や伯母さん達は優美に部屋で咳をし、裾で磨き、咳払いをした、と。四人の遅摘みの梨に作法は欠けていなかったのであり、彼女達はお辞儀の代わりに沈降の片膝曲げをし、はなはだ垂直に動いた。主人のドクトルはおもむろに二月の縦長の植物標本のフォリオ判を持ち込み、親切に言った。自分は喜んですべてを披露したい、と。 — かくて彼は地獄を点火して、一行は地獄に投げ込まれた。 — 彼は青虫の足の速さ、蝸牛の粘液の速さで本と植物の頁[葉]から頁へと這って行った。 — 彼は何事も表面的には見せず — それぞれの植物の雌しべ、柱頭、ひぐさ(葯)を正確に触れて行った。 — 彼はもっと詳しく説明したら疲れさせてしまうだろうと言って、それでそれぞれの草の名前と土地、博物学を手短に述べた。

—— すべての顔が火照り、すべての背中が煮立って、すべての足指が痙攣した。 —

せめて何か生氣あるものを求めて、一人の伯母さんが、盲目のアモンドゥスを目で追いかけようとしたが無駄であった。植物通は自分がまさに称賛した新たなひぐさ(葯)に注目させた。すでに[リンネによる]第五クラス[綱]にまで一同を引っ張ってきてから、こう言った。「今晚は第十一クラスの間近に行く予定です。汗をかく甲斐はあります」。 —

このような煉獄の午後に皆がうんざりしてくると、このような類はまだシェーラウ人の体験したことのないものであったが、彼はますます上機嫌となって、皆に注目して頂けるととても燃えますと言った。 — それでも植物学の学士候補生達は頁から頁へと拷問にかけられながら、丁重でいたいと欲していた。 — しかし騎兵大尉が、冗談を解してはいたが、頭にきて、去ろうと欲した。ドクトルは言った、「二番目のフォリオ判はいずれにせよ次の時間のためにとっておかざるを得ないでしょう。またすぐにいらっしやることを願っている。今日気に入って頂けたことの証拠となりましょうから」と。二番目の拷問のフォリオ判を考えただけで — これに較べれば拷問図の付いたテレジア刑法は単に月々の銅版画の付いた懐中暦にすぎないが — 何か熱病の悪寒が走った。かくて彼らは丸半日、中傷も聞かず、物語も聞かずにいたずらに過ごすことになった。こうした中傷類が

あれば家に持ち帰ることができ、そして家からまた広めることができたことであろうに。中年のレディーがコンサートや舞踏会に出掛けるのは、見られるためでは全くなくて、見るため、そして人間愛ではないけれども人間通の促進のためにそこで観相学的断編を仕上げるためであった。 — いや彼女達は公言された不倶戴天の女性達の許も好んで訪れる。不在の一人の敵の女性について攻撃する場合で、互いに逃げ合うが、しかし一匹の別の狼を殺すためには互いに結束する狼達のようなものである。一對のシェーラウの女性が、まさに三番目の女性の極秘の不幸を打ち明けなければならないとき、互いに衷心から、純粋な友情を抱いて知らせる様を私はいつも楽しく注目してきたものである。ただ二人の女性がソファーに隣同士に座っているのではなく、互いに対面しているとき、その反対向きでないとき、私は彼女達がまさに仕掛けている当人でありたくない。

シェーラウのすべての女性達が見知らぬレディーを
目撃した際に陥る
訪問の咽喉炎についての特別行

同所では見知らぬ女性を目撃しても男性達にはさほど害はない。ただすべての理髪師や床屋がいつもより遅く現れるだけである。ビリヤードではキューとか煙草のパイプがその形姿を空中に描き、立派なギムナジウムの教師達は全くそのことに聞き耳を立てない — これに対して女達ときたら。

聖キルダ島[スコットランド北部]では、一人の異邦人が船から降りると一つの不幸が起きて、これはまだ哲学者には説明できなかつたのであるが — 島全体が彼のせいで咳をするそうである。^{*原注 1}すべての村人、すべての団体、すべての年齢の者が咳をし — その乗客が何かを飼うと、生産階級が彼を咳で囲み、 — 門のところでは軍人階級がそうし、教師階級は教えるとき咳き込む。医者のところに行っても何の役にも立たない。 — 医者自身が患者よりもひどく吠えて、自ら患者となる。...

下部シェーラウでも同じ災難が見られるが、しかしもっとひどい。或る見知らぬレディーがその可愛い足を郵便局、コンサート・ホール、舞踏会場、どこかの応接室に踏み入れるとする。早速すべてのシェーラウの女性達が咳をせざるを得なくなる。 — いつも咽喉がひどくなるせいで — より小声で話さざるを得ず — 皆が咽喉炎、即ち *angina vera* に罹患する。哀れなレディー達の許では極めて有害な咽喉炎症のすべての徴候が生じ、熱（それ故扇が必要となり）、悪寒、呼吸困難、幻覚、膨張した鼻翼、隆起する胸が生ずる。冷やす薬、水とか気管の通気が女性患者達には最良の効果をもたらす。しかし（天の逆意のあらんことを）入ってくる未知の女性が、最も美しく — 最も謙虚で — 最も裕福で — 最も尊敬され — 最も祝福され — 最も趣味が良い — となれば病院で苦しんでいる女性は誰一人治らない。このような天使は真の死の天使であり、市門では功績ある見知らぬ女性はただの一人も到来を許すべきではなからう。

訪問の咽喉炎は他のすべての咽喉炎同様に秋や冬の冬期の行楽や客人の間で最も蔓延す

*原注 1 母胎の子供さえそうなる。『一般ドイツ文庫』、第六十七巻、一三八頁。

る。 — この咽喉炎を機知あるいは分別は二つの理由に根拠付けている。第一は外的理由あるいは殻の所為（内的理由では決してない）である。それでウンツァーも、甲殻類は咽喉に最も効く、それ故例えば牡蠣は重傷の嚥下障害に、煨焼されたザリガニは恐水症に、ザリガニの湯気は啞に、サソリは舌麻痺に効くと信じている。 — 第二の理由は、町のレディー達は一つの絶縁体に住んでいるようなもので、それで一人の見知らぬ女性が、つまり彼女達とは[動物磁気の]感応に陥っていなかった女性が、操作された透視者達と接触すると、あるいは単に遠くから彼女達と関係することになっただけでも、彼女達はすべての肢体にただ憎たらしい情感を感じるのである。

特別行の終わり

去って行くシェーラウの女性達にフェンクは植物学的礼拝の後、更に祭壇の祝福たるニュースを持たせて帰宅させた。その際彼女達自身に[十字を切る]受難の判断は任せた。「御覧頂いた二人の子供、息子と娘は旅の馬車が揺り駕籠代わりであった。しかし自分は現在医学参事官を含めペスト看護人となった。しかし単に女性だけを治療しようと思う。時が経ったら一人の女性と結婚しよう、切にお願い申し上げる」。 —

下部シェーラウの人々が、同時に甘美に、酸っぱく、そして奇矯に見える何事かに触れると、彼らはまず耳を傾ける — それから微笑み — それから沈思し — それからそれに納得せず — それから三日後に何か良きことでないことを推測し — そして最後にそのことにまことに激昂する。フェンクはそのことについて何も尋ねず、時々彼らの理解できないこと、あるいは彼自身理解できないことを言う。

それから彼は騎兵大尉にすべてを説明し、私は読者に説明した。貼り付けられた植物のお蔭で、今からはすべての伯母さんや阿呆や訪問蟻が自分の書齋から遠ざかることになる、麻を周りに植えると青虫が野菜畑に来ないようにするものである、と彼は言った。 — そして自分の旅行の話やその話の若干の謎を半分だけ紹介している。まだ何かを察したいと思う人間に対して最も人々は関心を抱くからであり、好奇心を抱く女性患者は自分の患者となってくれるであろう。 — 自分が結婚しているかどうか、自分自身は知らない。他の者達にも知らせたくない。娘達の在庫を抱えているすべての家が彼を医者として呼び寄せ、新郎としてまた出て行くようにすることだろうから。結局自分が女性患者を受け入れているのは、女性は最も頻繁に患者となるからであり、自分が女性専門に臨床すると自分は特別な信頼を得るであろうからであり、この信頼こそが婦人科医の全薬局方であるからであり、大抵の女性の病気は単に神経の衰弱にあり、その治療全体は — 薬を控えることにあるからであり、薬局というものは単に男性のためにのみあり、女性のためには必要ないのであり、自分は女性を崇拜するのと同様好んで治療したいからである、と。

彼が何故かくも急いでシェーラウに帰り、かくも速やかに医学参事官となったのかの別の点はこういう次第であった。現在高位の王座の御者席にいて、国家の馬車と共に悪魔の許に進んでいる後継皇子は誰も愛していないのである。彼は旅の途次自分の愛人を嘲っていた。彼の友情は単に憎悪のより低い段階であり、彼の無関心は憎悪のより大きな段階である。しかし胸焼けのように彼を嚙んでいる最大の憎悪の段階は、彼の庶出の兄弟、フォン・オットマル大尉に向けられていた。大尉はフェンクの友人で、大尉はローマの最も美しい自然のままの自然と芸術的自然の中にあって、ローマの一带や古代を享受し、模倣す

るのに夢中になっていた。オットマルは良い意味でも悪い意味でも一人の天才に見えた。彼と後継皇太子は互いにほとんど控えの間では我慢ならず、しばしば決闘寸前であった。さてこのシェーラウの大侯爵は哀れなフェンクも憎んでいた。第一にフェンクは彼の敵[オットマル]の友人であるからであり、第二にフェンクは後継支配者の三番目の兄弟の命を一度救い、それ故王族年金を再び支給するようにしたからであり、第三に侯爵というものは、誰かを愛するためよりも憎むためにははるかに少ない理由を有する（あるいは全く有しない）からであった。 —

さてドクトルはすでに先の統治下で、その統治者の胃と我々は出会ったわけであるが、喜んで医学参事官となっていたことであろう。将来の統治下では、その統治者の胃はまだイタリアで充足していたわけであるが、見込みがほとんどなかった。そこでドクトルは新たな戴冠の数週間前に自分の幸運を確実に根付かせたいと試みた。彼は自分のパトロンである老大臣をまだ見いだしたが、老大臣のパトロンとして後継皇太子は次の理由でほとんど期待できなかった。つまり後継皇太子が通常信じている理由で、自分達は亡き父親の被造物を野蛮な民族同様に、ただこの民族より、より繊細に、より緩慢に、大地の下に連れ込まなければならないというもので、野蛮な民族は国王の火葬の薪の上にその寵臣達や従者達も置くのである。フェンクが到着したとき、亡き支配者は彼の成りたい者に彼をしてくれた。というのは次のような次第であったからである。

亡き領土の父親は生理学的意味で領土の子供といった者になっていたもので、即ち、かつて自分がそうであった年齢と同じほどに、人々が歩行紐の代わりに最初の勲章の綬をかけてくれたとき、つまり六歳半になっていたもので、侯爵は自分の内閣勅書の永遠の署名が余りにきついもの、結局は不可能なものになっていたのである。 — 彼がもはや書けなくなったとき、それでも彼はまだ支配しなければならなかったもので、宮廷の印章彫刻者が彼の勅令の名前を立派に石に彫り込んだので、彼はその印章を単に浸して、勅令の下に捺印すればいいだけであった。すると彼は勅令を眼前に有することになった。このようにして彼は十五%ほど楽に支配した。 — しかし大臣は百%楽になった。大臣は結局、弱った侯爵から押印の難しい操作さえも奪うために、立派な印章を（彼はそれをミケランジェロの印章よりも大事に思って）感謝の念から自ら自分のインク壺にひたした。かくて老侯爵は自分自身の死後、二、三回様々な任命や訓令の署名をすることになった。 — しかしこの人間達の浮き彫り刀、打印器は最良の統治官僚の放卵器、父親となって、結局ペスト看護人を産卵した。

支配者の親指についての特別エッセイ

王冠ではなく、インク壺が侯爵や騎士修道会総会長、同管区長の頭を圧している。王笏ではなく、ペンを彼らは苦勞して操っている。王笏ではただ命ずるだけであるが、しかしペンでは命じられたことを署名しなければならない。難儀な王座の執筆者が、ローマの新兵のように、親指を切断して、単に永遠の名前描写から解放されること、新兵が戦争から解放されるような具合にするとしても、枢密顧問官は驚かないことだろう。しかし支配し、執筆する頭目達は親指を保持している。彼らには、国の安寧は彼らのペン浸しを欲していると分かっている。 — 内閣指令からのわずかに読み難いもの、つまり人々が彼らの名

前と呼んでいるもの、これが魔法の呪文のように、金庫や、心、市門、商店、港を開閉するものである。彼らのペンの黒い滴りは平地全体を肥やし、芽生えさせ、あるいは腐食し壊す。ホッペディーツェル教授は、シェーラウ皇子の倫理の第一教師であったので、良い考えを思い付いた。もっとも最後の月にようやく思い付いたのであったが。即ち、宮内省調度局長は下級家庭教師に命じて、王座の ABC 初学者に、この初学者はいつかは書き方を習わなければならないので、無益な授封状の代わりに、むしろそれぞれの空白の全紙の中に自分の名前を殴り書きするようにさせたらどうかという考えである。 — その子供は反吐することなく、およそ自分の統治全体で必要とされる限りの多くの全紙に署名を記すことになる。 — その全紙は子供の戴冠まで取っておくと良い。 — それから、と教授は続けた、どれほど頻繁に — 或る団体は年ごとにその名前を要するか正確に見積もられたら、それ故新年に、署名された紙が何連一年全体で使用されるか、その数に従ってその団体に分配されたら、その後その子供は統治下で何を必要とする必要があるか、と。

特別エッセイの終わり

更に一言述べると、九週間後に植物標本の復讐が、どんなに良き人間にもごく些細な復讐が見られるように、ドクトルをまた見舞った。「植物標本には」と彼は言った、「貼り付けるたびに腹が立つ。しかし次のことは確かな真実であろう、男子はたとえすべての首都を謙虚に通過しても、自分の里の町の門の下では高慢の悪魔が自分の中へ入り込んで、自分と一緒に最初の訪問をなしてしまう。 — 善良なる国の人々は、自分の旅の間に理性的になったそうだし、そう願う」と。

第十一扇形

アマンドゥスの目 — 目隠し遊び

大人達を最初の十五分結び付ける同情は、子供達をもしばしば結び合わせる。我らのペアは日に互いに四十回以上抱擁し、抱き合った。良き子供達よ。君達は君達の愛を手紙でよりももっと強く表現することが許されていることを喜び給え。というのは文化というものが愛の表現に体の祈りをますます小さく切って見せるからである。 — この瘦せた女家庭教師[文化]はまず我々の愛する者の肉体全体を取り去る。 — それから手を奪い、我々はもはや握手できず — それからボタンや肩を奪い、我々はもはや触れてはならず — ある女性全体の中で接吻のために我々に残してくれるものはペリット[不消化の羽]のような手袋でしかない。 — 我々は皆互いに今や遠方から駆け引きする。 — アマンドゥスはそのむしろ女性的心と共にグスタフのむしろ男性的心にすべての愛を抱いて寄り添っていた。この愛は弱い者が強い者から奪うよりも、弱い者が強い者に一層豊かに与えるものである。それ故女性は男性をより純粋に愛する。女性は男性の中で自分の心の現在の対象を愛する。男性は女性の中でしばしば自分の空想の形成物を愛する。それ故男性の動揺が生じている。この前口上は我々の幼いカストルとポルックスの間の単にささやかな諍いの上陸場となる予定のものである。

つまり彼らは目の包帯が外されたり、結ばれたりするとき離れていることを嫌がっていた。包帯が外されると、グスタフは彼の前に立って、僕を見てくれと強く要求して、自分

の指を自分の鼻に当てて言った。「今僕はどこを指している」。しかし彼が盲人を試験したところ見えていなかった。一週間不在の後、アマンドゥスは彼に突進してきた。「僕の包帯を上を外して」と彼は言った、「きっと僕は君を見ることができよう、僕の猫のハイソックスのように」。グスタフが包帯を緩めて、本当に手術した友人の目を、自分の姿全体で、すべてで調べると、上着や靴、靴下で調べると、自分の侯爵が目を開け、あるいは包帯を外して、自分を見てくれている愛国者以上に、彼は喜んだ。彼は自分の目の前のすべての像の陳列室をその作品ごとに永遠に「御覧」と言って調査した。しかし更に続けよう。世間ではほとんど知られていないことだが — 世間の小さな小片、つまりまさに私が話そうと思っている子供達を除いて、知られていないことだが、 — 子供達はホッペディーツェルの許で目隠し遊びをしたのだった。致命的遊びである。その際この場合のように少女達がいる、殊に教授の娘達のようにひどい少女達の場合はそうである。アマンドゥスは遊びに加わって、女性の策で彼の目の前で結ばれたハンカチと共に部屋の中を走り回って、空の衣装を掴むだけであった。不幸なことに少女達はストーブの下で、その下に忍び込むことは遊びの決まりに違反することであったが、スピッツの牛乳の一杯入った鉢にぶつかって。少女達は当時倫理的哲学者達の本を読むことは余りに少なかったため、この哲学者達そのものは十分に目にしていたのであるが、それで少女達は、純粹実践理性の欠如から、こっそり鉢を遠くへ押し出した。かくて捕まえようとしている捕吏は造作なく踏み込んで、転倒した。子供のグスタフは少し笑わざるを得なかった。罪の少女達はそれを彼のせいにして叫んだ。「あなたときたら、アマンドゥスが不幸な目に遭ったというのに」。アマンドゥスは濡れた破片からすくと立つと、彼を両手で慰めながら導いているグスタフの肩甲骨を少しばかり背後から叩いた。肩甲骨は乳糜の概要に従うと血と混じり合うところである。「僕が置いたのではない」と彼は言った。 — 「それはそうだが、何も言ってくれなかった」と盲人は答えて、彼をまた押した、もっと激しく押したが、しかし怒りは先より少なかった。 — 「ずっと叩いてくれ、君のために何もしなかった」、そして私の良き主人公の声が途切れた。 — アマンドゥスはまた背後から打って、言った。「僕もまた君に良いことをしてこなかった」。 — しかしすぐにも泣き始めそうな按配であった。「破片が突き刺さったのではないか」とグスタフは同情一杯の声で尋ねた。 — 新たに突こうとして薄い氷の表面[冷酷]はアマンドゥスの温かい心から滑り落ちた。彼は無実の少年を抱擁して、きらきらした涙を流しながら言った。「君が悪さをしたのではない。君に僕の玩具をすべてあげよう。僕をぶちのめしてくれ」。そして自らを叩いた。 — 一 — ただ愛の感情のみがこのように苦く甘美な奇妙なものと戦う。アマンドゥスはたびたび告白した。今でも自分は、自分が誰かに不正なことをしたら、そのことで悩んでいる最中に、侮辱し続ける傾向があって、自ら更に悩み続けて、最後には痛みの余り、この上なく熱い愛に駆られて傷付けられた他人の心の許に身を投げ出さざるを得なくなるのだ、と。愛するアマンドゥスよ。まさに一人の教育者が倫理の形となってドアを開けてくれたらいいのだが。

私がここですべての家庭教師に対して個人的恨みを晴らそうとしていると思われるのは心外である。というのは第一に私は全く家庭教師に習ったことがないのであり、第二に私自身が家庭教師で、正真正銘の家庭教師であったからである。

第十二扇形

コンサート 一 主人公は作法ある家庭教師を得る

私は新たな章を設けた。私はここで読者に新たな人物を紹介しなければならないからで
一 私の主人公の家庭教師である。

私はここで誰にも次のことを思い出させる必要はないだろうが、騎兵大尉は家庭教師と
いうような、馬鹿げた、あるときは余りに従順な、あるときは余りに気取った、道徳ぶっ
た、度胸のない奴をシェーラウで求めていた。自分の子供が領地を得るときと同じときに
一人の支配者を得るように[支配者となるように]するためである。さて彼は、弁護士の仕
事をし、音楽家であり、冗談を言い、やぶにらみの、作法を有する代子を有していたが、
しかしこの代子に学童として一人の男児を預かる学舎で教職を依頼する勇気がなかった。
私自身がこの代子で、この新しい人物であるとただ敢えて申し上げることにしよう。私が
多くの自己称賛を述べなければならない一扇形で一人称から三人称に変わり、単に代子と
言い、私と言わないとすれば、私の謙虚さにもっと適うことであろう。

この代子は下部シェーラウのコンサートでフルートを吹いた。フルートでとても若いフ
ォン・レーパー嬢の天球の声に和するため、この令嬢の喉はしばしばフルートの音と区
別がつかないものであった。この娘の魂全体が花の枝の下の小夜啼鳥の調べとなっている。
この令嬢の体は落下する天上的に純な雪片で、ただエーテルの中でのみ姿を見せ、大地の
糞土では散ってしまうのである。休止の間フルート奏者の目と心に留まったのは一人の美
しい、空想する観察に耽っている子供であった。グスタフであった。伴奏の後最初探した
のはその子供の縁戚で、その子供の保護者を知るためであった。一 代子が行った最初
の一步は、別の代父[子]、騎兵大尉に対してで、私と大尉との友情は十分に知られている。
男性は女性よりも一層幸福で、一層嫉妬が少ない。男性は二種の美を、つまり男性の美と
女性の美とを魂全体で理解することができるからである。これに対して女性は大抵異性の
美を愛するだけである。しかし私はひよっとしたら崇高な男性の美に対して、詩的陶醉に
対するのと同様に余りに多く熱中しているかもしれない。もっとも私は少なくとも詩的陶
酔そのものは有しないけれども。グスタフは私に二重の魔法をかけた。私はこの魔法者の
せいでコンサートの魅惑魔法のすべての女性達を忘れた。しかし私はこの美しいものに対
して言葉より視線で取り入るしかないという点で仕舞に悲しい思いがした。コンサートで
は私は他の聴衆同様に、いずれにせよ、自分自身が協同者であるか、私の教え子の女性達
の一人が演奏しているときに限り注目するだけであった。というのはシェーラウのコンサ
ートは単に音楽に置き換えられた町の会話、散文的なメロドラマであって、そのとき聴衆
の椅子席での語りは印刷されたテキストのように楽曲の中で跳ねるのである。ちなみに我
々は我々自身よりも我々の子供のせいでコンサートに対する署名をする。音楽を学ぶ学童
はコンサートで自分達の指の舞踏会場、遊び場を得て、私の芸術的教理受講者のうち毎週
少なくとも一人はグランド・ピアノを叩く。私は両親達にそれを焚きつけて、こう言う。
このようなコンサート・ホールでは子供達は拍子というものを学ぶ。そこでは十分に拍子
があるばかりでなく、過剰にあるからである。そこでは音楽の下級官吏は皆、自分自身の
独自の拍子を吹き、叩き、弦を弾き、足で踏むことになり、それをまず自分の横の誰一人
として合わせて吹き、叩き、弦を弾き、足で踏むことをせず、次に本人自身が刻々と改善

するのである。「そういうことがないとしても」私は言う、「それでも真に音楽的な表現が過剰に見られます。誰もがそこでは自分の情感を、当惑の情感や硬直の情感を楽器で表現します。不協和音は強く、協和音は弱く演奏するというバッハの規則はホールでは誰もが承知していて、協和音はとても穏やかに溶け入ってしまうので、人々はほとんど協和音が聞こえず、単に不協和音の音のみが聞こえると言います」。

翌朝私は調髪しないまま騎兵大尉の許に飛んで行った。 — 私は立派な男の子を易々と求められなかったので — 彼の旅の第一目標にすっかり話を持っていった。つまり家庭教師を得るという目標である。私は、伝記作者となるために家庭教師となって、即ち抜け目なく私のグスタフに一切を教え込んで教育し、それをまた本の中へ引き出して書こうと考えたと人々は考える必要はない。というのは私はまず第一に長編小説工場主のように単にそれを考案して他人に嘘の公表をすればいいのであり、第二に当時伝記のことは全く考えていなかったのである。

私のシェーラウでの状況を周知させることは、私にとってより、世間にとって大事なことである。私は自分の状況はすでに知っているからである。しかし世間は知らない。私はそこで人物の三位一体を形成していた。私はピアノ教師であり、弁護士であり、紳士である。三つの道化の配役。 — 私は以前最も偉大な法学者達と現今では最小の犬どもを供している町、ボローニャで専攻した。先の二つは全く対照的な供給物で、パリが以前はすべてのヨーロッパの神学者達の大学であったが、現今は哲学者達の大学であるようなものである。パリには私もいたことがあって、そこでも私は有能な国会弁護士となれたことだろう。しかし私はそれを欲せず、そこから持参したものは（ボローニャと若干のドイツの帝国都市産のもの同様に）黒い法服だけであった。その法服には次の根拠がある。というのは我々の依頼人は我々を養い、我々に支払い、金よりももっと権利と困窮を得ているので、我々パトロン[弁護士]は彼らを悼んで、黒い喪服を着ているのである。これに対してローマ人達は、出すよりも得ることが多かった依頼人達が、パトロンのために、パトロンがひどいことになったとき、喪服を着たのであった。

第二に私はピアノ教師であった。しかしひょっとしたら冷静な教師ではなかったかもしれない。というのは私は最初の三ヶ月すべての私の教え子の女性達に（男子は御免であった）惚れ込んだのであり、レッスンの後は私の情緒に従っていたからである。私はまことに懇ろな気持ちをまずは地位ある身分のレディーに対して抱いていて、その方を危険にさらす気はない。 — 次にその方の妹、或る尼僧院長に対して抱いていた。私の許で通奏低音を学んでいたからで、 — 第三に某女に対して、 — 第四に宮廷牧師夫人に対してで、彼女は確かに消耗性疾患であるが、しかし趣味が良くて、ピアノの許に（ピアノを弾くときではないが）飾りが余りに少ないというよりは余りに多いきらいがあって、それを極めて美しく蠟塗りし、重ね、陳列した。 — 第五はフォン・ブーゼ弁理公使夫人であって、彼女は音楽は何も理解していないのであるが、その腰と魅力に私は全く賛嘆の余り愚かになっていた。しかし幸い彼女の誰にでも対する媚態と彼女の匿名の愛人に対する不実を感知するに至ったのであった。 — 第六は全シェーラウの宮廷で、そこで私は死手の権利[後継者のいない家臣に対する領主の権利]に従って、生きた手の接見を、つまり私の女子生徒達の一人になりたいと思っていた生きた手の接見を心と財産全体に対する司教職叙任と見なしたのであった。 — 第七は何と本当の子供に対してで、ベアータ（上

述のフォン・レーパーの娘)で、彼女のために私は毎週一回劣等な天気でも、同様に劣等な報酬でも、田舎に赴いて、彼女の許では愛の他は全く何も考えられないのであった。

一 要するにすべての者、木々の芽、花の蕾、花、果実に対して、ピアノ教師という人間は惚れ込むのである。

さて紳士の番である。私は確かに私の読者方に（読者に関して多くの国民、より正確な[人口]一覧を願うものであるが）、個人的に姿を見せることはできない。しかしこの紙面を見るシェーラウの人々にここで要求したいが、宮廷世界で毎日三つのピアノのレッスンを行う一人の男は宮廷世界の教え子というよりは教師と言えないか、自分達の考えを述べ、判断して欲しいのである。礼儀作法、歩き方、趣味のいい服、態度、垂直な、水平な、斜めの態度というのは確かに著者に要求されている長所ではないが、上品な社交人の長所であり、印刷され得るものではない。しかし私はただ大いに弁護することにする。ただ宮廷でのみそれは学び得るのであって、殊に若干の勢力の許である。ロンブルの卓であれ、ピアノ兼用卓^{*原注1}であれ、協奏するときのことで、この兼用卓では、宮廷の幾多の胸同様に、黙した木板の下に優しい弦楽器を隠しているのである。勿論また自分の書齋をあちこち歩いて、偉大な書籍や偉大な男達の許、共和主義的過去全体に随伴されて、墓の背後の無限の世界という深い眺望へと起こされているとき、その持ち主自らが自分の貝類の長所を軽視するものである。彼は自問する。自分の肉体に対して（情熱に対する代わりに）それを意のままにし、肉体を最初の三杯のシャンパン酒の後のように、易々と持ち運び、

一 その作法を一般的な作法に合わせ、というのは宮廷やピアノでは鍵を勝手に次々と鳴らしていくことは御法度であるからで

一 女性の気分という薄く上下に揺れる枝の上を飛ぶように急いで、我々の歩調をその揺れにただ合わせ

一 美しく踊り、歩み、一本の長い脚でできる限りのことをして（というのは勿論ピアノ教師が一方の短い足と格闘しなければならないとき、両脚上には悪魔がダルトワ皇子のように可愛く立つかもしれないからで）、

一 要するにすべての分別を道化に昇華し、すべての真実を洒落に、すべての力の感情をパントマイムの猿真似にする、そうしたすべてのことよりもましなことはないのか、と。

一一 書齋を動き回る男は尋ねる、ましなことはないのか、と。

一 何かましなことがある。グスタフのような天上的な子供の許、アウエンタールで家庭教師となること、そしてすべての大騒ぎを印刷させることである。 一

第十三扇形

悪漢達の国喪 一 シェーラウの侯爵 一 侯爵の負債

騎兵大尉が支払ってくれるのを待っていた皇太子は、まだ外国の舗装道路にいて、そこから王座に、塔に登るように目指して進んでいた。三人の哀れな悪漢達が皇太子よりも早く侵入してきた。次のような話になろう。至高の浄福者の死以来、

一 教皇は最高の浄福者であるが

一 シェーラウの教会では次々に盗み尽くされたわけではなくても、衣類が剥ぎ取られた。教会の盗賊は我々の演壇や祭壇がまとっていた国喪の布だけをまた剥き

*原注 1 テーブルの形で隠されているピアノのことである。

取った。教会雇い人や楽長は毎朝頭皮を剥がれた聖所を目にすることになった、牧師はそこで早朝礼拝をしなければならなかった。さて最近金の禿鷹の商業代理人のレーパーが、マウセンバッハ教会の祭壇と演壇を贖罪日に黒い布の礼装で — 多彩なものは十分に神聖で安いとは言えないので — 覆われるようにさせたのであった。この黒い箱がそこに国喪として残った。然るに老レーパーは余り眠れなかった。教会の禿鷹がマウセンバッハの祭壇から礼装を抜き取って、銀と絹の活字で、誰がこうしたすべてを贈ったか述べている布に縫い込まれた債権証書を持ち去るのではないかと心配したからである。彼の領主裁判所長のコルプは、彼にとって盗人を捕らえることは黒テンを捕らえることや真珠採りに等しいことであるが、それ故教会にあらゆる鷹の目を配置した。ファルケンベルクの従者のロービッシュが日曜日の夕方、教会が閉まってから、学校教師にこう告げなかったら、やはりどうしようもなかったかもしれない。「参詣人を入れる役目で、その数を数えたのだ、三人が出てこなかった」。すぐに神殿は夜更けまでブロックされた。そして — 幸い三人の隠れていた布の海賊どもが敬虔の場から出て来た。朝皆が驚いた、三人のこの教会参詣人は干し草馬車でシェーラウの市門まで進み、全員黒い上着とズボンを着用していた — 夕方彼らは消えた。宮廷にとって（宮廷がまだ眠っていなかったのであれば）盗賊の一味が同じように宮廷喪の服装をして、そのために教会から喪の衣装室を盗んだというのは面白くない眺望であった。

「おまえを吊すべきだろうな」と騎兵大尉は自分の従者に言った、「哀れな盗人達を不幸な目に遭わせてしまって、奴等は人間から何かを盗んだのではなく、単に教会から盗んだのだ」。 — 「しかしこのようなならず者にとって」（と私は言った）「宮廷喪は必要ないでしょう。すでに費用の面で必要ありません。何故そもそも人々は自分の実父のことを^{*原注1}悼むことが許されないのに、国父のことは多分に許されるのでしょうか。 — あるいは何故官房は領民にまだ哀泣を許しているのでしょうか。泣くと国家の涙腺が尽きてしまうし、まだ涙には税がかかっていないのです」。 —

「話が広すぎる」と騎兵大尉は言った、「現今の統治は、先のすべての統治とは入念さで際立つべきであれば、つまり我々の喪章とか、我々のすべての小銭、鼓動についての監視の入念さが大事であれば、統治はまさに今まで通りでなければなりません」。

「奴隷商達は」（とドクトルは言った、しかし十分に場違いなものであった）「それ以上に監視しています。というのは奴隷商達はこのような一個の人間あるいは奴隷の不調には自分の妻の不調以上に気を遣っています。その人間的な家畜は運動や舞踏さえできるべきで、叩いてでもそうさせます」。

「農耕や」（と彼は続けた）「取引、工場、民の富、民の安寧すら、要するに家臣達の物体に関しては、どんな最悪の専制君主でも高め養うことができます。 — しかし彼らの魂のためには、自分の魂に反する一切のことをせずには、何もできません」。

私はしばしばこう考えたことがある。つまり、喪の規定、喪の派遣を、抜け目ない服喪の国民が国喪の許可を利用し、その家庭内の喪を国喪と一緒にするよう定められないかというものである。国民は自分の叔母とか従兄弟の死去についての個別の哀悼を一般的な哀

*原注1 シェーラウでは当時、他の若干の国々同様に家臣達にはすべての喪が禁じられていた。

悼の日まで引き延ばして、国がその哀悼の喪章を腕や剣に巻き付けるようなとき、すべてを十把一絡げに涙して流し、国母と継母に対する同じ喪章の背後で哀悼できないだろうか。宮廷にとっては容易なことであろう。いや宮廷は国喪のとき一族を前もって悼むことさえできないだろうか。そもそもすべての阿呆なことを中止できないだろうか。 —

私の新しい領主はようやく旅行馬車から王座へ昇り、馬車の蔽いを王座の天蓋と代えた。騎兵大尉は戴冠の前に請願書を準備して、馬具師のように反抗的に自分の金を要求した。戴冠の後、侯爵はダイヤモンドのように多くの炎の輝きをその王冠と王笏から飲み込むので、その債権者は領主裁判所長に新たな請願書を作らせて、ただ利子だけを求めた。しかし何も得られず、決定さえ得られなかったので、もっと要求しようと思った。というのはシェーラウの我らの支配の雇用主がめったにしか金を有しないとは考えられなかったからである。我々が特別大使を得たり、送ったりするとき、我々が洗礼や埋葬をさせたりするとき、戦争はいうまでもないが、我々はほとんど、あるいはただ — 特別税しか有しない、つまり脆弱な王座のこの金属の支え、鍔[かすがい]しか有しない。官房の金庫では、紋章学と同じで、銀は空いた空間で暗示される。

しかし借財者と債権者は間もなく救助された。債権者の騎兵大尉は案内者としてグスタフと一緒に士官学校の中を進み、すべてを見せ、すべてを称えた。グスタフがその頭部と共にいつか鎧の胸当てに収まって欲しいと思ったからであるが、— そのとき若い侯爵も到着し、すべての部屋も視察したが、すべてをまた次の鞍に乗ったとき忘れるためではなく、全く何にも注目しないためであった。残念なことに — というのは私も居合わせたからで、— どの教授もこう確信したのであった。君主は、自分の頭の髪の毛一本一本ではなくても、自分の鬢の巻き毛の数はすべて数えている、と。というのは君主は私すら、私の作法すら目に留めなかったからである。しかし全く当然なことで、君主にとってこのような作法はあらゆる国々のごく上品な広間ですでに何か古いものになっていたからである。彼は — というのは旅から帰国して長いこと経っていなかったから — 侯爵の帽子をレディーの帽子の自然さで着用していた。長い統治で王冠を押し付けられて陰鬱になっているのではなかった。真っ直ぐな人間達が、彼の目の湿り気や表皮の媒質の中で折れて曲がった徒刑囚とはなっていなかった。彼は彼の言葉を世慣れた紳士の気前の良さで嗅ぎ煙草のように差し出していた。最後にファルケンベルクも — 掴み得た。私は私の両上司が対峙している様がまだ目に浮かぶ。 — 私の貴族の、貸し出している上司は、兵士らしい決然たる、しかし従順な作法と共に、肥満して、溢れ出る筋肉の中に押し込まれ、気の良い人間がまさに自分達の話し相手の誰に対しても抱く信じやすい好意を浮かべていて、— しかし王座の破産した上司は絵画的作法で、その際どの肢体も他の肢体にお辞儀をして、姿勢そのものが絶えざるお世辞であって、弛緩した顔の中に幾重もの皺が見られ、拒絶するのでも首肯するのでもない愛想を浮かべている。私の代父は王冠保持者の一般的愛想を自分にだけ向けられている愛想と見なした。侯爵が質問をするのは答えを得るためであろうと考えていた。そして恵み深い侯爵にして領主がこう述べたとき、つまり「若いグスタフは彼の代わりにここに残って欲しい。この少年は、説明し難いほど一層その夢想家の雰囲気強く関心を惹く。少年がこれらの部屋に相応しいほどの背丈になれば、父上に1, 3000 帝国ターラーの手付け金で貰い受けてもいい」とまで述べると、騎兵大尉は我を忘れた。あるいはむしろ自分の依頼を忘れた。彼の請願書は感謝の辞となった。彼は

私がきつと八年間彼の許で家庭教師となってくれることを願い、金が後払いされることを期待した。真の利点は、息子が最良のドイツの士官学校に入るであろうことであつた。

彼が笑いものにされることは私の望まぬことである。勿論彼は自分の館でこう誓っていた。「宮廷の者達には少しも信じていない。皆大嫌いだ」。しかし自分がまさに付き合うことになるこうした宮廷人に対してはもっと信用していた。 — しかし法に対する軍人的無知が彼の場合その責の多くを占めていた。侯爵という者は支払いの責務がないことを兵士の彼がどうして知り得よう。 — ひょっとしたら必ずしもすべての読者に、そう主張するほどには知られていないのかもしれない。支配者という者は三つの理由から一文も支払う必要はない。支配者が領民から借りた金のことで（その父親が借りたのであれば、そのことは自ずと分かることだろう）。第一に、第一等のランクの大使であれ、あるいは第三等のランクの大使であれ、その大使は、借金を賠償しようとするれば、最古の公法学者達の説を侮辱することになる。つまり支配者の単なる代理人で、模刻の硫黄製品の彼は、原物から離れる諸権利を有せず、従って支払いはなされないのである。第二に、侯爵は — さもないと我々は大学の午後の授業を一言も信じてはならないことになるが — 国家の真の総体的概念、かつ代表者であり（使節がまたこの代表者の代表者であり、あるいは小国におけるポータブルの国家であるように）、従って彼に一クロイツァー貸すすべての国家の部分を、あたかも自分が部分そのものであるかのように代弁するものである。従って、このような自分の代表する自我に属する部分が彼に貸すとき、彼は根本的には自分自身に貸していることになる。よろしい、と人々はそれを認める。しかしそれならば次のことも認めなければならない。即ち、侯爵たる者が自分自身の領民にまた支払おうとしたら、滑稽になるであろうということ、丁度スヴォロフ将軍の父親と似たようなもので、この人は自分自身に貸しだした資本に対して正直に国内で通常に利子を支払って、両替法に基づいて自らを罰したのである。上流の者達でさえその身分とその借金量の関係で支払い不能となってよろしいというのは王座と王座の法との親密性より他にどこから生じているのであろうか。あるいは何故裁判上の同意書や抵当登記簿が最も正しい宮廷人名録、あるいは王室年鑑となっているのか。

第三に、最も苦しい家臣はその侯爵から支払い猶予令やモラトリアムを発令して貰う。侯爵が自らそのことをしない場合、誰が侯爵にそれを発令するだろうか。侯爵が良心のせいでそうしないとしても、それでも少なくとも五年ごとに新たな五年猶予を同意できるであろう。

しかし第四番目の理由は私は知らない。

第十四扇形

結婚生活の神明裁判 — 五人の騙された詐欺師

従ってファルケンベルクは今や一人の家庭教師を得て、1, 3000 帝国ターラーの希望と息子用の士官学校生徒の地位を得た。 — ただわずかに後、新兵達を必要としていた。この新兵達をモグラのモロク[古代中東の神、子供が生け贄にされた]たるロービッシュが十分に彼と下士官達の許に連れてきた。しかし新兵達は、ロービッシュがその仲介報酬を得、自分達が軍事上の代父金を得ると、 — この代父金を貰ったまま大抵は逃げてしま

ったので、彼らがどういう気でいたのか私には分からない。マウセンバッハの森で盗賊どもが移送を襲って、戦いが終わった後、敵と移送は戦場から逃げ去った。騎兵大尉はとても心苦しく思った。自分は自分の家族のためにどのように利益があっても不正はしなかったのに、時に募兵地ではささいな不正を許してきたからである。

静かなグスタフにとって騒がしい都市の冬は最も長い時間となった。彼は白い頭髪のバンドも黒い子羊も目にするたびに、溜め息と共に自分の魔術的墨壁や夏の喜びの下に飛んで戻って行かずにはおれなかった。ホッペディーツェルの躰のない子供達が、彼が企みをしていないから馬鹿と見なし、彼が騒がしくないから気位が高いと見なすとき、笑われからかわれた自分の内部の流血を、自分を愛してくれた人間達、つまり彼の精霊と彼の羊飼いの娘を思い出して静めた。アマンドゥスの周辺にはホッペディーツェルの隣人とは別な隣人が欲しいと願ったことだろう。自分の故郷の平野や自由な天を願ったことだろう。――彼は自分の傍らの静かさと狭さを愛し、自然の果てしなさを愛した。親愛なる者よ、私の許に君がいたら、何と君のことを大事に思い、愛することだろう。君の目が私の教師の椅子の傍ら、曇ることなく、君の心が重くなることは決してないようにしたい。華奢な植物の君は私の周りに切り込むような結び紐でホップの蔓の棒の按配に結ばれて欲しくなく、生きたきづたの根でもって君自身が私を何か生氣あるものとして抱擁して欲しい。

そもそもホッペディーツェル家は忌々しい犬の生活で、私自身しばしば、私と家主が互いに倫理の第一原理について単に倫理的につかみ合いになるとよく目撃したものである。というのはすべてが互いに近接していたからで、しかしこれは物的で、犬は別の犬と――少年達は少女達と――従者達は互いに――主人達は従者達と――教授は教授夫人と近接していて、これについては珍しい事実が印刷される予定であるが――こうした皆が互いに交互に合金の計算に従っていた。――不幸にしてホッペディーツェルは誰かある人間に対して敬意を有せず（従って軽蔑も有せず）、一切を借りて、一切を汚し、どの人も恥辱にさらし、誰をも許し、まず自分を許した。騎兵大尉の冬の宿営では油絵の具の壁紙（一エレ二十四グロッシェン）が騎兵大尉の空き部屋と南京虫の壁の穴との間の屏風となっていた。暖炉は立派なものであったが、しかしバビロンの塔のように小丸屋根がなかった。部屋の天井は（多くの王座の天蓋に似て、すでに長いこと損害はなかったが）、破れて、偉大な哲学者達の頭部を傷付ける恐れがあった。頭部は石製で鏡台の上にあった。彼はしばしば余り人々に対し親切でなかった。頭部が余りに沢山あるから、自分達の姿が見えないのだということを当てにしていたからである。――下部シェーラウではどうしようもないことである。しかし偶然のせいで、我々皆がそこから追い出されることになった。

つまり教授は、大抵の人々同様に、家具に対する趣味を有しなかった。最も好んで、最良のものを最も惨めなものに、極上の罇瓶を祖父のベッドの下、ざらざらの洗濯桶の向かい側に、彼の従者の飾られた制服を彼の子供達のだらしない服の背後等々に置いた。さて彼はいつも自分の妻に対する講和条約の破棄を、いつも手ぶらで帰らないということで行っていた。彼はいつも何にも役立たないものを買求めた。彼は、何か始めようとするれば、妻と同様に立派に家政を切り盛りできると思い込む無数の男達の弱点を有していた。

――長いこと営まれているのを見ていると、その事柄を人々は結局自分でやれると思うのである。――妻の方は、夫は家政の本当の無能力者で、どんな気になっても決して習

得できないと自ら自惚れる無数の妻達の弱点を有していた。「あなたの本のことに口だししますか」ととても粗野に肉体化した教授夫人は尋ねた。従って家具の競売のたびごとに、あるいは行事暦の年の市のたびに、偉いさん達の戦争の他に、ここで結婚生活主権者と別の敵対勢力との間で小さな戦争が勃発するであろうと予告できたものである。この敵は主権者の商業条約が我慢ならなかったからである。かくて夫婦は舌と手によるオリンポスの競技を祝い、結婚生活の年代をこのオリンピア紀に従って区分できた。

閑話休題。我々の新しい支配者は — イタリアの民は亡き教皇や総督の宮殿を無料で得ているので — その父君の家具を安くで競売に付した。彼はそのことをすべての皇太子同様、亡き父に対する敬意から行った。民衆が故人への思い出を、ローマの民がカエサル庭園を引き継ぐように引き継ぐことができるようにとの配慮であった。教授も継承し、得たいと思った。従って彼は騎兵大尉のために、その部屋の箆笥や鏡、安楽椅子は惨めなものだったので、この三つの品ではないが、この三つの品に近いものを求めた。 — つまり惨めな箆笥のために山羊の頭部とミルテの花の付いた二個の美しい花瓶と、惨めな鏡の下に置く真っ直ぐで先端の細い[脚の]鏡台、それに惨めな安楽椅子の間に置く華やかなベルジュール[安楽椅子]を求めた。彼は落札した。競売の部屋から自分の部屋へ帰ってきたとき、彼の最初の言葉は妻に向けられていた。「騎兵大尉は向こうにいるか — 彼のために立派な品を求めてきた」。今や彼女は、まだ購入品を知らないうちに、自分の戦闘の唄の最初の詩行を歌った。彼は彼女に何の品も言わなかった。というのは彼は夫の最大不幸を有していたからで、即ち自分の妻に対する軽蔑を有していて、彼女は逆にすべての人間に対して、いや最良の人間に対してすら夫のことを擁護したけれども、ただ自分と敵対する場合は擁護しなかったようなものである。購入した品を取ってきたながら、彼は戦闘の唄の最初の詩行に答えたけれども、それでも品のことは言わなかった。かくて彼らはただ交誦しただけであった。とうとう山羊の頭部と先端の細い脚とが家の中に置かれた。すると戦争の雄叫びが始まった。「馬鹿な馬鹿な馬鹿なもの、あなたは馬鹿。こんなもの、こんな屑。今日のあなたの五感はおかしいのじゃない。私は一文も払わないから」（彼女はいずれにせよ出納係ではなかった）。「それにこんなに高くて。子供や阿呆が市に行ったら云々」。彼は全く冷たく言った。「文句を言うな。騎兵大尉の許へ運び上げよ、お前さん」。彼女は一瞬従った。しかし彼の部屋に入ってきて、彼女のがみがみ言う怒りの堰をすべて取り払った。このざわめきの下、後で、彼がとうとう威嚇的に言った。「おい、お前。...」すると彼女の口の中で風は嵐となった。彼は怒りとか何らかの情熱に拉致されてしまう男ではなかった、真の禁欲主義者[ストア派]であって、常に正気であった。そこから何故次のようなことをしたか説明できよう、つまり彼は、エピクテトスやセネカは、人々を制御するために、ストア派の者達に、禁じられた内的怒りを怒りの外的見せかけで置き換えるよう勧めているので、この怒りの見せかけにすら励んで、悠然と彼の拳を化石化し、この握りをこの件に明かりを見せない彼の妻のかの四肢に照明弾として投じたのであった。彼女の怒りのこの鈍いウィルソン式円頭避雷針はまず最大の雄弁な火花を彼女から引き出した。実際結婚生活は昔の共和国のようなもので、ここでは（ホームの意見によれば）嵐の戦闘的時代ほどにより偉大な雄弁家が出現することはなかったのである。彼は感覚的なものを単に精神的なものの乗り物として、自分の手にエピクテトスの便覧から抜粋した断章を随伴させた。「私は全く正気だ」（と彼は言った）「しかし私が殴らないと、

お前は叫び過ぎる」。彼の世俗の腕は彼女の上で動き続けた。「私は言い続けるが」（と彼は続けた）「まあ神に感謝している、お前の夫がとても落ち着いていて、自分の行うことすべてを思量できることにな」。彼女は夫が激しないと冷静になれなかった。夫がソクラテスのように黙って、その手を、引きずり下ろしたナイトキャップで武装し、翼を付けると、激していると彼女は悟った。彼の襲撃する嵐の前では、彼女には彼の刺すような陽光の交誼はとても熱く思われた。この嵐の後では彼の曇りはとても不快に冷たいものであった。要するに両者は戦いの前後で役割が逆転した。今回彼らの怒りは気象境界にぶつかり、山羊頭部の花瓶の下、ベルジェールの上に座っていた者、つまり騎兵大尉の上を過ぎて行った。大尉はこの反吐の出る戦闘の第一報で、シェーラウで冬の道具を荷造りさせ、アウエンタールで夏の道具を荷解きするように手配し、去った — 確かに。

しかし彼はほとんど残っていたい思いであった。

ちなみに私はこの描写され、戦闘準備のできた、結婚指輪と棘輪を有する夫婦が、互いに殴り合ったことのない上品な夫婦世界から軽蔑されるのを見たくない。というのは洗練された夫婦が互いに滴らせる腐食性の有毒な言葉は、抑制された、発疱硬膏のような侮辱であって、それで彼らは互いに傷を付け、癒そうと思っているのであるが、傷を皮膚の下でただ一層深くし、外科手術は必要なくても、恐らくドクトルは必要となるものである。

これから私は何故騎兵大尉はほとんど残っていたい思いであったのか話すことにする。

ホッペディーツェルは自分の他に或る日の午後五人を呼んでいた。領主裁判所長のコルプ、筏監督官のポイシエル、老詩歌作家、宮廷蠟引き職工、侍従であった。読者はこれらの人々の苗字に何の関心があるか。彼はまず領主裁判所長を脇に引き寄せて、彼に言った。「今日冗談をして貰い、四人の他の方々の前で、四人がワインと思う色付き水を飲んで欲しい。そして四人を本物のワインで存分に酩酊させて欲しい」。 — 「よく分かった」と領主裁判所長は言った、「四人には皆領主裁判所長のことは忘れないようにしてやる」。教授は同じことを筏監督官、詩歌作家、等々に述べた。皆が答えた。「よく分かった。四人には皆、筏監督官のこと、詩歌作家のこと等々が忘れないようにしてやる」と。誰もが四人を虚仮にしようと思っていた。教授は五人を虚仮にしようと思っていた — 皆が成功した。

夕方、色付き水の五つの籠が部屋に運ばれてきた。誰もがそのお酌の小卓の背後に進んで、ワインと称するもののコルク栓を回して抜き取った。最初の諸ボトルの水が静かに一行によって吸引された。まことの策略でこの行楽のパーティー、水のパーティーの者達に段階的酩酊のこうした見せかけが処方されているに違いなかった。

さてしかし、太陽のシステムによって水の流動が始まった。「ワインはもっと強くてもいいのだが」と誰もが言って、誰をも騙そうとした。薔薇の赤みの鼻の芽を有する領主裁判所長はその腐肉に酒精の代わりにもっと多くの水をあけていて、それはその永遠の前半全体で自ら痛飲し、あるいは小便し、あるいは他人の目から絞り出した量よりも多かった。彼ほど水をたっぷり飲んで、素面な余り真っ直ぐに姿勢を保てない人間は、容易に他の酩酊同盟者達に、酩酊のせいだと信じ込ませるものである。彼が高笑いすると、皆がはなはだ微笑した。

筏監督官のポイシエルは水資源全体を胃の中に収めて、血管を水管としてしまった。しかし他人を見せかけの酔いで騙さなければならないことに半分腹を立てていて、秘かに偽

りの酩酊ではなく、本物の酩酊に憧れていた。

宮廷蠟引き職工は冷浸し、着色された水で根本的にアルカリ液の処理がなされ、ほとんどそのガリアの害悪[梅毒]を紛らしていた。 — 他人の不幸を喜ぶ者はそのような飲み方をした。

胃がほとんど二つに裂けるほど飲んだ侍従は、もっとひどい目に遭った。三日後に彼は尿失禁で消え去ることになった。 — ただ浸透性の詩歌作家の中を着色されたノアの洪水全体が害もなく滑らかに流入し、流出した。しかし彼は元気よく、諷刺的に見回して、隣人が四つの小卓の背後で泥酔するのを待ち受けていた。

燃え上がる納屋でもその鯨の献杯で消化できたことであろう。...さて冗談を解する者は誰であれ、酔った振りをしなければならぬ時になった。 — 彼らは議論し、ラ行で互いに論駁し、舌はこぼしながら隆起していた — 侍従と蠟引き師は部屋の中で身を伸ばして、二本の貯蔵庫の[樽支えの]棒の按配で、彼らの膨らむ下半身は、世の人が思い浮かべるとしたら、棒の上のワインの皮袋のようであった。 — 長官は目を閉ざして、口を開けていて、詩歌作家はこう考えていた、自分がまず本当の酔っ払いのように、自分はまず素面であると誓い、次にベッドの支柱で転んで、本当に裂け目を得たら、最もとぼけた、最も最もらしいことになろう、と。彼は実際幸いにも傷を得て、これは彼の酩酊よりも大きなものであって、復讐からこう述べて、ぶちこわしにしようと思った、自分は四人の方々を虚仮にして、単に水を飲んでいたので、と。 — 教授も一切をしゃべって、すべて、それにワインはどんな次第か語ろうとした。 — 他の人々もそう欲して、すでに皆が予感して高笑いした。そのとき不幸なことに夙に腹一杯になっていた後監督官が蠟引き師の許に忍び込んで、自分の模刻されたワインに対する解毒剤、強壯剤の代わりに、そのワインの所謂オリジナル版を蠟引き師の、あるいは研磨師の杯から試飲した。...その中も彼の杯同様水であった — 稲妻のように半ば道化で、彼はすべての水の神々の杯を試飲した — すべてが水であった — そこで彼は皆に打ち明けた — 海軍全体が飛ぶように試飲して回った。誰もが真面目に、自分は酔って、腹一杯なのか語るようになった。

— 残念ながら冗談の同志は皆素面であった。こうした冗談が懺悔節の鶏よりも好きであった騎兵大尉は、倫理に対する愛から酩酊の一般的偽装を純粹に正直なものに変えて、そのことを本当のワインで遂行した。その後、五角形が家へ跳ねて帰り、この五人の愚かな乙女達が五人の賢い乙女として[マタイ伝、25,1]、水分過多であったけれども、帰宅したとき、彼は言った。「誓って。このようなことは印刷させたら良かろう」。 — ことに、ここで実際印刷されているわけである。

私はこのホッペディーツェルについて、私と読者が彼の家から出て行く前に、思い出の円形ロケット、影絵を携えて行きたいと思う。しかしこの仕事は怖い。 — この男より私はむしろこの小作品のすべての諸登場人物を紙上や蠟で象りたい。彼の性格は百もの寄せ集めの諸性格から出来ていて、彼の認識はすべての諸認識から、彼の明察は懷疑主義から、彼の悪徳はストア主義から、彼の徳操は徳操についての或る体系から、彼の行動は茶番、駄弁、性格の諸特徴から出来ている。

それでも、あるいはそれ故に、騎兵大尉は彼を愛していた。彼をしばしば見ていたからであり（彼は自分を訪ねて来ない者に対してはほとんど皆恨んでいた）、両者は陽気であったからであり、人間は何故かはさっぱり分からなくても、百度互いに愛するからである。

ファルケンベルクは、どの友のためにも、自分をまずは騙した者のためでさえ、河馬と自ら決闘していたことだろう。一 名誉心と善意から。これに対して教授は純然たる倫理を、さながら純粋数学として、応用倫理よりもはるかに優先していて、行動はめったにしなかった。人々が、それ故、好んで思い出すのは原則による彼の立派な自立心で、かつてアウエンタールで客人としてそのことを証明したのである。夜十二時吹雪の中、騎兵大尉の代わりにただ空の馬が帰って来たのであった。一 別な男なら、例えば騎兵大尉自身であれば、この馬に飛び乗って出て行き、帰って来なかった者を探し、助けようとしたことだろう。しかし教授は親切に獣脂蠟燭の芯を切って、悲嘆で泣き続けている夫人の許に腰を下ろして、一 夫人はすでに以前からただちょっと帰宅が遅れただけでも毎夜心配して、それでいて翌朝はいつもそのことを叱るのであったが。一 落ち着いて彼女に言った。「思う存分泣きなさいがいい、それは結構なことです。害は余りないし、むしろ心が軽くなります。泣くと眼球が綺麗になり、余りに激しい明かりを屈折させます。残りの涙はいずれにせよ、鼻腔を通して食道と胃に滴っていき、消化を助けるに相違ありません。しかし夫に関しては、その身に降りかかる最悪のことでさえ、いずれにせよ単に凍死するかもしれないことぐらいでしょう。しかし自分が半ば経験上知っていることは、凍死ほど穏やかな死はないということです。一 と申しますのは、それは根本的に首吊りされるか、溺死するのと変わりがないからで、卒中で死ぬことになるからです」。

しかし、申したように、騎兵大尉は彼を愛していて、それでも去って行った。

第十五扇形、あるいは切片

十五番目の扇形、あるいは切片

旅立ちの前に私はすべての人に、特にフォン・ブーゼ弁理公使夫人に、借りていた楽譜を返した。私にイタリア製のを多く貸してくれたこの夫人に私はドイツ製の更に何か結構なもの、即ち私の妹のフィリッピーネを貸した。妹は弁理公使夫人の幼い娘の教育を加勢することになった。しかし彼女はこのような才能豊かなレディーの優しい指の下、自分の方が、教育するよりも教育されることになるであろう。ただしかし妹の速やかな、震えがちの、冗談好きな、それでいて思い深い心がコケットな心が変わって欲しくない。彼女のラウラから（まさに弁理公使夫人の娘）コケットな教育の轡を外して欲しい。この哀れな子供は絶えず窓辺のガラス鐘の下、喘ぎ苦しんでいて、体を掛け布団の下、四ロートの重さの鯨ひげに楔止めにされて、小さな両手はまた夜、手袋の鞞に収まっていて、小さな頭部では髪の毛が一つの鉛で後方へとまとめられている。周知のように母親の弁理公使夫人は、町から三十分のマリーエンホーフの、所謂新しい館に、古い館と続いている館に住んでいて、この古い館の方は貸し出されていると私は思う。

... しかしこの伝記に従っている私のお供にとって、全紙のたびに、より多くの人々が登場して、私の操縦や振り回しはより厄介なものになってきている。むしろ私は自分が帝国等族の一人で、百万人を統治し、税を徴収することができれば、ここで、苦勞して正しい扇形[切片]に追い込まなくてはならず、私自身がとんでもないつむじ曲がりの一人であるこうした致命的な人間の七角形を統治するよりましであろうと思う。というのは、単なる伝記作者としての私に対しては、帝国大審院も執行部隊も私の七角形に対抗して、助勢

してくれないからである。しかし私が帝国等族の一人であれば、きっと多くの点で一
約束してくれるであろう。

シェーラウでの我々の別れの馬車を取り囲んでいたのは、教授の陽気な冷たさ、一
そのストア主義者夫人の仕事熱心な叫び声一 臭猫の尾のペスト看護人の心優しい微笑
一 その息子の善良な心、この息子とはグスタフの嘘によってほとんど離れられなくな
っていて一 それに見えなくなっている諸時間、愛しい人間達、すべての私の女性生徒
達への私の感謝に耐えない思い出であった。一一 人間というものは、自分自身が逝く
前に、この世で何と多くの別れを目にすることか。

途中グスタフは馬車の中で絶えず泣き続けて、我々の静かな思いの中へ入ってきた。し
かし自身心が容易に砕けやすい父親も仕舞にはそのことで苛立って、私に言った。「ヘル
ンフート主義者が」（精霊のことであった）「息子を牛乳スープのように育ててかき混ぜ
たのをよく目にする。家庭教師殿。貴方が息子を少しばかり骨のある者に育てなければ、
いつかは泣き虫の兵士が出来上がって、ほとんど従軍牧師にさえ役立たないことになる。
従軍牧師でも時には骨のある呪いを心得なければならぬのだから」。一

彼はヘルンフート主義者をイッシヒの小都市まで引きずって、そこでは次のような
独り言が馬車の通り過ぎるとき聞こえてきたのであった。「私は一頭の驢馬で、生まれな
がらの本当の悪漢です。情けない餓鬼です。いつも私はならず者で、呪わしく有名な老い
ぼれの地獄の亡者です。人々は私を鋸引きにして、焼き上げるべきではないでしょうか。
この悪魔、間抜け、家畜の私を」と一人の学童が言っていた。その学童をすべての同級生
が取り巻いて拍手していた。「あの子は」と私の上司は言った、「ヘルンフート派の奴の
ように語っている。奴は卑下しているが、他の皆をもっと卑下させる奴だ」。しかし少
しもそんなことはなかった。この者は哀れな悪魔で、腹ぺこで諧謔を解し、それに対して学
校の全員がパン屑と林檎を集めてくれていたのであった。自分達の気に入るようにして、
自分のことをとんでもなく罵ったら、と。...

一一 美しいアウエンタールよ。汝の雪はもう消えたのか。

第十六扇形

教育の手本[プログラム]

私は私の貴重品（原稿がそれであった）と、私の動産（動産の帳簿は三十行を越える厚
さで）、そして私の父親と母親のもの（これは私自身のことで）を私の居間と勉強部屋に
配置すると、すでにその前に大きく三步進んで窓からの光景を眺めていたが、それは風車
と、夕陽、それに白樺の木の許の椋鳥の巣箱から成り立っていて、早速紛れもない家庭教
師となれて、ただ始めさえすればよかった。一 私は今や一週間ずっと真面目な顔をして、
私の教え子もそうするように強いることができるのであった。一 私の言葉はすべて週ご
との説教となり得て、私の顔のすべては法律掲示板であり得た。一 私はそれどころか、
一人の道化となる二つの道を有していた。私は一人の不滅の魂をラテン語で格変化させ、
動詞変化させ、記憶させ、分析させ死ぬ思いにさせてよかった。一 しかしまたその若
い松果腺をより高度の学問へと浸して、沈めてよく、その結果、それが全く膨れあがって、
論理学、政治学、統計学を大いに飲み込むようにしてよかった。一 私はかくて（誰が

それを阻止したろうか) 彼の頭の骨壁を薄い本の棚へと削り取って、生きた頭を影絵の板へと、学者どもの頭部の影絵となる板へと押し潰してよかった。彼の心は逆に、自然の中央祭壇から旧約聖書の針金の棚へと、天球から敬虔ぶった窮屈なロザリオの珠へと、あるいはそれどころか処世術の浮き袋へと加工され得た。 — まことに私は一人の阿呆となり得て、彼をもっと大きな阿呆となし得た。...

汝、親愛なる者を、汝、邪気のない者を、親切な者をそんな者にするとは。汝は汝の全運命と共に、汝の全将来と共に私の両腕の中に身を投じたのであった。かくも多くのことが私に懸かっているとすると、私はすでに心苦しい。

しかし私の将来の子供達の家教師も同様に重い任務なので、それで私はその教師のためにここで次のような教育の手本[プログラム]を印刷させることにしたい。この手本をその教師は悪く思うことはできないだろう。私はこの良き男のことをまだ知らないし、その男のことではないのだから。

「親愛なる家庭教師殿、

私が貴方の家庭教師であれば、どうぞ腰を下ろして、次のまことに立派な諸原則を書き留めて頂きたい。

博物学は、学校教師が最初の授業のとき子供のポケットに収めて、子供を誘い出す砂糖まぶしのパンとすべきです。 — 歴史からの諸話もそうです — しかし歴史そのものだけはなりません。歴史という高貴な女神は、その神殿はただ墓塚の上にあります。私どもの頭と心はすでに開放されていて、頭と心が歴史の永遠の言葉の偉大な諸単語 — 祖国、民族、統治形態、法律、ローマ、アテネといったものを — 理解するほどになっているとき、私どもに初めて語りかけるならば、何と立派なことをなすことでしょう。 —

シュレック[Schröckh, 1733-1808]に関しては、この方はまだ尊敬すべき学者の話や純然たる孤児院の道徳を挿入していますが、家庭教師殿、彼の本から銅版画を引き抜くことだけはしないで頂きたい。イギリス製の装丁も大事です。

地理学は子供の魂にとって健康な前菜です。計算、幾何学も早期の学問的軽食となります。考えることを教えるからではなく、考えることを教えないからで（最も偉大な算術家や微分法家、力学家はしばしば極めて浅薄な哲学者です）、それに計算の際、緊張は神経を弱めないからで、会計士や代数学者が証している通りです。

しかし哲学とか物思いの緊張は子供達にとって致命的で、物思いの細すぎる先端を永久に折り取ってしまいます。 — 徳操や宗教を子供達の許でその最初の諸原理に戻って裂くことは、一人の人間の胸を持ち上げて、どのように鼓動しているか見せるために、心臓を解剖するようなものです。 — 哲学はパンのための学問ではなく、精神的なパンそのものであり、需要です。哲学は愛同様教えられません。両者は、余りに早く教えられると体と魂を損ないます。

貴方はフランス語をラテン語より先に、話すことを文法的諸規則よりも先に（即ち歩行器を筋肉の動きの理論よりも先に）教え、死んだ言語は後回しにする方針だと、これは記憶よりも悟性によってむしろ理解されるのでそうする方針だと貴方自身が宣言なさると私には好ましく思えます。ラテン語は、とても早期に教えられるので、それ故に難しいとい

う面があります。十五歳になっていると、以前なら手を要するとき、指で済ませられます。

私どもの子供もすでに読んで、座り、お尻をその教養の基盤、基礎とするべきであるというのは嫌なことです。教授する本は子供達にとって教師の代わりとなりませんし、楽しませる本というものも、より健康な遊びの代わりとなりません。詩文は髭の生えていない年頃にはまだ理解し難く、不健康なものです。朗読する教師は、はるかにもっと強調して語らないと、惨めなものに相違ありません。要するに児童書は要りません。

教育学の記念帳に私ども両人はこう記入することでしょう。非難して甲斐のないものは、全く非難しないことよりも悪い。一年齢が進むと消える間違いを、教師は消さなくてもよい、教師はより持続して見られる間違いと戦うべきである等々。貴方の教理問答書はプルタルコスやフェッダーゼン[Feddersen, 1736-88] (しかし彼の惨めな文体は抜きにして) であるべきです。即ち、倫理ではなく、それに従った物語であるべきで、その上特別な時間ではなく、適宜な時間にすべきで、私の子供達の頭を倫理の語彙のホールではなく、子供達の心を徳操の熱い円形建物となるようにして欲しいものです。

愚鈍で、狭小な、不安げな礼儀作法というものは最も愚かで、不自然なものです。貴方が作法のどの一つも命じなければ、最良の作法を教えることとなります。生来子供達は銀の星形勲章も銀髪の頭部にも敬意を払いません。このようなことをやめさせないことです。

私の最大の依頼は、私が何年も前に印刷させたことですが、貴方が私の家で最も冗談好きの男であることです。楽しさがあれば、子供達にとってすべての学問分野が砂糖の甘い分野となります。私の子供達は貴方の許で、自分達の喜びに従って、冗談を言い、話し、座っていいとならなければなりません。私ども大人はいかに分別があっても、私どもの子孫の厭わしい学校での強制には一週間も耐えられないことでしょう。それでも私どもはそのことを彼らの蟻で一杯詰まった血管に要求します。そもそも、子供時代というのは、後年の高齢時の日曜日享受のための苦勞の準備日に過ぎないのでしょうか。それとも子供時代はむしろそれ自身、自らの喜びをもたらす、その祝日の前日ではないのでしょうか。いや我々はこの空虚な降雨の人生において、すべての手段をより間近な目的と(すべての目的を一つの遠く離れた手段と見なすように)見なさなければ、この地上で何を見いだせましょう。貴方の上司[雇い主](嫌な言葉です)は自分の婚約を自分の結婚同様に楽しみにしていたものです。

遊びながらの授業というものは、子供から緊張を節約し、取り上げるのではなく、子供の中である情熱を目覚めさせることで、この情熱が子供に最も強い緊張を課し、容易なものとするのです。このためには楽しくない情熱は全く何の役にも立ちません。例えば非難や処罰等々の恐れで、こうしたものではなく、喜びの情熱のことです。戯れながらシェーラウのすべての少女がアラビア語を、自分達の恋人がこれと同義の言葉でしか手紙を書いてくれないとなると、習得することでしょう。称赞への期待こそが、子供達にとって(外見的長所の称赞を除いて)非難よりもはるかに害の少ないもので、称赞に対して子供は誰も、殊に最良の子供は、冷酷になることはありません。私はここで貴方に、私自身の家庭教師が教育上の策略として応用したものを述べましょう。彼は数字のノートを綴じ込みました。このノートに彼のギムナジウムのそれぞれの生徒に(十九人でした)勉強のたびに大きな数字とか小さな数字を書き付けました。この数字は、それがあ

った総計になると、一つの貴族証書、勤勉証書となって、子供はその自分の称賛を家に持ち帰るのでした。余りに頻繁なものとか、はるか離れたところからやってくる報酬は無力なものとなります。かくて彼はこの巧みな流儀で日々の小さな報酬から遠く離れた報酬への道を合成したのでした。私どもは更に私どもの数字を貯えることもできました。勤勉さに関して子供達を綴じ込むのは増大する財産を措いてありません（数字とか筆記帳によるものです）。このような数字を削除するのは処罰でした。彼はそのようにして我々皆を勤勉にしたので、特に私には効果があつて、私は数年後には今でも読まれている或る伝記を書くことができるようになりました。

私の可愛い者達とは決して短くとか一般的に話すことはしないで、感覚的に話してください。フォスがその牧歌を物語っているように詳しく話してください。

私は私のグスタフに対して浮き彫り彫刻刀や造型道具を用いてきました。実際それはグスタフを私がまとめている彼の伝記に合わせるためではなく、人生に合わせるためでした。他人の子供のためになしたことを、自身の子供のためにしないような人間の心は悪魔にさらわれてしまえと私は思います。

家庭教師殿、これに対して私の娘達は、姉の方であれ、妹の方であれ、貴方の同じ授業時間に預けません。 — 少女達は子供のとき寝室や教室を少年達と同じにして構いません — が授業は全く要りません。少女を教育する術を心得ている家庭教師は（貴方はできましようが）、多くの世間、多くの女性達についての知識、多くの機知、多くの気まぐれの如才なさを同様に多くの堅牢さと共に有しなければならないでしょう。 — しかしまことに器用な[女性]家庭教師が私の娘達を育てます。素養ある母親の目の許での家庭的仕事のことで。

この秘密の指示を閉じる前に、これは全く不必要なものであると更に気付いております。

— 第一に貴方にとってのことで、天才の男性は他のどんな方法で行っても全能であるからで、第二に薄のろの頭にとってのことで。これはこの男がどのように、欲するように、やろうとも、老いた同衾者が若い同衾者から肉体的諸力を奪ってしまうように、精神的諸力を常に奪ってしまうからです。そもそも私はこの教育上のシュヴァーベン鑑を私の子供達に対するはるか以前に世間に送っていました。 — 従って全く貴方のためではなく、一冊の本のためでした。 —

つまりこの本のためであった。

私が教育でなすであろうことを私の上司[雇い主]に示すために、私はこう言った。「上部シェーラウの上級監督官は一匹のウズラ狩猟犬を有しています。ヘッツという名で、抱き犬の動物園に手放す気はなかったのです。さて、この男は告解者や自身の子供、ワイン、七面鳥類を十分に有しています。もう犬のあしらいが上手であろうと人々は考えることでしょう。しかし間違いです。ヘッツは我慢ができません。というのはスープが卓上で湯気を立てると、ヘッツはテーブルの周りを回り、高く跳ねて — その鼻面がのろしかの肉と水平な位置に来て — 吠え、そして頭でどの人の膝をもつつき、特に聖職者の膝をつつき、それでこの男自身は煉獄の中で飲み続けるようなもので、しばしば砂糖をかんでるか、塩をかんでいるか分からなくなるのです。この人が自ら犬に向かって吠えても甲斐なかったのです。これに対し、極端な治療法は、ヘッツに一切れも食べさせないことでし

よう。彼はそのことを何日も行いました。しかし次の食事時に彼は忘れてか、あるいはしぶしぶこの煩わしい犬に骨を一つ投げ与えました。この一本の骨がこの犬全体を台無しにしました。牧師にとっては、ヘッツが、自ら変わることにないこのヘッツがくたぼってしまうまでお手上げ状態ではないかと案じられるところです。これに対し私にはヘッツは理性的に思いやりをもって接します。何故でしょうか — 私は食卓に座っている間、ヘッツに例外なく何の筋も与えなかったのです。ヘッツや人間に対しては堅牢さが威力を発揮します。犬を教育できない者は、騎兵大尉殿、子供も教育できません。私なら、私のパンに手を出そうと思っている家庭教師に対しては、リスや鼠を飼い慣らさなければならないという試金石で調べることになりましょう。それを最も心得ている者が、進出してくることになりましょう。例えば蜂を飼い慣らすヴィルダウです」。 — しかし私の恵み深く代父は決して私やフェンクの冗談に楽しげに笑うことはなかった。これに対しホッペデューツェル風の冗談には大いに笑った。しかし代父は我々兩人をむしろ好んでいた。

私が更に二つの教育の語法を — その一つは、私は私の教え子の機知を分別同様に強く訓練し、第二は、卑金属の時代からの作家達のみを教えるときに供するというものであるが — 号外の中で語り尽くしたら、更に彼の人生の話に移ることにしよう。

号外

私は何故グスタフに機知と墮落した作家達を許し、そして古典的作家、つまりギリシアやローマの作家を禁ずるのか。

私は前もって三言、あるいは三頁で、古代人の研究は凋落していること、何故凋落しているのか^{*原注 1}、次にその研究は大したことはないと証明しなければならない。

我々は周知のように今文献学的諸世紀からの出身であり、そこではラテン語以外何も祭壇や演壇、紙上や頭の中になかったのであり、ラテン語はすべての学者のナイトガウンやナイトキャップをすべてアイルランドからシチリアに至るまで一つの同盟にまとめたのであり、ラテン語は国家の言語、しばしば偉いさん達の社交の言葉であったのであり、すべてのローマやギリシアの家具の目録なしには、この古典期の人々の予定献立表や洗濯伝票なしには学者とは言えなかったのである。今や我々のラテン語はドイツ語で、カメラリウス[Camerarius, 1500-74]のラテン語と比べればそうで、カメラレウスは従って、そのシュマルカルデン戦争をギリシア語でまとめる必要はなかったことであろう。今や説教がラテン語でなされることは稀で、ましてや以前のようにギリシア語で書かれることはなく、従って以前のようにラテン語に翻訳されず、単にドイツ語に翻訳されるだけである。我々の日々では女性はもはや粉おしろいをつけた司教冠の頭を、ヘルメス[Hermes, 1738-1821]の娘達でもなければ、古典の窮屈な首輪に通すことをしない。このことは私より私の読者にはむしろ周知のことであつたらう。私の方が若いからであり — 私ども兩人にとって古代人の現今のより良い注釈や書評、翻訳は十分に知られていることである。ただ、その

*原注 1 この凋落についての意見は二十年前から、フランスではなくても、ドイツでは大いにその拡大を失った。

崇拜者達が立派だからといって、この崇拜者の数が増えることはなかった。すべての他の学問は今やすべての読者達の上の一つの普遍的王制を分け合っている。しかし古代人はそのわずかな哲学的封臣と共に孤独にサンマリノの岩山に座っている有り様である。今や、何でも読んでいるが、古代人だけは読んでいない博識家がいるだけである。

古代人の精神への趣味はその言語への趣味同様に鈍くなっているに違いない。人々は古典の鸚鵡真似の世紀に現今よりもこの精神をより良く感じていた、フォシウスはルカヌスに、リプシウスはセネカに、カサウボヌスはペルシウスに依拠していたからと私は主張する者ではない。私は今同様に当時『ファウスト』が、『イフィゲーニエ』が、『救世主』が、[Klinger の]『ダモクレス』が書かれたとは申し上げていない。ただ私は民衆の現在の趣味について話しているのであって、天才の趣味について話しているのではない。

古代人の精神は目的に向かってのその真っ直ぐな堅固な歩行にあるのであれば、二重、三重のカフスの飾りに対する憎しみ、或る種の子供らしい率直さにあるのであれば、この精神を感知するのはますます容易になるに相違なく、その精神を我々の作品に吹き入れることはますます難しくなるに相違ない。世紀ごとに我々の文体には我々が学ぶにつれ、洞察、眺望、顧慮がほの白く輝いて生長するに違いない。我々の構成の充実はその丸さを拒むに違いない。我々は飾りを更に飾り、装丁に更に装丁し、コートの上にコートを重ねる。我々は真理の白い陽光を、それにただ初めて出会うのではないので、諸色彩に分解するに違はなく、古代人は言葉や思考を惜しみなく与えているとすれば、我々は言葉と思考を節約している。それでも、六つのオクターブの楽器であって、その音色が容易に不純に交互に響く方が、一本の弦であって、調子の狂うことが少ない一弦琴よりもましである。誰もがモンボド[Monboddo, 1714-97]のように[単純に]は書かないことも、誰もがモンボド同様に書くことと同じように悪いことであろう。

古代の文体での作品における我々の不毛のお蔭で、同時にこうした作品に対する趣味が増大している。古代人は古代人の価値を感じ 一 なかった。彼らの単純さは単に、単純さを達成し得ない我々によってのみ享受される。思うにこれは次の理由による。ギリシア人の単純さが東洋人や野蛮人、子供達の単純さ^{*原注 2}と異なるのは、単により高度の才能のせいであって、これで快活なギリシアの気候はかの単純さを際立ったものにしてしている。これは生来の単純さであり、習得された単純さではない。人為的獲得された単純さは文化と趣味の結果である。十八世紀の人間はまず沼や山間の急流を徒渉して、このアルプスの源泉に達している。しかし上のその源泉にいる者は、その源泉を去ることがない。個々人ではなく、単に民族のみがモンボドの[単純な]趣味からバルザック[Balzac, 1597-1654]の[過剰な]趣味に墮し得る。若い天才がいつも傷付けて、年取った天才が大抵帰依するこの獲得された趣味は、見本市のたびに個々人によるすべての美しきものの習練によって、より感受性の強い、より鋭いものとならなければならない。しかし諸民族そのものは世紀を経るに従って、更にこの優美女神から外れてしまう。この優美女神は、ホメロスの神々のよ

*原注 2 子供の語りには飾りや脇見や簡潔さの[ギリシア人と]同じ軽視が見られる。これは我々にしばしば気まぐれと見えて、実はそうではない。同じ素朴さであり、また聖書の語りや、より古いギリシア人等々の語りにおけるように、語りにかまけた語り手の同じ忘却が見られる。

うに、雲の中に隠れるものである。従って古代人は自分達の産出物の生来の単純さを、子供や未開人が自分達の産出物の単純さをほとんど感じないように、感じない。アルプス人とかチロル人の純粋な単純な習俗や言い回しを称賛するのは、所有者自身でもなく、同郷人でもなく、それを達成し得ない教養ある宮廷人である。ローマの偉いさん達が裸の子供達の遊びを楽しんでいることに思って、裸の子供達の絵でその部屋を飾るとき、その楽しみや趣味を得ているのは偉いさん達であって、子供達ではなかった。古代人は従って、そのような趣味で読むことはない無意識の趣味で書いたのである。 — 現今の天才溢れる作家達、例えばハーマンは、はるかにより多くの趣味で、書くというよりは読んでいようなもので — それ故プラトンとかアイスキュロス、それどころかキケロといったいつもは健康な子供達にもかの熱性膿疱、急性発疹が見られるのである。それ故アテネ人にとってテーゼ対比の輻輳師に勝って拍手を贈る雄弁家はいなかったのであり、ローマ人にとって言葉遊びに勝って拍手を贈る者はいなかった。シェークスピアの過度の賛嘆のためにはシェークスピア自身が欠けていたのに他ならない。まさにそれ故にこれらの民は、子供と同じように、生来の単純さから滑らかなラックを塗られた機知へと没落し得たのである。

第二に、私は三頁で、古代人を等閑にしても害は少ないと主張すると約束していた。というのは彼らを加工して何の役に立つかということになるからである。彼らは人々が言うよりも^{*原注 3}、徳操同様に、感じられ享受されることははるかに少ない。彼らの許での楽しみは最良の趣味の最も正しい数字九による吟味である。しかしこの最良の趣味はすべての種類の美に対するはなはだ精神的な開明さ、すべての内的諸力のはなはだ純粋な尺度、美しい尺度を前提としており、それでホームが邪悪な心との趣味の不一致を感じているばかりでなく、私も、精神的十全の果汁の放出の後、常にその趣味を得ている天才に次いで、その趣味、つまり完全なる趣味よりもまれなものを知らないでいる。君達、教頭よ、ギムナジウムの校長よ、君達は古代人の平価切り下げに号泣し、がみがみ言っているが、古代人がまだ目を有すれば、古代人は君達の評価に泣くことだろう。 — 何故古代人はプラトンを神々しい者と呼び、何故ソフォクレスは偉大であり、詞華集の中の作者は高貴なのかが分かるためには、君達の教育学的肢体に見られるのとは別の心や魂の翼（単なる肺葉ばかりでなく）が必要である。古代人は人間であった、学者ではない。君達は何か。君達は古代人から何を取りだしているか。...

多量の空虚な言葉。 — 中世では古代人のどんな小さな利用も偉大な利用であった。しかし今十八世紀では、すべての民族がミューズの花崗岩にパルナッソスへの階梯を刻み込んでいて、多かれ少なかれ二つの階段は大事ではない。現今の諸国民は古代の趣味で何も書いたことがないのだろうか。もしそうであれば、類似のもので多重化されたことのない模範は、いずれにせよ無くて済まされよう。しかし決してそうではない。それですべての古代人に対するオマール回教国主による焚書といえども、人々が若干のギリシア風神殿や他の廢墟のいまだに残る秋の盛花全体を壊す場合よりも、我々にとって奪うものがほんの少し大であるだけであろう。我々はそれでもギリシア趣味の家々を保持するであろうか

*原注 3 近世人が古代人の趣味で書くことは、余り理解されない。古代人自身それほど頻繁に理解されるであろうか。

ら。模範自体模範なしに書かれたのであり、ポリュクレイトスの柱像はポリュクレイトスの柱像の手本なしに法則化されたのである。詩作の創造力は、古典古代の作品の研究にもかかわらず、長患いのベッドの上にかつてドイツではあったし、今なおイタリアではあるのである。

ハイネ[Heyne, 1729-1812]のように古代の言語を魂の形式的形成のために雇うつもりの方は、どの言語でもそれはできるということを忘れており、それにオリエントの言葉のようにもっと類似しない言葉の方が更にそのことをもっと良くできるということ、この形成は時に我々にとって、幾多の男爵にとってフランス語がそうであるように高くつくものであることを忘れている。ギリシア人やローマ人はギリシア語やラテン語の著者による形式的教養なしにギリシア人やローマ人となったのであり、彼らは統治と気候によってそうだったのである。

人間の精神が生み出した最も美しいものにとって、一つの不幸と言えるのが、この最も美しいものが最上級生徒、第二級生徒、第三級生徒の手ですり潰されていることであり、修道院付属学校長がこう信じていることである。改訂版とかより良い唯名論説明、実在論説明は、若いギムナジウムの生徒達に崇高な古典の廃墟を理解させるようにできるのであり、それはシェークスピアのより良い、誤植を少なくした版や添えられた短編小説が諸注と共に教師やフランス人に、このイギリスの天才に対する目を開かせることより勝っているのである、と。 — 従って先の修道院付属学校長が去勢男や洗礼児に対しクレオパトラのような魅力から冷たく断つものは、この魅力を覆うことを措いてないと思いで — この学校長が私や自然の後を付いて行かない^{*原注4}という不幸があるのである。

つまり自然は我々の趣味をより繊細な美のために、傑出した美によって教育している。若者は機知を感受性よりも、大言壮語を分別よりも、ルカヌスをヴェルギリウスよりも、フランス人を古代人よりも最良にしている。根本においてこの若年の趣味は、この趣味は我々よりもある種の低級な美を強く感ずる点で間違っているのではなく、これは我々皆よりもその美と結び付いた欠点やより高い魅力をより弱く感ずる点で間違っている。というのは我々が同時にギリシアのエピグラムに対する現今の感情を、フランス風のエピグラムに対する失われた青春の熱中とを結び付けることができるとき、そのときにのみ一層完全なものとなるであろうからである。従って人々はこうした菓子に対しては若者を、菓子屋がその徒弟に本当の菓子に対して行うように、その若者がそれで飽き飽きして、より高度の食物に飢えを感ずるほどになるまで、存分に味わわせるべきであろう。 — しかし現在若者は逆に古代人に飽きるほどに向かい合っていて、これで近代人に対する趣味を形成し、刺激している。我々の著作者世界ではその悲しい結果が生じていて、修道院付属学校長は発端を結末で始めており、単に最も繊細で最良の趣味に最後の丸みを与える諸作家によって、ギムナジウムの生徒の趣味を粗く彫り込み、かくて自然にも私にも従っていない。

勿論学校長達は案じている、「セネカやエピグラムや墮落した著者を読ませたら、若者達の間に不都合なほどに機知が流行することになる」と。私の最良の答えはこうである。

*原注 4 ドイツ語と聖書の話しに詳しい『メシアーデ[救世主]』をすべてのドイツ人が感じ取っているであろうか。

ドイツ人の体質は十分に頑強で健康なので、機知の発疹チフスに他の民族よりさらされる
ことが少ない。例えば[Hippel の]『結婚について』の機知的本とかハーマンの文書を我々
は機知の見られない純粋な作品でまた償っている。私はしばしばこう考えてきた。ドイツ
人は自分の諸長所について余り知らないように、自分が過度の機知を有することについて
も何も知らない。書評家達は私や長編小説の作家達にこの過剰をしばしば十分に非難して
いるけれども。しかし私やこれらの作家達はこの点についての公平な裁判官達を要求する
ものである。これらのその他の点では無意味な書評家達自身、この点では、機知的文体を
弾劾し、闘い、それでいて捕らえていた兩人、セネカとルソーといった人に光栄にもほと
んど似ず、かくて彼らは他人に機知の欠如を非難し、自らは幸いに免れているのである。

私の第二の答えはもっと深い。人間の体の発達する以前では、魂のすべての人為的発展
は害がある。分別[悟性]の哲学的緊張、空想による詩的緊張は若い力そのものを壊し、そ
の上他の力を壊す。ただ機知の発展だけが、これは子供の場合考える人がまれであるが、
最も害が少ない。 — これは単に軽い須臾の緊張の中でのみ働くからで — また最も
有益である。 — 機知は新たな理念の歯車装置をますます速く進むように強いるからで
あり — 発明を通じて理念についての愛と支配とを与えるからであり — 他人と自分
の機知はこの早期には我々を最もその光輝で夢中にさせるからである。何故我々の許には
かくも発明家が少なく、学者が多いのか。何故、学者の頭の中ではただ不動産のみが横た
わっていて、すべての学問の諸概念がクラブごとに別々に閉ざされてカルトゥジオ会修道
院に住んでいて、かくてその男がある学問について書くとき、別の学問の中で知っている
ことは何も考えない風になっているのか。 — これはただ子供達に理念の操作よりもむ
しろ理念を教えているからで、学校での彼らの考えは、彼らの尻同様に不動に固定させら
れているからである。

シュレーツァー[Schlözer, 1735-1809]の歴史における筆法を他の諸学問でも真似るべきで
あろう。私は私のグスタフに懸け離れた諸学問からの類似点を導き出し、理解し、かくて
自ら発明するよう習慣付けた。例えばすべての偉大なもの、重要なものは、ゆっくり動く。
従ってオリエントの君主とか — ダライラマ — 太陽 — 海の蟹は歩むことさえし
ない。賢いギリシア人は(ヴィンケルマンによれば)ゆっくり歩く — 更にそうするの
は、時計 — 大洋 — 晴れた天気のとときの雲である。 — あるいは、冬には人間や、
地球と振り子時計はより速く進む。 — あるいは、エホヴァの名前 — オリエントの
君主の名前 — ローマとその守護神の名前 — ギリシア諸神の託宣集 — 最初の古
代キリスト教徒の聖書 — カトリックの聖書 — [インドの]ヴェーダ等々は秘匿され
た。このようにしてすべての理念の何という柔軟さが子供の頭に生ずることか、記し難い。
勿論混交しようと思う諸知識がすでに前もってなければならぬ。しかし十分であろう。
街学者が私を理解し承認することはない。より良い教師ならまさに言うことだろう。十分
だ。

第十七扇形

聖餐 — その後の愛餐と愛の接吻

愛するグスタフよ。我らの愛の越冬した日々が私のインク壺の中で再び花と咲く。私は

その花を素描する。読者よ、君が君の人生の何らかの春を有したことがあって、君の中にその絵を掛けているのであれば、その絵を人生の冬の月に君の温かい胸元に置いて、その色彩に命を吹き込むといい。温かさが暖炉の目に見えない春の絵を明るみに出して活気付けるが如くに — そして私が我々の花の日々を描くとき、君の花の日々を思うがいい。...我々の四つの小さな壁はアウガルテン[ウィーンの遊園地]を通じて広がっているものよりも豊かな樂園の格子垣であったし、窓辺の我々の桜の木は我々のデッサウの博愛校の小森であって、二人の人間は、命じる者と従う者であったけれども、幸せであった。服務規程で私の家庭教師に私がとても褒めあげた称賛の機械装置を私は脇に置いた。それは一人に対してではなく、学校全体に仕掛けられるべきことであるからで、私の鎖ポンプは私に対する彼の愛であった。子供はとても軽快に、とても親密に愛するもので、子供達に憎まれる者はとても下手に行っている者に違いない。私のカロリーナ刑法、テレジア刑法の序列は — 教育学的名誉剥奪刑、体罰に代わる序列は — 冷淡さ、悲しげな視線、悲しげな指示で、最高度のものは、別れの脅しである。グスタフのように優しい心根の、絶えず風によって持ち上げられる空想家の子供達は最も容易に向きを変えられ、回転させられる。しかし導きの綱のたった一つの間違った裂け目があれば、子供達は永久に混乱させられ、行き詰まってしまう。特にこのような教育の蜜月は、繊細に感ずる女性との結婚生活における蜜月のように危険である。この女性の許ではたった一回の疝気の午後があれば、どんな将来の年月の時があっても、再び消し去ることができない。私はただこう告白したいと思う。まさにこのように敏感な女性のせいで私は家庭教師になったのだ、と。女性というものは（そう私の中では言われていた）顕著な程度に子供達のすべての完全性を有するので — 子供達の間違いはすでもっと少ないのであるが、子供達の遠くばらばらの枝に自分の蜘蛛の巣を張り付け、結び付ける術を心得ている人間、即ち子供達に適合できる人間は、 — 結婚するとなれば女性同様ひどいことになる筈はないのである。

非難で子供の名誉心が傷付けられるときには、私はその非難を押さえつけてきた。私の同僚達に見本でこう周知させるため、即ち、我々の日々十分に教育されていない名誉心は、人間の中の最良のものであり — 他の感情はすべて、最も高貴な感情でさえも、名誉心はその腕に人間を高く保持するそのときに、自分の腕から人間を落下させるものであり、 — その原則は黙していて、その情熱は叫び合っている人間達の間で、単にこの名誉心だけが友人に対し、債権者に対し、恋人に対し鉄の确实さを貸与するものであると教えるためである。

正式なものより七日早く私のグスタフは聖餐[十二歳]を受けた。というのは宗教局が — 牧師達の秘密裁判所が、教区民の[教皇庁]内赦院が、政府の迫台が — 精神的断食免除、あるいは年齢免除（成年認知）としてこの七日間を、この分だけ彼の聖餐年齢に足りなかったのであるが、同じ七グルデン貨幣と引き換えに我々の膝に異議なく贈与してくれたからである。従って私の教え子は — 最も有能な宗教教師は空しく家に留まっていた — 週に二回アウエンタールの愚鈍な長老ゼッツマンの許に進軍しなければならなかった。彼は幸い私のように法律家ではなく、その牧師館では一群れの洗礼志願者が鼻面を凝固した教理問答の牛乳に突っ込まなければならなかった。 — グスタフは動物の鼻の代わりに短すぎる口を持参した。

それでも長老ゼッツマンは悪い者ではなかった。[イギリス]議会の羊毛詰めの座席に座

って雄弁家となっていたことだろう、即ち、自分を最初信じてくれない人々の間にあってまず最初に自分自身を説得するような人物になっていたことだろう。 — 雄弁家という者は、説得することと同様に容易に説得され得る。 — この長老は毎週日曜日、説教の後の最初の数時間十分に敬虔であった。確かに忌々しい気分になることもある。しかし単に説教に欠けるときとビールに欠けるときであろう。理性的な酩酊は禁欲的熱中と詩的な熱中の双方に信じ難いほど役に立つ。私のグスタフが彼の授業を聞いたということに — 単に腹を立て、嫉妬して — ここで私が世間に広めてこう書いていると言う読者は私の友ではない。つまり、地下室はこの長老の聖パウロ教会、聖ピエトロ教会であったし — 彼の魂は翼のある魚のように、翼に油が差されている間だけ高く飛翔したし — 彼はいつも酩酊し、同時に感動しているように見えて、天がもはや見えなくなるまでは天に入ることを望まなかったのだ、と。ヘルメスとエームラー[Oemler, 1728-1802]は言っている、 — それをラテン語で言えば反撥を避けることになろう、と。 — ゼッツマンの例はそのことに対する冗談よりももっと大きな反撥を引き起こすに違いないが、 — つまり彼の目に見られる超天国的水[涙]は、いつも彼のニシュー[フィート]深い罪の液体[ビール]を伴っていた、と。

グスタフは風の吹く春の午後、瑞々しい草の上を歩いて彼の許に行き、途次二つの可愛いものを楽しみにしていた。 — 第一は異教徒的村の青春のこの伝道者そのもので、その陶酔的息遣いは一つ一つが一本の帆であったグスタフの観念を嵐の風のように動かして、この者は特に最後の週、第六週に、この週では若い六週間講習者達[産褥者達]を第六の主要項[聖餐]の靴型にはめたのだが、私のグスタフの耳を長くそばだてさせて、耳からは二つの翼が生じて、それは彼の小さな頭と友に飛んで行った。 — 第二にグスタフは幅広いネッカチーフの上の幅広いバンドと同様な前掛けを待ち焦がれていた。これはすべてその上彼同様純白なもので、全教区で最も美しい肉体の上にあった — つまりレギーナの体の上であって、彼女はその身の中で第二の聖餐の準備をしていた。そのようなことで、グスタフよ、君は全く当然なことにぼんやりしたというよりは注意深くなかったのだ。もし修道院付属学校長がほんの半分このようなミューズを教師椅子上の私のだらしのない副校長の太鼓腹の代わりに配置してくれさえしたら、私は何と勉強したことだろう。もっと記憶し、もっと格変化し、同様にもっと動詞変化をし、遂には開陳していたことだろう。 — それ故に第二に次のことはまさに魔法ではなかった、グスタフよ — ただ君の耳は牧師の風上にあつたが、耳はレギーナの日向側にあつて、 — 長老が自分の良心を騙すために行った三十分の時間を、グスタフよ、君はどう考えていいか分からなかったのだ。彼は、心の中の刑事裁判官、裁判区長、秘密裁判官である良心を静めるために、自分の子供への教えを全司教区より三十分長く、彼の説教を四十五分長く行った。人間というのは義務のように、義務よりもむしろ長く行いたがる。

少女というものは何も見逃さないが、すべてを聞き逃すということをグスタフは知らなかったのだ、彼にとって全教理問答が、自分が彼女と話し合った恋文のようであった。彼女が長老に返事をしなければならぬとき、彼は赤くなった。「長老は自分の質問や強制には責任はない」と彼は考えて、彼の視神経は彼女の顔に釘付けになった。

ファルケンベルク家にはどこの床にも特別な聖餐室はなかったのだ、私の代父[名親]、騎兵大尉は臣下の先頭に立って祭壇に進んだ。従ってグスタフも進んだ。

懺悔の土曜日に、 — 私の最も敬虔な恍惚の静かな日々よ、再び私の前を通り過ぎて、君達の子供の手を私に与え給え、私が君達を美しく、忠実に描写するべく。 — 土曜日にグスタフは食事の後、 — すでに食事の間、彼は愛と感動の余り両親をほとんど見つめることができなかった — 階段を登っていった、かくも美しい習慣に従って、自分の家族の者達に自分の過ちの赦しを請うためであった。人間は、赦しを請うときほどに、あるいは自ら赦すときほどに美しいことはない。彼はゆっくりと登って行って、自分の目の涙が乾き、自分の声がより確固なものとなるようにした。しかし彼が両親の目の前に来たこと、彼の目からすべてがまた溢れてきて、長いこと自分の燃えるような手で父の手を握って、何か言った。ほんの三言言った。「父上、私を赦してください」。しかし彼は声に出せなかった。両親と子供は静かな抱擁に変えた。彼は私の許にも来た。...ある種の覚悟のとき、相手はその覚悟であって、従って我々の覚悟を許すとき、人々は喜ぶものである... 私は、グスタフよ、君が今、私の部屋にいたらと願う。 — 子供達が神を — 大人のように自分同様のものと、つまり子供のようなものと考えずに — 一人の人間と考えるとき、これは彼らの小さな心にとって十分なことである。グスタフはこの請願の後、よろめきながら、震えながら、麻痺して、あたかも自分の考えていたものを — 神を — 見ているかのように、 — 過ぎ去った幼年時代の洞窟に降りて行った。彼が、地球の樹皮の下、教育されて、自分の最初の日々、最初の遊びや願いが埋葬されているところであった。ここで彼は跪こうと思った。そして諸太陽と諸地球の精霊が我々の人生でのかのひょっとしたら最も敬虔な時代に、すべての感情豊かな子供達を見ているこの砕け散った祈りの姿勢の中で彼のすべての魂をただ一つの音に、ただ一つの溜め息に変え、魂を感謝の祭壇で犠牲にしようと思った。しかしこの最も偉大な人間的考えは新しい魂のように彼の魂から引き裂かれて、彼の魂を圧倒した。 — グスタフは横たわっていて、彼の考えさえも黙した。...しかし声は、胸の中に残っている声は聞き取られ、考えはその姿が見えた。その考えは精霊の光線の中、沈んで行った。別世界で人間はその此岸での黙した祈りを捧げるものである。

この聖なる浄福の一日の夕方、あるあやすような静寂がその確かな両手で彼の一杯に詰まった心を運んだ。彼は力任せにその短い子供の両腕、人間の両腕を喜びの周りに巻き付けたのではなく、この喜びがその母親らしい両腕を優しく彼に回してきたのであった。静寂のこの穏やかな西風は — 歓呼の台風が、全てを通じて、全てに逆らって、人間を拉致するのではなく — なお聖霊降臨祭に戯れながら小さな花々に満ちた彼の生の周りに吹き寄せてきて、快活な聖霊降臨の太陽が彼を見いだしたとき、彼の生命は優しく運ぶ雲の上に横たわっていた。しかし飾られた胸の花の香りが、締め付け、ざわめく服装の感情が、組鐘の音色が、この音色の響き渡る調子は黄金の糸のようにすべての個々の場に行きわたり、それらの場を一つにまとめたのであるが、それに白樺の香りが、そして教会の緑色の薄明かりが、断食さえもが、こうしたことすべてが、彼の感情と彼の血球とを飛ぶような循環に投げ込んだとき、彼の胸の中では一つの太陽が点火されることになった。徳操ある人間の像[イメージ]がこのときほどに人間の前でかくも偉大な、雲を越えて行く輪郭の中で燃え上がったことはなかった。 —

しかし夕方になると。 — 幼い聖体拝領者達はより軽やかな心と、より一杯になった胃とでお利口なグループを形成して歩き回り、食事と晴れ着とを感じていた。グスタフは

— 彼の炎からは夕食で若干のものが覆われることになったが、まだ穏やかな熾きに抑えられていて — 自分の庭をゆっくりとあちこち歩き回った。自分の頭は舞踏会場ではなく、喜ばしい感情の苔の付いたベンチであったからで、そして眠り込んだチューリップの花弁を開いて、この花の牢獄から幾匹かの居残りの蜂を出してやった。最後に奥の、庭に通ずる小さな扉の戸枠に寄りかかって、野原を越えて憧れながら小さな村を見下ろしていた。そこでは順次両親達と一緒にしゃべりながら、子供達を母親らしく自慢げに見守っていた。両親達は今日最初に、そして恐らくは最後に散歩したのであった。百姓と東洋人はただ座っているのを好むからである。そのとき臆病な百姓の子供達の中隊が注意深く庭の壁を取り巻いた。この中隊はグスタフが今日鳥籠に入れて野外に持ち出した老椋鳥がその真に皮肉な調子で一杯野蛮な悪態を付く様を間近で聞きたいと思っていたのであった。子供達は慣れない服で慣れない所にいると慣れない様子となる。しかしグスタフは彼らと会話に移るための導音を幸い手にしていた。椋鳥のことで、ただ彼は椋鳥と一体化しさえすれば良かった。すべて上手く行った。この鳥のおしゃべりの技法でやがて会話は一般的なもの、とらわれのないものとなって、皆と一緒にあれこれ話せるようになった。グスタフは物語を話し始めた。しかし私よりもっと若くて公正な聞き手を相手にすることになった。彼は瞬時に話を考え出しては語り、そして彼の空想はその翼で果てしない場を得て、何も衝突することはなかった。そもそもより一層気の利いたコントは書いている時よりも話している時に考え出せるものである。私とその本を読むよりは結婚をしたいと思っているドヌワ夫人[d'Au(l)noy, 1650 ごろ-1705]は、その妖精の話を小さな子供の耳の前にして考え出していたら、我々大きな子供にもっとより良い話を提供していたことだろう。

腰掛けるという口実の下、彼は聞き手の聴衆全員をあるバルコニーの上に招いた。それは庭の菩提樹の木の周りに階段を付けて、編み込まれ、アーチ状のものであった。...私は早々私の読者を降ろすようなことはしない。というのは蜂と彫刻家と私は菩提樹をととても愛しているからで、蜂は蜜を、彫刻家はその柔らかな木質を、私はその優しい名前と香りとを大切に思っているからである。

しかしここではなお何か全く別な愛すべきことがある。 — 三人の聖体拝領の娘達が開いた庭に通ずる扉のところから聞き耳を立てていて、遠くから聴講のホールを二重化していた。一言で言うと、レギーナがその娘達の中において、彼女の弟はすでに庭にいた。ギャラリーあるいは栈敷席は最後に — 上がって来るように言っても無駄だったので — 女性の席を引き上げなければならなかった。私自身今やもっと熱を込めて語っている。グスタフもそうしたことは不思議ではない。レギーナが彼から最も離れて、しかし彼に向かい合って座ったのである。彼は全く新鮮な物語を始めた。機知工房がはるかに補強されたからである。惨めな本当に幼い一人の少女を — 子供達は物語では最も子供達を望むものなので — 彼は描き出した。夕食のパンのない、両親のいない、ベッドのない、頭巾のない、それに罪のない少女であるが、しかし、星が着飾って、下界に降りてきたとき、下界で可愛いターラー貨幣を見つけた。この貨幣には銀の天使が描かれていて、この天使が次第に輝きを増し、大きくなって、遂には翼を広げて、貨幣から天の方へ飛んで行き、それから幼い少女に天の多くの星の中から、少女のおよそ望む限りのものをすべて取って来た。それも素晴らしい品々で、その後天使はまた銀貨に戻って来て、そこに優しく収まった。 — 何という炎が語っている最中、グスタフの言葉から、彼の目と表情から、聞

き手に対して放たれたことか。その上ついでに月が菩提樹の夜を足許の大地で揺らめく銀色の点状に刺繍していて、 — 遅参の一匹の蜂が輝く圏の中をジグザグに進み、天蛾が花輪で飾られた頭の周りでぶつぶん言い — 菩提樹の緑と天の青とを二重の背景にして、星々の傍ら花卉が震えていた。 — 夜風がまばらな木陰道と着飾ったレギーナの黄金の飾りの上で揺れて、涼しい波となって彼女の炎の頬とグスタフの熱い息とを洗った。...しかし演壇さえも彼は必要としなかったとまことに私は主張する。それほど演壇と講演者は素晴らしかった。演壇がどうしても必要であろう、彼はキリストの花嫁と自分自身の花嫁に語っていたのだから。今日一日全体がまばゆい後光を射してまた立ち上がったとき、彼が同情を屈託のない子供達の胸の中に引き入れて、子供達の中からまた搾り取ったとき、そして彼がある女性の両目が潤んでいるのを見たとき、...彼自身の両目は歓喜で溶け去り、彼は自分の微笑を次第に大きく広げて行って、すでに一層美しく[涙で]覆われていた自分の目が隠れるようにした。 — 「グスタフ」とすでに二度館から呼ばれた。しかしこの浄福のとき誰もそれを耳にしなかった。そして三度目その声が下の庭で間近に響いた。麻痺した秘密の一行は階段を転がり落ちて行った。 — グスタフの隣ではただレギーナだけが暗い木陰道の下に留まっていて、急いでエプロンで物語の痕跡の涙を両目からぬぐって、針で何かを上で留めようとしていた。 — 彼は、彼の人生の多くの美しい夕焼けが沈んでいくのを反映していたその顔にとっても間近に、とても黙して立っていて、彼女が去ろうとしたとき少し引き留めた — 彼女が静かに立っていたら、彼女を引き留めることはできなかったであろう。しかし彼女が離れたので、彼は一層しっかりと、より大きな弧を描いて、抱きしめた — 二人が抗ったので、二人は和合した。しかし彼の酩酊した魂にとって間近さは接吻の代わりとなった — 諍いが彼のびくつく唇を彼女の唇に導いた — しかし彼女が自分の胸から彼の胸を遠ざけて、彼の胸を針で傷付けたとき、初めて、彼女を、自らの血で名状し難く陶酔した恋情で抱きしめ[編み込み]、彼女の唇から彼女の魂を吸い込もうと欲し、彼のすべての魂を注ぎ込もうと欲した — 彼らは二つの離れた天球上に立っていて、互いに深淵を越えて支え合って、震える土台の上で抱擁し合い、天球と天球の間で離れて落下しないようにした。...

...私が彼の接吻を千倍も燃え上がるように描くことができるものなら、そうすることだろう。というのはその接吻は魂の最初の模刻の一つであり、愛の鈴蘭の一つであり、それは土製の人間の最良の、私の知る分留であるからである。ただこのドイツ人やベルギー人の生活では、人間が最初の接吻を五回、六回以上することはできない。後に人間は頭にある接吻についての事柄の定義をいつもきちんと覗き込み、それが載っている一節を引用する。しかしその馬鹿な一節の全内容はこういうもので、つまりその件は本来赤い皮膚の同時圧迫であるというものである。まことに感情ある著者ならば、腰を下ろして、こう考えるとき、即ち接吻というものは精神的なものの中で、肉体的なもの味が混ざっていないときにのみ、享受されるわずかなものの一つであるとき — このような感情の著者は（これは他ならぬ私のことであるが）、この者ほどに分別を有しない著者達を叱責せざるを得ない。 — この者はその著書に余りに多くの接吻が書かれているファイト・ヴェーバー氏[本名 Wächter, 1762-1837]やコッツェブー氏[Kotzebue, 1761-1819]だけを単に叱責するのではなく、またその生活に余りに多くの接吻が生じている他の人々をも叱責するのであり、即ち、行楽のピクニックの一行全体で、彼らは互いに食卓の祈りの後、頬を

唇で掃除し、吸血するのである。我々の顔のこの美しい唇の花が羊製の皮膚や蚕製の皮膚、つまり手のサンダルでしわくちゃになるような次第となると、このような感情豊かな著者は、受動の当事者の両手を、実践の当事者の唇を切り離したくなる。...

私が先の接吻で熱くなった読者にこのような冷たい注水をしたのは、実際、運命が私に仕掛けるように読者をあしらうためではない。というのは運命はとにかくこう定めているからで、私がグスタフの場面のようなこのような喜びの香油の場面の最中になると

— あるいは単にこのような場面の描写の最中にすぎなくても、私を早速塩漬け用汁とか発煙硫酸の下に漬けるよう決めているからである。そうではなく私はまさに逆に哀れなグスタフが出会ってしまった対立した場面の交替に対する厭わしい感情を読者に対して半減させたいからである。というのは下でこう呼ばれたのである。

「あなた達早くなさい」。騎兵大尉夫人は私の無邪気なグスタフでは感じ取れないほどのもっと侮蔑的なことを調子に込めていた。恋する少女はこのように急襲されて、恋する男が得ていた勇気を失ってしまった。呪いの処罰の歌の最初の詩句は無邪気なレギーナの耳を孔だらけにして、彼女は黙って泣きながら庭から忍び出て、喜びの一日を悲しく締め括った。より穏やかな詩句がこのお話の詩人の男の子を捉えた。この子は自分の教訓のコントを美的に、情熱[パトス]を込めて^{*原注1}仕上げようと計画していたが、今や自身他人の[母の]パトスに捉えられたのであった。エルネスティーネの心や唇、耳は極めて厳格な格子の背後で育てられていた。それ故彼女のとてもメロディー的魂は（単なる接吻の際に）見知らぬ厳しい調子に移って行った。彼女は最も美しい少女に何も認めず、ただ「良い娘[こ]ね」と言った。そもそも私には、他の女性のある種の間違いを大目に見て判断する女性は、その寛容さがいかがわしく思える。全く純粋に女性的な魂であれば、自らにせいぜい、もっと純粋ではない魂に対するこうした寛容さの振りを強いるものである。

罪のない唇にグスタフは最初で最後の接吻を行った。というのは聖霊降臨の週が済むと、この羊飼いの少女はマウセンバッハに館の奉公人として去って行ったからである。 — 我々は彼女についてはもはや何も耳にすることはないだろう。 — そのようにこの本全体を通じて、二度と戻らない場面に満ちた人生のような具合になる。今やすでに太陽がグスタフの生活の日々でより高く昇って、ひりひり刺し始める — 歓喜の花が次々とすでに午前中に微睡みのためにうなだれて、遂には夜の十時には頭を垂れた盛りの花が消えた花々と共に眠りにつく。...

第十八扇形

シェーラウのモルッカ諸島 — レーパー — ベアータ — 薬用女性服 — エーフェル

*原注 1 ちなみにグスタフの接吻の勇気は自然なものである。我々男性は女性に対する勇気の三期間を経験する。 — 最初は子供の期間で、女性に対してまだ感情等の欠如から勇敢である。第二期は陶酔的期間で、詩作するが、勇気はない。 — 第三期は最終期間で、大胆に振る舞うに十分な経験を有し、女性を大事にし、尊敬するに十分な感情を有する。グスタフは最初期に接吻した。

我々皆にとって、この伝記の読者並びに住民にとって、シェーラウはとても身近なもので、主人公グスタフはこちらに士官学校生徒として来ており、家庭教師の私はこの出身で、ドクトル・フェンクはまだ当地にいて、フェンクはこの話の中でなお重要な人物となるはずで — こうしたすべての理由にかかわらず、フェンク博士の書類を私が挿入しないと、私は奇妙な行動をし、執筆していることになろう。話しているのは二つの新聞記事と一通の手紙で、このペスト看護人が書いたものである。

シェーラウの上層圏を旅した何人かの高貴な余所の人々にとって、ドクトルが印刷されていない或る新聞を書いている、つまりペン書きの新聞、手書きのニュースを、幾つかの首都同様に有していることは、周知のことであると私は承知している。村々には印刷されたニュースがあり、小都市には口頭のニュースがあり、首都には手紙のニュースがある。この手紙は、自分の諷刺的薬を分配するフェンクのマルフォリオであり、パスクイーノである。

彼の最初の新聞記事を私は挿入するが、それはただ『ドイツのためのジャーナル』誌のせいである。このとても平凡な、とても口達者なジャーナルは — というのはさもないとドイツによってドイツのために書かれはしないであろうからで — 私の立派な論文、つまりシェーラウにおける尋常でない取引の繁盛について書き送ったこの論文を取り上げなかったことがある。ひょっとしたらドイツでシェーラウ政府ほど知られていない政府はないからかもしれない。まことに人々はこう考えるべきであろう。この侯爵領は鯨のように極地の海の氷の表面の下に隠れていて、この領地についてのかなり重要なニュースが知られていない、と。例えば、我々シェーラウ人は新しい政府になって以来、すべての東インドの商取引とモルッカ諸島を我々の許に引き込み、そこから我々は今や香料を自ら取り寄せ、政府自らがそのためにアムステルダムから香料を発注しているといったニュースのことである。 — — しかしこのことはまさに最初のこの新聞記事に書かれていることである。

第十六号

シェーラウにおける香料の島とモルッカ諸島

バイロイト近郊のブランデンブルク池は 500 地積の掘り出された陸地の湖で、数ヵ月前はその中に一時間ほど私は座っていた。というのは今人々はその湖をその青白い岸辺の住民のために乾燥させているからである。四人の君主が掘り出しを続けさせたシェーラウの池はそれより 129 地積以上大きく、ドイツにとって重要である。というのはその気体静力学的霧のせいでその池は地中海のようにドイツの天候を、風がその両者と通り過ぎると変えているからである。干満は厳密に考えれば、涙や真鶉[マヒワ]の飲み水鉢にさえ見られるかもしれないのであるから、このような池ではいかばかりであろうか。 — この池をかくも飾り、薄板を張っている各島の司教区、例えばバンダ、スマトラ、セイロンや美しいアムボイナ、大小のモルッカ諸島は、現今の政府の下、ようやく水中から出現した。 — あるいはむしろ水中に出現した。ビュフォン氏がまだ存命であれば、ビュフォン氏やその他の自然科学者の目を引いていたであろうが、シェーラウの大洋上の諸島は珊瑚の積み重なって生じたのではなく — 海底のヒトコブラクダの背を水中から湾曲させた地震

によって生じたのでもなく、一 近くの火山によって、水中にこれらの山々を振りまいたであろう火山によって自ずと生じたのでもなかった。というのはスマトラや、大小のモルッカ諸島は単に小さな班ごとに無数の手押し車や干し草馬車で岸边に運ばれてきたからである。一 一輪車には石や砂、土、それに可愛い島のすべての原料が積まれていて、それで夫役の百姓達が、国王の百姓も、騎士領の百姓も、煙草を吸って島々を形成する火山といえるほどの者が、すぐにモルッカ諸島を仕上げたのであった。一方国王の河川に架ける騎士領の橋は開始もまだされないものであった。国王の意図はシェーラウにおけるアジアの全東インド貿易を煙草碾き器のように手に入れることで、一 思うに我々はその貿易を得ている。ただ違いがあつて、シェーラウの香料諸島はオランダの香料諸島よりもまだましである。オランダの諸島ではまず胡椒や肉豆蔻[ニクズク]の種子等の成熟を待たなければならぬ。我々の諸島ではすべてはすでに成熟して乾燥しており、ただ食物に擦り下ろしさえすればいいのである。これができるのは我々皆がその実をすでに全く早々と一 アムステルダムに発注しているからである。つまりこんな具合である。

「収益権というのは、すべてに対してであるか、皆目ないかである。法律家としては、侯爵達が、最も貴重な、極めて稀な産物を自らの収益権に加えているけれども、一般的な、しかしそれだけに収益のもっと多い産物は領民の手に任せて、それで国庫を弱体化させていることを看過できない。法律家は、南アジアの君主達が、彼らはいつもはとても専制君主的であるが、もっと首尾一貫性を有していると思う。この君主達は野獣や塩、あるいは琥珀、あるいは真珠を奪うのではなく、国全体、取引全体を奪って、この両者を単に年ごとに小作としている。ドイツの侯爵達は、すべての他の侯爵達よりこの点ではより大きな権能を有している。というのはすべてのヨーロッパの帝国はインドに所有地[植民地]を有しており、新イギリス、新フランス、新オランダを有しているが、しかし旧ドイツは新ドイツを有していない。そして一人の君主がなお収奪すべき唯一の国は、自分自身の国であるからである。ポーランドやトルコを新オーストリア、新プロイセン等々とする術を心得ている場合は別である。

しかしこのことをこれまで洞察したのはシェーラウの支配者を措いてない。この君主はこの原理を枢密院に提示したが、採決の前にこう決めていた。人々はすべての香料を自分[君主]の許で求めるべきである、と。君主自身は、自然と同じく、自分のモルッカ諸島で香料を、自分の国が食する香料を作ることにしたが、これは貿易仲介業のフォン・レーパーを通じて、こうした香料の種、一 胡椒の粒、堅果等を、植物にするためではなく、料理のために一 アムステルダム経由で送らせることであった。それ故（モルッカ諸島では香料の横領が盛んであったので）、見習い士官や軽騎兵による胡椒やシナモンの非常線が国内に張られた。誰も、肉豆蔻鳩がその大腸に収めるほどに、肉豆蔻の種子を密輸入できなかつたことであろう。私のシェーラウの読者が店から買うものすべては、その商店は私が植字工を有するよりもっと多くの船や旅の従者を戸外で有する大きな家であろうと、哀れな露天商の賃借りの店であろうと、この露天商は言及するのも気の毒で、その日記帳は石盤であり、その資本台帳は汚らしい部屋のドアで、その商品は船で来るのではなく、陸荷として腋の下あるいは陸送で、即ち肩の上の棒で運ばれてくるものであるが、一 どちらにしてもシェーラウの読者は、鼻の先にあるモルッカ諸島からの生産物を咀嚼することになる。一

このようなことを判断できる者は、後で香料検査官に心から賛同することになる。この者はシェーラウの知性新報にこう書いているのである、1) 今やこの国は胡椒や生姜をより安い値段で購入できるが、これは単に国庫が、これらをより大規模に、従ってより安い塊で取り寄せることが可能であるからであり、2) 君主は今や、インドを經由して我々の財布を空にするこうした美味なものをすべてのドイツ人の中でまずシェーラウ人にやめさせることができるのであるが、これには単に君主はその値段をかなり上げさえすればいいのであり、3) 新たな奉公人達はそのパンを得るであろう。

私は次のことを擁護する必要はないであろう。つまり我々の侯爵は — ロシアの女帝は村々に都市の権利を与えているので — 瓦礫の丘に島の権利を与え、あるいはこの丘に東インドの名前を贈っているのである。最大の島でも船乗りの阿呆は皆、この島はその上この者が作るというよりは発見するものであるが、名親の役を引き受けていいからである。我々のスマトラ島は1/4平方4分の1時間の大きさであり、主に胡椒を有する — ジャヴァ島はもっと大きい、しかしまだ出来上がっていない — コンサート・ホルの三倍も大きいバンダ島では自然は肉豆蔻の種子を供する、アムボイナ島は丁字を供する。ティドレ島では著名なシェーラウ人の（ここではドクトル本人の）感じのいい別荘があり — 池の中で点在している小さなモルッカ諸島は、その産物と共に私のチョッキのポケットに収まりそうであるが、しかし良いものを有している。 — まだ海沿都市、小さな港を見たことのない人は、こちらのシェーラウへ旅して、自ら午後、すべての民族の結託した手がなす取引は今日どのようなものであるか、その証人となることができよう。

— こちらでは商船について概念を得られるのであって、商船とは何度読んだことはあっても、見当の付かないものであったろうが、しかしここでは本当に我々の池の上で帆をかけているのが見えるのである。 — 貿易仲介業のフォン・レーパー氏の所謂香料船を見ることができ、この船は暑い気候のところの似て、レーパー氏の発注する香料をすべての島々の下で分配するのである。 — またわずかの筏で東インドからわずかの商品を取り寄せる哀れな輩にも出会うが、彼らはクロイツァー単位で売りさばくのである。 — 旅人本人が立っている港や岸辺で、所謂呼び売りの女達が胡椒菓子や胡桃で小規模に行う沿岸取引なるものも目にすることができる」。

第十六号の終わり

フェンク新聞の第二の作品はまさに貿易仲介業フォン・レーパー氏の描写であるが、レーパー氏の名前はない。読者がこの脱線を読んだら、脱線ではないということだろう。

第二十一号

不完全な性格、新聞社で長編小説作家のために売り出されている性格

長編小説では世間同様、完全に立派な人間は好まれない。しかしまた徹頭徹尾悪漢である者も読者や脇の人間達の気に入らない。 — これは単に半分か、四分の三程度そうでなければならず、大きな[宮廷]世界では万事が、称賛や猥談、真理や嘘がそのようなものである。

新聞社には半分悪漢がいて、シェーラウのすべての長編小説作家にわずかな代価と引き

換えに売り出している。私は作家諸氏に請け合うが、この悪漢をより高く売りさばくために、この者の不完全性を誇張しているのではない。社主はこの悪漢が邪悪さを十分に有しなければ、また引き取るのである。

この不完全な性格はローマの教皇領で母胎に仕込まれ、下部イタリアの国境で生まれた。そして洗礼を受け成人した後、麻櫛と鼠罌を買い込んだ。イタリア人はそれらを豊富に売りさばいていて、この商売の分野はイタリア人の許で栄えていることを知っているドイツ人は極めて少ない。我らの性格[人物]はやがて麻櫛の代理人から麻櫛の社員へのし上がった。彼はイタリアから仕入れた鼠罌をドイツで仕上げ、鼠穴は彼のオフィル[金の産地、旧約聖書]となり、亜麻の野原は彼の貨幣の町となった。彼がその貴族証明書の購入前に現在の動物画家に売り払った麻櫛は、5.5 グルデンで手放したものであった。

彼はすでに誕生前の別世界で大きな家で取引をしていたに違いない。というのは彼はすでに商人魂を完全に備えて生まれてきたからである。前もってこう語っていないとすれば、私の落ち度ということになる。つまり彼は九歳の少年のとき、自分が天然痘のとき、小さな店を開いて、天然痘菌を安売りしたのであった。つまりこの菌を人々は、彼の薬局から、即ち彼の体から接種のために買ったのである。彼はただで天然痘を配らず、その代金を要求し、こう言った。自分は天然痘菌の種子業者であるが、まだ駆けだした、と。自らのマニファクチュアによるこの取引はやがて医者と自然のお蔭で終わることになったが、医師は言った。自分は一人の薬店主ほどの値段である、と。それ故彼はそれどころか自ら薬店主になろうと欲したのであった。

彼は更に、メクレンブルクの方言辞典の意味での薬店主にもなった。というのはこの方言辞典には、どの原料店もいわば薬店であると言われているからである。つまり下部シェーラウで彼は宗教と糊口の分野を変えて、単に買い手にとってのみ麻櫛と鼠罌である店を建てたからである。ここで彼は店の若い衆、料理人、床屋、それに朝の祈りの朗読者を雇った。 — これらすべての人物をただ一人の人物、彼自身が兼ねた。この人物は[カバラの神]エンソフのように一切であり、一切を行った。

我らの悪漢にあつては、不完全な性格として徳操は間違いへと鈍化されなければならないので — 私はさもないと長編小説の建築主に推奨しないであろうから — 私が彼の白い側面をも彼の黒い側面の隣に持ち込み、ボヘミアの食卓のようにいつも白い料理と黒い料理とを並べるようにするとしても、私のことを悪く受け取らないで欲しい。

彼は当時日曜日に、自分の店から、許された儉約とはいえ、それでも立派に着飾って外出した。彼の帽子、彼の薬指、彼のチョッキは本物の黄金で縁取られていた。彼の胃とふくらはぎは蚕が紡いでいて、彼の背中はイギリスの羊が紡いでいた。ここで稀な秘かな善行であったものが浪費と呼ばれているのは全く人間的悪意にかなったことである。この不完全な性格が身にまとっていたすべては — 担保の品であった。というのは人々を質入れから遠ざけるために、自分が抵当貸しとする担保のすべてを、それが自分の許にある間は着用すると言って、皆を脅していたからである。このようにして彼は多くの者を遠ざけていた。そして、人間的好意的警告が何の甲斐もなかった者の衣服を彼は実際日曜日、食事の後、着用した。それ故彼が自らの許で、何人かの従者達のように、幾つかの衣服を組み合わせて、虹のような彩りで、あるいは布地から布地を食っていく衣蛾のような具合に登場しても、それは趣味の欠如というよりは、吝嗇と厳格さの欠如であった。

浪費というのが、とても外観上はそう見えても、彼を不格好にしているのではなかったと私は確かに承知しているので、すべての[浪費の]外観を次の報告で取り去りたいと思う。つまり彼は土曜日ごとに一ポンドの肉を一人前買ったが、しかし — というのはこれはさもないとまだ何も証明しないからで — 食べることをしなかった。彼は確かに一つを、スプーンで食べたが、しかしこれは先の土曜日の分であった。つまりこの不完全な性格は土曜日ごとに肉屋から自分の礼拝の肉を取り寄せて、それで日曜日の野菜料理を高尚なものとし、飾った。しかし彼は野菜部分しか食しなかった。月曜日にはその動物部分をまだ有していて、それで第二の野菜料理の風味を付けた。 — 火曜日に煮られた肉は新たな火と共に新鮮なキャベツの文化に関わった。 — 水曜日には彼の前で肉はスープの脂肪の玉となって別のキャベツ・スープの中で色目を使わなければならなかった。 — そのように進展し、遂には日曜日となって、その日浸出してきた肉の縞模様は自ら食事[食物]となって、しかし別の意味で、そしてレーパーはその一ポンドの肉を実際食べた。同様に人々は一ポンドのライブニッツの考えや、ルソーの考え、ヤコービの考え^{*原注 1}と共に著作者達の紙[葉]作品で一杯の船舶用釜を力強く煮立てることができよう。

この儉約を不完全な性格は更に若干の欺瞞で正当化した。彼は立派に仕入れた財貨を改竄して、こう返事した。自分はそれらを劣等な状態で入手した、かくかくしかじかで、自分が使用できるのは単にその半分の値段であろう、と。値段の三分の一を彼はこのようにして十分巧みに商人の遠く離れた財布から払わせた。彼の家で一時滞在するだけで、更に遠くへ運ばなければならない商品、樽や、袋には小さな穴によって通過税を支払うことになった。この穴は彼が仕掛けたもので、わずかなものがそこから支払われるはずで、それが欠けた場合、御者の負担になるであろうものであった。 — 彼は哀れな負傷し、切断された金貨のための貨幣陳列室、あるいは病院を設置していた。他の評判の悪い貨幣に彼はその失墜した名前に名誉ある名前を取り戻させ、自分の代理人に、その貨幣を正当なもの、名誉回復したものとして受け入れるよう強いた。金貨がたとえどんなにひどい状態

*原注 1 デュッセルドルフのフリードリヒ・ヤコービ。彼の『ヴォルデマル』において — 今なお百科辞書について、この辞書に抗して書かれたものの中で最良のものであるが — 更に彼の『アルヴィル』において — この中で彼は感情の嵐を原理の陽光で調律しているが — あるいは彼のスピノザやヒュームにおいて — 哲学について、哲学の賛否に関して最良のものであるが — 余りに偉大な簡潔さと（すべての体系について最も昔から通曉している効果である）、あるいは物思い、あるいは空想、あるいはある種の稀な人間に見られる若干の特徴を賛嘆する人は、このような人はヤコービがドイツ人の名声の神殿に足を踏み入れなければならなかったとき、呼びかけられた最初の吠え声はなはだ耳に厭わしく響いたことだろう。しかしただ思い出さなければならないのは、ドイツでは（別の諸国とは異なって）新しい力のある天才はいつも神殿の敷居で、司祭達がいる神殿の中自体とは違って受け入れられる（例えば吠える三頭の者[ケルベロス、地獄の番犬]達）ということであって、クロブシュトック、ゲーテ、ヘルダーといった人達でさえ事情は異ならなかった。しかしケーニヒスベルクの御身、哀れなハーマンときたら気の毒でならない。『一般ドイツ文庫』や他のジャーナルでは何と多くのモルデカイ[エステル、ハーマン殺害]が御身の絞首台を造り上げ、御身の絞首綱を編んだことか。 — しかし御身はそれでも幸い単に仮死状態で絞首台から戻って来た。

で彼の家に来たとしても、彼はそれを一人の将校のように昇進させずには退職させなかった。このようなより高貴な魂は金の不足でさえ愛の外套で覆うのである。

このようにして彼の商人の財産、領地は次第に増大して行った。公共の友好的温かさではぐくまれた彼の心の中で、卵の滴虫類のように、彼が名誉と呼ぶ羽毛のない透明な鈍いものが生じてきた。かくてこの不完全な性格は一つの性格を商業顧問官として登場させた。

今や、彼は名誉をまことに翼のところ、紙上に固定させたので、名誉をまだ紙の下に有していなかった以前よりも早く名誉を侮辱できるようになった。そこで彼は自分の愛の告白を一人の美しい娘の極めて豊かな極めて吝嗇な父親に対して行った。この娘は一人の将校に対する愛を最後の一步の段階に至るまで行っていた。娘は彼の愛の告白を憎んだ。しかしこの性格の男は父親の助けを借りて、彼女の逆らう手を我がものとして、その手を祭壇に導き、指輪を彼女にねじ込み、彼女の手を彼の手打ち込んだ。彼女の二人目の子供は彼の最初の子供となった。^{*原注 2}

しかし彼の名誉はこの出血と排出の後、きちんと両足で立つことが難しくなったので、彼は、彼女の首にまことに強壯化する魔除け、ロヨラのブリキ護符、聖ルカや聖アガタの魔除けをかけようと思いつかざるを得なかった。 — 貴族証明書のことである。名誉はウィーンの帝国枢密院事務局で無事修復された。

彼は自分の妻とではなく、単に債権者達とのみ財産共同体を有していたので、商人の身分から罪のない破産によって暇を取り、自らと自らの純粋な良心と、妻の財産と、自分の財産を田舎の諸領地で救い、そこで自分の神に仕えることにした。

神とは彼の神々のことである。 — ちなみにこの不完全な性格は友人達を有しなかった。友情についての彼の概念は余りに高貴で気高く、最も純粋な最も利己心のない愛と犠牲を友人に求めていた。それ故彼の周りの低級な輩には反吐を覚えていた。この輩は彼の心ではなく、彼の財布を求めていて、彼を抱擁するのは単に、彼から何かを絞り出すためであった。このような利己心は自分の前で決して目にしたくなかったので、それ故彼の家は、人間の気管やスパルタ同様、異質なものは何も我慢できなかった。彼はモンテーニュ [『エッセー』、1.28.参照] 同様こう思っていた。人々が本当に愛することができるのは、一人の恋人同様に、一人の友人以上ではない、と。それ故彼は自分の心をただ一人の人物に贈った。自分が皆の中で最も高く評価している人物で、つまり自分自身であった。 — この人物については彼は試してきていた。彼自身に対するこの人物の利己心のない愛で、彼はキケロの理想を達成することができた。キケロはこう書いていた。人は友人のためには何でも、自分のためならしないような劣等なことさえすることができる、と。

彼はシェーラウで最大の禁欲[ストア]主義者である。彼はすべての享樂は空しいと言っているばかりでなく、すべての現世の財産も軽蔑していた。それで彼は幸せになることができないからである。財産のこの蔑視は、財産を求める極めて激しい努力とは恐らく区別

*原注 2 神かけて、読者にはすべてを理解して頂き、ここではただ若干最初の方の扇形を思い出して頂きたい。そこではこう語られていた。貿易代理業者のレーパーの妻は、騎兵大尉ファルケンベルクの最初の恋人であって、この代理業者に、騎兵大尉との間の最初の長子を結婚の贈り物としてもたらした、と。

され得ないもので、注の中で禁欲[ストア]主義者^{*原注 3}が言っているように、賢人というものは、人生の動産の中にただたわしとか家畜小屋の箒が残されているならば、そんな人生を、ただこの些少のものが欠けている人生よりも優先するであろう、たわしを含む人生でより幸せになるわけではないが、優先するであろうから、区別は難しい。それ故この不完全な性格はごく些細な効果にも、老シャンディーがごく些細な真実に対してそうであったように[Ⅱ.19.参照]、最大の効果同様にある価値を置いているのである。それ故彼は胡桃の殻で暖を取り、剥がれた封蠟で封蠟し、他人の手紙の余白に自分の手紙を書く等のことをせざるを得ない。不完全な性格はこの点で、吝嗇家と類似点を有する。吝嗇家は同じように些細なものを活用し、どんな根拠を挙げても吝嗇家を論駁できない。というのは私が一グロッシェンを投げ棄てることが許されないのであれば、一ペニヒも、半ペニヒも、1/100000 ペニヒも投げ棄てるのが許されないからである。根拠は同じである。

人間の中には吝嗇への恐ろしい嗜好がある。最大の浪費家でさえ更にもっと悪しき者、最大のけちん坊へと、この者が沢山増大させる価値があるのだらうと思うほどに沢山与えられると変わり、その逆も言える。かくて水腫症の者は、水でもっと膨れあがるにつれ、もっと水を欲しがると、共に同時に水への渇きが減ずる。

この不完全な性格は天に二つのことを感謝した。一つは自分が吝嗇に陥らなかったことで、二つ目は浪費に陥らなかったことである。一つは自分が妻と子供に対して何も拒まず、すべてを与え、浪費への素地を維持しようと思う愚かな人々に対してのみこの素地を彼らの手から取り上げたこと、これは昔のドイツ人やアラブ人、タヒチ島の人々がただ余所の者から盗み、同胞からは盗まなかったようなものである。一つは更に自分が純潔であって、ヴィーナスの帯を解くより、商人の皮の胴巻きを解いたこと。一つはそしてこれこれの者同様に多くのペニヒ硬貨を有するときならば、貧乏人に対して全く別様の救助を欲したこと。一つはしかしそれでも自分のわずかなものは悲嘆の者が苦悶を取り去らせないように取り上げさせなかったこと、いつか最後の審判日に、自分が自分のポンド（イギリス貨幣）で高利貸しをしたか尋ねられるであろうこと、以上のことを天に感謝した。

新聞社におけるこの売り物の性格はイギリスの罪人のように商品であると同時に売り手であり、長編小説作家に対しては自分の全本性と引き換えに無料で、自分が登場する長編小説しか欲していない。

以上がフェンクの筆で、彼はすべての人間を我慢するが、しかし非人間、しわい男は好まない。私はこの不完全な性格を私の伝記のために私の許へ商った（というのはこの男自身伝記上レーパーという名前で実在するからである）。いずれにせよこの伝記には真の悪漢達が顕著に欠けている。いや私がたとえレーパーを叙事詩人達の悪魔達と比べ、私を詩人達と比べてみても、我々両人は偉大とは言えない。

読者が、フェンクが先の厳しさを詫びているこのドクトルの手紙を有していたら。一つ

*原注 3 かの有徳な人生に[快適さが]一本の香油瓶、一本のやすりで加わるのであれば、賢明な男はこのような事物のある人生をむしろ過ぐすであろう、だからといってより幸せになるわけではなくても。キケロ、『善と悪の境界について』、Ⅳ. 12. [キケロの本意は省略されている]。

この手紙はシェーラウと、ドクトル、それに私にとって好ましいある人物を思い出させ、全体にとっても似合っているものであるが、読者はこの手紙を伝記の中に注入しようとするであろう。私は当の手紙を有し、当の権利を有する。それでここに挿入する。

私宛のフエンク

くこの哀れな手紙持参人を弁護依頼人とするがいい。マウセンバッハはこの哀れな者にその吸い上げポンプ、吸水機をねじ込んで、吸い上げている。シェーラウの弁護士のすべての悪漢どもが、金持ちの貴族に対して哀れな者の後援者となってくれない。彼らはこの貴族をいつか自分達の後援者に有したいと願っているのである。

私自身確かに毎日マウセンバッハに行き、弁護活動をしている。しかしこのけちん坊[レーパー]は利己心のない根拠を信じてくれない。その他の点ではレーパーは他の万事に対し感情と理性を有している。いつか人々が我々の昔の愚かさを、我々が将来の英知を理解しないように、ほとんど理解しない時が来ることだろう。つまり今人々が単に乞食を我慢できないように、また金持ちをも我慢できないような時が来ることだろう。

美しい娘の父親については良き人と考えよう強いられる。私も自分にそう強いた。君のピアノの生徒ベアータを君は単に薔薇の中の緑色の花卉と見ていた。今や開いてくる薔薇の花卉そのものを、それに周りの香りの後光を君は見ることができよう。このような父親の許のこのような娘。つまり薔薇が黒い、汚物を吸い上げる絡んだ根の上に咲いている。

私はこの娘を治すために行った。父親は金を出して若干のことを得ようと欲している。しかしマウセンバッハでこう思う人間はいない、つまり私がイタリアから旅立つ四日前に埋葬されたガリアーニ修道院長[Galiani, 1727-87]が、女性は永遠の病人だと言っているのだ。しかし単に神経の病だ。最も感情豊かな者は最も病気がちだ。最も理性的で、最も冷淡な者が最も健康だ。私が侯爵なら、私は王侯的に決定を下し、一人の女性がたった一回の医用スプーンを飲み干しただけでも、至高の勅令でそれに対し禁足を下すであろう。汝ら哀れな欺かれた女達よ、何故汝らはかくも我々男どもをそもそも信頼して、特に我々ドクトルには信を置き、我々が、薬用グラスを酒場のカウンターのように量り売りしながら、汝らを医療馬車に乗せて散策させ、遂には吊いの馬車で汝らを降ろすようになるまで、喜んで我々に任せているのか。そう私は何度か女達に言ったものだ。それでも彼女達はむしろ好んで私が処方した薬をすべて服用したものである。

女達を害するよりはむしろ役に立つ唯一の薬はせいぜい衣服である。多くの自然科学者によれば換羽は鳥の寿命を延ばしている。しかしこれに付け加えると女達の寿命もそうで、女達はまた新たな羽毛を身に着けるまで、いつも長患いをするものである。治療前からこれの説明は難しい。しかし本当のことである。女性は高貴になるほど、従って病気がちになるほど、一層頻りに換羽しなければならない。沼のイモリも五日ごとに脱皮する。新たな殻を待っている雌の蟹はその穴に惨めな様でうずくまっている。どの毒も解毒剤となり得る。衣服は病気をもち得る。例えば消耗熱やペスト等をもたらし得るので、理性的医師の指示があれば、病気も取り除くことができるに違いない。啓蒙化された医師ならば、思うにハレの家庭薬品箱[孤児院]、即ち衣装箆筒が何の役にも立たないときには、他ならぬライブツィヒのアウエルバッハ旅館からの薬品処方をなすことであろう。こうして君は

かなりの病弱な女性を助けることができるであろうから、私は君のために私の女性の「治療薬」として次の薬用ネッカチーフ、衣服等を指示することにしたい。

鋼薬[鉄剤]となるのが、鋼のロゼットや鋼のネックレスだ。縞子のベルトや鋼のプレート[バックル]、胃部プレートは胃や他の腸を温める。

昔、薬局から出されていた宝石は今日もなお外用的に立派に使用され得る。

絹製であれば、花束は試験済みの生薬で、匂いで脳を活性化する。

ショールは肺に利く。赤い糸ではなく（これは迷信）、メダルの付いた首飾りが近代の医師によれば、病んだ咽喉を治す。

キナ皮では大いに欺かれている。しかし花柄絹織物のスカートであれば本物である。

すべての傷は近世の外科学によれば単に覆うことで治るものである。それでイギリスの絆創膏の代わりに体にただ薄琥珀を置けば同じ効果がある。

新しい訪問用扇は強度の失神の際に不可欠である。しかしマフが緩和剤となり得、鬘用毛髪が串線法となり得、日傘が冷却剤となり得、一揃いの衣服が脱腸帯とか包帯となり得るかどうか — これは一つの例とか三百の例ではまだ証明となり得ない。

むしろこう信じたい。理容の櫛は頭痛に対する穿頭器となり得、時打懐中時計は間欠性の脈拍に対して効き、舞踏会の服はすべてに対する万能薬であると。

かくて冗談で言えば、女性服仕立屋は外科医で、その裁縫の指は薬指で、その指貫はドクトル帽であると。...

...何故私は汝のこと、高貴なベアータのことを忘れていたのか。汝は装身具では治らない。将来いつか汝の美しい心が病んだら、最良の心しか治せないことだろう、あるいは死んでしまうかだ。 — —

私の熱意を不思議に思わないで欲しい。私は彼女の許から来たばかりで、私が二週間前まだ彼女について覚えていたすべての欠点を忘れていた。しょっちゅう病気になる少女は、忍耐の服従の表情を慣れて浮かべるもので、その表情は「死ぬほど美しい」ものだ。私は彼女の好きな言い回しを強調した。しかしその言い回しはただ彼女の口からのみ最も美しい瀕死の声となって流れ得るものだ。この忍耐は彼女の永遠の頭痛の他に彼女の父親が慣れさせているもので、この父親は彼女をはなはだ苦しめると共に愛しており、彼女のためとあらば（吝嗇の利己主義に従って）一つの世界を虐殺しかねないものだ。多くの人間の魂が（この女性の魂もきっとそうで）この泥土の世界にとって余りに華奢で、繊細であるので、しばしば多くの人間の肉体もそうであり、この肉体はただ蜂鳥の天候、テンペの谷、[優しい]西風にのみ耐えられるものである。華奢な肉体と華奢な精神は互いに消耗する。ベアータは、こうした結晶化のすべての者達のように、少しばかり陶醉、情緒、詩文への傾向がある。しかし私を見ると彼女を高く押し上げているのは、一つの名誉心、謙虚な自己省察であり、これは（私の少ない観察によれば）教育の遺贈ではなく、最も恵まれた運命の遺贈である。この品位が不安げな気取りなしに女性的徳操を保証している。しかしこの女性的名誉心をまず教育、教化しなければならぬとすると — いや、何と容易に説教は負けてしまうものであろうか。 — 自らを大事にする女達は、すべての彼女達の動き、言葉、視線に一つの充実した調和が見られる。...私は彼女達を描写できない。描写できるのは薔薇に似ている女達で、この女達は、自分達が折り取られることのない下の方には最も長くて最も堅い棘があるが、しかし自分達が享受される上の方では単に柔らか

な曲がった棘で武装しているだけである。

娘達はその母親にすべての真実やあらゆる秘密を打ち明けるとするのは君にとって馴染みのことか私は知らない。私にとっては珍しいことだ。単にベアータのような最良の娘がそうできるのである。

二週間前は今日より彼女の欠点について気に留めていたのだが、その欠点というのは彼女は 一 喜びに対して喜ぶことが余りに少なく、悲しい空想に対しては喜ぶことが余りに大きいということだ。泣かずに喜ぶことができない（同様に侮辱されたと感じられない）そうした余りに優しい魂[人]がある。これは大きな幸福、大きな善意に対して胸で溜め息をついて受けとめる魂である。しかしこれらの魂が、隠れた感謝、黙した喜びを察知できない粗野な魂の前に立つと、彼女達は、情感ではなく、情感の発露を偽って飾るよう強いられる。ベアータの父親は、贈り物のすべてに対して、その価値をこの父親は薬局のグレーン[質量単位]で量るものだが、飛び跳ねる喜びを求めている。これに対して彼女はせいぜい後になって一つの喜びを感じずる質である。何らかの明るい幸福の発現そのものは彼女にとって突然すべての悲しみの日々を越えて、墓のように彼女の思い出の中に横たわっている日々を越えて、閃光を発する。このベアータの許で私は次のことも分かった。つまり女性の体と精神は精神的緊張にとっては、余りに華奢で、余りに沸き立ち、余りに繊細、余りに炎のようであるということ、体と精神は単に家事という絶えざる気散じでのみ維持されるということである。より気高い女達はその食養生よりは風変わりな情感で病むものである。この情感はその神経を銀線のようにますます狭小な穴の中を伸びさせて行き、その神経を極細のヌードルから幾何学の線を描くように拡散させるものである。シラーの炎の魂を有するような女性は、その魂で彼の作品の一つを仕上げたら、第五幕で自ら一緒に追って死ぬことだろう。

私は君の惚れ込んだ質問の項目がよく分かる。勿論枢密公使館参事官のフォン・エーフェルは当地でよく降る。彼は確かに当地では商売の仕事の他には何のより優美な仕事も有しないように見える。つまり貿易代理業者からセイロンのための胡椒を、スマトラのための肉豆蔻[ニクヅク]を指示して貰うよう要請する仕事だけで、従って代理業者の娘とか彼女の財産には何も関心がないように見える。 一 同様に大臣夫人も、男性的心のこの折尺、慈善箱も確かによく居合わせて、エーフェルのフック付き取っ手付き心を自分の魅力にすでに引き留めている。しかし悪魔が枢密公使館参事官達を、殊にエーフェルを信用するがいい。君に言うておくが、ベアータの心を彼が捉えるにしろ、捉えないにしろ、いずれにしても不思議でならない。勿論、親愛なるジャン・パウルよ、君はこう考えて自らを慰めることだろう。君は第一に彼より大きな魅力を有し、第二に君は魅力を有するということ全く知らない、これは会話では大いに役立つものだ、と。これは多分に若干大事なことだ。というのはエーフェルは自分が気に入られようと欲するのではなく、自分がその気になりさえすれば自分が気にいられるであろうことを単に見せようとしているからである。それで彼は敢えてあらゆる気まぐれを行っており、かくてただ何か非難され、許され、償うべく構えている。彼はまた 一 廷臣とダイヤモンドは硬度の他になお純粋な無色を有して、他人の色合いや明かりにより忠実に従って輝くようにしなければならぬので 一 廷臣の割には余りに自惚れが強く、他人の恵みでただ自らの恵みを購入している。私は君をもっと多くの「確かに」で慰めて、後で「しかし」を持ってくることにする。確

かにベアータはどの瞬間瞬間もこう尋ねているように見える。「何故私は彼を賛嘆しないのか」。大臣夫人はどの瞬間瞬間もこう尋ねているように見える。「何故あなたは私を妬視しないの。私の封臣は私同様に百もの音栓とペダルを有する一台のフォルテ・ピアノなのだから」と。 — というのは彼は何の地位[姿勢]も有せず、どんな地位[姿勢]にも挑戦できるからである。どの動きも他の動きから来ているように見える。彼の魂は体同様に戯れながらその位置を変えて、風の際の噴水のようにとても離れたテーマに移って行く。彼を間違いへ誘うものは何もないが、彼は誰をも間違いへ誘う。彼は一つの説教へ至る百もの入口を承知していて、始めるために始めて、中断するために中断し、自身何を語るのか、自身も聞き手より先に承知していることはない。 — 要するに親愛なるパウルよ、一人の恋敵だ。 — 今や約束の「しかし」を正しく挿入できない。

しかし私の美しい患者の女性は、彼を冷たく眺めること、服を我々のために試着している者を見る按配であるが、彼はその逆を前提としていて、彼女の中に照明弾を投げては自分を照らしだし、煙弾を投げては彼女を暗くしている。そして前もって将来の征服[記念]メダルのために極印を彫り込んでいる。 — エーフェルのような男達や雄どもははなはだ忠誠の過剰を有するので、彼らはその過剰を一人の女性ではなく、千人もの女性の間で分配しなければならない。エーフェルは女性全体の奴隷船の指揮を取ろうと欲している。彼はその際君のことは大臣夫人のこと同様ほとんど気にかけていない。夫人は彼を愛しているが、それは彼女の最後の恋人であるからで、彼が彼女を愛しているのは、第一に、いつも何人かの阿呆どもがつながれている彼女の凱旋馬車の許で一人で轅馬として引っ張りたいと思っているからで、第二に、彼女は彼よりももっと多くの策略ともっと少ない情熱を有するからで、彼をこう説得しているからである、事情はまさにその逆である、と。

さて私は我らのベアータを、君は彼女を喜んで君の人生と君の本の中へ引き入れたいと願っているが、エーフェルの（彼もある本に取りかかっている）人生と本の中へ織り込んでいるので、それで私は、忠実なパウルよ、老レーパーにこう内密の説教を行ったのだ。彼の娘[ベアータ]の病は一人の医師ではなく、数百人の医師を通じて、即ち社交を通じて完治される、と。 — それで老父は、自らは社交のために費用を出さずに、彼女に一つの社交を、あるいはむしろ彼女を一つの社交に与える気になっている。彼は彼女を宮中庭園のどこかの苗床に植え込みたいのだ。「彼女には世間[作法]を得させたい」と彼は言っているが、自らは作法を有しない。彼は、許されるものならば、女性世界全体をその祭壇や、彫像の台座や、会長席、きちんとした安楽椅子から搾乳の椅子、作業椅子、足台へと引きずり下ろし、押しつけることだろう。それでも自分の娘の切り子面や輝く面は、ユダヤ人やダイヤモンド屑で研かせたいのである、その面は自分自身は嫌いなのだが。彼女が宮廷に行けば、彼女を後、毎日公使館参事官は目にするようになる — そしてジャン・パウルは何も得られない。

このジャンも策を弄して、私にこう尋ねた。自分は上述の娘の父親の許で領主裁判所長となれないだろうか、自分、このジャンは、現今の裁判所長の退職を耳にしたから、と。

— コルプ氏は（まさにこの領主裁判所長）まだ在職中であって、まだ言い争っていて、毎週こう言っている。「誰もがレーパーの所行を知れば、その所行を私は」、...レーパーは毎週こう言っている。「誰もがコルプの所行を知れば、その所行を私は」、...かくて両人は互いに両人の心配事につながっている。 — 今やいずれにせよそのことは考えられな

い。というのは二週間後には老レーパーは騎士領の忠誠の誓いを受けることになっているからである。吝嗇家は変化や挑戦を恐れるものだ。

「何故君は君の善良な妹をかくも長く宮廷の有害な鉋毒煙にさらしているのか。彼女がそこで得られるものは、彼女が持参し、そこで失いかねないものと同等の価値があるものだろうか。つまり彼女の純な、優しい心のことだ、軽率な心ではあるけれども。私は旅の途中では別に考えていた。しかし今一人っきりでいると、私にはコケットな昆虫、コケットなザリガニの雌、前進したり後退したりする雌、大小の缺をいつも開けていて、切り離されるといつもまた生み出し、胸には心臓の代わりに胃を有し、それでいてすべての昆虫同様に冷血な雌、このような殻で覆われたザリガニの雌は私には多感な換羽期の殻のない雌よりも厭わしい。こちらの雌は余りに優しくて、これを基に長編小説作家は多感な蟹[殻を潰した]バターを作るものだ。多感三昧は年々改善される。コケット三昧は年々悪化する。 — 何故君は君のフィリッピーネを家に連れ戻さないのだ」。この私の問いに対してジャン・パウルは答えなかった。しかし私は彼の問いに答える。私は復讐はしない。私はむしろ願っている。上述のパウルがベアーテの指を今日、正しいキーに導くよりも不純な指に導けばいい、と。そして今、春の年頃に彼女がピアノの横で問いかけながらパウロの方を振り向いて、彼女の大きな目のその青い空でパウロの目を眩ませたらいい、と。哀れな悪魔、まさにこのパウルは、もはや自分を見失ってこう言うだろう。「美しい目がなければ、他のどんな美に対しても一厘だに出さない。いわんや自分を差し出すことはない。しかし天上的な両目に対しては、私はすべての付随の魅力を、すべての付随の欠点を、バッハやベンダ[Benda, 1722-95]全体を、それがどんなであれ、私の上方回音を、間違いの五度音を、もろもろを忘れてしまう」と。ご機嫌よう。忘れ難い友よ。

ドクトル・フェンク>

懇ろな友よ。我々は了解し合っている。一度自ら諷刺を書いた者は、自らに対するすべての諷刺を許す者で、殊に意地悪な諷刺を許すが、ただ愚かな諷刺は許さない。しかしドクトルは冗談でそのことを弁護したけれども、しかしシェーラウから遠く離れて住んでいる読者に、自分のことは構わずにこう告げなければならない。上述の公使館参事官のエーフェルは我々兩人が知る限り全く取るに足りない人物であって、女達の下ではそれほどでもないが、男達の下ではいつも当惑していて、大きなサークルよりも小さなサークルではるかに当惑し、言うまでもなく、いつも注目を追い求め、つまり謙虚な人々は巧みに避けているのに、一般的に注目されることをも求めているのである。注目を浴びることがいつでも成功するとしても、しかしこの私の本の中では注目を浴びることはさせない。...勿論以下の件は不可能事であるが — 殊に私の忌々しい長い脚と短い足の、あるいは長短格の足場や支柱[ひじ木]のせいで、ちなみにこの上に私の識者達に判断されるトルソが収まっているのであるが、 — — しかし人間たる者不可能な事でも思い描くことはできるのであって、つまり私はいつかベアーテに恋の告白をして、かくて — 自らの予想に反して — 自らこの伝記の主人公となり、彼女は女主人公[ヒロイン]というわけで — — ほんとにあっけにとられる、というのは私は実際単に、レーパーの許で領主裁判所長となると言い、仮定したいだけなのであるからで、その後本当に — 私はどの裁判日も優しくあろうから、あるいは弱い女性というよりは美しい女性といえるある女性が自称するよ

うに優しい野獣であろうから — それどころか彼の義理の息子となってしまう — 喜んで私は共に喜びを感じてくれる善良な読者に、すべてを伝記的に描写し、読者を喜ばせようと思う、...しかし、申したように、この件は私が将来を見通す限り致命的に不可能であろう。これは単に忌々しい不均整な針金台座[骨格]のせいで、自らの不幸に見舞われているこの者は、この台座を千もの釉やひげ剃りでまた償いたいと思っており、同様にエピクテトスも長いことこの台座の上にあったのである。[エピクテトスは伝説によれば主人によって片足を不自由にされていた]。

全く熱くなって私は私の伝記的計画から出てくることになった。これまでアヴァンチュールのすべてがまだ古いものではなく、要するにこれらの人々の生活はそれについての私の伝記描写と手に手を取って同時に進行することになろうといくことは巧みに隠されてきたはずで（実際上手くいったのであった）。 — — しかし今や私はすべてを明るみに出した — それでそもそも新しいもっと理性の見られる扇形を始めなければならない。...

第十九扇形

[世襲領主への]忠誠の誓い — 私、ベアータ、エーフェル

フェンクの手紙の後、二週間経った。...しかし読者を信用できるか。

— ドイツの読者の場合、著者が言ったことすべてを忘れてしまうのは、脳内の一破片のせいなのか、あるいは氾濫したリンパ液のせいなのか、致命的脱力のせいなのか、私には分からない — あるいは便秘とか糞詰まりに由来するのかもしれない。とにかく著者はそのせいで苦勞する。かくて私はすでに多くの全紙の上で読者に植字工や印刷工を通じてこう言わせている（しかし何の役にも立たない）、我々は 1, 3000 ターラーを侯爵に貸したままで、いつか返して貰うことになる — 私は法学を専攻しなかったが、しかし、私は弁護士試験を受ける間に、幾多の面白い法学的小片を捕らえて、それが今私にとって都合のいいものとなっている — グスタフは士官学校生徒になる予定で、私は領主裁判所長になるつもりである — オットマルは姿が見えず、それどころか噂もない — 私の上司[雇い主]は余りに浪費家である、と。 — —

勿論残念なことである。というのはこの上司がまだ一部屋有したり、馬小屋に動物的立方体がない場合、彼は客人に釣り糸を垂れているのであるからである。彼は現今の女達のように社交的なハリケーンとか訪問の茂みの中でしか元気を保てないのである。 — 彼とかこうした女達はこのような生きた人間の風呂から、蟻塚風呂、蝸牛風呂から出て来るように、若返って新生児として出て来る。ここでは貿易仲介業者のレーパーとはほんの些細な類似性も（いわんやより多くの類似性も）ないと満足できるのである。この仲介業者は賢者や金利生活者の孤独の中で静かに係争や未払いの利子のことを熟考していて、自分の館は単に酒場主人の権限を有するのみで、従って誰も一泊させることは許されないと承知している。 — ファルケンベルクときたら。伝記作者の言に耳を傾けるべきであろう。君の財布、君の館の門、君の心を時には閉ざすがいい。いいかい、運命は君の気前のいい魂を大事にせず、駆ける幸運は君の優しい心をその車輪で引き倒し、砕いて、その目隠しの背後でその富籤の車輪の積み荷をレーパーとかの前で降ろすことだろう。友よ。君は、君が他人の惨状や自らの喜びに対して贈ろうと思っているすべてを奪われることだろう。

ある友の許で君の恥じ入った心をその傷と共に隠そうとする勇氣すらも許されなくなるだろう。 — そうなったら君の息子はどのようなことになることだろう。 —

しかしそんなことがあろうと。 — 私は単に君を前もって非難しているだけだ。しかし後になったら、いつか君が幸福にしようとして不幸な目に遭っても、君はどの人の善良な目の中にも敬意を、どの善良な胸の許でも愛を見いだすことだろう。

...つまりフェンクの手紙の後、二週間して、私の教え子がすでに十八歳となって、しかしまだ士官学校生徒の地位を得ていないとき、私の上司[雇い主]の許ではボヘミアの貴族達の機知サロンが座っていて、熱い聖霊降臨祭の舌[おしゃべり]と三月のビールを有していた。私は何も有していなかったが、一緒にその座にいた。私は私の良き騎兵大尉に対し拒むことはできず、社交人を増やすことはできなかったが。 — 人々はある種の余りに繊細な人間のことにようやく気付くのは、その人間の許を去って、ある種の粗野な人間の許にいるときであって、 — 人員を増やすことができた。多くの人間は彼のように訪問の強奪徴募者であって、どんなに訪問を依頼しても十分ではなく、それでいて何のためにそうするのか、知らないし、その人々を愛しないまま依頼している。ファルケンベルクは聾啞の者達を招待したいことだろう。私がこう述べたということで、読者は納得されよう。

「今日レーパーは忠誠の誓いを受ける」と。ファルケンベルクは好んで他人の邪悪な点を語ったが、その他人に対して善きことしかなかった男で、不在の不倶戴天の敵に対して、即ち吝嗇者達に対して、好んで路上に豌豆を撒きながら、それでいてまたその敵が倒れようとするならば、その豌豆を取り除く男であって、私の考えに喜んで、また自らの考えに喜ぶことになった。彼は言った、「我々が彼（レーパー）が腹を立てるよう今日皆で出掛けよう」。六分経つと飲んでいる機知のサロンと家庭教師は馬上の者となった。グスタフは違う。彼は騒がしい陶酔よりはもっと素敵な陶酔の質であった。それ故グスタフの内的生活のお蔭で私はしばしば、外的生活を欲する彼の父の許で、どこに本来彼の息子の気高い価値はあるのかと父親に教えようと思って、うんざりする空しい試みに巻き込まれることになった。 — 名誉を大事にする家庭教師にとってこのようなことは余りに厄介なことである。

我々は我々の馬上でマウセンバッハを見た。マウセンバッハはその貴族の地主の前に立っていて、彼のイタリア式頭部に封建の王冠を被らせていた。忠誠の誓いを受けた封建領主の傍らには、その司法部門、その税徴収一同、その枢密政府、その外交部門。 — 要するに、コルプ氏、領主裁判所長がいて、すべてのこの一団を代表していた。このミニチュアの君主のミニチュアの内閣は野原にいて。 — これを我々は遠くから見ることができた。

— 手に長い手紙を持っていて、そこから人々に誓われるべきことすべてを読み上げていた。同盟者達の百もの手が、それからレーパーとコルプの鍛錬する二人の手を通じて進んで行き、この貴族に対し、貴族の側が命令することを約束するならば、従うことを約束していた。

しかし喜びの後には苦しみが来る。忠誠の誓いの後には、機知のサロンというわけである。...十八世紀には勿論多くの人間が魂消て、はなはだ、例えばイエズス会士、貴族達、ヴォルテールも、それに他の偉大な作家達もしばしば大いに魂消た。 — しかしそれでもこの啓蒙された世紀全体の中で貿易仲介業者ほど魂消た者はいなかった。彼はやって来るのを見たのである。彼は十五個の人間の頭と十五個の馬の頭が、上の犬どもの大砲の列

の間を、山を越えて下って来、これらは皆、彼の館で何も探さないであろうか。しかし十分に[獲物を]見いだすはずのものだった。しかし第二に十八世紀において彼より家にいることが稀な者はいなかったので — 確かに彼はそうであって、彼がしかし防火壁か耐火籠の背後にいるかのように鏡ガラスの窓の背後に座っていたら、それらはギュゲスの指輪のように彼の姿を見えなくさせたであろうから、彼は助かることになって、かくも多くの哺乳動物とは何マイルも離れていることが可能であろうが、しかしこの平野ではそのことはできなかった。喜ばしい人間という者は、たとえけちん坊であっても、喜ばしい人間達を作ろうとする。レーパーは驚き — びっくりし — 諦めた — そして我々を、我々が推察していたよりも喜んで受け入れた。彼は今日、とにかく与える最中であつたので、与えることを続けた。

というのは彼の家臣達は、今日分別を[断つと]誓ったので、分別を酔って失うことになっていたのである。幾つかの酸っぱく求められた、同様に酸っぱい味の二つの手桶を彼は、捕虜として地下牢から戴冠の日に解放させた。彼は樽を彼らのために二重の炭酸石灰[白墨]で記す[つけを倍にする]というよりは、塗り、浄化していて、石灰土の丸い染み抜き石鹸を長い間その中に吊しておき、悪酒が仕舞いには余りに立派なものとなって、振る舞いがたいものとなっていた。けちん坊は振る舞うときでさえも、節約しようとする。ちなみに彼は自分の封臣達に対して、我々貴族の客人に対するよりも、より親密に、より気前良く飛び跳ねていた。 — 「貴族の誇りを持たない男はいつもそんな振る舞いだ」と書評家は言うだろう。しかし「身分にふさわしく奪って行く客人より卑しいが銀貨を有する人々の方が好ましい吝嗇家、自分の従者を他人である友人よりも上に置く奴、身分よりも有益さを上に置く奴はいつもそのように振る舞う」と私は言う。 — フォン・レーパー貿易仲介業夫人のルイーゼは、自分の夫のどのビールの方舟にも更に小さな小帆船を添えた。彼のプレゼントは彼女にとって、いつもそれに内緒の添加をする口実となった。ただ彼女は村の裁判官に、ビールの酵母が欠けることのないよう見張っているように命じた。自然は彼女に自由な愛する魂を与えていた。しかしまさに彼女の夫に対するこの愛のために、彼の欠点は少なくとも見せかけ上彼女に残った。

汝、忠実な心よ。しばらくの行、汝の結婚生活での私心のなさについて書かせて欲しい。この私心のなさは、すべての自らの願いを罪と考え、彼女の夫のすべての願いを徳操と考えるもので、汝に劣る者に対する称賛しか気に入らないものである。何故汝は、汝を模し、汝を知っていて、汝に報いる魂の者の手に落ちなかったのか。何故汝にとって現世での汝の犠牲、汝の心の傷に対して、汝のために汝の娘の美しい両目から落ちて来る涙の他には痛みを静める滴りが得られなかったのか。 — いや、汝は、汝と苦難を共有する女達すべてを私に思い出させる。私は確かに私の心理学からまことに良く承知している、汝ら哀れな女達よ、汝らの苦難は私が考えるほど大きなものではない、まさに私はそれを考えるだけで、感じてはいないからで、表象の遠くの方で一つの炎の蛇となる稲妻は、現実には単に幾つかの瞬間を突き抜けて行く一つの火花にすぎないのだから。しかし汝ら女性の者達よ、一人の男が、その粗野な、武器で硬化した指で汝らの柔らかい神経の中に押し込まなければならない魂の硬皮とか破損のことを考えることができようか。男というものは、汝らが穏やかに接しているほどに、あるいはその男自身、体液の多い滑らかな青虫が張り付いている葉全体を持ち運ぶときにはせめてそうして接しているほどに、汝らと穏や

かに交際することさえしない。...全くルイーゼとかベアータときたら。 — しかしジャン・パウルが、老レーパーが確約しているように、汝らの領主裁判所長となりさえすれば、ジャン・パウルは汝らを十分に慰めることだろう。...

しかし老レーパーは信用し難い。彼は下部シェーラウ全体を忍び回っていて、前もってすべての弁護士達を領主裁判官へと召喚し、我々法曹家に、彼の下で仕えるという希望を与えて、彼に敵対して仕える決心を取り除こうとしているのではないか。 — しかし彼とて、私のような者が相手なら正直にそのことを考えているに違いない。

ボヘミアの騎士団と私とが平原から館に入ったとき、騎士団と私は何かとても素敵なもの、何かとても奇矯なものに出会った。その奇矯なものは素敵なものそばに座っていた。奇矯なものはエーフェルと言い、素敵なものはベアータと言った。天は一人の著者に、彼女を描写する時間と、彼女を愛する永遠とを与えるべきであろう。エーフェルごときは3 / 60秒で描き終わり、愛し終わる。彼女が馴染みのピアノ教師を早速知人と認めさせたのは私と彼女にとって名誉なことだった。しかし知人のなかに何ら未知のものを発見せず、私の姿を見て、自分が子供から女性に成長したことを思い出さなかったのは私にとって嬉しいことではなかった。 — 美人がやはり我々に気付かず、[恋人と]仮定しないことを美人に許すような年齢というものがある。私は汝にすべてを許した。その最大の証明は、私がそのことを話しているということだ。 — 若い若者は賛嘆し、同時に欲望する。中年の若者は、単に賛嘆だけすることができる。ベアータの感受性や言葉は、天から落ちてきたような、まだまばゆく白い、純粋に新鮮な雪である。まだどんな一歩も、年齢もこの輝きを汚していない。彼女はなお一段と美しくなった。今日はいつもより活発で、自分の美しい両肩を母親の荷のために貸し出していたからである。いつもは彼女の両頬に天全体を白く置いている青白い月のアウローラがその天に薔薇の反映を注いでいて、彼女が今日そのために働いていた他人の喜びが彼女の色合いを高めていた。その色合いはいつもは自分の喜びで失っているものであった。少女達は仕事の様が自分達をどんなに美しく見せるか、彼女達や鳩の首が動き回るとき、彼女達や鳩の首の羽毛はどんなにただ色彩の戯れを見せて輝くことか、何と我々男どもは猛禽に似ていて、座している獲物は見向きもしないことか、そのことを知らない。

彼女の母親は何故公使館参事官がそこに座しているのか、理由を私に喜んで教えてくれた。彼はベアータにフォン・ブーゼ弁理公使夫人からの招待、私の妹も仕えている夫人の領地に来るようにとの招待を持参していたのであった。新館のマリーエンホーフは町から三十分のところにあつて、新館に接してエーフェルは旧館に住んでいた。旧館はひよつとしたら秘密のドアで新館と結ばれていたのかもしれない。彼は不作法なやり方で、こう察知させた。自分の上品な策がなければ、即ち、彼は、弁護士達のように、ごく狭い小川の上に、跳ねることはしないで、一つの橋を架けたのであって — この件はびっこを引く具合になったであろう、と。このように自惚れた阿呆が心について一つの石盤の模像をベアータのような宝石に刻印することは不可能なことであろう。たとえこのおしゃべり男が、彼の目論見通りに将来午後はいつも彼女を包囲しても、その点は案じなくてもいい — 誓ってもいいことだ。彼のサイズの洒落者は確かに何人かの不作法な草深い田舎令嬢達を（今日見られたように）自分のオベリアクラゲの回転について、自分の勇気や分別（つまり機知）について、レディーや美人と言う代わりに女達と言う自分の破廉恥について惚れ

惚れとびっくりするように強いることができよう。 — そんなことはできて、もっとできると私は申し上げるが、しかしベアーテの心からは彼女のすべての徳操が彼を永遠に分かつことだろう。彼女は大臣夫人に対する彼の愛の傍らに自分自身に対する彼の愛は全く見ずに、信じないことだろう。彼女は自分の魂をエーフェルのような感傷的美辞麗句には打ち明けられないことだろう。これは偽金のように大きすぎたり小さすぎたりするものである。

— 彼女はむしろ、正直なジャン・パウルとならむしろ始められると思うことだろう。彼女は、そう希望するが、上述のパウルがエーフェルと若干の長所の点では共通するかもしれない類似性を喜んで許すことだろう。このパウルは彼の欠点を有せず、忠実な謙虚な心で彼女の前に立っていて、その心は、彼女に称賛のごく繊細な金箔をそっと吹きかける勇氣もほとんど有せず、誤解されても黙して、試みることをさえないで退避して行くのである。…彼女はその判断の点でまさしく、私が共に座している若い田舎貴族とは異なるように、老いた田舎令嬢達とは異なることだろう。というのはエーフェルの出現で彼らはすべての先の機知や分別を奪われ、彼の水銀のような作法はすべての彼らの肢体に鉛を注いで、彼らは、このような猛禽が女性達の心を鷹狩りしている最中、彼らの鈍重な翼をたたんで、男性的率直さで、女性の魅力を称える代わりに彼の魅力を称えていたからである。 — これに対してジャン・パウルは、現実のジャン・パウルのままで、何もつけ入らせなかった。

私がエーフェルの称賛のために何も言わなかったら、多くのドイツの圏から秘かに嫉妬していると推測されるところであろう。彼は同じ午後、私の教え子グスタフに大きな奉仕を約束したのであった。彼はつまり、弁理公使夫人の隣の旧館を借りていたが、その中には住まず、シェーラウの士官学校の寄宿舎に住んでいて、部屋から部屋に移って — その高貴な身分のせいで奇妙な服は許されなかったので — 少なくとも奇妙な振る舞いをしていたのであった。彼はそこで人間をスケッチし、人間を銅版画に刻印したのであった。彼はつまり後継皇子と王座の家庭教師のために短い百科事典として一編の長編小説を起草していて、『大サルタン』というタイトルにしていた。 — このフェヌロン[Fénelon, 1641-1715]は彼のテレマックのハーレムを、シェーラウの全女性の宮廷を反映させる鏡部屋としていて、彼の作品は一種の生きた植物標本、シェーラウの王座の上、王座の許で生長するものすべての植物誌で、侯爵から、彼のまだ思い出すかぎりでは私まで含むものであった。それが出版されると、彼が我々自身をその中で飲み込んでいるので、我々は皆それを飲み込むのである。書評家はその中に何も見いださず、こう言うことだろう。「瑣末なものだ」と。 — 彼は、自分が前もって、それに後からすべての世界に吹聴しないものは、何もしなかったので、騎兵大尉でさえこう耳にした。自分は士官学校町の許で長い間、巧みに策謀したので、自分は監視の士官の代わりに士官学校寄宿舎の諸部屋に住み、移り変わることを許された。かくて我々の侯爵はこの人間の自然科学者に対して人間の動物園で助成することになった、丁度アレクサンダーがアリストテレスに対して動物の動物園で助成したようなものである、と。かくて騎兵大尉は決定的な人間愛を抱いて、彼の許に歩み寄って、グスタフのために、士官学校長の許で、いつかグスタフがこの校長の旗下に参ずる際、よろしく尽力を賜うよう頼んだ。パトロンのエーフェルは言った、これからは何の心配もいらぬ、と。彼自身、地下で育てられた変わり者を同室者とできて、モデルとして座って貰えることに有頂天になっていた。

光線の屈折で船乗りには陸地が実際そうであるよりもいつも数百マイル間近に見えるもので、一種の罪のない欺瞞を通じて、希望、享受を抱かせて船乗りを鼓舞するものである。しかし倫理的世界でも、侯爵やその内閣の者達は我々「依頼人」を（そう[言語浄化主義者の]カンペは「請願者」の代わりに訂正しようとしているが）、次のようにして喜ばせ、元気付けるといふ有り難い仕掛けがあつて、つまり彼らは我々が得たがっている宮廷での地位、官職、恩寵を数百マイルあるいは数ヵ月間近に、現実にそうであるよりも間近に見えるようにさせて、 — 我々はそれらを手で掴めると思ってしまうのである。この近接の錯覚は、聖職者的、あるいは世俗的ベンチが、長い期待のベンチの上に座っている者達に間近なものとして示されていながら、最後に結局、単なる — 霧峰[霧のベンチ]と明らかになるような時でも、有益であり、通常よく見られるものである。

「貿易仲介業者は」と途中騎兵大尉は私に言った、「人々がそう思っているほど悪い男ではない — 公使館参事官はただいい年になりさえすればいいのだ」と。

第二十扇形

人生の十年代[二番目の十年] — 幽霊話 — 夜の場面

人生の諸規則

エーフェルは約束を守った。その後二週間して、ホッペディーツェル教授が、自分は新しい士官学校生徒を取るつもりだと我々に書いてきた。 —— そこで我々のこれまでの願いは我々の痛みが変わった。グスタフと私の同盟は引き延ばされ、脱臼させられることになった。我々が今や一緒に読むどの本も、各自が一人つきりで最後まで読むことになるという考えで心が痛んだ。私は私のグスタフに教える気がほとんど失せた。グスタフの完成を私は他の建築家に任せなければならなかった。美しい花園はすべて我々にとって、武装した知天使が閉ざしたエデンの園の庭の戸口となった。彼の心の嵐の年月は今や一層近付いてきた。私はいずれにせよ彼の空想の翼のためには羽根ペンを十分には用意していず、彼をその孤独から十分なほど頻繁には追い払っていなかった。この孤独の中で彼の空想はその根を彼の性質のすべての繊維の中へと延ばして、彼の頭部を飾る花々で外部の光の侵入を閉ざした。 —

まことにがたがた言う師傅でも、その本でもなくて、即ち花を十分に満足させ色合いを付けるのは庭園用の鉢でも如雨露でもなくて、天と地であつて、その間に花はある。 —

つまりは孤独か社交かであり、その中で子供は最初の蕾みの分秒を過ごして育って行く。社交は普通の子供の中で芽生える。その子供はその火花を単に他人との衝突で発する。しかし孤独はより崇高な魂の上に最良に生ずるのであつて、荒涼たる地に宮殿が聳えるようなものである。ここでその魂は親しいイメージや夢想の下で、不似合いな有益さの応用の下でよりも一層調和的に育って行く。それだけに一層税務局中枢は、偉大な詩的天才達が — 根本的にはどの天才も気の利いた枢密院関係、官房関係には役立たないのであるが — 十歳から三十五歳まではひたすら一分も余裕はないほどに、応接室、書記室、投票室で仕事に追われるよう目論むべきであろう。さもないと天才は誰も古文書館館員や記録係に配置できないことになる。それ故大きな世界の市場の喧噪でも、空想のすべての生長を幸運に土壌下で維持しているのである。

私はよくそのことを考えて、幾多のことを自分に咎めている。より徹底した教師仲間がおまえのグスタフを、グスタフが草の上に仰向けになっていたり、青い天のクレーターに吸い込まれたり、あるいは肩胛骨の翼を広げて宇宙を泳いでいると夢想したりしているとき、散歩杖でもって有益さの本へと追いやることをしないであろうか（私は自分を非難した）。そして私がこのより徹底した同僚に、子供の空想が何の下で成長するかそれはどうでもいい、ラックを塗られた小さな棒の下か、あるいは生きた楡の下か、あるいは黒い燻煙の棒の下かどうでもいいと述べたら、同僚は洒落た答えをしないだろうか、まさにそれ故に、だからどうでもいい、と。

しかし私の方としても洒落を有していよう。私は返答を思い付くことだろう。「同僚殿、最大の悪漢と、貴殿の訳される最大の喜劇詩人の間に違いがあると思っておいでですか。

一 勿論あります。カルトゥーシュ[Cartouche, 1693-1721、盗賊]の立派な計画は、詩人ゴールドーニ[Goldoni, 1707-93]の立派な計画とは、カルトゥーシュは喜劇を自ら演ずるのに、ゴールドーニはその喜劇を役者達に演じさせる点で違います」。

グスタフは今、墓場への人間の逃走中、最も美しく、最も重要な十年代の最中、つまり第二の十年間にあった。人生のこの十年間は最も長く最も熱い日々から成り立っている。そして 一 熱帯では同時に動物どもの大きさと毒とが増大するように 一 青年の輝きの許で確かに愛が、友情が、真理への熱中が、詩人の精神が成熟して沸騰するが、しかしまた毒歯と毒胞を有する情熱も沸騰する。この十年代に少女は笑い転げた年月から忍び出て、より悲しげな目を垂れ下がる枝垂柳の下で隠し、その同じ柳の下で、静かな若者は自分の胸とその溜め息を冷ます。この溜め息は月や小夜啼鳥よりも一層間近なものに対して生じてくるものである。幸せな若者よ。この瞬間すべての優美女神達が君の手を握る。詩人的な女神、女性的女神、それに自然そのものが握り、そしてその見えない姿を顕在させ、君を天使的な魔法圏に閉じ込める。私は自然自らと言った。というのは自然の下で絵画的魅力よりも一層高度な魅力が輝くからである。そして人間は、人間の目にとって自然は魔法に満ちたマイル単位の半身像であったのであるが、自然からピグマリオン像を造り出す一つの心を自然に対し持参できるようになるからである。この像は千もの魂を有し、すべての魂と共に一つの魂を抱き合わせるものである。...いや哀れな人生の二番目の十年間、これは二度と決して戻って来ることはない。これは三つの高貴な祭日よりも多くを有するものである。これが過ぎ去ったら、冷たい手が我々の胸と我々の目に触れる。なおさらにこの胸や目に侵入してくるもの、これから出てくるものは、最初の朝の魔力を失っていて、老人の目は単により高次の世界に対して、ひょっとしたらまた若者になるかもしれない世界に対して見開かれるだけである。

教授が来る前の三日間、館では幽霊騒ぎがあった。その二日前まで騒ぎはまだ続いていた。その一日前騎兵大尉は悪行をあばく準備をした。彼は幽霊話に恐水病を抱いていて、ボッカチオのように話しをする従者のことごとくを、その短編の謝礼として頁数に応じて殴った。騎兵大尉夫人は信じやすいということで彼を怒らせた。彼女は、妻達が希望や恐怖で鬼跳びを地球の半径ほどに行うとき、夫達が投げかける眼差しをしばしば彼から得ていた。 一 彼女は夜廊下を通る三本足の音を耳にしたのであった。彼女の鍵穴から一つの閃光がきらめき、自分の時計とは別の懐中時計が十二時を打って、そのすべてが消え失せたのであった。

そこで彼はピストル二丁を装填して、ミルトンに従って中国人より早く彼が発明した弾薬で悪魔を襲撃しようとした。勇敢になるために、彼のグスタフも一緒にいなければならなくなった。館の時計が十一時を打った、何も生じなかった。 — 十二時を打った、また何も生じない。 — 時計仕掛けなしに更に一度十二時が鳴った。今や館の床でヒエログリフのような謎の物音が近寄って来て、三本足が多くの階段を下って、廊下を振動させた。病気のときは稀であるが、危機のときはいつも度胸のある彼は、ゆっくりと部屋から出て行って、長い通路の中、ただ中央階段の下の消された家庭ランタンだけを目に留めた。何か暗闇の中で彼に向かって来た — そしてその黙したものに向かって発射しようとして、彼は叫んだ。「誰だ」。突然彼の五歩前で稲光して — ここで不安の強縮[破傷風]でグスタフの神経は捉えられた。 — 龕燈の明かりが空中に懸かっていた顔を照らし出して、この顔がこう言った。「ホッペディーツェル」と。彼であった。彼が支え棒とこの茶番の別の装置を投げ出すと、これにげんなりしたのは他ならぬ騎兵大尉で、彼は自分の度胸を証明できなかったのであり、他ならぬ騎兵大尉夫人であった。彼女は何の度胸も示さなかったのであった。

— しかしグスタフの脳内にはこの大気中に掛かった顔はエッチング用彫刻針で歪んだ像を残した。この像を彼の熱に浮かされた空想はいつかまた瀕死の目の許で生じさせることだろう。度胸の欠如ではなく、単に激しい空想が幽霊への怖れを作り出す。かつて子供時分空想を恐怖するほどまでに扇動した者は、その空想を後で否定して、「それは自然なことだった」と教え込んでも、甲斐はない。それ故同じ家庭の中でも単に何人かの子供だけが、つまり翼の付いた空想を有する子供だけが恐れるのであり、 — それ故シェークスピアはその幽霊の場面で、正面枚数の霊を信じない者の髪の毛を逆立たせているが、明らかにその扇動された空想のせいである。 — 幽霊への恐怖は我々の性質の異常な流星である。第一にすべての民族をその恐怖は支配しようとしているからであり、第二にその恐怖は教育のせいではないからである。というのは子供時分人は戸口の大きな熊に縮み上がると同時に幽霊に対して縮み上がるからで、一方の恐怖は消えるが、何故他方の恐怖は残るのか。 — 第三にその対象のせいである。幽霊に臆病な者は苦痛とか死に対して硬直するのではなく、全く見知らぬ本性の単なる現前に対して硬直するのである。この者は月の住人や恒星の弁理公使ならば新たな動物同様に容易に眺めることができることだろう。しかし人間の中には、さながら地球の知らない悪業に対する、何らかの太陽の周りにあるものとは全く別の世界に対する、我々の自我により間近に接している事物に対する戦慄が見られる。...

私はこの単純な教授の冗談を書き留めなければならなかった。この冗談は二日後、飛翔するグスタフの周辺に次の場面を生み出しており、それで彼の心は潰されると共に高揚することになった。

旅立つ前の期間、彼はその重い心と重い目とを、彼が愛し、立ち去るすべての土地に、自分の子供時代の聖なる墓地に、太陽を遮ってくれたすべての木の下に、太陽を見せてくれたすべての丘に連れて行った。 — 彼は穏やかな子供の生活の純な廢墟の間を行った。彼のすべての青春の樂園の上には過去が満潮のように横たわっていた。彼の前と彼の後には、運命が人間を速やかに追い立てて行く湿地、耕地が広がっていた。...この分秒のとき[瞬間]、私は彼同様そこから離れて行く太陽の前で、そして盲目の人間を広大な純粋な未

知の地に目に見えない手で持ち上げるすべての偉大な自然の前で、私の愛しい生徒[グスタフ]の胸[心]に、彼のグイードの絵^{*原注 1}を — 私がこれまで取り上げていた絵を押しつけた。このような分秒[瞬間]には言葉を必要としない。しかし人々が語る言葉はどれも一つの全能の手を有している。「ここで、グスタフよ」(と私は言った)「ここで、天と地を前にして、人間の周りのすべての目に見えざるものを前にして、ここで私は君の手に私の見守る手から五つの大なるものを委ねる。 — 君の無垢な心を委ねる — 君の名誉心を委ねる — 無限なものへの思いを — 君の運命を — 君の形姿を委ねる。この形姿はグイードの魂の周りにもあるものだ。地上には、君がこの五つの大なるものを保っているか、あるいは失ったか、君に尋ねるような偉大な時はない — しかしその時はいつか君の将来の魂を君の現在の魂と比べることだろう。 — いやはや。君がすべてを失ったときの思いを私に味わわせないで欲しい」。...

私は去って、彼を抱擁しなかった。最良の感情は、その感情表現を許さないとき、より一層強く残る。彼は残って、彼の感情はグイードの絵に向けられた。しかしその絵が彼に自分の形姿を思い出させることはなかった。 — というのは男というものは、自分の歯のことは知らずに二十歳となれるし、自分のまつげのことを知らずに二十五歳になれるものだからである。一方少女の方は堅信前にそれらのことに気付く。その絵がまた引き起こしたのは、彼の中で自分の精霊に対して、つまり最初の教師に対して思い出と愛として微睡んでいたものの一切であった。いや彼はその絵の許で姿を消した自分の友との類似点だけを見いだして、その形姿を描かれた空無[中身のないもの]の中に、凹面鏡の中でのように、認めていた。

彼の脳は煌めく炭鉱のように枕の上での夢の中で燃え続けた。その夢の中で、彼は一粒の純然たる露の雫となって散るかのように青い花の萼が自分を吸い込むかのように思われた。 — それからその揺れる花は彼と共に高く伸びて行って、高い高い一部屋へ押し上げ、そこでは彼の友人の精霊が、あるいはグイードがその妹と遊んでいて、グイードは腕をグスタフに突き出すたびに、腕が取れて、妹がその腕をまた渡していた。突然花が折れて、落下しながら彼は三条の白い月光が彼の友を天へ連れて行くのを見た。友は視線を下に落下した者へ向けていた。彼は目覚めた — ベッドの外で開かれた窓にもたれかかると、窓からは庭越しに眠っているアウエンタールが見えた。天は黙した光線の雨となって降ってきた。 — 輝く宇宙では恒星の光線の先端だけが動いていた — 家々は墓標のように立っていて、その中で死すべき者達がぐっすり眠っていた。 — 諸夢が死すべき者達の閉ざされた諸感覚の中を出入りし、死が時折一つの頭を踏み割り、その中で夢を踏み割った。天はグスタフにとって彼の窓辺に沈んで来たように見えた。「愛しい者よ。戻って来ておくれ、帰って来ておくれ」(と彼は叫んだ、夢と現在とでそう引き裂かれていた) — 「君だったのだ、私の許に来てくれた。姿を見せておくれ、私を殺して欲しい。 — 幾千倍も愛しい者よ。君の天から少なくとも君の声を聞かせておくれ」。 — いつの間にか何かが窓の前で空気を引き裂いて、「グスタフ」と叫んだ。そして遠くへ

*原注 1 彼が彼をさらった女性から首にかけられて持ってきた行方不明の少年の絵のことである。少年は彼にととても似ていた。

飛び去りながら二度一層高く「グスタフ、グスタフ」と下へ呼びかけた。最初の瞬間一つの氷の山が彼の強張る皮膚の上に落ちて来た。しかし次の瞬間には彼はまた燃え上がって、彼の両腕を死と友に差し出して、何かを見るために目をまぶしい月光の下、ある空中に留めた。 — 今や二つの世界が彼のために一つに崩れ落ちた。諸恒星の背後の世界からの友の出現を落ち着いて彼は期待した。そして地上の胸と共に友のエーテルの胸の許へくずおれることを欲した。しかしこの時から、嵐の一带からの風のように、彼の魂の動揺が長いこと吹き続けることだろう。

—— 年老いた椋鳥[これは話せる]が多分行ったのだろう。これが私の知る限り、鳥籠から逃げ去ったのであった。グスタフはそのことを知らなかった。魂が養殖池の波のようにシャツの胸飾りほどに波打つか、あるいは大洋の波のようにアルプスほどに波打つかは別々のことである。この高い動揺を椋鳥が引き起こすか、亡き者であるかは一つのどうでもいいことである。

教授は私が聞いている中、彼に、自分が自ら教授を通じて犯してしまう人間智の黄金の法[ブルカルト教会法]を教えた。 — 例えば、人間の愛ばかりでなく、憎しみも変わりやすい。この二つは生長しないと、死滅してしまう。 — 大抵の者達が、単に、自分達が自ら有する悪徳に対してのみ意見する。 — 天才は偉大であるほど、肉体は美しいほど、それだけ一層世間はそのことを許す。徳操は偉大であるほど、それだけ一層世間が許すことは少ない。 — どの青年も、感情等々で自分に似ている者はいないと考える。しかしすべての青年が互いに似ている。 — 決して人々は詫びる必要はない。というのは他人の理性ではなく、情熱が我々に対し怒っているからである。この情熱に反論するのは時間の他には根拠はない。 — 人間達は幸運よりも歓喜を一層愛している。慈善家よりも立派な社交家を一層愛し、有益な駄獣よりも鸚鵡や愛玩犬、猿を一層愛している。 — 人間達に対しその原則を信用しないとき、人間達は察知される。邪推者はいつも正しい、邪推者は他人の行動ではなくても、他人の考えを察知する。劣等な者の敗北と善良な者の欲望を察知する。 — 誰もが汝に許さない聖霊に対する罪は、自分の精神に対する、つまり自分の虚栄心に対する罪のことである。追従者が気に入られるのは、その確信によるのではなくとも、その卑屈さによるものである等々。

より良きより高度な人間が蔑み、忌々しく思うある種の人間智の規則や手段があり、これらはまさにこのより高度な人間を察知するのに役立たず、このより高度な人間を教化することもなく、探求することもないものである。 — 教授は更に私のグスタフに、自分の顔を形成し、その顔に徳操のシルエットを描き、鏡の前で顔にアイロンをかけ、顔を激しい情動で壊すことのないよう助言した。私自身よく知っているが、世間の紳士にとって鏡はまだ、自分達の欠点を指摘してくれて、脳のように大きなものと小さなものとに分割しなければならない唯一の良心である。大きな良心は壁鏡、支柱鏡であり、小さな良心はケースに収まっていて、懐中鏡として取り出されることになる。世の紳士にとってはそうである。しかし君にとってはどうか、グスタフよ。 — 君は、先の悪漢にとっての十戒は推測できず、理解し、利用することさえできない。 — というのは人が利用し理解する人生の規則[人生訓]というのは、その基になっている経験を積み重ねた結果、自ら諸規則とすることができるようになったものに限られるからであり — 君には私がこう教えた。徳操とは他人の自我と我々の自我に対する敬意に他ならず、徳操を信じないことより

悪徳を信じない方がましであり、最悪の者達は単に自分自身のカーストを知っているだけであり、最良の者達はまだ更に一つのカーストを知っているのである、と。その君にとってはどうか。...グスタフが大方は真理であるかの教義に対して、この教師に対して激しなかったのであれば、この反吐の出る盲蜘蛛の哲学は彼の心の片隅にも網を張り、張り付くはずはないと誓わなかったのであれば、私は彼についてフォン・ブーゼ弁理公使夫人程度にすら結構とは考えなかったことだろう。夫人にとってエルヴェシウスの体系は彼の顔同様に美しく思えるものである。というのは彼女の身分ではしばしば最良の心が最悪の哲学を有しているからである。

悪漢のロービッシュが悪魔の許に追い払われたと、つまり逃亡兵を新兵と称して誤魔化したので追い払われたと私が記すことはほとんどその甲斐がなかろう。私が「悪魔の許に追い払われた」と言うとき、これは私の諷刺であった。というのはそれはフォン・レーパーの許であったからで、彼はロービッシュのような博識お仕着せの従者しか採用しないからで、つまり同時に獵師、庭師、書記、百姓、従者であるものである。 —

第二十一扇形、あるいはミカエル祭[九月二十九日]の扇形 読者と伝記作者の新たな契約 — グスタフの手紙

「行くがいい、愛しい者よ」（と私は言った）「世界の海が拉致して行く者よ。君の隠れて感じている心の太陽の像が海の底から微笑み、そして君と一緒に泳ぐがいい。君の若い心をもはやアウエンタールに向けてはならない。 — だって人間の果実はその花とは別の天候を得なければならぬのだから。 — 春の微風の代わりに八月の刺すような痛みと秋の嵐を必要とするのだから」。私は彼の馬車が私の目に留まっている限り、そう考えた。その後私は庭の洞穴の二人の僧侶の許に降りて行った。そして私が汝らの冷たい石の胸の中には何の願いも、憧れも、痛みも、 — 心もないと考えたとき、「まさにそれ故に[行くがいい]」と私は別の意味で言った。

今日はミカエル祭である、そして今日 — 私はこれ以上偽装できないが — 彼の旅立ちから一年経っている。今日私と読者の間では全く新しい生活が始まる。我々は静かに万事を互いに前もって決めることにしよう。

まず確かに私は一年間グスタフの人生から遅れている。しかし八週間で私はこの人生を書くのに追い付くと思っている。勿論すでに半年前に、さて彼の後ろ姿は捉えられようと期待したものである。しかし人生というものは描くよりも、過ごすことの方が易しい。殊に立派なスタイルでとなるとそうである。そもそも著者は — 立派な著者は — 天の星を数える方が、これも星である将来の全紙を数えるよりも易しい。結局期待したいのは、少なくとも文芸新聞は、私が法曹家であって、文芸新聞のためには、全団体、学部、帝国最高法廷のために書くほどには書けないということに大いに配慮して頂きたいということである。文芸新聞は私の恐ろしいほどの多くの仕事を知っているのであろうか。まだ一言も書かれていない、まずは製紙工場から取り寄せたばかりの冊子で一杯の貯蔵庫を見て頂く必要があろう。あるいはシュヴェンツでの私の裁判仕事を知って頂く必要があろう。ここでは十二名の臣下や領主や裁判所長そのものが百姓達であって、私からはせいぜい毎年一冊の本だけを要求するようになろう。シェーラウ全体である訴訟に関わっている代理人

は誰であろうか。この訴訟は次々に — 悪魔が関わっているに違いないが — 上等の文体を承知している帝国大審院の公判の下、ヴェッツラーの門のところまで送付されることになるであろうものである。確かに裁判というものは、ピョートル大帝のように下から上がって行き、柱頭行者派のように次第に高い椅子へと昇って行ったのである。

第二に — あるいはこれはまだ第一のものであろうが、従って私は、ユダヤ人のように、単に安息日あるいは日曜日にだけ、私の魂の胎児の彫塑を考えることができるのである。平日に書かれるのは、これも伝記でしかないが、しかし単に悪漢達の伝記であって、つまり議事録や告訴状である。

第二にあるいは第三に、私は学校教師職にあるものである。 — 善良な騎兵大尉は、彼の息子が家を出たので、私を身柄拘束しようと思った。これは私の場合実質拘留である。私の動産は私の体であり、私の不動産は私の魂であるからである。私は彼の館で、私の望む限り長く弁護稼業、諷刺稼業をすることになった。彼の老領主裁判所長が消えてくれれば有り難いところであろう。そうなる私に新しい所長となろう。というのは彼の善良な心では — 私の悪漢的、宮廷の上品さに慣れた心はこの上品さの欠如を必ずしも大目に見ることを好まず、 — 人間を解雇できないからである。私のファルケンベルクよ、汝の健康な北東の呼吸を保つがいい、汝の両手をぶん殴る棒「お見舞い」[ゼカリア書、11,7]と共に、汝の舌を対の「畜生」や千もの「悪魔野郎」と共に保つがいい。

私は冬も彼の許に留まった。しかし今年の春には、私はこれを執筆している地に移った。

— アウエンタールの学校教師ゼバスティアン・ヴッツ^{*原注 1}の上の階である。私はひょっとしたら世間で最も理性的な三つの根拠を挙げることができるかもしれない。第一に私は荒れた峡谷で一杯のヴァチカン宮殿、空き部屋のサハラ砂漠よりも意気消沈してしまうところはない。貧弱な家具の食堂は私にとってパトモス島で、ただ小さな小部屋でのみ人はより偉大になる。人間は年々より小さな独房に忍び込むべきで、最後には最も小さな独房に、つまりこの潰された銀線の最も小さな穴に入り込むことになる。 — 第二の理由はフォルティウス氏であった（モーアホーフ、『博学者』、L. II. 第 8 章）、彼は学者達に、半年ごとに町を変えて、より上手に書くよう勧めている。 — 実際変わるたびごとにより上手に書けるのであって、写字台を変えることでもそうである。このような新鮮な外気がなければ、魂は深くその切り通しまで書き進んでしまい、そこで天と地も見えずに立ち止まってしまう。現在の作品はひょっとしたらものになるかもしれない。しかし月ごとに、扇形ごとに私は別なキャビンで書かなければならないだろう。 —

第三の最も理性的な理由は私の妹である。彼女はまたフォン・ブーゼ夫人の許から戻ってきている。まず第一に、彼女は自分の職を美しい本の虫の女性に、つまり善良なベアータに明け渡さなければならなかったからである。父親とドクトル、その恋人 — 愚かなエーフェル（しかし彼は全く最良されない）が — ようやく彼女をすべての歓喜と訪問のこの合流の中へと説得したのであった。 — 第二に私の妹がここにいるからである。

*原注 1 彼の父、マリア・ヴッツの全生涯を私は第二巻の最後に添えた。ただこの生涯は、作品全体とは製本屋の綴じ針と糊とでしか関連付けられない一つのエピソードなのであるが、世間は私に好意を見せて、これをこの注の後で早速読んで頂きたいものである。

私がおまえを元に戻せよう。誰がおまえの心から、他人の視線への執着を、愛されるのではなく賛嘆されることへのおまえの渴望を、おまえの媚態嗜好を、これは愛を単に刺激しようとするだけで、応えようとするものではなく、つまりおまえの以前の心やベアータの永遠の心からおまえの心をつかすもの一切を追い払おうとするであろうか。―― 私の妹とはそんなわけで館を狭小なものにしたくなかったのである。ちなみに妹は毎日その館で数時間座って過ごしているのである。

今や私は読者に、読者がどこにいるか教えた。我々は再び、グスタフの馬車に戻って、我々皆が、読者が、植字工が、執筆者が満足することになる。

グスタフは、美しい天が涙へと解き放った痛みを酩酊と共にシェーラウへ進んで行った。そして我々の館に向かって飛んでくる燕のすべて、蜂のすべてを幸せと見なした。次の十年間が十枚のカーテンとなって彼の前に陰鬱に垂れかかっていた。「カーテンの背後には」と彼は自問した、「骸骨や猛禽、あるいは楽園があるのだろうか」。―― カーテンなしに彼の前に座っていて、講義するもの、これも彼は見なかった。教授のことである。シェーラウから二時間のところで彼はかの燃え上がる感謝の念で私に書いてきた。この念は単に[二番目の]年代にある人間からのみ輝くように現れるものである。外部から内部へというよりは内部から外部へと変わって行くすべての魂の場合と同様に、彼の内部では彼の心のバロメーターはしばしば不動に同じ段階にあった。彼は彼の内部の天の雨雲と虹とをシェーラウへ携えて行った。彼はその溢れる心を広大に反響する士官学校寄宿舎と階段でのその年の市風喧噪、そして士官学校生徒の雄叫びの中へ、銅版金職人の打ち込みの下や、晒布工場の許へ持ち込むように運んで行った。―― 彼は一段と悲しくなった、もっと多くの痛みをかかえていた。

彼が足を踏み入れ、住むことになった部屋で珍しいものは、三人の士官学校生徒ではなく―― というのは彼らは現行の人間、小貨幣、散文的魂で、つまり陽気で、機知豊か、感情がなく、より高い欲求への関心がなく、凡庸な情熱の者達であったからで、―― 珍しいものは部屋の監督官、フォン・エーフェル氏で、針で刺された蠅のように刀を携えて動いていた。エーフェルは早速彼を観察し始めた。夕方彼のことを記述するためであった。

―― しかし社交では彼は皆を観察したが、他人の策略を聞き取るためではなく、自分の策略を呈示するためであった。敬意を払わずに彼は称賛もしたし、憎みもしないで悪口を言った。単に彼は輝きたいのであった。

こうした状況下で、グスタフが苦痛を越えて仕事への難しい歩みを行う前に、思い出の形をとって慰めが彼の許にやって来た。グスタフは、忘れるはずのなかったもの、―― 彼のアマンドゥス、幼少の友に会った。しかしこの良き若者は、最初の盲人の姿ではなく、最後の瀕死の者の姿で登場した。彼はまだ残っている外皮から彼のすべての髓を吸い尽くした神経の消耗性疾患に罹っていて、―― 外皮には萎れて垂れた葉と共にただ枝が掛かっているだけであった。彼は官職や人生への準備をしていず、代々の墓地の敷居で、階段を登ってくる死を受け入れようとしていた。―― しかし彼の魂が生き生きとした傷の中にあつたということで驚くのは男性を措いてない。というのは美しい女性の魂はそれと異なることがほとんどないからである。しかし男達はこの傷を大目に見ない。大抵の者が、

来る日も来る日もではなく、痛みから痛みへと生き、涙から涙へと生きているという光景で男達は女性と比して軟弱になることはない。...

グスタフの中で第二の自我（友人）はほとんど第一の自我と共に一つの屋根の下に、脳皮、頭皮の下に住んでいた。つまり彼は他人に関しては自分が見たものよりも、自分が考えたものをむしろ愛していた。そもそも彼の感情は彼の感覚よりは彼の観念の周りに一層間近に、一層密にあった。それ故しばしば友情の炎は、友人のイメージで高く昇って行くが、友人の肉体で曲げられ、追い払われるのであった。それ故彼は彼のアマンドゥスを、そもそも到着は離別よりも昂揚が少なく、自分の内部から完全には外部に達しない程度の昂揚で迎えた。 — しかし観察していたエーフェルは、瞬き六回で、新しいこの士官学校生徒は貴族的に気位が高いと思った。

すべての戦争志願者の中でグスタフは最も困窮にあった。静かなカルトゥジオ会修道院から、彼は騒ぐ部屋へ追放されていた。そこでは毎日三人の士官学校生徒が彼の耳をフェンシングの剣の突きや、カルタ占い、悪態で襲ってきた。 — 村の城から彼はルーブル宮へ投げ出され、太鼓がそこでは言語器官、言語機械で、それを通じて校長は生徒達と話した。丁度コオロギがそのすべての物音を腹の生来の太鼓で立てるような按配である。彼らは食事のため、就寝のため、目覚めのために、一人の村役者の平土間の場合のように、太鼓が叩かれた。行進して、命令の言葉を聞きながら、この民兵は食堂を自分達の墨壁として登り、要塞から半日分の糧食だけをせしめた。命令が下されると、彼らは椅子から離れ、また内城へと向かった。夜にはただ一人の士官学校生徒の足音を数えることができた。それが他のすべての生徒達の足音と分かった。命令の発声がこれらの歯車を同時に動かしていたからである。 — 思うに、食前の感謝はきちんと命令されるが故に、部隊全体同じ敬虔を有していた。一秒たりとも誰かが他の者より長く神と話すことはなかった。シェーラウのどの部隊であったか分からないが、かつて教会パレードの際、士官が皆の者どもに、いつもは悪魔の許へと命ずるものを、神の許へと号令をかけたとき、分別ある服従にひどく反して、少なくとも翼兵より四分間長く天に敬虔に跪いていた奴がいた。 — 私がこう申すのは、この祈念者がそのことで[剣の]軍罰を受けたとき公然とこう質問したからである。つまりまさにこうしたやり方で中隊に論理学を教えることができないだろうか、これは彼らにとって口髭同様に必要なものであり、口髭よりも有益なものである。口髭はクリームで磨く必要があるが、論理学はその必要がないのだから、と。命令して、「作れ」という単語を省略できないだろうか、「前置文を作れ — 後置文を作れ — 結論を作れ[出せ]」の場合。私が一中隊を購入し、贖罪の三つの部分を例えばこうするようにさせたら、私は非難を受けることはないだろう。後悔し — 信じ — 改め — つまり自らをそうせよ、あるいは年若な士官達が付け加えているように、さもないと有り難い目に遭うぞ、と。

オーストリアの兵士は一七五六年まで七十二のやり方を学ばなければならなかった。敵を撃退するためではなく — 悪魔を撃退するためである。

戦争と同僚達に対してグスタフがこうした気分にいるとき、彼は私に手紙をくれた。その冒頭はここでは省いてある。我々の手紙の記述者は受け取る時と同様に冒頭ではいつも冷たいのが常であるからである。

—— 「演習や勉学のせいで私は全く別な人間となっていますが、一層幸せな人間と

はなっていない。私はしばしば自ら自分の軟弱さに、自分の目に立腹しています。目からの涙の痕跡を秘かにぬぐい去ろうと努めています。そして私の心に立腹しています。この心は、今や頻繁に、しかし確かに侮辱者はそのつもりではないけれども、私が経験する侮辱のたびに、激しく溢れはしないものの、圧縮されて、不浄な世界に対する大きな涙のようになります。長剣や悪態しか耳にしない私の同室者達は私のことをすべて笑いものにしてしています。この手紙でさえ彼らの下では書けず、「静かな国」^{*原注 2}の野外の、花の女神の足許、台座で書いています。女神の前面の腕と花籠は折れています。善良なエーフェル氏は目下阿弁理公使夫人の許、旧館にいます。

勉強しないときには、どの部屋も、どの家も、どの顔も私に圧迫感を与えます。 —
それでもまた勉強にとりかかると — それも先週のように悪天候の場合、私は好んで宝
石箱を開けるように数学的製図器具を取り出します。しかしすべての鳥の鳴き声の下、捕
らえられた鳥の声の下でさえ、炎のような朝が屋根屋根から私どもの露地へと光を射して、
郵便馬車の御者がそのホルンの音で、その朝が町という名の殺害された自然の角張った、
先の鋭い、風化しつつある、非有機的に結合された塵芥の山から今や、殺害されていない
自然の鼓動し、切迫し、芽吹く雑踏の中へ入って行くのだ、そこでは根が次々に絡み合っ
て、すべてが共同共生して育ち、すべてのより小さな生命が一つの偉大な無限の生命へと
互いに絡み合っていくのだと私に思い出させるとき、そのとき私の心のすべての血の滴は、
砲兵隊が我々の青い朝の時を剥製にするときの、ピッチの輪や、塹壕見張り台や、砲身掃
除棒を目にして竦みます。それでも私は緑なす自然と、自然を大気中に投げ飛ばすように
学ぶ地雷[坑道]のことを忘れ、棒の上に高く染物屋の家から舞っている長い[喪の]紗が、
すでに夜のように哀れな母親達の顔の上に懸かっているのだけを目にします。私どもが朝
倒すように学ぶ、死体の背後に暗く嘆きの露が降りるようにするためです。 — — いや
はや。祖国のための死はもはやなく、祖国に抗するための死しかなくなっていて以来、私が自
分の命を犠牲にしても、何の命も救い出せず、単に一つの生命を縛ることになって以来、
それ以来私は願わざるを得ません。戦争がいつか私を殺害へと陣太鼓を叩くのであれば、
前もって私の目を火薬で射て見えなくして欲しいと、私が刺す相手の胸を見ることのない
ように、そして私が砕く美しい形姿を悼むことのないように、そして殺害はせずに、単に
自分が死ぬように仕向けて欲しいと願わざるを得ません。...まだ私がカルトゥジオ修道院
から、まだ貴方の書齋から世間を眺めていたとき、世間はもっと美しく、もっと偉大に、
波打つ森や炎の湖や、何千倍にも描かれた沃野と共に私の前に広がっていました。 —
今や私は世間の上に立っていて、糞土の根を持つ禿げた針葉樹と泥で一杯の黒い池、黄色
い草と排水溝で一杯の一年刈りの草地を目にしています。 —

ひょっとしたら人々の役に立つという私の夢を、私が別の人生行路を取って、戦場の代

*原注 2 亡き侯爵の夫人がロマンチックな情感豊かな、芸術規則を超出する精神で設置したマリーエンホーフ周辺の英国庭園はそのように呼ばれていた。苦悶のお蔭で静かな国の名前と設計が夫人に思い浮かんだ。今や瀕死の彼女の魂そのものにとって、この「国」でさえ騒がしすぎて、彼女は引き籠もって暮らしている。そこに行ったことのない読者に私は庭園の描写で恩を売りたい。

わりに会議席を選び、犠牲の目的を高尚なものにすることが許されるならば、^{*原注 3} もっと実現できるかもしれません。赤い太陽が私のペンの前にあって、私の紙に走る影を投げかけています。天のダイヤモンドよ、汝は動かずにいて作用し、稲妻のように明るくし、それでいて殺害的轟音を立てない。自然全体は創造するとき、黙しています。そして破壊するとき声高になります。偉大な、夕方の炎の中にある自然よ。人間はただ汝の静かさを真似すべきで、汝の善行を困窮者に運ぶただのか弱い子供であるべきであろう。

貴方が今日アウエンタールから私どもの館の太陽光で波打つ窓を目にされたら、私の魂もまた今覗いているのです、しかしもっと多くの溜め息と共に」等々。

士官達は、グスタフが士官になる気がないのを見てとるであろう。しかし彼は彼の父全体を敵にまわすことになる。父は単に突撃する兵士を愛していて、より静かな商売人を蔑むこと、この商売人がもっと静かな、商売をしない学者を馬鹿にするに等しいのである。

—

第二十二扇形、あるいは第十九の聖三位一体の祝日の扇形
真の刑法学者 — 私の領主裁判所長職 — 誕生日と穀物の密輸入

私がお後の木曜日に私のグスタフの許を訪ねて、少しばかり教えようと思ったとき、フォン・エーフェル氏が、ただもう一つの扇形全体を前もって十分に形成できそうなある理由で、数人の軽騎兵と共に彼を国境にまで送ってきた。彼らはそこで、何の穀物をも出させず、何の胡椒も入れさせない穀類の監視線を築いた。民衆の大抵の運動は蠕動運動から始まるので、多くの繊細な人々が、国の領主がこの件に関わっていて、領民に何かを碎いて、囓むものを与えるつもりであると察知したがっている。

しかし私はこの件でのとんでもない所業を結局知ったので、そのことを披露したいが、しかし順を追って行かなければならない。

つまりこうである。大きな騎士領のマウセンバッハは、周知のように上級裁判所を有している。しかし私と、騎士領所有者のフォン・レーパー貿易仲介業者はこの点に関し、敵対する諸理由から苛立っている。私が苛立っているのは、数百人の生命が、少なくともその名誉が、全ローマ民族の手の中にはなく、一人の長官等の手の中にあるのを目にしているからである。 — 世襲君主、領主、裁判権所有者が苛立っているのは、刑事裁判権が何の収入ももたらさない、裁判の剣を磨かせても、剣で財布の中へ刈り入れられるすべての収入よりももっと費用がかかるからである。「不義密通がまだ犯罪を取り締まる当局のためになる唯一のものだ」と世襲領主は言っている。全くその反対のことを領主裁判所

*原注 3 私の主人公がかくも愚かで、有益であろうと願っているのは私の責任ではない。私は愚かではなく、次のように証する。つまり劣等な国家の治療は（例えばより良い警察、学校、他の施設や個々の勅令等）は神経衰弱者の薬の服用に似ていて、この衰弱者は、病原因に対してではなく、徴候に対して作用しようとして欲し、その病を汗で取り除いたり、吐いて除いたり、下剤で除いたり、浴して除いたりしようとしている。

長のコルプは言っていた。重要な刑罰事件は彼の大規模なオペラであった。刑事上の文書は彼にとってクロブシュトックの頌歌であり、一人の捕吏は彼のオレステスであり、サンチョ・パンサであった。 — 彼は世界を二つの列に分断したかったことだろう、吊す列と吊される列である。そして自分は刑法学者であり続けたかったことだろう。 — 拘留中の髭を剃ってない罪人は彼にとってガラスの容器の中の中国の金魚のようなもので、どちらも来客に紹介されるものであった。 — ただ二、三の大陸での自由な悪漢狩が彼の本領、悦楽であったことであろう。 — 彼は私が死ねばいいと憎んでいた。かつて彼の許で一人を弁護して死刑から懲役に変えたことがあったからである。 — 彼はすべての処刑者の過去帳を有し、ドイツの圏で収穫される限りのすべての盗人（名誉毀損者を除いて）の名簿、あるいは系図学的播種台帳を有しており、そして真の悪漢は彼にとって、伝記作者のプルタルコスにとってそうであるもの、つまり立派な志操の人間であった。要するに彼は真の刑法学者で、ドイツ古代の法や新しいイギリス法の意向に全く適った人物であった。というのは両法によると各人は単に自分の同類によって裁かれ罰せられるべきであるからである。どの悪漢も殺害者もコルベを同様に偉大であると見なさざるを得ず、従って被告人はこう答えたのである。自分は自分と同類の者によって裁かれるという法の恩恵を得ている、と。このことが適用され得るような同等の刑事裁判官や大学の学者を私は多くは知らない。

このことにレーパーははなはだうんざりしていた。というのは彼の刑事裁判官は毎月採算割れの刑罰事件を彼の許に引き寄せてきたからである。高位の刑罰裁判領主は捕らえることよりも審理の継承がその役目であった。要するに長官がマウセンバッハの森で新たに絞首台新兵強奪を実行しようと思ったとき — これはひょっとしたらロービッシュに責任があったのかもしれないが — フォン・レーパー氏はこの盗人強奪を次のように是正した。つまり彼は彼の刑事裁判官に必要なだけの無礼を行い、長官が辞職するしかないようにしたのであった。

悪漢の彼はそれでもなお若干のことを行って、至らぬ私のことを模写した。彼は私の弁護を忘れることができなかつたので、収支を合わせて、レーパーに言った。私は何の役にも立たない、私は彼や貴族を憎んでおり、極上の家庭作法を有している人間である。パウエルは臣下のどんな裁判でも領主に反対の立場をとり、かつて自ら、貿易仲介業者に反対するペン執ったことがある、と。 — 汝、惨めなコルプよ。一本脚どもがそうしない法があるか。 — 私の最も重要な裁判は今日でもそれと変わらない。 — 私が早速行おうと思っている提案が実現しないことがあるか。貧民弁護士の例にならって、臣下のための弁護士が導入される。この弁護士はマルタ島騎士団が異教徒の者達に対して戦うように、単に世襲領主裁判官に対して戦うものであるという提案である。 —

私はこのことをレーパー自身の口から得ている。というのは、要するに彼は私をそれでもマウセンバッハの — 長官に任命したからである。弁護士界、読者界は好きなように驚くがいい。コルプの攻撃はこの裁判席へのまさに私の周り階段となった。私の裁判上司[雇い主]はすべての審級や貴族との永遠の闘いのために法学的闘牛士、熱いペンナイフの捕鯨砲射手を必要としている。しかしコルプが、私がその一人であると言った。第二にフォン・レーパー氏が私に裁判席を提供したのは、私が馬に乗らず（短い片方の脚のせいで）、馬車に乗らず（船酔いをする胃のせいで）、従って、これまで彼の馬小屋が授けな

ければならなかった馬の後衛なしに法維持のために駆けつけたからである。書評家やその編集者にとってこう合図されるのは害ではあるまい。つまりとくと考えて欲しいのであるが、彼らがこれから紙を取って書評する男は、彼らのように取るに足りないものなんかではなくて、彼ら同様に裁くものであって、それはしかし文学的生活よりも実際の生活について裁くものであり、彼らが彼の裁判所轄区で名誉より他のものを盗んだら、このような書評家を自ら絞首刑に処することのできるものである、と。

今や本題である。私は初めて裁判官としてマウセンバッハに来て、私の官職に就いた。万事がまことに上手く行った。私と臣下達は互いに紹介され、私はこの日五百の手と握手した。勿論私は私に対して一緒に行われるなお幾多の不愉快な顔をこすり落とさなければならぬ、私の余り好かれていない上司[雇い主]に対してなされている顔である。民衆と貴族はローマばかりでなく、今日の村々でもいつでも互いに髪をつかみ合っていて、借金のことでは争っているのである。私の領主裁判所長職の他に今日はなおその誕生日が祝われるものがあった。一 その職の授与者、レーパー本人である。そこで我々はまことに結構なことに二つのことを祝って食した。第一にレーパーによって解散された議会在私の許で今日再び招集されたからであり、第二にその招集者が何年も前に生まれたからである。この再生者との私の違いにもかかわらず、私は上機嫌であったと言える。一 汝、つまりルイーゼ、上司の領主夫人については言うまでもない。一 何という羨えた心が、汝の目が汝の夫の満足な様に対して、また夫の生活への願いによって輝くのを目にするとき、汝の心と一緒に思いついて鼓動することであろう。一 汝の夫本人の方を話すことにしよう。彼がどのような人間であれ、私にとっては、一つ部屋の天井の下で一緒に座っている一人の男について、これまで聞いたり、信じたりもした悪しきことを思い浮かべるのは不可能なことであった。まことに、我々を隔てるのが一つのテーブルであるか、一つの国道であるかはどうでもいいことではない。君が一人の人間を伝聞で憎んでいるとき、その家へ行って見守るがいい。つまりその会話の中に幾多の友好的特徴を、その人が愛している子供や妻に対するその人の振る舞いに愛の幾多の印を見いだしたとき、君が持参した憎しみの気持ちをまた持ち出せるものか見守るがいい。現著者がその生涯で何かに含むところがあったとすれば、それは偉いさん達であった。しかし現著者がシェーラウでのピアノのレッスンで幾多の偉いさんと一つの天井画の下に立つ機会を得て以来、自らこれらの巨人達と飛び回ることになって以来、民衆を抑圧している大臣は自分の子供達を愛しており、会議室での人間の敵は、自分の妻の裁縫台の許では人間の友であり得ると気付いている。かくてアルプスの尖峰は遠くでは禿げて急峻な眺めであるが、近くでは広場や立派な薬草が十分にあるのである。

従って白状すると、太古からの風習に従って（宮廷での誕生日にこのようなものを私は食したことがなかった）ビスケットのトルテが運ばれてきて、そこに「万歳 Vivat」と「レーパー」の名前がアーモンドの活字で植え付けられて読めるように、食べられるようになっていたとき一 更に名前の所有者が、「こんなつまらぬいたずらをして」と言ったけれども、すぐに目が充満して、こう言い添えたとき、「外の家の人々にも一口切ってやりなさい」、一 申し上げたように、白状すると、そのとき彼について幾多の噂を私の記憶から消したくなった。この噂は簡潔なアーモンドの文体とは多分合わないもので、そして私は彼がザリガニの頭部の宝石には余り気にせず、喜びの最中、彼のザリガニの小箱に

若干の寄与を注ぎそこねたルイーゼに対して、文句を付けていなかったのであれば、特別に何かを奉呈したかった、ザリガニを最も好んで奉呈したかったところであろう。 — 私はただ率直になりたいと思う。私がザリガニの目のように厳格であり続けたいと思ったならば、悪魔に私はさらわれてしまわなければならなかったであろう。汝、私の音楽の生徒、優しいベアータが、宮廷の空気から^{*原注 1}、植物の花が窒素から吸うように、より華奢な刺激やより高い光沢だけを吸い込んで、汝が、優しい生徒よ、父親の評判を思う女性らしい感情で進んで行き、彼女の手口に口を添えて、父親に最も素直な祝意をもたらし、汝ら二人を愛の溢れる眼差しで見守っている汝の母親の首許でようやく汝の心をより間近な心に注ぎ込んだのだから。...

今ようやく約束の主題がやって来た。 — つまり私のグスタフである。彼は外にいたらよかったのにと私は思った。彼は二人の軽騎兵の前を騎行していて、これは穀物馬車を護衛していた。馬車は国境を越えたところで — シェーラウ侯国は人間の悟性同様至る所境界に突き当たっていて — 荷を降ろそうと思っていた。二人の軽騎兵は賄賂を貰うことを欲していた。万事は順調であった。しかしグスタフはそうではなかった。随伴者の小作元請けは密輸品をレーパーの財産と称していた。 — そしてレーパーに対してはグスタフ全体がすでに父親の代から毛が逆立つのであった。第二に彼は今、徳操の花嫁時代、蜜月にあつて、立派な仕事と倫理的前菜とを一つのことに考え、スタイルと徳操が余りに炎を発しているのであった。要するに、小作元請けと馬車は引き返さなければならなくなった。士官学校生徒は誕生日の部屋に入ってきて、レーパー式の欺瞞に対し沸き立つ憎悪を込めて報告しようとした。しかし彼が私を何週間も経てから見、また私の女子生徒を初めて見、樂しげに紅潮した顔の下に来たとき、このことが出来ただろうか。これらの顔から彼は実際血の氣と喜びを追い払おうとしていたのである。 — 彼は私を脇に連れて行って、私にすべてを打ち明けることしかできなかった。しかし傾聴され、罪体が騒いで、貿易仲介業者に同じことを打ち明けることになった。彼は早速士官学校生徒に憤激して罵り始めて、この士官学校生徒には何の関係もないことだと言って、その件に長く興奮して、その災難全体に対する解決策を思い付くに至った。私は彼と一緒に玄関の前に出て、彼にこう言われた。私は彼の長官として容易に察することであろうが、穀物は彼の小作元請けの穀物と称せざるを得ないであろう、侯爵は一人の役人といえども容赦はしないであろうから、と。容赦のないこと、つまり官職の売買や審理の狼藉、その種のことに寛容なけちな砒素のような国王も、自分に対する不服従には有毒な風のように向かってくるということを私は彼の新たな長官として察知した。しかし二番目の欺瞞は最初の欺瞞の逆茂木、弁護士でなければならないということに私は思い至らなかった。我々が言い争っていると、とうとうこの争いの対象、つまり小作元請け本人がやって来て、取り乱した顔をして、どもりながら許しを請いに来た。「不安の余り自分の穀物を閣下の穀物と称してしまったこと、平にお許し頂きたい」と。かくて結び目[難題]が解けた。私の上司[雇い主]はこれまで単に自分の幸い国境を無事通り抜けた密輸品を押収された他人の品と取り違えていたこ

*原注 1 彼女はフォン・ブーゼ弁理公使夫人の許から単に父親の誕生日のお祝いのためにこちらへ旅して来たということを読者は思い出さなければならない。

とになったのであった。早速彼は小作元請けを健康な倫理家として、一度に自分と国と侯爵を欺く悪意があったと非難した。「今や政府の通達を開封してみたい。彼を早速引き渡すことになろう」と。私のグスタフの許に彼は駆け付けると、罪をなすりつけられたと激して、多くの粗野な言辞を、侮辱を受けた半端な百万長者にふさわしいと思われるほどぶつけた。黄金の所有者は、黄金の弦のように、とても粗野に響くものである。徳操過多の私の愛しいグスタフが私には気の毒に思われた。彼には哀れな小作元請けの災難が気の毒に思われた。ベアータには我々全員の恥辱が気の毒に思われた。感情に引き裂かれ、グスタフは黙して部屋から逃げ去った。その部屋で彼はまだ美しい顔を見せて震えている最も柔らかな心から、つまりベアータの心から子供らしい喜びの花を折り取って、投げ棄ててしまったのであった。

今や根本的にまず悪魔が放たれた。 — つまりファルケンベルク家に対する、その忌まわしい浪費に対する、士官学校生徒に対するレーパーの罵声が始まった。しかし私は黙っていなかった。私が騎士に対して浪費を罵声者が考えていたような意味で適用していたら、私は悪漢（より一層悪漢）と言えたであろう。 — 私が私の最初の長官としての仕事で、抵抗に遭うということに彼を慣れさせようとせず、ようやく十番目か二十番目の行事でそうさせようと考えていたら、私は愚か（あるいはより一層愚か）であったろう。 — — — しかし私が彼の波を静めるために流し込んだ油は水を注ぐことにならず、炎を注ぐことになった。私の女子生徒[ベアータ]がベンダの『ロメオ』から最も澄んだ声の箇所を我々に暗示しても、我々兩人にはほとんど役立たなかった。 — 以前の陽気さはもはや戻って来なかった。 — 我々は顔面を空しく痙攣させ、操作した。レーパーはインドの雄鶏に見え、私はヨーロッパの雄鶏に見えた。 — 私は夕方には月が昇った後、ベアータと一緒にいて、少し感傷的な気分になる予定であった。いずれにせよ宮廷が彼女を私から奪ったのだから。私は十分に感受し、感じ入るであろうと確信していた。私はある影の下、あるいは木の下、私の心を取りだして、こう言ったことだろう、「受け取り給え」と。いや私はそれどころか、今日ベアータを普段よりもはるかに自分の間近に引き寄せているように見えた。このことは両親とも仕事の付き合いがあるすべての娘の場合上手く行くものである。 — — — これが今や皆ご破算になった。私は最高裁判所の使者のように冷たく、頑固に立ち去らなければならず、面白くなかった。新しい長官が、かりかりしてその職務に就いて、うんざりしているとき、誕生日が喧嘩になってしまったその上司[雇い主]は更にうんざりしていた。かくて私はびっこを引きながら去って、道々自分に言い続けた。「こんなわけで、こんな顔をし、こんな様子で、汝は、幸せなパウルよ、汝のマウセンバッハの領主裁判所長職から帰ることになった。すでに汝の扇形では前もっておしゃべりしていたことだが。 — — 月よ、おまえは別に昇らなくてもいい。今日はおまえの白粉の顔はいらない — 忌々しい一台の穀物荷車、それに侯爵 — それにけちん坊、その上若造の徳操。皆が悪魔の許に、...しかしせめて私が機転が利いていて、すぐに午前中のような感じで、食事の前に何か心の片鱗を見せていたら、せめて心耳を一つ、せめて筋を一つ見せていたらよかったのだが」。

「おや、長官」（と私のヴッツが私に話しかけた）「お帰りですか。面白い不義密通がありましたか、売春婦事件、つかみ合い、名誉毀損でしたか」。

「ただ幾つかの名誉毀損です」と私は言った。

第二十三扇形、あるいは第二十の聖三位一体祭の扇形
別の喧嘩 — 静かな国 — ベアータの手紙 — 和解 — グイードの肖像画

今日の日曜日でも、何故グスタフは予定より五日遅れてシェーラウに帰って来たのか私は聞き出せなかった。彼はそれどころか策略というよりも不安げに私の詮索を避けた。エーフェルは全てを報告させて、そこから彼の長編小説の荷二、三の扇形を作成していた。私と読者はこの長編小説をなお参照できればと期待している。彼の小説が私の小説より先に世にでて欲しいと思う。そうなれば、私は読者にその箇所を指摘でき、ひょっとしたら幾つかの逸話を取り出せよう。グスタフは精神的な外傷熱を得ているように見えた。彼はこれまでの流血で冷たくなった心をアマンドゥスの許に運んで、友の熱い胸元でまた暖め、孵し始め、直接に[最初の手から]得ることの出来なかった、自分に対する敬意を、第二の手から得ようと思ったのであった。そしてそこではこの敬意をいつも — 特別な理由から得ていた。彼の性格には或る特徴があって、このお蔭で彼は、一つの同朋の下にあったら、夙にインデアンへの伝道者としてアメリカへ渡っていたかもしれないのであった。つまり彼は説教を好んだ。別な風に申し上げるとすれば、彼の湧き出る魂は奔流となるか堰止まるかにならざるを得ず、滴らすことはできなかった。 — そしてその魂に友好的な耳が開かれているとすれば、魂は徳操や自然や未来に対する熱狂で雨となって降った。 — すると彼の観念世界を通じて快活な新鮮な空気が吹き抜け — 降り注いだ後、彼の内部の美しく明るい深い青色の空が開かれ、アマンドゥスは開いた天の下に恍惚として立つことになった。心から愛する友の優位が一つの、自分にとって煩わしくなく、自分を持ち上げる基盤となっていたアマンドゥスは他人の価値の中で自分の価値を享受していた。いや、彼の余り剪定されていない頭の中では、雄弁な[グスタフの]頭の中よりも大きな温かさが生じていた。丁度例えば、薄暗い水の方が明るい水よりも太陽の下では一層強く温まるようなものである。グスタフは先の出来事を話して、彼と一緒に長いこと自分の正義、不正義について論じ、それについての痛みを話すことで消した。これは内的傷の炎の友情による論評である。アマンドゥスが笑いの余りの涙よりも泣き濡れた涙の方をより大きな関心を抱いて愛する他人の目から拭いたというのは、単に愛情とそれから若干の弱さと言えた。それ故彼は他人の苦悶に対する関心を引き延ばすために今一度その件に言及し、そして私の主人公グスタフが残りの五日間どこにいたかとたまたま質問した。グスタフは不安げに赤くなって聞き逃していた。 — アマンドゥスはより性急に答えを迫った — グスタフは一層強く彼を抱きしめて、言った。「聞かないでくれ、君が苦しくなるだけだから」。 — アマンドゥスは、そのヒステリー症の感情は繊細というより痙攣性であって、いよいよ本気にそのことで燃え上がってきた。 — グスタフは衷心より動揺してこう述べるに至った。「愛しい人よ。それは言えない、僕の口からは言えない」。 — アマンドゥスは全ての弱者のように友情と愛では嫉妬に駆られやすく、侮辱を感じて窓際に立った。 — グスタフは、穀物告訴の最新の過失の意識によって今日は一層譲歩し易く、一層温かくなっていて、彼の許へ行き、濡れた目をして言った。「何も言わないという誓いさえしていなかったらよかったのだが」。 — しかしアマンドゥスの魂は必ずしもすべての箇所がかの繊細な名誉心で覆われているのではなかった。この名誉心の許では約束

や誓いを破ることは腐食性の地獄石なのである。それに彼の中でもすべての弱者がそうであるように、魂の動きが、その理由が除かれた場合でさえ、海の波のように、長い風の後、逆向きの風になっても、なお以前の方向を取り続けたのである。 — 従って彼は窓から眺め続けて、許そうと思ったが、しかし機械的に跳ねる波を漸次収めさせざるを得なかった。グスタフが許しを性急に求めないでいたら、一層早く許しを得ていたことであろう。両者は黙って、そのままだった。「アマンドゥス」ととうとう彼はごく優しい調子で叫んだ。答えはなく、振り向くこともなかった。突然一人っきりで悩んでいたグスタフは行方不明の自分に似たグイードの肖像画を、痛みに圧倒されて取りだした。この絵は彼の少年時代に彼の胸に掛けられたことがあったもので、これを今日アマンドゥスに見せるつもりであった。そして砕かれ、溶け入るような心で言った。「描かれた友よ。愛しい色彩の空無[中身の無いもの]よ、汝は描かれた胸の下には心を有していない。汝は僕のことを知らず、僕には何の報いもしない。 — それでも僕は汝をとっても愛している — それで僕のアマンドゥスに忠実でないのだろうか」。 — 彼は突然この肖像画のガラスに自分自身の肖像画が悲しげな面差しで模写されているのを見た。「こちらを見給え」（と彼は別の調子で言った）「僕はこの描かれた他人にとっても似ているようだ。彼の顔が微笑み続けている。しかし僕の顔を見ておくれ」。 — 彼が顔を起こすと、大きく見開かれた、しかし涙に濡れた目とぴくつく唇とがその顔にあった。 — 愛の洪水が両者を固い抱擁へ連れ去り、両者を持ち上げた。 — そしてアマンドゥスがその後ようやく半ば嫉妬した質問、「自分はその肖像画をグスタフだと思っていた」に対し、否定とその話の全体の答えを得たとき、それは害のあるものとならなかった。というのは彼の心の動揺はすでにまた友情のベッドへと引き込まれていたからである。

このような魂の拡大の後では部屋というものは似合った対象物を提供できない。彼らはそこで描かれた天ではなく、生き生きとした天の見られる、色彩粒ではなく、燃え上がり、炭化した星々の懸かっている天井画の下、つまり外へ出て、シェーラウから半時間もかからない「静かな国」へ行った。和解したままでいたかったら、そんなことはすべきではなかったであろうに。

汝、静かな国よ、汝はここで記述を欲するのであるか。この国の上を私の空想は高く大地から離れ、大きな憧れを抱いて飛んで行く。 — それとも汝、静かな魂よ、汝がそう欲するか — 汝は今なお汝の魂の中で見守っていて、単にその現世的像をかつて地上に投げかけたものだ。 — そのどちらも私はできない。しかし我らの友二人がその国を通って行った道を描くことにしよう。その前に彼らの散歩の奇妙な結末を生んだ何事かについてなお伝えることにする。

いずれにせよ私は、ベアータが早速私や彼女のマウセンバッハからの帰還の後、私の妹宛に書いてくれた手紙をどこで紹介したらいいかよく分からない。彼女は私のフィリップーネと一緒に弁理公使夫人の許で過ごした数日の間に妹の友となった。少女達の友情というものは、しばしば一緒に手を握ったり、同じ色彩の服を着るということの中にある。しかしこの友情はむしろ同じ友情的志操を有していた。ベアータが、妹に半ば懸かっている媚態の反映に出会うという機会を得なかったのは、私の妹にとって幸いなことであった。というのは少女達は、殊に同性の媚態や虚栄心には容易に気付くものであるからである。

<愛するフィリッピーネ、

私はこれまでいつも、貴女に本当に威勢のいい手紙を書くために、ためらっていました。

ー しかし、フィリッピーネ、ここでは書けません。私の心は胸の中で氷室にいるようなもので、一日中震えています。でも貴女はここではいつも喜んでいて、別れのときを除いて決して沈んではいなかった。別れは一緒のときと同じほどの短いものでした。私自身の責任でしょうか。時々そう思います。弁理公使夫人の周りの笑っている色々な顔を見ているときとか、夫人自身が語って、私が夫人の立場になって、夫人に対して私の沈黙や語りがどのように見えているに相違ないか考えて見るときです。私はもはや私の一人ぼっちに希望を考えることは許されません。それほどに私は見知らぬ社交の長所なるもので辱めを受けています。ー 私にとって大きすぎる役割で私が圧迫を感じずる場合には、「静かな国」へ忍び出て、気持ちを立て直すしか術を知りません。ー するとより甘美な時が得られます。そしてしばしば突然私の目から涙が溢れます。すべてが私を愛しているように見え、そこでは穏やかな花や罪のない小鳥が私を辱めず、私の愛を敬してくれるからです。ー すると私は哀悼の侯爵夫人の精神が、孤独にその精神の作品の中を歩き回っているのが見え、私はその精神と一緒に進み、その精神が感ずることを感じ、その精神より先に私が泣きます。とても晴れてとても青い日中に立っているときには、太陽の方を懂れて見、それから周りの地平線の方を見回します、そして考えます。「御身が御身の弧を描き終わったのであれば、御身は御身の夕焼けに至るまで私が全く幸せであったような地上の地点を一つも照らし出してはくれなかったー 御身が沈んで、月が昇っても、月は御身が私に対しては多くを与えなかったと察知することだろう」。...大事な友の方。私のこの調子を悪く取らないでください。これは、いつもこの前兆の下、私が襲われる一つの病気のせいだと思ってください。貴女を私の腕で抱き寄せることができるのであれば、ひょっとしたらこうはならないかもしれません。幸せなフィリッピーネ。貴女の目は一杯涙を溜めていても、その下の口からはすでにまた機知が微笑みながらこぼれ出てきます。丁度私どもの公園の唯一のバルサム・ポプラが、まだ温かい雨粒を滴らせているときでも、芳香を放つようなものです。ー すべてが私の許から消えて行きます。絵でさえもそうです。ガラス戸の背後の死んで黙した色彩の像が、私の愛していた兄のすべてでした。貴女が有していて、私が失うもの、それはどんなものかお分かりにならないことでしょう。ー 今や兄の模像さえ私の許にないのです。愛しい兄の形見はもはや何もありません。希望も、手紙も、像もありません。ー この肖像画が無いのに気付いたのはマウセンバッハから帰ってからのことです。しかしひょっとしたら夙に無くなっていたのかもしれませんが。私はこれまでただ片付けなければならなかったのですから。ひょっとしたら私自身が貴女宛に送った本の中にそれを紛れ込ませたのかもしれませんが。ー そのときはお知らせください。私は承知しているのですが、私どもの家にはまだ一つ、私の兄の余り似ていない肖像画もありました。しかしそれは長いこと消えてしまっています>等々。

当然である。その肖像画はグスタフのものであったので、老レーパーが公に競りに出していた。ー しかし我々はまた我らの二人の友人の後を追って「静かな国」へ行くことにしよう。

二人は旧館の前を行かざるを得なかった。これはアダムの肋骨のように新館を孵化して

いて、新館の方ではまた新しい徒長枝、中国式庵とか浴場、園亭の広間、玉突き台等を作り出していた。新館にはフォン・ブーゼ弁理公使夫人が住んでいて、この建築上の胎児を一年を通じて二度と愛でることはなかった。館の二番目の背部ではイギリス庭園がフランス庭園と共に始まっていて、イギリス庭園を侯爵夫人はそのままにしておいた。コントラストを利用するためか、あるいはコントラストを避けるためで、この中で輝くような盛装の宮殿が牧人の服の太古からの自然の傍らに立っていた。両館の前を通り過ぎたくない者は、唐檜の小森を抜けて公園に行けたが、その前に一つの隠者の庵があって、その隠者というのは老侯爵とお気に入りの侍従であった。両者はその生活で半日たりとも一人っきりではなかった。狩りとかその他のとき道に迷っているときは別であったが。一 それ故彼らは一人っきりを欲して、それで（彼らは以前のパイロイトのエレミタージェの剽窃とか模刻を設置したということに気がしなかった）九つの庵を紙上に置き、その後テーブルの上に置き、最後に大地の上に置いた、というかむしろ九つの苔むした棚[クラフター、3m³]の材木を置いた。この空洞の判じ絵の棚には中国式の家具調度と黄金、一人の生ける廷臣が収まっていて、丁度例えば生きた樹木の幹に生きた蛙に出会ってびっくりするようなもので、どこにその穴があるのか分からない按配であった。この棚が一つの庵を囲んでいて、一 宮廷では誰一人として生きた隠者になりたい者はいないので 一 この庵には木製の隠者が信頼されており、この隠者が静かに分別をもって座していて、大いにこのような男に出来る範囲で冥想し、熟考していた。人々はこの隠者に対しシェーラウの学校文庫から若干の禁欲的作品を選んで配置していた。これらの作品は隠者にまことに適ったものであり、肉欲を殺すように彼に警告していた、すでに彼は殺していたのであるが。偉いさんとか最高位者は代理されるか、あるいは自ら代理するものである。しかし彼らが実際何かであることは稀である。別な者達が彼らの代わりに食し、書き、享受し、愛し、戦いに勝たなければならない。そして彼ら自身がまた別な者達のためにそうする。それ故、彼らが、隠者生活を享受するために己が魂を有せず、かつ他人の魂を有しないので、それでも木製の代理人を、彼らのために隠者生活を享受する代理人を轆轤師の許で得られるのは幸せなことである。それで私は切に願う、つまり慰み事のときほどに退屈で耐えられない偉いさん達が、彼らの公園の前とか、オーケストラ、図書館、子供部屋の前にこのように確固として生命のない代理人、天蓋運搬人、享受の不在時代代理人、青天避雷針を石像か単なる蠟像で作し、設置させたら結構なことであろうと切に願う。

庵の天井には（聖フェリチタの修道院の人工洞窟の天井のように）十分な建築倒壊、六個の裂け目、二、三のそこから落下するトカゲが描き込まれることになっていた。その画家はすでに旅の途中で、しかしその旅のために長く滞在して、留守で、それでその件は結局自ら仕上げられることになって、率直な人間に似て、見かけ以外の何ものでもなくなった。しかし人工の隠者の庵が自然の隠者の庵へと高貴化されると、夙に皆から忘れられることになった。従って、侍従が一 多くの上部シェーラウの人々が言っていたように 一 木喰い虫を集めさせて、隠者の椅子に注入させ、かくてこの虫が髪鋸や縫い目解除ナイフの代わりに仕事にかかり、椅子をもっと早くにアンティークなものとしたという説は純然たる真実というよりは中傷と思われる。一 まことに今やこの虫が椅子と僧侶に食い付いている。もっと滑稽なのは、分別ある男に対しこう信じ込ませようとするのである。つまり最初この建築好きな侍従は人工的に走る歯車仕掛けに鼠の皮の封筒を用意し、

[カールペーパーで]巻いて、かくて上の人工のトカゲに対し、対応の鼠を置いて、前面と奥に均整を配慮していたというもので、この後では主は更に自然に近付いていて、生きて走る鼠の上に人工的な第二の鼠の皮のコートや燕尾服を着せて、自然と人為とが交互に混じり合うようにしたということになる。 — 滑稽なことである。鼠どもは確かにいつも隠者の周りを走り回っている。しかしきつと単に一つの下着の皮膚と言えよう。

我らの二人の友人は我々から遠く離れて、すでに公園の所謂長い夕方の谷にいて、その谷を通じて日没の太陽から黄金の奔流が漂い落ちてきた。谷の両側の穏やかに高まった端では、点在する村々がこぼれてくる太陽で緑色に輝くように見えた。東側では公園の続きを越えて輝く館まで見えて、館の窓では太陽と夕映えの花火とで二重化していた。ここで老侯爵夫人はいつも太陽の最初の日没を眺めるのであった。それから彼女は穏やかな葛折りの道を通って、谷の高い岸まで上がった。谷では一日がなお臨終のときにあつて、今一度屈折する太陽の目と共に、父親らしく大きな子供の園を眺め、夜が一日の目を閉じさせて、その母親らしい膝に見棄てられた大地を受け入れた。

グスタフとアマンドゥスよ。ここで今一度和解し給え、 — 赤い太陽の縁がすでに大地の縁にあつて — 水と生命は流れ続け、下の墓地で止まる。 — 手を取り合い給え。破壊された「ルーエシュタット」^{*原注1}を見上げ、その常設の教会、不幸な徳操の像を見上げたときに — あるいは「花の島々」を見たときに、そこではそれぞれの花がその緑色の小大陸で孤独に震えていて、それに向かって揺れるのは水中に映る影より他に親しいものはない。 — そして互いに握手し給え。君達の目が「影の国」に落ちるとき、そこでは今日光と影とが生命と眠りのように互いに並んで、食い込んで震えながらはためいて、遂には黒い影の洪水が地上で煌めくすべての上に溢れて、死を模している。 — それにまた君達が「黙したキャビネット」の三重の格子にアルプスホルンと風奏琴とが立てかけられているのを見ると、握手し給え。そうすれば、君達の魂は調和を模して一緒に和して震えるに違いない。...私がここでかくも長く語りかけたのは、私の作成した惨めなレトリックの比喩にすぎない。私自身よりもこの二人の友はより大きな熱狂の中にあるのではなからうか。アマンドゥスは友情の嫉妬を越えて高められて、自分の手で自分の前に未知のグスタフの友の今日語りかけられた肖像画を持って、こう言わないだろうか。「君

*原注 1 これらのわずかな部分を私は単に短く描写する。「ルーヘシュタット[休息の地]」は常設の教会を有する焼け落ちた村で、この二つはあるがままの状態が残っていなければならなかった。それ以前に侯爵夫人が住民達に場所と一切をそこから十五分の地に莫大な費用と、その地を有し、まだその地に来ていないフォン・オットマル氏の援助で補償していたのであった。 — 「花の島々」は池の中の個別に分けられた草地の高台で、それぞれの島が別々の花で飾られている。 — 「影の国」は多様な影の格子や茂みから成り立っていて、大小の葉や、枝や格子、茂みや木々を通じて様々に砂利や草や水の上に描かれている。侯爵夫人は最も深い影の部分と最も明るい影の部分を設置した。幾つかの[深い影の]部分は下弦の月のためのもので、他は[明るい影]夕焼けのためのものである。 — 「黙したキャビネット」は二つの向かい合った戸口を有する劣等な小屋であった。戸口のそれぞれに一つの紗が懸かっている、侯爵夫人の手以外その戸口を開けることが許されなかった。その中に何があるのか今でも分からない。しかし紗は壊されている。

が[証人の]第三者だ」と。いや彼は夢中になって、絵を草の中に置き、左手でグスタフをつかみ、右手で新館の一室を指して、こう告白しないだろうか。「僕が右手でも僕の愛するものを有しておれば、僕の天は一杯になろう。死んでもいいだろう」。単に第二の者への最も大なる愛のときにのみ、第三の者への愛について語る事ができるのであるから、我々がアマンドゥスに対し、彼はここ山上でベアータに惚れていると告白していると解しても無理からぬものがあるのではないか。――

不幸なことに、まさに彼女自身が登って来た。太陽の臨終を見守るためであった。――彼女の目の保養の対象よりももっと美しく――あたかも今にも立ち止まりそうに次第にゆっくりと歩きながら――何回かすばやく開閉した後ようやく見つめる目をして――それに遭遇したら、アマンドゥスの恍惚を描ける存命のヨーロッパの作家は一人もいないことだろう。――しかし山上の二人の客人に対する彼女の小さな驚きは突然草の上の第三者への驚きへ変わって行った。素早く動く彼女が兄の絵を手にしていて、そして思わず知らずアマンドゥスの方を向いて言った。「私の兄の肖像画よ。やっと見つけたわ」。

――しかし彼女は、このような作法の書類では我々男性が最初の頁を読む前に十全紙を読み通すかの女性らしい繊細な感情から兩人にこう言わずには立ち去れなかった。「あなたの方がその絵を見つけたのであれば、感謝申し上げます」と。――アマンドゥスは深く、立腹してお辞儀した。グスタフは離れていた。あたかも彼の精神はホレブ[シナイ]の山にあって、ここには単に肉体があるだけの様子であった。――彼女はあたかもそのつもりであったかのように、真っ直ぐに山を越えて行った。自分自身の両目を絵に向けて、背に二人の他人の目を受けて散歩して行った。...

「今や君の五日間が明らかになった、君の偽証がなくても」とアマンドゥスは怒って言った。日没の壮大なオペラにもはや彼は感動しなかった。逆にグスタフはより一層感動していた。というのは不当な目に遭っているという感情が、不当なことをしてしまったという混乱した感情と共に、――優しい魂というものはこのような場合、他人にいつも自分よりも正義を付与するものである、――苦い涙となって流れ込んできたからである。そして彼は一言も言えなかった。今や自分の和解に立腹したアマンドゥスはその嫉妬した邪推を更に次の点で確固なものとする事になった。つまりグスタフが彼にマウセンバッハのヴァンチュールについて話した実際的關係でベアータのことに全く言及しなかったという点である。しかしこの除外はグスタフが意図していたもので、全体の出来事の際にまさにこの優美な女性の現存が最も彼の心を痛めたからであり、ひょっとしたら彼の最も温かい内奥では彼女に対する敬意が芽生えていて、それは余りに華奢で神聖なもので、会話の自由で硬い空気には耐えられなかったのかもしれない。「彼女は勿論最近マウセンバッハと一緒にいたのだろう」と嫉妬にかられたアマンドゥスは致命的調子で言った。――

「そう」とグスタフは言ったが、彼女は彼とは一言も話さなかったと言い添えることができなかった。しかしながらこの思いがけない「そう」の言葉で一気に質問者の顔は崩れた。彼は付け根を(手が撃ち落とされていた場合)高く持ち上げてこう誓って言ったことだろう。「それ以上証拠はいらない。――グスタフは明らかにベアータを自分の磁場に引き入れている。――今彼は黙っているのではないか。彼女にすぐにあの絵を渡したではないか。彼女は、二つの肖像画を混同したくらいだから、原物の二人も混同するのではないか。四つはすべて同じように見えるのだから云々」。

アマンドゥスは彼女を愛していて、彼女も彼を愛している、彼がどんな意向であるか気付いていると考えていた。彼は自身の行動には十分な繊細さを有していたが、他人の行動について抱く推測には十分な繊細さを有していなかった。つまり彼はしばしば彼の父親の医師としての仕事柄、マウセンバッハの病のベアータを訪問していた。彼は彼女からかの大胆な親密さを得ていたが、これは多くの少女達が病の日々にいつも見せるもので、あるいは健康な日々、少女達にとって同時に有徳でかつどうでもいいと思われる青年達に対して見せるものである。アマンドゥスのドゥス[愛されるべき]の善き分詞はそれ故若干の熟慮の後、こう推測した。ベアータが極上の紙に — 粗悪な紙に書く女性はいない — ルソーの『新エロイズ』からの見本として翻訳していて、亡きサン・プルー宛に書かれていた一通の手紙をこの分詞本人に宛てられたものであろう、と。それ故少女達は何も翻訳すべきではないのである。アマンドゥスは一人の恋人へ翻訳されていた。

グスタフの波打つ頭の中で、自分の外では見られていた夜がようやく始まった。嵐と月光とが彼のその夜の中では交互にあって、喜びと悲しみであった。彼は罪のない、邪推で苛まれた友のことを、喪失した肖像画のことを、かつて子供時代一緒に遊んだ妹のことを、従ってこの美しい人物の兄とされる未知の描かれた友のこと等々を考えた。 — アマンドゥスは一方的に出発し始めた。グスタフは頼まれもしないのに彼に従った。グスタフは今日許すことしかできなかつたからである。まだ下って行く途中でもアマンドゥスの中では憎悪と友情が同じ力で戦っていた。このうちどちらが勝つかはまずは偶然に委ねられていた。 — 憎悪が勝利した。その補助の偶然となったのが、グスタフがアマンドゥスと並んで平行に歩いたということであった。グスタフは静かに前に行くか、(せいぜい後に従って) 行くべきであったろう。殊に友情で背をかがめた魂を持って行くべきであったろう。そうすれば友情がその背中のお蔭で勝利したことであったろう。人間の背中というものは不在の見せかけで、顔や胸や腹よりももっと同情を告げ、憎悪を減じさせるものである。...人間は後からであるとはどんなにしばしば見ても見飽きない。...

君達、本の読者よ。自分の脆い人生と諍っている哀れなアマンドゥスと口論するのを止め給え。神経の弱い者の魂はいかに座しているか、忌々しいほどに硬く、牛の毛三本詰められることはなく、櫓の荷台のように食い込んでくることをただ大目に見るべきであろう。要するに私に馴染みの自我は皆もっと優しく座している。 —— それでも傷付いた悪漢への私の同情は、その魂の硬く石のような松果腺よりも全く別の事柄で刺激を受けている。それは読者を優しくするであろう事柄であり、それについては私がいかにペンを使っても残念ながらまだ書き添えることのできなかつた事柄である。...

そもそも隠し通せるものではないが、いかにも私の物語には真の殺害や殺人、ペストや飢饉、連禱の病理学に欠けている。私と貸本屋はここで店の優しい読者全体を目にしている。これは待ち構えていて、すでに白いハンカチを — この感傷的な排膿法を — 取りだしては自分の分を涙しようとし、拭き取ろうと思っている。...しかし我々の[私と貸本屋]一人として大いに感動的なもの、死せるものをもたらさない。...別の面から言えば、また私は特に困っていて、ドイツの読者は強情であって、私から不安な目に遭いたくないと思っている。...というのは、私は単に平凡な伝記作者として読者を殺害に追い込むことはない、その点に読者は信頼を置いているからである。殺害なしには何もできないというのに。しかし単に長編小説の工場主のみが生殺与奪の王権を貸与されていて、単にその

印刷紙のみが[処刑の]グレーブ広場なのであろうか。 — まことに、長編小説なんかは書かない新聞記者は、それでも以前からペンを浸しては、好きなだけ切り倒しており、募集の新兵以上を倒している。 — 更に歴史記述者は、上述の小騎士団長のこの大騎士団長は（というのは百人の新聞年代記者からせいぜい煎じ汁として一人の歴史記述者を私は抽出するからで）更に進んでいて、その歴史の序言、その要約、その皇帝史、帝国史の計画が要求するだけの多くの数を殺害してきたのである。…要するに私がここで何も殺さずに面白くしなかったら、私は許されないのである。それに私は結局やむを得ず、一人か二、三人の従者を打ち殺すであろう。この従者はその上部シェーラウ以外では刑吏の誰一人として知らない者である。

しかし私は私の物語[歴史]を続けて、ペスト看護人の手書きニュースから次の記事を私の幾つかの大陸のために書かれた手書きニュースに取り入れることにする。

「マウセンバッハからの確かな筋によると、当地の従者ロービッシュはその鼠同様に死んだということである。彼の死で二つの医学上の流派が設立された。その一方はその死について、宗派の基盤となっているその死は多くの殴打によるものと主張し、他の流派はむしろ食事の欠乏によるものと主張している」。

この一言として真実のものはない。その人間は確かにミミズ腫れと食欲を有しているが、しかし今なお存命であり、新聞記事はまず一分前に私自身によって記されたものである。大胆な読者はこのことから次の教訓を永遠のものとして引き出すといい。つまり伝記作者もそのインク壺の毒杯によって、その撒き砂[インク乾かし]箱の[粉末の]殺鼠剤によってロービッシュ達や侯爵達、それに各人をなぎ倒し、墓地に連れ去ることができるから、伝記作者を読者は刺激し、憤激させてはならないということであり、このことから読者はこう学ぶべきである。つまり正直な読者は常に読書しながら震え、こう尋ねなければならない「哀れな奴（あるいは哀れな女子）は次の扇形ではどんな目に遭うのだろう」と。 —

第二十四扇形、あるいは第二十一の聖三位一体祭の扇形
エーフェルの陰謀 — 名誉剥奪 — 別れ

仮にそう問い尋ねるドイツが我らのグスタフのことを考えていたら、彼にとっては十分に嫌なことである。エーフェルにその責務がある。しかし私は驚いているドイツに全てを打ち明ける気である。何故エーフェルは長編小説作家で公使館参事官なのか知っているドイツ人はごくわずかである。

エーフェルほど、多感な士官で — 士官学校で彼は制服を着用していた — 弾を交わすことが少なく、シャツや手紙を交換することが多い者はいない。手紙を彼はすべての人々に宛てて書こうとした。というのは彼の手紙は、自ら読み上げるので、読まれることになって、それも文学的事柄で、その上それは模倣したものであった。つまり彼は文学的精神であった。しかしそれ以外有しなかった。すべてのフランスの書籍商は奇妙な感謝の辞を彼宛に送った、彼がそのすべての書を買上げたからで — 彼自身が登場するこの現伝記でさえも、その版とフランス語への翻訳について彼が耳にしたら、いつか彼の許に届くことだろう。自分自身、つまり体と魂とを、彼は自分のフランス語の母語方言からす

すべての言語にすでに翻訳していた。シェーラウの文学精神を（ひょっとしたら私も含まれるかもしれない）、それにベルリンやヴァイマルの文学精神を、この阿呆は軽蔑していた。単に自分がウィーン出身であったからではなく、そこでは確かに地震がパルナッソスを突き上げたことはないが、しかし数百もの小冊子作家のモグラの小口髭が小型の[十二折り判]小パルナッソスを突き上げていて、その上にいるウィーン市民が、高慢は見下ろすからには、嫉妬は見上げるものだと考えているところであるが、一 [ウィーン出身というからではなく]彼は我々皆を軽蔑していた。彼はお金、世間作法、縁故、宮廷趣味を有していたからである。カウニッツ侯爵が彼をかつて（本当であれば）夕食と舞踏会に招待したが、それはまことに数多く、輝かしく進行して、老公はエーフェルが自分の許で食して踊ったことに気付かないほどであった。彼の兄は侍従長であって、彼自身とても裕福であったので、全シェーラウで彼の詩を読むという趣味を十分に有するのは宮廷の他には誰もいなかった。宮廷のためにその詩は作られていた。宮廷はこのような詩を公園での草地の部分のように邪魔されずに滑って行けた。とてもその生長は小さく、優しく、刈り取られていた。一 第二に彼はその詩を印刷紙には載せず、絹のリボンや靴下止め、腕輪、名刺や指輪に載せた。私も読者の耳の鼓膜であちこち跳ねて、自分を聞かせている他の蚤どもの一匹であって、雷鳴を轟かせている。しかしエーフェルは我々の中の誰一人をも模倣せず、私の読者よ、君のことをとても軽蔑していた。そして君を諸宮廷より下に見なしていた。「年に」と彼は言った、「七千リーブルの金を使わないようでは、誰も私を読んではならない」。

来夏、彼は使節として某宮廷へ赴き、すでに揺り籠の隣で話し始められ、途切れていた侯爵の花嫁のための交渉をグレイラム博士のベッド[不妊治療用]の傍らで再び取り結ぶ予定であった。侯爵は実際彼女と結婚せざるを得なかった。ここでは名を呼ぶことは許されない或る第三の宮廷が、彼女をその宮廷を通じて、ここでその名を呼びたくなる第四の国へ連れ去ろうと欲していたからである。しかし私を信じて欲しいが、新郎のこの全宮廷の中で彼が花嫁のこの宮廷へ派遣されるであろうと信じている人間は一人もいない。そこでは立派な精神と立派な体が求められている商品であるからである。まことにこの二つの美点に関しては彼は誰にも負けていた。しかし第三の美点では彼は残念ながらそうではなかった。これは使節にとっては倫理的な美点よりも必要なもの、好ましいもので、一 つまみり金では負けていなかった。破産した宮廷では侯爵が第一の王冠で、百万長者は第二の王冠である。私はしばしばシェーラウ侯国の忌々しい遺産欠陥を呪ってきて、十分に有することが稀であることを見てきた。我々は前もって国家的信用貸しさえ得られれば、互いに国家的破産によって喜んで助け合うことだろう。しかしこの侯国を除いて、私の旅の途次、次のような四つの地域はエトナ火山そのものの他には見いだせなかった。第一に王座の下の豊饒な地域、第二に密な森の地域で、ここでは果実や、草を食む、狩りの対象である庶民という野獣が獲られるところである。第三に微光しか発しない宮廷の氷の地域である。第四に王座の先端の炎の地域で、ここでは噴火口を除いてほとんど何もない。王座の噴火口は溶岩として自ら黄金の山々を飲み込み、石灰化し、噴出できよう。

不幸なことにグスタフは彼の気に入った。彼の若々しい博愛性を自分への専らの依存と見なし、彼の謙虚さをエーフェルの偉大さへの卑下と、彼の徳操を弱点と見なしたからである。グスタフが詩に趣味を有していて、従って、彼の結論に従えば、彼自身の詩に最大

だけ一層彼を刺激することになる」と彼は考えた。しかし刺激は上手く行かなかった。グスタフはまだ、正直な若者が宮廷や偽装を憎む詩的牧歌の年月からそれを求める冷え切った年月に移行していなかったからである。エーフェルは、廷臣や女達のように個々人だけを調べていて、人間を調べていなかった。

さて第二の平行壕が掘られて、要塞に一層近付くことになった。彼はある日の午前彼と一緒に公園を散歩して、丁度弁理公使夫人と出会うはずと心得ていた。彼が彼女と話している間、彼はグスタフの観察を観察していた、つまり赤面して驚いているのを見ていた。グスタフはまだ彼の人生でこのような女性を前に、全身すべての魅力に囲繞され、魅力が倍加し、互いに引けを取っていること天の三重の虹のような按配である女性を前にしたことがなかった。それに汝、花の魂のベアータが、その根はこの現世の砂の大地ではめったに適した花の土壌を見いだせない汝も一緒に立っていて、弁理公使夫人を注視していたが、その注視が汝の小さな混乱の罪のない仮面のはずであった。 — グスタフは彼の大きな混乱に対しては何の仮面も用意していなかった。エーフェルはこの混乱を私のようにグイードの聖画像破棄のお互いの思い出のせいにならず、グスタフの混乱は弁理公使夫人のせいであり、ベアータの混乱はエーフェル自身のせいであるとした。

「彼なら自分の思い通りになる」と彼は言って、彼を旧館にまで随伴させた。「ところで、我々兩人がここに残るとしたらどうだろう」と彼は言った。それはできないという他の理由で溜め息交じりになされた返事はまさに彼の望んでいたものであった。「構わない。貴方は私の公使館参事官になるのだから」と彼はその上品な、驚きを待ち受けている視線で続けて言った。この視線を彼は本来瞼で覆うことはなかった、自分はいつも皆を驚かすと信じていたからである。

しかし単純にエーフェルにとって外れて行った。グスタフは欲せず、決してならないと言った。宮廷を恐れているのであれ、父親を恐れているのであれ、変化の羞恥心からであれ、静かさへの愛着からであれ、要するにエーフェルは愚かに立ち尽くすことになって、自分の挫折した建築設計図の漂う断片を見送っていた。まことにそれでも、この難破船全体を自分の長編小説に入れるという有益さが彼には残っていた — ただ秘書は去って行った — 彼はグスタフを無分別に前もって使節の秘書に召喚していたわけではなかった。というのはシェーラウの王座には最も低い名誉段と最も高い名誉段の付いた一本の梯子が掛かっている、しかしそれらの段はとても近接している、左の脚で最下段に乗ると、右の脚では最上段に乗ることができるほどであったからである。 — いや我々はかつてすんでのところで大元帥を設置するところであった。第二に宮廷では自然同様すべてと一緒に懸かり、ピッチが塗られていた。教授達はこれを宇宙的関連と名付けるべきところであろう。各人が同時に荷物であり運搬人である。かくて磁石には鉄製の定規がくっつき、この定規には小定規が、小定規には針が、針には削り屑がくっついている。せいぜい、ただ王座の上に鎮座しているものと王座の下に横たわっているものが、活動する中隊と十分な関連を有しない。かくてフランスのオペラでは単に飛んでいる神々と、ゆっくり動く動物どもがサヴォワの住民によって演じられ、他のすべてが正規の旅の一座によって演じられるのである。

そんなわけでエーフェルは第三の平行壕を掘らなければならず、そこから士官学校生徒を目がけて行かなければならなかった。つまり彼はその生徒の制服を日々親指大ほど一層

窮屈に短くなるようにして、制服を脱ぐようにした。すでに最近ではこの意図で彼を穀物の非常警戒線へ派遣させるようにしていた。ここでは温かい、単に穏やかな贈与に慣れた若者が鋭い否定という新たな厳しい義務に直面することになった。しかし今や任務は下の方からで一層難しくなって、軍事的演習のせいでほとんど彼の繊細な磁器風な肉体は壊れてしまった。かくも頻繁に厳格に長編作家[エーフェル]は彼をすべての和平講和の父、つまり戦争の社交へと彼を引きずって行った。

いかに痛々しく粗野な外部世界は彼の傷付いた内部世界に触れざるを得なかったことか。彼の前には、瀕死の友との不和以来、しっかりとかの悲しみの夕べが涙と共に立っていて、退くことがなかった。彼の一人ぼっちの心にはまだ血のように赤い太陽が微光を発していて、沈むことがなかった。 — 彼と他の願いを失った彼のアマンドゥスの黙した別れ、それに彼の人生の日の短くなっていく秋の日々と以前の愛とは共に彼の目と心を悲しみへと押しつぶした。友情は愛よりも不和に耐えられない。愛は不和で心がくすぐられる。友情は不和で心が裂ける。グスタフをかくも誤解し、悲しませ、それでいて彼の最も内密な愛を失っていなかったアマンドゥスは、彼のことを夕方の五時までは許していた。

— それから彼は（それともそれが単に彼の想像したことであっても、彼には十分であった）、グスタフが公園を（それに、従って、散歩の女性ベアータを）訪ねたということを目にした。 — すると彼は自分の和解を夜の十一時まで取り消していた — それから夜と夢とがまた人間のすべての欠点や人間に対して一つの外套を置いてくれた。夕方の五時にはまた最初から始まった。彼のことを笑うがいい、しかし得意げにではなく、そして私や君達のことも笑うがいい。というのはすべての我々の情感は — そのライオンの飼育係、道化の世話係である理性がなければ — 同じようにとんでもないのである。我々の人生の中ではそうでなくても、それでも我々の内部ではとんでもないのである。 —

しかしとうとう彼は彼の許しを何度も取り消したので、彼はグスタフがノックしてきて、彼の口からのすべての罪の非難を耳にしてくれさえすれば、その罪を彼は許すつもりであって、その許しを保留しておこうと思った。人々はしばしば許しを延期する、非難を延期するように強いられるからである。 — しかし、友のアマンドゥスよ、グスタフは来られたらどうか、長編作家[エーフェル]は彼を行かせたらどうか。 —

エーフェルは更なることをやって、策謀して、グスタフが、この大サルタンが、二冊の立派に書かれた本のこの主人公が、ある夕方、士官学校総監督が盛大な晩餐会を開いたとき、その家の前に — 歩哨として立つようにさせた。何ということか。最も美しいレディー達が、周知の弁理公使夫人や、 — 彼女はたまたま見かけた我らの立派な歩哨を剥製にして自分の頭蓋の下に収めたのであるが — そのお供の女性ベアータが通りかかり、このような顔を前にしてささげ銃をしなければならぬことになることになると、むしろ腕を伸ばして、そもそも立っている代わりに跪いて、敵を傷付けるというよりは恋人を傷付けたくなるのではなからうか。...何ということか。私はここで許される以上に洒落を言ったかもしれない。しかし生身の男なら一度は試みて、恋について書いてみて、洒落を控えるがいい。 — ほとんどそうはいかないのである。 — エーフェルはひょっとしたらグスタフの夢から、これは絶えずつぶやいていて、しばしば目覚めた後でも尾を引いているものであるが、上述の美しい女性のアンベ[籤の二個当たり]の名前を聞き取ったかもしれないということを私は主張しないし、論駁もしない。つまりこの長編作家は伝記作者（私が

そうである) よりも利点を一つ有している。彼は私の主人公の隣に眠っているのである。

彼は彼の主人公にして私の主人公を秋の観兵式で不安な思いにさせた。この者は軍事的な意味ではなく、単に美的な意味での主人公であった。というのはどの小さな侯爵もまだより小さな子供達の隣の露地の大きな兵士を模倣するからである。それ故我々シェーラウ人は可愛いポケット判の陸軍、ポータブルの砲兵隊、縮小された騎兵隊を有している。いずれにせよ領主にとって一人の人間を新兵に採ることは楽しいことである。この男は何にも遭遇しない、単に動きをさせられるだけである。現今^{*原注1}では我々の比較的重要な戦争は、以前イタリアの戦争がそうであったように、行軍を行うだけであり、諸国から諸国へ移って行く。かくて劇場での遠征も単に舞台の周りを繰り返して行進することで、より短いものである。私は一年前冗談で半時間連隊の横を歩いて、こう自分に思い込ませたものである。「今おまえは実際に半時間敵への出征を共に行っている。しかし新聞はおまえのことをほとんど言及しないだろう。おまえと連隊はこの戦闘的模倣の行軍で聖職者達が僧侶の歌の行軍で行っているように同様に国難を防いでいるけれども」と。

彼は彼を不安にさせたと私は申し上げた。彼はつまり観兵式をこう描いた。「フリードリヒ二世の奇蹟は、士官学校生徒の軍に要求されているものと比べたら小さい。負傷させる者より負傷した者の方が多いだろう。すべてのテントや兵舎で最近のシェーラウの観兵式は語り草になることだろう」。グスタフはそのささやかな奉仕で夙に進歩を遂げていて、彼は自分の肉体の築城のときに少なくとも一つのもの、つまりこの肉体そのものを傷付けることができたほどであった。 — 私が更にこう語ると、世間の不安はきっと減ずることはないであろう。つまりグスタフは規則的に七週間ごとに五日間旅に出たのであるが、これについては彼の友人達や伝記作者本人も最も以前からの読者同様見当もつかないことである、 — 更にエーフェルは秘密の陰謀で彼の休暇をととても辛いものにさせたので、グスタフはこの報酬の休みを二度と望まないほどであった — グスタフは最近の旅からフェンク博士宛にオットマルからの一通の手紙を持ち帰ったが、この手紙は読者に明かされないことはないが、この手紙の由来については読者に打ち明けられない、由来そのものが分からないからである、と。

こうしたすべての茨や負傷させる観兵式からグスタフを救ったのは他人の名誉剥奪であった。上述の帰還の後、上部シェーラウで一人の将校が、その名前と連隊はここではその高貴な家族を思いやって秘匿しようと思うが、悪漢達と関係を持ったということで不名誉と宣告された。憲兵が、その将校が名誉を汚してしまった連隊の中で、彼の剣と楯とを破壊して、制服を剥ぎ取り、不幸の中でもその屈した男をなお高く保持していたもの一切を取り上げたとき、グスタフは、彼の名誉心は他人の名誉心の傷口からでさえも出血して、それにまだ公開処刑という酷な光景を体験したことがなくて、気絶してしまった。蘇生してからの彼の最初の発声はこうであった。「永遠に兵士は御免だ。 — 哀れな将校が無実であったとき、あるいはより良い者になったとき、誰が殺害された名誉を取り返してくれるのか。ただ誤ることのない神のみが名誉を取り上げることができる。しかし陸軍参事官は生命を奪うだけにすべきである。鉛弾はいいが、名誉剥奪はいけない」と彼は恍惚と

*原注1 つまり一七九一年。

なっているかのように叫んだ。思うに、彼は正しい。二日間彼は病に臥せっていた。彼の空想は彼を名誉剥奪された者の盗賊のカタコンベ[地下納骨堂]へ引きずり込んでいった。

―― 哀れな、病床から墓地へと苛まれた人間達の熱に浮かされた像は必ずしもその内面の人相書き、模倣ではないという新たな証明である。―― 拷問された同志達よ。今この瞬間君達を、そして穏やかなグスタフを、どんなに愛していることか。今私の空想は君達皆を覗き込んでいる。いかに君達が、運命のジグザグに追われて、君達の傷や涙と共に疲れて互いに立ち会い、互いに抱擁し、互いに嘆き、互いに―― 埋葬しているか覗いている。――

彼が病気で、空想に耽っていたとき、アマンドゥスは彼の熱い目の許に姿を見せて、彼と同じように苦しみ、彼のすべてを許した。―― フェンク博士が、朝には癒えるだろうと請け合うと、アマンドゥスは朝にはやって来ず、また頑固な心に戻ろうと思った。

エーフェルは彼の案の勝利を楽しんだ。彼は老ファルケンベルクの懐柔を自ら引き受けて、自筆でファルケンベルク宛に書いた。彼はインクでこの善良な父をモーゼの山上に導いて、この山の奥に使節という約束の地の展望を描き、そしてカナンの地の中心に若い公使館秘書を描いたので、この善良な男は多くの両親の喜びを有することになった。つまり自分の子供達が、自分自身はなりたくなかったり、なることができなかつたものになるのを見るという両親の喜びである。彼は私の許に手紙を持って、窓の下に騎乗して来た。

―― グスタフがなお心の中で旧館への配置換えに反対すべきことの一切は、美しいベアータが新館に住んでいて、新館は旧館とはただ半分の壁で仕切られていて、アマンドゥスの嫌疑を証することになるというものであった。しかし幸いその決心の後、同じ決心を吹き込んでいて、彼の活動圏の高貴化と拡大となる本来の動機を思い付いたのであった。「自分は使節職が終わったら、公職に採用されて、当地の国の役に立つことになるだろう云々」と彼は言った。要するに、ベアータのこの上ない美貌をもってしても、ベアータを―― 避けるという選択には至れなかつたのである。

そもそも長編作家エーフェルはとても熱心に彼をその軍事的殻から剥いていったので、

―― エーフェルは、夫達や侯爵のように、よく手綱を活動的な手よりは受動的な口に有して、―― 人々はこう思うに至ったことであろう。彼は支配するために、支配される、と。私はそうは思わない。

グスタフはアマンドゥスの許に別れの訪問をした。我々に対する想像上の侮辱で立腹している相手を許す良い方法は、その相手に本当の侮辱を加えることである。―― グスタフは路地を自由に迂回して、彼の侮辱されたアマンドゥスの許に行きながら、今や壁越しの隣人となったベアータのことや、彼の友人の愛や嫌疑のこと、この嫌疑を晴らすことが不可能なことを考えた。そして丁度六時に聖シュテファン教会の塔の鉄製のオーケストラが夕方の天球の音楽を下の路地に流してきたとき、彼の心は音色の中に沈んで、彼は友人の許に、ベアータの胸の中の心以外では最も柔らかな心を持参することになった。私と読者はこの点に関し、沈思することだろう。まさにこの和解的な柔和さは、自分が半ば恋敵の嫌疑に値するという単に隠された意識によって生じたものであったろう。というのはさもないとグスタフは、気位で昂揚して、相手を確かにやはり許したであろうが、しかし気位故により一層愛することはなかつたであろうからである。―― グスタフがアマンドゥスを見いだしたとき、彼の意図にとっては最悪の気分するときであった―― つまり最も友

情に溢れていたときであった。というのは優しい病人の場合、どの情感も正反対の情感のある種の先駆けであって、皆が交替する声を有しているからである。アマンドゥスは彼の父の解剖の部屋にいた。― 陽光が日没前、一つの頭蓋骨の空洞の眼窩に射していた。フラスコには人間の花、小さな下塗り[胎児]が、これに従って運命は人間を抽出しようと思っていたものであるが、つまり前に垂れた大きな頭と大きな心臓の小人間が収められていて、これはしかし一つの誤謬のない大きな頭と痛みのない大きな心なのであった。― ある盤には一つの黒い染物屋の手が横たわっていて、その色彩でドクトルは試験をしようと思っていた。...一つの和解と一つの別れにとって何という設定か。三瞥で和解が封印された。― すべての視線がこの魂の剥き出しの脱肉体の中で余りに甲高い言語を語っている。― しかしグスタフがこの別れを、嫌疑と不安とを越えて、この上ない熱中に持ち上げられて、自分の友人に告げたとき、そしてまだ何もそのことを理解していなかったアマンドゥスに、新しい壁越しの[ベアータとの]間近さと古い[アマンドゥスとの]間近さの喪失を知らせたとき。― 友人は砕け散って、その灰の中から一人の黒い敵が飛び出してきた。― 死はこの瞬間を利用して、ぐらつく生命の最後の根繊維を裂いて砕いた。...グスタフは怒るには余りに高く構えていた。― しかし彼は更に高く立っていなければならなかった。― 彼は彼の許にくずおれて、決然とした純粋な声で言った。「怒って、憎んでおくれ、しかし僕は君を許し、君を愛さなければならない。― 僕の心全体がすべてのその血と共に君の心の許に忠実に留まっていて、君の胸の中にその心を求めている。― たとえ君が将来僕のことを誤解しても、毎週やって来て、君が他人と語っているとき、君を見つめ、君の声に耳を傾けるつもりだ。そのとき憎んで僕をにらむとしても、僕は溜め息をつきながら出て行って、それでも君を愛することだろう。― そのときにはこのことを思い出すことにしよう。君の目がまだ傷だらけのとき、君の目はもっと美しく僕のことを見つめ、もっと良く理解してくれていた、と。...僕を君の許から押しやらないでおくれ、君の手を差し出して、視線を外しておくれ」。―

「それでは」と砕けたアマンドゥスは言って、彼に冷たい、黒い。― 染物屋の握り拳を差し出した。...憎しみが驟雨のように最も愛に溢れた心に走った。その心はまだ人間的な胸の中で流血していた。― グスタフは自分の愛と憎しみを床で踏み潰して、黙って窒息した感情と共にその家から出て、別の日、上部シェーラウから出て行った。

アマンドゥスは虐待された青春の友が路地を震えて行くのを見たとき、すぐに自分の部屋に行き、枕に身を沈めて、自らを咎めることも、自ら弁解することもなく、目から能う限り涙を流した。我々は彼が病んだ頭を枕から持ち上げることがあったのかどうか、いつまたグスタフに伴われて、彼を追い出そうとした「静かな国」へ行くことになったのか耳にすることになろう。人間ときたら。何故汝のすぐに塩と水と土とに砕けてしまう心は別の砕けてしまう心を叩きつぶそうとするのであろうか。― 汝が、汝の振り上げた死者の手で叩き潰す前に、その手は墓地に沈んでしまうというのに。― いや、汝が敵の胸に傷口を作る前に、胸は落ち、傷を感じはしない、そして汝の憎しみは死んでしまうか、あるいは汝も死んでしまうというのに。

第二十五扇形、あるいは第二十二の聖三位一体祭の扇形
オットマルの手紙

我々はオットマルの手紙を読んでから、グスタフの新しい劇場に身を置き、彼を見つめることにしよう。次の手紙ではある精神が支配し、荒れ狂っているが、この精神は夢魘のようにより高く、より気高い種類のすべての人間を抑圧し、しばしばその人間に住みつくもので、— この精神がたとえ[実利の]オランダ風の諸精神に勝ろうとも、この精神を凌駕し、追いやるのは単により気高い精神のみである。多くの人間が大地に近く[近地点]生きていて、若干のものが大地を離れて[遠地点]生き、少数のものが太陽の近くに[近日点]生きている。— フェンクはしばしばオットマルに憧れた。殊に数年間彼の音沙汰がなかった後では、憧れていて、彼はよくグスタフに対してオットマルのことを話していたので、手紙のアドレスが他人の筆跡で、パヴィアのドクトル・ツォッポ宛であったのは、幸いなことであった。さもなければドクトルは早速この手紙の最初の行に違反していたことだろう。

く永遠の友よ。私の名前を手紙の持参者には明かさなで欲しい。私はそうしなければならない。この一年間、私には大きな黒い封印がなされている。この封印を破らずに、過去を未来と求めて欲しい。— 私は過去を君のために現在とするが、しかし今はまだそうしない。— 私が亡くなったら、私は君の前に進み出て、君に私の地上での最後の秘密を語ることになる。

私はただ存命で、秋に帰るということだけを君に知らせるべく筆を執っている。私の旅への渴きはアルプスの氷と海水とで消えてしまっている。今やルーエシュタット[休息のち]の故郷へ帰ることにする。そして家の戸口でまた山々を越えて行きたいと思ったら、こう思うことにする。グァディアナの奔流、ヴォルガの奔流をおまへのライン川沿いで嘆息しているのと同じ渴いた人間の心が覗き込んでいる。アルプスの山に登り、ユーカサスの山に登っているのは同じおまえであり、おまえの家の戸口へ憧れの目を向けている。しかし私がここに座っていて、毎朝寝室用便器に行き、腹が減っては喜び、その後、腹が満たされては喜び、毎日ズボンを脱いだり、ヘアピンを留めたりしているとき、では結局どうなるのか。私が子供時分市門の道の石の上に座って、長い通りの列を憧れの目で見送り、通りがいかにか続いているか、山々を越えて、ずっと先まで通じているが、結局どこまで通じているか考えていたとき。...いやどんな道も何にも通じていない、道が途切れるところで、人はまた立って、今まで来た方を振り返って憧れる。私の小さな目がかつてライン川の上を共に流れて行き、約束の地へ、すべての奔流が流れ込む地へ連れて行かれるようにしたとき、いやかつてライン川は、幾多の重苦しい心を運び、幾多の流された形姿の傍らを、ライン川のみがその苦悩を救い上げることができる形姿の傍らを音立てて流れ去り、ライン川はそれらの人間のようにオランダの大地に飛び散り、砕かれて染みこんで行くということを私が知らなかったとき、私はどうする気でいたのであろうか。— 東洋よ、東洋よ。汝の沃野へもかつて私の魂は木々が東の方を向くように傾いて行った。「太陽が昇る地ではどんな具合であろう」と私は考えた。私が私の母親と一緒にポーランドへ旅して、とうとう東の方にある地に踏み込み、高貴な人々やユダヤ人、奴隷の者達の許へ行ったとき、...しかしその先にはこの光学的球の上では東洋の太陽の国としてあるのは、ただ、我々がどんなに歩いて行っても遠ざかりもしなければ近付きもしない国だけである。

いや大地の汝らの喜びのすべてよ、汝らは胸をただ溜め息で見たし、目を涙で満たすだけで、汝らの天の前で開く哀れな心に、汝らは一層血の波を注ぎ込む。それでこれらの対の惨めな喜びは、毒の花、それで遊ぶ子供達をそうするように、腕や脚を麻痺させる。せめて音楽は、我々の願望のこの嘲笑家の音楽は聞きたくない。その呼び声で私の心のすべての繊維は四散して、多くの吸い上げるポリープの腕のように腕を広げて、憧れの前で震え、巻き付こうとするのではないだろうか。 — 誰に、何に巻き付こうとするのか。…目に見えない、別の世界に立っている何ものかである。しばしば私は考える。ひょっとしたら何もないのかもしれない、ひょっとしたら死後もまたこうかもしれない。おまえは一つの天から別の天へと憧れることになるろう — それから私はこの空想的不合理の下でピアノの弦を踏み潰すことだろう。あたかも私はその弦から一つの源泉を絞り出したかのように、あたかもこの憧れの圧力が私の内的音の体系の細い弦の調子を狂わし、切り離すことでは十分ではないかのように。

ローマでは聖アドリアーノ教会の向かい側に一人の画家が住んでいて、雨のときいつも雨樋の下に立って、狂って笑うのだった。彼は私によく言った。「犬のような[惨めな]死はない、犬のような[惨めな]生はある」と。フェンクよ。少なくとも人間がなるもの、あるいは人間がすることは受け入れ給え。ほんとに全く、わずかなものだ。一体どんな力が我々の許では形成されるのか、他の諸力と調和するものは何か。せめて一つの力が一本の太枝のように講義室や図書館の温室の中へ引き込まれて、部分的な温かさで花が咲くようにされ、外の本全体は雪の中、黒く固い枝のままであるという具合であれば、すでに幸運といえるのではないか。天は二、三の雪片を降らせて、我らの内的雪達磨を作り上げる。これを我々は我々の教養と名付けていて、大地はその四分の一を溶かしたり、汚したりし、生暖かい風がこの雪達磨の首を消して行く。 — これが我々の形成された内的人間で、すべての我々の知識と意欲における忌まわしい継ぎ接ぎ細工である。個々人から人類全体へと私は話を移したくない。私はいかに一つの世紀が鋤ならされ、耕されて、次の世紀の肥料とされているか、いかに何事も何ものかに完成されようとししないことか、いかに永遠の本の執筆、知識の積み重ねが何の目標もなく、何の終わりもなく、すべてが別々の方向に向かって掘り込み、進んでいることか考えたくない。 — 人間は何をしているのか。人間が知っていて、成るものよりも、更に至らないものである。議長の椅子の上にある侯爵の肖像画の前で、あるいは去勢された支配者の顔自身の前で、汝の明察、汝の心、汝の弾力は何を行うか、私に言い給え。押し返され、互いに湾曲している枝が冬の家の窓を押し付け、支配者は果実棚に入れたままその果実を自らの皿には取り上げず、それらには青空が欠けていて、それらが腐るということが最も気の利いたことである。

汝の中の最も高貴な諸力は、それらを必要としない、呼び上げない、使わない週や月日が流れて行くとき、何になるろう。我々のすべての王制の諸官職において、一人の総体的、高貴に活動する、一般的に有益な人間であることが不可能であることをしばしば目にするとき、 — 国王そのものが諸官職の無限に多くの黒い下位の爪や手をもってしてもできないのであり、これらの爪や手をまず国王は指や取っ手として自分の手に固定しなければならぬのであるが、 — このようなことを目にするたびに、私は自分が自分の盗賊どもと絞首刑にされたらいい、しかしまずその前に彼らの首魁となって盗賊どもと古い憲法を打倒したいと願ったものである。…愛するフェンクよ。君の心を誰も私の胸から奪い去

る者はいない。その心は私の最良の血を循環させていて、君が私のことを見誤ることはできないはずだ。私がたとえ随意に察し難い者となろうとも。友よ、それでもこうした見誤りを君により容易にするような時が迫って来ている。

我々の影に覆われた地球の、姿を覆われた精霊よ。せめて何ほどかの者であったならば、せめて私の脳球と心とが、ルターのように、何らかの持続的な広く根を張った行為でその血を得ていたならば、つまりその二つを赤く染め、養うその血を得ていたならば、私の飢えた気位は満ち足りた謙虚さとなって、低い四つの壁が私には十分に大きなものとなって、私が憧れるものは死の他には何ら偉大なものを求めず、死の前にはただ人生と年齢の秋だけを求めることだろう。そのときには人間は、青春の鳥が黙するとき、地上には霧と浮遊する蜘蛛の糸の晩夏があるとき、天がすべての上に晴れ上がって、しかし燃え上がってはいないとき、枯れた葉の上に眠るように横たわることになる。――― ご機嫌よう、私の友よ。大地の中に横たわるしか更に良きことは何もできない、或る大地の上で、ご機嫌よう。来る秋には一緒のはずだ。

*

私のすべての魂を奪い、私の錯誤並びに私の願望を新たにすることこの手紙については、今日この話の最初の間が或る山に埋葬されたということ以上のことは言えない。私が四扇形か五扇形の後、その黄昏の死について語るとき、その形姿の面影は、棺の中でも諸友人の心の中でも、すでにもっと青ざめて散ったものとなっていよう。

号外

高い人間について ― 情熱は第二の生にふさわしく、ストア主義はこの世の生にふさわしいことの証明

ある種の人間を私は高い人間あるいは祭日の人間と呼んでいて、私の話ではオットマル、グスタフ、精霊、ドクトルがその人間に当たり、その他にはいない。

高い人間として私は真っ直ぐで、名誉心のある確固とした男のことを指していない。この男は天体のようにその軌道を見かけ上の光行差以外の差異なしに行くものである。――

予知する感情と共にすべてを滑らかにし、誰をもいたわり、誰をも満足させ、自分を犠牲にするが、しかし自暴自棄になることはない繊細な魂のことも指していない。―― 名誉の男、その言葉は一つの岩であって、その中心の名誉の太陽で燃え上がり、動かされている胸の中には、胸の外での行為の他には何の考えも意図も有しない名誉の男も指していない。―― そして最後に、冷たい、原理に導かれた徳操の者のことでも、感情豊かな者、その触糸はすべての生命に巻き付き、他人の傷で痛み、徳操と美女とを同じ炎で抱く感情豊かな者のことでもない。―― また単なる偉大な、天才の人間をも、高い人間とは考えていない。すでにメタファが偉大な人間では水平な広がり、高い人間では垂直な広がりを暗示している。

そうではなく、私が思っているのは、多かれ少なかれこうした長所の全ての程度に加えて、この地上では稀なものを若干有する人間のことである。―― 即ち、地上からの超出、すべての地上の行為は取るに足りないという感情、我々の心と我々の居場所との間の居心

地の悪さの感情、我々の大地の混乱した藪と反吐の出る好餌に向けられた眼差し、死の願いと雲の上への視線である。 — 一人の天使が我々の大気圏の上に来て、このどんよりした雲の泡と漂う糞とで薄暗くなった海を通じて、我々が横たわり張り付いている海の底を覗き込んだら、 — その天使が真っ直ぐに水平に空中の内容物、虚飾を求めて、掴み、強張っている千もの目や手を見たら、天使が泥の大地の中の餌や金色の雲母に対し体をねじって、屈み込んでいる、より劣等な者達を見たら、そして最後に、横たわりながら、高貴な人間の顔を、糞土の中を通じて、引っ張って行く最も劣等な者達を見たら。 — しかしこの天使が海の動物の中で何人かの直立して歩く高い人間達が自分の方を見上げているのを見たら — そしてこの子どもが、自分と頭の上の水柱に押さえ付けられながら、その大地の藪や泥土に取り巻かれながら、波の間を押し分けて、自分達の上の広大なエーテルからの呼吸を乞い求めている様、この子どもが愛されるよりはむしろ愛していて、人生を享受するよりはむしろ耐えている様、立ち尽くして驚いたままでもなく、仕事に明け暮れているでもなく、海の底に手や足を残して、ただ上方に向かって行く心と頭とを海の外のエーテルに差しだし、潜水者を大地と結び付けている肉体の重みを潜水者から離し、潜水者を自分の四大へ昇って来るようにさせるその手だけを見上げている様をこの天使が知覚したら、...この天使はこれらの人間達を沈降した天使達と見なして、彼らの深みを、そして海の中での彼らの涙を遺憾に思うことだろう。...ピタゴラス（古代人の中でのこの最も美しい魂）や — プラトン — ソクラテス — マルクス・アウレーリウス（しかし偉大なカトーとかエピクテトスはそれほど立派ではないが） — シェークスピア（彼の人生がその書いたものと同様であった場合） — J.J.ルソーとか類似の者達の塚を一つの墓地にまとめることができるのであれば、人類の気高い貴族の真の侯爵のベンチを、我々の地球の神聖な大地を、深い北方における神の花園を得ることになる。 — — しかし私は何故白い紙を取ってきて、その上に石炭の粉末やインクの粉末で混ぜ返したり、撒き散らしたりして、高貴な人間の姿を粉末で描こうとするのか。プラトンが徳操ある男の共和国の中でその心から画布に移した偉大な、決して褪せることのない絵が天から下に懸かっているというのに。

最大の悪漢達はお互いに見分けることが最も難しい。高い人間達は互いに最初の時間に見分けがつく。高貴な人間に属する作家達は最も多く非難され、読まれることは最も少ない。例えば故ハーマンである。イギリス人や東洋人は他の民族よりもしばしばこの太陽の星[星形勲章]をその胸に有している。

オットマルは私を情熱に導いた。私は彼が、少なくとも以前は、ストア主義的の樹皮で覆われた頭脳や心をことのほか憎んでいたと承知している。 — 彼は動脈に急流を望んでいた — 彼は、情熱のない人間は、激しい諸情熱の人間よりもっと大きな利己主義者であると言っていた。官能世界の間近の炎に点火されない人間は、知的世界の遠い恒星の明かりに燃え上がることはもっと少ないと言っていた。ストア主義者とすり切れた廷臣との違いは単にストア主義者の冷凍化は内部から外部へと進むのに対し、廷臣の冷凍化は外部から内部へ進む点にあるにすぎないと言っていた。...内部は燃えているのに、外部はつつるつつるに凍り付いている廷臣の場合そのことが言えるか私には分からない。しかしガラスの場合は、ガラスが外部から内部の熱く輝いている方へ冷やされると、空洞や壊れやすいものになるのであって、これは逆でなければならない。...

すべての情熱はそのやり方や程度に関し間違っているのではなく、感情の対象に関し間違っているのである。つまり以下のような次第。

情熱が誰かの人間を憎むか愛するかすることに我々の情熱の誤りがあるのではない — というのはさもないとすべての倫理的醜さや美しさが消えてしまうことになるであろうからである。 — 情熱が何ごとかについて嘆いたり喜んだりすることにも誤りはない。

— というのはさもないと幸福や不幸についてのごくささやかな喜びの涙や悲しみの涙も許されなくなり、我々はもはや何も望めず、欲することさえ、徳操さえも許されなくなるであろうからである。 — 情熱はこの好悪や喜び、悲しみの程度についても誤っているのではない。というのは情熱にとって感覚や空想が対象を他の場合よりも千倍ものより大きな倫理的あるいは物的刺激や汚点を見せることになると、外的きっかけの状況に応じて、愛や憎しみは増大するに違いないからで、何らかの外的刺激が愛や憎しみのごくささやかな程度であってもそれを正当化するならば、拡大された刺激は情熱の拡大化された程度をも正当化するに違いないからである。怒りに反対する大抵の根拠は、敵のいわゆる倫理的醜さというものは欠如していることを単に証明するもので、醜さは存在するけれども、敵は愛されるべきということを証するものではない。 — 愛に反対する大抵の根拠も、我々の愛は程度よりも対象を間違っているということ等を証明しているにすぎない。情熱の対象が見つかり次第、単に節度のある程度の情熱ばかりでなく、至高の程度の情熱が許されるであろう。例えば、至高の良き人に対する至高の愛であり、至高の悪しき人に対する至高の憎しみである。しかしこの地上のすべての対象が、我々の中のこのような魂の嵐に値するような性質を有してはいないので、つまり我々を手許に引き寄せられる、あるいは自分の許から突き放せられるような最大のものは、別世界に存続しているに違いないので、我々の自我の最大の動きはひょっとしたら単に物体の外部でのみ、その恵まれたより広大な余地を有するのかもしれないと分かる。

そもそも情熱は主観的で相対的なものである。同一の意志の動きがより強力な魂の中の、より大きな波の許では単に一つの意欲にすぎなくても、より弱い魂の中の、より滑らかな平面の許では一つの内的な嵐となる。我々の永遠の意欲は、絶えず我々を通じて、我々の中で、一つの嵐のように流れて行き、情熱は単にこの嵐の滝、大潮にすぎない。しかし我々が情熱を厳しく弾劾する資格を有するのは、単に情熱が稀なものであるにすぎないからであろうか。奔流にとっては単に波にすぎないものが、小さな小川にとっては洪水ではないだろうか。我々が火の中では我々の冷たさを、冷たさの中では我々の火を叱るとき、我々の正しさはどこにあるのか。非難し続けるから正しさがあるのだろうか。

私は前もって異議や困難さを感じている。いやこの雲に覆われた雨の地球上では内的嵐を静める他に何も外的嵐に対し対処し、覆うことはできないと私は承知し、感じている。

— それでも私はまた、先のことはすべて真実であるとも感じている。

第二十六扇形、あるいは第二十の聖三位一体祭の扇形 学校教師の許での正餐

私のような一人の著者が自分の話に対し、多くの週遅れているとき、著者はこう考える。悪魔[刑吏]が今日の聖三位一体祭の後の祝日を拉致しても構わない。 — つまり私はこ

ここではただ今日の聖三位一体祭の後の祝日、私の妹について、私の部屋について、私についてだけ話すつもりである。話[歴史]の記述者でその同僚[私]ほどに今日そのインク壺の背後にこのように立派な一日を有する者は少ないことだろう。

私はここ学校教師ヴッツの屋根裏部屋に座っていて、三ヵ月前から私の腕を腕木燭台として窓から長い明かりと共に突きだして、十のドイツ圏を照らし出している。私はどの秋であれ、冬であれ、今日の扇形のようにすべての私の扇形を朝の四時半には明かりの許で書き始めるつもりでいる。というのは真夜中前の崇高な暗さの中では人間は大地やその雲の上に持ち上げられるように、真夜中後の暗さの中ではまた我々の大地のねぐらに連れ戻されるからである。――すでに夜十二時を過ぎると、私は新たな生命の活気を感じ、これは増大し、降り注がれた月光が闇を薄く、透明にするような按配である。まさに我々の魂のごとく繊細な全く目に見えない触糸が根のように粗野な感覚世界の許で伸びて行って、最も離れた動揺であれ突き動かされてしまう。例えば東の空の方が明かりがなく雲がなくなり、西の方で雲の管で覆われてしまうと、私は冗談のように十回以上向きを変える。

――私が東を向くと、すべての内的雲は私の精神から飛び去って行き、――西の方に向きを変えると、雲がまた精神の周りに懸かってくる――このようにして私はすばやく転回して対立する感情が私の前で去って行ったり、戻って来たりするように強いる。

この陽気な扇形では論理的秩序は全く考えられない。若干の歴史的[話の]秩序は見いだされることになろう。ただ千もの微光の角を有する幾多の考えが、私が明かりの芯切りをすると、私の明かりの缺で押し潰されてしまう。あるいは私が昨日のコーヒーを飲み干すと、その私のカップで溺死してしまうことになろう。読者には昨日のコーヒーがむしろ勧められよう。すべての温かい飲み物の中で冷たいコーヒーは確かに最も味気ないものであるが、しかし作用は最も少ない。眠っている一日がすでに朝方の夢で熱を帯びている眠れる美女のように、すでに赤みが射して、まもなく目を開けるに違いない。一日の最初の仕事は――詩的に語ると、――その一日が私の妹を起こし、眠りの仲間として彼女と共に私の部屋に入って来るということになろう。私は[ボヘミアの]モラヴィア同志のように数千のシスター達を有することになろう。そもそもシスター達を皆私は愛しているのである。まことに私は時々サチュロスの雄山羊のけり足をこの良き女性へ上げ、跳ね上げようとして、それを中止することがある。私の横にフィリッピーネの小さな教会用靴を見て、その中に収まる細い女性の足を思い浮かべるからである。この足は幾多の藪や幾多の雷雨の水溜まりに踏み出さなければならないのであり、この藪や水溜まりは両者とも容易に薄い女性の靴底から浸出してくるものである。一人の人間の、殊に子供の空の服は、私に好意と悲しみを吹き込むものである。その中に収まっている哀れな者がすでに耐えてきたに違いない受難を思い出させるからである。私はかつてカールスバートで容易にあるボヘミア人女性と、彼女がその中にくるまれていない室内着を私に見せてくれていたら、和解していたことだろう。.....

これらの点は過ぎ去った時の点を表している。今や盲人が癒え、麻痺していた者が歩き、聾の者が聞こえるようになっている。――つまり万物が目覚めた。私の足の下では学校教師がすでに日曜日の砂糖を砕いていた。私の妹はすでに四回私のことを笑った。ゼツマン長老はすでにその窓から私の家主に最も肝腎な今日の宗教勅令を口笛で知らせていた。時計はヒザキヤの日時計[列王記下、20,9-11]のように指令する口笛の奇蹟の力で一

時間遅れていて、私は一時間余計に書くことができる。しかしかくて私の筆で朝の絵を仕上げたところである。太陽は私の顔の向かい側にあつて、私の伝記の紙を輝くモーゼの顔[出エジプト記, 34,29 以降]にしている。それ故、私がペンナイフと、オーストリア、ポヘミア、あるいはイエズス会士のドイツを取って来て — つまりそこのホームマン[Homann, 1663-1724]の地図を手にして — ナイフでこれらの諸国を私の窓の上に釘で固定し、留めたのは幸いなことである。このような国はいつも朝の[東の]太陽を良く遮り、多くの影を投げかけてくれる。あたかも窓のカーテン代わりの飾り前掛けや司教の肩衣[パarium]を有するようなものである。

私のペンは今や地球の影の中を進んでいる。ヴッツはその家で三脚の気の利いた椅子を有しないし、窓のカーテンもオトリス織りの壁紙も有しない。しかし私の余りに華麗な家具調度はシェーラウにあるので、私はここではごく詰まらぬもので満足して、こう言っている。侯爵といえど、人為の隠者の庵ではこれより惨めなものは示せない、と。カレンダーですら我々二人は、私と家主とは、手ずから書いている、ベルリン・アカデミーの会員のようなものである — しかし白墨と部屋のドアを使ってである。毎週我々は我々の年鑑の一冊子、あるいは一週分を出して、その過去を吹き消している。ごつい暖炉の上では三組が踊れそうで、この三組を暖炉は現今の悲劇のように不格好な装備や幅にもかかわらず劣等に暖めることだろう。ちなみにいつか鉱山から金属の代わりに材木を、今贅沢に使っている材木を取って来なければならぬとなると、更に簡易の小型暖炉もできることだろう。...

一匹の去勢羊がしたたかに叩かれた、つまりその死体の股である — 二人のヴッツ家の子供の錫の名親の皿が拭き取られて — 私の銀の一揃いの器が借りてこられ — 炎の音がし — ヴッツの女将が走り — その子供達や小鳥が叫んでいる。 — 今日階下で行われるであろう大いに偉大すぎる正餐へのこうした準備のすべてを、私は上の書齋で耳にしている。ひょっとしたらそのような準備は、このもてなしを受ける二人の客人の身分に、これを与える両教師夫妻の地位よりもふさわしいものかもしれない。学校教師は片付けた家具調度の多くを一週間私の部屋に預けることが[私によって]許されていた。長い請願の後やっと彼のところは — 宗教局は見える教会であれ見えない教会であれ、修理することを好まないの — 改革される、即ち修理され、つまり白く塗られることになったのであった。 — それ故彼は私を(宮廷の作法で)正餐に招待し、私は(同様に宮廷の作法で)その招待状を受けたのであった。

私は扇形を夕方ようやく書き上げることになる。考え込んで食欲を失いたくないし、また外でびっこ引き引き歩き、食欲を得るためである。外ではその上二、三匹の頬白や教会の人々の歌を聞くことができよう。そもそも、今日その素晴らしい空色の服と、その上の勲章の太陽とを外の野原の上に備えている晩夏は自然の聖金曜日といえるものである。我々人間が丁重であれば、我々は時々野外に行つて、旅立つ太陽を丁重に戸口まで見送ることだろう。私は予見しているが、私は今日、穏やかに我々の周りを忍び足で行く月となつていて、晩夏では女性冠詞にふさわしい温和な太陽を見飽きることがないであろう。私の良き人々が住んでいて、そこから今日ドクトルが私を訪問することになっているシェーラウの山々に私の目を転ずる必要がない場合には、と。...

今や大地の下に昼とその太陽はある。愛しい友よ。無事帰つて来給え。月が君の道を見

守る銀色の谷で、君の魂は青春の失われた樂園を描くがいい。君とそして君の臆病な馬が光の当たる大地に投げかけている黒い影は、君らの後を追って行くに違いなく、前を駆ける必要はあるまい。

なぜこの本の大抵の住民はまさにフェンクの友なのか。 — 二つのまさに理性的な理由があつてそうである。第一に、彼の中の心の温かさと共に輝いている諧謔的な水銀はすべての諸性格と最も容易に結び付くのである。第二に彼は倫理的な樂觀主義者である。私なら一人の倫理的樂觀主義者のためなら十人分の形而上学的な樂觀主義者の分を支払うことだろう。倫理的樂觀主義は青虫のように一つの野菜を享受するのではなく、人間のよう喜びのすべての花の野を享受する術を心得ている。 — この者は、すべてのことに対して、女達や英雄、学問、行楽、悲劇や喜劇、自然や宮廷に対して、五官ではなく、千もの感覚を有している。ヴェストファーレンの講和や一七〇五年の協定の果実ではなく、何年もの幾つもの改善を通じて精査された人生の果実であるある種のより気高い寛容さというものがある。 — この寛容さはどの意見にも真実を、美しいもののどのジャンルにも美しいものを、どの気まぐれにも喜劇的なものを見だし、人々や民族や本の許で差異や長所の独自性をその長所の不在とは見なさないのである。単に最良のものだけが我々の気に入ってはならない。善なるものや一切もそうでなければならない。

人々が小さな教会から、私が大きな教会から戻って来たとき、ヴッツ家では正餐が始まった。我々の雇い主は対の客人を通常の好意と、その上常には見られぬ好意とで出迎えた。というのは彼は今日その教会の募金から — 彼は礼拝の後、すべての椅子の下を通して、払い込む際に下に落ちたすべてのペニヒ貨幣を磁石のように引き寄せて — 十八ペニヒの見栄えのする銀鉾船艦隊を持って来たからである。食事の華美がこの部屋では享受を圧迫することはなかった。ナイフとフォークは、すでに述べたように、銀製のもので、私のものであった。焼いたものとソースとが — 一つのフライパンから食されるような食卓で満足感を覚えないものがあるだろうか。 — 我々の見本料理はひょっとしたら選帝侯には高価すぎるものであったかもしれない。というのはそれは例えば磁器とか蠟とかアラバスターの種子からのものが鏡の皿にあるのではなく、単に数ポンドの重さのものとかではなくて、両見本料理とも六十ポンドの重さで、同じマイスターの作であり、選帝侯のベンチのように同じ材料からのもの、血肉でできており、つまりヴッツの子供達であったからである。僧職にある選帝侯なら、侯が我々のように、その巨大な食卓の隣に、その子供達の着席した矮小な食卓があるのを見たら、満足の余り一口も食べられないことだろう。彼らのテーブルは鯁の鉢よりさほど大きいものではなかった。彼らはしかし釣り合いを見ていて、[小人の]リリパット国の食器セットで食していて、これについてはクリスマス以来真面目な使用というよりは遊びの使用をしてきていたものであった。子供達は自分達の肉をホスチア皿の上で、細切り用ナイフで切り分けることに我を忘れていた。 — 遊び[演技]と真面目さがここでは食事の俳優達の場合のように混じり合っていた。最後に、私の場合もそうで、私の満足は技巧的卑小さと貧しさから来ていることを私は理解した。

偉大な食卓では — 別な食卓ではこれが逆になるが — 個人的会話は直に一般的な会話に移って行った。私と楽長[学校教師]は絶えず、プロイセン人は、ロシア人は、トルコ人はと云って、(首相同様に)国民の名の下で国民の支配者のことを指していた。 — 私

私は今日、私が食するたびに説教して貰い、二十回以上健康を祝して飲むという哀れな

因習に特別な喜びを感じていた。身分のある女性はいつもは男達のように、髪形を整えていない人々には簡単に屈み込むことをしないものである。このような整いのない女性にはまずしないものである。しかし私の妹は、その兄が妹にその本の中で最も美しい愛情溢れる卑下という称賛を与えるにふさわしい女性である。女性は女性らしくなるにつれ、一層利己心がなく、一層人間愛に溢れてくる。人類の半分の性を愛する女性達は殊に、心から性の全体を愛する。例えばフォン・ブーゼ弁理公使夫人は哀れな者達に多く贈っているか男達に多く贈っているか分からない。年取った乙女[オールド・ミス]は吝嗇で頑固である。 — 私のドクトルと一本のワインがデザートとしてやって来た。彼は現在この本を毎週読んでいたので、ここでは彼を褒めるよりは叱りたい。最もいいのは、多くの人が称賛もしなければ非難もしないどっちつかずのことをここで挿入することで — 女性に対する彼の心からの好意で、これは感情のない慇懃さと炎の愛の間にあるものである。この同じ好意は男性には似合うものであるが、しかし女性には似合わない。私の妹はしかしこの女性なのである。事は単に左耳に由来している。イヤリングが耳朶から取れたのであった。彼女は実際月曜日まで待てば良かったのである。その時には兄がその耳朶を、ユダヤ人の下僕に対してするように、極めて巧妙なやり方で穴を通してくれたことであろう。しかし今日それが所望された。ドクトル帽が彼女の意図の口実であった。いかに哀れなペスト看護人が三本の指先に耳朶を挿んでこすり、揉んで — 薬用の葉を嗅ぐためにそうするように、 — 耳朶を膨らませて、無感覚にさせたか描かれるべきであったろう。私とか医学参事官にとって、単に二、三本の指で女性をつつき、触ることほど危険なことはない — 腕全体で接触することは、我々にとって何も危険なことではない。例えば蕁麻疹は固く掴まえられるより、こっそり触られるとはるかにもっと燃え上がるようなものである。ひょっとしたらこの炎は電気の炎のようなもので、指先を通じて人間の中に、大きな平面を通るときよりも、大きな奔流となって行くものかもしれない。 — 私の妹は更に進んで、リングを持って来た。ドクトルは脈打つ指で赤い耳の先をリングに押し当てて、それから揺れる飾りピンを、あるいは娘達が間近な器官[口]よりもはるかにとがらすことが稀なこの感覚器官を通過して行くものを、押さざるを得なかった。 — そうしてそこに合うものが締められ、ボタン留めされ得るようになった。鋼はほとんど芸術家自身を彼女の耳に繋ぐことになった。「美人は自分に好意を見せるよう依頼するときほど我々を引きつけるときははない」とドクトル自身が言って、そのことを自ら経験した。そこで手術者と耳の磁気療法師は、「美人を治療して、それでいて惚れないということは難しい。最初の女性患者のお蔭で自分はほとんど患者となった」と嘆いた。ドクトルに対しては何も含むところはない。彼はいつも愛における世界市民であればいい。 — しかし、妹よ、妹には就寝して欲しいと思う。ほんの三歩歩いて離れた瞬間も、おまえが私の扇形を盗み見て、私がおまえに関して非難している点を読むのではないかと気が気でないからだ。 —

他人や自身の苦悶を可愛く弄んでいるおまえの気まぐれを、それに最も優しい繊維から紡がれたおまえの心を、私は非難しているというよりは遺憾に思っている。おまえのやり方ではこうした全ての長所をまず磨き上げる臆した女性らしさの輝く王冠が、弁理公使夫人の大勢の人々の中では、銀が沼地のオランダではそうなるように、幾分黒みを帯びて来ていて、何も欠けていないおまえの徳操には徳操の姿が欠けてしまっているのだ。 —

両親達に告げたい。諸君の若者が地獄で黒ずむことはほとんどない。しかし諸君の娘達と、

その雪のように白い服にとって天国でもほとんど十分に磨かれ、清潔であることはない、と。

娘達はその社交よりも劣等であることは稀である。しかし上等であることも稀である。この精神的ワインはその周りにあるイヴやパリスのリンゴの果実の味を吸収してしまう。そうなるワインの味はまだ楽しめるが、ただワインのような味がしない。

ドクトルはグスタフの状況について多くの明かりを私に与えてくれた。これは然るべきときに読者に紹介されることになる。

ほとんど二週間ごとに私が書いたものを遅れて読む或る人物は諷刺的人物で、私にこう尋ねる。どの全紙で、Aaa から Zzz の全紙のどこで、パウルとベアータのこれから先の恋愛沙汰が扱われるのか、と — 更にこう尋ねる、洒落者のパウルはそれ以来詩や影絵や花束やアダージョを作って、自分の心をこのデザート皿や、この透かし彫りの果物皿や、この菓子籠に入れて差し出すようにしたということが読者にすでに語られているか、と。この致命的な嘲弄的人物は最後にこう尋ねる。ベアータはしかし空の小籠[ひじ鉄]と空のデザート皿しか所望しなかったことがすでに世間に報告されているか、と。...この悪意に実際私が腹を立てることはない。しかしドクトル・フェンクと読者は明らかに、心の件を間違えて考え、見るという極めて意地悪な練達さを有している。 — まことに私の自称の恋はこれまで単なる冗談であった。冗談ではなかったとしても、その恋は冗談とならなければならないであろう。私は見たところグスタフという私ほどに美しく、立派な恋敵を得ることになっていて、この恋敵を、私が実際にできようとも、許されようとも、凌駕したくなんかないし、影の薄い者にしたくないからである、本当はそうでもないのだが。...

(第一部の終わり)

(第二部)

第二十七扇形、あるいは第二十一の聖三位一体祭の扇形 グスタフの手紙 — 侯爵とその調髪用櫛

さてグスタフは旧館にいる。 — 彼の舞台はこれまで日々高くなってきた。洞穴から騎士の砦、それから士官学校の汎愛校、最後は侯爵の館である。金持ちのエーフェルがそれを借りた。新館と接続しているからであり、そこはシェーラウの偉い世界のブロッケン山であった。フォン・ブーゼ弁理公使夫人がその両方を兄から遺贈されていた。兄はここで彼女の接吻と涙の下、身罷ったのであった。自然は彼女に、自らの心を高め、他人の心を得る一切を与えていた。しかし技芸[人為]は彼女に余りに多く与えていて、彼女の身分は彼女から余りに多くを奪っていた。 — 彼女は余りに多くの才能を有し、宮廷では男性的徳操より他の徳操は残せなかった。彼女は友情と媚態とを和合させ — 情感と嘲笑とを — 徳操の敬意と世俗の哲学とを — 自らと我らの侯爵とを和合させていた。というのはこの侯爵は世間周知の彼女の愛人であったからで、彼女は侯爵に好意からよりも敬意から心を寄せていた。彼女は微光を放つよりも何か良きことのために造られていた。しかし微光のための機会の他には何も有しなかったので、かの何かより良きものがあるこ

とを忘れていた。しかし世俗や宮廷での幸運より何か気高いもののために生まれついている人は、苦い時間のときに、その怠っていた使命を感じずるものである。 — ここでエーフェルをシェーラウから追い出すことになった新たな理由を述べるのがふさわしいかもしれない。つまり彼は侯爵の命を受けて、弁理公使夫人の誕生日のためにその写字台の回転盤の上で一つのドラマを捏ねるよう頼まれ、その気になっていた。そのドラマは[現実との]関連を有すべきことになっていた。上部シェーラウの素人劇場で — そこでは侯爵は戦場のときのように端役ではなく、主演俳優で、正規の宮廷の一座を代理し、節約していたのであるが — 侯爵やエーフェル、若干の他の人々によってそのドラマが演じられるはずであった。侯爵は弁理公使夫人を見つめる目をまだ有し、彼女を愛する舌をまだ有し、そのことを彼女に証明する日々をまだ有し、彼女に忠誠を誓う劇場をまだ有していた。それでも彼はすでに彼女を憎んでいた。彼女は彼にとって余りに高貴であったのである。というのは彼の芝居での役目は（先の方で印刷されることになっているように）、彼女のためより彼のために役立つことになっていたからである。 — エーフェルは（これは同時に使節にして、宮廷劇場付き作家、それに俳優であったが、区別し難いが故に同時なのである）、彼のドラマにベアータを描き入れて、その模写で彼女に取り入ろうとし、彼女が共演し、その肖像画を自分の役柄としてくれることを願っていた。こうしたこと一切をグスタフにも望んでいた。しかしまさに先の方で我々はまさに見ることになる。

グスタフは旧館にいて — その耳の神経の上をあらゆる訪問の車輪が動き、その目の周りにはあらゆる訪問の列が群れていたが — 死んだように一人っきりであると感じていた。彼は自分の将来の使命に適用しようとしていた。五十人以上の使節秘書がそれ故こう思うことだろう。彼は手紙や心を開封する術を学び、女達や報告の暗号解読を学び、恋愛や接見、奸計を練る術を学んだことであろう、と。 — 五十人以上の秘書は間違っている。彼らは更にこう考えることだろう。彼は郵便代を節約するために小さな字を書く術を学び、更に暗号や肩書きを作る術を学び、更には三人の有力者宛の公文書では誰の名前が最初に来るか、 — どの有力者もその文書では最初に来るということを知る術を学んだらう、と。 — 彼らは正しい。しかし彼はそれ以上のことをした。彼は孤独の中で社交に耐え、社交を愛する術を学んだ。人々から遠く離れて原理が育つ、人々の許で行動が育つ。孤独な無為は書斎のガラス鐘を出ると、社交の活動へ成熟する。すでに人々の下に来たとき善良でなければ、人々の下でより良い人間になることはない。

彼の仕事は素敵な中断に移ることがあった。というのは彼の窓の外ではパリスのリングの美しい、ほとんどコケットな自然が周りに下がっていて、その自然の最中にこのリングのすべてにふさわしい一人の散歩の女性がいたからである。それは — ベアータ以外の誰であろう。 — 彼女が公園を行くと、彼女の後を追って散歩することもできなかったし、窓越しに彼女の後を目で追わないということもできなかった。そして彼の目はその茂みからすべてのきらきら輝きながら過ぎて行くリボンを選び出していた。彼女が顔を彼の窓に向けて戻って来ると、彼は窓から離れるばかりでなく、カーテンからもできるだけ遠く離れて、見られないように見つめるのであった。彼が彼女の後で敢えて、彼にとって天国の道である彼女の道を行っていたら、ひょっとしたらその役割は逆転していたかもしれない（しかしほとんど考えられない）。かつて彼女の窓の下で漆黒の夜、彼が拾い上げた落下の薔薇は彼にとって勲章の薔薇となり、その枯れた蜜の萼は彼の至上の夢とその喜び

の花の混成曲[ポプリ]であった。そのように、高貴な運命よ、汝は永遠の人間のためにその天をしばしば一枚の色褪せた薔薇の花の下、あるいは勿忘草の花の萼の上、あるいは三十万五千平方マイルの小片の国に置くものである。

余りに多く許して来た者は、後で報復しようとする。アマンドゥスに対するグスタフの友情はとて高く燃え上がったので、その友情は必然的にその素材に灰を燃え落とさざるを得なかった。ベアータに目をやると、いつもアマンドゥスに目が戻り、自らをしばしば責めたので、自分を正当化し始めなければならなくなった。彼の恋がその下で煌めきを放った灰の山から運ばれてきたものが、彼の友情の灰の山に降り注がれた。それでも彼はいつでも、人々が喜びと名付けるものすべてをアマンドゥスのために犠牲にしたことだろう。

— というのは最初の友情の新たな時には、犠牲は後の時にもたらされるものよりもっと温かく求められるからであり、与える者は受ける者よりも一層幸せであるからである。いやはや。正しい魂は犠牲を捧げる力ばかりでなく、憧れも有する。— グスタフが今、春や庭園、愛の願望に取り巻かれて享受していた人生は彼自らによる私宛の手紙の中で書いて貰うことにする。勿論この手紙は、自然の舞台を前にして冷たい観客、遠く離れた栈敷席借地人として立っている者ならば、投げ棄てる態のものだろう。しかし自らを引きずり込まれた演技者と見なし、草の先端のすべてを魂あるものと見なし、どの甲虫も永遠であり、束縛されない全体を一つの無限の脈打つ脈管の体系であると見なし、その中でそれぞれの生命が吸い取り、滴り落ちる小枝として大小の小枝の間を鼓動していて、その全き心臓は神であると思う、より良き、より稀な人間がいるものである。

グスタフの手紙

<今日私は私の洞窟から無限の世界へ昇ること二度目となりました。— 私のすべての血管は今日の午後からいまだに溢れ出ていて、私の血は諸惑星と一緒に諸太陽の周りを巡り、私の心は諸太陽と共に、創造主の隣に立っている煌めく目標の周りを巡りたいと思っています。...

私の明かりを折り曲げる夜風は、私が燃える胸を友人の目の前で打ち明けて、全てを告げない限り、私の心を冷却できません。私は午後製図器具を持って、これで今まで風景の代わりに、風景を台無しにする要塞を作らなければならなかったのですが、「静かな国」に出掛けました。地球はこっそりと白鳥のように、私が近寄って行った花の島々の下に、エーテルの大洋の中を滑って行き、好意的な天は一層低く大地に屈み込んで、心はあたかも静かな広大な青さの中で溶け散らなければならないかのように、遠くから次第に響き止む歓声を聞かなければならないかのように思われて、心はアルカディアの諸国と、心が砕けてしまう相手の友とに憧れました。— 私は鳥口を持って湖の横の人工の岩の上に腰掛けて、眺望を描こうと思いました。— 曲がった湖の端を覆い葉陰にしている互いに抱き合った赤楊 — 花の島々の多彩な並び、それぞれの花の島々の周りではその飾られた島を代表する二重の花の絵が描かれて浮かんでいました。つまり多彩な花の像で、これが水の下に鏡の天となって垂れ下がっていて、この影絵は、震える銀箔の上で揺れていて — それに生きたゴンドラ、白鳥が、私の足許で希望[餌]に飢えて、体を回していました。— しかし高く昇った自然全体が私に向かい合って座り、ある太陽から別の太陽へと次々に反射するその光線で私を捉えたとき、私は模して描きたいと思っていたもの

を崇拜し、神と女神の足許に伏しました。...

私は萎えた手で立ち上がって、私を持ち上げた上昇する海に委ねました。 — 私は巨大な客人達と目に見えない客人達のために百万もの食器を有する大きな食卓のあらゆる隅に行きました。私の胸はまだ一杯となっていなかったからで、私は流入してくる波を苦しい思いで私の中で波立たせました。私は影の世界の最も深い影の中に進んで行きました。そこでは一つの星の中へ沈んだ太陽が一層離れて微光を発していました。 — 私は唐檜の森の中、四十雀の騒がしい声の前を、ツグミの孤独な荒れた声の前を通り過ぎて、歌う雲雀の許へ来ました。 — 私は生き物のいる小川の許の長い夕方の谷を通って行きました。するとうっとりした生命のコーラスが私と共に散策し、没した太陽と、スケート靴の足をした蚊が私の傍らの水面を滑って行き、大きな目の川トンボが枝垂柳の一枚の葉に飛んで来て、私は緑色の呼吸する生命の中を、短く温かい様々の瞬間の喜んだ子供達が飛び、歌い、跳ね、這う周囲の中を徒渉して行きました。 — 私は隠者の山に登りました。私の胸は、胸が受難しながらも率直に受け入れていた世俗の奔流によってまだ一杯となっていないのでした。 — — — しかしそこでは自然の横たわっている巨人が私の目の前で起き上がって、腕には何千もの吸い込む生命を抱えていて — そして私の魂が無数の、魂の混雑によってあるときは金色の蚊に収まった魂として、あるときは翅鞘で武装した魂として、あるときは蝶の翼の鱗粉の中の魂として、あるときは花の蛹に閉じ込められた魂として存するこれらの混雑によって一つの無限の、見通しがたい抱擁の中で触れられたとき —

— そして私の前で大地の上に山々や奔流、平野、森が横たわっていて、私がこう考えたとき、つまりこうした一切を喜びや愛によって動かされる心臓が満たしている、そして四つの空洞を持つ大いなる人間の心臓から、一つの空洞を持つ縮んだ昆虫の心臓に至るまで、虫の管に至るまで、絶えず造り続ける、永遠の、次々の生殖で燃え上がる愛の火花が跳ねると考えたとき、...

...いやそのとき、私は両腕をはためき、痙攣する大気に、大地で孵化する大気に、突きだして、私のすべての考えがこう叫びました。汝が、その広大な波打つ膝に地球が安らっている大気であるならば、汝が大気のようにすべての魂を抱きしめるならば、いや汝の腕が大気の腕のように、すべてに差し伸べて、あるときは甲虫の触角や百合の蝶の震える羽や強靱な森を撓め、あるときはその手で青虫の毛やすべての花の沃野や地球の海に触れるならば、いや汝が大気のように、喜びの余り燃えるすべての唇に安らうことができ、溜め息を付こうとしているすべての悩める胸の周りに涼しげに漂うことができるならば、何と願わしいことか、と。いや、人間はとても細くて閉ざされた心臓を有するので、人間は自分の周りで王座にある神の全帝国の中で、自分の十本の指が握り、感ずるものしか愛せないし、感じられないのでしょうか。すべての人間やすべての生命がただ一つの首やただ一つの胸を有することを人間は願うべきではないでしょうか。そのすべてをただ一つの腕で抱きしめ。どの生命も忘れず、満ち足りた愛の中でただ二つだけの心、愛する心と愛される心だけを知るようにするために。 — 今日私は創造のすべてと結ばれました、そしてすべての生命に私の心を与えました。...

私は東の方、新館の方に、アウエンタールの方に向きを変えました。アウエンタールの森の奥では砕けた雨の飛び梁を通じて波立った大洋がざわめいていました — 私はこの遠く離れた静寂の中、孤独に立っていました。 — 私は没した太陽の方を向いて、自

分はかつて太陽を神と見なしたことがあると考えました。そのようなもの[神]であった者のことをこれまでめったに考えなかったことが今日重苦しく思われました。 —「御身よ、御身よ」とその者の間近で私の全本性が叫びました — しかしどんな言葉も、どんな心も、どんな感情も、その者を前にして舌が適わず、祈りは沈黙となり、唇が黙するだけでなく、考えも黙しました。...しかし良き人間の弱さを知っている大いなる精神は、人間に同朋を送って下さいました。人間が人間に対して心を打ち明け、黙したままの祈りが完成するようにするためです。 —

私の最も素晴らしい年月のときの友よ。私の内奥で感謝と謙譲を確固のものとなさった友よ。この双方を私は実際しました、隠者の山に孤独に登り、創造された虫類の上に立ち、人間が感ずるもの、人間のみが地上で感ずるものを感じたときのことです。 — 虚無にまで達する大きな鏡の前で、昆虫ならば触角でぶつかる鏡の前で孤独に人間の目をして眺くことができたとき、無限の太陽という巨人が燃え出てくるかの鏡を前にしたときのことです。...いや、大地の色彩の中、動物の毛皮という画布の上で、私の前に横たわっているすべての上には単に、根源の精霊のイメージがあるだけで、人間の中にはそのイメージはなく、精霊自身があります。...

太陽はまだ半ば地球の上に輝いていて、地球は太陽を砕いていました。しかし私はもはや太陽を私の溶け去って行く目を通じて見ることはなく、私の周りの勢いのまま、燃え上がり、拉致していく岸部のない海の中へ消滅し、沈黙し、覆われ、沈んで行きました。

太陽は恍惚となった一日を伴って消えてしまい、今夜で黒く縁取りされたエーテルのダイヤモンド、つまり月が、この覆われた情景の上に昇っていて、本物のダイヤモンドのように借用された輝きを放っています。...御身、静かな真夜中の太陽よ。御身は微光を発し、人間は休み、御身の光線は地上の騒ぎを和らげ、御身の降り注がれる火花の微光の小川のように横たわっている人間をあやして、それから眠りが塚の大地のように休らう心、乾いていく目、苦痛の消えていく顔を覆う。...ご機嫌よう、白い月の面が貴方に過ぎ去った青春のすべての樂園を、将来の青春のすべての樂園を示してくれますよう祈念します。...

グスタフ>

*

そのように書いているとき、エーフェルの従者が彼宛の小包と共に部屋に入ってきた。小包はどんなに冷たい夜風やどんなに熱い手紙よりも容易に彼の動揺を抑え、冷ました。ドクトルからの手紙が同封されていて、フォン・レーパー夫人がマウセンバッハで自分に当肖像画を渡したもので、彼女の娘[ベアータ]が自分のなくなった肖像画と勘違いしたが、絵の裏にファルケンベルクの名前があって、他のすべての類似性を駁する証拠となっている旨知らせてあった。肖像画は大事なものであったが、苛立たしく思われた。母と娘は穀物通報のせいで彼を憎んでいるという彼の推測の新たな証拠となったからである。どの人間であっても、その心室の一角にその巣をかける憎しみの蜘蛛が — ただ大きな盲蜘蛛の場合多くの人の許で四室すべてにその五つの出糸管で張るものであるが — かつてアマンドゥスの揺さぶったそれらの糸の上を走った。そして獲物を欲した。つまり冷たい染め物屋の手が彼の心を握り、少しばかりアマンドゥスに対する気持ちを冷たくさせた。アマンドゥスの心は返却された肖像画でより温かくなっていた。妨害された恋は最良の人間であれ、より良い人間とはせず、ただ幸せな恋のみがより良い人間とする。

七分ですべては片付いた。というのは精神的人間にあっては身体的人間同様に同じ立派な仕組みがあって、苦く、鋭い観念の周りに長いこと別な観念がより穏やかな果汁として注ぎ込んできて、それがその鋭さを薄め、溺死させてしまうからである。肖像画は今や二番目の拾い上げられた薔薇となった。それは、その肖像画に留まっていたこの上なく美しい目と唇を通じて、生命と薔薇の香りが吹き寄せられていた。

今や彼はベアータをしばらく庭で見かけなくなった。その代わり弁理公使夫人と一緒に侯爵を見かけた。 — この兩人[侯爵と夫人]よ、静かな国からおまえ達の騒がしい国へ行くがいい。おまえ達は美しい自然であれ、単におまえ達の絵画陳列室やオペラ劇場のカンバスに懸けられている大きめの風景として、あるいは単にかなり幅広の食卓の飾り、暖炉飾りとして享受するだけである。そこでは軽石の岩や苔の木々が象られて出現しており、あるいはせいぜい最大の英国式庭園として、最近ヨーロッパのどこかの宮廷で見られる英国式庭園として、享受するだけである。 — どの会議室でも夏のシリウス日休暇のせいで仕事は凧となっていた。 — 冬には寒さのせいで霜休暇も取れるであろうし、仕事の夏の昼休み同様に仕事の冬眠を使用できよう。丁度周知の動物どもも両極端のせいで恐水病の恐れから家にいなければならないようなものである。 — それで大臣はより容易に侯爵と一致できて、兩人は一層長く一緒におれた。私が説明しなければ読者は何故侯爵の滞在がきっかけとなって、ベアータは静かな国を彼女の静かな部屋と取り替える次第となったか分からないことだろう。次のような次第であった。我らの侯爵は確かに少しばかり厳しく、少しばかり吝嗇で、しばしば自分の家畜を牧人の笛よりは牧人の棒で世話した。しかし彼はより美しい意味での牧人でありたくて、領民が彼を崇めている王座から、その王座のどの段の下へも降りて来て、自ら美しい一人の領民の子を崇めようとするのである。 — 彼は確かに民の溜め息を聞くことはできるのであるが、一人の美しい娘の溜め息には耐えられない。彼は飢饉より熱心に社交上の当惑を反らすのである。彼はむしろ領邦等族に対して借りを作る方を自分の相手役に若干借りをすることよりも好み、燃え落ちた町よりも乱れた髪の手入れに意欲的に取り組むのである。要するに領主と社交人は彼の心室では隣り合わせであるが、不倶戴天の敵なのである。この社交人はまた二人の恋人に細分化された。短期の恋人と長期の恋人である。彼の長期の、あるいは常緑の恋は、冷たい軽蔑的な慰撫さから、つまり繊細さや機知、優美さへの満足から成り立っていて、これでもって彼とその恋の対象は自分達相互の勝利を飾る術を心得ていた。彼の短期の恋はかの飾りが欠けている限りでのかの勝利への満足から成り立っていた。この無邪気な、一人の偉いさんに対する諷刺が大抵の偉いさんに対する諷刺と取られないよう、私は次のように続けることにする。

彼は弁理公使夫人に長期の恋を抱いていて、この好意の印について人々はこうは言えなかった。これは最も無垢の恋であるとか — 最初の恋であるとか — 最後の恋であるとは言えなかった。このような不動の恋を彼は同時に百もの大まかな秒単位の結婚、あるいは恋愛と編み込んでいて、長い固定された恋あるいは結婚生活のゆっくり進む月単位の針の上に、短縮された結婚生活の飛ぶような六十分の一秒単位の針が無数に回転していた。

これに対し弁理公使夫人は何も反対しなかった — 彼女は同じやり方で編み上げることができた — これに対し彼は何も反対しなかった。

このような短期の結婚生活で偉いさん達はひょっとしたら幾多の善をなしているかもし

れない。これについて倫理家達は余りに容易に見逃しているもので、倫理家達は出生登録簿よりも自分達の印刷全紙を一杯にしたいのである。若い著者達に似て、若い偉いさんはその最初の似姿[子供]を匿名で、あるいは借用の名前で出現させる。私は、名付けは住民増加に資する、各人が自分の名の伝播を心がけるからというモンテスキューの見解に私自身の見解を付加することしかできない。つまり無名性は住民増加に更に良く資するというものである。実際この点では最も崇高な人物達はギリシアの芸術家のような具合である。ギリシアの芸術家達は、手ずから神殿の飾りや道の飾りの最も美しい彫像の下に自分達の苗字を彫り込むことを許されなかったのであるが、しかしやり手のペイディアスは実際自分の模倣者達を見いだすことになった、ペイディアスは名前の代わりにその老いた顔をミネルヴァの像に彫り込んだのである。

侯爵はベアータに短期の恋を申し出ようと思っていた。彼女は余りに多くの無垢と余りに少ない媚態を有するように侯爵には見えた。彼女の抵抗に出会って彼はちょっと長期の恋を考えるようになった。弁理公使夫人の目の下では、彼に対してすべての彼女の感覚は大丈夫であったが、ただ耳だけは大丈夫でなく — 公園ではどの感覚も大丈夫でなかった。自分の精神は刻々と新しい肉体の中へ入って行けると知っていた弁理公使夫人は、その恋敵の少女は一つの肉体しか有せず、その上その肉体には無垢と愛しか入っていないという次第であって、夫人はこの全体をただ諷刺的な目で見ている。侯爵が夏のシリウス日の空位時代にやって来て、翌朝王笏の代わりに髪櫛と弁理公使夫人の頭部のみを手にしていたとき、このような具合であった。彼はその宮廷で流行を作っていた。どの侍従も、宮廷歯科医に至るまで、それ以来自分の頭部貸出女性を有することになった。より美しい貸出女性の頭部の許で練習し得る限りのものをその頭部で学ぶためであった — 調髪して貰っていること同様に調髪することが必須になった。

注として言えることであるが、頭部貸出女性というのはパリの少女のことで、この少女は一日に百回調髪して貰うのである。散髪組合がその頭部で学びたいからである。 — 彼女の頭蓋上で生ずるほどの多くの変更や試験が彼女の頭蓋下で見られることは不可能である。 — 最も不似合いの散髪屋の連立や腹違い平等相統はとても大規模なもので、髪を梳き上げや梳き除きは交互にととても素早く、築き上げと取り壊しも素早く、単に真理の女神の頭部でのみ、これは哲学者達が調髪し仕上げるものであるが、それとか支配者達が取り組む国全体でのみ、より劣等な具合に行くことだろう。

我らの支配者がその支配の女性を調髪したその日の朝、支配者はベアータに対して言った。翌日自分は床屋と一緒に彼女の許に伺う、と。弁理公使夫人はただこう言った。「男達は何でもできるけど、簡単なことがめったにできない。十の訴訟より、十本の髪の方が男達には難しい」。ベアータは話すことができなかった。 — 夜には眠れなかった。彼女の内部全体が、侯爵の霜の顔と刺すような眼差しのせいで恐怖していた。その眼差しは（彼女はほとんど明確に考えなかったけれども）自分がフランスのパレ・ロワイヤル宮にいるかのように新館での予備勝利を短縮すべく燃え上がっていた。翌朝病気になりたいという彼女の願いはほとんど病気であるという確信に変わっていた。彼女は空虚な生に飽いた思いで窓から「静かな国」を覗き込んだ。そこでは宮廷庭師の二人の子供が色付きのガラス球で九柱戯をしていたが、そのとき侯爵の肩をねぐらとして、彼の周りを蚊のように飛んでいるカナリアが、六つの窓の分、彼女から離れていた彼の頭部から、彼女の頭部へ

飛んできた。彼女はこの鳥の止まった頭部を引っ込めた。 — しかしこのカナリアの所有者も引き入れることになって、この所有者は早速躊躇せずに出て来て、こう言った。「貴女の許では負ける運命です。 — しかし私の鳥から自由を奪うことはできませんぞ」。彼のような類いの人々はこうしたこと一切を何の抑揚もなく述べるものである。彼らは星空の天蓋と馬車の天蓋について、それにその二つの動作について同じ調子で話すものである。

遠慮なく彼は彼女に髪粉用化粧着をかけようとした。しかし彼女は別の理由から自らその化粧着をまとして言った。自分はすでに、髪粉を除いて、一日中調髪されていた、と。ただ彼女はいずれにせよ、自分の拒否を、彼の身分とそれに母親から躰けられた男性への敬意のせいで、自分に課された極めて美しい作法で行いたかった。結局彼女は、彼を論駁しても彼の調髪よりも大して良くないと見てとった。彼が調髪を始めて、彼女の間近に立つと、またその逆を悟った。髪の毛一本一本が彼女にとって一つの触角となり、あたかも彼が彼女の病んだ神経に触れているかのように、彼と一緒に自分の周りの燃え上がる地獄に行くかのように思われた。突然彼女の不安が、女性の性質の掟に従って、中等の段階から最高の段階に溢れ出た。 — それは彼にとって何の役にも立たない彼の利己的な姿勢から来たのか、それとも彼がサービスで上演した慈善喜劇の収入としての接吻から来たのか、それとも隠者の山のピラミッドを彼女が見て、それで彼女の臆した胸が自分の兄の像と似姿とで一杯になったせいなのか、私は知りたい気である。 — 要するに、彼女は熱病のように飛び上がってこう言った。「私は弁理公使夫人が帽子を被る際のお手伝いをすると約束していました。今すぐにです」。こう言ってこの謙虚で気位の高い非難で彼を追い出せると彼女は期待した。彼は追い出されはしなかった。この失敗で彼女の華奢な力は引き裂かれた。彼女はよろめきながら、腕と調髪された頭とで壁紙に寄りかかった。彼は、彼女を自分の近くに馴染ませることに、ひょっとしたら退屈したのか、それとも喜んだのか、カナリアと彼女とを手に、彼女を自ら弁理公使夫人の許に連れて行った。ここで彼は彼女と一緒に慈善喜劇の笑いを取り戻した、云々。

しかしながらそれでも外的頭部の苦悩は、内的頭部の片頭痛に解消されて行った。彼女は食卓から — それに侯爵の姿が見える限りは — 公園からも遠ざかっていた。

公園の件は証明されるべきというよりは説明されるべきことであった。

第二十八扇形、あるいはシモンとユダの扇形

絵画 — 弁理公使夫人

— 昨日（十月二十六日）はアマンドゥスよ、君の聖名祝日であった。君は君の人生の中で聖名祝日を喜びの日で祝ったことがあったろうか。君は一年のお仕舞いにこう言っただろうか。新年も同じように幸せであって欲しい、と。 — 一層悲しい思いにならぬよう、その返事はしないつもりだ。...

グスタフは公園ではもはや自分の求めているものばかり目にした。侯爵とかそのような頭だけであった。誰かにベアータの不在のことを尋ねるという不必要な、つまり惚れた躊躇を抱いていた。 — 二人の庭師の子供達は別で、彼らは、ベアータは彼同様相変わらず彼らと戯れ、贈り物をしてくれるということしか知らなかった。ひょっとしたら彼女

が贈り物をしたのは、彼が子供達にそうしたからであったかもしれない。というのは彼は、彼女がそうしたから、子供達に贈り物をしたからである。彼女の唯一の聖遺物、つまり散歩道はそれだけ一層彼を引き寄せた。砂利がもっと柔らかく、草の丈がもっと長ければ良かったろう。そうすれば砂利や草も彼女がいたという痕跡の薄い輪郭を残していたことだろう。かくて彼に姿を見せぬ女性のこの茨の庭園は彼の願いにもっと大きな翼を与え、彼の憂慮の念にもっと大きな溜め息を与えていたことだろう。というのは私はせめて一度読者と私に対しこう告白せざるを得ないからである。今や彼は宣言された恋の手前のかの陶醉的な、憧れの、夢想的状態にあった、と。この夢想のヴェールが彼を覆っていたに違いない。彼は一度自分が描こうと思っていた夕方の谷の蛇行した小川の代わりに、この波間から出現したように見える美しいヴィーナスの像をスケッチしたからであり、第二に彼は誰が自分を見ていたか知らなかったからで、―― 弁理公使夫人だったのである。彼は彼女にとって、五フィートの背丈に育った美しい子供に思えた。彼はすべての彼の内的資質にもかかわらず、まだ畏敬の念を与えることはできなかった。彼の顔にはまだ余りに多くの好意と、余りにわずかの世間知が記されていたのである。男性に対する媚態の軽視の長女といえるかの冗談めいた媚態の気安さで彼女は言った。「スケッチのためにあなたには原物[モデル]を上げましょう」、そしてスケッチを取り、美しく（何か別のことを）考えている賛嘆の思いで見つめていた。彼がそのことを語ったエーフェルは、「どの原物です」と上品に返事しなかったことを叱った。というのは彼は生きたヴィーナスには何も言わなかったからである。

彼は実際そんなことはできなかった。というのは彼女は彼の前にすべての魅力と共に、つまり彼女から最初の無垢の優しい色合いを奪ってもユーノに残るようなすべての魅力と共に、下部シェーラウで百人の女性が模して挿しているその羽毛の森と共に立っていたからである。彼女らは、やはり生涯で羽毛を布団に閉じ込めるよりも多くの羽毛を頭に飾る私の女性の読者達の数人と共に多くを持ち寄ってきていて、どのユーノも一人の女神でなければならず、どの女神も一人のユーノでなければならぬ按配で、レディーの頭部とピアノにはいつも羽毛を付けなければならないのである。

彼女は彼にそのスケッチの師（精霊）の名前を尋ねた。彼自身の名は彼女自身が彼に言った。彼女はどんな彼女の過ちにもかかわらず、敬意を得ることができて、彼女の罪や悪魔は単に付き人のモール人として彼女の後に付いてくるように見えた。彼女の顔はその振る舞い同様、自分に残された徳操と才能の内的意識を帯びていた。それでもグスタフが彼女の身分や価値に対してよりも女性というものに対して示す臆した畏敬の点で、彼が世俗に慣れていないと気付いた。彼女は回り道を避けて、ザクセンにいる自分の兄弟のために公園全体のスケッチを直截に頼んだ。私は彼女が本来いつも冗談めいた調子で男性達への勅令に関して作曲するものを頼み事と呼んでいる。―― 彼女の女性的命令に関しては男性的命令を対置するよりなかった。

一人の女性がただ一度ある仕事を君に申し込むとする。そうすると君は全身全霊彼女のものとなる。すべての君の彼女のための辛い足踏み、すべての君の苦勞の管理は、君の頭の骨の壁に広げる彼女のイメージの許で魅力として広がる。一人の女性を救うこと―― 一人の女性の復讐をすること―― 一人の女性に教えること―― 一人の女性を守ることは、すでに彼女を愛することよりほとんど余りましなものではない（ただほんの少しまし

である)。グスタフはこれより好ましい依頼を聞いたことがなかった。早速彼は公園をスケッチした。それを渡すことを許された午前がほとんど待ちきれない思いであった。彼が弁理公使夫人の部屋で夫人の他に彼が目にしたかと思っていたものを我々皆が知っている。 — しかし夫人の他に彼が見つけたものは、ジルバーマン [Silbermann, 1683-1753] のピアノの許にいる、不在のベアータの幼い女生徒 (ラウラ) だけであった。

弁理公使夫人は長いことスケッチを見つめていた。「貴方は」(と彼女は言った)「私どもの宮廷画家の作品を御覧になりましたか。貴方は彼の弟子となり、彼は貴方の弟子となったらいいでしょう。 — 彼はまだ上手な肖像画を描いていません。まずい風景画はまだ描いていませんが。あなたはもっと上手な間違いをなさっていて、風景画では見られないものを住人には付与なさっています。 — 貴方のスケッチでは立像の方が公園よりも美しい — 間違いをそのままにして、人々を美しく描きなさい」。そして彼を見つめた。私のつたない美術的観点によれば — というのはまだ私の作品のどの一つとして画廊に見習いとして飾られたことがなく、それに私もこのような展覧に供するよりは展覧を公に批評することをもっと名誉に思うからであるが — まさにこの逆が本当のことで、私の主人公は(その伝記作者と同じく)肖像画よりもはるかに風景画が上手なのである。

— 「生きた原物[モデル]で」と彼女は続けた「試して御覧なさい」 — 彼は彼女の助言の意図に当惑しているように見えた — 「画家自身が座っている間、ずっとモデルとして座るような人はどうでしょう」。エーフェルの虚栄心とグスタフの早合点が合流していたらここで愚かな丁重さが生じていたことだろう — 「これです、この中にいます」

— と彼女は鏡を示した。今や彼は再生された丁重さで、「彼女の姿は自分の筆を越える」と述べたくなったが、幸い彼女が言い添えた。「自分自身を描いて、それを私に見せてください」。 — たまたま飲み込んだ愚言のことで、発せられた愚言同様に赤面するものである。 — 汝、美しい、赤く火照っているグスタフよ。

それ故私はここでまだ冬の舞踏会で踊ったことのない子供達のために、ファッション作法として次のモットーを書き留めることにする。君達にある説明をしようと思っている人々に、ある説明を口にするには不作法であり、不適切である、と。

「それは何故かって是非お示ししましょう」と彼女は言って、途中まで彼の手を握ろうとして、またその手を引っ込めて、自分の読書室、書架室を通して、自分の絵画陳列室へ彼を連れて行った。彼女が行くと、人々自身はほとんど行けなかった。彼女の後ろ姿を見たくなるからであった。絵画は彼女の横では更に見つめることが難しかった。彼女は陳列室で極めて有名な画家達が自らの手で自らについて描いた一連の多彩な模写、弁理公使夫人がフィレンツェの画廊からコピーさせた模写を彼に見せた。「ねえ、貴方が有名な画家になったら — そうならなければなりません、 — まだ貴方の肖像画を私は収集していないことになりますよね」。窓の上に垂直な女性用日傘があった。緑色の散歩用の扇子のことで、これは彼が裁判に列することになったら、ベアータの扇子と誓って証言したであろうものであった。 — 画家ウオーウェルマン [Wouwerman, 1619-68] の草が干し草用馬車数台分であれ、サルヴァトウレ・ローザ [Salvatore Rosa, 1615-1673] の岩数ツェントナーであれ、エフェルディンヘン [Everdingen, 1621-75] の谷底一平方マイルであれ、この単なる扇子と引き換えなら彼は贈っていたことだろう。

しかし自分を描くという彼に課された約束は、美術がまだ虚栄のものとなっていなかつ

た彼のような自然の申し子には実現することが極めて難しいものであった。百人もの現今の青年が、社交の中で自身を鏡の中で見つめるという力を、彼が一人っきりのときそうするよりも、もっと有することであろう。彼は実際、自分は絶えず虚栄心の罪を犯すのではないかと案じた。

このようにして私の主人公は、鏡から自分を取りだそうとして、同時に三人のスケッチの名手から見つめられ、描かれることになった。伝記作者、つまり私によってであり、一長編作家、つまりフォン・エーフェル氏によってであり、彼はその長編小説である章を設けて、そこでブーゼ[夫人]に対するグスタフの恋を匿名で描くのである。一それに画家の主人公自身によってである。かくて彼は多分的確に描かれるに違いない。

エーフェルの長編小説『大サルタン』は宮廷書店では次の見本市で第一小巻しか出版されない。我々の大方の長編小説を読んだり作ったりする未成年の読者にとって、私はエーフェルの『大サルタン』はほんの少し見ただけであるが、その中での大抵の登場人物は、人々がいずれにせよ毎週自分の周囲に有していて、自分達同様によく承知している惨めな本当の世界から取り出されたものではなく、大方は絵空事で、この思いに耽る長編作家の兵器庫、苗圃からのものであると聞くのは心地よいものであろう。というのは（播種の体系に従って）現実の人間の芽が花々の花粉と共に大気中に飛び回っていて、後世の貯蔵庫たる大気中から父親達によって沈殿させられ飲み込まれなければならないとすると、作家達は更にそれ以上に人間のスケッチを、現実の事柄のすべてのエピクロス派的落葉が舞っている大気中から[絵空事から]、自分の許に取り寄せ、紙上で鍛錬しなければならないし、そして読者が文句を言わないようにしなければならないからである。

原物[モデル]が自分の模写を持って行こうと思ったとき、数日フォン・ブーゼ夫人とは面会できなかった。ようやくこの両者は招待された。彼の顔は、彼の視線が参上のとき、幼いブーゼ[カルラ]と一緒にピアノの許で歌っていた自分の人相上の妹、つまりベアータを認めたとき、描かれた絵の自分とはとても似ていないものとなった。我々大きな幹の木々[系統樹]の許ではなく、大きな藪で育った哀れな輩は、四つの壁の中で互いに間近な風であって、互いに心が温かい。これに対し偉いさんのピロード張りの壁では中の住民は市壁同様に隔離されることになって、旅館の部屋にいるようなもので、我々の関心がただ数人を全体の山から分離するのみである。従ってベアータは続けていて、彼は始めた。彼にとってはあたかも庭園の中の彼女を窓越しに見ているかのように思われた。彼の肖像画は最も好意的な批評の女性を見いだした。彼女はそれを持って数室を飛んで行った。そこでグスタフは自分の目を、自分の耳がすでに傾けていた所へ向けることができた。彼の唯一の願いは、その女子生徒がとても愚かで全部間違っただけで歌えばいいというもので、それは単に魅力的なソプラノ歌手[ベアータ]がよく手本として歌ってくれたらいいという思いからであった。それはルスト[Rust, 1739-96]のかの神々しい「私の心の偶像」で、これを聞くと私や私の知人はいつも、あたかもイタリアの生暖かい天に飲み込まれ、音色の波で溶かされ、星空の下、私どもと一緒に一つのゴンドラで行くマドンナによって一つの息として吸入されるかのように思われるのであった。...このような致命的空想を抱いて私は実際すべての真実のストア主義を打ち砕かれ、三十歳前というのにまだ十八歳となるのである。

それだけ容易に私は、目と耳がかくも間近に磁氣的太陽の許にある若いグスタフがどんな気分であったか察しが付くのである。まことに千回もむしろ私は（私は私の挑戦をまこ

とに良く承知している) シェーラウ侯国で最も美しい美女と一緒にこの全侯国を通って行き、この美女を馬車の中に入れるだけでなく、(はるかに有害なことであるが) 馬車から降ろそうとするであろう。— 更に、私はむしろ彼女に、我々が詩的分野や長編小説の分野で有する最良のものを感動して朗読することにするだろう。— あるいはむしろ彼女と一緒に仮装舞踏会から仮装舞踏会へと巡り、座ることになったら、楽しいかと尋ねることだろう。— 最後に(これ以上強く表現はできないが)、むしろ私はドクトル帽を被って、彼女の疲れた手を私の手で瀉血台に結んで、彼女が、雪のような腕の上の血のアーチを見ないようにするために、絶えず青ざめながらも、私の目を見つめるようにすることだろう。

— むしろ、約束するが、私は(私が勿論カレンダーの瀉血人形図よりも多くの広い傷を受けることになっても) 何でもすることだろう。この美女が歌うのを耳にするくらいならば。耳にしたら私は漏水し、消えてしまうことだろう。彼女が最も静かな姿勢で、右の雪のような腕を柔らかく何か黒いものの上に降らして、薔薇の唇の蕾みを半ば離して閉じて、溶けて行く目を彼女の。— 想いに沈め、その中に閉じ込めて、柔らかな和毛の胸が^{*原注1}波打ちながら白い薔薇の花弁のように呼吸の波に横たわっていて、それと一緒に上下して流れ、彼女の魂が、普段は言葉と肉体と衣装の三重の覆いの中に投げ込まれているのに、すべての覆いから身もだえて、音色の波に乗って、憧れの海の中で沈んで行くとき、誰が私を助けてくれよう、誰が私の遭難号砲を聞いてくれよう。...私は後を追って飛び込むことだろう。 — — —

グスタフは弁理公使夫人が二つの肖像画を持って戻ってきたとき、まだ追って飛び込む準備のところであった。「どちらがもっと似ている」と彼女はベアータに言って、彼女に二つを呈示して、その目を、比較されるべき三つの顔には据えず、単に比較している[ベアータの]顔に据えた。つまり一緒に来た絵の顔は本当の兄の行方不明のもので、それはベアータが私のフィリッピーネに問い合わせさせて書いていたものであった。「おや私の兄」と彼女は余りに多くの動揺と抑揚とを添えて言った(これはピアノの許から来たばかりであるという点で許されるべきことである)。すばやく絵を捉えながら長いこと彼女は驚いていたが、視線が自ずと絵の背面に滑り落ちて、そこに名前が書かれていないのを認めた。人間の心臓の鼓動はこのような現世の塵にかかっている。人生の雰囲気全体のツェントナーの重さの圧力に心臓は耐え、持ち上げるが、しかし社交上の当惑という重苦しい息遣いの許ではそれは力なく瓦解してしまう。自分の頭をどこに向けたらいいか分からない人の方がしばしば、自分の手をどこに置いたらいいか分からない人よりも苦痛は少ない。

「貴女のお兄さんは貴女の遠い親戚と思っていました」と弁理公使夫人はひよっとしたら意地悪く二枚舌的に言って、彼女を何らかの意味の選択に巻き込もうとした。勿論弁理公使夫人はすべての言葉や観念、部分をととても敏捷に意のままにしている、ベアータやグスタフの分別や徳操にある力をもってしても、力学の場合のように、速度の代わりをなすのにほとんど十分ではなかった。しかしベアータは詫びもせず、飛躍もせず、沈着にこれ

*原注 1 というのは周知のように男性の胸ははるかにより固く、屈しないもので、時々その胸で囲まれるものに似ている。— 奇妙なのは、両親達が、娘達に朗読することは許さない事柄をすべての感情を込めて歌うのを許すという点である。

らの絵についての一切を語った。この一切は読者が私の口から知っていることである。グスタフはこのような話を供することはできなかつたであろう。これが弁理公使夫人の手に入った次第を話すことを夫人は忘れていた。百もの返事の術を心得ていたからである。ベアータはそのことをまさに察知していたので、夫人に要求することを忘れていた。

「貴方の顔の御礼には」 — と彼女は、他人なら真面目に魅力について語るものだが、自分の魅力の美点を遠慮なく語るときの極めて陽気な調子で言った、「私自身の顔しか差し上げられません。この顔をザクセンの私の兄に庭園と共に送らなければなりません。 — これを公園に添えて描けば、両方とも一人の名手の手になるわけです」。冗談めいた調子に対して拒絶するのは真面目な調子に対して拒絶するよりも難しい。 — せいぜいまた冗談めいてするだけである。しかしこの冗談めいた調子にはグスタフのすべての弦が切れていた。ベアータは公園の当てこすりが理解できなかった。ブーゼ夫人は風景のスケッチ全体を持って来て、何が最も気に入るか彼女に尋ねた。ベアータは<影の国>と<夕方の谷>に賛同した（何故「隠者の山」を除いたのか）。「でも庭園の人々は」 — と彼女は続けた（哀れな被告人女性はその静かな視線をより堅固に<夕方の谷>に釘付けにした）。 — 「特にこの夕方の谷の美しいヴィーナスはどうですか」。 — 彼女はとうとう話さざるを得ず、屈託なく言った。「彫刻家は画家には文句は言わないでしょう、でもひょっとしたら画家の方は彫刻家に文句があるかもしれません。ひょっとしたら単に冬のせいでこのヴィーナスは少し傷んだのかもしれませんが」。弁理公使夫人はその高笑いと共にグスタフへの機知的視線とで洒落をなして、ベアータを少しばかり赤くさせ、彼を真っ赤にさせ、ベアータを洒落でますます赤くさせ、遂にはこんな返事までした。「私の兄もそんなヴィーナスを見たら、そう思うことでしょう。でも愛しいベアータ、お願いだから画家様のモデルになってください。そうすれば私どもの公園でもっと美しいヴィーナスが生ずることでしょう。真面目な話です。私どもの顔に次の二日間の朝に取りかかってください、フォン・ファルケンベルク殿」。善良なベアータは黙っていた。自分の筆でブーゼ夫人の顔を二重化することにグスタフは同意していたが、ベアータの顔は自分の顔では模写できないと気付いてすんでのところ、口に発するところであった。幸い彼女は食事に現れるであろうと思い付いた。 — （一週間後の日曜日は私は私の扇形を「というの

は」で始めなければならない —）。

第二十九扇形、あるいは第二十二の聖三位一体祭の扇形 大臣夫人とその失神 — 等々

というのは彼はシェーラウの最も美しい者達を包み込んだかの緑のドーム、つまりブーゼ夫人の部屋にただ午前中だけいたからである。午後とその後ではその部屋を通じて、享樂の奔流が歓喜のナーイアス[泉のニンフ]の喜びの杯からこぼれ出て、ざわめくことになった。廷臣の半ばがシェーラウからやって来た。周知のようにこの人々は、民衆は単に安息日だけを有するというのに、ただ安息の年月だけを有していて、侯爵により近しい従者達は国家の従僕達とは何も働かないということで際立つことになるようにして、かくてすでに古代でも神々にはまだ働いたことのない動物のみが祭壇に捧げられたのであった。私はまことに良く承知しているが、一人以上の者が麻痺性の偉い世界では仕事を要求

されている。つまり自分や他の者達を絶えず楽しませるといふ仕事である。しかしこれは実にヘルクレス的に[超人的に]難しいことで、全力を使い果たしてしまうもので、皆が宴の後、朝に別れる際とかその翌日に、偽ってこう言えると十分である。「誓って昨日は美味しい夕べで、そもそもすべてが素晴らしかった」と。偉大な四つ折り判の神学者達は夙に、アダムは墮落前[樂園追放前]、食事や他の享樂からは何の享樂も汲み取っていなかったと証明している。 — 我々の偉いさん達も墮落前は同様にひどくて、無邪気に、何の楽しみも感ぜずに、すべてを果たしているのである。私は廷臣の役に立てればと切に願う。

—

確定した仕事時間を（たとえそれが単に三十分間であっても）有している人間は、まさに今日十二時間の課題があつて、三十分間中断した者よりも、自分をより勤勉であると見なすものである。エーフェルは自らの過度の緊張を非難してこう言った。自分は毎朝丸一時間『大サルタン』に取りかかるがこのことをどう詫びていいか分からない、と。それが済むと一日の真面目な仕事は終わるのだった。そこで初めて調髪して貰い、髪粉をかけて貰って、日中の蝶としてすべての化粧鏡へ舞って行った。失神女性（そう更に大臣夫人は呼ばれていた）の花の頭に彼は舞い落ちた。それから二度目の調髪をして、舞い上がり、髪粉をかけられた黄昏の蝶、夜の蝶[蛾]として賭博のチップや見本料理やその似姿達の間をぶんぶん飛び回った。彼の角のある、一つのカプセルに収まる夕方の髪が夜の蝶[蛾]の青虫へと、同様に尻に角と弁髪を有する青虫へと私を導くことがなければ、私はこの比喩に思い至らなかつたことだろう。 — 日中の青虫は何も有しない。丁度彼の短縮されてまとめられた朝の髪が、日中の青虫[蝶となる]に似るべき次第になっているようなものである。

私は大臣夫人を失神女性と呼び、あたかも彼女は公使館参事官[エーフェル]を彼が彼女を信頼するよりももっと信頼しているかのごとく、そもそも彼女の単純さは信頼されてきたので、私はすべてのことを打ち明け、彼女のために弁明したい。彼を狭小な国母の如く支配していた虚栄心が、彼女に対しては狭小でない[無制限の]国母の如く支配していた。

— 彼女はイタリアの詩やエピグラム、すべての美しい芸術作品を有し、作っていた — 彼女は、自分が美しい自然であることを止めたので、自らを美しい芸術作品の下に投じて、自らを一つのモデルから化粧を通じて一つの絵へと高貴化し、パントマイムによって一人の女優へと、失神によって一つの彫像へと高貴化したということは町中に知られていた。

最後のことが眼目である。 — 彼女は週ごとにたびたび死んだ。真のキリスト教徒のすべての女性の如く、貞潔のせいではなく、それどころか貞潔を守るためで、つまり二、三分のことだった。 — 彼女とその徳操は交互に失神した。このようなことについて冗長に語らないとすれば、私はペンを仕立てるに値しない。悪魔に私の作品は掠られるのがいいのである。 — 従って徳操は大臣夫人の場合とても困ったもので、子供の許の幼い愛猫のようなものだったのである。一日の時間[朝、夕]のことは話そうとは思わない。単に週の日々について話したい。賭けてもいいが、毎日名刺の代わりに彼女の徳操の別人の反キリスト教徒男性、不倶戴天の敵の男性がその肉体を贈ったとするならば、次のような次第になることだろう。月曜日は v.A 氏に対して光のない新月であった — 火曜日は v.B 氏に対して満月であった。彼はこう言った、「彼女とある信心深い女性との

間には年齢の違いしかない」と。 — 水曜日には v.C 氏に対して下弦の月であった。彼はこう言った、「私はすでに触れた」、つまり彼女の魂に触れた、と。 — 木曜日 v.D 氏に対して上弦の月であった。彼はこう言った、「ひょっとしたらこのように」 — そのように週の他の敵達は遇された。というのはどの敵も、自分自身の虹のように彼女の許で自らの徳操を見いだしたからである。名誉と徳操は彼女の許では空虚な言葉ではなく、（全くカント派に対抗して）自分の拒否と自分の肯定との間の時間の空隙、いやしばしば空間の空隙の謂であったのである。私は先に、彼女は、彼女の徳操の月の日[月曜日]が来たら、いつも失神したと述べた。しかしこれは説明が付く。彼女の肉体と彼女の徳操は一日に一人の母親から生まれており、カストルとポルックスの兄弟のように真の双生児なのである。 — さて、先の肉体は、カストルのように、人間的で、死すべき定めであり、別の方の徳操は、ポルックスのように、神的で、不死である。 — かくて、かの神話的両兄弟は抜け目ないことをして、互いに死すべき定めと不死とを半分に分け合って、社交の中では互いに一定期間死に、また一定期間生きるようにしているように、そのような具合に彼女の肉体と彼女の徳操も同様に策謀的で、いつも両者は互いに死んでは、その後で互いにまた生きるようにしている。 — このようなレディー達の芸人的死は別の側面からも観照され得る。このような女性は自分の徳操の強度や試練に対して、失神に至るまでのある喜びを感じ得るのである。更にはこの徳操の受難や敗北に対して、これまた失神に達せるまでのある悲しみを感じ得る。かくて人々はこう考えるべきであろう。二つの感情の動揺、その一つのそれだけでも殺し得るようなそのような動揺の一致した発作の際、一人の女性はなおも立っておれるものであろうか、と。 — 周知のように世間のレディー達の名誉はフランスの国王の名誉のようにほとんど死することはない。これは周知の虚構である。少なくともこの名誉にとって死は、敬虔な者達にとってそうであるように、一つの眠りであり、これは十二時間を越えるものではない。私は我々の宮廷で、ポリープのように何の原因でも死ぬことのない一種の名誉や徳操を知っている。それは、古代の神々のように、傷付くことはあるが、死んでしまうことはない。 — クワガタ虫のようにそれは針の許でばたばたしても、何の栄養もなくとも生き続ける。 — 身分ある自然科学者達はしばしばこのような徳操に対して、フォンターナが滴虫類に対してするように千もの拷問を加える。これに遭うと市民階級の女性の徳操はすぐに息を引き取るものである。しかしそんなことはない。死については考えられない。 — まさにより高貴なレディー達の中では徳操はこのようなアキレス的な生命力、再生力を有していて、徳操がまずはより容易に単純で二重の骨折、骨の剥片化や肢体切断、そもそもかの身分の戦場というものに耐えられるようにしているのは自然の好意的な摂理である。 — 第二にかのレディー達が（自分達の徳操の不死と長い生命線を信頼して）その身体的境界はいずれにせよとても狭小な自分達の喜びに、少なくとも何ら倫理的な境界を設置する必要がないようにしていることも上述の好意的摂理である。

私は大臣夫人の徳操的な失神、あるいはエロチックな死に話を戻す。しかし私は例えばこう言っていると頑固に主張するつもりはない。昔の哲学が死ぬことを学ぶ技法であるように、フランスの宮廷哲学もそうであるが、ただもっと快適なものであるとか — あるいは、機知的にこう言える、つまり死に方を知っている者は強制されない、とか — あるいはカトーについてのセネカの言葉を引用して、死は最初のときよりも、もっと大きな

勇気で繰り返されると主張するつもりではなく、一単に何故彼女は上部シェーラウのいたるところで失神女性と呼ばれるのか語りただけで、一単にこうなのである。つまり彼女が重要な裁判に対して怠った権利除斥にもかかわらず勝利するにはどうしたらいいかという質問に対してある紳士がこう答えたからである、欠席[失神]によって、と。

閑話休題。...時間が腰を落ち着けて、私を近付くようにさせたら、私は幸運な男と言えよう。しかし時間に対して私は、数ヵ月離れて遅れている。アヴァンチュールの積み荷は日々重くなって行く。私は二重の話一今書かれている話と、今生じている話のための紙を私は準備しなければならない。仕舞いには私は苦労して読まれることになるろう一私は大丈夫だろうか。一一

当時アマンドゥスは世の中で最も固いベッドに寝ていた一古代の僧侶達の茨のマットや石のマットはこれに比べれば毛綿鴨の綿毛のように感じられよう。一病床にあったのである。彼の荒れた目はしばしば部屋のドアに留まっていた。グスタフが開けるのではないかと、死が喜びの形をして、和解の形をして入って来て、彼の人生の花が愛の圧力で穏やかに散るのではないかと、一しかしグスタフは自分の方では魔法のベッドに寝ていて、そこに彼をヴルカンより良き或る神が目に見えない鎖で縛っていた。彼はその針金細工の下でほとんど動けなかった。

弁理公使夫人に肖像画を持って訪問しようとして彼が準備している時の朝、エーフェルが彼に多くの機知の花火を点火して、彼に満足げに直にこう告白した。この満足げというのは一文士が自分の肉体的財の貧しさと精神的財、分別等々のより劣等な貧しさに耐えているときのものであるが、自分はグスタフの許で一弁理公使夫人への愛着をひよっとしたらこのご兩人自身よりも早く発見した、と。グスタフの拒絶はすべて、彼の勝利の月桂冠の新しい葉となった。「もっと率直に話そう」と彼は言った、「私自身のことを暴露しよう。他に暴露する人はいないので。貴方が崇める祭壇を有する部屋には、私が崇める祭壇もある。それでパンテオンとなっている。^{*原注1} 貴方は女神よりは男神の前で跪いている。

一私はしかし我がヴィーナス（ベアータ）を見いだしている。メディチ家のヴィーナスたるには一姿勢が欠けているだけである。しかしこの姿勢のときどきの手には自分は接吻することになるか分からない」。...グスタフの純な魂の前を幸い「パリの汚れ」のこの塊は飛び過ぎて行った。この汚れには諸宮廷では良き人間でさえためらうことなく足を踏み入れるものである。この汚れはこの地帯の作家達にすらなお付着している。

ベアータが（それにどの少女であれ）彼の気に入ったのは、自分が思うに彼女の気に入っているからに他ならなかった。地上の五億人の女達を皆彼は、自分が彼女達すべての気に入っているならば、愛することだろう。自分が誰一人として女性の気に入ってなければ、自分もまた誰一人として女性を愛さないことだろう。エーフェルは今やグスタフに、冬のベアータの心の家でどの窓を通じて自分への彼女の愛が花咲くのを見たか語った。私がライブツィヒで知り合った或る阿呆の他に、九生を生きるという猫の他に、彼ほど多くの生を有する人間はいなかった。一彼は一つの生を喪失すると、するとすぐにまた新しい生を有したのである。つまり彼は他人が警句を思い付くより多くの失神を有していた。

*原注1 ローマのパンテオンはただ二人の神が立っている。マルス[軍神]とヴィーナスである。

彼はその気になれば、そして感動的な劇場付き作家として自分のドラマの中でそれが必要となれば、このような紛らわしい自殺を行うことができた。彼とライブツイヒの阿呆は、束となる女性達の下で、自分達に最も惚れている女性を選んで調べなければならないとなると、この死を最も頻繁に比喻で行った。というのはこの両阿呆達の言い草では、女性達は皆互いにこの両失神者達に対する愛の存在では区別できず、その愛の段階で区別されるからである。パントマイムの発作に対する最大の恐怖こそが、この失神者の両人が言うには、最大の愛という公証人の封印である。かくてエーフェルは三週間前、ベアータにその探りの死を演じて見せたのであるが、居合わせたすべての三角形ショールの中で、彼女の心ほど優しく同情心の強い心が震えることはなかった。この心はまだ他人の詐術も自らの厳しさも知らなかったのである。無造作にエーフェルは光学的死に入って横になった。惚れて彼はまた立ち上がった。彼はすんでのところ、その見せかけの失神で本当の失神を引き起こしたことであろう。「ただそれ以来彼女にはそのことを話せなくなった」と彼は言った。グスタフはエーフェルの感情の欠けた虚栄心についてではなく、自分自身とエーフェルの幸運に大きな溜め息を付いて戦った。「ベアータよ、この胸に」 — と彼は内奥の彼女に語りかけた — 「あなたが臍頂にしている心よりももっと黙した、もっと正しい心を見いだしていただろうに — その心は、今溜め息を秘しているように、自分の幸運を秘していたことだろう — その心はあなたに永遠に忠実であつたらう — いやそれでも現に忠実でいるつもりだ」。 — それでも彼はエーフェルの虚栄心に反吐の思いを完全には感じなかった。友人というものは我々の心にとても接ぎ木されていて、生長しているので、我々は友の虚栄心を自身の虚栄心同様に易々とそして同じ理由で見過ごしてしまうからである。

私のグスタフは本の中でも実人生でも同じ具合なので、次の見解を前もって述べておくべきであろう。彼ほど容易に誤解される者はいなかった。 — 彼の魂のすべての光線を穏やかな謙虚さの雲の覆いが屈折させた。いや、エーフェルが彼に対して顔への気位を非難して以来、現にそうであるように、まさしく謙虚に見えるように努めていた。 — 彼の外見は、静かで、単純で、愛に溢れ、要求がましくなかった。しかしまた機知や諧謔が発せられることもなかった。空想と分別は彼の中で、孤独な神殿の中でのように、大きな尺度で祭壇画を加工し、それ故他の人々のように、舌によって嗅ぎ煙草入れの絵やメダルを描かせることはなかった。 — 彼はデカルトが地球についてそう思ったように、皮殻で覆われた太陽であった。 — しかし宮廷の燐光を発する明かりの下では暗い土塊であった。

— 彼はオットマルとは外見上反対であった。オットマルはその太陽で自分の皮殻を燃やし尽くして、今や人々の前に稲光しながら、ぱちぱちいいながら、燃えるように、引き裂きながら、灰に焼き尽くすように、孵化するように立っていた。 — グスタフの魂は嵐のない中庸の国で、太陽の暑さのない太陽の明かりに満ちて、全く緑や蕾みに覆われていて、秋の魔術的なイタリアという風であった。しかしオットマルの魂は極地の国で、焦がすような長い日々と、長い氷の夜、ハリケーン、氷の山々、それにテンペの谷風の充実の中をさすらっていた。 — —

従ってグスタフの謙虚さにとっては、ベアータが、自分の精神と肉体を上手に見せる術を知っている人物[エーフェル]を、この二つのことができないうし、その上かつてその父親を怒らせて半分死ぬ思いにさせた彼[グスタフ]より上位に置いたことほど自然に思えるこ

とはなかった。それ故、彼が弁理公使夫人の許へ忍んで行くとき、彼の血はゆっくりと悲しげに巡った。あたかも彼は今日彼女を恋人として見つめることができるかのように思われた。 — 彼女がその上、同じように悲しそうな表情と顔つきで向かってきて、一人の女性が自分の恋人を失って一週間ほど空ろな目をし、冷え切った両頬としていて、最も感動的な状態にあるときの顔に似ていたので、彼は実際半ばそのような思いであった。今日は自分の一番下の弟の命日で、自分はその弟を最も愛し、弟は自分を最も愛していたと彼女は言った。彼女は喪服で描かせた。とにかく苦悶を半ば抱いている陽気な者ほど強く働きかける者はいない。グスタフはそもそも、その耳に何らかの喪失の弔鐘が反響している人間には多すぎるほどの好意を抱いていた。不幸な者は彼にとって徳操のある者であった。弁理公使夫人は彼に言った。彼が今日彼女の現実の顔からは苦悶を除いて描き、苦悶を単に描かれた顔へと清めてくれるよう希望する。 — そのためにこの気散じを今日に持ってきたのだ — 明日はきつともっと良くなることだろう、と。 — 彼女は投げやりにならずにただ右手だけで若干の踊りをし、ただ二、三拍だけであって、悲しい気分を追いやりようとしたが、無駄であった。 — 彼は始める前に彼女に何かを話して、彼が、年に数日間浮かべるだけの顔に彼の絵で永遠の生命を付与することのないよう、頼まれた。しかし彼はまだ宮廷で話す材料もやり方も持ち合わせていなかった。 — 最後に彼女は彼の地下の教育を思い付いた。ただ今日の彼女の顔に対してだけ、彼は、アマンドゥスの不機嫌以来自分に欠けていた心情吐露という突然の豪雨の何事かを語ることができた。彼が話し終わると、彼女は言った、「描いてください。貴方は何か別なことをお話すべきでしたね」。

彼女は小さなラウラを腕の上に抱いていた — 熱心な動物画家の侯爵に対しては彼女は小さな娘の代わりに、ボロニーズ[愛玩犬]と一緒にモデルとならなければならなかった。

— しかし何という組み合わせが、今や彼の目、彼の心、彼の口に向かってきて、この三つのものを狂わせたことか。これらは皆少なくとも震えた。一方母親はラウラの小さな両手を絵画的に子供らしく絡ませるようにした。 — 彼女は黙って、悲しげに、目の苦悶に対して両唇で抗しながら、思いに耽って彼の目を覗き、近くの手では幼い娘の髪の毛を戯れて曲げていた。 — まことに十度も彼は考えた。天使が肉体を借用したいとき、人間的肉体は悪くならろう、天使はこの旅の制服でならどの太陽にでも出現できよう、と。

彼のスケッチはとてもの的確であったので、弁理公使夫人にとってはひょっとしたら二、三似ていない部分があればもっと好ましかったであろう。 — それらは彼の中の彼女の二番目の像とのより大きな類似点を告げていたかもしれない。彼女は今や普通の冗談めいた跳ねるような話し方ではなく、穏やかな話し方で、彼の画家の報酬や彼の教育の欠点から彼の使節職への準備へ移って行った。 — 彼女は彼に、ゆっくりと打ち解けた手で、世俗的なものへの彼の不足を明らかにし、 — 自分の許への出入りの許可を申し出、彼を明日の晩餐会へ招待した。 — 「でも午前中は」と彼女は微笑みながら付け加えた、「貴方はきつと来られないことでしょう。ベアータは描いて貰う気がないのです」。

— 読者は本全体の中でまだ三言も話したり書いたりすることが許されなかった。今や私は読者を面会格子の許に、あるいは談話室に來させて、その質問を模して書くことにしよう。「一体何を」と — 読者は尋ねる — 「弁理公使夫人は計画しているのか。彼女は、何らかの未知の機械に嵌めてしまう刻み目の付いた歯車をグスタフから作り出す

つもりなのか。 — あるいは獵師小屋を作って、罟網を撚り合わし、彼を罟にかけ、捕らえるつもりなのか。 — 彼女はコケットな女性が皆そうであるように、自分に似ようとしない者に似ることになるのだろうか。丁度プラトナー[Platner, 1744-1818]によれば、人間は自分が感受するものにはなはだ近くなって、人間は花と共に屈み、岩と共に起き上がることになるようなものか」。

—— 読者は、読者自身ここでは機知的になっていることに気付くべきであろう、更に続けるがいい。 ——

「あるいは」（とかくて読者は続ける）「弁理公使夫人はこれほどのことはなくて、気高い心から、これに免じてしばしば彼女の媚態の視覚的芸術作品は許されるものだが、最も美しい最も非利己主義的理由から最も美しい最も非利己主義的な若者を探し求め、育て上げるつもりなのだろうか。 — それとも万事はすべて単なる偶然であろうか。 — その偶然の下へ彼女は、悦楽の森を駆ける女性として半ば計画の揺れる括り罟を逃げながら固定して、その人生で他日括り罟で絞め殺された獲物を少なくとも見ることもしないのであろうか。 — 私にはさっぱり分からない。 — それとも、親愛なる著者よ、私は全体間違っていて、ひょっとしたらこれらの可能性のすべてどれも本当ではないのだろうか。 — あるいは、親愛なる読者よ、それらは皆同時に真実である。君が気まぐれな女性を推察しないのは、君がその女性の矛盾よりは魅力に信を置いているからではないか。

— 読者の言で私の次の見解は強められる。偉いさんの世界で毎日ピアノのレッスンをさせる機会のない人々は（例えば残念ながらその他の点では立派な読者の方）、確かに或る性格のすべての可能性を前もって計算するが、しかし現実の場合を取り出すことができないという見解である。 — ちなみに読者は私を信用されたい（私は私自身の有する長所を小さく言う場合、理由がないわけではない）、ちなみに読者は、宮廷に欠けることのないある種の因習的な優美女神やある種の軽快な流行的有害な魅力女性に対して経験が浅いからといって遺憾に思う必要はなく、むしろ他の廷臣達が — 著者はその一人ではないことを願うが、このような有害な種族に本当に数多く遭遇していることをはるかに嘆くべきなのである。というのはこのようなやり方で読者殿、著者は正直で健康な男を保てたからである。しかし著者を知る者は、上流社会のすべての束縛や絆が彼の許でさっと引き抜かれた場合でも、著者の場合礼儀作法の輩との非類似性は保たれていたと保証してくれたことだろう。これらの者どもは女性への虐待を声を失ったり、ふくらはぎを失ったりして償うのである、丁度（最古の神学者達によれば）、女性の誘惑者の蛇が、以前は話すことができたのに、誘惑を行ったことで言葉と脚を失ったようなものである。

第三十扇形、あるいは第二十三の聖三位一体祭 晩餐会と家畜の鈴

今回私は鍛造工のようなシャツを着て、働いている。第三十の扇形はうんざりするほど長く、難しい。 — グスタフはエーフェルから弁理公使夫人の許の晩餐会是我々の許の最大の晩餐会のようなものと聞かされたので、彼は自分の頭の中で、その会を彩るために、人物や役割を分配して、自分に最も長い役割を割り当てた。 — 彼はようやく舞台上に上がって、演ずる段になると演じないという唯一の失敗をいつも犯した。大きな社交の

中に入って行く前に、彼は一語一語、自分の言いたいことを確かめていた。そこから出てきたとき、(書き割りでも)やはり自分の言うべきであったことは分かっていた。一しかしそこでは更に何も実際は言わないでいた。それは対人恐怖のせいではなかった。何か機知的なことより何か大胆なことを述べるのは彼にとってほとんど容易なことであったからである。これの由来は彼が女性の反対物であったことによる。女性というものは自分の中でよりも自分の外部で生きていて、女性の感じ取る蝸牛の魂はほとんど外部のその多彩な肉体貝殻の周りに鎮座していて、女性はその触糸、触角を決して内部へ引っ込めず、それでどの微風をも味わい、どの葉の周りにもその触糸を曲げて行く。一三言で言えば、医師のシュタール[Stahl, 1660-1734]がその肉体のすべての性質について魂のせいにしてしている触角は女性の場合とても生き生きしている。女性は絶えず、自分がどのように座っているか、立っているか、いかにこの上なく軽いリボンをつけているか、曲がった帽子の羽根飾りはどのような弧を描いているか感じているのである。一二言で言うと、女性の魂は肉体のすべての感受している部分の緊張を感じているばかりでなく、感受していない部分、毛髪や衣服の緊張をも感じているのである。一一言で言うと、女性の内部世界は外部世界の単なる大陸、模写にすぎないのである。

グスタフの場合は違う。彼の内部世界は外部世界とははるかに引き裂かれて立っていて、次々と別の世界へ移れず、外部世界は単に内部世界の衛星、遊星にすぎないのである。一帽子に覆われた脳・地球の中に閉じ込められた彼の魂の多彩で独自の作物は、その上で魂は安らぎ、自らを忘れていたのであるが、その肉体の向こう側の諸対象、つまり単に薄い影をその思考の沃野に投げかけている諸対象に対する眺望を妨げている。従って魂は外部世界を単に、魂が外部世界を思い出すときにのみ見るのである。すると外部世界は内部世界へ移され、変化する。要するにグスタフは単に、自分が考えるもののみを観察するのであり、自分が感受するものは見ない。それ故彼は決して自分の観念や言葉を他の人々の発し続けて行く観念や言葉と融合させる術を知らない。宮廷人はねじ開け、ねじで締める。宮廷人の機知の小滝は跳ね、微光を発する。一グスタフは、これに対し、まずバケツをつるべ井戸に投げ入れ、そこから時と共に水を汲み出そうとする。一私はより繊細な原因を次に述べることにする。

エーフェルは彼にこの重要な晩餐会の朝、大いにベアータを称えて、自分は今日彼女の心が弁理公使夫人のエスプリと釣り合うものであることを見ることになるだろうと言ったので、グスタフはすべての出会いが呪わしく思えて、自分の重たい心を「静かな国」へ運んで行く二番目の理由を得ることになった。一番目の理由はこうであった。自分はいつも前もって最大の社交へ、一つまり大きな青空の下へ行くことによって大きな社交の準備をしてきたというものである。この巨大な星空の下、無限の胸元で、人々はボタン穴の隣に縫い付けられた金属の星形勲章より崇高な感じを抱く術を学ぶ。地球の観察によって、人々が人間と呼ぶ地上の塵がほとんど舞うことのない思念を抱く。一作物世界がモザイク状に刺繍される多彩な黄金の昆虫は華やかな宮廷の黄金や宝石の刺繍に凌駕されることはなく、単に模倣されるだけである。一現著者はいつも小さなサークルへの訪問をする前後には大きな地球、天球への訪問をして、かくて大きなサークルが小さなサークルの印象から守り、その印象を消すようにしたものである。

私のグスタフがいかに頼りなく二つの控えの間を通過してサロンへと案内して貰ったかと

考えると私は赤面する。そこではすでに少なくとも七つの[トランプ]賭け台に闘士達が座っていた。思考様式の繊細さは素質であり、表現の繊細さは一つの果実で、このためには必ずしも宮廷庭師を必要としない。しかし外的礼儀作法の繊細さは、それが一切に妥当する所でしか得られない。ミクロコスモスに満ちた上流[大きな]世界である。人々が通常私の弁護士身分の許で求める以上にこの外的作法の繊細さの例を私が呈示できるとすれば、それがシェーラウ宮廷での私の生活から由来することに格別私は誇りを抱くものでない。

一 弁理公使夫人は(いずれにせよベアータは違う)賭はめったにしなかった。それも正当なことである。自分の顔で、カードに描かれた心とは別の心を得ることのできる女性、金属に刻印された頭部とは別の頭部を男達から受け取ることのできる女性は、実物よりもっと卑小なもので満足するとなるとよろしくないものである。私が女性の手袋や指輪の中でまだ見たこともないようなこれ以上ない美しい指でトランプを切ることができるような場合は別である。五十歳以前に女性は賭をすべきではない、五十歳以降では、単に夫や娘が賭に負けて手放すことになった女性だけであろう。一 これに対して詩的剣闘士のフォン・エーフェル氏は、軍に服務していて、これは(ファッション・ジャーナルによると)冬の夜のたびに前線のドイツ帝国圏では一万二千の人員であって 一 つまりロンブル[トランプ]賭博者同志となって服務していた。弁理公使夫人は輝かしい太陽で、いつもベアータを宵の明星として従えていた。天の穏やかな優しいヘスペルスよ。御身は御身の光線の銀箔を我らの地上の葉に投げかけ、御身のように穏やかな魅惑に対する我々の心をこっそりと開ける。私の目が夢想と思い出の中で御身の、私の上に高められた無垢の沃野で過ごしたすべての夏の夕べに対して、私は御身を美しいベアータのイメージにまとめて、御身に報いたい。天の青いエーテルの桔梗の中の銀鍍金の最も美しい露の雫よ。一 私が彼女の聖なる姿を私の心から取り上げ、ここの私の紙上に置くことができるといいのだが。読者が単に理解するばかりでなく、察するようにするためである。つまりすべての女性的魅力のこぼれ出るユーノー風のブーゼ夫人から、稀な非利己的なものでさえ、ブーゼ夫人の横にベアータが姿を見せるというよりは姿を隠すと、ブーゼ夫人からこうしたすべての木製の輝きは落下してしまうが、しかし無垢とか女性的謙虚な控え目というものは落下しないという次第を察するようにするためである。ベアータは極めて激しい女性的願望に対して内的勝利を収めていて、それでいて勝利も戦いも漏らしていない。一 ベアータは、ブーゼ夫人の悲しみの外皮や悲劇の戯れなしに、汝に軟化した心を与え、汝の視線を抗いがたく支配して 一 ベアータと一緒に汝は、彼女と地上の夜景を大いに享受しながら、月光の中を歩んで行くことができる。一 グスタフは私以上に感じていた。そして私はいつも私の音楽的レッスンの時に感ずる以上に私の伝記執筆の時にまた感じている。 一

いずれそのうち、食事のとき、他の客人のことも染め上げよう。グスタフの感覚も観念も麻痺させる社交の喧噪の中で、勿論ただベアータの半ば太陽の像だけが彼の魂に落ちてきた。しかしこれは勿論後回し。まずは二人は弁理公使夫人と共に窓のアーチの下にいて、夫人は皮肉そうに、彼が今日絵筆を持って来られなかったことをベアータの前でグスタフに詫びた。一 偶然口を挿んでくる多くの者達のことは言うまでもない。弁理公使夫人が去って行った。二人は間近に二人っきりでいたので、話を強いられ、ベアータは留まっていた。会話の前にすでに頭の中で、何を言うつもりであるか考えていたグスタフは、何

も言わなかった。しかしベアータはスケッチについての先の会話を終わらせてこう言った。「貴方がすでにお許しになっていないのであれば、私は私を許しませんわ」。多弁の別の男ならばすぐに「いや許さない」と言って、それも冗談で言って、当惑を招かず、哀れな蜂鳥の周りに鳥蜘蛛の糸を絡ませていたことだろう。 — グスタフは余りに強い感情を抱いていて、ここで冗談を言えなかった。どんな操作も頓挫してしまうような大量の重たい素材の許では、冗談という素材だけが揺れることがなく、君達はそれで支配できよう、殊に娘達と窓のアーチの下で話しているとき有効である。

グスタフはベアータに対して、かつて穀物の件で見せてしまった自分の魂とは別の面を見せようと長いこと機会を探していた。公園が大方の飾りと共に窓の前に広がっていなければ、手段とてなかったであろうが、今やその機会が得られそうであった。とにかく自然の美しさが、別の美[人]達と夢中になって熱を帯びて語ることが出来る唯一の事柄であった。 — 彼は、自分が地下から高い天体に足を踏み入れた際のことを語るとき、最も新鮮にすべてのこの世の魅力を一つの朝に圧縮することができた。彼が述べ、彼女が返す一言一言に、またイメージごとに、二人が互いに信頼していた一つの魂が刻印されていた。突然彼は見開かれた輝くような目と共に黙した。 — あたかも彼の魂の中で魔法の月が昇るかのように、そして幼年時代の天使が花の国に立っていて、彼を自分の両腕に抱え、彼をととても抱きしめるので、彼の心が溶け去るかのように思われた。...この内的風景画は何に安らっていたか。 — 有名なシュトラースブルクの時計仕掛けの安らっているもの

— 或る動物の首で、つまりこれはペガサスのうなじに安らっているが、彼のはたまたま館の前を通過して家に帰る放牧の家畜の首が運んでいた。即ちこれらにはレギーナの家畜の許に似た音を出す鈴を付けていたのであり、従ってこの鈴はその音色と共に青春の場面をすべてまた彼の魂の中に置いたのである。...このような気分であれば、彼は国民立法会議でも演説したことだろう。二人を包んでいた喧噪はまた二人をより一層二人っきりにし、親密にさせた。要するに彼は熱くなって史実の省略をして、山上での一頭の子羊との牧人生活を彼女に語った。 — この熱中は彼女に（どんな熱中であれすべての女性に対してそうするように）はなはだ伝染して、彼女は — 沈黙し始めた。

二人はやむを得ず、今や自分達の合流する魂の間に（侯爵の新床に剣を置くように）外的対象を置くことになった。 — 彼らは二人の庭師の子供達を見下ろすことになった。それもとても熱心に見つめることになって、二人は何も見えていなかった。少年が言った。「僕はお嬢さん（ベアータ）がとても好きだ」、そして両腕を突き出した。 — 少女は言った、「私は若殿様（グスタフ）がとても好き、お館ほど大好き」。 — 「僕は」と少年は答えた、「庭園ほど大好き」 — 「私は」と少女は抗弁した、「全世界ほど好き」。それ以上に少年の翼は広がることはできなかった、その尾羽は演壇の巣から突き出たのであるが。二人はそれぞれ、上でお互いの称賛を聞いて喜んでいる聞き手から貰った愛の印について数え上げ、その品のたびに言った。「あんたは貰ったの」。 —

子供達が新しい遊びに移るときのあの性急さで少女は言った。「今度はあなたは若殿様（グスタフ）になりなさい、私はお嬢様（ベアータ）になるから。まず私があなたを大好きになるから、その後ではあなたが私を大好きになるのよ」。彼女は少年の頬を優しく撫で、それから眉毛、最後に両腕を撫で、若殿様を扱った。「今度は私をして」と彼女はすばやく両腕を垂らして言った。少年は両腕を少女の首筋に絡めて、両肘が互いに交錯して、

巻き付き、愛の結節の上に余計なりボンとして突き出たとき、少年は少女を荒っぽく接吻した。突然少女の批判的やすりがこの物語的芝居に忌々しい時代錯誤を見いだして、彼女は尋ねるように言った。「いや若殿様とお嬢様は互いに好きではないのでは」。

これは上の正面栈敷の者達にとっては十分すぎるものであった。二人は同時に小さな演技者達の聞き手であり、モデル[原物]であって、その演技者達のコピーとなる怖れがあった。グスタフは瞼を強引に開け放って、目の中に溜まっていた涙が両頬を目立って落ちる流れとならないようにしていた。 — そして感動したベアータは、意図してか意図なしにか、彼女の薔薇を折れたまま床に舞い落ちさせていた。彼女は薔薇の方に長いこと背をかがめて、涙をこっそりと見られぬように落とした。彼が薔薇を返し、両者がおずおずと薔薇に向けた目を隠すように据えて、一人の飛び込んだ阿呆が二人の邪魔をしたとき、突然両者の見開かれた目が、沈む夕陽に対する昇る満月のように向かい合って、互いに沈み込み、そして何とも言えない優しさの一瞬間、彼らの魂は互いに求め合っていたことを察した。

飛び込んで来た阿呆はエーフェルで、彼はベアータを食事の広間に案内しようと彼女の腕を掴もうとした。読者よ、今私は生きた薔薇（我らの魂のカップルのような）の代わりにただバターで煮られた薔薇を献上しよう。思うに二十六、七人用のセットがあった。ここでは料理メニューの代わりに客人の通行記録を仕上がることにしよう。第一にこの館の食卓にいたのは、二人の貞潔な人間 — ベアータとグスタフであった。これは美しい魂はどの地でも、最も高い地でも育つという一つの証明である。かくてヨーゼフ皇帝は、何羽かの小夜啼鳥を毎年アウガルテンに放って、啼き声が若干聞こえるようにした。

第二番は侯爵で、彼はその短い生涯で、間近に雄牛のアピスよりも多くの女達を目にした。その雄牛の生涯はエジプトのアルファベットほど長いものであった。彼はこの食卓では、その旅の途次幾多の定食時にそうはなれなかったもの、つまり弁舌の同志、中心的風であり、六十三もの副次的風を従えていた。すべてのレディーが彼の王冠を被っていた。

第三番は彼の年金生活の弟で、王座の兄に憎まれていた者であった。それはこの弟が余りに多くの民衆の愛を得ているとか、その愛に値していたからではなく、かつて重篤な病に罹りながら、死ぬことはなく、年金で生きていたからである。この弟の骸骨を見たら、侯爵は、エジプト人やギリシア人が骸骨を見るたびにそうであったように、饗宴への喜ばしい享樂へ説得されていたことだろう。

第四番はスパー出身のミカエリス教団の騎士（v.D 氏）で、その教団の星形勲章はシェーラウではまだ輝きを放っていた。パリでは夙に消滅していたのであるが。かくてオイラー[Euler, 1707-83]は、天のある恒星はその距離のせいで、その恒星が夙に灰と化していても、その輝きを送り続けることができると述べている。

第五番はカリオストロ[Cagliostro, 1743-1795]で、彼は多くの鋭い頭脳達の許で医師や幽霊や弁護士達の運命を有していた、それで彼の公然たる嘲笑家達は同時に彼の内密の弟子や依頼人なのであった。第六番は私の領主裁判権所有者のフォン・レーパー氏で、彼は侯爵と何か話すことがあったので、そこに来っていた。彼はその食事会議全体の中で二つのことを有する唯一の男であった。第一に彼はブーゼ家のワイン目録のすべてのワインの種類を提供して貰って、弁理公使夫人のすべてのワイン財産によって、自分の胃の中でちょっと昔の論理家達がはなはだ要求していたかの明確あるいは明瞭な概念を得ようとしてい

た。一 第二に彼は、あたかも自分が受けるのではなくホストになるかのように、大きな価値を肉を刻み込んだ食事、漬け汁にした食事等に置いていて、自分が満ち足りて、腹一杯になるにつれ、ますます丁重に、腰をかがめるようになるのであった。つまり一杯に詰めると曲がるソーセージに似ていた。

第七、八、九番は、二人の粗野な参事官、某と某、粗野な会計局長官某で、そのうち最初の二人は宮廷全体を馬鹿にしていた。宮廷は頭に文学的学説彙纂の他に学説彙纂[ユスティニアヌス法典]を有していなかったからで、第三の男は、全宮廷は会計局なしに、即ち彼なしにいくらの年金や抵当を有することになるか思い描いていたので、馬鹿にしていた。つまり皆三人とも、自分達が王座を支えていると思っていたから馬鹿にしていたのであるが、彼らが支えられるであろうものは、ソロモンの神殿における一 金属の海でしかなかったのである。[列王記上、7,25]

第十番は弁理公使夫人で、彼女は各人の調子に合わせていたが、しかしその独自の調子ですべての女性達とは違っていた一 ミトリダーテスの国王に似て、彼女はすべての臣下の言語を話した。

第十一番、十二番は旅の途中の尼僧院長と未亡人のフォン某侯爵夫人で、彼女達は身分にふさわしく寡黙で、気位が高かった。

第十三番は失神女性で、その最大の魅力と引力は小さな両足に集められていた。保磁子を付けられた磁石の二本の足のような具合であった。二番目の極の頭部は、下の極が引きつけるものを、反撥させた。

第 00000 番は私には何の関係もない。年取った、化粧の硝石で塩漬けされた顔のレディー達で、沈没した人生の難破船からは、自分達がまだ座って乗り回る硬い板、つまり賭博[トランプ]台しか残っていなかった。

第 00000 番も私には何の関係もない。それは一束の宮廷のレディー、絨毯における刈り込まれた垣根仕立ての植物、あるいはむしろ実り豊かな苗床の周りの縁取り植物で一 機知や美、趣味、作法を有していたけれども、両開きドアから出て行くと、すぐにまた忘れ去られるのである。

第 0000 番は一連の廷臣達で、赤や青の勲章の綬を帯びているが、これは温度計の酒精の赤色や青色のように彼らに懸かっている、彼らの昇進が良く分かるようになっており、

一 彼らは銀のように輝きながら、彼らが触れるものすべてを黒くしており一 王座の天蓋よりも高くて広い天を考えることができず、接見日よりも偉大な日を一年のうちで考えることができず一 その生涯において、父でもなく、子供でもなく、夫でもなく、男でもなく、単に廷臣であったのであり、一 原則なしに分別を有し、その信仰なしに知識を有し、諸力なしに情熱を有し、愚行に対する憎しみなしに愚行への諷刺的感情を有し、愛なしに愛想や冗談への勇気を有していた一 これらの人々の真正度はエメラルドのように、口で温めようとしても冷たいままであることで分かるのであり一 本当のことを言えば、これらの人々を描くのを好むのは悪魔であり、私ではない。...

エーフェルはベアータと失神女性との間にはめ込まれていた。グスタフは彼らに向かい合って、二人の小さな機知的レディーの間にいた。しかし自分の両腕の隣人を自分の目の前の人々にかまけて忘れていた。エーフェルの肢体からは、彼の着る絹織物が帯電化を助けているかのように、機知の火花が発せられていた。失神女性は彼を封臣としていること

に確信を抱いていて、彼女の封臣がベアータに、彼の皿の隣の女性であるベアータに、極上の世辞を言っても封臣の過失と見なしていなかった。「彼はきっと」（そう彼女は考えた）「丁重さからそうする他なくて、そのうち存分に立腹することだろう」。結局フォン・エーフェルにとってフォン・エーフェルを問題にする他なくなった。彼は、自分の敬意を示すためではなく、自分の機知や趣味を示すために、称賛した。彼は世辞や諷刺が、上手くて、根拠のないものであるとき、それを抑えなかった。彼は、自分が女性を察知していると思っていたので、そしてこれを難しいことだと思っていたので、女性を非難した。私は彼を一人の阿呆と思う。

彼は通常娘の心に三台の鑿削岩機を当てて、心に穴をうがち、そこに火薬を詰め込んで、娘の愛の鉱脈を爆破しようとしていた。今日いつものように女性の心臓に装填した最初の地雷坑は、ベアータの許で、彼女と一緒に長いことその服について語るというものであった。一 女達の場合、彼女達の肢体について語ろうと、衣服について語ろうと同じことだと彼は主張していた。しかし私の主張はこうである。醜い女性はその服を果実として着用し、コケットな女性は単なる庭園用梯子、あるいは果実もぎ取り器として着用し、善良なる女性はその果実の葉として着用するというものである。ベアータは服をイヴのように葉として着ていた。

第二に彼はベアータの周りに隠喩[メタファ]の鳥網の囹圄を仕掛けて、彼女をその中へ追い込んだ。一 彼は主張していた、娘達は自分が言わないであろうことを歌ってしまうように（どもる者達が歌い始めるとどもるのを止めるのに似ていて）、彼女達は比喩やアレゴリーとなると、本来決して言葉では漏らさないような内面のすべての告白を内部から吐露するようになる、もっともこのことはどちらでもいいことであろうが、と。一 私はこれに対して、こう主張する。これらの娘達は何の役にも立たない、ベアータのように大いに役立つ女性は言葉では捕らえられない、その考えはその言葉よりも決して劣等なものではないのだから、と。勿論内部が燃えて、煙りを上げている部屋（あるいは心）からは、君が最初に開けるその開口部から炎が勢いよく燃え上がるものである。

彼の第三の主張、奸策はこうであった。男達は単純さの価値や率直さの崇高さ、「あなたを好いている」という率直な請け合いの崇高さを感じずるものであるが、しかし娘達はこの請け合いに技巧的装飾、繊細さ、婉曲さを欲している。生長した花によるトルコ風な音信は娘達には詩的花による音信よりも好ましく、言葉によるお世辞よりも動作によるお世辞の方が好ましい、と。一 私の主張は、彼の言は正しいというものである。それ故彼は例えば、失神女性の前ではいつも自分の時打懐中時計が彼女との最後の逢い引きの時に鳴るようにさせていた。彼はこの上なく彼女の気に入っていた。それ故彼はいつも、それが可能で、注目できるのであれば、鏡に写る背中の方を盗み見た。一 それ故彼はベアータに対し、私がほとんど名付けることになる悪魔の所業を一杯仕掛けた。二つを実際挙げよう。第一に彼は、我を忘れて、彼女の手に分自分の手を弁舌で炎となって置くことになるということを思い出すのであった。その後、自分の手が指の重さ以上にならなくなると、それに気付いたかのように、手を気付かれずに持ち上げるという意図で手から一ロットずつ奪うかのように演技するのだった。一 「このように」（と彼は自分に言った）「より繊細な細心さというものは振る舞うものだ。この効果は間もなく分ろう」。彼の第二の悪癖は、自分が座している側の鏡に彼女の顔を盗み見て（自分自身の顔への褒賞は二等

賞を与えただけであった)、原物[モデル]はより間近にいるというのに、称賛するのだった。鏡の中で陶磁器の羊飼いの少女が子羊を追っていた。「鏡にこれ以上美しい羊飼いの女を見たことはありません」と彼は両義的に言った。「でも私はもっと美しい羊を見たことがあります」と失神女性は言って、彼のことを意味していた。

この鏡は、花に囲まれた岸辺越しに反映する水面を覗いていた羊飼いの少女と共に、そしてその子羊や羊飼いの少年と共にほとんどグスタフの少年時代の遊びと間近なものに思われた。ベアータの目は思わず知らずこれらの花の間に紛れ込み、その耳も持ち去っていて、公使館参事官はその戦略的機知でもってこの耳に侵入しようとしたが、空しかった。グスタフの目は — 情景ではなく、ただ目だけを求めて、避けていた。彼の内的翼が萎えていた社交的喧噪の中からは彼は単に外部からの跳躍棒でのみ高く上がることができた。というのは彼に似ていた女性を除き、そうでない他の者達は皆彼の内面をその卓話で引っ掻き、腐食したので、彼は今日ほどはなはだ困惑したことはなかった。徳操に関するその飛ぶような卓上での会話を、ダッシュで印付けて記すことにしよう。百姓の卓上の祈りでは家族全員が交誦しながら祈るように、幾人かの頭部がそのことについて話していたからである。

「誰も徳操は有せず、単に様々な徳操だけを有している — 女達は徳操を有し、男達は徳操を得る — 徳操とは尋常でない丁重さに他ならない — 徳操は多くの底面に少しの天蓋[ダイヤモンド]の合わさったものである^{*原注 1}、しかし一方であるか他方であるかの手段とはいかなるものか。 — 徳操は、美同様、いつでも異なる。頭部がこちらでは鋭いが、あちらでは幅広い。その下の心に関してもそうである。 — 美と徳操は一对の姉妹のように諍い、愛し合っている、それでも互いにその飾りを与えている(と暗示した)

— サランシの薔薇の娘を見るときほど、徳操について好んで考えるときはない — 徳操は他の地でも王冠を与えられる(とまた暗示した)等々」。

要するにどの調子も視線も証明はせず、すでに徳操は次のものでしかないということを前提としていた。 — つまり胃の管理人、感覚の神学寄宿生、肉体の下級官吏、娘に他ならない、と。愛も徳操も同じ具合であった。「ジャン・ジャックのジュリーは」(とある男が言った)「千ものジュリーやジャン・ジャック本人のようなものだ。彼女は熱中で始めて、祈りで終わる。 — しかしその両者の間に墮落がある」。

一度グスタフの状況にあった者以外、一度徳操の可能性と神性について自分の最深の確信の壊滅的襲撃を身分のある機知的有力な人々のサークルで受けた者以外、このような震撼の下、それぞれの震撼が魂に裂け目をもたらし、このような徳操と聖者の襲撃者を辱めることが、いわんや改宗せしめることは自らはできず、侮辱に思っている者、自分の聖女へのこのヘロデ王の嘲罵の許、誇りさえ直立し得ない者、この誇りは確かに好んで我らの特別な部屋で食するのであるが、しかし定食では我らの内部から立ち去るもので、 — —

つまりただこのような状況で喘ぐ者にみが、その悪夢の下、グスタフの悪夢を考えることができるものである。

*原注 1 周知のように[宝石の]ドゥブレでは、縁に収められた珪石あるいは水晶は底面と呼ばれ、その上で花と咲くダイヤモンドは天蓋と呼ばれる。

徳操と愛の党派に与しているベアータの顔さえも、かの中傷的霜の顔どもに対して彼を守ることはできなかった。それらの顔からは、天候の変わるたびに氷河の割れ目から、身を切るような風が吹き付けて、心を哲学的に砕いて、自らの価値の感情を引き裂いた。グスタフはその年齢上、二つの根本的に間違った推論をしてしまうのである。一 第一に徳操的口ぶりを聞くたびに、徳操的心を推定し、第二に悪しき口ぶりを聞くたびに、悪しき心を推定するのである。

グスタフは、両耳に入ってくるものよりも何かより良きものに値する両耳の所有者の向かい側に座っているのでなければ、自分が余り返事できなかったことや、ましてや質問できなかったことを気にすることはほとんどなかったであろう。彼はいつも正しい鍵[キー]の横に滑って行き、譜面に不協和音が書かれているとき、協和音を出したり、その逆のことをした。あるときは彼は他人の大胆な自在さに驚いたり、あるときは彼の隣人達が彼の自在さに驚いたりした。自分にとって余りに大胆に思えたり、また余りに臆病に思えたりする一つの調子をもものにするより、機知の方が彼には簡単であったろう。一 しかしこれは実はそうではなく、彼の両足を足枷のように留めた重要な過ちは、

彼が論理的に正しく考えたという点であった。

この過ちは多くの人々が有している。私自身何日も午前中練習して、魂で曲馬ししなければならなかったのであり、そうして若干半ば阿呆のように脈絡もなく、跳ねるように考えることができるようになった。私は女達の許で学校に、つまり学校のベンチに、座ることがなかったならば、結局成功は収めなかったことだろう。女性達は論理的に考えることははるかに少ない。女性達の許で立派な調子を習得し得ない者は、一 ドイツ人の形而上学者になるくらいしか見込みはない。女達はかつて「はい」とか「いいえ」と答えるであろうか。その件に関しないことではないか。彼女達は最も重要なことについて慎重に、訴訟的冗長さで表現するであろうか。最も軽薄なことについて軽薄に表現するであろうか。嘲弄を聞いたり練習するのが女達は嫌いであろうか、それとも、一 舞踏会の女王達やエスプリの会の女性家庭教師を除いて、かつてその卓話やデザートの方での話、鏡の前の話、その他の話にいささかなりとも力点を、音調や価値を置くであろうか。彼女達は真理に重きを置くか。幸いこの調子の繊細さは、これは女達の学部の印章、職人の挨拶であるが、一人の女性が身にまとう素材の繊細さと共に増大する。二、三のドイツの小都市、例えば下部シェーラウ等では、私に反論する必要はないであろう。ここでは勿論、当地の女達は、彼女達はむしろレディーと呼ばれたがっているが、発音の明瞭な扇子や引き裾のスカートでしか音を立てないのであり、これは昆虫に似ていて、昆虫の声は口からではなく、ぶんぶん言う飛行仕掛けや腹の太鼓から生じているのである。

多くの者が、女達と宮廷の作法とのこの類似性まで証明するよう私に要求している。私は実際手にペンを持って、ただインクに浸すだけでいい。立派な調子の（私は語の響きのせいで「宮廷の調子と良い調子」を交互に使うことにしよう）高音歌手は、いつも真理の稲妻を機転で通過させ、力を殺ぐこと電氣的稲妻を先の鋭いものでそうするような具合である。実際の高音歌手は真理の永遠の循環から多彩な部分や弧を切り出すが、これらは虹の多彩な取り出された部分のように何ものかに掛かって安らっているものではない。この歌手こそは、要求されているように、鏡の水銀のように、自分の前で通過していくすべてを、余所の諸性格や自らの意見を、色彩を施しながら写し出し、すべての外面を示し、す

すべての内部を隠すものである。世の紳士にとって、自分が諷刺的茨で取り巻かれた田畑であれば十分であろうか。 — これはいつも学者にとっては十分となるべきものであるが、この茨が縁の代わりに、すべての畝を満たし、田畑の垣根よりはむしろ果実となる必要はないだろうか。この歌手と硫肝の他に — 硫肝は単に金属に限るが — 誰がすべての聖人とすべての悪魔を黒く沈殿させる術を心得ていよう。 — しかし人々は、このように高度な要求をする人々は必ずしもこう考えるものではない。つまり自分達を満足させ得るのはすべての真理の単なる自由思想家や無感動主義者のみであり、つまりひよっとしたら一年中同じ意見とズボンの持ち主の演壇上の島人を全体越えているような男のみであるとは必ずしも考えない。機知の舞踏会場がはなはだ狭められるのは、そこで自らの意見や真理への愛が確固たる太い柱として立っているときを描いてない。

これがまさに、世の紳士や他の人々や自分自身を極上の滑稽な光に当てて描写する際の手段である。勿論宮廷人は、ドイツの喜劇役者達に、彼らが機知というアッチカの塩や上品な喜劇的なもの、いつも自らの許に有するのを心得ているその喜劇的なものを、その胼胝の多い両手の下で大抵取り逃がしていると難ずることができよう。彼、宮廷人は、いつもその上品な、決して低級でないやり方で滑稽なことをし、その高い身分に合った真に高度な喜劇的なもので、自分の人物に軽く味付けをしている。しかし彼はこう尋ねることができよう。「ドイツの阿呆どもは私を調べたらどうか、あるいは奴らの調べるテレンティウスはその諸性格を、私が私自身の諸性格をそうしているほどに繊細に味付け[諷刺]しているだろうか」。...

思うに、私は私の混乱で私の話の状況を十分に動機付けて、グスタフは結局、かくも速やかに機知的なレディーの許、他人の才能に対する謙虚すぎる感情を抱いて、敗北感を抱くことになったので、あるいは彼の許から弁理公使夫人は社交のせいで、ベアータは父親殿のせいで去って行ったので、 — 外に出てしまったと述べて良からう。しかし外に出てみると、涼しい夜露のせいで垂れていた花もまた元気に起き上がる。「静かな国」を彼は壁の燭台が草に投げかける四角の微光の前を憧れもなく通り過ぎて、周りを見回して行って、遠くの黒く描かれた舞踏会場の壁を一巡して目に留めた。そこでは運命が諸恒星の舞踏会[球]を大きな円に、地球の舞踏会[球]を小さな円に描いているものである。彼がここで日中の大きな影絵である夜を、去った女友達の影絵として、冷ましながら、慰めるが如く自分の胸に押し当てると、彼は得意げにではなくこう考えた。「偉大な自然よ、御身の許に、人間達の間で悲しい思いがしたら、いつでもやって来よう。御身が私の最も馴染みの女友達で、最も忠実だ。御身は私を慰めて欲しい、私が御身の両腕から御身の足許にくずおれ、もはや何の慰めも必要としなくなるほどまでに」。...

「こちらでフォン・ファルケンベルクの若殿の宿を御存じではありませんか」と一人の夜の使者が彼に語りかけた。彼は一通の手紙を渡した。それを彼は急いで遠くの壁の燭台の恒星の明かりの下、ざっと読んだ。しかしその燭台は今日はただ悲しい場面を照らし出す役目のように見えた。アマンドゥスがその中で病床の掛け布団の上で次のように書いてきていた。

第三十一扇形、あるいは第二十四の聖三位一体祭の扇形
病床 — 月食 — ピラミッド

「君がまた私の友となったのなら、間もなく死ぬであろう君の友の許に来給え。私が永遠の静かな国に移る前に私と和解し給え。我々がこの地上の静かな国へ出掛ける前に、最後そうしたようにし給え。言いようもなく愛しい友よ。僕は確かによく君を侮辱した、しかしいつも愛していたのだ。来てくれ給え。そしてこの地上ではただ満たされない溜め息から成り立っていた僕の脆い胸の短い息が、君への最後の空しい溜め息と共に干上がることはないようにしてくれ給え。君が僕を最初見たとき、僕の目は盲いていた。目がまた盲いる最後のとき、僕を見てくれ給え」。

この手紙は、ある人間の愛がとても効果的であったこの時刻に、彼を館から引きさらった。しかしこの手紙で捉えられた心臓の箇所は血が流れていた。夜の中このように進んで行くと、魂は屈服する。彼はこの短い道のりの間十回以上彼の友が死ぬのを見た。巢から追い出された鳥を見るたびに、彼は考えた。どのようにして汝は暗闇の中汝の小枝をまた見つけることになるだろう。 — 自分の許から遠く離れて夜の中をさまよう光が漏れ出てくるたびに彼は考えた。何という溜め息、何という辛い歩みの長ったらしい小道を今照らし出すことだろう。彼はあたかも人間の生命が進んで行くのを見ているかのように思われた。数台の陽光の馬車が、松明からなる陽光の暈に取り巻かれて、そして晩餐会の無為の客人達が、彼同様晩餐会から去って、飛ぶように帰路につくのを見て、あたかも彼らが一人の瀕死の友の許に急ぐかのように思われたとき、彼は格別一層楽しいとは思われなかった。ようやく微睡む町がその影から浮かび上がってきた。塔の燈台の明かりや若干の散在、点在する明かりが、大方一人の病人の長い夜を陰気に素っ気なく測定していたもので、彼の内面の悲しみの土台に落ちてきた。

こっそりと彼は病人の家の戸を叩き、こっそりと開けられ、こっそりと彼は上がって行った。ただ時計だけが吊鐘のように黙した喪の家に十二時の時を告げて響いた。彼がそこでよく耳にしたものであった。 — 全てを許そうと思われていた者、まだ少しばかり愛し、楽しませるために急いで駆け付けられた者の姿がベッドに臥せっていた。グスタフの心と希望を切り刻んだものは、アマンドゥスや（他の病人に見られる）汚れて干涸らびた病人の顔でもなく、熱で浸食された生命の色合いでもなく、唇の皺でもなく、重たく回転し、ちらちら光り、荒々しく燃え落ちたガラス化した病人の目であった。この目の中に過ぐる夜のすべての苦しみや最後の夜の間近さが顕著に記されていた。

アマンドゥスは自分の死者の手を彼に高く突きだして、あたかも自分が最近差し出した他人の黒い染物屋の手、死者の手を自分より他の誰かがまだ覚えていることが有り得るような具合であった。彼にとってはグスタフにとってよりも再和解は甘美なものであった。グスタフには再和解の背後に長い別れが待っているのが見えていた。

朝と喜びのため、彼の人生のカーテンが降りてくるのは少しばかり延びた。グスタフは看護人として病人の看護婦の代わりにを務めた。まずこの看護婦は一切を上手に丁重に細かく注意深く取り扱う術を心得ていて、彼の最期の時にも怒ってみせたからであり、第二に死の社交へ全自然が厳しく介入してきて、人間から人間に貸し出していたすべての化粧や衣装を剥ぎ取る時には、この仮借ない手を押しとどめられない無力な友人達にとっては、知人が着物を脱ぎ、凍え、眠って行くときに、微笑を浮かべ、すべての気まぐれに対してただ愛想を言って、そのわがままを満たしてやることによって静かにしていることが唯一

の慰めとなるからである。 — 哀れな瀕死の者に対するこのような心の奉仕、愛の奉仕を人々は何年も経ってからすべての健康な者に対する集中した奉仕よりも満足感を抱いて振り返るものである。 — しかしこの両者は単に数時間の違いがあるにすぎない、というのは君は、君のベッドにそれほど頻繁に出入りしないうちに、君はその中に臥せることになるからである。

親愛なる死よ。私は今自分のことを考える。汝がいつか私の部屋に入って来たら、私に好意を見せて、私を私の事務用机、書斎机の許で即座に射殺して欲しい。親愛なる死よ、汝が私を熱病ベッドのカーテンの背後に投げ込んで、汝のメスでゆっくりと、すべての血管を生命から切り離して行くことを試みて、私が長い夜の間ずっと汝の解剖して行く顔を見ざるを得ず、あるいは私の魂の絹の衣装を汝が長いことつまんでいる間、元気な皆が寄って来て、見守るようになること、騎兵大尉やペスト看護人、私の妹が見守るようになること、それは御免だ。 — しかし汝の上に悪魔が乗って、汝が何の分別も見せないならば、親愛なる死よ、 — 地獄とて永遠に続かないから — 私も何も気にしない、千もの厄介事の後の最後の厄介事等気にしない。

フェンク博士はその顔に来たるべき喪失への不安を浮かべていず、過ぎ去った喪失への悲しみを浮かべていた。彼は自分の息子を壊れた陶磁器と考えていた。その破片はまだ昔のままに組み合わせられていて、飾り棚に置かれていて、些細な振動で壊れてしまうのである。彼はそれ故息子に何も禁じなかった。彼はそれどころか何人かの男性の患者を受け入れていた、「家に病人がいるから、息子への想いを癒やそうと思うから」であった。病人自身すでに自分の人生の夕方の風が吹いて来るのを耳にしていた。数週間前までは彼はまだ、春になればリーリエンバートのシェーラウ健康鉱泉の水を飲むことができよう、そうなればきっと別な風になるのかもしれないと思っていた。(哀れな病人よ、むしろ君は別な風になってしまった)。しかし彼が打ち明けないある熱病での像が彼の病の人生に死刑を宣してしまった。この夢に対する彼の迷信は確固たるものとなって、彼はそれ以来、自分の花壇に水を注がず、鳥を手放し、すべての願望を消してしまった。ただグスタフへの想いだけは消さなかった。

翌日はまさに市の日であった。この喧噪は死の静寂の中へ清められていた彼の両耳にとっては生命に溢れすぎるものであった。グスタフは彼のベッドの脇に腰を下ろして、彼が話したり聞いたりして市場に耳を傾けないようにした。グスタフは彼が最後に生き生きと、「まだベアータを愛しているのか」と聞いたのでびっくりした。彼は肯定を避けた。しかしアマンドゥスはまだその神経を温めていたわずかの生命を振り絞って、その言葉ごとに長い中断を挿みながら、こう言った。「彼女から君の心を取り出さないでおくれ — 君が僕ほどに彼女のことを知っていたらいいのだが — 僕はよく彼女の父親の許に行った — 僕は彼女がじっと耐えて父親の激に耐える様、 — 彼女の母親の間違いを自らに引き受ける様を見てきた — 善意や、穏やかさ、謙虚さ、分別に満ちている — そんな女性だ — 彼女のイメージがなかったら僕の人生は喜びが少なかったことだろう — 君が彼女を僕よりも愛すと誓いの手を差し出しておくれ」。彼は手を自ら握った。しかし友人は握られて心が痛んだ。

突然その沈んだ頬の血管にひよっとしたら最後の赤面と想われるものが、善行の前によく曙光のように先駆けてくる赤面が、浮かび出てきた。彼は彼の父親を呼び寄せた。父親

に対して、彼は大いに熱を込め、目と唇に大いに憧れを浮かべて、頼み事をした。――

ベアータを連れてきて欲しいという依頼で、瀕死の者の最後の依頼で、拒絶しかねるもので、実際彼の父親は拒絶できなかった。それで（不作法という思いにもかかわらず）彼女の母親の許に馬車で行き、母親を通じてベアータを説得し、両者を連れて来ると約束した。――彼の病気全体の中で拒絶しても効果はないとフェンクは知っていたし――息子が最後の願いも空しくそのことで亡くなったら、まだ啜り尽くしている最中の臨終の時を死者に対して辛いものにしたという思いで耐えられないであろうと思い、――それに母親と娘は余りに善良で、自分同様息子に逆らうことはないであろうと分かっていた。要するに彼は馬車ででかけた。

父親がでかけると、病人は我々と彼の友グスタフを、微笑と共に約束する愛の奔流となって、見つめたので、グスタフは、その別れが間近なものとなっている忠実で疲れた魂のアマンドゥスからこの人生での最も長い別れをしようと思った。「僕の唇を」（と彼は考えた）「今一度彼の唇の上に置き、胸を彼の胸の上に置くことにしよう――今一度温かい死者を抱くことにしよう。その中の魂はまだ僕の抱擁を感じるのでから――今一度、まだ間に合うのだから、その去って行く精神に呼びかけよう、これまでどんなに愛していたか、これからもどんなに愛するつもりであるか」。こうした願いの許、人生の最も美しい清められた水[涙]が彼の目を神聖なものにした。しかしながらこうしたことすべてを彼は放棄した。最後の愛のこの嵐の下、肉体の裂かれた絆が動揺した魂を手放し、自分の口元で弱っていた者が亡くなるかもしれないと案じたからであった。...

自らを犠牲にし、心の尼僧院独房から出てこないこうした優しさは、文芸や劇場での最後のハリケーンよりも私の気に入っている。そこでは心を示すために、他人同様に涙やインクの瘻管を有するために、自分の感受性のポケットから、拭き取るためのハンカチのように、切れ端を取り出すために、人々は感受するのである。

ドクトルは、マウセンバッハではまだ陰気な顔を見せたことはなかったのであるが、そのヴェールのかかった快活さを通じて、悲しい依頼の承諾を得た。私の領主裁判権所有者は、生来の同情をいつも強引に抑えるのであるが、同情は鸚鵡に似て、自分の金を持ち去るからで、このときはすべてを他人の善意の涙の奔流に、自分から持ち去られるのは――一時間の妻と娘だけであったので、それだけ一層快く任せた。より劣等な人間はより上等の人間よりも強要された善行により大きな喜びを感じず。レーパーは自ら娘に、一緒に行くようにとの命令を書いて、自然な倫理と神学的倫理からその根拠を手短に呈示した。しかしドクトルが新館のベアータに持参して最良の根拠は母親であった。母親がいなければ、彼女の内気な、政治的女性的配慮はなかなか説得されなかったことだろう。

彼らは祈りながら、臨終の部屋、この世のものではない見知らぬ神殿のこの祭具室にやって来た。ここでは多くのことが私の心や私の言葉にとって大きすぎるものになっているが、私は続ける。...病人が自分の瀕死の心の恋人を目にしたとき、彼の沈んで行った青春の日々が黄金の希望と共に深く地平線の下から微光を発した。真夜中頃の六月の太陽の夕焼けのようであった。彼は今一度美しい生命と握手した。最後の喜びの息吹が今一度彼の青ざめた両頬を染め、喜びの天使が愛の綱でゆっくりと彼を墓穴へ降ろして行った。――

瀕死の者は人々やその行為がすでに遠く離れて小さくなっているのを目にしていた。彼には我々の些細な丁重さの作法はもはやほとんど問題ではない――すべてが彼にはもは

やどうでもよくなっている。彼は、自分をグスタフとベアータとだけにしてくれと頼んだ。彼の魂は崩れて行く肉体をまだ保っていた。切れ切れの、しかししっかりした声で、彼は震えている娘に話しかけた。「ベアータ、僕は死ぬことになる。ひょっとしたら今夜かもしれない — より元気な日々、僕は君を愛した。君は知らなかったことだ。 — 僕は僕の愛と共に永遠の中へ行く — 良き人よ、手を差し出しておくれ」(彼女はそうした)「泣かないで、話しておくれ。僕は君を長いこと目にせず、君の声を耳にしなかった — しかし二人は泣いているばかりだ。君達が泣いたからといって、僕の心はもはや柔和になることはない。僕は臥せっている限り、僕の熱い目に涙は浮かばない。 — いや僕のそばで泣いておくれ。ある死者のために泣いている夢を見たら、いいことがあるそうだ。 — いや君達二人の美しい魂、君達は、君達に似ている者を、君達の愛に値し得る者を他に誰も見いだせないことだろう。君達は二人つきりだ。 — ベアータよ、グスタフも君を愛していて、そのことを言っていない — 君が君の美しい心をまだ持っているのであれば、その心を彼にあげるがいい。全地球上でそれに値するのは彼だけだ、彼にあげ給え。 — 君は彼と僕を幸せにしてくれる、しかし君が彼を愛せないときには、何も言わないで欲しい」。...今や彼は更にグスタフの手を握った。グスタフの感情は互いに吹き付け合う嵐であった。アマンドゥスは祝福する徳操の見据えた目をして言った。「無限の、心優しい、私を受け入れてくれる神よ、この二人の心に、ひょっとしたらこの世で私に恵まれたかもしれないすべての美しい日々を贈り給え。 — いや私の将来の人生から、この人生ではもはや何も期待できなかつたのであれば、その日々を取り出し給え」。...ここで崩れていく肉体が飛び去る魂を引き戻した。彼の目の中の一滴の涙は自分の砕かれた日々の重苦しい思い出を告げていた。三人の心は激しく動揺し、三人の舌は硬直した。この瞬間[分秒]は愛の思念にとっては高尚すぎた — ただ友情と別世界に対する感情だけがこの偉大な瞬間には十分な大きさを有していた。

私は今や、この最後の瞬間の結果や人間については瀕死の者についての他は書けない。彼の引き戻された神経は脱力していく微睡眠の中で震え続けていた。消耗し、麻痺したベアータは母親と一緒に退出した。グスタフは何ももはや見ず、ほとんどベアータにも気付かなかった。父親は慰めを失い、慰めてくれる者もなかつた。

熱にうなされた微睡眠は真夜中過ぎまで続いた。皆既月食が天を高くし、人間のびっくりした目を引き上げた。グスタフは、動揺し、苦悩して、濡れた目で世界の高みにある地球の影を見上げた。その影は月に、影絵の板のように懸かっていた。彼は地球を離れた、地球自身が彼にとっては一つの影であった。「いや」と彼は考えた、「この高く飛翔する影のピラミッドに今や千もの赤い目や、傷付いた手や、慰めのない心が立ち尽くして、埋葬される。死者が生きている者より更に陰気に眠るよう埋葬される。 — しかしこの影のポリュペモス[一つ眼の巨人]は(一つの月の目を有して)毎日地球の周りを巡っているのではないか。そして我々がそれに気付くのは、この巨人が我々の月[地球]に乗りかかるときではないか。...そのように我々は死が我々の庭を刈り取るまでは、地球には来ないを考える。...しかしその鎌は百年というのではなく、一秒一秒がそうだ」。...このようにヴェールを掛けられた月の下で彼は心を暗くし、慰めた。 — アマンドゥスは不安げに目を覚ました。両者は二人つきりであった。月はその微光と共に彼の病んだ目の上に安らっていた。「誰が月を砕いたのだ」(と彼は瀕死の熱い声で言った)「月は一切片を残し

て死んでいる」。突然部屋の天井と向かい合った家々が燃えるように赤くなった。代々の墓地に埋葬されるために馬車で無言の路地に行くある貴族の葬列の松明が見られたのであった。「火事だ、火事だ」と瀕死の者は叫んで、ベッドから出ようとした。グスタフは、下の路地を最後に進んで行く者がいかに病人と似ているか、病人に隠そうと思った。しかし死に押し潰されるかのように不安げにアマンドゥスは部屋の半ばをゆらゆらと来て、グスタフの両腕の中に入って来た。...アマンドゥスは遺体を見る前に、神経の発作で死んでこの両腕にもたれかかっていた。...

グスタフは、死者のように冷たくなって、この永遠の眠りに就いた者を元の臥所に運んだ。一 涙もなく、物音も立てず、何も思わず、彼はヴェールを掛けられた月光の下に、反照する葬列の明かりの下に腰を下ろした。一 硬直した友は動くことなく彼に向かい合って横たわっていた。一 アマンドゥスは月の球体より早く地球の影から飛び去っていた。一 グスタフはこの死者の方は見ず、月の方を見た（最も密な悲しみの時には人々はその対象から最も小さな対象へ目を移すものである）。「去るがいい」と彼は考えた、「塵からなる地球の影よ、汝はまだ私の上にある。...しかし汝の先端が友に触れることはない。...すべての恒星が剥き出しのまま友の前にある。...私がまだいるところは、虚栄だ、靄だ、影だ」。...突然フルート時計が一時を打って、永遠の朝の朝の歌を奏した。さわやかに、沃野から月を越えて鳴り響いて、苦痛を静めるもので、それで彼の心が溺死していた涙は痛みを破って、より穏やかな、致命的とはいえない情感に河床を与えることになった。...あたかも自分の肉体も空となって亡骸の横にあるかのように、自分の魂が広い、すべての太陽を通して進む光の道を先駆けの魂を追って飛んで行くかのように思われた。...彼は魂が抜け出すのを見た。...彼は魂と彼自身の間にある数年間の靄を突き抜けて、明瞭を見た。...

そして彼は顔に魂を浮かべて、死者の部屋から父親の部屋に進み、目に現世の悲哀を、顔に天上的快活さを浮かべて言った。「私どもの友は月食の下、闘い尽きて、向こうに逝きました」。

一 いやはや、蝕まれた肉体の中の彼の人生は、まことに真の皆既月食であった。人生からの彼の退場は、地球の影からの退場で、影の中での彼の滞在はほんのわずかなものであった。

グスタフは喪の家に留まるよう説得されることはなかった。心にとって肉体が余りに窮屈なとき、部屋もそう思われる。彼はマリーエンホーフへ向かった。結晶化した太陽の滴がかかっている青い天蓋の下、戦っている月の下、これは彼同様に影となって赤く燃えていたが、地球を越えるように人間的色合いの上を越え出ている崇高な思いに襲われた。このような時にこの人生の不毛さや、第二の人生への欲求を生き生きと感ぜない者、このような者とは我々の低い人生の中での最高のものについて誰も争ってはならない。

いつもはある全く暗い孤独の中へ追い込んだであろうこの命日の騒ぎの中、彼はそれでもマリーエンホーフへでかけた。故人が、自分は「隠者の山」で自分の遺骨のための冬営を得られるよう尽力して欲しいと彼に頼んでいた。「隠者の山」に彼はよく登って、その状況は我々に馴染みのものである。グスタフは弁理公使夫人に頼めば容易であろうと期待していた。彼女はいずれにせよ「静かな国」へは稀にしか、そしてその或る部分にしか足を踏み入れないのであった。しかしエーフェルは 一 彼の助言を依頼するために訪問し

た朝　—　まさにその逆のことを言った。公園と公園の建築上の品位が問題となったら、彼女は喜んで然るべく埋葬させることだろう。最良の英国式庭園としては死者と本物の霊廟がはなはだ欠けていて、単に模倣した紛いの霊廟を有しているだけの状態なのだから、と。エーフェルは、若干の装飾を、宮廷が味わうような趣味でもって墓標として設計すると申し出た。グスタフはただ今日は余りに心が優しくなっていて、彼を今日初めて軽蔑することができなかった。何と別様に弁理公使夫人は彼の依頼と切迫した声とに耳を傾けてくれたことか。彼は自分の痛みを表に出すようなことはしなかったのであるが。何とも思いやりに満ちて、　—　あたかもこっそりと死者の手に薔薇を一輪置くかのような表情で　—　彼女は死者に対して一片の土を休息の地のために贈ってくれた。何と美しく彼女の一杯の目は、彼女の優しい心根からの贈り物と共にこの贈り物の供をしてきたことか。そして他人の苦悶が彼自身の苦悶にまた勝利を戻したとき、何という美しい慰めを贈って　—　女性の声は慰めるときほど美しくなることはない　—　彼女はその勝利を反駁したことか　—　彼はこのとき友情と愛の違いを生き生きと感じた。彼は彼女に友情をすべて与えた。彼は愛の対象がここでは見えなかったので、喜んでいた。最初の視線の当惑を彼は恐れていたのである。ベアータは病に臥せていた。

彼は自ら閉じ籠もっていた。彼はその胸をかのかの痛みに対して開け放っていた。これは胸に快い流血の傷を切り刻むのではなく、胸に鈍い打撃を与えるもので、つまり命日と埋葬日の間の中間時に我々の許で見られるかの痛みのことである。埋葬日はかの日曜日で、その日私は悲しい気持ちで私の扇形をただオットマルの手紙だけで満たして、とても悲しく書き終えたのであった。私はそのことをまさに、永眠した者が小さな死の床からすべての人間達の大きな床へ運ばれた時に行った。母親がベンチで眠った子供達をより大きな憩いの地へ運ぶようなそうした時のことであつた。日曜日グスタフは館から、感覚を閉ざしたまま逃げ出した。館では騒がしい国事の馬車や従者達がさながら彼の心の上を過ぎて行くのであつた。彼は初めて、自分がこの地上では余所者の気分であることを感じた。太陽の光はより大きな月の、我々の夜へ紡がれた薄明かりの光であるかのように思われた。彼は今や去った自分の友に対し、この地球上では近付くことも逃れることも出来なかったけれども、自分の痛みがこう告げていた。自分は遺体も棺も抱きしめずに、単により美しい大地のこの種子を押さえ込む墓地の苗床を抱きしめることになろうとも、このことは自分にとって慰めとなることだろう。それ故彼は離れた丘へ赴いて、この「隠者の山」にまだ人々がいるか見ることにした。

彼の目は、この夕べ彼のために現世で存在した最大の嘆きにまさに出会った。夕方を通じて煌めく白い棺が取り上げられた　—　一本の折れている薔薇と穴だらけの蛹、羽根を広げている蝶、これは小さな青虫としての蛹を食い破ったもので、これらが棺という蛹に描かれていて、その両原像と共に大地の下に沈められた　—　子供を失った父親は手と頭をピラミッドに置いて、目を閉ざしたまま土塊の一つ一つを、下へ穿つ矢の飛行のように、聞いていた。　—　冷たい夜風が死者の山からグスタフの許へ吹き寄せてきた　—　渡り鳥が黒い点のように彼の頭上を越えて去って行った。地理学ではなく、自然の衝動で鳥達は冷たい雲や夜を通じて、より温かい太陽の許へ導かれて行った。　—　月は光線のない靄の一つの血の海から上へ昇って行った。　—　とうとう生きている者達が山と死者の許から去って行って　—　ただグスタフだけが、別の丘の上で死者を悼んでいて、夜が二人

の周りに重々しく広がっていた。...十分であろう。

私にこの埋葬の情景を免じ給え。何という秋めいた思い出がこの際私のペン同様に私の血を死者のように緩慢なものにするものか君達は知らないことだろう。この物語でも私はいずれにせよ、一枚の紙、一枚の喪の紙を書いていて、その幅広く黒い縁は涙のため行や悲しみにほとんど白く狭い箇所を残せないものである。 — 私は君達にこの情景をも免ずることにする。というのは、より美しい心根の読者や、君達がすでに誰を失ったか、私も知らないからであり、何という愛しい、あの世へ逝った形姿を、その墓塚はその形姿自身と同様にとうに沈んでしまっているものであるが、私が夢さながらまたその墓塚で高く蘇らせ、新たに君達の流涕している目の前に出現させているか、知らないからである。ただ一つの墓塚は何と多くの死者達を思い出させることになることか。

消えてしまったアマンドゥスよ。人生が敵対する死に対して世紀から世紀にかけて対峙して送る大きな幅広い軍勢の中へ君はわずかな歩行で加わって行った。死は君をしばしば、そして速やかに傷付けてしまった。君の戦友達は土塊を君の大きな傷の上に、君の顔の上に置いた。 — 彼らは戦い続けていて、彼らは君のことを年々戦いながらもはや忘れてしまうことだろう。 — 彼らの目に涙がやって来よう。しかし君のことを悼む涙はもはやなく、初めて埋葬される死者達が悼まれる。 — そして君の百合のミイラがばらばらに砕けてしまったとき、もはや誰も君のことを思い出さない。ただ夢だけがまだ君の地球の中に混じって行ったパステル画の形姿を拾い集めて、その形姿と共に君のグスタフの灰色の髪となった頭の中で、人生の背後で休らう夢の青春の沃野を飾ることだろう。これは金星の如く、人生の朝方の空では明けの明星であり、人生の夕方の空では宵の明星であるもので、微光を発し、震え、太陽の代わりとなるものである。...私は君の魂の鞘である死骸に対してこう言いたくない。アマンドゥス、穏やかに眠れ、と。君は鞘の中で穏やかでなかった。君の不滅の自我は広大な天体よりは、その窮屈な神経組織の中で生きざるを得なかったこと、その自我は高貴な視線を太陽球へ持ち上げることはなく、その苦しめる赤血球へ屈み込み、まれな沸騰のマクロコスモスの偉大な調和に対してではなく、そのマイクロコスモスの不協和音に対して感じなければならなかったことは今でも私には遺憾に思える。 — 必然性の鎖が深く君の中へ切り込んでいて、必然性の動きばかりでなく、その圧力も君に傷跡をもたらした。...生きている者はかくも惨めなものだ。生者について死者達は何の思い出を要求できよう。生者はすでに、そのことについて話しているときも疲れ切っているのだから。...

さてグスタフは家に帰ると、ドクトル宛に一通の手紙を書いた。ドクトルがピラミッドにもたれかかって耐えているときの苦悶の戦いは彼を言いようもなく感動させた。彼は手紙の中で、彼のこの砕けて傷付いた胸元にくずおれて、その痛みを自分の愛の圧力で増すことになった。彼はドクトルに自分を息子として受け入れ、自分の父親らしい友となってくれるよう頼んでいた。

グスタフが、これまでいつも自分の感情の発作を他人のためを思って抑えていたのに、このときは感情を他人を犠牲にしても発露させたという点は、悲しみの高潮のせいということでお許し頂きたい。彼の痛みは進行して、彼は父親から故人の普段着や帽子を七分像の代わりに貰い受けたいと申し出るに至った。彼は私同様に、普段着は、自分が好きであった人間、普段着や肉体から脱した人間の最良の影絵、石膏像、泥膏であると私同様に感

じていた。 — ドクトルの返事は以下の通りである。

＜私はよく私の医療用馬車のクッションにもたれて、思い描き、計画したものである。私がいつか灰色の眉毛とか白髪、あるいは禿げ頭となったら — 私にとって四季がますます短く思え、そのすべての夜がますます長く思えるようになったら、これは最も長い夜の接近の先触れなのであるが — 私がそれから最初の春の日々「静かな国」へでかけて、私の冷たい改竄された肉体に陽を当てるとき — それからその下に一夏が収まっている付着して芽生えてくる芽を外部で見て、自分の内部では地上の春で癒やされることのない永遠の落葉や屈服を目にするとき — それからそれでも私の永遠の青春を、シェーラウ付近の私の散歩のギャロップ、パヴィアでのギャロップ、私と一緒にいった人々を思い出すとき — それから勿論、私の青春の倒壊した神殿からまだ高貴な廃墟として残って立っている者達の方に向き直って — 誰もこのような素敵に森や野原や山々を越えて私の許にやってくるのか振り向いて見回し、それから鼓動のような次のような考えに襲われるとき、つまり私が見回すすべての四方の世界の隅には墓地と教会があって、そこでは今私を慰め、供をしてくれるはずの者達が、見通し難い地表の下、その花々の下に両腕を伸ばして隠され、捕らえられて横たわっているということ、それにただ私だけが一人残って、私の胸の中の秋をこの春の中で抱いているということを考えるとき、私は全く「静かな国」へ行こうと思わずに、一人っきりで家に帰り、閉じ籠もって、私の頭を目と共に腕の上に置いて、こう願うことだろう。私の心も砕けるといい、と。私は言うことだろう、この時は過ぎ去って欲しい、と。すると、愛しい息子よ、愛しい友よ（君は私の友の中で最も若い友として私よりきっと長く生きるだろうから）、君の姿が私の十分に見てきて疲れた目の前に現れることだろう。すると私は目を拭いて、すべてを思い出すことだろう。そして君の手がそれでも私を「静かな国」へ連れ出して、私はこの地上の春を目にすることができると、楽しむことだろう。そして私は握手しながら君に面と向かってこう言うことだろう。私は君を何年も前に息子として受け入れていて、今日は本当によかったと思う、と。

明日私は、続く日々からの旅へ私の友と一緒にいくために参上するつもりだ、過ぎし日々を忘れるためだ。 — 翌朝そのことがなされた。

第三十二扇形、あるいは十一月十六日の扇形

肺結核 — 「静かな国」の教会での弔辞 — オットマル

私は兩人に対してペンで追いかけるよりも足で追いかける方がひょっとしたらやはり良いのかもしれない。今や読者界は私の件を味わい、つまみ食いできるのであるが、私の方は復活祭の市に向けて咳き込んで仕事している。私はかの件のことで、背をかがめて、書斎机に向かって、二つの肺葉に立派で完全な消耗性疾患が見られるほど書き込んでいるのである。私は私の健康な呼吸や私の便通を犠牲にして考え、感受しているというのに、全聴衆は「有り難うさんよ」と言うてくれない。私自身の許ではほとんどすべてが閉ざされている。反対方向への二重の封鎖規則のせいでほとんど私の中は通過できない。それ故私はすべてのアウエンタール人の鋤の後を、 — 最良のイギリスの消耗性患者がするよう

に^{*原注 1} — 私の呼吸の詰まりと他の詰まりに対する薬として畝の蒸気を吸い込むべく、歩いている。けれども単純な聴衆は、私が鋤の雄牛の後をカラスのように歩いているのを見たら、聴衆のために働いてこんな様になっているというのに、私のことを笑い飛ばすことだろう。これは正しいことだろうか。 — いずれにせよ私は私の肺結核を移そうと思う二匹のむく犬の前足の間に身分のある夫のように毎夜眠る必要があるのではないか。私が二匹の添い寝のものに私の厄災という夜の贈り物や朝の贈り物で嫁入り支度をしてやったら、禍いそのものは免れるのではないか。あるいはむしろナダン・ド・ラ・リシュボディエール氏はこう言っていないだろうか。ただ一人の人間の放電のためには犬の動物園の半分が必要だから、新たな犬を買って移す必要があるだろう、と。そうすると私は報酬をただ犬のために使い果たすことになる。それどころか私はその際私の正義が蒙る被害を耐えようとさえ思っている。私は私がその腕を麻痺させ殺ごうと思っている哀れな吸引の犬どもに対して偉人達はその救出の犠牲者達に対するように好意的に振る舞わなければならないからである。

しかしながら私が現在 — 家畜小屋で執筆しているというのは、極めて忌々しいスキャンダルである。というのは（比較的新しいスウェーデンの本によれば）家畜小屋は息切れに対する薬局、防波堤となるそうであるからである。しかし私の息はなかなか楽になりそうにない。すでに三日分の聖三位一体祭をここで座して、三日分の長い扇形を（さながらヨゼフの子供達のように）多くの、より愚かな生物の誕生の地で世に送り出しているのであるけれども。人々は自らこのような地で肺結核のせいで法学的美学的分野の（私は両者、つまり文学者にして法律顧問であるからで）仕事をしたことがあって、経験的にこう知っているにちがいないのである。つまりここではしばしば極めて妥当な思い付きさえも文学的法的裁判官の声よりもより強い反対の声を得て、かくてとんでもないことになる、と。

フェンクとグスタフは、私のすべてに上告された文書同様に長く外に滞在していたわけではなく、旅して金よりも悲しみを費やすことになったが、エーフェルもまたでかけた。つまり長編小説『大サルタン』に取りかかり、極めて大いに享受してその友の苦悩をスケッチすることにした。エーフェルは詩となるような不幸が起こるたびに神に感謝した。そして文芸が栄えるために、ペストや飢饉や他の残酷なことが時々自然に生ずればいと願った。詩人がこれらをモデルに加工でき、そこからかなり大規模な幻想が生じ得るようにするために、かつて斬首された者達や爆破された船を描こうと思った画家達にその原物がそのために用意されたようなものである。しかしかくて彼はしばしばアカデミーが欠けるために自らアカデミーとならざるを得ず、あるいは一日中徳操的動きを有さざるを得なくなっていた。このようなことを彼の作品で描く必要があったからである。 — いやしばしば彼はただの一章のために何度か遊郭に行かざるを得ず、彼はげんなりした。

*原注 1 私はテキストの先の箇所、私の肺結核のために使用する三つの療法を三つの民族から得ている。鋤き返されたばかりの畝の後を歩くことはイギリス人達が勧めていて — 犬の睡眠同盟による強壯化はフランス人（ド・ラ・リシュボディエール）が勧め、家畜小屋の空気を吸うことはスウェーデン人の肺結核患者に処方されている。

他の人々にとってもそうである。学問の対象はもはや情感の対象ではない。名誉ある男が激怒するような名誉毀損は法学者にとっては名誉毀損の学説彙纂[パンデクテン]の項目のための ― 証拠 ― 注釈 ― 説明である。病院の医師は、熱病のため苦しんでいる患者のベッドの許で、自分の臨床講義からこれに合う数段落を冷静に復習する。戦場における ― つまり人類の肉の屠殺台で ― 砕けた人間達を踏み越えて行く将校達はただ自分の士官学校での隊形変換と四分の一旋回を考えているだけで、これは全世代を『観相学的断編』に切り取るために必要だったのである。その背後を行く戦闘画家は、切り刻まれた人間や横たわっている傷口の一つ一つを確かに見て、考えているけれども、しかし画家はすべてをデュッセルドルフでの画廊のために写し取ろうと思っており、この悲惨さに対する純粹に人間的感情は、自分の戦争画によって初めて他人の許や、恐らくはまた ― 自分の許でも見いだすものである。 ― かくてどの認識も我々の心の上に石の外皮を有するもので、哲学的認識のみがそうなのではない。 ―

ベアータはほとんど自分の目を、他ならぬ（そう自分で考えたように）逝去した者に向けられた関心に捧げていた。彼女の重苦しい視線はたびたび「隠者の山」に向けられていた。夕方には自らそこを訪れて、眠れる者に、友情がなお差しだし得る最後のものを過剰にもたらした。かくて不幸の爪は優しい心に最も深く食い込んだ。それで人間が流す涙は、地上が人間に与えるものが少なく、人間が地上から離れることが高いほどに、より大きく、より速やかになる。丁度他のより地上から高く離れている雲が最も大きな雨粒を落とすようなものである。ベアータを元気付けるものは、彼女がある種の貧民に週ごとに、あるいは喜びの後いつでも分け与える喜捨の倍増の他になかった。それに弁理公使夫人や彼女のラウラ、そして二人の庭師の子供達との孤独な交誼の他になかった。

二人の旅行者は旅して快方に向かった。フェンク博士は田舎の医師達を職権上訪問したので、医師達は薬を作っており、更に報復処置を取って、処方箋を出している薬剤師達も訪問したので、幸い彼はしばしば大いに立腹することになって、悲しんでいるまともな時間はなかった。このようにして田舎にいる地方医（まさに伝染病が流行っているときは除くが）や、幼い非キリスト教徒達の再生を緊急洗礼でその誕生の際よりも上手に執り行う産婆達は、これはファラオも重宝したであろうもので、嘆きの中のペスト看護人を再び気丈な者にした。怒りというのは悲しみにとって素晴らしい下剤であって、未亡人や孤児達の許で封印をしたり目録を作ったりする裁判関係の人々はこの者達をどんなに怒らせても十分ではない。それ故私は将来、私の死がとてこたえる私の相続人達に遺言して残すものは、それに対する薬、つまり故人に対する立腹に他ならないようにしている。

両者はとうとう正反対の動悸の許、また戻って来た。その途次オットマルの騎士領ルーエシュタットに差し掛かり、公園の無人の神殿のそばを通りかかった。しかし神殿は照明されていた。夜の中に遠くまで照らされていた。神殿の周りには狩猟服の一群の蜂の群れが集まっていて、宮廷の半ばの人々が見られた。フェンクとグスタフはそこでますます増えて行く殿方や馬の間を抜けて行った。彗星のように一つの星から次の星へと通過して行き、教会の中へ入った。その中には一人、二人の思いがけない人物がいた ― 侯爵と一人の死者であった。奥の祭壇で戦っている者は、思いがけない人物ではなく、牧師であった。グスタフとフェンクは告解の椅子に押し込まれた。グスタフは自分の目をほとんど侯爵から離せられなかった。侯爵は作法の人々や大都会の人々、葬儀連絡人によく見られる

かの高貴な無関心の顔を死者に対して軽く向けていた。 — 侯爵は偉いさんのかの心を有していた。これは良い意味での化石で、彼らの固い部分の中で最初に固い部分であり、まことに良くこう告げているものである。自分達は魂の不死を信じていて、自分達が自分達の一人を埋葬するときには、上の空になる、と。

突然ドクトルは告解席の教卓にもたれかかって、顔を覆った。彼はまた立ち上がって、乾いたままにできない目で、覆いを取られた死体の方を見て、見ようとしたができていなかった。グスタフも覗き見た。その形姿は見覚えがあったが、名前は知らず、その名を言葉を失ったドクトルに尋ねて得られないでいた。 — とうとう弔辞を読む者が名前を呼んだ。まず私が二重ドイツ文字で言う必要のないことであるが、今多くの苛酷な目と対の悲しみにくれた目が安らっているその死者は俳優のライネッケ[Reinecke, 1745-87]のように見えたのであり、その高貴な姿も今や重い墓石で崩されているのである。牧師の真似をしてオットマルの名前を呼ぶ必要は私にはないことであろう。哀れなドクトルはしばらく前から、痛みの余り彼の神経が神経プレパレート用に取り出されて、その段取りを行っている最中のように見えた。グスタフが故人に対してではなく、ただ悲しんでいる友人に關心を寄せていたのは奇妙なことであった。

善良なこの医学参事官は自分の手の中にあつた賛美歌の本を強引にくしゃくしゃに丸めた。死亡証明を取りにただ三分間だけここに来ていた侯爵が馬で出て行くのに彼は気付かなかった。しかし彼は牧師の言葉は一言ずつ耳にして、自分の友の最新の病歴について若干知ろうとした。しかし彼が知ったのはその死因（高熱）だけであった。最後にすべてが終わり、彼は黙ったまま葬儀の蠟燭の間を凝視したまま棺の方へ向かって行き、視線も向けず、物音も立てずに、左手で邪魔なものを押しのけ、右手で眠れる者の手を震えながら求めた。とうとう彼が、アルプスと歳月とで自分の手から離されていた手をまた握ることができたとき、長いこと憧れていた人物の許により間近にいたわけではなく、再会の喜びもなかったけれども、それでもなお彼の悲しみは密で、濃く、姿を取ることなく自分の魂全体の上に重苦しく身を投げ出していた。しかし彼がかの手に二つのほくろを、普段握手するときよく感じていたいぼを再び見いだしたとき、苦痛は過去のヴェールの姿をまとった。ミラノがその葡萄畑の花々と共に、その栗の木の梢と共に、両者の許での美しい日々と共に通過して行き、もはや何も有しない二人の人間を悲しげに見つめた。 — このとき彼は涙の滴る両目と共に、永遠に乾いた両目の上にくずおれたことであろうが、葬儀執行人がこう言った。「それは好ましくありません、良くありません」と。奪われた友全体の墓から彼に残されたものはただ一房の巻き毛だけで、これは目にとってはたいしたものではないけれども、感ずる指にとってはかなりのものである。彼は、最後の手紙をとっても悲しく結んだ手を穏やかにまた、触れていなかった手の上に重ねて、彼のオットマルから長い別れをした。

彼は気付いていなかったが、故人のスピッツと二人の剃髪した見知らぬ人間がそこに居合わせていた。そのうちの一人は六本の指を有していた。 — 教会の外で途中、一方の道はオットマルの館へ、他方の道は「隠者の山」へ通ずる所で、グスタフとフェンクは互いに黙した、慰めのない問いで見つめ合い — 互いに別れることで答えた。ドクトルは向きを変え、自分の旅を続けた。 — グスタフは公園に行つて、「隠者の山」の麓で運命について — これは友人とか自分自身の運命ではなく — すべての人間の運命につ

いて思いを巡らした。...

で、私はいつこのことを書いているのか。今日十一月十六日で、棺に収められたオットマルの聖名祝日である。 —

第三十三扇形、あるいは第二十五の聖三位一体祭の扇形

愛の大きなアロエの花、あるいは墓場 — 夢 — オルガンと私の卒中、毛皮長靴、氷の学生頭巾

グスタフの中では友人の像からの最高の明かりは次第に恋人の像の中へ移って行った。臨終の床で彼の中へ永遠の光線を放った彼女の顔は今ようやく糸杉[喪の象徴]の影から歩み出てきた。孤独なピラミッドが埋葬者の隣に見守る天使として崇高に立っていた。彼は痛みを抱いて、しかしより穏やかな痛みを抱いて山を登って行った。彼は今や、大地にいる人間を侮辱しなかったという、そしてこの者をたびたび許してきたという言いようもなく甘美な慰めを有していた。アマンドゥスがもっと頻繁に、許すよう仕向けておればよかったのにと願った。自分が今や彼を人知れず、報われることなく、愛し、悼んでいることさえも、自分の傷付いた胸を温かく慰めて覆ってくれた。

上の方で彼は更に、人々が痛みで声高に叫ぶような若干の苦痛の茨の中へ入って行った。しかし直に彼の目は憧れるようにベアータの部屋のランプから庭を経て、山の方へ上がってくる明かりの橋を渡って、蛾のようにその明るい窓の方へ飛んで行った。彼はあるときは明かりを、あるときは明かりを遮る頭部しか目にしなかった。しかし彼はこの頭部を、他の女性が自分の頭を飾るよりも美しく自分の頭の中で飾った。彼は半ば跪き、半ば立って、長い明かりの流れに視線を向けて、ピラミッドの台座に寄りかかっていた。疲れと眠れぬ夜のために彼の涙腺はかの圧迫しながらも刺激的な涙で満たされていた。この涙はしばしばきっかけなしに、苦くまた甘く病気の直前や疲れの直後に溢れ出てくるものである。

— 同じ理由で彼と外部世界の間にはさながら暗い霧の日かあるいは煙霧が広がっていた。これに対し彼の内部世界は一つのペンのスケッチ画からいつの間にか輝く油絵となり、それからモザイク画となり、最後には浮き彫り細工の画となっていた。 — 彼の前で諸世界と諸情景があちこち揺れて — 最後に夢が夜の外部世界全体をその瞼で閉ざして、その背後で新たに創造された楽園的世界を開始した。一人の死者に似て、彼の微睡む肉体は一つの墓標の横に横たわっていて、彼の精神は、全深淵の上にかかる天の沃野の中にあった。私は読者にその夢を同時に引き延ばし、終わらせた人物を示したら、その夢とその結末をすぐに語ることにしよう。

つまりベアータが — やって来た。彼女は彼の再来も、彼の最後の滞留のことも知り得なかった。オットマルの葬儀の間近さのため、グスタフの遠ざかりのため、グスタフの像は最後の登場以来深く彼女の心の中へ、さながら心の中を通じて、圧縮されていて、そして夏の遠ざかりのため、夏はその多彩な花と咲く絵画を日々数インチずつまた縮めていたけれども、こうした一切のため、ベアータの胸はまとまって一つの押し潰すような溜め息となり、この溜め息を声高な狩猟の館はその靄で詰め込み、彼女はより純なエーテルの圏を求めるようになり、その溜め息を墓塚の許で吐き出し、そこから新たな息の素材を吸い込もうとした。 — 陶酔的な心よ。汝はその熱い鼓動と共に勿論汝の血を余りに速く

循環させ、その流れる血で岸边や花々や生命を洗い続けている。しかし汝の過ちは、汝が粘着質の営みで流れない血の水で単なる脂肪の泥をまとうときよりも美しいものだ。

夢遊病のこの女性は、美しい眠れる若者を見たとき竦み上がった。彼女は、この静かな時に横切って行った庭全体の中に誰かいるとも思っていなかったし、誰かに会うとも思っていなかった。彼は跪いたまま穏やかに眠り込んでいた。彼の青白い顔は一つの美しい夢によって、昇る月とベアータの目によって光を帯びていた。彼はひよっとしたら単に眠っている振りをしているかもしれないということに彼女は思い至らなかった。そこで彼女は震えながら半歩前に進んで、まずは誰なのか確かめようと思ひ、次に目を見開いて、これまで単に一瞥することが許されていたその姿を見つめた。見つめながら、いつ見つめ終わったものか分からなくなった。とうとう彼女は自分の樂園に、今一度足を踏み込んだ後、背を向けた。しかしゆっくりと向きを変えて歩きながら、(びっくりはしなかったが)こう思った。「あの人は死んでいるのではないかしら」。そこでまた向きを変えて、その生きている呼吸に聞き入った。彼の横には二個の先の鋭い小石があった。私のインク壺ほどの大きさである。彼女は二度彼の側で屈み込んで(一度で済まそうとか足でしょうとは思わなかった)、彼がその先端に倒れ込まないように、小石を取り除いた。...

この情景はまことにアルファベット全紙、あるいは二十三全紙を一杯に使うべきところであろう。幸いこれは彼が目覚めると、まことに結構に始まるもので、読者は今日最高に幸せな男となるものである。...

さて彼女は今や古兵のように危険と一層馴染んで、彼は目覚めないであろうと確信を抱いたので、目覚めるのを恐れなくなり、ほとんど目覚めるのを願い始めるようになっていた。こう思い至ったからである。「夜風は体に悪いのではないかしら」。一 更に、二人の友が崇高に並んで休んでいるのに思い至り、彼女の青い目から一滴の露の雫が落ちた。それは大地の外で脈打つ心のためのものか、大地の中で止まっている心のためのものか、私には分からない。とうとう彼女は真面目に準備し始めて、そもそも遠くの方の物音で彼を目覚めさせ、彼の目覚めという気遣いなしに自分の感動に浸ろうとした。彼女は単に彼の側を通り過ぎようとした(四歩半離れていたから)、山の向こう側へ降りなければならなかったからである(向きを変えようと思ったら別の話である)。彼の微笑はますます増大する恍惚を告げていた。更に彼の顔の変化はいかなるものになるか、勿論彼女は関心があったが、しかし彼女は微笑んでいる夢想者から離れなければならなかった。そこで二歩ためらいながら進み、彼に近付き、そして彼から何歩か離れようとしたとき、突然オルガンが、今日オットマルが埋葬されたルーエシュタットの孤独な教会から、真夜中真面目に、訴えるように、あたかも死がオルガンを演奏しているかのように響き始めた。グスタフの顔は突然内的楽士の反映で神々しいものとなった。彼は目を閉ざしたまま立ち上がって、すばやく、硬直しているベアータの手を掴んで、眠りこけたまま彼女に言った。「幸せな魂よ、僕をすべて受け入れ給え。今や僕は君を得た、愛しいベアータよ、僕も死んでいる」。

このような言葉で終わった夢は、次のようなものであった。彼は果てしない沃野に沈み込んだ。これは美しい、段々に重ねられた大地の上に広がるものであった。真珠の輪のように連なった諸太陽の一つの虹が諸大地を捉えて、その周りを回っていた。諸太陽の圏は地平線に沈み込んで行ったが、大きな丸い野原の縁には千もの赤い諸太陽のブリリアント形の帯が立っていて、愛しい天は千もの穏やかな目を開けていた。一 木々ほどの高さ

の巨大な花々の杜や並木道が透明なジグザグ模様で沃野に引かれていた。高い幹の薔薇がこの沃野に金赤色の影を投げかけていた。ヒアシンスは青い影で、そしてすべての合流する影が銀色の霧氷を放っていた。魔術的な夕方の微光が影の岸辺の間と野の花々の茎を通じて喜ばしい赤面のように波立っていた。そしてグスタフは、これは永遠の夕べであり、永遠の歓喜であると感じていた。 — 彼から離れた、去って行く諸太陽の間近で、至福の魂達が、合流して行く夕方の光線の中へ没して行き、くぐもった歓呼の声が夕方の鐘のように天上的なアルカディアの上に木霊した。 — ただグスタフは見棄てられて花々の銀色の影の中に横たわっていて、果てしもなく懂れた。しかし歓呼する魂は一人もやって来なかった。とうとう大気中で二つの体が一つの薄い夕方の雲の中へ別々に包まれ、落下する雲が二つの精神、ベアータとアマンドゥスを剥き出しにした。 — アマンドゥスはベアータをグスタフの腕に導こうとしたが、しかしアマンドゥスは銀色の影の中へ入れなかった。 — グスタフは彼女の腕の中へ向かって落ちようとしたが、しかし彼は銀色の影から出られなかった。 — 「いや、君はまだ死んでいないだけなのだ」とアマンドゥスの魂が叫んだ。「しかし最後の太陽が沈んだら、君の銀色の影も万物の上に流れて、君の大地は君から舞い上がり、君は君の恋人の許に沈むことだろう」。 — 太陽が次々に崩れた。 — ベアータがその両腕をこちらの下の方へ広げた — 最後の太陽が沈んだ

— 諸世界とその棺とを震わせて砕くことのできるオルガンの音色が飛翔する天のようにこちら側へ響いてきて、その広大な震えで彼から繊維の覆いを解き放ち、その銀色の影の上には一つの歓喜が吹き寄せ、彼を持ち上げ、そして彼は — ベアータの本当の手を受け取って、目を覚ましつつ夢想していて、見ることなく、次の言葉を彼女に言った。「幸せな魂よ、僕をすべて受け入れ給え。今や僕は君を得た、愛しいベアータよ、僕も死んでいる」。彼は彼女の手を善人が徳操を握りしめるように固く握った。彼女が振りほどこうと試みて、彼はようやく彼の楽園と夢から覚めた。彼の幸せな両目は見開かれて、天と天とを交換した。両目の前には崇高に、白い、月光の溢れる大地と公園の緑地と千もの星へと縮小化された諸太陽と、すべての諸太陽の日没前には彼の到達し得なかった愛しい魂とが立っていた。 — グスタフはこう考えざるを得なかった。夢が自分の眠りから人生へと引越したのであり、自分は眠っていなかったのであろう、と。彼の精神は彼の前の偉大な垂直の諸観念を動かすことはできず、和合させることができなかった。「何という世界に僕らはあるのか」と彼はベアータに尋ねた。しかしほとんど質問に答えるような崇高な調子であった。彼の手は彼女の引いて行く手と固く絡まっていた。「貴方はまだ夢を見ていらっしゃるのです」と彼女は穏やかに震えながら言った。この貴方とその声とが突然彼の夢を現在から背景へと押し戻した。しかしその夢は、彼の手の許で争っている形姿を彼にとって一層好ましく親しみ深いものにしていて、夢の中での会話が彼の中で現実の会話のように思われて、彼の精神はいまだに一人の天使がその恍惚をかき鳴らした崇高に震え続ける一つの弦であった。 — そして今や向こうの荒涼たる神殿でオルガンが新たに鳴り響いて、その場面を、二人の魂がまだ住んでいた現世的土壌から引き上げた。ベアータの姿勢が揺れ、彼女の唇が震え、目から溢れてきたので — 彼にはまた、あたかも夢が真実となったかのように、あたかも偉大な音色が彼と彼女を大地から抱擁の国へと引き上げて行くかのように思われ、彼の本性はそのすべての彼の境界にまで達した。 — 「ベアータ」と彼は、美しい、争う情感のせいでこの世を去っていく形姿に向かって言った、

「ベアータ、僕らは今死んで行く ― 僕らが死んだら、僕は君に僕の愛を告げ、君を抱擁する ― 僕らの横の死者が僕の夢に現れて、僕にまた君の手を渡したのだ」。...彼女は死者の墓塚に落ちかかろうとした ― しかし彼がこの落ちて行く天使を両腕に抱き留めた。 ― 彼は彼女の眠り込んだ頭が彼の頭の下に落ちて行くがままにして、彼女の止まって行く心臓の下で、彼の心臓の動悸が燃え上がった ― 彼が、両腕を微睡む浄福の女性の周りに置き、大地で眠る夜を孤独に見つめ、ただ一台が語りかけるオルガンの音に孤独に聞き入り、眠りの圏内で孤独に目覚めていたとき、それは崇高な瞬間[分秒]であった。...

崇高な瞬間は過ぎて行き、最も浄福な瞬間が始まった。ベアータは頭を持ち上げ、顔を後ろに反らして、グスタフと天とに、混乱して泣きはらした目と、疲れ切った魂と、神々しい面影と、愛や徳操や美がこの地上の一つの天の中へ押し込め得る一切を見せていた。

―― するとこの世ならぬ千もの天を通過してこの地上に落ちて来る瞬間がこの地上に達した。人間の心が至高の愛へと昂揚し、二人の魂のために、二人の世界のために脈打つ瞬間である。 ― この瞬間が、すべての地上の言葉が消え失せた唇同士を和合させ、重苦しい恍惚と戦っている心同士を和合させ、二つの高い炎のように絡み合っている近しい魂同士を和合させた。...

― ほとんど情感では、ましてや言葉では捉えられないかの瞬間に二人が拉致された所の花と咲く世界の風景画を私に求めないで欲しい。私に太陽の影絵を求めるようなものであろう。 ― かの瞬間の後、ベアータは、その体はすでに大なる涙の下、嵐の雨に打たれた小さな花のように沈んでいて、墓塚に腰掛けようとしていた。彼女は彼を穏やかに一方の手で自分から押し返し、他方の手は彼に任せていた。このとき彼は自分の広い魂を開け放って、彼女に一切のこと、自分の来歴や、自分の夢、自分の戦いのことを話した。彼ほど自分の幸運の時により率直であった人間はいなかった。この時ほど抱擁の瞬間[分秒]の後で愛がより内気で[虚けて]あることはなかった。ベアータの場合、いつものように、涙の水の上には薄く喜びの油膜が浮かんでいた。自分の前に立っている受難を彼女は乾いた確固とした視線で見つめた。しかしそれは思い出された受難でもなければ、自分の前に立っている歓喜でもなかった。今や彼女はほとんど語る勇気を、ほとんど思い出す勇気を、ほとんど有頂天となる勇気を持ってなかった。雲の隙間の開いた階段 を昇って行く月が白い小さな雲に覆われたとき、彼に対して彼女はおずおずとした目で見上げただけだった。しかしより厚い雲が月のトルソを埋葬したとき、両者は自分達の人生の最も美しい日を終わりとし、別れながら自分達には他の別れはないと感じていた。

一人っきりの部屋でベアータは考えることが、感ずることが、思い出すことができなかった。彼女は喜びの涙はいかなるものか知った。彼女はその涙を流し続けた。ようやく静めようと思っても、それができなかった彼女の目を閉ざす眠りがやって来たとき、彼女はすでに天上的な雫の下に覆われていた。 ―

君達、無垢の魂よ、君達には亡き人々に対してよりもより良く言える。穏やかに眠り給えと。一般に我々にとって、つまり私と読者にとって長編小説の恋人達の華麗な体力的役割は気に入らない。一方の人物が、このような歓喜の光輝の雲の雨を享受するに値しないか、他方の人物がそのきっかけとなることに値しないかであるからである。しかし我々両人はここでは何に対しても異議はない。...君達、愛している者達よ、君達のびっこの伝記

作者が天の御加護があってその筆をブランシャール[Blanchard, 1738-1809]の[飛行機の]翼とすることができて、それで君達を宮廷の坑内支保や坑内ガスからどこかの自由なポプラ島へと運ぶことができさえすればいい、その島は南洋であろうと、地中海であろうと。

一 私はそれができないので、それでその思いを抱いている。それで私はアウエンタールやシェーラウへ行くたびに、君達が、私が海洋で見るかのような、かのポプラ谷や薔薇の谷で、ドイツの冬に遭わずに、永遠の花盛りの許、倫理的な工場主の毒舌の顔に遭わずに、小川のせせらぎの他には危険なつぶやきを知らずに、入り乱れた花々の混乱の他には何ら面倒な混乱に遭わず、天の平和な星の他にはより厳しい星形勲章の影響を受けずに、無邪気な歓喜と休息の中で呼吸することが許されるならば、いつまでもという訳ではないが、しかし君達の初恋の花の数ヶ月を通じて、そのことが許されるならば、何という贈り物を私は君達にしていることか私は自賛するのである。 一

しかしこれは非人間的に難しいことである。それに私はそれにふさわしい男とは最も言えない。このような幸福は競り上げ難く、まさにそれ故守り難い。ここではむしろ執筆に夢中になっているある病人の幸福について一言述べたのを許して頂きたい。この者はそれでもある幸福を得たがっていて、まさに先の至福の執筆者本人である。つまり私は病気がちの人物である自分について一言述べたい。私はまた牛舎小屋から戻って来て、幸い肺病は癒えた。ただそれ以来卒中の徴候が増えてきていて、私をモグラのように叩こうとしている。まさに私が、モグラがその塚を築くように、私の学名名声のバビロンの塔を築き上げようとするときに打ち殺そうとしているのである。幸い私はまさにハラーの大生理学や小生理学、それにニコライの『医薬の材料について』、また私の借りられる一切の医学本と付き合っていて、卒中に対する私の医学的知識で立派な榴弾砲火を放つことができるのである。私はこの砲火を私の足に向けている。私は長い脚を煉獄の中のように大きな毛皮長靴の中に収めていて、縮んでいる脚は毛皮の編み上げ靴に入れている次第である。つまり私は民主主義者に似てこの靴で 一 つまり何人かの学者のように足に底を付ける具合の幅広の辛子膏薬で 一 病気の素材を上部から下部へ押し下げることができると想像するとき、私は自分の側に最古の月のドクトルやペスト看護人を有することになるのである。それでも凍てつくとき、更に進んだことをする。つまり私は高い氷帽子を削りくぼめ、かき取って、凍ったナイトキャップ^{*原注1}の下でこう考えるのである。卒中やその半姉妹の半身不随が私の下から襲っても、熱い足の靴を通じての一方の極と、氷の柄頭、あるいは凍えた殉教者の王冠を通じての他方の極から、それが発生したところにまた戻るならば、そして私を一方の下の極はさながら夏で他方の上の極は冬である地球に贈るのであれば、それは不思議なことではなかろう、と。...しかし読者は一度立派な本から博愛的目を我々に、つまりその著者に投げかけて欲しい。我々著者は努力して、入門書や殺害に対する説教、定期的な新聞とか月経や切り抜きとか他の啓蒙的厄介事を仕上げるのである。しかし我々はこのことで我々の肉体をぼろぼろにし、削ってしまう。 一 しかし誰一人として我々のことを本気に気にかけていない。かくて私や私の執筆の組合全員が垂直に立っていて、喜んで長い光線を半球全体の上に乱射している（というのは一度ではそれ以上に世の球や

*原注1 中の窪んだ氷が、頭痛や目眩、狂気が生じているとき、周知のように頭の上に置かれる。

他の球の全体を照らし出せないからで、アメリカ全体が我々の驚ペンでは欠けている)、かくて我々は最初のキリスト教徒に似ることになって、彼らはピッチと亜麻布に包まれて、自分達を生きたピッチの松明としてネロの庭園の上で輝くことで、明かりを同時に自分達の脂肪と生命とで自ら与えたのである。...

「そしてここで」 — と長編小説の織物業者達は言う — 「ある場面が生ずるが、これを読者は考えることができようか、私の筆は及ばないものである」と。これは私には余りに愚かに見える。私もそれを描写することはできないだろうが、しかし描写してみるのである。このような著者達は余り誠実ではなく、すでに読者が前もって頁をめくっているような場面で、例えばすべての者が、両親や子供達が封土空位や絞首刑の日のように待ち伏せしている死の場面とかで、安楽椅子から飛び上がってこう言うだろうか。自らし給え、と。それはあたかもシカネーダー[Schikaneder, 1751-1812]の一座がリア王の極めて混乱した場面で舞台の端に行き、観客に、リア王の顔を思い浮かべて欲しい、当方としては模倣しかねると請け合うようなものではないか。 — まことに読者が考えられること、これは著者もできる。 — すべての著者の全鼓動にかけて — まだより容易に考えることができ、従って描写できるのである。読者の空想もまた、その空想のスポークには一度先行する諸場面が介入していて、それを動かしているのであって、容易に最後の段[場面]のどのような描写であっても最強の空想へと拉致されることであろう。 — その段は描写できないという情けない描写の場合を除いて。

これに対して私の場合、自分はすべてに取りかかると請け合える。それ故私はすでに復活祭の市に備えて、私の出版社と約束しているのである。つまり極めて激しい場면을植字するために数ポンドのダッシュと一ポンドの疑問符と感嘆符の分をもっと多く用意するように、と。私はその際自分の卒中性の頭をほとんど悩ませたくないからである。

第三十四扇形、あるいは第一待降節の扇形 オットマル — 教会 — オルガン

翌朝は館ではある件につき騒ぎが生じていたが、この件はフェンク博士が丁度一週間後に — オットマルからの手紙で知ったものである。

— 今日ほど悲しい思いで或る扇形とか日曜日を始めたことはなかった。私の衰え行く体、フェンク宛の次の手紙は私の許に帽子の弔章のように掛かっている。私は手紙が理解できればいいと思う、 — そうすれば忘れ難い十一月の時は決して私の生涯に入り込むことはなかったろうと思う。この時は、私の許で多くの別の時間が過ぎ去った後でも、居座り続けているもので、絶えず私を見つめているのである。 — 暗鬱な時よ。汝は年中汝の影を広げており、汝は私の前に立ちはだかり、汝の背後の燐光を放つ大地の光背が微光を発し、煙りを出すのが私には見えないようにしている。八十年の人間の時間は汝の影の下では秒単位の動きに見える。 — いや、私からかくも多くを奪わないで欲しい。... オットマルはこれと同じ時を葬儀の後有していて、そのことをドクトル宛に次のように描写している。

*

<私はそれ以来生きたまま埋葬された。私は死と話した、死は私に請け合った、 —

死後には死の他には何もない、と。 — 私が棺から出たとき、その代わりに大地全体が、そしてその上の少しばかりの喜びがその中に入れられた。…善良なるフェンクよ。何と私は変わったことだろう。すぐに戻って来給え。それ以来私の前ではすべての時間が、私や私の友人を捉えてしまう空の墓塚のように立ち尽くしている。誰が私の手を今一度棺の所で握りしめたか、多分私は耳にしたと思う。…得難い友よ、速やかに来給え。

私が以前から生きながらの埋葬をどんなに恐れていたか、貴兄はもう忘れたろうか。眠り込む最中、私はよく飛び起きる。気を失ってそのまま埋葬され、棺の蓋で押し上げようと思う腕がかなわなくなってしまうと思いつくのだ。旅では、私は病気になったときはいつでも、私を一週間以内に埋葬したら幽霊となって現れ、責任を負わせるつもりだと脅したものだ。この恐れが私の幸運となった。さもないければ、棺桶で私は殺されていたことだろう。

数週間前、私の昔の病気がぶり返した。高い熱病だ。その病気のまま私はルーエシュタットに急いだ。私の家の管理人に述べた最初の言葉は — 貴兄とは会えなかったので — 私が亡くなったら、すぐに埋葬するように、丸天井の中の空気はより容易に目覚めさせるからで、しかしその際、棺も、代々の地下納骨堂も一切閉ざさないように、というものだった。 — 公園の人気のない教会はいずれにせよ開いたままなのだ。更に彼には、私から離れることのない私のスピッツをいつも付けておくように述べた。その夜のうちに熱病は募った。しかし瀉血の際、私の記憶が途切れた。私は私の腕の周りで血が這って行くのを見たことだけをなお覚えている。こう考えたのであった。「これが我々にとって神聖な人間の血だ。これが我々の自我という空中楼阁、骨組みを固めているものだ。この中を我々の生命と衝動の目に見えない歯車が稼働しているものだ」と。この血がその後私の熱病の夜のすべての空想に対してほとぼしり出てきた。その中から血のように赤く沈み込んでいた宇宙が生じてきた。すべての人間が私には長い岸辺の所で奔流となって一緒に血を流しているように思われた。この奔流は大地を越えて、鯨飲する深みへ飛び落ちて行った。 — 健康な者は知らない、誰も模造しない、誰も耐えられない、ただ寝ている病人の魂のみに襲いかかる思念が、厭わしい思念が私の前を薄笑いを浮かべて通り過ぎて行った。創造主がいないのであれば、人間の中に張られていて、敵意ある本性なら引き裂くことができる隠された不安の弦に対して私は震えざるを得ないところであろう。しかしそんなことはない。御身、至善の主よ。御身は御身の手を不安の我々の装置に置かれていて、この弦が上に巻き付かれている地上の心を、弦が余りに激しく震えると、砕いてしまわれる。

私の性情の戦いは遂には失神した微睡眠となった。この微睡眠からは多くの者が目覚めるのだが、単に大地の下で死んでしまうのである。微睡眠の中私はひっそりと立っている教会へ運ばれた。侯爵と私のスピッツが居合わせた。しかし侯爵だけはまた立ち去った。私はひょっとしたらその夜の半ば横になっていたのかもしれない。私の中で遂には生命がびくついた。私の最初の思念は魂を絶えず引き裂いた。偶然犬が私の顔の上に踏み込んできた。突然、あたかも巨人の手が私の胸を曲げているかのような苦しみが深く私の上に降りてきて、棺の蓋が持ち上げられた車刑装置のように私の上にあるように思われた。…これは書いているだけで辛い、反復の可能性で不安な思いにかられるからである。…私は第二の生命の六角形の孵化蜜房から出てきた。死は私の前で遠くまでその千もの肢体、頭部、

骨を伸ばしていた。私は下の混沌とした深淵に立っているように思われた。私のはるか上の方で地球はその生者達を引き連れていた。私は生命と死に反吐が出た。私の隣に横たわっているもの、私の母でさえも、私は生命を砕くときの死の目でもあるかのように硬直して冷淡に見た。教会の壁の丸い鉄格子は空全体から月の微光を発する砕けた円盤だけを切り取っていて、月は地球という名の棺に天上的な棺の明かりを浴びせていた。荒涼たる教会、話し合う群衆のこの以前の市場は、死に絶えて、死者達によって掘り返されてそこにあった。 — 長い教会の窓は、月に陰影を付けられて、椅子の上に格子の影を投げかけていて — 祭具室には黒い喪の十字架が、死の十字勲章が置かれていた。 — 騎士達の剣や拍車は、それらや自分達をもはや動かすことのない散った肢体を思い出させた。人工の花の乳呑み児の死者の花輪はここまで哀れな乳呑み児の供をしてきたものだった。乳呑み児の手は本物の花を摘み取る前に死によって手折られたのであった。 — 石造の僧侶や騎士は風化していく手での窓際での長い黙した祈りを模して — 教会で語る生きたものは、塔の時計の振り子の鉄製の揺れの他には何もなかった。そしてあたかも時が重たい足取りで世間を越えて行き、足跡として墓塚から出て行くのを耳にしているかのような気がした。...

私は祭壇の段に腰掛けた。私の周りには月光が陰鬱な急いで去る雲の影と供にあった。私の精神は起き上がった。私は私がまだそうであった自我に向かって話しかけた。「おまえは何か、ここに座していて、思い出し、苦悩を有するものは何か。 — 汝よ、私よ、何ものかよ — 三十年前からこの自我の許を過ぎ去って行き、幼年時代、青春、人生と呼ばれていたあのもの、色の付いた群雲は一体どこに行ったのか — 私の自我はこの描かれた霧の中を通じて進んで行った — しかし私は霧を捉えられなかった — 霧は私から遠く離れて何か堅牢なものに見えた、私の許では滴る露の雫、あるいは所謂瞬間だ — 従って人生とは瞬間（つまりこの時間の露の小球）から瞬間へと移って行くことだ... さて私が今や死んだのであれば、現に私が今そうであるもの、これが、目的であったのであろうか。このせいで、私はこの明るさに満ちた地球のために、地球は私のために作られていたのだろうか。 — これで諸情景の終わりであろうか — そしてこの終わりを越えていくのだろうか。 — ひょっとしたら向こうに喜びがあるかもしれない — こちらには喜びはない、過ぎ去って行った喜びは喜びではないからであり、我々の諸瞬間はどの現在の瞬間をも千もの過ぎ去った瞬間へと薄めてしまう — 徳操がむしろこの世にはある。徳操は時間を越えている。 — 私の下ではすべてが眠っている。しかし私もそうすることにしよう。たとえ更に三十年自分は生きてると自分に思い込ませても、それでもまたここに横たわることになる — 今日の夜がまたやって来る — 私は私の棺に残っている、それからどうなる。...さて私が三分有するのであれば、一分は誕生のため、一分は生命のため、一分は死のために有するのであれば、何のためにそれらの瞬間を有するのか、と私は申し上げるであろう。 — しかし将来と過去の間にあるすべては一瞬間である — 我々は皆三瞬間を有するに過ぎない」。...偉大なる原本性よ — と私は初めて祈ろうとした — 御身は永遠を有する。...しかし現在でしかない者を考えると、人間的精神は維持し得ないもので、再び自らの地上に屈するものである。 — 「君達、逝ってしまった愛しい者達よ」と私は考えた、「君達は私にとって偉大すぎることはない。私の前に出現して、私の心から空しさの思いを取り上げ給え。そして私が愛するこ

とができ、私を温めることができる永遠の胸を私に見せ給え」。偶然私は私を見つめている私の哀れな犬を見た。この犬はそのより短い、より鈍い生で私の心をはなはだ揺さぶり、私は涙を出すほどに柔和になって、涙をいや増し、静めてくれる何ものかに憧れることになった。

これは私の上方にあったオルガンであった。私は癒やしてくれる泉に向かうように上のそのオルガンに向かって行った。そして私とその偉大な音色で夜の教会と聳の死者達を震撼させたとき、そしてその黙した唇にこれまで付着していた古くからの埃が私の周りに飛んだとき、私が愛したすべての亡き人々がその亡き情景の傍らを通り過ぎて行き、貴兄とミラノと「静かな国」とがやってくる。私は彼らにオルガンの音色で、単なる物語と化したものを語った。私は彼らを皆人生の飛行の中で今一度愛して、彼らに対する愛の余り死のうと欲し、彼らの手に私の魂を押し付けようと欲した。 — しかし私の押し付ける手の下にあったのは、単に木製のキーであった。 — 私はますます弱い音色にしていった。音色は私の周りを去っていく渦のように進んでいった。 — とうとう私は低い音色に賛美歌の本を置いて、絶えず送風器を開いて、音色と音色の間に黙した隙間が生ずることのないようにした。 — ざわざわという音色が、あたかも時の翼の背後を行くかのように流れ続けた。音色はすべての私の思い出と希望とを担っていた。その波の中を私の鼓動する心が泳いだ。...以前から震え続ける音色を聞くと私は悲しくなるものだった。

私は私の復活の地を去って、「隠者の山」の白いピラミッドの方を見た。そこでは何も復活せず、生はより深く眠っていた。ピラミッドは月光に包まれて立っていた。そして私と一緒に長い雲の影が移って行った。秋は葉や木々をかがめていた。棘のある草地の切り株にはもはや花は揺れていず、花は家畜の口に消えていた。蝸牛はよだれと共にその殻、寝床に収まっていた。そして朝方地球が真っ赤な血染めの雲と共にくすんだ太陽の方を向いたとき、私は以前の私の喜ばしい地球をもはや有せず、地球を永久に地下納骨所に置いてきたと感じた。そして私が再び見いだした人々は、私には死が貸し出して、生が起き上がらせ、ヨーロッパやアジア、アフリカ、アメリカでこうした姿で活動するよう押しやっている死体に見えた。..

このように私は今も考えている。私はまた生涯、自分は死ななければならないというこの確信の悲しい印象を持ち運ぶつもりである。というのはやっと一週間前にこのことに気付いたからである。以前はまことによく、臨終の床や劇場、弔辞での自分の感受性を得意に思っていたものである。子供は死を理解しない。その戯れる現存在の刻一刻がその微光で子供の小さな墓から守ってくれる。商売の人間、喜び浮かれた人間も死をほとんど解しない。何という冷淡さで、千人もの人間が人生は短いと言っているものか、解し難いほどである。次のようなことを要求しているのに、そのおしゃべりは明瞭ないびきに他ならない鈍感な人々の群れの厚い臉を開けさせることができないのは解し難いことである。汝の人生の数年を通じて、汝が横たわる死の床まで見通し給え — 垂れた不様な死者の手をして、ごつごつした病人の顔となって、白い大理石の目をしている汝を見給え、汝の今の時に、最後の夜の諍う空想の声が聞こえてくるのを聞き給え、と。この大いなる夜のこと、この夜は絶えず汝に歩み寄っていて、一時間過ぎるごとに一時間進んでいるのであり、蜻蛉の身の汝を、汝がたとえ今夕陽を浴び、あるいは黄昏の光を浴びていようとも、確実に倒してしまうものである。しかし両永遠が、我々の大地の両側で高く聳えていて、我々

は我々の深い峡谷を這い続け、掘り続けている。愚かに、盲いて、聾して、嚙みながら、もがきながら、我々が甲虫の頭でもって糞土を耕している通路より大きな通路を目にしな
いでいる。

しかしこの件以来、私の計画も終わりとなっている。この地上では何も完成できない。人生は私にとって些少なもので、私が祖国のために捧げ得るほとんど最小のものである。単に数年間という比較的大きな、あるいは比較的小さなお供と共に墓地に入り、乗り込むことになるだけである。喜びも消えてしまった。一度死を電気ウナギのように触れてしまった私の硬直した手は、多彩な蝶の鱗粉を余りに容易にその四枚の羽根からこすり落とし、それで私は羽根に触れることなく、ただ私の周囲に舞わせるだけである。単に不幸と仕事だけが十分に不透明で、それで未来が見通せない。殊に君達が、家主が喜びをむしろ引き入れたがる別な家から引っ越してくるときには、君達を私の家では歓迎することにしよう。

一 君達哀れな、青白い、天然顔料で作られた画像よ、君達人間よ、いや君達を私は二重に愛し、耐えることにする。というのは愛の他に何が、不滅という感情を通じて、再び死の灰の中から我々を救い出すものがあるかとなるからである。誰が君達の、君達が八十年と呼ぶ十二月の二日をもっと冷たく、もっと短いものにしてよかろうか。いや我々は単に震える影にすぎない。それでいて一つの影は他の影を砕こうとするのであろうか。

今や私は、何故人間は、一人の国王は、晩年修道院へ入るのか理解できる。人間は、自分の前から感覚世界が退き、すべてが大きく張られた喪章のように見え、他方単なる高次の第二世界がその輝きと共に、この黒い世界に掛かっているとき、宮廷とか取引所で何かする気になろうか。かくて天は、人が天を高い山上で覗くとき、その青色を外し、黒くなる。青色は天の色ではなく、我々の大気の色だからである。しかし太陽がその後、人生の燃え上がる封印のごとく、この夜に押されて、燃え続ける。

私は丁度星空を見上げている。しかし星空は私の魂を以前のようにもはや明るく照らさない。その諸太陽や諸地球は、私の散って行く地球同様に同じように風化して行く。或る世界に一分がその蛆の歯をかけるか、あるいは一千年がその鮫の歯をかけるか、それはどちらでも同じことで、その世界は砕けてしまう。この地球だけが空しいのではない。地球の隣で天を去って行き、地球とは単にその大きさと異なるすべてが空しい。そして御身、優しい太陽自身が、御身は、子供がお休みなさいと言うときの母親のごとく、地球が我々を運び去り、我々のベッドの周りに夜の帳を降ろすとき、我々を懇ろに見つめてくれるが、御身もいつかは御身の夜と御身の寝床に休み、光線を得るために一つの太陽を必要としている。 一

人々がより高い星々を、それどころか惑星やその植民地を死が我々を差し込む花々用桶としていること、例えばアメリカ人が死後ヨーロッパへ行くことを願うような按配であるのは従って奇妙なことである。我々の半球が 1000 マイルではなく、約 60000 マイル、周知の月のマイルの如く我々から離れてあるのでありさえすれば、ヨーロッパ人はアメリカ人の妄想にこたえて、アメリカを故人達のヴァルハラと見なすことであろう。いや、私の精神は、蒸し返された新たな版の地球よりも何か別なものを、天のどこかの糞土の塊、炎の塊で育つものよりは別の満足を、離れていく惑星の担うものよりはより長い人生を欲している。しかしそれについては何も分からない。

速やかに貴兄が私の巻き毛を切り取った私の頭のところに来給え。私が生きている限り、

貴兄が巻き毛盗人となった側面は、自分がそうであった者、そうでなるであろう者の記念として、何の飾りもしないでおくつもりだ。草々。

オットマル>

詩作する天才は青年時代、趣味の還俗者であり追跡者である。しかし後には趣味の改宗者となり使徒となり、年齢が進むと、歪んで、顕微鏡的、巨視的凹面鏡は、平らな面となり、自然を描くとき、自然を単に二重化するようになる。このようにして行為し、感受する天才は、原理の敵であった者から、そして徳操への突撃者であった者から、この両者のより強力な友となるのであり、一方より間違いの少ない人間達は決してそうはなれない。オットマルはいつか、今彼を非難し得る者を凌駕するようになることだろう。ちなみに私は彼をこの多くの伝記の経過の中で悪意を持って扱うことはせず、彼はそう望んでいないが、敬意を持って扱うことにするつもりだ。というのは彼の旅の前、そのとき私は何度か彼の過ちの熱い焦点に陥ったことがあり、我々は少しばかり仲違いしてしまったからである。— それ以来、私が彼を心から憎んでいると彼は思っている。しかし私は心から彼を愛していると思うが、しかし数百人の他の者同様に、私の秘かな耐え忍ぶ愛に特別な喜びを感じている。

第三十五扇形、あるいは聖アンドレアスの日[十一月三十日]の扇形
愛の日々 — エーフェルの愛 — オットマルの館と蠟人形

私は今日再度私の伝記のインク壺にペンを浸している。今や私の構築物は間もなく現在にぶつかるからである。— 聖なるクリスマス祭には追い付きたいと期待している。— 更に今日は聖アンドレアスの日であって、私の家主は子供達の歓声の下、部屋の中、古い鉢の中に白樺の木を据えたからである。これに家主はクリスマス、銀色の果実を結び付けて飾るつもりであった。そのようなことにかまけて私は裁判の日や期限を忘れてしまっている。

グスタフは愛の告白の翌朝、眠りから目覚めたのではなく — というのは人間生活でのこのような王侯の射撃[一等射的]の後では、眠れるのは単に人間の顔をした穴熊や雌の穴熊だけであったからで、— ざわつく歓喜の耳鳴りから目覚めたのであった。彼の内的目の周りでは歓喜が輪舞をなして、彼の意識はほとんど自分の享受には至れなかった。何という朝か。地球はこのような花嫁の飾りをして彼の前に現れたことはなかった。彼にとってはすべてが、エーフェルさえも、エーフェルのベアータとの愛の自慢でさえも彼の気に入った。運命は今日 — 彼の愛の喪失だけは除いて — 彼が無造作に自分の全体的至福で満たされて張りつめられた胸の中に投じなかったようなどんな有毒な先端も、どんな化膿性の破片も有していなかった。かくてしばしば至高の温かさは至高の冷たさや無力の代替となり、激しい観念の潜水鐘の下 — それは固定観念であれ、情熱的観念であれ、学問的観念であれ — 我々は全体的外的海洋から守られて潜り込むことになる。

ベアータも同じような具合であった。この穏やかな、震え続ける歓喜は第二の心臓であって、これが彼女の血管を満たし、彼女の神経を活気付け、彼女の頬の赤みを増した。と

いうのは愛は — 他の情熱は単に地震の如く、稲妻の如く我々の許に訪れるのに — 静かな透明な晩夏の日のようにその空全体と共に魂の中に不動に存在するからである。愛は詩人の至福の試食を与えてくれるもので、詩人の胸は花咲き続ける、響きわたる、微光の樂園に包まれていて、詩人はその中に乗り込んで行けるのであるが、その間詩人の外的肉体は樂園と自らを、ポーランド的糞土を越え、オランダ的沼を越え、シベリアの草原を越えて運んで行くのである。

いや、汝ら首都の道楽者よ。ここで私のカップルに日々の全体を提供している過去のような、そんな時が一分でも汝らの現在に恵まれているであろうか。汝らに恵まれるか、汝らの硬い心は、愛の至高の炎によって、火鏡によるダイヤモンドの如く、単に揮発させられるだけで、融合させられることはないのではないか。

しかし天の夕焼けは棚引いて行き、朝焼けの雲の縁取りをするように、ベアータの頬でも歓喜の赤みの傍らに羞恥心の赤みが見られた。 — もっとも恋人の姿が、天使の如く、彼女の天を飛んで行く時間よりも長く続くことはなかったのであるが。 — 両者とも互いに会いたいと憧れた。両者とも弁理公使夫人に見られることを恐れていた。露見や、それ以上に二人の情感についての判定を二人は好んで避けたことだろう。ある種の刺すような視線があった。これは優しい情感を（太陽光がアルプスのホライモリをそうするように）ずたずたにし、殺してしまうのである。最も美しい愛はその花卉を対象の前では自ら閉ざすのである。どうしてその愛は焦がすような宮廷の視線に耐えられよう。

洞察力を発揮してここで伝記作者は、この機会に偉いさん達の結婚生活を二言で称えておきたい。というのはこの生活は無垢の花と比較できるからである。フローラ[花の女神]達が多彩な子供達をそうするように、偉いさん達はその愛を何ものでも隠すことがない。

— 花々のように、互いに知り合い、愛し合うことなく、婚姻する。 — 花々のように子供達の世話をすることがなく — エジプトの孵化器のような具合の関与で子孫を孵化して行く。彼らの愛はそれどころか窓のところで凍った花のようなもので、これは温かくなると散ってしまうのである。従ってすべての化学的生理学的和合の中で、偉いさん達の下和合は、互いに情を発して指輪を交換する人物達がとてつもない冷淡さを広めるといふ利点を有するものである。かくて同じような珍しい冷たさというものは単に無機的アルカリ塩と硝酸の和合の際に見られるもので、ドゥ・モルヴォー氏は単純に珍しいものだと言っている。

ベアータは自分の主人公、つまり私の主人公に会いたいと憧れていた。そこで — 自分の願いを逸するために、数日間マウセンバッハの母親の許に帰った。私は彼女のパトロンとなり、彼女のために弁じたい。彼女がそうしたのは、ただ偶然に彼と出会いたいと思ったからであった。弁理公使夫人の許ではいつも意図的なものとなったことだろう。彼女がそうしたのは、好んで自ら気分を害して、ソクラテスのように喜びの杯を、口に当てる前に、まず流し空けたからである。彼女がそうしたのは、女性では稀であろうが — 母親の首にすがりついて、母親にすべてを話すためである。最後に彼女がそうしたのは、老父がすでに競売に付していたグスタフの肖像画を家で探し出すためであった。

私はすでにこの一切を彼女の帰還の日知っていた。私はマウセンバッハにいわば貴族の全体的ローマ政庁控訴院として赴いていた。哀れな宿の女将を処罰するためというよりは尋問するためであった。彼女は — パリのオペラでは重要な役目には俳優を二倍、三

倍に増やして準備しているように — 自分の夫の重要な役目に一人の影武者ではなく、それどころか一帯の十二人の人々を用心して準備していて、夫自身が欠けた場合演じ続けられるようにしていたからであった。このことから、如何に私の裁判所雇主は不義への傾向が少なく、むしろ徳操への傾向を有すると私は仮定することが許されたであろう。彼は、教区編入された不義密通者達の層全体がまさに自分の岸辺の前を通り過ぎて、自分が正義を行使してこの秘密結社を襲撃し、叩き出す道具となることにまことに喜びを感じていた。それ故彼は宿の女将にイエッヒャー[Jöcher]の『学者辞典』[1750]に当たるがごとく喜んで重要な著者達の名前を聞き出した。すると彼女は彼の徳操的耳に対するホメロスとなった。これは傷付いた英雄達の名前を皆歌い上げるのである。それ故彼は何も有していない彼女に同情から、彼の罰金刑のすべてを免じた。しかし不義密通の同盟、一座は搗碎機と圧搾器の中に入れられたり、あるいは吸い上げ機やポンプ胴が当てられた。

従ってマウセンバッハで不義密通の人物達が搾り出される際に裁判所雇主夫人は私に、娘が自分に語ったことを語って — 私に頼んだ。私とその恋人の以前の教育係ならばカップルを裂いて欲しい、自分の夫は恋愛は好みではないのだから、と。私は、自分がこのカップルと彼女自身に関する伝記に取り組んでいることとか、恋愛は伝記全体とカップルを接合する貼り膏薬、家具師の膠であって、これがないと私の本全体がばらばらになってしまうこととか、従って、私が彼から彼の恋愛を取り上げようとしたらイエナの書評家達を侮辱することになるということとは彼女に語るができなかった。 — しかし、それは不可能であって、というのはこのようなペアの恋愛は火に耐え、水も漏らさぬものであるからというほどのことは言えた。私は自分の感情で少しばかり素朴に彼女には見えたことだろう。彼女は自分自身の経験を考えていたのだから。そこで私は抜け目なく言い添えた。「ファルケンベルク家は数年前から盛んになってきていて、かなりの資本を貸しだしています」。彼女はただこう答えた。「幸い自分の夫は何もそのことは知りません」（というのは多量の秘密を彼女はすべての人間に語っていたが、しかし自分の夫には語らなかったのである）。 — 「夫はベアータにはすでに全く別の組み合わせを考えているのです」。それ以上私は聞き出せなかった。

— しかしひどい目に遭うのは主人公ばかりでなく、また伝記作者もそうである。というのは伝記作者は最後に激しい段の描写のせいで最大のものを背負い込まなければならず、しばしばこのような嵐の扇形で何週も咳き込まざるを得なくなるからである。私は読者にただ正直に前もって告白しようと思う。すでにこのような霧や嵐が先週の金曜日新館の上で吹き荒れて、土曜日にはアウエンタールや私の部屋を通過し、グスタフが真っ青になって私の許に来て、私にこう知らせたのである。ファルケンベルクの大尉夫人は、この人はその中間色の猫で私の第一扇形を専有し、周知のようにグスタフの母親なのであるが、彼女は — 本当にそうなのか、と。...しかしながら大胆に事は進捗している。というのは、私が私の伝記的エスコリアル宮やルーブル宮を作り上げ、最後に屋根の上で落成の挨拶をすることになったら、私は何ほどかのものを本棚に提供したことになり、これほどのものは世間にそう見られるものでなく、勿論通行中の書評家達を刺激して、こう言わせるものであるとも承知しているからである。「昼も夜も、夏も冬も、平日でもこのような男が書き上げたときされている。しかしそれはレディーではないと誰が知ろう」と。

さて従って、脅威の嵐が吹き上げる前には次の頁全体晴雨計が一度ずつ段々に下がって

行くものである。グスタフはいかに不在のベアータを愛していたか、誰でも、愛は対象が不在の間ほどにより優しくなり、より非利己主義的になることはないと感じたことのある者ならば察しがつくであろう。毎日彼は友人の墓地に聖なる墓地に行くがごとく行った。そこは彼の幸福の誕生の地であり、彼の繊維のすべてが至福に震えていた。毎日彼は三十分ごとに遅れてそうした。彼の魂の結婚の際唯一の目撃の目であった月が毎日三十分遅れて昇ったからである。月は、この彼らの場面の穏やかな装飾画家は、永遠に、愛する二人の太陽であったし、これからもそうであるだろう。月は二人の情感を海のように膨張させ、二人の目の中にも満潮を引き起こす。 — フォン・エーフェル氏は観察者の視線をグスタフに投げかけ、言った。「弁理公使夫人が貴方をそうさせた。私をフォン・レーパー嬢がそうさせたように」。ここで彼は私の主人公に愛の症例学全体を数え上げた。悲哀や沈黙、放心であり、これを彼はベアータの許で感じ取っていて、こう結論付けた。彼女の心はもはや空ではない、自分がその中にいると自分は思う、と。エーフェルは女性が好きなようにあしらおうとも、彼はこう結論付けるのであった。彼女は自分を死ぬほど愛している、と。女性が冗談で、大目に見て、親密に彼と接したら、いずれにせよ彼はこう言った。「これほど確かなものはない。しかしこの女性はもっと自制すべきであろう」。 — 女性が別の極端なことをして、彼に何の視線も、何の命令も与えずに、せいぜい嘲笑を投げかけ、どんな些細なことも恵んでくれないときには、彼はこう誓った。「こんな女性が好む男性を百人の中から選び出すとなると、この女性だけが目に留めない男だ」。 — 女性が無関心という中央の道を進むと、彼はこう述べた。「女性達は偽装が上手で、その心が分かるのは悪魔か愛だけであろう」。彼の心の円形建物の中に入ろうと思う多くの女達をその中に収めるのは彼にとって不可能であった。そこで彼は余った者をいわば心膜に、ロッカーに入れるが如く、やはり心の懸かっているその膜の中に差し込んだ。 — 別の言葉で言えば、彼は愛の舞台を心から紙上に移して、爵位書や文書の貴族に似た手紙の恋、文書の恋を発案した。私は多くのこのような彼の手による手相学的気質の文書を手にしたことがあって、そこでは彼は蝶のように — ただ詩文の花々の上で愛を営み — 女性に宛てた一巻きのこのようなマドリガルやアナクレオン風な詩を書き上げた。これらは(レディーのことではなくマドリガルのことであるが)ゼリー風の甘美さと冷たさを有するものである。フォン・エーフェル氏やほとんどすべての文士の中隊はこのようなものである。その前では赤面しないような人々の前でのみ、人々は自賛するのであり、つまり卑俗な者達、従者や女性や子供達の前でのみそうするので、それに彼はグスタフに対して恋愛の点でそうしたので、彼の虚栄心は、グスタフが彼に対して行ったよりも声高な復讐に値した。グスタフはただ静かに心の中で描いた。他人は錯覚しているか、求めているときに、自分は恋人の心を得ていて、安心してこう言えるのは何と幸せなことか、つまり「彼女はおまえにその心を贈ってくれた」と。しかしこの裁判によらない贈与を恋敵の使節に気付かせること、そもそも誰かにそのことを気付かせることは、彼の状況が彼に禁じたばかりでなく、彼の性格もまた禁じた。私に対してすら彼は、全く何か別なことを打ち明けたり隠したりしなければならなくなったときより先に打ち明けることはなかった。 — 私はよく承知しているが、このような慎みは一つの過誤であって、これに対して近頃の小説は巧みに対処している。これらの小説の中では小説の主人公や書き手が小説のヒロインの許で一つの心を得たら、(ヒロインは、あたかも心が前方に餌袋のように付いているかのよ

うに、心を容易に与えるもので)、主人公とか書き手は(彼らは大抵同一人であるが)ヒロインに、干し鱈がその胃をそうするように、その心臓を取り出したり、中へ入れたりするように強いる。 — いや主人公自身が自ら心臓を、隠している胸から取り出して、手術者が切り取った腫瘍をそうするように二十人を越える人々にその征服された球を示し — そのボールをロレンツォの煙草缶のように扱い、 — ステッキの柄のように持ち運び、他人の心を自らの心同様に隠すことをしない。白状すると、このような女神達の特徴は書き手によって、ギリシアの芸術家達はその女神達を、ローマの画家達はその聖母を手本にして合成したときのモデル達に決して劣ることのないモデル達から合成され得るのであって、我々の長編小説における侯爵夫人とか公爵夫人等々は、著者達にとってそれらの夫人の代わりに小間使いの娘や他の娘達がモデルでなかったならばかくも見事に似合っているものではないと見抜けないならば、世間知が乏しいに違いないのである。かくて著者が自らを公爵として、その娘を侯爵夫人として描くことによって、長編小説はできあがり、自分の恋は永遠化される。丁度同じように琥珀の中に対になって永遠化されているのが見られる蜘蛛の恋のようなものである。私はこのことすべてを、私のグスタフを正当化するためではなく、単にグスタフの弁解をするために述べている。というのはこうした長編小説の執筆者達は、快い倫理的野蛮さが、これがグスタフに欠けていることを隠そうとして私は無駄に終わっているのであるが、彼らが彼同様にむしろ教育や、交際、繊細すぎる名誉心、読書(例えばリチャードソン)によって台無しにされている場合、彼らの許でも欠けてしまうであろうことにやはり思いを致すべきであろうからである。

私は恥ずかしくなるが、グスタフは恋愛においてはなほだ無知であって、彼は最良の長編小説の幾つかに当たって、自分が今ベアータに恋文を書くべきか調べようと思ったのであり、 — いや彼女の不在ということで彼女の想いに関して心配し、自分の振る舞いについて困惑することになった。しかし感情の強さは感情の欠如同様に弁舌を貧しくし、難しくする。幸い彼に向かってよく小さなラウラが飛びかかってきた。 — 公園ではなく(というのは美しい自然ほど美しい肌にインクの染みやコーヒーの染みを付けることはないからで)、部屋の中のことで、この女子生徒が女教師[ベアータ]の代わりとなった。

しかし復活した、より高貴な形姿が今や彼の恋の国に足を踏み入れてきた。オットマルは、二つの世界の両生類として — その両性的体についてこれまで控えの間で大いに話題となっていたが、その体自身と共に弁理公使夫人の部屋に現れた。夫人に対する彼の最初の言葉はこうであった。「もっと早く控えの間に現れなかったことをお許しください。

— 埋葬されていたので、もっと早く参ることが出来なかったのです。しかし自分は死後かくも早く楽土と」(ここで彼は壁紙の風景画を媚びるように見つめた)「その神々の許にやって来た最初の男となりましょう」。これは単に諷刺的な悪意であった。周知のようにすでにすべての紳士の美学における定評ある一節は、紳士は — リヨンにいる私の兄も異存はないであろう — 女達に対して言わなければならないお世辞から、率直さの調子や表情を奪わなければならないというもので、かつては古典古代の洒落者達はその甘いささやきにこの率直さを付与していたものである。この嘲笑的世辞に彼は女性や宮廷に対する自分の不満をまとわせていた。女達に彼は激していた。女達は — 彼の思うに

一 恋愛の中で恋愛しか求めなかったからである。^{*原注¹} 他方男の方は恋愛のとき、もっとより高い、宗教的、名誉心のある情感を融合させる術を心得ているのであって 一 女達の感情は単に急使にすぎず、女性的熱の高さはすべて、単に急な発熱にすぎないからで、女達は、キリスト自身が女達の前で講義しても、最大の感動の最中、そのチョッキや靴下に目を向けるであろうからというものであった。宮廷ではその冷淡さや、自分の兄のこと、民衆への抑圧のことで彼は怒っていた。その抑圧を目にすると、彼は克服しようもない痛みを満たされた。それ故他の国々についての彼の紀行文は自分自身の国に対する一つの諷刺であって、フランスの作家が、東洋のサルタンやボスの下でしばらく西洋の頭目の絵を描いて罰していたように、彼の物語では南方は北方の采邑保有者であり、パスキーノであった。彼が最近の彼の手紙で見たような穏やかな人間的忍耐は、その手紙のインクを吸い取り、封印するまでしか 一 あるいは散歩している間しか 一 あるいはワインの醗酵の後での穏やかな神経の弛緩の間しか、保たれることがなかった。それに彼は、自分自身が尊敬していない者達によって尊敬されることを大して気にかけていなかった。偉大な哲学的、共和主義的理念や理想の下では、現在の些細なことは目に見えない軽蔑すべきものとなっていた。殊に今、未来の世界とか将来の諸世界を、その上に立ってかの未来の世界を覗いている薄い世界が暗いものにして、丁度黒い鏡の望遠鏡では太陽しか眺められないような時にはそうであった。かくて例えば彼は弁理公使夫人の許でグロテスクな五分間を次のようにして過ごしたが、つまり彼は 一 魂の本来の肉体を形成するのは単に脳と脊髄と神経であるので 一 最も理性的な宮廷のレディー達と最も美しい宮廷の紳士達の皮膚を考えの中で剥いで、更に彼らの骨を取り出し、その周りのわずかばかりの肉体や腸を除いて考え、遂にはオットマン[褥椅子]の上では脳の柄頭と共に髓の尾しか残らせないようにした。その後彼はこの逆向きの小槌とか上向きの尾を互いに攻撃させ、演じさせ、甘いささやきを言うようにさせて、自分が自ら頭皮を剥いで、鱗を取った生まれながらの極めて利発な人々のことを心の中で笑った。これは多くの人が哲学的誹謗と呼んでいるものである。

新館から彼は旧館のグスタフの許に急いだ。グスタフは彼を避けているように見えた。しかし彼がどのようにしてグスタフと夙に知り合いになったのか、どのようにして彼は最初の手紙を渡すことができたのか、何故彼はグスタフのように（今もって）ある未知の地に定期的に赴くのか、何故彼はグスタフに避けられるのか、彼らは互いに旧館で一体どん三時間の会話をしたのか、この会話は両者の心の中での極めて温かい愛でもって終わったのであるが 一 これらについてはまだ長いヴェールが掛けられていて、私の推測が及ぶ段階ではない。というのは勿論私は様々な推測を有しているが、しかしそれはとても異常なもので、それをもっと正当化し得るまでは読者に早々と説明する勇気はないのである。どの血管も、どの考えも、心も目も、グスタフの中ではより大きくなって、新しい世界のために拡大した。彼は天才的人間と話しをしたからである。最も魂に近い読書の時であ

*原注 1 彼に対して第二版の注はこう答える。女達が恋愛の情感を純粹に、そしてそのようにして全能的に保っていることは、それだけ一層素晴らしいことである。他の情感もその中に漂っているが、しかし溶けていて、見通し難い。男達の場合、かの他の情感は単に恋愛の隣に独立して存在している。

れ、孤独な昂揚の時であっても、一人の偉大な魂が生き生きと君に働きかけ、その現在で君の魂と君の理想とを倍加し、君の考えを具体化するような時と比べたら何ほどのものであろう。

グスタフは館にいつまでも不在でいる者[ベアータ]のことを忘れるために、館からオットマルのところへ赴くことにした。雲の消えた黙した夕べで、すでに遠くへ去った夏の名残りではなく、晩夏の名残りであったが、ドクトルの帰還と社交を待っていてかなわなかった後、グスタフは出発したのであった。何一つない大気の中、翼の物音も、動悸する心臓も飛ぶことのない大気の中を永遠の太陽の他は生命を示すものがなくて、この太陽は大地の秋で青ざめることも落葉することもなく、永遠にあからさまに我々の地球を絶えず見つめているもので、その下では千もの目が目覚めたり、千もの目が閉じたりするものである。このような夕べには、我々が内部に抱えている古傷の包帯は外れてしまう。グスタフは静かにその村に着いた。オットマルの館を半ば囲んでいる庭園の入口で一人の少年が立っていて、ある崇高な歌^{*原注²}の崇高なメロディーを手回しオルガンの許でカナリアの聴覚に対して回していた。カナリアは歌を習わされていた。「これが啼くことができれば、大いに儲かるはずですよ」と小さなオルガン奏者は言った。オットマルはある樹に寄りかかって広大な夕焼けとこの夕べの音色に向かい合っていて立っていた。彼の外の太陽は、一つの鉛色の大きな雲の背後を沈んで行った。グスタフは、彼の側に行く前に、一つの茂った壁龕とその中の老いた庭師の前を通り過ぎなければならなかった。この庭師は二つの点で彼にとって不思議に思われた。まず彼の「今晚は」に対して、何の言葉も返さなかったことと、次にこのように老いて分別ある男が膝に箱庭を有していて、それを眺めていたことだった。木陰道を通って、ある日時計の許では、子供の墓塚のような盛り土と、その周りに咲いて、覆っている花々による一つの虹に気付いた。その盛り土の上では子供の服が、その中に何かがあり着ているかのように整えられていた。オットマルは彼をある穏やかさで出迎えたが、その穏やかさは単に激しい性格の者達の下ではなほだ抗しがたいほどに見られるもので、小さな声で言った。「自分はすべての四季の命日を祝っている。今日は晩夏の命日だ」。彼らは館の中へ入るとき、庭師の前を通り過ぎた。庭師は帽子を取らなかった。一 更に墓塚の上の空の服の前を通り過ぎたが、それはまだ花々の下にあつて、そして更に歌を奏しているピアニストの前を過ぎた。「若者よ、時間の小川を下って等々」。我々は荘厳なものを単に本の中で見るだけで、生活の中では見ることが稀なので、生活の場でのそれは後で一層強い感銘を残す。

更に注目しなければならないのは、オットマルの場合、最も強い感情であれ、その表現は、彼の世間との交際と年齢のせいで、その感情を折り取るある種の穏やかさで、抗しがたいほどに静かな渦となっていた。彼は四階の一部屋を開けた 一 子供達が従僕であった。その中での肝要なものは黒い背景と白い棺の絵とかそれらの棺の上の字ではなかった。「この中に私の父、この中に私の母、この中に私の春が眠る」。 一 その上に次のよう

*原注 2 「若者よ、時間の小川を下って、命の波の墓の中を私は眺める、命はここで沈んで行った等々」。冒頭は本来こういうものである。「悲しげに旅人は小川のほとりに座って、去って行く波を眺めた」。民謡

に書かれている大きな描かれた棺でもなかった。「この中に六千年がすべてのその人々と共に眠る」。 — そうではなく最も重要なものは描かれてはいないもので、その前でグスタフは深くお辞儀したのであった。美しい夫人で、我々のグスタフにほとんど似た子供に対して屈み込んでいた。少年が彼女に何かささやこうとしていたからである。更に彼がお辞儀したのは、ちぎれた地図を有している制服姿の老いた将校に対してで、そしてまた記念帳を手にした美しく若いイタリア人に対してお辞儀した。子供は胸に勿忘草の花束を有していて、夫人と二人の男達は黒い花束を有していた。しかし更に彼を驚かせたのは窓際のフェンク博士で、胸に一つの薔薇を挿していた。 — —

グスタフは彼の許に急いだ。しかしオットマルが止めた。「皆蠟製なのだ」と彼は言った。冷たい、運命に対して辛辣な調子ではなく、恭順な調子であった。「私に私の生涯で愛と喜びを与えてくれたものは皆、この部屋の中に立って留まっている。 — 亡くなった者には私は黒い花を与えた — 私の行方不明の子供にはまだ決めかねている。その服は外の庭にある。...神が胸に憩いを与えた者、憩いが剥き出しの心を包み、その痙攣を宥めるようにと神が与えた者、その者は自分が悼んでいる者達と同じ具合であろう。この者は運命が優しい形姿達を贈ると、穏やかにはっきりと目を開ける、その形姿達が去り、厭わしい形姿達が近寄ってくると、静かにまた目を閉ざす」。 — —

オットマルよ、君の波打つ諸力が高齢で折れてしまわないうちには君はそうできない。たとえ君の心を三日間憩いのために広いものとしても、四日目には歓喜の痙攣が、あるいは苦痛の痙攣が心を収縮させて、憩いを圧殺してしまう。

人間の中には戦慄せずには蠟人形を見られないものがある。グスタフもその一人であった。彼はこのように多くの死の戯れや猿真似に対して生命にしがみつくなかのようにオットマルの手を握った。...突然静かな館の中を何かが物音を立てた。...階段を上がって来て、部屋の中へ入って、...オットマルの首に抱きついた。...フェンクであった。フェンクはここで彼を死者達からの蘇りの後、初めて抱きしめ、密着した抱擁の下、オットマルと自分との間に介在していた国々や歳月や死との距離をどんなに小さなものにしても十分でないのであった。グスタフは、まだオットマルの手を握っていて、愛のこの同盟と一緒に引き込まれていた。死自身が通りかかっても、死はその冷たい利鎌を三人の密接に無言のまま温かく脈打つ心臓の中へ振るうことはできなかったであろう。 — 「話しておくれ、オットマルよ」とドクトルは言った、「この前君は黙っていた」。 — — オットマルの平静さは砕けた。「これらも（蠟人形）永遠に話すことはない」（と彼は沈んだ声で言った）

— 「蠟人形達は我々の許にすらいない — 我々自身と一緒にではない — 肉の格子や骨の格子が人間の魂の間にあるというのに、人間はこの地上で抱擁が存在すると思ってしまう。単に格子がぶつかり、格子の背後で一方の魂が他方の魂を考えているにすぎないのに」。

皆が静かになった — 晩鐘が沈黙の村の上を越えて語り、訴えるように高く低く響いた。 — オットマルは彼が名付けるところのその恐ろしい破滅の瞬間を得ていた。 —

彼は蠟製の夫人の許に近寄り、黒い死の花束を取って、胸の上に挿した。 — 彼は自分と二人の友を見つめ、冷たく単調に言った。「我々三人は生きているのであろう。 —

これが所謂存在で、我々が今なしていることだ。 — ここは何と静かなことか、至る所、地球全体の周りが静かで、 — 地球の周りにはまことに黙した夜が見られる、上方

の恒星の許でももっと明るくなることは決してないだろう」。―― 幸い侯爵とその狩りの一行が村の中を馬を駆り立て、獵笛を鳴らした。そして三人から夜を追い散らした。はなはだ我々は聴覚に依存していて、はなはだ外部世界は我々の内部世界に明かりや色彩を与えるものである。――

彼らが別の部屋で行ったことすべてについて、何も特記すべきことはなく、その中で彼らが見たことすべてについては三点を挿入しておく――つまりオットマルはほとんどただ子供達だけを従僕にしており、自分の周りにはただ全く若い家畜とただ花だけを置いていたということである。激しい性格というものは好んで穏やかなものを頼りとするからである。

学校教師のヴッツが丁度私の部屋に入ってきて、言った。当方としてはまだアンドレアスの日にこれほど執筆したことはない、と。そこで終了ということになる。

第三十六扇形、あるいは第二の待降節の扇形

上品な肉体からの円錐曲線 ― 誕生日のドラマ ― 鏡の中のランデヴー（あるいはカンペの言では逢引）

ベアータは新館への石堤上で、新館でグスタフに会うのではないかと恐れた。館の中そのものでは、彼がルーエシュタットにいと聞くと、その逆のことが望ましく思われた。彼女の母は彼女に、一緒にガウンや外套等々の連隊を削減したり、十分すぎるほどに備えたりしながら、語って聞かせた。ベアータは自分自身の情感で錯覚しているのであり、彼女の無垢の愛という樂園は母親としての情感に従えば、劣悪なもので、実際ポンティーネ的沼であり――その花咲く木々は毒の木々であって――その花盛りは一部は有害な銅製の花から、一部は偽の陶磁器の花から成り立っていて――樂園での草のベンチの上では鼻風邪を引くことになって、魔術的な大地での穏やかな揺れは大地の地震である、と。愛の誓いの後のこの誓いへの警告はまだ聞くべきものがあつた。しかし母がまだベアータの若さに異議を称えたこと――生き生きとした情感に対する極めて常識的な、極めて単純な、極めて効果のない、大方は激昂させる異議というものは、平日的説教という卑小な印象へと弱まり始め、この印象は次のような活用で全く消えてしまった。つまり彼女の父親はすでに彼女の愛の対象をほぼ選んでしまったというものである。…私の裁判所雇主人はまことに機転が利いた。しかし私の裁判所雇主のためになろうとすると、しばしばまことに愚かであつた。

従ってベアータはこの解剖のせいで極めて優しく華奢になった心をグスタフに対して石堤を越えて持ち込んだ。――彼もまた周りに癒着組織の一枚も見られないこのように傷付いた心を抱いて到着した。人生に対する、人生についてのオットマルのソロモンの説教は彼の動脈や血管を一つの無限の憧れで満たし、哀れな散って行く人間達を愛し、人々が大地に倒れる前に、自分の両腕で極めて美しい心を、それが土塊の下に沈まないうちに抱き寄せ、抱き締めたいと思った。愛はすべての他の情感に対する寄生植物の根を付着させた。

二人がやって来たその時は、フォン・エーフェル氏のせいだった。というのは宮廷では二人のことなど、その不在を気にかけていなかったからで、そもそも宮廷では誰も気にか

けられない。一人のロシアの某侯爵が、これは宮廷人と家畜の混血児、受動能動分詞で、その目に著き極端は、文化と野蛮の目に見えない極端へと落ち着いていたが、一団のフランス人とイタリア人と一緒に現れていて、この一団は皆彼らの長老達のように上流社会では通常の珍しさを有して、彼らは一五体不満足なのであった。今日の紳士にとっては、自分の体から、私が正当にも私の伝記の中で作っているものを作り出せないことほど一つまり一つの扇形や切片を作り出せないことほど難しいものはなかった。実際この断片的師団は一人の奇蹟を行う人の許に旅している不具者達のファランクス[密集方阵]に見えたのであった。我々が復活[再生]の際に、再び得ることのないとされる大方の肢体、例えば髪の毛や胃、肉体、尻とか他の部分^{*原注 1}一それ故勿論偉大なコナー[Conner, 1660-98]は、復活したキリストは刺蠅よりも大きなものとはならないと容易に主張し得ているのであり、このような肢体をこの切断された一団はすでに復活の前に除いていたのであり、あるいはその多くを失っていたのであった。

何故偉いさん達はそのようなことをし、物的意味で小さなものに自分をしているのかとしばしば私は熟考してみた。しかし私は余りに無知で以下の理由より他の理由を推察できなかった。怒りの座は（ヴィンケルマンによればギリシア人は人間の鼻をその座として考えていたそうであるが）どんなに速やかに根絶させても十分ではない。宮廷人たる者、キリスト教徒たる者、怒りを示すべきではないからである。一第二は、縮小化された肉体はせむしの肉体と、大きさの点でも余り異なる。しかしせむしは、イソップやポープ、スカロン、リヒテンベルク、メンデルスゾーンに見られるように多くの機知を有している。さて紳士は、我々の先祖の強力な樽から巧みに小さな肉体の瓶の中へ酒精を抽出して、このような体に対する切開、光学的短縮、治療では、機知的になるかせいぜい愚鈍になることより他のことはできない。それでひびの入ったフルートは上品な気高い音色しか出せないのである。しかし機知というものは周知のように上流社会では、非倫理性より上ではなくても同様に評価されているのである。一第三に、我々の昔の族長達は地上の民を増やすために長寿を得ていたように、多くのコスモポリタンは同じ意図で短命を目指して、致命的奈落へクルティウスの落下をして、喜んで他の人々の生命を購うのである。しかしこれについては私が正しいか疑問の余地がある。一第四の理由は、私は秘密の神秘的一行から得ているが、この一行の許でまさにかの人間の球欠達がこのことを知るようになったのである。今日では一身分のある魂[人]は誰でも脱有機化、脱肉体化されなければならない。ここでは今や二つの全く異なる手術しかない。私見では最も短くて、劣等な手術というのは、人間が一首を吊るということで、こうして魂が肉体からいぼを除くように脱するという手術である。それ故私は、偉い人が、自分の肉体をさながら形式として、そこに精神的立像が鑄造される時流し込まれる形式として単に部分的に解離して行くというより良い、より穏やかな手術を計画しているということを私が

*原注 1 ちょっと前の神学者達によれば（例えばゲルハルドゥス『神学的典拠精解』第八巻 1161 頁）、我々は髪の毛や胃や乳糜管等なしに復活する。オリゲネス[去勢した]によれば爪もなくて、それに自身すでにこの現世で失ったものなしで復活する。コナー『神秘的医学』項目十三では我々が墓場から出て来る際には誕生のときか生殖のときにまとっていた物質以上のものは有しない。

知らないとしても、私は偉い人を非難することはしないであろう。私はここでは短いという欠点よりも、むしろ反対の欠点を有したい。つまり、肉体は、やはり一つの魂を有している哲学者達によれば、自分達や我々の魂を形成すべき一つの道具であって、魂に対しこの道具の欠落に慣れさせるべき道具なのである。魂は、魂を塊に結び付けているすべての糸を次第に引き裂き、千切るようにしなければならない。肉体は魂にとって、水泳を習っている子供にとってのコルク製の胸甲^{*原注 2}にあたる。日々魂はこの胸甲を小さなものとするように試みて、遂にはこの胸甲なしに泳げるようにする。従って世の哲学的男性や秘密の脱有機体連盟の会員はこの水泳の胸甲に関して最初は単に脚や頬骨の肉を除くようにする。これはまだ初歩である。その後脳や神経や他のものを、これらは台所用炎に耐えたので、熱く真っ赤な炎で燃やしてしまう。毛髪や人間的毛皮は誰もが苦もなく取り去ることができる。この胸甲解剖の際最も重要な歩みは、オリゲネスの外科医のメスなしに、彼と同様に — ただ彼よりも穏やかに — 実行するということである。これが済むと、かの完全な根絶化は遠いものではなくて、このとき胸甲全体がきれいに沈み、魂は存在の海の中で遂に水泳の術を学び終えて、水泳服に関して、一瓶にコルクの栓をする程度ほども周りに有しなくなる。その後埋葬に至る。かくて少なくとも作法の秘密結社では人間的脱肉体化が実践される。

この破損の結社は、砕かれた陶磁器がオランダの苗床に置かれるように美しく我々の宮廷やすべての宮廷を覆った。第二にこの結社は世にも丁重な、粗野であることの流儀を有していた。この人々の許である種の曰く言い難いものが、気まぐれと粗野との間の違い、上品さと侮辱との間の違いでなければ、この違いは欠けてしまうことだろう。

私は先にフォン・エーフェル氏のせいで我々のカップルが到着する時であったと述べた。というのは弁理公使夫人の誕生日会が迫っていたからである。誰一人としてまだ自分の役目の一頁も記憶していなかったけれども。読者もまだ演技者同様誕生日のドラマが頭の中に入っていない。そこで彼らにここでエーフェルの植物の薄い煎じ汁を供することにする。

誕生日のドラマからの煎剤

フランスのある村に二人の立派な姉妹がいて、双方とも薔薇祭の娘[女王]にふさわしく、かつまことに私心がなくて、双方とも相手はその娘に選ばれたらいいと思っていた。マリーというのが一方で、他方がジャンヌと言った。褒賞のメダルを授与する前日に、二人は誰がそのメダルを — 断るべきか、そのことでもめていた。というのは二人は立派な筋から、ただこの姉妹のどちらかに薔薇祭の王冠が与えられるであろうということを知ったからである。ジャンヌは — 大臣夫人によって演じられるが — 自分の恋人のペランと — エーフェルがこの役である — 薔薇祭の適格者たるにふさわしくないほどにしばしば公然と会うという素敵な思い付きでこの王冠を取り逃そうとした。マリーは（ベア

*原注 2 ツェッケルトはその食事療法学の中でコルク製の胸甲を提案している。これは水の上に浮かせるもので、上で泳ぐ技能が育つにつれ削減できるであろうとされるものである。

一タがその役) 従って、戴冠を自分から外せないように見えた。しかし彼女は自分の兄のアンリに (グスタフがその役であった)、彼は彼女を格別に好いていて、幼少時から旅をして家から遠ざかっていたのであるが、この男にこの私心のない勝負での勝利を頼み込んだ。彼はその反対の勝利へと彼女を説得しようとした。しかし遂に、彼女の姉妹としての愛の決然さをはっきり知ったので、彼は正当な報酬と引き換えに彼女に彼女の報酬が得られないようにしようと約束した。「しかし僕に対してもっと大きな愛を抱いて貰わないといけない」と彼は言った。 — 「妹らしい愛を抱きます」と彼女は言った。 — 「もっと強い愛だ」と彼は言った。 — 「最も友人らしい愛を抱きます」と彼女は言った。 — 「もっとそれ以上に強い愛だ」と彼は言った。 — 「それ以上に大きな愛はありません」と彼女は言った。 — 「いやあるのだ。私は兄ではないのだから」と彼は言って、愛に酔った目をして彼女の前でくずおれて、彼女に文書を渡した。この文書で彼女はこれまでの錯覚から目覚め、その代わりささやかな喜びの失神に陥ることになった。彼女ら四人は皆領主にして薔薇王冠の任命権者 (侯爵が — この舞台でもこの役であった) の前に現れて、二人の娘は、依頼と自分の姉妹に対する称賛と、自分自身に対する上品な誹謗とで彼の選択に先手を打った。コケットな奴のペランはこう質問した。愛はその愛そのものより他の薔薇が必要でしょうか。 — マリーはこのような戴冠にふさわしい諸長所、一部はブーゼ夫人のイメージからの上品な特徴となっていた諸長所を簡潔に述べた。領主は言った。「この姉妹らしい公平性は、二人が報いようとしている功績同様に称賛されるべきもので、二つの薔薇祭の王冠に値する、一つは報いられるためで、もう一つは自ら報いるためである。(自ら王冠を戴く者より他により立派に王冠を授与する者はいないと、見たところレディー達に追従し、そして実際侯爵に追従するエーフェルは思い付いたのであった)、そして姉妹は、自分、侯爵とは公平性と美しさの点でしか異ならないであろう、もし姉妹が自分の代わりにひょっとして彼同様の選択をするならば、即ち薔薇王冠は、その王冠から蝶が飛び立つ前に — 切り子ダイヤモンドの蝶が最も大きな薔薇に飾りピンで留められてあった — 誰に被せられるべきか」。...「私どもの薔薇の女王様に」と姉妹は叫んで、王冠を弁理公使夫人に差し出した。

*

ドラマはこんなものであった。エーフェルにとって他人に追従して引き立てることほど好ましく幸せに思えるものはなかった。ちなみに彼の作品はフォントネル [Fontenelle, 1657-1750] の牧歌のように見えた。文化によって薄く磨かれた人々の気に入るような空想は微光を発する必要があるが、燃え上がる必要はなく、心をくすぐる必要はあるが、感動させる必要はない。このような空想による枝は重たく豊富な果実によってたわむことはなく、雪の重みでたわむのである。このような宮廷詩人とハサミムシ類 [小唄] にあっては、翼はさながら目に見えず小さなものであるが、しかし両者ともより容易に耳への道を見いだすものである。ドイツの詩には何も見られない。これに対して大抵のフランスの詩では書斎のランプ、つましいランプの匂いはせず、むしろ香水をかけられた靴下留めや手袋等の匂いがして、人間にとって興味深いものが少なければ少ないほど世の紳士を魅了するものを多く有する。これはもはや自然や天や地獄を写さず、二、三の客間を写し、巧みに蝸牛の殻のますます狭い渦巻きの中へ退いて行くからである。

エーフェルは同時に座付き作家、俳優、脚本家であった。彼はドラマからベアータの配役を取り出してきていたが、その配役は彼らの相思相愛（と彼は考えた）、あるいは彼らの片思い（と私は考える）を極めて巧みに暗示して世に示されていた。彼はベアータと一緒に演ずるその箇所、ごく優しいほのめかしを秘かに隠していた。それ故彼は清書の際、幾多の上品な愛の告白や情感の下に積義のラインを引き、分かりやすく自分の通奏低音を仕上げた。「何千回もいたずら娘は読み通すことだろう」と彼は自分に言った。

その後、彼女の到着の後、彼は彼女に自分が自覚しているよりもはるかに内気に畏敬の念を抱いて彼女に配役を渡した。我々の善良なドラマ作家の兎[臆病]にとって不幸なことに、ベアータは一つの理由から同時に二つの失敗を犯した。その理由は単に、アモールが彼女の心の中で実験室を設立していて、化学的炉と他のもの一切を設置していたからであった。そこから彼女の第一の失敗が生じて、彼女はこの温かさのないいつものときよりも美しく見えることになった。というのはどの情感も、どの内的葛藤も彼女の顔の上で魅力の形姿をまとったからである。愛からまた彼女の二番目の違反が生じて、彼女はエーフェルに対して今日はいつもよりはるかに打ち解けて、大胆に振る舞ったのであった。というのは恋する娘はすべての他の対象に対して（つまりその対象に対する自身の情感に対して）もはや一切恐れる必要はなくなっているからである。しかしフォン・エーフェル氏は自分の計算皮膜上で全く別の事実を加算してしまっていた。彼はすべてをまた自分が一相手にされている喜びと見なした。従って、アモールが針刺しに針を刺すように[小人の]リリパットの矢で一杯に射てくれたような心を抱いて去った。

彼はかの日のうちにまだ言っていた。「一人の女性の心がかくも開いたなら、その女性のすることに任せるより他何もしなくていい」。これは彼にとって心から好ましいものであった。というのは彼女を誘惑するという一いかがわしいことをしなくてよかったからである。彼はラブレイス[Richardsonの『クラリサ』1747の誘惑者]や例の騎士^{*原注3}の手紙を読むたびに、自分の単純な良心が、全く無垢の抗う娘を繊細な計画に従って誘惑することを許して欲しいと願うのであった。しかし自分の良心が分別に打ち勝つことはなかった。彼は自分の略奪の楽しみ全体を、自分の頭の中とか長編小説の中で演じさせるようなその程度の無垢な人物の誘惑に限定せざるを得なかった。かくも小心な人間では分別の決心よりも情感が支配していて、哲学的レディーの場合でさえもそうである。それでエーフェルの女性の知識では無垢の女性に対する虎挟みの代わりに罪のある女性に対する虎挟みしか残っていなかったのが、彼がまだ名誉を持って仕掛けられる唯一のものは誘惑する女性の誘惑者となることであった。

鋭い意見を述べることをお許し頂きたい。ラブレイスとかの騎士の間の違いは両者の国民性と年代の倫理的違いである。騎士の方ははなはだ哲学的冷淡さを有する悪魔であって、彼は単に改宗の見込みのないクロプシュトック風な悪魔達の一人にすぎない。これに対しラブレイスは全く別の男であり、ただの虚栄心の強いアルキビアデスというところで、これは国家での地位や結婚での地位で半ば改善され得るであろう者である。頼み込み、戦い、泣きながら跪いている無垢の女性に対する彼の仮借なさの点で彼は、その輝くような腹黒

*原注3 『危険な関係』[1782]の中における人物。

さを和らげる策略、つまり自分の良心に独自の名誉を付与し、作家の天才に最大の名誉を付与する策略で和らげている。即ち次の策略のことで、一 彼は、自分の仮借なさを繕うために、同情の現実の対象である跪いている等々のクラリサを芝居上の絵画的芸術作品と見なして、そして感動せずに済むように、彼女の涙の苦さではなく、ただその美しさだけを、嘆く姿勢ではなく、ただその絵画的姿勢だけに注目しようとしているのである。このようなやり方で人は好んですべてに対して厳しくなれるものである。それ故美しい精神達や画家、その通曉者達はしばしば現実の不幸に対して何の涙も見せないか、余りに多すぎる涙を流すのであるが、それは彼らが不幸を芸術的不幸と見なしているからである。

しかし私はもっと急いで弁理公使夫人の祭日に急がなければならない。その織物は我々のグスタフを多様な糸で捉え、絡ませているのである。

彼は最大の楽しみを抱いて、これについてはもっと多く語られることになるドラマでの自分の配役を記憶に叩き込んだ。そしてまだ覚え込めない状態であることしか望まなかった。ベアータも自分の配役をそのような具合にした。理由は、二人の配役は芝居ではお互いを相手としていて、従って今や二人の想いもそうであるからというものであった。内気なベアータにとって、自分が彼に対する愛の優しい想いを、これはほとんど敢えて有し得ない、表明し得ない想いであるが、良心の咎めなく覚えることができるというのは格別に甘美なことであった。必ずしも彼のことをいつも想っていることのないようにするために、彼女はしばしば告げられた配役の暗記という仕事で紛らわした。善良なる魂よ、いつも自らを欺くようにし給え。何もそのことを気につけないよりは、そう欲することの方がましである。一 彼女の養子としての兄[グスタフ]はこれまで彼女に出会う手段を見いだせなかった。弁理公使夫人はロシアの扇形やトルソにかまけて、彼のことを忘れていて、そのことでこの手段のことを忘れていた。彼自身は十分な厚かましさを有せず、その厚かましさを飾り、魅力的にする作法は更になお有しなかった。一 しかしフォン・エーフェルが上品な表情でこう告げるに至った。弁理公使夫人はクネーゼ[ロシアの侯爵]が残した若干の絵画を彼に見せたい思し召しだ、と。「いずれにせよそろそろキャビネットでの模写を始めるつもりでした」と彼は言って、エーフェルよりは自らを欺くことになった。彼が混乱して赤面したことに対し、エーフェルは自らに言った。「うい奴、私は万事承知している」。

とうとうある日の午前、自分達の体よりは心を容易に見いだす二人は弁理公使夫人の許で一緒になった。日中の光、これまでの別離、新しい状況、そして愛のせいで、両者の許ではすべての刺激が新たに、すべての特徴がより美しく、彼らの天は期待以上に大きく想われた。一 しかし互いに余りに多く、余りに少なく見つめてはいけない。君達の視線は見られているのだ。そうするがいい、グスタフよ、鋭さで縮まることがなく、愛で見開かれている君の目は、いつもただ近くの諸対象に向かっていて、彼女からの閃光を捉えようとしていると、ブーゼ夫人なら見抜くことだろう。一 ベアータよ、彼の間近に立って、彼の声と彼の頬が彼の心を明らかにすることのきっかけとなることをいつも以上に避けても何の甲斐もない。君自身が察したように、君が彼の到着の際に「私の心のアイドル」の反復を避けようとしても何にもならなかった。というのは弁理公使夫人が彼に頼まなかったらどうか。君の声に合わせて、彼の指でピアノを弾き、彼の心の中の歓喜の嵐を目の微光とキーへの圧力とタクトへの違反で明らかにしてしまうことになるよう頼まなかった

だろう。 — 弁理公使夫人の髪を結び、夫人に仕え、あるいは話したり、それどころか愛したりしたことさえある私の読者の中には、他の読者に対してこう証言できる人もいよう。つまり彼女の化粧室の他の暖炉飾りの中に、 — 偉い人は飾りの他は何も食べたり、住んだり、身に着けたり、座したり、一緒に眠ったり等したくないので — スイスの風景もあって、この中には「隠者の山」のトラガントゴムによる模写もあった、と。この喜びのオリンポスの山にベアータの目は、たとえ以前この山をよく覗いたとしても、もはやグスタフの目の前で向けられることはなかった。 — それでもとうとう、アマンドゥスの名前が両者の間で響き渡ると、亡き人に捧げられた感動よりももっと甘美な生き生きとした感動と共に両者の目が潤ってきた。 — 要するに二人は隠すことがもっと少なければ、すべての恋人達と同様に顕わになることがもっと少なくなっていたことだろう。弁理公使夫人は今日、いつもと同じように見えた。彼女は静かな、思慮深い、情熱的ではない偽装が得意で、彼女の顔には偽りの表情が率直な表情をまず追い払う様子は見えなかった。 — ロシア人の遺物の最も美しい絵画は家にはなく、侯爵の模写文書の中に混じっていた。 —

かくも黙して、それでいて間近にグスタフは恋人に対峙していなければならない。彼が情感によって帯電された魂を放電する術を知っていたら、ほんの三言で、あるいは引っ張る手の一つの圧力だけで済むことだろう。 — 何故、我々の情感は皆、我々の心から他人の心へ流れて行くことを欲するのか。 — 何故、苦痛の辞書はかくも多くのアルファベットを有し、恍惚と愛の辞書はかくも頁が少ないのか。 — 愛と恍惚の世の精霊は単に一つの涙と、一つの握りしめる手と一つの歌声だけを与えて言った。「これで話すがいい」と。 — しかしグスタフの恋は一つの舌を有していただろうか、つまり彼が（弁理公使夫人が不在の七秒間）座っているピアノの向かい側にある鏡を見て、その飢えた目で彼の得難い歌姫の動画に接吻したとき、 — そしてその画が彼を見たとき — そして内気なその画が彼の目の炎の奔流を目前にして臉を閉じたとき — そして彼が突然視線を外す画像の影の間近な原物の方に向き直り、立っている恋人の俯いた目の中へ、座したままその愛と共に侵入して来たとき、そして言葉では描けない一瞬間に、自らを一つの言葉にする、一つの物音にすら注入することを許されなかったときに、一つの舌を有していただろうか。 — というのは、人が話してしまうと、他人の魂の深いところから上昇してきた宝が再びまた沈んで行き、内奥に消えてしまう瞬間があるからである。 — つまり魂全体の華奢な、動揺し、漂い、燃え上がる画がほとんど透明な目の中では、透明な目の下では、ガラスの下の飛び散るパステル画のように守られない瞬間があるからである...

それ故私見によれば、彼が家で早速一通の恋文をまとめたのはまことに結構なことであった。このような心の保険証によって伝記作者は以前から本来の意味でその恋を証明してきた。しかしグスタフはそれを書き上げると、どのようにそれを提出したものか、どのペニー郵便[ロンドンの郵便]にしたものか分からなかった。彼は長くその手紙を持ち運び、とうとうもはやその手紙が気に入らなくなった。 — それからもっと良い手紙を書き、それもまた長く携帯していて、遂に最良の手紙を書くに至った。これを私は次の扇形で書き記すつもりである。この機会に私は読者に復活祭の市に向けて、私の『迅速簡便恋文模範集』を知らせておく。これはすべての両親が子供達に贈ったらしいものである。

ところで、毛皮の治療靴と辛子の蹄鉄と氷の王冠のせいで、幸い私の血は両脚に充満し、

頭部には必要以上にはもはや残らず、ドイツの読者のために優美な断編、切片を起草できよう。

第三十七扇形、あるいは聖クリスマスの扇形

恋文 — 喜劇 — 晩餐 — 正装舞踏会 — 二つの危険な真夜中の場面 — 教訓

この楽しい時期に私は何ら本当に楽しい感覚を有していない。ひょっとしたら私の散って行くような体がクロノメーターのように正しくは機能しないせいかもしれないし — ひょっとしたらそれにこの扇形の内容が頭にあるせいかもしれないし — ひょっとしたらまた、一般的な子供の喜びを目の当たりにして、血が一葉草や秋の花々の間を次のように思い出して悲しく流れ続けているせいかもしれない。つまり以前はどんなであったか、いかに人間の喜びは去って行くことか、いかにその喜びは我々からの離別を遠くの岸辺から輝いてくる反照によって印付けていることか、いかに我々の最も長い日[夏至]といえども、子供に最も短い日[冬至]とかクリスマスの夜が享受や希望の点で与えてくれるほどのものも我々にはめったに与えてくれないことか、と思い出して。 —

グスタフの恋文については私が現実に二週間前にそうしたように軽率に話すべきではなかったことであろう。内容は以下の通りである。

*

<私が認^{した}める前に、貴女は、言い難い貴重な方よ、二つの大きな雲の間から見下ろしている没する前の太陽をもう少し楽しむために、ラウラと一緒に公園を登って行かれた。貴女の側に雲の影が飛び移って行きましたが、しかし日光は貴女と一緒にでした。私は植え込みが貴女の足の方であって、貴女の姿を私から隠すことはなかったので、植え込みに感謝しました。しかし冬青[そよご]の茨の多い葉をすべて、その背後に貴女が消えて、私から去ったとき、むしり取ってしまいたい思いでした。「秋の道を」 — と私は考えました

— 「若い花々や蝶で彼女のために撒き散らすことができたなら、彼女を花や小夜啼鳥で取り囲み、彼女の前で山々や森を春で覆うことができたなら、そしてそれから彼女が喜びの余り震えて、私を見つめ、私に感謝せざるを得なくなれば、どんなに、...」しかしこれらの花々、これらの小夜啼鳥、この春は貴女が私にくださったものです。貴女は私の生涯の上に永遠の五月を贈られ、人間の目から歓喜の涙を搾り取ってくださいました。 — しかし私は何を与えることができますでしょう。 — いや、ベアータ、私は貴女に、私の生涯の黒い土の世界を編み上げ、花々で満たしてくださったこの楽土全体に対して、貴女の心全体に対して何を差し上げるべきでしょうか。 — 私の心でしょうか — いやこれはすでにこのことがなくても貴女のものでした。しかしそれ以上のものを私は何も有しません。すべての素敵^な時間に対して、すべての貴女の魅力に対して、すべての貴女の愛に対して、貴女の下さったすべてのものに対して、私はただこの忠実な、幸せな、温かい心の他には何も有しません。...

いや、私の有するものはこの心だけです。しかし人間の心の中で至高の愛という神々しい火花が燃え上がる時、火花は私の心の中であって、私が愛することができるだけで、

報いることはできない女性に対して燃えています。御身、より高い火花よ、心が涙で溢れてしまって、あるいは不幸に押し潰され、あるいは死で灰にされても、彼女のために私の心の中でほの白く燃え続けるがいい。...ベアータよ、地上では誰一人、自分が相手をどんなに愛しているか言うことはできません。友情と愛は唇を閉ざしてこの地球の上を進んで行きます。内的人間は舌を有しないのです。 — いや、人間が、無限にまでドーム状に広がっている外部の永遠の神殿の中で、歌う合唱団や神聖な地や犠牲を捧げる諸祭壇の圏の中央で、一つの祭壇を前にして麻痺してくずおれ、祈ろうとするとき、その人間はその涙同様大地に沈み込み、語れるものではありません。 — しかし良き魂は、誰が自分を愛し、黙しているか承知していて、この魂は自分に同伴する静かな目を見過ごすことはないのです。より強く動悸するが、しかし語ることでできない心を忘れることはなく、自ら隠そうとする溜め息を忘れることはないのです。 — しかしベアータよ、語れるのです。

— いつかこの目と心とがその沈黙を終えて、これらが至福の時間に愛する自然のすべての諸力と共に愛しい魂に「愛しているよ」と言うことが許されるようなとき、また黙するようになることは厳しく難しいことになります。高く持ち上げられて燃え上がって迫ってくる心をまた狭小な冷たい胸の中に押し戻すことは痛々しいことになります。 — そうなると心の内奥では静かな喜びが静かな苦悶へと流れ込み、悲しげに苦悶の中へ微光を放つことになります。丁度月が夜に生じた虹の中へ微光を放つように。...ベアータよ、私は依頼を有し得ないし、敢えて依頼する勇氣はないのです。私は私にベアータの視線や言葉が与えてくれる樂園を描くことはできますが、その樂園を欲することは許されないので。私どもをすでに夢の中で分かち、今や広い奔流のように人生の中で分かっている銀色の影の岸边に私は自分をすべての願望と共に留めておかなければなりません。しかし大事な方よ、この得難い心は誰に自らを贈ったのか、時にそのことを耳にしないとすれば、私はそのことを信ずる度胸を持ち得ましようか。 — 私はこの優しい心を多くの善良な高貴な人々の間に見て、それからそれでも君達は皆その心に値しないのだ、とこう私自身に言わなければならないとき、その心は私の魂に自らを贈ったのだという喜ばしい驚きに私は襲われて、そのことをほとんど信じられません。愛しい方よ、千人の方が貴女にはよりふさわしいものでした。しかし貴女によってより幸せになった者は私を除いていないことでしょう。

*

今や最も難しいことは、この手紙を伝書鳩とは別の翼に載せた、 — 恐らくヴィーナスがそのゴンドラには伝書鳩の郵便馬車をつないでいたのであろう — 行き先を指定することであった。彼は、すべての可能性の中で、このような可能性は最も難しく思えて、このようなことの可能性を見いだせなかった。 — 私の妹には最も容易に見えるのであるが。

— すべては喜劇の下稽古のときに生じた。

即ち、きちんとした喜劇は、その妹分の政治的喜劇とは違って、下稽古なしには上演されることはない。私は喜劇の稽古と喜劇との間に可能なかぎり細い文書の隙間を残しておきたい。しかし読者の方としても速やかに頁をめくって、所在なく手を膝の上に置くのではなく、本を膝に置く必要がある。稽古は旧館で行われた。 — エーフェルは自分の分

を十分上手に行った — ベアータはもっと上手であった — グスタフが最も — 下手であった。というのは侯爵や失神女性の顔が硝酸や塩のように彼の顔をほとんど氷の柱に変えたからである。多くの人々の前では、感激した感情を有するには萎えてしまい、できなくなる。 — 奇妙なことである。ただ彼の感情だけが、ベアータの感情はそうではなかったが、この劇場の中を通過して来る北風で冷えてしまった。しかし奇妙なことではないのである。というのは愛は青年をその自我から別の自我の間に投げ飛ばすのであるが、娘は余所なる自我から自らの自我へと投げ入れるからである。ベアータは統治する俳優、あるいは演ずる支配者の接近をほとんど、あるいは皆目知覚しなかった。 — しかしエーフェルはそれを見ていて、この高貴な恋敵に対する自分の勝利を反省した。 — この恋敵は彼女に対して、普通宮廷のレディー達に見られるように、はなはだ大きな螺旋を描くことなく近付いてきた。レディー達はただ若いときのみその徳操を小売りで手放すものであるが、年を取ると徳操の卸売りというより大きな商いをするものである。私がまさに螺旋に若干言及したのは、次のような思い付きが頭に閃いたからである。上流の女達や太陽はその諸惑星に対して、その光線の周りに円を描かせるという見せかけの下、実際は繊細な螺旋でその諸惑星をその燃え上がる表面に引き寄せるといふものである。

下稽古の最中、まさにグスタフあるいはアンリがマリーに対して空の紙を、彼らの関係を縁なきものと証明する文書として手渡すとき、グスタフとしての人間には夙に思い付いていたことがアンリとして思い付いたのであった。空の文書に何か書かれてもよろしいであろう、それも最良の何ものか、つまり我々が夙に読んだ恋文が書かれてもよろしいであろう、と。要するに彼は、他に仕様がなかったのであれば、自分の手紙をかの文書の形で彼女に芝居の中で渡すことに決めた。自分の芝居上の配役を現実の配役に引き込み、多くの観客に対して詩的錯覚とは別の錯覚を行うという決心のロマンチックな部分でさえ彼を押しとどめることはなく、駆り立てることになった。親愛なるグスタフよ、私はただ告白しておこうと思うが、 — たとえ私の告白そのものが君の手におちることになっても、 — 君の天上的な謙虚さの上に喝采という蜜液が、君はこれをこのような場ではお世辞とは決して見なさずに、単に語る作法と見なしてしかるべきなのであるが、破壊的に落ちることになった。すべての事柄の中で人間の謙虚さは最も容易に燻されて死ぬか、硫黄燻蒸されて死ぬ。多くの称賛は中傷同様に有害なものである。精神病院で分かることだが、人間は他人の言葉、君は狂っているを信ずるものである。^{*原注 1}そして宮殿で分かるのは、人間は、君は賢明であるという他人の言葉を信ずるのである。 — そもそもグスタフは — というのは男というものはしばしば或る晩、ただ劣等な芝居を続けて行くばかりでなく、またしばしばただ無分別ないたづらを続けて行くように定められているからで — 喜劇の晩ほとんどこうするよう選ばれていた。

*原注 1 というのは君は狂っていると請け合って、一人の人間を狂うようにすることができるであろうからである。息子のクレピヨンの友人達は、ある社交上の楽しい晩に彼の機知のどの一つにも笑わない、彼がすべてつまらぬ機知を言ったかのようにただ同情して黙っているという取り決めをしていた。この件は果たして思い通りの結果になった。また他の作家達は、機知を有すると友人達に思われるというまさに逆の錯覚で、友人達によってもっと陽気に騙されている。

...とうとうブーゼ夫人の誕生会となった。...私のグスタフよ　—　今日のうちにも君の目は後から泣くことになる。

祝祭は三つのコースに分かれていた　—　喜劇　—　晚餐　—　正装舞踏会。実は更に第四のコースがあった。墮落である。

芝居の日新館は空になって、上部シェーラウの侯爵の館に集まった。グスタフは途中（エーフェルの車の中で）自分が渡そうと思う手紙のことを考えていて、そして善良なフェンク博士のことは少しだけ考えていた。日が短くなっていて訪問のための余裕はなかった。彼の欠点は眼前の現在のことがいつも滝のようにすべての遠方の物音を消してしまうことであった。ひょっとしたら、私の難儀な法律的仕事のせいで私が町へ向かわざるを得ないということがなければ、彼は私の許にすら来なかったことだろう。

彼は自分のマリーを見た。　—　十万の十倍の新たな魅力、...しかし私は自制したい。一人の馴染みの娘が見慣れぬ所で見慣れぬ風にもなるが、しかしそれだけ一層美しくなるというのは心理学的に確かなことである。このことをベアータは輝くような弁理公使夫人と共有していた。しかし謙虚な臆病さというある種の息吹がそのヴェールで彼女だけを美化していた。なぜ度々グスタフは彼女と異なっていたのか。これはつまり、男性的内気は単に教育と諸状況のせいであるが、女性的内気は深く生来のものであるからである。　—

男性は内的勇気を有しており、単にしばしば外的無器用さを有するだけである。女性はこの無器用さは有しないが、それでも臆している　—　男性はその畏敬を踏み込むことで表現し、女性は引き下がることで表現する。

失神女性、所謂倒れるお方、あるいは大臣夫人は今日例外である。彼女の目配せや瞬き、彼女のささやきやそわそわ、彼女の機知やくすぐり、彼女の臆病さや大胆さ、彼女の媚態や中傷　—　これらをどうして一本足のジャン・パウルは卑俗で劣等な散文で伝記的に模写できよう　—　にもかかわらず、これは仕様のないことで、ジャン・パウルは模写しなければならない。自然の大きな庭園における女性達の多彩な頭をラックされた三脚の上での青色や赤色のガラスの球でイメージしなければならないとすると、（これは百人の男性のうち一人も信じないだろうが）、私は私の描写では次のように続けるであろう。大臣夫人の頭は悪くなくて、多彩であった。この頭は十もの他の頭からの短い実用的抜粋であった。つまり髪や歯やそこでの羽根飾りで合成されたものであった、と。

彼女は大なる美の古典であった。しかしこれは年月や人間による荒廃でもはや害を受けないことができなかつた。従って彼女は巧みな造型家達によって新たな肢体、　—　例えば胸や歯でもって　—　補完されなければならなかつた。

頬は赤との合金で、より深い部分は白で合金^{*原注 2}されていた。

人間を草食動物に列せるかの歯、つまり切歯はそれだけに一層象牙同様に白いものであった。まさにそのものが同一であったからで、草食動物の口由来のものであった。　—　草食動物というものを私が象とか、あるいは挿し木としてより高貴な幹へ植え込む歯を植物性食品以外の中にはめったに置かない卑俗な男を考えているかもしれないとしても、この総合文の後文として合うものは次の文を措いてないということははなはだ確かなことで

*原注 2　金の銅との合金は赤の合金と呼ばれ、銀との合金は白の合金と呼ばれる。

ある。つまり彼女は他のキリスト教信者の女性の倍の歯を有していて、その上二本の金糸を有していた。歯科医が一方の歯はいつも家のブラシの下に有していたからであり、他方の歯は歯音の文字の発音をしていたからである。

最近の教科書に従うと、三角法と胸とは単に平面のものと球状のものに分類できるので、それに彼女は全く見せかけの選択を眼前に有していたので、彼女の測量士的精神は、測量士にとって大方の緊張を要し、大方の楽しみを与えてくれるかの型を優先させた。

一 つまり球状の型である。

衣装そのものは、靴のローゼット[薔薇形飾り]から帽子のローゼットに至るまで、その価値は形態よりも材質に置かれていて、従って見た目よりも宝石の秤で評価され、美曲線によるよりもカラットによって評価されるものであった。一 従って彼女と彼女の法規定[立法]の人形との間にはいつも或る差異が生じていた。ちなみに彼女は他の女性同様この人形に従って着用しなければならなかった。私は人形について時宜良く一言述べたい。

*

人形についての言葉

この人形という木は、周知のように女性界のより美しい部分について法規定[立法]の権力を手に有している。というのは人形こそは、女性のドイツ諸圏を支配すべくパリから装飾支配の系統によって送られてくる使節にして副女王であるからである。一 そしてこれらの木製の全権者はまた頭部(頭巾台)を支配者の使者として更に下々に派遣なされる、この頭部がより卑俗な名士夫人達を支配するようにするためである。木製のこの支配の頭目自身が来られないときには、この頭目達は 一 枢密院における存命の侯爵達のようにその席をその肖像画で代理させるように 一 その法制や肖像をファッションにおけるシュマウス[Schmauß, 1690-1757]のすべての帝国議会最終決定の集成へ送る。そしてこの集成を我々は皆ファッション雑誌の名の下に手にすることになる。このような事情では 一 一つの木製は他の木製の利のために自然と働き、それも全団体よりも利己心なく働くので、また更に毎年新しい木製が地方総督のように選ばれるので 一 化粧に関する統治体制は立派に任命されていて、男達の支配の及ぶものでない全女性の公共体制がコントラバスのケースで送られてくる選出女王達によって、つまりペテルスブルクからリサボンに至るこの貴族政体を維持し支配しているこの女王達によって立派に秩序付けられ法の下にあることに私は驚くものでない。一一

私はこの人形達が、木製のものも、衣装の点で功績ある女性達のために置かれる衣服を掛けられた立像であるということをも指摘される必要のある男ではない。一 この衣装の点での功績のために置かれるこの公然たる記念碑はすでにまことに多数の者達をその追随へと刺激してきており、もっと多くの者をもっと刺激するであろうと確信している。偉大な男は人々が敬うその立像でほど多くの良き効果を及ぼすことは稀であるからである。しかし肝要な点は明らかに、これが欠けるとすべてがこけてしまうが、これらの立像は 一 見られなければならないという点である。これがないと私は一銭も払わない。ソクラテスが哲学でなしたこと、それを私は最良の人形でなしたいと思い、人形を偉いさんの天国から庶民の大地へと引っ張って来たい。つまり、人々がカトリックの教会でこれま

で何の益もなく趣味もなく脱がせたり着せたりしているマリア像に対してあるいは使徒自身や聖人達に対してさえももっと理性的にもっと合理的に着せるならば、即ちフランスの人形の如くするならば — 教会がいつも毎月ファッション雑誌を取り寄せて、その多彩な手本に従って、マリアを（レディーとして）使徒達を（殿方として）着せ替え、祭壇の周りに置くならば、これらの人々はもっと楽しく模倣され敬われることになる。そして何のために教会に来るのか、まさにパリとかヴェルサイユではどんな服が着用されているか知ることになる。 — 人々は丁度良い時にファッションを知ることになり、庶民でさえ何かもっと分別のあるものを着用するようになるであろうし、使徒達はスーツの翼兵となろうし、聖母マリアは女達の真の天国の女王となろう。かくて教会の偏見は国家の利点として利用されるに相違ない。同様にドミニコ会士僧侶のナポリのロッコは（ミュンターによれば）、路上の聖母の祭壇でランプを燃やす浪費を、こうした祭壇の増加のために — 通りの照明としてさし向けたのであった。

人形についての言葉の終わり

私はまだ読者に、大臣夫人がジャンヌの配役を要求したその理由をまだ説明していなかった。 — その役は彼女にもっと短いスカートを許していたからであった。 — あるいは別の言葉で言えば、その役では自分のリリパットの小さい優美な足をより容易に戯れさせることができるからであった。彼女の美しさに関しては、足が唯一不滅のものであった。丁度アキレスではそれが唯一の致命的なものであったようなものである。実際足は、黄鹿の足のように煙草の充填具として役立ったことだろう。

何とはるかにより立派にエーフェルは見えたことか。まさに彼は、然るべき程度に一人の阿呆であった。弁理公使夫人は腕のどの曲げ方も一人の画家が動かしているように見え、足のどの持ち上げ方も一人の女神が動かしているように見えて、か的大臣夫人に勝っていた。赤みの付け方にしても、これはすべての女官に対してこのちょっとした肉の添加を要求するのが常であった或る侯爵夫人の許でブーゼ夫人がその頬に付ける習慣にならざるを得なかったものであるが — その赤みは、赤い日傘の反照の如く、ただ微かな中間色を帯びていた。...美しさの観点からは弁理公使夫人の美しさは大臣夫人の美しさとは徳操と偽善の違いがあった。...

芝居は五人の演技者によってオペラ劇場ではなく、弁理公使夫人の戴冠を引き立てる宮殿の広間で世に出ることになった。私は居合わせなかった。しかし私にはすべてのことが知らされた。善良なマリーのベアータは余りに多くの情感を有していて、情感を見せられなかった。彼女は自分の運命の反復を芝居していると感じていた。彼女は女性としての性格の良き特徴を余りに多く有していて、それらをかくも多くの人々の目に披露することができなかった。従って彼女はその最良の役を内面的に演じた。アンリのグスタフも、同じ理由で、内面的役の他に、外面的役も上手に演じた。音楽の傍ら、まさに彼の周りの多くの人々が彼を多くの人々の中から孤立化させ持ち上げた。祭典的なものが彼の内部の波に強さと高さを与えて、外部の波を圧倒した。彼が渡そうと思っていた手紙は彼の配役を私が執筆している彼の伝記ともつれることになった。大臣夫人が彼の最近の下稽古に対してまさに感心できない大げさな身振りのせいで述べた偽りの称賛は、彼女は大げさな身振りで自分の役を誇張したのであるが、彼が真の称賛を得る助けとなった。 — 多くの空想

がその行為の下で微光を発しているとき、極めて内気になっている人間は、それが燃え上がると極めて大胆な人間となる。

私の称賛が彼の演技の温かさからその上品さにまで及ぶとしたら滑稽なことであろう。しかし観客は彼のことを喜んで大目に見た。上品さの欠如は^{*原注 3}温かさの豊かさと結び付いていて、人々をこう錯覚させたからである。彼は — 田舎出の単なるアンリである、と。

この炎は、自分の愛しいマリーのベアータに、彼が彼女に自分の兄弟関係免除を知らせる箇所では本当の恋文を渡すために必要であった。 — 彼女は自分の役割に従って手紙を開封した。 — 果てしもなく美しく彼は自分の全生涯を巻き付ける言葉を述べていた。

「いや、僕は実際君の兄ではないのだ」。 — 彼女はその中に彼の名前を見つけた — 彼女はすでに半ば渡すときの仕草からそのことを推察していた（というのはきっとまだどんな娘も自分が完成させるべき男性の策略に失敗することはなかったのだから） — しかし偽りの失神に陥ることが彼女にはできなかった — 本当の失神に襲われたからで — この失神は役目を少しばかりはみ出していた。 — グスタフはすべてを冗談と思い、大臣夫人もそう思って、彼女の偽りの才能に嫉妬した。 — アンリはただ自分の配役台本に規定されているやり方で彼女をまた目覚めさせ、彼女はすべての情感、恋、狼狽、努力の戦いで生じた一つの混乱の中で、ドラマ的美化とは別の美化によって最後までアンリの恋人を演じて、グスタフの恋人を演じないようにした。芝居の後で彼女は一人部屋に残って、今晚のすべての他の楽しみごとを断念しなければならなかった。部屋へは侯爵とドクトルが大いに熱心に勧めたもので、そしてそこで彼女は自分のなおも震える神経のために休養を取り、手紙を読んでは、その脈打つ胸のために動揺を求めざるを得なかった。大事な方よ、今や君の神経や君の胸から安らぎを奪っているもの、それを当時はなおも覆っていたカーテンを私はますます高く上げることにする。

グスタフは何も見えていなかった。彼女がいなくて寂しく思っていた食卓で彼は見知らぬ隣の女性達に彼女のことを尋ねる度胸を有していなかった。他のことは今日はより大胆に尋ねていた。単に今日の喝采が彼の度胸にとって鉄剤治療、鋼剤治療であったばかりでなく、偉いさん達の奇妙な肉と野菜のごった煮の許で飲むというよりは食べたワインのお蔭でもあった。この食べられた飲料のせいで火が着いて、いつもはただ内面で言っていた洒落を本当に口に出すようになった。私はここで公にするが、この瞬間にまで私は遺憾に思うことがあって、かつて私は上流社会に私が登場する際似たような一人の阿呆であって、自分が口にすべき事柄を頭に描いていた。 — 特に後悔しているのは、自分の小さな娘を手に引いていて、胸元には一本の薔薇を、即ちその中心部には小さな薔薇が芽吹いている薔薇を有している塹壕少佐夫人に面と向かって、ここに貴女がいますと、薔薇を指さしながら言わなかったことである。その洒落全体はすでに頭の中ではできあがっていたのであるが。その後も私は機知を長いこと脳内に有して持ち運び、時機を窺っていたが、しか

*原注 3 つまり単に因習的な上品さに関してである。というのはある種のより良い上品さがあるからで、この上品さによって、必ずしも因習的なものはそうでもないが、いつも心と頭との立派に形成された善良さは伴われている。

しまことに間抜けなやり方で放ってしまい、その人物の名前をここで挙げることにすら許されない。

部屋の温かさの中で溶けて、葉の茂る春を現していた人工的霜を伴う景色が、偉いさん達の視覚的豪華な料理である見本料理の下に見られたので、このことについてグスタフは素敵な機知を思い付いたが、この機知を人々は私にもはや告げることはできなかった。それでも、彼は最も美しい天井画の下、最も上品な椅子の上に座っていたけれども、単なる宮廷の垂れ下がりとして、自分が話すすべてのことに、そして一緒に語るすべての人に、関心を示した。幸せな者よ、君にとってはまだ真理や人間はどうでもいいものではなかった。しかし君の前にはまだ、愛憎から無関心へのかの苦い移行が控えている。この移行は、自分が冷淡でいなければならない多くの人間や多くの命題と関与することになる者皆が耐えなければならないものである。

弁理公使夫人は今日いつもより多く彼の内気な諸才能を明るみに出して、自分が彼に対して抱く関心を容易に自分のための彼の芝居での功績のことで言い繕った。一 最後に三番目の見物が始まった。ここでは他の二つの場合よりも多くの者が輝くことができるのであった。というのは単に足で演じられるだけであったからで 一 舞踏会となった。踊りは女性界にとっては芝居が上流界にとってそうであるものであり 一 つまり舌の素敵な休暇の時である。舌はしばしばごちなくなり、しばしば毒のあるものになる。感覚の多くの襲撃を今日初めて経験したグスタフのような頭脳にとって、舞踏会場は一つの新しいエルサレムであった。一 実際舞踏会場は何ほどかのものである。グスタフが跳ねる会場を覗き込み給え。どの弦楽器もどの吹奏楽器も心を質素な不信の日常生活から引き上げる鉄槌子となる。一 踊りは人々をカードのように混ぜ入れる。そして周りの響き渡る雰囲気は酩酊した大衆を一つにまとめる 一 かくも多くの人間が、一つの喜ばしい目的に結び合わされて、取り囲む輝くような薄明に幻惑されて、動悸する胸で夢中になって、少なくとも喜びの杯を差し出さなければならず、グスタフはその杯を飲み干すことまでした。というのはどのレディーも一人のベネツィア総督夫人に思えた彼は手を触れ合わすたびに夢中になったからで、外部の喧噪で彼の内部にすべての喧噪が目覚めて、かくて音楽は、跳ね返って行くかのように、その外部の生誕の地を離れて、ただ彼の内面でのみ自分の考えの下、自分の考えの隣で生じ、響きだしているかのように見えた。...まことに自分の観念を燃え上がるシャンデリアの下で持ち運んでいると、その観念はつましいランプの前でしゃがみ込んでいるときは、全く別の明かりを投げ返すのである。空想豊かな人間においては、暑い国々や高い山々にいるときと同様に極端なものすべてが、より密にひしめき合うことになる。グスタフの場合どの瞬間にも歓喜は悲哀に、喜びは愛に変わろうとし、踊り手の女性が彼に吹き込むすべての情感を彼は、一人静かに去っている自分の唯一の女性にもたらしたいと思った。それでもベアータはこうしたすべての女性によってよりも、むしろ弁理公使夫人によって代替されているかのように思われた。それどころか弁理公使夫人によって完結し、彼が夫人の戴冠のために演じた芝居を通じて、夫人は彼には一層好ましいものとなった。いや夫人の今日の誕生日さえも彼の目には夫人の魅力の一つとなっていた。別様に、あるいはもっと分別を持って人間というものは感受するものではない。要するに、今日彼のベアータがいないために彼から奪われていたことすべてのせいで、弁理公使夫人は得をした。今日彼は初めて、自分のはなはだ尊敬している弁理公使夫人か

ら手袋以上のものを触れた — 以上のものというのはつまり夫人の腕や背の武具で、別の言葉で言えばその上の衣服の部分である。腕と背には、両手はそうではなかったが、衣服はないに等しい。グスタフよ、むしろ哲学をし、眠るがいい。...

正装舞踏会は終わった。 — しかし悪魔はようやく始動する。エーフェルの馬車はブーゼ夫人の後を行った。ブーゼ夫人の馬車は無益に急いで、回転の遅れた車軸が発火した。勿論偶然のことであった。しかしある種の間人は悪しき偶然というものを知らず、どの偶然にも自分達の意図を押し付けるものである。エーフェルは夫人に自分の馬車を申し出なければならなかった。善良なベアータは少ない女性の従者達と一緒に病室に残されていた。彼は弁理公使夫人の馬車から馬を一頭借りた。彼女に（女性に対する慇懃さ故か、男性と自分の小説に対する明察や友情故かは分からない）私の主人公と彼女の主人公を残した。私はアカデミーの元老院を前に、まず一人の天使となろうと思っている者にとって、すでに自分が一人の天使と見なしている女性と一緒に夜、舞踏会場から家に帰ることほど不吉なものはないと詳述したい。 — それでも私の主人公には何の危害も加えられず、彼もまた何の危害も加えなかった。

しかし彼は誰に対してかは分からず一層惚れ込んでいた。

ベアータはこれほどに危険な真夜中とか真夜中後半ではなかった。しかし私はまず彼の夜を仕上げよう。彼は弁理公使夫人と一緒に — 夫人の部屋に着いた。彼は今日の諸情景から離れようとは思わなかったし、できなかった。この部屋は過ぎ去った諸情景を彼に描いていた。ピアノの弦の中には遠くの愛しい声が隠れていたし、鏡の箔の奥には愛しい形姿が隠れていた。憧れが多彩な喜びの花束の下での濃い花のように並んでいた。弁理公使夫人はこの濃い花のせいでも得をしていた。彼女は心よりも官能を先に動かそうとするコケットな女達の一人ではなかった。夫人はまずこの心の中へ自分の魅力の全軍と共に侵入し、その後この心から、さながら敵の国へ行くように、官能に対する戦いを行った。夫人自身は彼女が攻める他に征服されることはなかった。上流社会の女達が、エピグラムののように、機知を有するものと、情感を有するものとに分けられるとすれば、夫人はフランスのエピグラムよりはもっとギリシアのエピグラムに似ていた。もっともギリシア的類似性は日々少なくなっていたけれども。彼女の早期の人生での五月の風はかつて彼女の心に高貴な愛の白い花を吹き寄せていた。しばしば花卉がレディー帽子の着色された羽根飾りやダイヤモンドの花々の間に舞い落ちるようなものである。 — しかし彼女の身分が間もなく彼女の胸を一つのポプリ[ドライ香草壺]に変え、胸の上には愛の描かれた花が、胸の中には花の腐って行く堆積が収められていた。しかしすべての彼女の混乱はより密接なより美しい境界に留まっていて、そこである消しがたい感情の目に見えない手が彼女を抑制していた。大臣夫人はこの感情を決して有せず、彼女の心の石盤は、彼女がより多く書き込み、消し去るにつれて、ますます汚れて行った。大臣夫人は全く高貴な人間を眩惑できなかった。弁理公使夫人はそれができた。

今やこの脱線の後では、ブーゼ夫人のグスタフに対する振る舞いが率直なものでもなく偽装されたものでもなく、その両者であるとしても、もはや読者は混乱することはないであろう。夫人は彼にロシアの侯爵が残していった夜景画を彼に見せた。これはもっと正しい照明を考えて、自分のキャビネットに掛けていたものであった。それに単に、夜を、昇る月と、山上で月に対して祈っているインディアンの娘と、同じく月に祈りと腕を向けて

いるが、目は自分の側の愛しい、祈るこの女性に向けている若者を描いていた。背景では、月のない箇所を更に蛍が照らし出していた。彼らはキャビネットに残っていて、弁理公使夫人は描かれた夜景画に没頭し、グスタフはその絵について話した。ようやく彼女は観照と沈黙から速やかに目覚めると寝ぼけた声でこう言った。「私の誕生日パーティーではいつも悲しくなるの」。夫人はその証拠にと、自分のこれまでの生涯のほとんどすべての暗い方の部分を描いてみせた。悲哀のその絵画は彼女の目と唇からその生彩を得ていて、彼女の調子からその魂を得ていた。彼女はこう終えた。「この世では誰もが一人で苦しんでいます」。彼は共感して夢中になり彼女の手を握って、ことによると少し強く握って論駁したかもしれない。

彼女は彼にその手を全く意に介していない表情で握らせた。しかし間もなく彼らの横にあったリュートに手を伸ばして、その美しい手を引っ込める口実としたように見えた。「私は」と彼女は感動して続けた、「兄が存命の間は決して不幸ではなかったのです」。彼女はそこで、自分の妹としての胸にかけていた兄の肖像画を、少しばかり、しかしやむを得ず胸を露わにして取り出し、彼の目に少しだけ、自分の目には十分にその絵を披露した。グスタフが様々な秘密の露呈の際にただ描かれた胸の肖像画にのみ見入っていたか――これについては私の副校長とその狐の毛皮の上着が最も理性的に判断している、即ちこう信じているのである。総合[循環]文ほどに美しい丸みはなく、旧約の林檎ほどに新たなイヴの林檎はない、と。私の毛皮の副校長は何とでも講義するがいい。しかし悲しみの弁理公使夫人に向かい合っているグスタフは、彼女はいつもはかの葉陰の禁断の果実の形のみを推察させて、色合いは推察させなかったのであるが、学習が難しかった。

私や副校長のようなごく少数の者が、彼女にその絵を自らの手でまた手渡すことができたことだろう。

彼女は言った。「私は悲しくなったら、このキャビネットが好きです。ここに不意に私のアルバン（兄の名前）が、ロンドンから帰って来て現れたものです。――ここで彼は手紙を書きました――ここで彼は死のうと思ったのですが、しかし医師が彼の部屋から出るのを許さなかったのです」。彼女は無意識に空中に散って行く和音をリュートから奏でた。彼女はグスタフを夢想的に見つめた。彼女の目には次第に湿って行く微光が見られた。「貴方の妹はまだ幸せです」と、その調子を初めて、美しい、いつもは笑っている唇から耳にしたら、圧倒される悲しみの調子で彼女は言った。「私は」（と彼は同調する苦悶を浮かべて言った）「妹がいたらと思います」。――彼女は彼をちょっと探るようないぶかしさの表情で見つめて、言った。「芝居では貴方は今日同じ人物に対してまさにその逆の役を演じていました」。芝居のときには、偽ってベアータの兄と称しながら、今ここでは偽って兄ではないと言っている、あるいはむしろ自分の愛を解除している、と。彼の問い質すような驚きは彼女の口許に懸かって、不安げに彼の舌と耳の間で揺れた。彼女は冷静に続けた。「勿論実の兄と妹は愛し合うことが稀であると言われます。しかし私は最初の例外です。貴方は二番目の例外となりましょう」。彼の驚きは固まった。...

私が一段落を追加し、読者に、弁理公使夫人は自分が彼に語った嘘を信じていたのかもしれないし（実は信じていたに違いない）と教えないでいたら読者も固まってしまうところであろう。――楽しいコンサートのフリオーソ[猛烈に]をいつも耳にしている彼女の身分の人々は、新旧のニュースをいつも耳に留めておかないか、あるいは半分だけ聞いて

いるものである。 — 従って読者より容易に（誰が読者に対して保証してくれようか）レーパー夫人とファルケンベルクとの間の行方不明の息子と騎兵大尉夫人とファルケンベルクとの間の現息子を混同したのかもしれない。 — 彼女のこれまでの振る舞いは私の推測にほとんど反するものでなかったし、また兄妹とされているカップルのこれまでの振る舞いも彼女の推測に反するものではなかった。それでも私は勘違いをしているかもしれない。

しかしこの勘違いは続く彼女の振る舞いを見ていると全くありそうに思えない。彼の当惑で彼女の当惑が生じた。彼女は、互いに避け、その関係について語るのを好まない兄妹のカップルを幸せに愛し合っていると早まって称賛したことを遺憾に思った。彼女は話題を反らす自分の意図をその表情で隠すことはせず、その意図を熱心に示した。しかし兄を有しないという彼女の苦悶に、グスタフは妹を有するが、しかし愛してはいないという苦悶が重なって、彼女は類似の不幸への共感をリュートをますます美しく、かすかに奏することで表現した。まだ今日のお祝いがその光輝と共に残っていたグスタフの欺かれた魂を極めて激しい最も不似合いな波が襲って来た。 — 頭では十分に不信感を抱いていたが、心に不信感が生ずることはなかった。 — 今や彼は今日の歓喜の王座と墓場の間の選択をすることになった。

というのは強い魂[人物]は天国と地獄の間は何も知らないからである。 — 煉獄も知らないし、リンボ[幼児の魂の憩う所]も知らない。

弁理公使夫人が彼に揺れに決着をつけた、（ — あるいはそう見えた、私はかくも何千もの読者の参審員席、最後の審級となる勇気がないからで）、彼の（所謂）妹が彼を扱う際の冷淡さと、彼の家庭史についての二重の当惑と悲しみから生じていると、夫人は彼の表情の混乱をそう見なした。彼女はこれまで彼の目の中に、他の宮廷の目よりはもっと美しい魅力を求めている一つの憧れを見てとっていた。彼女は彼がアモンドゥスの墓を依頼したときの朝と、彼が彼女の前で拭ったときの愛に満ちた目を自分の感情豊かな心の中に保管していた。 — 従って彼女は彼の熱い視線に最も優しい視線を注いで、 — そのリュートの弦から自分の共感した胸の最も優しい調べを引き出した。 — そして自分の動悸する心を隠そうと思いつつ、その鼓動を抑えることができず — 彼が最も激しい情緒の動きを見せたとき、呆然と夢中になって、震える目をして、心は圧倒されて、さまよう魂と共に — 彼に対して「お兄様」とくずおれた。

彼は彼女に対してくずおれた。...彼女は初めてその宮廷生活でこのような抱擁を感じた。彼は初めて感受された抱擁を感じた。というのはベアータの純な心の許では、彼女の両腕を感じたことはなかったからである。いや、ブーゼよ。汝はベアータに似ていて欲しかったし、姉のようなものであれば良かった。しかし — 汝は汝が得たよりも多く与えた。そして奪うように誘った。 — 汝は彼と汝を闇の感情のハリケーンに引き掠った。 — 汝の胸の許で彼は汝の顔を見失い — 汝の心と — 彼自身の心を見失って — そしてすべての官能がその最初の諸力と共に吹き荒れたとき、すべてを、すべてを見失った。...

私のグスタフの守護霊よ。御身は彼をもはや救い出せない。しかし彼が見失って、すべてを、彼の徳操と彼のベアータを失ったとき、彼を癒やし給え。私のように、彼の墮落の周りに悲しみのカーテンを引き、彼と同様に善良な魂に対してこうとさえ言い給え。「も

っと良くなれ」。

守護霊がそう言っている魂の許に、つまりベアータのところに行く前に、我々は少なくとも哀れなグスタフに対する唯一の弁護人の声に耳を傾け、彼を余りに深く弾劾しないことにしよう。弁護人はただ次のことに思いをいたすべきだとしている。女達がとても容易に征服されるとしたら、すべての戦争状況では攻撃する部分が攻撃される部分に対して有利なものを余計に有するからである。しかし一度事情が異なって、誘惑する男の代わりに誘惑する女が登場するとしたら、無垢を攻撃したわけでなかったこの誘惑された男も、状況は通常にない逆のものになっていて、自らの無垢を失うことになる。それも女性の誘惑が男性の誘惑よりもより優美に、より上品に、より徹底したものになるにつれ、より容易に失うことになる。それ故確かに男達が誘惑する。しかし若者は普通最初は誘惑される — そして一人の誘惑する女性が十人の誘惑する男性を作ることになる。

純なるベアータよ。我々皆が君の話に移ることを許し給え。 — 君はこの遅い夜、侯爵の館の一部屋に全く一人っきりで留まっていた。しかし喜びにつぐ喜びを抱いていた。君は君宛のグスタフの手紙を手にし、胸元に持っていたからである。宮殿全体の中で今日は最も病んだ魂が最も幸福な魂であった。というのは、自分が一人っきりで読み、接吻し、内的外的嵐なしに享受できる手紙が彼女の優しい目に対象の現前よりも穏やかに輝いていたからである。対象の熱い炎はまず離れてみると風通しのいい温かさに落ち着くのであった。彼の現前は彼女には余りに多くの享樂を与えた。彼女はただ自分の友を抱擁していると思うたびに、その瞬間ごとに自分の徳操の守護霊を抱擁した。 — 片方の手に手紙を別の片方の手に徳操の守護霊を有しているこの春の恍惚を邪魔したのは、シェーラウの — 侯爵であった。このように腹這いで一匹のヒキガエルが花床に忍び寄ってくる。

このような場合、ある女性の振る舞いは、無関心と愛との間でまだ決心がつかず揺れている時のみ難しいものとなる。あるいはまた全くの冷淡さにもかかわらず、虚栄心から、徳操が何も失わず、愛が何も得ないという程度に同意しようと思うとき難しいものとなる。

— これに対し、完成された徳操への決意を有する場合には、自分のために戦ってくれる内的徳操に自らを任せることができ、舌や表情について監視する必要はほとんどない。舌や表情は監視を要するとなるとこれはすでにかわしいものであるからである。 —

ベアータが手紙を隠したやり方は、武装された徳操のこの完全な調和の中での唯一の小さな中間色であった。シェーラウの王座の主は、自分が出てきたのは彼女の健康を気遣ったことだと弁解した。彼は続く会話をフランス語で行った — 女達や機知ある者達と話そうとするときの最良の言葉であるが — それも自他に遠慮することなく、言いたいことを何でも言えるような言い回しから成り立っていて、すべてを半分だけ、そしてこの半分のうちまた四分の一は冗談であって、すべては追従というよりは愛想が、率直さというよりは大胆な言葉が並んでいるのである。

「それで私は貴女のことを」 — と彼は愛想良く驚いて言った — 「今日の晩ずっと頭の中で思い描いていた。私の空想の中では貴女は、現前ということを除けば、何も変わりがなかった。 — 運命が自らと語ることを許せば、私は舞踏会のときずっと、まさに今日多くの楽しみを与えてくれた人物に対し、その人物の楽しみを何故奪ったかと運命と喧嘩をしていたことだろう」。

「あら」と彼女は言った — 「良き運命のお蔭で私には私の能力以上に今日楽しみが

与えられました」。侯爵は、一緒に何事についても語りたくない人物の一人であるが、それでもこのことを感情を込めて彼女は言った。この感情は先の楽しい拝読の時に對する運命への感謝に他ならなかった。

「貴女は」（と彼はベアータの言葉に別の意味を含ませることになるような上品な表情で言った）「少しばかり利己主義者だ。 — それは貴女の才能ではない — 貴女の才能は、一人っきりではないということではなければならない。貴女はこれまで貴女の心同様に顔も隠してきた。私の宮廷では、この両方を賛嘆し見るに値するものは誰もいないとお思いか」。 — 謙虚である必要はなく、へりくだる必要があると思っていたベアータにとって、このような称賛は余りに大きいもので、その称賛を論駁することなど考えもしなかった。彼の視線は一つの答えを探っていた。しかしそもそも彼女は彼にはできるだけ答えを与えないようにしていた。どの一歩も古い罌を一緒に新しい罌へと運ぶことになるからである。彼は最初彼女の手を病人の手を取るときの表情で求めている。彼女は手を無関心に彼に任せていた。しかし生命のない手袋のように彼女は自分の手を彼の手において、 — どんなに彼が触角の先端を使っても微かな活気さえも聞き出すことはできなかった。彼女は慌てるでもなくゆっくりとでもなく次の機会にその錆びた鞆から手を抜き取った。

舞踏会、日中、夜、静寂が彼の言葉にいつも以上に今日はもっと炎を放っていた。「籤は」 — と彼は言って、少し気分を害して、チョコッキのポケットのコインと戯れ、逃れた手の代わりとした。「つきがなかった。情感を吹き込む才能を有する方々は、不幸にしてしばしば情感に答えないという敵対する才能を有するものだ」。彼はその視線を突然彼女のシャツの針に向けた。そこには一つの真珠と友情[ラミティエ]の言葉が輝いていた。彼はまた自分のボローニャのコインを見たが、そこにはすべてのボローニャの貨幣に見られるように自由[リベルタス]の言葉があった。「貴女は友情をボローニャが自由を扱っているように扱っている。 — 両者とも自分達が有しないものを刻銘としている」。 — より気高い人間達は、たとえ最も高貴でない人間達からであっても、「友情、情感、徳操」という言葉を聞くと、自分達の心がわきまえている偉大なことをこれらの言葉の許で考えずにはおれない。ベアータはその高まる胸と共に一つの溜め息を抑えた。この溜め息は余りに明白に、情感や友情は何という喜びや痛みを与えるものか言おうとするものであった。しかしその溜め息は侯爵とは何の関係もなかった。

男性という性よりは自分の身分のお蔭である彼の素早い視線は自分が耳にしなかった溜め息を捉えた。彼は一気に控訴や自然の性質に反して対話的飛躍を行った。「私の言うことが分からないのか」、と彼は奉呈を大いに期待する放恣の調子で言った。彼女は溜め息が約束していたことよりも冷たく言った。自分は今日自分の病んだ頭では、 — 頬杖ついていることしかできないし、ただそのせいで、臣下としての畏敬と、自分と侯爵との意見の相違を同じくらいに強く述べることはできかねる、と。 — 猛禽類と同様に彼は、忍び入っても無駄と分かると、跳躍して捉えた。「いやできる」（と彼は言って、アンリの愛の告白を自分の告白とした）「マリーよ、私は貴女の兄ではないのだ」。女性というものは、ある種の説明を余りに長く聞き入れる気がないときには、 — 明白極まる説明しか手にしないものである。彼はその上彼女の前にアンリの身振りであった。「冗談ととるか」と彼女は言った、「本気ととるか選ぶのは免じてください。 — 芝居の外では、薔

薇祭の賞に値することも等閑にすることも私にはもっと難しいものです。しかし貴方はいつでもその賞をただお与えにしなければならぬ方です」。 — 「では誰に」（と彼は言った、このことからこのような人々には何の根拠を挙げても役立たないということが分かる） — 「私は美人達にかまけてすべての醜い者達を忘れ、最も美しい者にかまけてすべての美人達を忘れてしまう — 私は貴女に徳操の賞を授与しよう、貴女は私に感受の賞を与えてくださるか — それとも自分でその賞を与えていただろうか」、そしてすばやくその唇を彼女の頬へびくつかせた。その頬にはこれまで接吻よりは涙が多く見られたものであった。しかし彼女は冷たく驚いて、 — これまで彼はすべての女性の許でもっと温かい驚きを見いだしていたのであったが、 — — インチだけ余りに遠ざからないようにかつ余りに近付かないようにと彼を避けて、同時に臣下の畏敬と貞淑な女性の落ち着きと、仮借ない女性の冷淡さが見いだされるように調子で、要するに彼女の依頼は先の出来事とは何の結び付きもないような調子で、このようなやり方で彼女はその臣下たる請願書を渡して言った。恵み深き侯爵におかれましては、自分は今日起きていることほど体に悪いものはないとドクトルに言われていますので、 — 私自身の表現で言うならば、 — 失せやがれ、と。そこまで行かないうちに、彼はなお数分いちゃついて、それからまたほとんど以前の調子に戻り、固執の言明、再言明をし[鈴木武樹訳]、去った。

徳操と — 愛と、グスタフの手紙の手[筆跡]から彼女が得ていた落ち着きほどにこの幸運を与えてくれたものはなかった。つまりこのヤコブ[創世記、32,25f.]あるいはジャックがこの天使の許で腰を脱臼したという幸運である。 — 勿論、天使が闘いながらももっと美しくなるにつれ、一層艶のないジャックには面白くないことであった。周知のように女性の動揺はどれも瞬間的化粧剤、美容剤となるからである。

グスタフとベアータよ、おまえ達の全生涯で、ベアータは自分に対して何も非難すべきことがなく、グスタフはすべてを非難すべきであった朝ほどに、かくも異なった感情を抱いて君達が両目を開けたことはなかった。彼の生涯のすべての沈んだ春の上に長い冬が乗りかかって平にした。彼は自分の外に何の喜びも、自分の内に何の慰めも有せず、自分の前には希望の代わりに後悔しかなかった。

彼は自分の絶望が許すかぎり大いにいたわって、自分の嘆きの諸対象から離れ、自分の湧き出る血をヴッツのアウエンタールの方、 — つまり私の部屋へ追いやった。私には彼がまだ感情や生命を有していることは、彼の両目の夕立でしかもはや判断できなかった。

— 彼は語り始めようとしたができなかった。血や観念や涙の下、彼の言葉は沈んで行った。 — とうとう彼は、高く燃え上がりながら、私から窓の方へ向きを変えて、一点を見つめながら、自分の墮落について語った。自分が自ら落ちて行った墮落であった。

— その後、自分自らに対して自分の恥辱で復讐するために、自らの姿を晒したが、しかしベアータの名前に触れるときになると、もはや耐えられなかった。ここで彼は初めて彼の初恋の去ってしまった花園へ私を案内したのであったが、顔を覆わずにはおれなくなって、言った。「かつて私は余りに幸福でした、今や余りに不幸です」。

彼をベアータの兄と思っていた弁理公使夫人の錯覚は、彼の肖像画とベアータの母の長男の肖像画との類似性から彼に容易に説明することができた。 — まず私は彼に最も重要な信用を再び与えようと試みた。この信用は人が自らの許で見いださなければならぬものである。自らに倫理的強さを信頼しない者は、最後に実際その強さを失うものである。

彼の墮落は単に彼の新しい状況から生じたものである。誘惑では新奇さほど危険なものはない。人間と振り子時計は一定の温度の時にだけ最も正確に進む。 — ちなみに私は、二つの全く純な、思いやりに満ちた魂がその愛を一つの墮落へと変えることは、感情や経験が証明している以上に容易なことであると思っている長編小説の執筆者達に対して、私の主人公をその証拠とすることのないようにお願いしたい。というのはここでは二番目の純な魂が欠けているからである。これに対して二つの美しい魂（グスタフとベアータの魂）のすべての色彩の和合はいつも単に無垢の白色を生じさせることであろう。

彼の決心は、ベアータから永久に一通の手紙を書いて離れることであり — 自分に美しい日々や自分の不幸の日を思い出させるすべての諸対象と共に館から去ることであり — 冬はいつも町で暮らす両親の許で冬を過ごし、あるいは溜め息をついて過ごし、それから夏エーフェルと共に人生の賭のためにカルタを新たに切り、魂の安らぎが失われてもなお得るもの、あるいは失うものがあるか見ることであった。...美しい不幸な者よ。何故まさに今君の現在の話は、私が私の執筆してきた話とそれとを合流できるというときに、喪章を付けることになるのか。何故まさに君の短い陰鬱な日々はカレンダーの短い陰鬱な日々と一致してしまうのだろう。いや、この悲しい冬には、熱中のどんな天国への梯子ももはや、君の人生の花々の風景を眺めて模写するように私を高みに導くことはない。私は君をより多く私の両腕に抱きしめるために、君のことは余り書かないことにしよう。

グスタフがそのせいで死のうと思う過ちを君達の長所の一つ、喜びの一つに数えるような君達、恐ろしい者達よ、君達は彼のように無垢を自ら失うわけではなく、他人の無垢を殺してしまうのであるが、紙上での君達の間近さを通じて彼を汚していいものだろうか。

— 君達は更に我々の世紀から何を仕上げるつもりか。 — 君達、王冠を戴き、星座として輝き、比武資格のある、司教冠を授かった去勢羊よ。そのことについて話しているのではない。私は決して、君達が君達の身分から所謂徳操を（即ち徳操の見せかけを）、これは君達の女性的金属における脆い添加物であるが、持ち寄せられる限りのガラス用火花で燃え尽くし、沈降させていることを非難しているのではない。 — というのは君達の身分では誘惑はもはやその名を有せず、何の意味もなく、何の悪しき結果ももたらさないからで、君達は害は少ないし、害を及ぼしはしない。 — しかし我々の中等の身分では、君達猛鳥、禿鷹よ、我々の子羊を襲うなかれ。我々の許では君達は今なお流行病[エピソード]だ（私は、君達のように、混合している。しかし単に隠喩の混合にすぎない）。この病はより新しいだけに、もっと奪うものである。むしろ女性的徳操以外は何であれ、奪い、殺すがいい。 — ただ我々のような世紀では、単に貞淑さにのみ存する女性的徳操は足で踏み潰され、野蛮人のように一本の樹から最初にして最後の果実を手にするために一本の樹を永久に切り倒してしまう。女性的名誉を奪うことは、男性的名誉を奪うに等しいことで、即ち君はより高貴な貴族の紋章を打ち壊し、刀を砕き、拍車を取り上げ、叙爵書や家系図を引き裂き、刑吏が男性に行うことを、君は哀れな被造物に対して執行している。この被造物はこの刑吏を愛していて、ただその過度の空想を制御できないだけなのである。厭わしい。男性の両手が永遠の首枷で不名誉へとつなげたこのような犠牲者のうちウィーンの露地には二千人が、パリの露地には三万人が、ロンドンの露地には五万人が立っている。 — 恐ろしいことだ。復讐の死の天使よ。我々男性が女性の目から搾り出し、燃えながら弱い女性の心の上に流れるようにさせている涙の数を数えるなかれ。溜

め息や苦悩を測量することなかれ。それらの苦悩の許で売春婦達は死んで行き、それら苦悩を見ても鉄の買春の男は死の床ではない別の床へ行かなければならないことしか遺憾に思わないのである。

穏やかな、忠実な、しかし弱い女性よ。何故君の魂の諸力はすべて輝かしく偉大であるのに、君の思慮はこれに比し、余りに色褪せて小さいのか。何故君の心の中では、君の敬意を大事に思わない世の男性に対する生来の敬意が生じているのか。君達が一層君達の魂を飾るほどに、君達が一層優美さを君達の肢体から作り上げるほどに、愛が一層君達の心の中で沸き立ち、君達の間を通じて漏れてくるほどに、君達が一層天使へと化けるほどに、それだけ一層我々はこの天使をその天国から投げ飛ばそうとする。そしてまさに君達的美貌化の世紀において、皆が一致して、作家や芸術家や偉人が一致して有毒な木の一つの森と化している。これらの木の下で君達は死ぬ定めであり、我々は互いを君達の唇に対する大方の有毒な鉱泉、杯に従って評価するのである。

第三十八扇形、あるいは新年の扇形

小夜曲 — 別れの手紙 — 私の静いと病

私は今日は冗談を計画していて、私の伝記を読者に対する印刷された新年の賀詞と名付け、願いの代わりに冗談の新年の呪いやそれに類するものをもっと行うつもりであった。しかし私はできないし、そもそも間もなくもはや全くできなくなるであろう。人間を他の三六四の背をかがめた、真剣な、嘆かわしい、散って行く日々へ導く最初の日に直面して、動物どもの荒れ狂って叫ぶ歓喜を、人間の穏やかに静かな享受、涕泣と接するような享受よりも優先することができる人々は、何という鈍重な燃え尽きた心を有しているに違いないことか。「最初」と「最後」の言葉は何を意味しているのか、その言葉が付与されているのは一日に対してであれ、一冊の本に対してであれ、一人の人間に対してであれ、その言葉について君達がより深い息をしないのであれば、君達は知らないのに違いない。君達は、君達の中で喜びと憧れとの間の隙間がとても大きくて、その両者を一つの涙が統合しないのであれば、人間は動物よりも何が優れているのか更に知ることが少ない。 — 御身、天と地よ、御身らの現今の姿が一つのこのような統合の像である（一人の母親のようなものである）。我らの凍てつく目に慰謝するように差し込む光の世界、太陽は、周りの青いエーテルを青い夜に変えて、その夜が雪に覆われた地上の輝く土台の上に更に深い影を投げかけている。そして人間は憧れながらその天に引き寄せられた夜と一つの光の裂け目を見いだす。より明るい諸世界への深い開口部と通路である。...

過ぎた夜のことで私はまだペンを握っている。つまりアウエンタールでは多くの土地同様に、一年の最後の荘厳な夜、塔の上で角笛からさながら過ぎた日々の反響の如く、あるいは沈んだ一年の葬送の音楽の如く鳴り響かせる習慣があるのである。私は私の善良なヴッツが何人かの助手と共に下の部屋で幾つかの物音をさせ、幾つかの試みの音色を響かせているのを耳にすると、私は起き上がって、夙に目を覚ましている妹と共に狭い窓際に歩み寄った。静かな夜、人々が塔の上に登る音が聞こえて来た。窓の向こうにはかの梁が広がっていた。予言的な夜その梁の下で人々は未来の雲の形姿を見、聞き取るために、耳を澄まさなければならぬのである。実際私は迷信が見たがっているものを本来の意味で目

にした。一 私は迷信同様に、屋根の上に棺を、ある戸口の所では葬列を見、別の戸口の所では婚礼の客人と花嫁の花輪とを見、そして人間の歳月が村の中を歩いて行き、その右側の母親の胸には人間と戯れる小さな喜びが留められ、そして左側の母親の胸には人間に襲いかかる苦しみと憂鬱が留められていた。歳月は両者を養おうとした。しかし両者は滅して散った。そして一つの苦しみあるいは一つの喜びが枯れるたびに、そのたびに二つの鐘の舌の一方が印に塔の鐘を鳴らした。...私は白い森の方に目をやった。その背後に私の友人達の住まいがあった。いや、若い年よ、と私は言った。私の友人達の許へ行って、彼らの両腕に汝の両腕から喜びを分かち、古い年の、滅しやうとしない残った頑丈な痛みを取り去り給え。すべての四方の世の街路に行って、汝の右側の胸の乳呑み児達を分かち与え、私にはただ一人の乳呑み児、一 健康を与え給え、と。一一

塔の音色は広大な、月のない夜の中に流れ込んで行った。夜は一つの大きな、星々の花の咲きこぼれる梢であった。小さな学校教師のヴッツよ、君はこの塔の上で、アウエンタールの墓地の白い石に向かい合って立っていて、それでいて壁と石とが閉じ込めている者のこと、つまりかつては君の場所でこの静寂の中やはり君と同じように新年を迎えていた者、君と同じようにまた静かに自分の父の逝ってしまった耳の上に吹き鳴らしていた君の父のことを考えていないということは幸せなことであろうか、それとも不幸なことであろうか。...勿論君は、新年にあたり、夜の長さの減少より他の減少のことは考えていずに、より一層落ち着いている。しかし私には私のフィリッピーネの方が好ましい。彼女はここ私の横で自分の生活を新たに生き延びていて、きっと最初のときよりも真面目であろう。そして彼女の胸の中では心は単に女性向けの仕事をしているばかりでなく、また時にはこの感情がこみ上げてきているのである。つまり人間はいかに取るに足りないものであるか、いかに大したものになるか、そしていかに地上は教会の墓地の壁であり、人間はこの壁で結晶して弾ける硝石に他ならないことか、と。善良な泣いている妹よ、この瞬間おまえの兄は、おまえが明日は一 そんなことは何も気にかけていない、ということをおまえに大して気にかけていない。この瞬間兄は、おまえや女性全体に次のことを許すことにする。つまりおまえ達の心はしばしば宝石に似ていて、その中では極めて美しい色彩と、一匹の一一 蚊、あるいは苔が隣り合って並んでいることを許すことにする。というのはこの風化して行く人生とその風化して行く人間とを眺めて、溜め息をつく人間は、この感情の最中で、人間達をまことに心から愛するより他に、まことに耐えるより他に、まことに云々の他にまじなことができようかということになるからである。...フィリッピーネ、おまえを抱擁させておくれ。いつか私がおまえを許そうとしないときには、私にこの抱擁を思い出させるがいい。...

私は今や私の伝記の筆を進めるべきであろう。しかし私は書き進めて即刻学的世界から次の世界へと移る気がない以上、私の頭と手とをそれに向けることはできない。私が単にこの伝記の植字工となり、グスタフがそのもったいないことになった恋人宛に送った手紙を書き写せば、その方がましである。

＜忠実な徳操豊かな方へ。ただ私にのみ値して、貴女が値するわけではない、この現在の暗い時は、貴女を苦しめてはならず、直に去って欲しいものです。何ということでしょう。幸い貴女はまだ私の目を、私の痛みで震える口を、私の砕け散った心を目にする

ことができません。今や私はこの心でもって全ての私の美しい日々を終止符を打っています。 — 貴女がここで執筆している私を御覧になったら、まだこの世で慰めをくださったこの上なく優しい方は私と私の叩くような苦悶の間に身を置かれて、私を守ろうとなさることでしょう。...この方は癒やすように私を眺めて、何に悩んでいるのかと尋ねることでしょう。...いや、善良な、忠実な心の方。お尋ねにならないでください。私は答えざるを得ないことでしょう。私の苦悶、私の死滅することのない拷問、私の蝮の傷とは、失われた無垢のことです。...そう聞くと貴女の永遠の無垢の心はびっくりして顔を背け、私を慰めようとはなさらないことでしょう。私は孤独なままでいることになり、痛みは真っ直ぐに私の横に鞭を持って立っていることになりましょう。いや私は頭を上げることすらなく、貴女の姿で私から去って行くすべての良き時間を、棄てられたまま、見送ることになりましょう。 — いや、もうそうなっています。貴女はもう去ってしまわれた。 — アマンドゥスよ、天はすっかり私から貴兄を離してしまい、私にベアータの百合の手を与えてくれた貴兄は、もはやこの上なく純なる手にはふさわしくない汚れた私の手を見ることはできないのだろうか。 — いや、貴兄がまだ存命であっても、私は貴兄をも失っていたことだろう。...いや、確かに、全人生の一杯の喜びの杯を持ち運びながら、その杯を一回の落下[墮落]で壊してしまい、全ての、全ての歳月の清涼さをこぼしてしまうような時がこの世には有り得るものです。

ベアータよ、今や私どもの別れです。貴女は私の心よりももっと忠実な心に値します。私は貴女の心に値しません。 — 私は貴女が愛し得るようなものをもはや何も有しません。 — 貴女の心にある私の像は引き裂かれなければなりません。 — 貴女の心は永遠に私の心の中に確固としてあります、しかしその心はもはや私を愛の目で見ることはなく、目を閉ざして、その心の居場所のことで泣いています。...いや、ベアータ、私は手紙をほとんど終えられません。その最後の行が書かれると、私どもは引き裂かれ、もはや互いに耳にすることはなく、もはや知り合うこともありません。 — いや、神様。後悔や涕泣が何の役に立ちましょう。誰もその裡に硬くて大きな苦悶しかもはや有しないときには、人間の熱い心を元通りにはできません。心は苦悶を、火山が岩石をそうするように、投げ上げ投げ飛ばそうとしますが、苦悶は再三燃え上がる釜の中に転げ落ちてくるもので、何も私どもを癒やしてくれず、葉の落ちた人間に対し、落葉の葉を蘇らすものは何もありません。人間の人生は、満月のように、ひたすら夜の中を移って行くと言っているオットマルの言う通りです。

仕方のないことです。ご機嫌よう、愛する方。グスタフは、貴女がこれから有するであろう時間に値しなかったのです。グスタフが傷付けた貴女の神聖な心は天使が包帯して欲しいと思いますし、友情の絆の中で静かにその心を抱いて欲しいと思います。自分の溢れる幸せにも満足していなかった私の最後の喜びの手紙は、もはや私が何も有しないこの救いのない手紙に入れて、共々燃やしてください。将来何年も経った後、私がまだ存命であること、私が私の失せた幸運を償う手立ての長い苦痛を茨のように私の見棄てられた胸に押し頂き、私の陰鬱な人生では両世界の間にある夜の方が先に来たということを貴女に早まって告げる者の現れないことを願っています。いつか貴女の兄上がもっと素敵な心で貴女の心の許に寄り添うとき、この兄上に似ている者は誰であったか、兄上に告げないで欲しいし、貴女自身にも告げないで欲しいものです。 — そしていつか貴女の涙の目

が白いピラミッドに向けられたとき、目を反らして、私がそこでどんなに幸せであったか忘れてください。 — いやはや、私の方はそれを忘れないでしょうし、目を反らしません。たとえ人間は思い出で死ぬことが有り得るとしても、私はアマンドゥスの墓に歩み寄り死んでしまうことでしょう。 — ベアータよ、ベアータよ。私の胸元で見られたものより強い愛を貴女が見いだす人間の胸は将来ありますまい。より強い徳操は容易でしょうが。 — しかし貴女がいつかこの徳操を見いだしたら、私のことは思い出さず、私の墮落のことを思い出さず、私どもの短い恋を後悔せずに、かつて星空の夜貴女の高貴な魂の許にいた者に不当なことをしないでください。...私のベアータよ。今この瞬間にはまだ貴女は私のものです。私のことをまだ知らないのですから。今この瞬間私の精神はまだ、その傷と汚点の上に手を当て、貴女の精神の前に進み、その許でくずおれ、途切れ途切れの溜め息を吐きながら、私を愛してくださいと言うことが許されます。...この瞬間の後ではもはやできません。 — この瞬間の後では私は一人っきりで、愛もなく慰めもありません。 — 長い人生が私の前に広く空しく横たわっています。そして貴女はこの中にいません。 — — — しかしこの人間の人生、その過ちは過ぎ去って行くでしょうし、死が私にその手を渡し、私を連れ去ることでしょう。 — 地上の先の日々が徳操と貴女のために私を神聖なものとするでしょう。 — — — そのときにはベアータ、やって来てください。すると貴女に対して、天使が貴女を貴女の現世での夕焼けを通じて第二世界へ運んできたとき、貴女に対して初めて、この世で破れたけれども、あの世で聖化された心が迎えに来て、貴女の許に寄り添いながら、それでいて歓喜のせいで死ぬことはなく、私はまたこう言うことでしょう。「愛しい方、私をまた受け入れてください。私は浄福です」。

— すべての現世の傷は消えていて、永遠の循環が私どもを包み、結び付けることでしょう。...いや私どもはまず別れなければなりません。この人生がまだ続きます。 — — 私より長く生きて、私より泣くことは少ないよう願っています。 — 私のことはすっかり忘れてしまわないようにしてください。 — 私のことをとても愛して下さったのでしょうか、忠実な方、もったいないことをされた方。...

グスタフ・F.>

夕方手紙を封印するときベアータは館の門から馬車で入って来た。直に多くの涙で覆われることになる彼女の光輝の姿が、馬車から降りるのを見ていたとき、彼は飛びすさり、宛名を書いて、ベッドに行き、カーテンを引き、思いきり穏やかに — 泣いた。主に長編小説の石工エーフェルを彼は避けた。彼の表情や声は彼の予告する視線の卑俗な勝利に他ならなかったからである。グスタフの打ちのめされた様さえももっと不謹慎に自分の勝利の一つに数えていた。...

本当に私は、悪魔がすべての大陸を消してしまい、その上自らも消してしまえばいいと思っている。というのは悪魔が半分私を消しているからである。悪魔のせいで私はこの伝記を最後まで書けないでいると知っている者は少ない。私は確信しているが、私は途中で死ぬはずはないし、(最近私の凍った帽子の下で私が想像した具合に)、また肺病で(これは本当の妄想であった)死ぬはずはない。しかしだからといって、私が心臓ポリープで滅することはないと保証されるものであろうか。すべての人間的蓋然性がどうもこれを保証しているのであるが。 — 幸い私はヴァイマルのムゼーウス[Musäus,

1735-87]のように頑固ではない。彼は、私が私のポリープを腐食したように、冷たいコーヒで大きく腐食した彼のポリープの存在を、このポリープが彼の素晴らしい心臓を詰まらせてしまい、すべての誕生日祝い、彼の妻の誕生日祝いのためのすべての賀詞を奪ってしまうまでは信じなかったのである。自分ももっと良く心臓ポリープの徴候には気付くと私は申し上げておく。私は止まっていく脈拍の裏に潜んでいるものを自分に隠していない。つまりまさに本当の心臓ポリープであって、死の導火線である。致命的な文芸上の秘密裁判、書評家同盟が我々人の良い阿呆どもの周りに[絞首用]綱を持って忍び寄り囲んでいるのである。我々阿呆は執筆する者で、蝶に似てミューズの抱擁で死んでしまうのである。

一 しかしクロイツァー硬貨[芝居]分も、一行も我々はこのような良心のない猛鳥類のために編集するべきではなかろう。私が舞台背景画家をほとんど殺してしまうような場面を書き上げ、私には有毒な手紙の効果と変わらないような伝記的場面を書いたところで誰が私にそのことを感謝しよう。一 今シェーラウへ行くことは私には稀になっていて

一 妹の他に誰が知ろうか、つまり私は、自分の霊廟となるであろうこの伝記的離宮でしばしば部屋や壁を何度も塗って、これが私の脈拍や呼吸をはなはだ奪って、私はいつか絵を描く傍ら、死んで発見されるに違いないということを誰が知ろうか。私はかくて死の卒中[雷]射程に入るのであれば、飛び跳ねて、部屋の中を動き回り、最も優美で最も崇高な箇所の中で、中断して、私の脚の長靴にクリームを塗ったり、帽子やズボンの塵を払ったりして、せめて呼吸が詰まらないようにして、それでもまた仕事に取りかかり、かくて忌々しいやり方で感傷と靴クリーム塗りとを交互になす必要があるのではなかろうか。

一 いつもいつも忌まわしい美学批評家達だ。

その上になお千もの心労が重なっていて、これが私をしばらく前からよく苦しめている。ポリープが直に私の息の根を止めて、私はそのうち用済みになるであろうと心労の方では気付いている模様である。私をいつもその裁判権領主の鉢に挟んでいて、哀れな領主裁判所長は他ならぬ職権上の仕事で死ななければならぬと信じこんでいる私のマウセンバッハのウミザリガニ野郎を、このエジプトの代官を、私は無視するつもりである。私の妹と私の階下のヴッツもそうである。兩人とも法外に陽気で、私をほとんど歌って殺しかねないのである。しかし私を押さえ付けているのは、家臣としての圧力で、人々が我らの侯爵と呼んでいる金属製の圧力機関である。

私はほとんど新たに抗弁書を仕上げて、名誉ある禁固刑に服することになりかねないところだった。しかしこここの伝記上の文書ではきっと私はむしろ私のオレンジを禁足の危険なしに王冠の頭部に投げつけることができよう。へい。汝は竜巻たるべく侯爵なのか。竜巻は自分が進んで行く先々のものすべてをその渦の中へ巻き上げるものであるが。汝は我々から一度盗みたいのであれば、自分自身の両手でもってするがいい。喜捨を求めて国中のすべての家々の前に行き、自ら自分の馬車に正規の税を徴収するがいい。しかしそうならば従来同様、我々の租税は、すべての汝の会計係の手に渡さなければならない通過税に従って、到着するときには、はるかな旅をしてきた鯁の如く、痩せて汝の宝石箱に届くことになり、汝は基本的には面倒な総額のうち適正な対数しかもはや手にしないことだろう。侯爵どもは、東インドの蟹のように、奪取するための巨大な鉢と、獲物を口に入れるための矮小な鉢を有するものである。

かくて首都全体がどういうところかと言えば、各人が支配者の一員であると見なしてい

ながら、それでいて他人が支配に紛れ込んでいて、子供達が父親のナイトガウンの下に這い入るようにオコジョの下に這い入って、一緒に父親の真似をしていると、そのことを各人が非難しているところであり — 偉いさんの宮殿は地獄石[硝酸銀棒]で壁が造られていて、これらが癩病の家のように小さな家を腐食しているところであり — 大臣が侯爵をその無感覚な手に載せて、鷹匠が鷹を手袋をして手で運ぶように運んでいるところであり — 人々が悪徳を上々の者達の年金と見なして、すべての倫理的腐肉を、蜂がその身体的腐肉をそうするように、巣箱から取り去らずに単に蠟で固めてしまうところであり、即ち警察が倫理の代わりをするつものところであり — どの宮廷でもそうであるように、一人の倫理的人物はとても我慢できない頑固なものに見なされ、絵画における幾何学模様のような按配となるところであり — 悪魔が完全に放たれ、聖なる霊が砂漠にいたるところであり、アウエンタールやその他の所で曲がったゾンデを手にして、それで他人の体や破片を国家の傷口から取り上げようとする人間に面と向かって、それは利口なやり方ではないと人々が言うところである。...

私はそれが本当であればいいと思う。そうであれば私は少なくとも健康であるということになる。このような自我の塊の後では、これらの自我から一つの国体がモナドからのように成立しているもので、私の自我なるものは余りに小さくて、優先され眺められることはない。そうでなければ、今国家に関する心配事の後では私に関する心配事を自ら語ることができよう。

— しかしそれでも私は読者に、私の苦悩、十字架上の[最後の]七つの言葉を語ることにしよう。もっとも読者自身は、私のことを気の毒に思う十字架に私を架ける手伝いをしたのであるが。根本的には誰も余り私の病気のことは気にしていない。私はここに座していて、読者に対する報われぬ愛から一日中こう思い描いているのである。すぐにすべての私の伝記的文書を、焚書の如く、灰にしてしまう、ひょっとしたら著者をも灰にしてしまうかもしれない火事だという声が生じかねない、と。 — 更にはこう思い描いて我が身を苛んでいるのである。この本は郵便馬車上で印刷所で台無しになってしまっ、読者は全作品を失ったも同然になってしまいかねない、それにまた印刷の後、猟犬の館や拷問部屋に追いやられて、そこでは批判的雇主や審美家教団の長がその書評家達をその長い歯と共に座らせていて、彼らは私の優しいベアータとその恋人の肉と衣装を引き裂いてしまい、彼らの部屋はその蜘蛛で一杯のかの部屋に似ていて、つまりこれらの蜘蛛は何かいうパリ人が所有していて、彼が入るといつもその引っこ抜かれた血の付いた鳩の羽根に天井から吸い込むために降りてきて、この蜘蛛の工場から彼は難儀して毎年絹の靴下を目指していたのであった、と。...こうした拷問すべては私が自らになしているもので、単に読者のためであるが、読者は私を読むことができないようになってしまっ、最も損をすることになりかねないのである。しかしこの苛酷な人間にとっては、自分を喜ばしてくれる人間達が何という難儀に遭うかはどうでもいいのである。 — ようやく私が私の手を十字架のこれらの釘から解放してしまうと、人生自身が私には詰まらぬ退屈な一弦琴の代物のように反吐を催させるものに思えて、それで胸が硬直するまで自分は何度呼吸をして、胸を上下させなければならないのか、あるいは何度死ぬまでに靴脱ぎ器を使い、髭剃り鏡の前に立たなければならないか計算する者誰もが不安にならざるを得ない。 — 私はいよいよ全人生における最大の瑣事を考察するが、これはある者がすべての同様に分散さ

れ、撒き散らされている髭剃りとか理容、衣服着用、便通を交互に片付けなければならないときの瑣事であろう。 — 私のまだ例えば緑色の眺望の上に広がっている最も暗い夜の想念とは、存在と友人達が遠く離れた明かりの如く暗い鉱山の中を進んで行くこの夜の人生において、死が私の大事な愛する者達をその無気力な私の両手から拉致して、永久に埋められた棺の中に閉じ込めてしまい、それを開ける鍵を有するのは死ぬ定めの方ではなく、ただ最大の、最も目に見えない者の手であるという想念である。…御身はすでに多くを私から奪ったのではないか。多彩な青春の輪がまだ砕けていず、大地とその光沢がまだ人間にまとわせる友情の多彩な絆が、二、三本の糸を除いてまだ断ち切られていないとき、私は苦悶とか人生の空しさについて語るであろうか。いや汝よ、私が今遠く離れていながら泣き声の聞こえている汝、その胸元に愛する心が冷たくなっている汝は不幸ではない。不幸なのは汝の方、生きている友人の愛について喜ぼうと思いつつ死に定めの方を考えて、至福の抱擁の中でこう自問している汝の方である。「この思いは互いにいつまで続くだろう」と。

第三十九扇形、あるいは第一の顕現日[一月六日後の最初の日曜日]の扇形

今とにかくとんでもない事態。病のせいで私は法学的ペンと伝記的ペンを共に手に執れないでいる。復活祭の市とかすべての判決猶予にもかかわらず、何にもペンを浸せない。…

第四十扇形、あるいは第二の顕現日[第一の一週間後]

私はついでに黒そこひにも罹ったように見える。というのは火花や雪片や蜘蛛の網が数時間にわたって、私の目の周りで踊っているからである。これは — プレンピウスや騎士ツィンマーマン[Zimmermann, 1728-95]の言によれば — いつも上述のそこひの印である。斜視は — リヒター[Richter, 1742-1812]の言によれば、これはそこひ治療師で、そこひ所有者[ジャン・パウル・リヒター]の方ではないが、その『外科治療』(第三巻、四二六頁)で紛れもなくそこひに先駆けて生ずるとされる。私がいかに斜視であるか、誰でも分かる。私はいつも左右同時にすべての方向を見、見ようとするからである。 — 私が本当にモグラのように全く見えなくなったら、いずれにせよ私のささやかな人生の伝記もお仕舞いであろう。…

第四十一扇形、あるいは第三の顕現日の扇形

私は二、三の熱病に一度に罹っている。これらの病は他のもっと幸運な人間の場合、普通互いに嫌い合うものである。三日熱と — 四日熱と — 更に一般的な秋の熱あるいは春の熱である。 — しかし私は、まだ棺桶に入れられないうちは、読者に対して日曜日ごとに書き付けて行き、例えば二、三行記し付けて行くつもりである。文体すらもが情けないことになっている。ここでは二つの動詞が韻を合わせようとしている。…

第四十二扇形、あるいは第四の顕現日の扇形

汝ら素敵な伝記執筆の日曜日よ。私はもはやそんな日曜日を体験できない。私がすでに知らせた厄災の中に、更に私の胃の中にいる生きた蜥蜴が更に加わっている。私が今年の夏その卵を、不幸な喉の渇き故に、飲み込んだに違いないのである。

第四十三扇形、あるいは第五、第六の顕現日の扇形

胃の中で芽生えたサクランボの種とか、耳の中の豌豆とかについては例がある。しかし通常飲み込まれてしまうスグリの実の種が、腸が便秘で上述の灌木の真の樹皮末温床の類になったとき、腸の中で発生したということを私はまだ読んだことがない。 — 善良なる天よ、仕舞いには私の病気は何ということになるのであろうか。病の目に見えぬ前足が私の神経を掴み、押さえ込み、拡大し、引き裂いている。 ...

第四十四扇形、あるいは復活祭前九番目の日曜日の扇形

すべての病気から、病理学のすべての章から一度に編成されている病気があるとすれば、それを有するのは私に他ならない。卒中 — 消耗 — 胃の痙攣あるいは蜥蜴 — 三種の熱 — 心臓ポリープ — 発芽して行くスグリの実の木 —— これらはわずかな目に見える構成要素、成分である。これまで私の厄災に即して探り出すことが私にはできている。更に目に見えない成分についても、両成分が体を仕留めたときに、私の哀れな体をより深く理性的に解剖すれば、もっと明らかになることであろう。 ...

第四十五扇形、あるいは復活祭前八番目の日曜日の扇形

憂慮すべき肋膜炎が — 仮に全徴候学、脈拍困難、胸の疼痛を信ずるならば — 私を襲い、一昨日から私に留まっていて、私の虐待された人生とこの伝記執筆を閉じさせる気である。 — 幸い治療が上手く行って、死が膿胸へと緩和されると話は別である。 — あるいは消耗性疾患とか — あるいは膿瘍とか — あるいは硬性癌とか潰瘍でも話は別である。 —— この治療後は単に私の胸に穴を開けさえすれば、その胸から、つまりかつて人間愛の一冊の本が生ずることになったその胸から生命と病原菌とを一緒に取り出せよう。 ...

第四十六扇形、あるいは四旬節前の最後の日曜日の扇形

立派な読者の方々。貴方らは貴方らの大目に見る目で最初の扇形のチェス盤から最後の扇形の臨終の床まで私に付いて来てくださったが、私の軌道と私どもの交誼はお仕舞いを迎えている。 — 人生が貴方らを決して圧迫しないで欲しい、 — 貴方らのビジネスの視線は決して小さな分野にかまけて大きな分野を、最初の人生にかまけて第二の人生を、人間にかまけて自分達のことを忘れることのないようにして欲しい。 — 貴方らの人生を色々な夢の花輪が飾って欲しい。そして貴方らの死をどんな夢も恐怖させないで欲し

い。...私の妹が一切を終わらせることになっている。...楽しく生き、楽しく眠り給え。...

第四十七扇形、あるいは四旬節第一主日の扇形

私の善良な兄は、私がこの本を仕上げることを望んでいます。もしそんな具合であれば、妹としてはそんなことは痛みの余りできないことでしょう。しかし私は兄がそう思っているほど重い病ではないと天に祈っています。 — 食事の後、兄はきっとそう思うのでしょう。 — それで、私ども両人が仲良く暮らすためには、その思いを保証して、兄本人同様に兄を病氣と称しなければなりません。昨日学校教師[ヴッツ]は兄の胸を叩いて、反響するか聴くようにさせられていました。ウィーンのアーフェンブリュガー[Avenbrügger, 1722-1809]という方が、この反響は元気な肺の印と書いていたからです。不幸にして反響はわずかでした。それで兄は自らを諦めてしまいました。しかし私はこっそりとフェンク博士殿に兄の苦しみを鎮めて欲しいと書きました。 — 若きフォン・ファルケンベルク殿も上部シェーラウの両親の許で病氣であり、私の友達のベアータもやはり両親の許で病氣である旨報告するよう言われております。...私ども皆にとって暗い冬です。春がどの人の心をも癒やして、私とこの本の読者の方々に私の愛する兄を戻してくれるよう祈っています。

第四十八扇形、あるいは五月の扇形

とんとん叩く従兄弟 — 治癒 — 湯治のキャラバン

— 兄と伝記作者がまた戻って来た。自由に楽しく私はまた登場する。冬と私の道化は去った。ただ喜びだけが、一刻一刻、どの八つ折判の頁にも、どのインクの滴りにも盛られる。

事の次第はこうであった。どんな思い込みの病氣も真の病氣を前提としている。しかしそれでも思い込みの病氣の理由があるものである。健康な状態と病氣の状態、喜びの状態と悲しみの状態、軟弱な状態と頑固な状態のその間の交替はその速やかさとコントラストの点で最高度に達していた。私は息切れして調書をもはや口述できなくなって、この伝記の諸場面を私はもはや考えることすら許されなくなっていた。その時私はある赤く燃え上がる冬の夕方、外の赤く化粧された雪の中を歩き回っていて、この雪の中で「運よく」という言葉に出会った。

私は雪の蠟板に記されたこの言葉をいつも思い出すことだろう。それは竹竿で簡潔に美しく記されていたのであった。「フェンクよ」と私は機械的に叫んだ。「君は遠く離れているのではあるまい」と私は考えた。というのはどのヨーロッパ人も(植民地農場でさえ)

自分のペンの切れ目を自らの言葉で試すからで、ドクトルはきっと全全紙を試す音「運よく」を自分のペンの最初の刻印として満たしたのであろうから、すぐに事の次第を察したのであった。

— そして私の許に彼は座っていることになった。そして(きっと私の病身の姿に関してよりは私の妹の病氣の話の方に関してもっと長く)私のことを笑い飛ばして、それで私は、笑ったものか怒ったものか分からずに、その双方を大変立派に繰り返したのであった。

ー しかし直に彼は私の事例に付き合っ、ある話の際にやはり笑ったり怒ったりせざるを得なくなった。この話というのは、我々つまり全憂鬱症福祉委員会にとって不名誉なものであるが、ここで語ることにするものである。

つまり私の近しい従兄弟にフェッターラインという名の男が、やはり部屋にいたのであった。彼はシェーラウの靴屋にして塔の番人であった。彼は靴と町の安全の管理をしていて、皮革と年代学（鐘突きのせい）に関与していた。私の近しい従兄弟は墨のように黒づくめ、沈み込んでいた。私の病気のせいではなく、彼の妻の病気のせいで、彼女はそれが原因で亡くなっていた。この病気と死亡の出来事を彼は私とドクトルにも話そうと思っていた。ドクトルには参考となり、私には感動となるようにとの配慮からであった。不幸にして彼が私のフィリッピーネの縫い目解きのナイフを手にとって、それで死の知らせに自分の注目を注いでいる間にテーブルをこつこつ叩かないでいたら、首尾よく終わっていたかもしれない。早速私はそのことを気にしないで済むよう手配した。それ故私の手はそつとー 私の両目は彼の両目に据えて、ー 上述のハンマーの邪魔をするために、忍び寄って行った。

しかし従兄弟殿の手は私の手を丁重に避けて、叩き続けた。私は喜んで深く感動していたことであろう、というのは彼の話はますます亡き私の従姉妹の臨終に近付いていたからである。ー しかし私は私の耳を叩くナイフの音から離すことができなかった。幸い私はヴッツの男の子がそこに立っているのを見て、急いでこのとんとん男から不吉な縫い目解きナイフを借り上げて、それで二、三の謝肉祭のブレーツェル[8 字型固いパン]を不安の中で半分ー その子供のために切った。

さて私は無事に立っていて、自らナイフを手にしていた。しかし彼は今やテーブルをピアノにして武装解除された指で弾き始め、その短編小説の中では自分の妻に神聖な最後の晩餐を与えていた。私は自分と自分の耳を制御しようとした。しかし私は一部は内面での争いのため、一部は彼の太鼓叩きの指に注意深く聞き入っていて、この指の音は多大な苦勞をしてやっと聞き取れるものであったが、すっかり私の良き従姉妹、つまりきつとざらにはいない妻、塔の番人夫人のこの従姉妹から遠ざかってしまい、それで私はもう十分な気がして、彼のオルガン弾きの困った手の方へ差し伸べて、その手を捉えて、こう発した。「私の愛しい従兄弟のフェッターライン殿」。彼は私が感動しているものと推測した。そして彼自らがますます感動して、自らを忘れ、左のまだ捉えられていない指でテーブルを余りに強くこつこつした。

私はストア主義者のように、この新たな不幸の留[十字架への道の途次]で内面から自らを救いだそうとして、私の背後での外部のこつこつの音の間、私の良き従姉妹とその死者の床を思い描いた。「そんな具合に」（と私は雄弁に自身に言った）「御身枯れた女性は埋葬されている。強張って、動かず、いわば死んでいるのだ」。ー 彼は今や猛烈にこつこつした。ー 私はたまらずに、この話し手の左手も取り押さえて、その手を半ば感動して握った。「お二人とも私がどんな気分であったか」（と彼は言った）「お分かりでしょう。あたかも塔が私の上に倒れてきたかのようなようでした。私は妻を袋のように背負わなければならない、七階を下って行ったのです」。ー 私は我を忘れていた。第一にその話のことで我を忘れ、第二に私は私の手の中で新たにこつこつしようとする彼の手の努力を感じ取ったからである。圧倒されて私は言った。「後生ですから、私の大事な従兄弟殿。亡き

故人のために、貴方自身の従兄弟を思ってくださいるのであれば、...」。「辛いとおっしゃるのであれば」と彼は言った、「やめましょう」。 — 「いや」と私は言った「こつこつと音を立てないことです。 — しかし私ども両人はこのような従姉妹を二度と得られないことでしょう」。私はもう何も考えていなかったのである。

しかし人生というものは細密画のようにこのような点と、このような瞬間から成り立っている。ストア主義者はしばしば時間単位の棍棒に耐えられるが、しかし秒単位の蚊の吻針に耐えられない。

我がドクトルは私を真面目に（私の従兄弟が屈託なく「私の従兄弟殿はどうしたのですか」と問う中）部屋から連れ出して言った。「親愛なるジャン・パウルよ。私の真の友、政府の弁護士にして、マウセンバッハの裁判所判事、伝記部門の執筆者なる者よ。 — しかし君はやはり一人の道化だ、つまり憂鬱症患者だ」。

夕方彼は私にその二つを説明した。いやかの晩に君は、良きフェンクよ、憂鬱症という猛獣の口、毒の牙から私を救い出した。憂鬱症はどの瞬間でもその腐食する液をはね掛けるものだ。君の舌には君の全薬局があるも同然だった。君の処方箋は諷刺で、君の治療は教化であった。

「君の伝記に記すことだ」 — と彼は始めて、両手を彼のマフの中へ差し入れた。 — 「君の場合テュンメル[Thümmel, 1738-1817]氏とか彼のドクトル、及び彼らの医学的一団の模倣ではない、この一団は半ば患者から、半ば医師から成り立っていたものだ。 — それに私が君をも叱っている、と。実際そうするつもりなのだ。 — いいかい、君がとんでもなく元気であったなんて、君はこれまでどこに君の分別、いや単に君の想像力を有していたのか、言い給え。学者達はこの点に関して余りに様々な見解であるということは答えなくていい。 — ウィリスは想像力を脳梁に置いていて、ポシドニウスは逆に前の脳室に、これはアエティスも同じで — そしてグラウザーは卵形の中枢に置いていたわけだが。[ここの術学は『シャンディー』風、II、20]肝腎なことは単に元気な語り口のことだ。君は誤魔化そうとするから、君を別の手で改めよう。言ってくれ。 — いや愛するフィリップーネ、言ってください。何故貴女は、これまでこの患者がかくも多くの崇高な、感動的な、詩的な情感を有し、他の人々のために執筆することを許してきたのですか。彼のためにインク壺とかコーヒーポットを投げ棄てたり、写字台全体をひっくり返すことができたでありますように。情感的空想の緊張はすべての精神的緊張の中で最も神経をだめにします。代数学者はいつでも悲劇作者よりも長生きするのです」。

「それにまた」と私は言った、「生理学者より長生きします。ハラーの忌々しいけれど立派な生理学はほとんど私を困憊させるころでした。ここの八巻本です」。 —

「その理由はまさに」 — と彼は続けた — 「この解剖学の八ヶ国語聖書[八巻本]は、いつもは単に流れるような詩的沃野を漂う習慣の空想を、鋭く細分化された、その上小さな諸対象に目を向けるよう強いるからで、それ故、...」。

「幸い」 — と私は彼を遮った — 「私は私と空想とをかなりまた褐色のビール^{*原注1}で元気付けました。このビールを私は（息抜きをしようと思ったとき）フォン・ハラ一殿に取りかかっている間、服用しなければならなかったのです。この賦活剤で、こう薄めると私は精神のこの薬、つまり生理学をより容易に取り入れることができました。従って私はこの上ない大酒飲みになる気がなければ、この上ない偉大な生理学者にはなれないのです」。

「結構なことだ」 — と彼はいらいらして言って、彼のマフから尻尾を取り出した。

— 「しかしそれは何にもならない。私と君はここで全く無駄話をしていて、理性的なパラグラフ[節]をなしていない。君の伝記の書評家は私が余り体系的でないと思うに違いない。

今からは本のように、あるいは博士の論争のように話すことにしよう。いずれにせよ私は博士を狙っている博士志願者のための一論争を書く予定になっており、その中で座骨神経か交感神経に触れようと思っていた。それはそのままにしておき、ここで一般的に神経衰弱の論争を語ることにしよう。

どの医師も自分が他の病気より頻繁に診る得意の病気を有しなければならない。 — 私の好みの病気は神経衰弱だ。刺激されやすい、弱い、過度に緊張した神経、ヒステリー症状、それに君の憂鬱症 — これが私の唯一好きな病の多くの洗礼名だ。

この憂鬱症は世襲貴族のように早めに手に入れられるものだ。 — 世襲貴族本人や、ほとんど上流の夫人達、最も高位の子供達は生来この病を有しており — この場合どのようなドクトル帽によっても永遠の劫罰のように取り除くことはできない、和らげるだけだ。

しかし君は買い取った貴族のように功績で憂鬱症を得ている」。 —

「憂鬱症はむしろそれ自体一つの功績でありましょう」 — と私は言った — 「憂鬱症患者というのは、この患者自身は学者ではなくても、学者と乳兄弟です。我々と同様に猿が罹る天然痘は、人間と猿の類似性を保証しているようなものです」。 —

「しかし君の功績は」 — と彼は続けた — 「はるかにより容易に治療されよう。君から三つのこと、つまり君の病理学的熱病の像 — 君の薬用グラス — 君の本を奪ってしまえば、病気も一緒に付いて行こう。私は論争のように語るつもりであることをすぐに忘れてしまう。それでは熱病の像からだ。 — この上なく情けない徴候学というのは確かに中国式の徴候学ではなく、憂鬱症の徴候学だ。君の病気とストア派の徳操は、その一つを有するものはすべてを有するという点で互いに似ている。君は担保携帯立像として立っていて、病理学はこの立像に対してすべてのその権標や紋章をまとめて、周りに持たせている。 — 君は情けない姿で君の医学的銃装備の下、心臓ポリープや浸軟された

*原注 1 冗談を解しない読者ほど真面目さを理解しない読者はいないので、この下の方で私はこのクラスの人々のために注釈しておく。つまり上述の件は本当であり、私は（同様に法外な水愛好者、コーヒー愛好者として）困難になっていく動悸や呼吸、それにすべての内的緊張でひねくれたものになった他の衰弱に対する神経強壮薬として — ホップのビールほどに効果のあるものを見いだせなかったのである。

肺葉、胃の中の虫等々の徴候学的陸荷の下、歩き回っている」。

「いやはや」と私は答えた、「すべて肩の荷がおりました。私がまだ持ち運んでいるのはただ脳球での膨らんだ血管の毛細の網、あるいは一種の死の潜水夫帽子だけで、これは人々がとても卑俗には卒中発作と呼んでいるものです」。

「道化の帽子を君は内面に被っている。この件は次のことに他ならないからだ。憂鬱症患者では確かにすべての神経が弱っているが、しかし最も乱用されている神経が最も弱っている。この衰弱は大方座り続け、研究し続け、執筆し続けていると得られるもので、これらの精神的子供の[子供が犠牲に捧げられた]モロクとなる定めのままに下半身から、指には与えているすべての動きが奪われてしまうために、人々は病んだ下半身を病んだ神経と混同してしまい、ケンプ[Kaempf, 1726-87]の浣腸器こそは同時に下半身と神経に対する二連の散弾銃であると期待する。しかしそれは信じない方がいい。強壯な下半身の上に憂鬱症の胸像が座していることは有り得る。肺葉が時に弛緩するとき、君の肺葉がだめになっているわけではない。君の肺の神経が、肺葉を活気付けるべき神経がいかれているか、あるいは君の横隔膜の神経がいかれているかだ。君の胃の神経が弛緩すると、君は多くの目眩や吐き気に襲われ、あたかも本当に胃に食事療法上の沈殿物があるかのような、あるいは頭部に何らかの卒中があるかのような気になる。胃の衰弱といっても、必ずしも神経が弱っている結果ではない。元気のない消耗患者がその死の前三十分になんか食べるものか、そして消化するものか見てみればいい。 — それ故君の黄色の秋の落葉色とか、君の肉の欠けた骨の石化とか、君の途切れがちな脈拍とか、君の失神でさえ — 親愛なるパウロよ、言わなくても分かるだろう」。

「おや、そんなことか」と患者は言った。

「だから」とドクトルは言った、「一切は神経によって行われているので、これについてはしばしば学者達は、私もその一人であるが、定義すら知らないのだが、それで神経による周期的、巡回的、しかし須臾の痙攣とか脱力は段々にすべての徴候学を経なければならないが、しかしすべての病理学を引き起こすわけではない。今や金の縁を付けられた論争の第二パラグラフということになる」。 —

「第一パラグラフはどこにあったのですか」と私は尋ねた。

「もう言ったろう。それ故第二パラグラフではすべての薬用瓶は露地に投げられ、すべての散薬は空中に蒔かれ、すべての忌々しい胃薬は破門となり灰になされ、温かい、しばしば冷たい浴槽ははかされ、ケンプの浣腸器は遠く病人用ベッドの下に離され、忙しいことになる。...というのは神経は一週間ぐらいでは（最良の鉄剤治療がなされようと）ほとんど強壯化されないのと同様に、一週間ぐらいで（どんなにひどい不摂生でも）だめになってしまうこともないからである。神経の強さはだめになっていくときと同じゆっくりとした足取りで戻って来る。薬は、従って、食事が変わらなければならない、 — こうすると害があるので — それで食事は薬が変わらなければならない」。

「私はほとんど食べません」。

「これは最も不快な不摂生だ。そうなると胃はその力に応じて一種の懐疑主義、あるいは諦観主義、いや無気力を生じさせることになる。むしろ文学的規則（多読よりは精読）を反対にして、沢山食べずに多種類食べることだ。食事療法学では食事、飲み物、睡眠等に関しては、その種類を制限せず、すべての程度を制限すべきである。せいぜい各人が有

するのは、好みの虹、好みの信仰、好みの胃袋、そして好みの ― 食事療法学だ。それでもこうしたことすべては私の第三の博士志願者のパラグラフではなく、まず次のことが第三にあたる。つまりただ体を動かすことが憂鬱症に対する第一の医師の助手であるということであり ― そして― 私はすでに憂鬱症と動きとが一緒になって、活発な第三身分の中にあるのを見たので ― ただ魂のすべての動きの欠如こそが、この悪魔全体に対する第一等の侍医であるということになる。情熱は、その敵の思考同様に、その友の詩作同様に不健康なものだ。ただそのすべての連合ということになるともっと有害になる」。

「情熱の下にあると」 ― と彼は続けた ― 「苦悶は雪解け同様にすべての諸力を溶かしてしまう ― 享樂がすべての神経増強剤の中で最も強力なものであるようなものである。 ― 今や私は君のすべての医学的過ちや森林犯罪を一まとめにして、君の正体を君に聴かせることにしよう」。...

「そんなことは聞かない」と私は言った。

「しかし君は、すべての憂鬱症患者やすべてのだらしない女達のように致命的な行いをし、あるときは胃を、あるときは肺を、つまりあるときは[木製の歯の]はめば歯車に、あるときは時打ち歯車に、あるときは指針盤歯車に油を差して、その一方活動中の錘の石は外したり、あるいは止まったまま大地に置いていたのだ。君は一脚の貝のように君の書齋の岩にくっついて吸い込んでいた。そして、 ― これが根本的に唯一の悪であるが ― 抱卵中の雌鶏の燃えるような疲れた胸でもって、君の伝記的卵、扇形の上に座し続けながら、生きている者達に追い付こうとしていた。君の良心、君の妹、君の学名、君の胃はどこにあったのかね」。

「フェンクよ、マフの尾でそんなに激しく振らないでくれ。むしろそれはベッドに投げてくれ」。

「私の博士論争と君の病気は共に片が付くことになる。君の活動が、国家同様に上から下へと減じていったらね。 ― 頭は使わず、心は快活に動悸させ、両足は動き回り、そうしたら三月がやって来るだけだ」。...

私は数ヶ月そのことを順次行って、哀れな体をまた元の状態に戻すようにした。 ― そして私が神経にとっての粉末殺鼠剤にしてうどん粉病たるもの、つまりコーヒーと機知とを抑制で、その代わりに褐色のビールと私のヴッツの子供を相手にしていると、あるとき突然部屋が明るくなり、アウエンタールと天とが燃え上がって、人々はその過ちをやめ、すべての平面が緑となって、すべての喉が歌い、すべての心が微笑み、私は明かりと喜びの前でくしゃみし、こう考えた。一人の女神が到来したか、春が到来した、と。 ― まったくその両者であって、女神とは健康であった。

ただ御身の祭壇で私は私の伝記の頁を書き進めようと思う。 ― ペスト看護人はそれしか許さなかった。彼の結論と処方箋はこうである。「私だったら」 ― と彼は言った

― 「私の伝記では、暑い地帯に似て、冬全体をそのすべての事柄と一緒に省略することだろう。冬はいずれにせよ、暑い地帯同様に、単に(目の)雨で形成されているのだから。私が君の代わりに座していたら、フェンク博士がそれを望まず、好きになれず、読もうとしないのであり、三六五時間分先行して播種して行く物語から離れて、ペンで咳しながら追って砕土するよりは、むしろ現在に密着して、現在を影絵板に押し付け、早速スケッチするよう博士に言われていると述べることだろう。私は」(とフェンクは続けた)「た

だフェンク博士に噛み付くよう読者に助言することだろう。私が冬全体の中から単に次の劣等な抜粋しか提供できないのは、博士一人のせいである、と。つまり善良なグスタフは冬を両親の許、ホッペディーツェル教授の家で乗り越えた。両親はそこを通常冬の宿営としていたのであった。― 彼は自分の心を疲れさせ、別のある心を忘れるために、自分の頭を疲れさせた。自分の過ちを後悔したが、早まった別れの手紙も後悔した。自分の痛みを教授の哲学的北風に晒した。教授はグスタフのような華奢な楽器に対して足でペダルを踏みつける具合にしてオルガンの音を出した。そして監禁、思索、憧憬とで彼の生命の花々を衰えさせ、この花々はほとんど春になってもまた芽吹いたり、彩色されることはない。

ベアータは家で。― 多分彼女の女性らしい目は自分の喜びのパルカ[運命の女神]を容易に見抜いていて、そのお蔭で蒙った病気を口実にして苦もなく別れてきていたのであるが。― 私の長編小説の同業者エーフェルがいなかったら更にもっと落葉して、折り曲げられていたことだろう。この男は彼女を十分に立腹させて、彼女の苦悶に怒りという活性剤を混合させたのであった。彼はいつもやって来て、極めて美しく破れてヴェールをかけられた失恋の目に自分自身への恋の跡を求めて跳んでいたからである。今や彼女はフェンクの勧めで、リーリエンバートの鉱泉を飲んでいる。そしてただ一人の小間使いの娘と暮らしている。― 五月が汝の精神の垂れた花の蕾を持ち上げてくるといいが、汝の華奢な体が、新雪が花々を覆うように、汝の精神を取り巻き、押し抱いていて、その精神の開いた花弁からは雪の覆いがようやく離れた第二の天の春の太陽の下、流れ出てくるであろうものである。―

オットマルは冬を喧嘩し、論争して過ごした。そして多くの文通をした。私同様に弁護士活動をしたが、しかし制服を着たすべての有毒な系統樹や天狼星[シリウス]に対抗し、最も対抗したのは彼の兄の侯爵冠に対してで、侯爵はこの冠で家臣を蝶のように追ったり捉えたりするのである。弁護士は政府に対する唯一の護民官であると彼は信じている。ただ弁護士達のこれまでの読み上げ方は、綴り方そのものより、これは亡きハイネッケ[Heinecke, 1727-90]が原罪やペストよりも劣等なものと叫んだのであるが、劣等であったという意見である。私は彼をほとんど侯爵についての或る諷刺の著者であると思いたいと思っている。この諷刺は冬、王座の前に現れて、或る盗賊の名親依頼の手紙でこう頼んでいたものであった。侯爵は小さな盗人の皇子に対して、大臣に対するように、自分の名前を授けて欲しい、そして両親が処刑されたら、その子を養子にして欲しい、と。最も私の目を引いたのは、より上品な筆跡を窺わせる若干の諷刺的特徴で、例えば次のようなものである。国家は、しばしば綱渡り師達が形成する人間ピラミッドであって、その先端は少年で閉じられるものである。― 人民は草のように頑丈で柔軟なもので、足で踏み潰されることはなく、引き抜かれようと刈り取られようとまた後から生えてくるものである。そして王侯の目にとって草の最も美しい丈というものは、公園の草の滑らかに刈り取られた丈である。― 盗人や盗賊は国家における分離主義者、非国教徒と見なされて、ユダヤ人達よりももっと苛立たしい弾圧の下に暮らしていることだろう。何の市民的榮譽もなく、官職から締め出されて、初期キリスト教徒のように洞窟の中で、同じような迫害に晒されている。それでも人々は、どこかの使節よりも贅沢やお金の循環、商取引を一層強く促進するこのような国家の市民を、ただ次の理由で厳しく扱っている、つまりこの宗派の人々は第七の戒律に関して特別な意見を有するからであるが、しかしこれは根本的には単

に表現の点で他の宗派の意見とは異なるだけである等々、 —

しかしこの著者もこの秘密結社の本当の会員かもしれない。この結社は他のどの結社よりもそもそもはるかに諧謔的に、人畜無害に盗むのである。最近彼らは郵便馬車を止めて、その馬車からある伯爵免状だけを盗んだが、これはこの免状の梱包紙にほとんど値しない某氏に輸送されていたものである。 — 更に彼らはあるとき、高等裁判所のように副馬車からある種の重要な文書を取り上げたが、この文書についてはここで言うわけに行かない — 二週間前この海賊船が劇場や舞踏会の衣装室から棚の前に停泊して、その中に吊されている諸性格に引き網を投げかけたものである。その後演技や仮装のための服は百姓の服しかなくなったのである。 — 私は彼らを、読者が承知しているように、随分前喪の説教壇や祭壇から黒色の鞆翅を奪っていった者達と同一人物と見なしている。

そんなわけで、伝記上の冬は済んでしまい溶け去ったことだろう。 — 君がそこまで書いたのであれば — とフェンクは言った — 「リーリエンバートへ旅して、鉱泉と鉱泉ドクトル、私がそうであるが、それに鉱泉客人、グスタフがそうであるが、これらを相手にするといひ。グスタフはリーリエンの鉱泉やそのリーリエン[百合]の一带がなければ全治しないのだ。私は彼を説得しなければならない。誰が来ようとも。喜び給え。我々は楽園に向かって行くのだ。君が楽園での最初の著者であって、アダムではない」。

「このエデンで」 — と私は言った、「最も美しい苗床というのは、私の作品が長編小説ではないということです。そうでなければ批評家達は我々のような五人の人物を一度に湯治に行かせることはないでしょう。批評家達は、私どもがやって来て、このような天国で一堂に会するのは真実らしくないといちゃもんを付けることでしょう。でも私は、自分が単に伝記を書いて、私と他の人物達が本当に実在する、私の頭の他でも実在するという真の幸運を得ています」。

—— 今や読者はこの扇形の誕生日を知ることになるろう。 —— この日はまさに我々の幸運より一日先なのである。 — 要するに明日我々は、私とフィリップ・ネは旅するのであり、今日そのことを書いている。グスタフは単に友情と医学上の描写の流れによって一緒に連れて来られ、明日我々の許から進んで行く。 — 今日幸運の女神は鼓腸も有しないし、片頭痛も有しない。万事が上手く行っている。すべてが梱包され、 — 私の猶予願いが書かれ、 — マウセンバッハから出ることを誰も私に禁ずることはできない。

— 空は天的に青く、私は私の目を信ずる必要はなく、フォン・ソシュール氏のシアノメーター^{*原注 2}を信ずればいい。 — 私は春のごとく、その舞う蝶のごとく見え、花咲いている。 — 要するに、私の幸福に欠けているものは、ただ今日の分の扇形が幸い書き終えられてしまうということで、これを私は今日までに仕上げ、すべての過去を背にしまい、明日のことは明日書くしか必要ないことにすることである。...

さてこの扇形が仕上がったので、かくて — 青い五月よ — 御身の愛の腕を広げ、御身の空色の目を開け、御身の乙女らしい顔を覗かせ、大地に踏み出すがいい。すべての生命が幸せに酔って、御身の頬に、御身の腕に、御身の足許にくずおれられるように、そして伝記作者もどこであれ横たわっておれるようにするがいい。

*原注 2 空の青さの度合いを調べるための青測定器。

第四十九扇形、あるいは第一の歓喜の扇形

霧 — リーリエンバート

我々を、つまり私とグスタフと私の妹を、汝の花のエデンに受け入れるがいい、覆われたリーリエンバートよ。そして我々の夢に、我々の前でその夢が戯れるように、現世の大地を与えるがいい、過去同様にかくも薄明かりで美しくあれ。

今日我々は入場して行った。我々の先駆けは戯れる一匹の蝶で、その蝶を我々は我々の前で一つの花の留から別の留へと追い立てた。 — そして私のペンの道も別に変わったところに行くわけではない。

今日の朝は全アウエンタールー帯を一つの霧の海の下に置いていた。天の雲は我々の深い花々の上に安らっていた。我々は出発し、この流れ込む天の中に入って行った。この天の中へはいつもはただアルプスのみが聳え立っているものである。この霧の球では上の方で太陽が青ざめた幻日の如く姿を見せていた。とうとう白い大洋は長い奔流へと流れて行き — 森の上では山々が[吊り下がって]浮かんでいて、どの谷をもほの白く輝く雲が覆っていた。我々の上では青い天の輪がますます広がって行き、遂には地球は天からその震えるヴェールを剥ぎ取って、喜ばしげに天の大きな永遠の顔を覗き込んだ。 — 天の折りたたまれていた白いシート（私の妹の言であるが）はまだ木々の許ではためいていて、一部の霧がまだ花々を覆い、絹レースとして花々の周りで波打っていた。 — とうとう風景は雪のほの白く光る金の粒でちりばめられて、野原は拡大された蝶の羽根を掛けられた具合になった。浄化されて上昇する五月の大気が氷で肺の飲み物を冷やして、太陽は楽しげに我々の煌めく春を見下ろし、眺め、すべての露の小球の中へ光を注いでいた。神がすべての魂に光を注ぐように。...いや、我々を万物が抱擁しているように見え、我々が万物を抱擁しようとしていた今日のこの朝、私はこう自問しても自答できなかったのであるが、つまり「かつておまえの徳操がおまえの享受同様に純粋なものであったなら、この時はどの時間に対しておまえに報いるつもりなのであろう」と、それが今ではなおさらに答えに窮しているのである。人間は思い出によってその喜びを新たにすることはできるが、その功績を新たにすることはできないということ、そして我々の脳の繊維は風奏琴の弦であって、これは夙に過ぎ去った時間が吹き付けるときに奏し始めるのであるということが悟られるのである。偉大な世界精神はすべての脆い混沌の魂を我々のために花々へと形を変えることはできなかった。しかしその精神は我々の精神に、第二の、もっと柔軟な混沌から、つまり脳球から、ただ薔薇の平野を、諸太陽の形姿を造る力を与えたのであった。ルソーよ、汝は自身が承知しているよりも幸せであった。汝の今の戦い取られた天は、汝が汝の空想の中でここに設置した天とは、汝だけがその天に住んでいるのではないという点で異なるにすぎないことだろう。...

しかしこれがまさに雲泥の差となっている。私は私の妹の例より他にその天をもっと甘美に感じられた所があったであろうか。妹の表情は我々の天の反照であって、妹の溜め息は我々の親密な調和の木霊であった。愛しい者よ。いつもそうであっておくれ。おまえはこの病人から、私が病氣から得たほどの難儀を受けた。いずれにせよ私はどちらを頻繁におまえに対して取り消しているか、知らない。私の非難の方か、私の称賛の方か。

我々は無言の想いの裡に下部シェーラウに着いて、すでに我々の青白い旅の同伴者、私のグスタフが準備できているのに出会った。彼は大いに黙っていた。彼の言葉は、彼の想念の抑圧の下にあった。外部の陽光は内部の月光へと青ざめていた。というのは人間はこの世で失われることになる最良のものを — つまり健康と愛とを求めたり、見いだそうと期待しているとき楽しくなれないからである。このような時には魂の弦は単に最も軽やかな指の下でのみ、即ち女性の指の下でのみ調子が狂わないので、私は私の指を休止させて、女性の指、私の妹の指を戯れさせた。

我々がとうとう芳香の幾多の奔流を横切って行き、 — というのは外部ではしばしばどこから香りが吹き寄せて来るのか分からない花々の香りの前を通り過ぎるからで、 —
そして今日一日のすべての喜びの靄が目の中で夕方の露となって合流し、太陽と共に沈んだとき、つまり太陽が燃え上がっている天の一部が赤く輝き始める前に白く輝き始めて、他方濃い青空の東の部分では今や夜に向かおうとしていたとき、即ち我々がリーリエンバートの方向に向かっているすべての鳥や蝶や旅人に対し目で追っていたとき、そのとき —
我々が多くの希望を将来の喜びの種子として携えて入って行くことにしていた美しい谷がとうとう我々にその胸を開けたのであった。 — 我々の入口は東の端にあった。西側の端では我々を大地へと沈んで行った太陽が見つめていて、さながらその費やされた一日の歓喜からのように夕焼けへと散っていて、その夕焼けが谷全体に漂い、木陰道の梢にまで達していた。このような夕焼けは見たことがなかった。夕焼けは茂みの中に、草の上にそして木陰道の上に滴り落ちたかのように横たわっていて、天と地とを描いて一つの薔薇の夢となしていた。個別の、時にペアとなった小屋が木々で覆われていて、小枝でできた生きたブラインドの窓が部屋の眺望のところで重なり合っていて、影や香りや花々や果実を伴う歓喜のこの絵画の方に身を乗り出して見ている幸せな男を隠していた。太陽は下に沈み、谷は未亡人となった侯爵夫人のように白い靄のヴェールをまとっていて、千もの喉と共に黙っていた。すべてが静かであった。 — 静かに我々は到着し —
ベアータの小屋の周りも静かで、ベアータの窓際ではただ一本の勿忘草の鉢が水を注がれてまだ滴っていた。 — 静かに我々は対の小屋を選んだ。そして我々の心は我々の将来の祭日のこの聖なる夕べに対する静かな歓喜の余りとろけていた。つまりこの美しい大地とその美しい天に対する歓喜のことで、この両者は時に、自分の胸元に倒れかかってきた子供をその微睡眠から起こさないようにじっとしている一人の母親のようであった。 —

いつか我々のリーリエンバートでの日々が茨の上で死ぬようなことがあったら、私が喜びの扇形の代わりに嘆きの扇形を書かざるを得ないことになったら — いつかそうになったら、私は扇形の「歓喜」の言葉を取り去って、その題辞の代わりに単に十字架を書いて、読者はそのことを前もって知るようにしよう。しかしそれは不可能である。私は私の全紙を静かに終えられる。 —
ベアータは更に小声で夕べの歌を弦で伴奏された木霊の中へ吹き込んだ。弦と歌がやむと、眠りがリーリエンバートでの人々の陽光を消して、微睡む魂の中で夢の夜景画[夜想曲]を広げることだろう。 ...

第五十扇形、あるいは第二の歓喜の扇形
鉾泉 — 愛の嘆き

私は第一の天で眠り込み、第三の天で目覚めた。異郷以外で目覚めるべきではなく、
— また朝日とその最初の炎を投げ込んでいる部屋以外で — 影となった緑が天上的花火
の名前の略字のように燃えている窓辺以外で、鳥が揺れて跳ねる葉の間で啼いている窓辺
以外で目覚めるべきではないだろう。...

私は、私の将来の書評家が私と一緒にリーリエンバートの部屋で暮らして欲しいと思う。
彼は（現在彼がそうしているようには）私の歓喜の扇形に美学的弾効をする[棒を折る]こ
となく、その扇形の父親に花輪を被せるために櫛の小枝を折る[勝利の印の冠]ことだろ
う。...

今やこの父親は婦人服仕立屋であるが、しかしそれは単に次の意味でそうなのである。
リーリエンバートの中心部には医療上の鉱泉があって、そこから人々は大地から湧き出で
くる薬局を汲み取るのである。この鉱泉から不規則な対称を描いて離れつつ人工の百姓小
屋があって、そこに湯治客が住むのである。これらの小さな小屋はそれぞれが冗談で、吊
り下げられた目印、あるいは何らかの手職の権標が飾られている。私の小屋には一本の鋏
が技術的権標として突き出ており、誰が中にいるか（私の仕事は何か）、誰が婦人服仕立
屋の手職を行っているか知らせている。私の妹は（木製の靴下の象徴から判断すると）靴
下職人である。その隣では木製の長靴、あるいは木製の脚（誰が分かろうか）が揺れてい
て、手職の[決められた]挨拶のごとくその中に座している靴屋を告げていて、この靴屋は
私のグスタフに他ならない。

ベアータの小屋はその上に、現今のレディーのように一つの帽子、あるいは麦藁の屋根
を有しているが、そこに長い梯子が立てかけてあって、その中の美しい百姓女を告げてい
る。これは天への[ヤコブの]梯子[創世記、28,11]であり、その下では少なくとも一人の天
使が見えるのである。

外国にも知られていることだが、我々の侯爵領は[帝国議会ベンチの]侯爵席にある他の
領同様に健康のための鉱泉を有し、有しななければならないのであって、—（というの
はどの侯爵領もこのような薬用の泉を気付けの瓶のごとく手許に有していて、財政的失神
に対処してそれを嗅ぐ必要があるからで）、— 更に次のことも知られていよう。つま
り以前は多くの客がこちらに来ていたが、今は猫一匹来ずに、— そしてそれは鉱泉の
せいではなく、会計局のせいであり、この会計局は余りに多く小屋を建ててしまい、余り
に多く収入を上げようとして、ゼルターの鉱泉が終わったときの高い値段で始めて、—
— それ故我々の鉱泉はゼルターの鉱泉が始まったときと同じ安値で終わろうとしているの
であり、— 我々のリーリエンバートではあらゆる医療上のメリットにもかかわらず、
一人の侍女と同様に少なくとも人々をせめて病気にかからせるようなもっと重要なメリッ
トを有していないのである。— 私、こうしたことすべては十分に良く知られてい
ると申し上げた。従って申し上げることさえ必要なかったであろう。

他の健康の鉱泉が、快適な病気の鉱泉となって、そこに上流の富裕な世界が司祭として
集まっているとしても、勿論それはその他の鉱泉の功績ではない。我々はせめてここリー
リエンバートでも、ベトザタの池を揺さぶって[ヨハネ伝、5,6]、その池に聖書の池の力
に逆に対抗するような医療上の力を告げている他の温泉のように、そのような女性的天使
達を有していさえすれば、そして座るように強いる賭博者と鉱泉で酩酊する（鉱泉を飲む
のではない）ように強いる鉱泉医師とを有しておれば、我々の温泉も他のすべてのドイツ

の温泉同様に、常連が毎年 ― またやって来るようにすることができることだろう。しかし我々の鉱泉監督局は、上流世界の病気の密集方陣が我々の前を馬車で過ぎ去って行き、他の鉱泉へ、アフリカで野獣達が一つの鉱泉の周りに群がるように押しかけて行く様を永遠に目撃せざるを得ないことだろう。プリニウス^{*原注 1}がこの動物の集会から注での諺を説明しているとすれば、私も鉱泉での集会から同様のニュースを説明したい。

会計局は結局、我々のヨシャパテ[キドロ]の谷では単に自然と浄福、節度、再生が見られるだけであるということで大変気の毒である。

今日我々は皆[メスメル]の鉱泉桶の許で、鉄の上に注がれた鉱泉を鳥の鳴き声や葉ずれの音を聞きながら飲んで、そこからほの白く輝く太陽の像と同時に太陽の炎と一緒に嚙下した。苦悶の冬はベアータの脛の周りや口の周りに彼女の色褪せた痛みの何とも言い難く優しい文字を描いていた。彼女の大きな目は陽光の明るい天で、そこから輝く雫が滴っている。少女というものはその魅力の孔雀の尾の目を男性の許より別な少女の許でより容易に広げることができるので、彼女は私の妹と遊ぶことではなはだ得をした。グスタフは ― 姿が見えなかった。彼はその鉱泉を後から飲んだ。そして一帯の魅力に誘われて迷い込んだが、本来はここに泊まっている女性のもっと大きな魅力から逃れるためであった。彼女を目にするという幸福を除けば、彼女を目にしないという幸福より大きな幸福はなかった。彼女は彼について語らず、彼は彼女について語らなかった。彼女に対して表明しようという彼の思いは言葉にならず、赤面となった。私が伝記の代わりに長編小説をまとめるように天が欲するのであれば、美しい魂よ、私は君達をもっと互いに近付けて、その部分[弓形]から我々の友好的円を構成することだろう。すると我々はここで素晴らしい天国を有することになって、死が側を通り過ぎ、我々を求めることになっても、この実直な男[死]は、我々がすでにその中に座しているのか、それとも彼によって初めて中に入れられることになるのか判断できないことだろう。...

私は分別して、かつデリケートに行動し、ベアータが冬に作成し、正直かつ繊細なやり方で私が入手した或る作文を、グスタフ同様ここで私の読者にも披露することになった。これは彼女の真の兄に向けられているもので、問いかけでできている。辛抱強く痛みの中で圧迫を受けている女性の心の上に痛みは、男性の心の上よりも大きな重荷となつてのしかかっている。男性の心は動悸し、脈を打ちながら、痛みを消化していくものである。動かない樅の木の新梢ではすべての雪が重荷となっているが、いつも動いているより低い枝では雪が一つも残らないようなものである。

私の兄の像に寄せて

「何故あなたはいつも私をそんなに微笑して見つめているのですか、大事な像のあなた。私の目はこんなに涙をためてあなたの前に立っているというのに、何故あなたの着色された目は永遠に乾いているのでしょうか。あなたが悲しい思いで描かれたのであれば、どんな

*原注 1 古代人によれば珍しい鉱泉はすべての野獣を引き寄せる。こうした集合は仮装舞踏会の集合同様に ― もっと奇妙な集合や、「アフリカはいつも何か新奇なものをもたらす」という格言や奇形児の機会となったのである。

にあなたを愛したいと思うことでしょう。

お兄様。あなたは妹のことを懂れて見ないのですか。この荒涼たる大地であなたのことを言いようもなく愛している第二の心がまだ存在していることをあなたにあなたの心は語ることもないのでしょいか。 — いやあなたをほんの一度だけでも私の目の中に、私の両腕に抱きしめることがあったのであれば、と願います。 — 私どもは互いに決して忘れることはできないでしょう。でも...あなたもあなたの妹同様に見棄てられていて、あなたも妹同様雨空の下にいて、空しい大地を歩いて行き、苦悶の時に友達一人見いだせないのでしたら — いや、そのときあなたはそれを見て、自分の心の血を流し尽くせる妹の画像すら有していないのです。 — お兄様、あなたが元気で不幸でしたら、あなたの妹の許に来て、妹の心全体をお取りください。 — その心は裂かれています、しかし砕けてはいず、ただ血を流しているだけです。その心はあなたをとて愛することでしょう。何故あなたは妹の方を向いてくれないのです。行方の知れないあなた。たとえ他人があなたを見棄て、欺き、忘れようとも、何故あなたは忠実な妹の方を向いてくれないのです。 — いつあなたに言えることでしょう。何としばしば私はあなたの黙した画像を自分の胸に押し当てたことか、何としばしば数時間にわたってそれを見つめ、その描かれた目に涙を推測しては、自らそのことで思わず流涕する目となったことか、と言えることでしょう。 — あなたの妹がその疲れた心と共に棺の墓の下に休み、すべてのその空しい憧れと共に、空しい涙と共に、空しい愛と共に冷たい忘れられた大地に崩れ落ちるまで、そんなに長く隠れていないでください。私どもの青春の沃野が刈り取られ、雪が積もり、心がより硬直し、歳月と苦難が多すぎるものになってしまうまで、そんなに長く隠れていないでください。 — 一気に私の内面は悲しいものに、苦いものになっています。ひょっとしたらあなたはもう亡くなっているのですか、大事な方。 — いやそう考えると私の心は麻痺してしまいます。 — あなたが天上で浄福なのであれば、孤児となっている妹からあなたの目を反らして、その痛みを見ないでいてください。 — いや、私は流血する心の中で難しい自問をしています。自分は自分を愛してくれる人をまだ有するのだろうか、とそして私は答えを得ずにいます。...」

*

読者の方々はこの手記からグスタフ本人よりももっとグスタフに有利なことを推し量る勇気を有するであろう。この本の主人公としての彼にとってこの手記は歓迎されるに相違ない。しかし私は単なる伝記作家としてそのことに関しては、二、三の難しい場面しか有していない。しかし私は読者に対する真の愛ゆえに喜んでその場면을仕上げることにする。

— 数兆もの場면을彼のためには書き上げたいと思っている。ただ、私がここで筋の中に引き入れている人物達は同時に私を筋に巻き込んでいて、この伝記作者、あるいは記録書執筆者本人が主人公達や諸党派の中にいることは、私の伝記全体にとって害となっている。私がこの話をその生誕の後数十年して、あるいは数百年して起草したら、将来私を基に汲み出す[創造する]であろう者達がそうしなければならないように、起草することにしたなら、私でもひょっとしたらもっと公平になるかもしれない。画家達は肖像画家に対して、モデルの丈の三倍モデルから離れて座すように命じている。 — そして侯爵達はとても偉大で、従って侯爵達は、彼らからこの偉大さに等しく土地や時間を離れて座する著者達

によってのみ描かれ得るので、私は我々の侯爵の隣に立たないでいることが望ましいであろう。私が現にそうしているようには、侯爵のことをそんなに有利に描くことのないようにするために。...

第五十一扇形、あるいは第三の喜びの扇形
日曜日の朝 ー 野外の食事 ー 雷雨 ー 愛

何という日曜日だったか。ー今日は月曜日である。私は（我々皆が我々の絶縁によって）喜びの起電盤となってしまったので、自分を放電するには執筆の他に手段を知らない。踊る場合は別であるが。私はグスタフを耳で察している。グスタフは放電器としてピアノを有し、演奏している。このピアノはこの扇形をととても容易にしてくれて、私に幾多の火花を発する想念を投げ寄越してくれよう。私はよく願ったものである。せめて金持ちになり、（ギリシア人がそうしたように）、私が執筆する間、音楽を奏してくれる自分の従者達を持ちたいものだ、と。ーいやはや、どんな全集が生じたかしのれない。世間は次のような成果を得ることであろう。つまりこれまでは多くの詩的継ぎ接ぎ細工が（例えば『メディア』）音楽上の傑作[Benda 作曲、1778]へのきっかけとなったように、事情が逆転して、音楽的外れ籤が詩的当たり籤となるであろう、と。

我々は昨日、夜明け前にベッドから起きた。我々とは私と音楽上のプロンプター[グスタフ]のことである。「我々は教会に行くには」と私は彼に言った、「たっぷり四時間外を徘徊しなければならない」。つまりルーエシュタットへ行くのである。そこではグローセンハインから立派なビュルガー^{*原注} [Bürger, 1753-1816]が招待説教師として登場することになっていた。すべてが行われた。今このときまで、自分は生温かい夏の夜が好きなのか、冷たい夏の朝が好きなのか分からない。夏の夜には溶けた心が憧れの中に散って行く。夏の朝は燃える心を喜びへと硬くまとめ、その動悸を鍛える。我々の四時間を再生させるにはー百もの行楽の館、猟の館からそのための瞬間[分秒]をまとめ上げなければならないだろう。それでも一面的であろう。彼は誰[かわたれ]時は日中に対して、春が夏に対するようなもので、丁度誰そ彼[たそがれ]時が夜に対して、秋が冬に対するようなものである。次第に一片の日中が次々に目覚めて行く様をー朝が野原や庭の上を過ぎて、それらを上品な朝の部屋のように[木や草の]花々で燻蒸する様をー朝がいわばすべての窓を開け、涼しい風が舞台全体を吹き抜けて行く様をーすべての喉が次々に目覚めて、それが大気の高みに飛び上がり、酩酊した胸で上昇して来る下方の太陽に向かって飛翔し、歌いかける様をー移り変わる天が千もの色彩をすり潰し、溶かし、その雲の襞を試作し、染める様を、我々は見、聞き、嗅ぎ、触れて感じた。...以上が我々がまだ露の解ける谷を歩いていたときの朝であった。しかし我々が朝の東側の門から見通し難い、生長する花綵と活気ある葉飾りでモザイク状に象眼された沃野に踏み込むと、沃野の穏やかな波の線は深く落ち、また高く流れ、その魅力と花々とを上下に揺すっていたが、我々がその前に立ったとき、歡喜と生気のある日中の嵐が沸き立って、東風がその横を抜けて、偉大な

*原注 1 彼の一年前に出版された説教は、私の趣味を有する方々すべての趣味に合うことだろう。

太陽が昇り、天で心臓のごとく鼓動し、自分の周りに生命のすべての流れと滴とを駆り立てた。

グスタフはまさにもっと穏やかに演奏している。彼の音色は私のいまだにいつも容易に憂鬱症の激しさに移行しがちな呼吸を調べてくれる。 —

今や創造の水車がすべての歯車や奔流と共にざわめき荒れ狂っていたとき、我々は甘美に麻痺してほとんど歩けなかった。我々にとってすべてが快適であった。我々はどの媒体によっても進路を邪魔される光線であった。我々は蜂や蟻と共に進み、どの芳香をもその源泉にまで追って行き、どの木の周りも回った。どの被造物も一つの極で、我々の針を反撥させたり、引き戻したりした。我々は村々の一つの圏の中に立つことになったが、その道は皆楽しげな教会参詣人が戻って来るもので、その鐘は精神的なミサを告げていた。とうとう我々も敬虔な巡礼に従うことになって、涼しいルーエシュタットの教会の戸口から入って行くことになった。

娯楽を仕切る親方が或る侯爵にオペラの飾りを提案することになって、昇る太陽と千ものライブツィヒの雲雀、二十もの鳴る鐘、絹の花々の野原と花盛りから成り立つものを述べたら、侯爵は余りに金がかかりすぎると言うことだろう。 — しかし娯楽の親方はこう答えることだろう。散歩と引き換えです、と。 — あるいは私は言うことだろう。一つの王冠と引き換えです、と。このような楽しみには侯爵ではなく、人間が必要であるからである。

教会では私はオルガンの椅子に座って、不格好なオルガンで霰弾射撃して大方の人々をびっくりさせた。グスタフが貴族の棧敷に足を踏み入れると、向かい側の棧敷には — ベアータが座っていた。というのは他の女性が踊りを好むように説教を彼女は好んだからであった。グスタフは目を下に向けて、赤みを帯びながら、彼女の前でお辞儀した。そしていつもは彼の前で燃え上がっていた彼女の青白く病んだ形姿に深く感動した。 — 彼女も同様に彼の形姿に感動した。その形姿に、自分と彼の魂の中に書き込まれていたすべての悲しい思い出を読み取ったのであった。二人の両目は愛の対象から注目の対象、つまりグローセンハインからのビュルガー氏に戻って行った。彼は始めた。私は暫定オルガン奏者として、彼に少しも注意を向けないことに決めていた。 — 楽長たるものは作法[音色]の男性同様に、説教にはほとんど関心を見せないものである。 — しかしビュルガー氏は口を開くや、私が読もうと思っていた賛美歌本を私から奪うことになった。彼は人間の過ちを許すことについて講じた。 — 人間は一面ではいかに苛酷であるか、他面ではいかに脆いものであるか。いかに過ちはどれもいずれにせよ人間に対し、血の復讐をなし、神経の虫に似て、自分が住みついている人間を食い尽くしてしまうものか、従っていかに他人が不和の裁判を取り仕切っても難しいものか。いかに不注意なこと、些細な許されるべき過ちを許しても大して効果はないことか、我々を正当にも苛立たせるこのような過ちを黙過することはいかに効果があることか等々。彼はとうとう人間愛の幸福を指摘するに至ったので、グスタフの燃え上がり流れ込むような目は無意識にベアータの顔に留まることになった。そしてとうとう彼女の目が、牧師に向けられたまま、真の苦悶の溶解、歓喜の溶解となって満たされ、そして彼女が目を拭きながらグスタフに向けたとき、両人は互いに両目と二人の内奥を開けた。二人の関係を脱した魂が大きく互に見つめ合った。そして最も優しい熱中の飛び過ぎて行く瞬間が二人をその目元で共に魅了した。...しかし

二人は突然もとの目のやり場を求めて、ベアータは目を説教壇に落ち着かせた。

私はビュルガー氏がこの有益な説教をすでにその印刷物の中に加えたかどうか、知らない。しかしこう称えたからといって、彼のそれ自体は立派な説教には眠り込ませる本来の力がひよっとしたら欠けているのではないかと告白するのをためらうものではない。これは読んだときにも聴いたときにも感じられる一つの欠点である。ここで私は他の聖職者のために、教会の間違った建築様式についての若干の号外頁を挿入することにしたい。

教会の間違った建築様式についての号外

私はすでにこのことを長老会や建築監査局に対して上申したことがある。しかし何の効果もなかった。我々や彼らが皆承知していることであるが、どの教会も、中央教会であれ、支部教会であれ、教区の頭脳や脳のために配慮すべきであり、つまり教区の睡眠のために配慮すべきである、ブリンクマンによれば頭を強壯にするのは睡眠を措いてないからである。こちらに私が居座って、まずは長々と、この解体化する睡眠はトルコ人の許で見られるよりもより安価なやり方で、よりわずかな硬貨や阿片と引き換えに生じさせ得ると詳述しようとしたら滑稽なことであろう。というのは我々の阿片は水銀のように外部的に擦り込まれ、主に耳許に置かれるからである。さてこの件では全体どのようになされて来たか私ほどに承知している者はない。コンスタンチノーブルでは（ドゥ・トット[de Tott, 1730-93]によれば）阿片吸引者のために特別な屋台や席があって、しかし単にモスクの隣にあるそうであるが、我々の許では礼拝堂の中にあり、教会の席と呼ばれている。一更に正規の夜の明かりが祭壇では点されている。カトリック教会では窓ガラスにガラスの絵があって、これが窓のカーテンのような具合に影を投げかけている。時に支柱は整然とあるいは何重にも設置されていて、教会に暗さを備えさせており、これは睡眠の目的にとってもかなうものである。フランスの寝室はただ生氣のない輝きのない色合いのものであるので、大きな規範的な寝室では少なくともその点では睡眠のために配慮がなされてきており、その証拠に教会の一部では、大方の目が向けられる部分、つまり祭壇や牧師、楽長、説教壇は黒く塗られている。私は長所を指摘するのに吝かでないことが分かる。私が非難するとしても、それは非難癖からではないのである。

しかし神殿にはまだ真の修道士寝室たるには多くが欠けている。私はイタリアやパリでも、理性的に設置され家財を置かれた劇場の棧敷に立っていた（横になっていたとも言えよう）ことがある。その中では（すべてがその為にあつたのであるから）眠ることができ、賭をし、小便をし、食事する等のことができた。...恋人達が同伴されていた。このことには偉いさん達は慣れている。彼らに対し、教会に行つてそこで眠るべきであると誰が彼らに要求しようと思うだろうか。彼らのお金は睡眠よりはむしろすべての悦楽のために使われるのである。一 第三身分、百姓や市民の許では、一週間ずっと投票して疲れている市長の一团ですら、彼らが容易にどの席でも、どこの二階席でも眠りこけるということは不思議なことではなく、勿論容易にそう仕向けられるのである。私はそのことを否認しない。しかし放蕩児は、羽根布団でのこの睡眠者は、（どんな長老が説教しよう）単なる椅子では眠ってくれないであろう。この者は従つてむしろ教会へは行かない。作法を有するこのような人々のために、それ故、きちんとした教会のベッドが棧敷に設けられて、上

手く行くようにされなければならない。宮廷教会では賭博台や食卓、長椅子[オットマン]、恋人達等々が不可欠であるように、他ならぬそこでこそこうしたものは欠けてはならないであろう。

従って、身分のある人々が教会の中では思っているよりもはるかに眠り込むことが少ないとき、私が単に愚かな教会建築やすべての家財、教会用具、すべてのベッド等の欠如こそがそのせいであって、巧みな宮廷説教家や大学の、兵營の、夕方礼拝の説教家の立派に、哲学的に、あるいは神秘的に仕上げられた説教のせいではないと私が主張するとき、それは私や真理を傷付けることなく、お世辞とは呼ばれないことだろう。

号外の終わり

教会の後我々は皆祭具室で一緒になった。瑣事は飛ばして、肝要なことを述べると、我々は皆外に出て、グスタフは我々の美しい姫に腕を出し、腕を取った。厳かな太陽の許、茂みの花々の許での静かな逍遙であった。農婦の着飾り、板を張られた額、バイオリンの弓の毛のように張られた額の上の髪、玉葱の皮のように上下に重ねられたスカート、これらが農婦の笑った顔と共に、我々に日曜日を、町の女達のすべての装身具が半分できるよりも、いや全体できるよりも一層明るい絵に描いていた。私も日曜日には、すべてを薄汚く包み込む六日の平日よりも人々の顔が一層美しく思える。

会話はさりげなくなければならなかった。 — 勿忘草の許でさえそう思う。つまりベアータは草地に一本の勿忘草が横たわっているのを見て、急いで駆け寄って見ると、 —

それは絹製であった。「あら模造」と彼女は言った。「単に命のないものだ」とグスタフは言った、「しかし長く持つ」。ある種の繊細な人々の許では容易にすべてが仄めかしとなる。それ故気の良い仄めかし以外生じないようにするためには好意が不可欠である。

— 道中最も気分よく感じられたことは、自分が後から付いて行く背景、追い風であったということである。というのは前を進んでいたら、最も美しい女性の魂がその体で描く最も美しい歩行を見られなかったであろうからである。 — ベアータの歩行のことである。女性の歩行ほどにその性格が表れるものはない。殊に急がされるときがそうである。

谷で我々は影や正午や他に更にもっと素敵なもの、フェンク博士を見いだした。彼は木々の下でささやかな食事の聖職者コンサートを用意していた。そこで我々皆が侯爵や俳優のごとく、野外の食事を、ただ満ち足りた音楽的観客を前にして、つまり鳥達を前にして有することになった。時折一枚の花がソース鉢に、あるいは一枚の葉が酢の台に舞い落ち、あるいは一陣の風が砂糖缶から砂糖の吹雪として脇に吹き飛ばすのは仕方ないことであった。その代わり最大の薬味台が、つまり自然が我々の喜ばしい食卓の周りにあって、我々自身が見本料理の一部であった。フェンクは枝を下に引き寄せ、戯れながら言った。「我々の食卓は少なくとも上流社会の食事に対する長所があって、我々の客人は互いに知り合っている。しかし例えばシェーラウとかイタリアでは偉いさん達は、知り合っている人間よりも多くの人々に食事を供することになる。ユダヤ人達からとても嫌われ、模倣される動物の脂肪の中には、その動物が知らないまま鼠が住んでいるようなものだ」。

医者たるものはもっと表現が繊細であるべきであろう。しかしこの表現は単に医者向けのものである。

コーヒーを飲みながら、私の親愛なるペスト看護人は主張した。すべてのポット、 —

コーヒーの、チョコレートの、紅茶のポット、甕等は、一つの観相学を有するが、これについては調査が余りに少ない。メランヒトンが鉢の伝道師、官房説教家であったとしても、この鉢のラーヴァーターたる者が欠けている。自分がかつてオランダで一つのコーヒーポットと知り合ったが、その鼻は凡庸で、その横顔は味気なくオランダ風であって、それで自分は一緒に飲んでいた船医にこう言ったものだ。このポットにはきつと同様に劣等な魂が中にいるのに違いない。さもないとすべて観相学はほら話だ、と。自分は中に注ぎ入れていたが、その飲み物は飲めたものではなかった。自分は言った。自分の家では、自分が前もって、ピタゴラスがその生徒達をそうしたように、観相学的検分をしたものでなければ、牛乳鉢一つ買うことはない、と。

「誰のせいにしたものだろう」と彼は諧謔的に熱中した様子で続けた、「我々の顔や腰の周りにはギリシア人達のその周りほどに多くの美曲線が描かれていないのは、単に忌々しい紅茶やコーヒー壺のせいだろうか。これらはしばしば人間的教養を有してなくて、これらを我々の女達は一週間ずっと見続けて、かくて子供達にそれがコピーされるのだろうか。 — これに対しギリシアの女達はただただ美しい立像に見守られていて、いやスパルタの女性達は美しい若者達の肖像画をその寝室にすら掛けていたのだ」。

しかし私は何百人ものレディーの正当化のためにこう言わざるを得ない。その代わり彼女達は原物[モデル]達と同じことをしており、かくてすでに幾ばくかのことがなされているのである、と。

私はこの家族芝居では真実の女神以外の女神には敬意を払っていないので、私の妹にも真実の女神を犠牲にできない。妹の性と若さは妹をまだ女神達の下に置いているけれども。私は妹が余りに気位を育てず、余りに多くの虚栄心を育てていることに腹が立つ。ここで自分が印刷され、非難されているのを読むことになるのに、そのことで立腹することがないであろうことに私は立腹する。彼女にとっては印刷によって虚栄心を満たすことの方が非難によって気位を喪失することよりも大事だからである。

気位の高さというものは我々の戦略に満ちた世紀では女性的徳操の最も忠実な守護聖人であり、封土後見人である。確かに私に対して誰も、仮にけなげに気位高くなかったら、いやそのうちの一人でもダンスに満ちた一晚に、2.5 倍気位高くなかったら、きっとミラノのように四十回（カイスラー[Keyßler, 1693-1743]によると）包囲されてしまい、二十回征服されたであろう私の知り合いのレディー達の名を公開するよう要求する者はいないであろう。しかし他のとき、その気になったら、名を公開するかもしれない。

愛するフィリッピーネよ、最も高貴な感情でさえも追従心を排除しないということ、私はおまえを愛するという仕事の他に、おまえを叱るという仕事ほどましな仕事はないということ、 — おまえの医学参事官のフェンクを叱ることもそうで、彼はおまえに対してその気のおけない気まぐれを余りに冗長に仕向けていることをおまえは私に教えてくれた。幸い彼女はまだ、娘達がいつも、最も長く話した者を愛するという年頃、その心は磁石のように、新しい鉄がもたらされると古い鉄を落下させるという年頃である。

ベアータとグスタフは互いに二つの雪片のように傷付いた箇所を触れ合った。声や動きにさえ懇ろな、思いやりのある、名誉心のある、犠牲的な自恃が現れていた。媚態による拒絶がすでに多くのものを与えるのであれば、徳操による現在の拒絶はまずいかに多くを与えるに違いないことか。

午後は、我々の隣で、より低い花々を求めている蝶の羽根に乗って過ぎて行った。会話は目と同様に関心を増して行った。そして我々は並木道のテラス[台地]をぶらぶら歩いて行った（あるいはぶらぶらと優しく書いたものだろうか）、そのテラス[台地]は山の周りに帯のようにあって、そのテラスの上を目は谷の柵を越えながら野原へと見通せるのである。西側では一つの雷雲がその雷の足取りと共に天を過ぎてきて、黒い雲の棺掛けが太陽の上に掛けられていた。一帯は一人の偉大な、しかし幸福ではない人間の人生のように見えた。つまり一方の山は太陽の炎の眼差しで燃え上がっていて、他方の山は一つの雲の垂れ込める夜の下、薄暗くなっていた。―― 向こうの西の一帯では天の中で鳥の歌声の代わりに天上のペダルである雷がごろごろ鳴っていて、白い水柱の列が並んで温かい雨を天からざっと降らせ、元々雨が上昇してきた先の花の萼と梢とをまた満たしていた。魂にとっては、あたかも神のために王座が築かれたかのように厳かであって、万物が神の降臨を待っていた。

グスタフとベアータは、天国に沈み込んで、そのテラスを前方に進んで行った。ドクトル、私の妹、それに私は少し離れて彼らの後を行った。とうとう並木の木陰道に一粒、一粒の雨が音たてて落下してきた。これは広い雨雲の縁から我々の上に飛んできて、落ちて来たものであった。―― かくて近隣の雷鳴と稲光の不幸は離れた土地に単に若干の涙を誘うものであるが、これは同情の目から漏れ出るものである。―― 我々は皆、間近の木々の下に立った。グスタフとベアータは何ヵ月も経って初めてまた二人っきりに立って並んでいた。目で目撃されてはいたが、耳で聞き取る者はいなかった。二人は西の方を向いて黙っていた。人間が余りに偉大に感じ、会話を行えない、あるいは洗練され得ない、あるいは仄めかしをできないそういう状況があるものである。両人はずっと黙っていた。とうとうグスタフは自分の情感の最も暑い夏至にあって、洪水の西の一帯からベアータの目の方に向きを変えた。―― 彼女の目はゆっくりと、開けたまま彼の目の方に持ち上げられ、その下の口は静かなままで、彼女の魂は他ならぬ神と徳操の許にあった。

雲は降り止め、去って行った。ドクトルは急いで家に帰らなければならなかった。誰もその楽しい沈黙から出ることはできなかった。かくも黙ったまま我々は皆テラスから降りて来た。―― そして各人もすでにその葉陰による雨傘から出ていたとき―― そのとき突然低い太陽が黒い雲の覆いから引き裂いて燃え出てきて、雷雲の喪のヴェールを広く払いのけて、我々に対し、ほの白く光る茂みや炎のような藪のそれぞれを照らし出した。...すべての鳥が鳴き叫び、すべての人間が黙した。―― 大地は一つの太陽となり―― 天は喜びの余り大地のことを泣きながら震えて、大地を熱い測りがたい光線で抱擁した。

――

一帯は我々の周りで天上的炎の雨となって燃えた。しかし我々の目は一帯を見ずに、盲いて大きな太陽に向けられていた。血と喜びの心を解き放つという衝動に駆られてグスタフの手はベアータの手の許に沈み、―― 彼は何を手にしたか知らず、―― 彼女は何を与えたか知らなかった。そして二人の現在の感情ははるかに取るに足りない拒絶を越えていた。とうとう雷に囲まれた太陽が静かに賢者のように涼しげな大地の下に横たわり、その夕焼けが輝きながら稲光する天候の下に安らうと、太陽は魂のように神の許に行ったかのように見え、一つの雷鳴が、太陽の死の後、天に響いた。...

黄昏となった。...自然は黙した祈りであった。...人間はその中で太陽のようにより崇高

に立っていた。というのはその心は神の言葉を捉えたからである。...しかしその心の中へこの言葉が来て、心はその胸とその世界に対して余りに大きくなると、心が考え、そして愛する偉大な精霊はその嵐のような胸の中へ人間への授乳の愛を吹き込み、そして無限の者は穏やかに有限な者達の許の我々によって愛される。...

グスタフは、自分の手の中で鼓動し、そこから出て行こうとする手を感じた。 — 彼はその手をより弱く保ったまま最も美しい目を見返した。 — 彼の目はベアータに、無限に感動しながら過ぎた日々の許しを請うて、こう言っているように見えた。「この至福の時に、私の最後の苦悶も取り除いてください」と。 — さて彼が小声で、善行のような調子で、「ベアータ」と尋ねて、そしてそれ以上話すことができずにいて、彼女がその赤面した顔を大地に向けて、自分の手を彼の手から引き離そうとするのをやめて、深く感動してまた見上げ、彼に涙を見せて、その涙が彼に「あなたを許しましょう」と告げたとき、周りの自然よりも更に偉大な二人の魂は、二人の天使となって、そして二人は天使達の天国を感じた。 — 二人は立って、黙っていた。無限の感謝と歓喜に自失していた。

— 彼はとうとう、尊崇する喜びの余り震えながら、彼女の震える腕を取って、我々の許に来た。

すべての放電された雷雨からの静かな想念、静かな歓喜、静かな思い出、そして静かな雨がこの安息日を締め括った。

第四の歓喜の扇形

天国の夢 — フェンクの手紙

私が伝記執筆の手職の傍ら、更に婦人服仕立屋の手職も行うようになって以来、全く新しい人生が私の中で育っている。それでも、その有名な男達の肖像画陳列室へ私をもその一人として掛けようと思っている将来のシュレック [Schröckh, 1733-1808] に対してこう助言しなければならないであろう。自制心を働かせて、私の仕立仕事から一切を評価することはせず、私の空想から若干評価するがいい、と。空想の方は先の冬と秋、多くの自然の場面を描くことで大いに強化されて、それで私の許で現在の春はすべての先の春よりも全く別の目や耳を見いだしている。このことは私ども皆が、私と読者がもっと早く考慮すべきことであったのかもしれない。ある種の悪徳の魅力が空想の日々生長して行く努力によって抗しがたいものになるとき、何故我々は空想の拉致して行く絵筆に品位ある対象を与えないのであろう。何故我々は冬に、春を把握し、あるいはむしろ春を仕上げるよう空想を調教しないのか。というのは我々は自然に対して見ているものを享受しているのではなく（さもないと外で森林官と詩人とは同じものを享受することになるであろうから）、見たものに対して詩作するものを享受しているからである。自然に対する感情は根本において自然に対する空想である。

しかしグスタフの頭におけるほどにより優しい夢の形姿や空想の形姿が結晶化する頭はなかった。彼の健康と彼の幸運が戻って来た。そのことは、その中で夢が藁のようにまた春の萼を開いている彼の夜が示している。そのような楽園の香りが次の夢には沸き立っている。

彼は死んで（そう思われた）、新しい肉体を帯びるまでの中間世界[空間]をひたすら夢

の中で戯れて過ごすことになっていた。彼は鼓動する花々の海に沈み込んだ。その海は合流した星々の天であった。無限の上ですべての星々が白く花咲き、隣り合った花卉が互いに鼓動していた。しかし何故この地球から天まで生長していく花畑は千もの萼からの煙りを上げる精霊と共にすべての魂を、その花畑の上を飛んで行き、麻痺するような歓喜の中で落下するすべての魂を酩酊させたのか。何故一陣の疾駆する風は火花と多彩な炎の一片の吹雪の下、魂を魂や花々と混合させたのか。何故死んだ人間達をかくも甘美に戯れる死者達の夢が包み込んだのか。 — それはこのためであった。つまりこの果てしない春の香油の息吹が人生の苛む傷口を閉ざすため、先の地上での刺し傷でまだ血を流している人間は将来の天国のために花々の下で癒やすことになっていたからである。その天国ではより大きな徳操と知識は一人の癒えた魂を欲しているのである。 — というのは、何ということか、この世では余りに多く苦しむからである。 — かの雪原で一人の魂が別の魂を抱擁するたびに、両者は愛から一つの輝く露の雫となって融合した。露はそれから一つの花の許へ震えて落ち、花はまた露を二つに分けて聖なる香煙として吐き出し上昇させた。 — 花畑の上の高い所に神の楽園があって、そこからその天上的な音色の木霊が小川の形となって下の平野に波打ってきた。その諧音はすべて湾曲しながら下部楽園を横切って、そして酩酊した魂は歓喜の余り岸辺の花々からフルートの奔流に飛び込んだ。楽園の反響の中で、魂のすべての感覚は滅して、余りに有限の魂は、明るい歓喜の涙に解体して、流れて行く波にさらわれていった。 — この花の平野は絶えず上昇して、高い楽園に向かっていて、素早い天国の風が上から下へ振動して、その勢いですべての花々が開いたが、曲がることはなかった。 — しかししばしば神は最も暗く高い所を遠くの風の吹く沃野まで進んで行った。この無限の者がその上方でその無限性を二つの雲に包むと、一つは稲光する雲で、永遠の真理に包み、もう一つは温かく、すべての滴り落ちて泣いている雲で、永遠の愛に包むと、そのとき上昇する沃野が、沈んで行くエーテルが、反響する小川が、活発な花びらが、落ちていて生じていた。そのとき神は自分は過ぎて行くという合図をして、測りがたい愛がすべての魂に、この気高い静寂の中、互いに抱擁するように強いた。どの魂も別の魂の許で沈まず、すべての魂がすべての魂の許で沈んだ。 — 一つの歓喜の微睡みが、一つの露のようにその抱擁に落ちた。それから魂達がまたそれぞれ目覚めたとき、花畑全体から稲光が発せられ、すべての花々が香りを発し、すべての花卉が温かい雲の滴の下で沈み、音色を発する小川のすべての湾曲から反響し合って、楽園全体が魂達の上で稲光りして、余りに浄福である愛する魂達の他に黙しているものはなかった。...

*

グスタフはより間近な世界で目覚めた。それは彼の夢見られた世界とは素敵な対照をなすものであった。太陽は唯一の輝く光線へと変わり、この光線は地球でも屈折するもので、黄昏の雲が周りを漂い、花々や鳥達はその眠る頭部を露の中に掛けており、ただ夕方の風だけがまだ木の葉をかき回して、一晩中起きていた。...

そのように我々の緑色の時は我々の未踏の谷を忍び歩いていて、聞こえない蝶の羽根と共に我々の大気圏を滑って行く。ぶんぶん言う甲虫の鞘翅を伴っていない。 — 喜びはひっそりと夕方の露のように落ち、雷雨のように音を立てて落下して来ない。我々の幸福

な湯治の時は我々を勇気や仕事や忍耐へと長くいつまでも元気付けてくれることだろう。緑のリーリエンバートは我々の空想の中で緑の芝地として残ることだろう。そこではいつか年月がすべての樂園の地を、我々の喜びのすべての一帯を深く雪で覆っても、その温かい息吹の下ですべての雪は解けてしまい、いつも我々には緑が贈られ、我々はその上で画家達が緑の布地の上でそうするように、我々の老いた目をさわやかにすることであろう。私は君達に、私の読者の方々よ、君達が年老いたときのためにまことに多くのこのような広々と残る地を願うし、すべての病人にそのリーリエンバートを願うものである。

このことはドイツの聴衆のお気に召すようにしているのでなければ、喜びの余りこの喜びの描写をすることが私には面倒に思われることであろう。それでも私はベアータの誕生日が来るまでは新しい歓喜の扇形を始めるつもりはない。この誕生日は小さなモルッカ諸島のティドレ島で行われる。我々はドクトルによってそこへ招待されている。ドクトルはこの島に別荘を有している。天候も素晴らしいままである。――偉大な予言の才能がなくても大方容易に予言できることであるが、この誕生日の扇形、あるいはティドレ島の扇形は、かつてアレクサンドリアの図書館で燃え尽きてしまったもの、あるいは市の図書館で腐ってしまったもの、あるいは他の図書館に残されているものの中で美しいものすべてを兼ね備えているというよりは全く凌駕するものである。

我々をモルッカ諸島の島へ誘っているその手紙の中でドクトルは或るニュースを書いているが、そこには或る人物がいて、私は書き写すだけで扇形を一杯にしたいと思っているので、ここに一つの場を設けることにする。

「ホッペディーツェル教授は、哲学と殴り合いの他に冗談ほど好きなものはないのであるが、月がまた遅く昇ることになったら、自分が悪漢であるという冗談をしたいと思っている。私は数日前彼と会ったが、彼は長い髭を然るべく精製して、更に鉄槌を隠し、仮面を選んでいた。私はどんな舞踏会で盗む気かと彼に尋ねた。彼はマウセンバッハの舞踏会でと言った。――要するに彼は、小さな一味と一緒に浸入して、獲物を取る代わりに冗談をして、それで君の領主裁判所雇主を芝居上の人為的恐怖に陥れようとするつもりなのだ。望ましいのはこうだ。この芸人的諷刺的盗賊の首魁が本物と見なされ、その鉄槌道具と一緒に逮捕者の馬車に乗せられ、公に連れ去られることである。――これは善良なるホッペディーツェルが傷を負わされないようにするためではなく、単にこの海賊のストア主義者が拷問に遭い、かくて三人の人間を一度に明るみに出すためである。第一は本人で、彼は犯罪よりはストア派的原理に帰依していることを明らかにするのであり、第二はペスト看護人、私のことで、拷問に際して（我々がどんな痛みの場合でもそうするように）彼の健康に対する配慮を私は指示して自らを明らかにするのであり、――第三に法律家、君のことが明らかになる。君は君の大学での刑法ノートをいまだにトランクに所有していることを見せてやれるのである」。

思うに読者も私と同じような気分であろう。自然の諧音の下にある花の岸辺での大いなる大洋上のこの海戦、そして海戦でのこの射撃は甲高い不協和音を形成しているように見える、と。

第五十三の扇形、あるいは最大の歓喜の扇形
あるいは誕生日の、あるいはティドレ島の扇形

朝　—　夕方　—　夜

今日はベアータの祝祭であり、ますます素敵になる。　—　私の写字台は九百万平方マイルの幅であり、つまり地球である。　—　太陽は私のエピクテトスのランプで、携帯文庫の代わりに自然の本全体の頁[葉]が私の前でざわめいている。...しかし最初から始めよう。ちなみに私は今ティドレ島で横になっている。

悪天候の前の日々は気象学的にも最も素晴らしい。我々は今日存在する限りで最も平和的な四国同盟として、朝日が射し込む前に我々の歌声の谷を通して出掛け、まだ九時にならないうちにまことに気持ちよく小さなモルッカ諸島のティドレ島に到着するようにした。かくて水晶のような泉のように明るい一日全体が我々の前の広大な平野に広がることになった。　—　我々はこれまで素敵な日々には慣れてしたが、しかし最も素敵な一日には慣れていなかった。　—　地球は明るい、靄や大気から抜け出た月のように見えた。　—　山と森の先端は深い青空の中に剥き出しに立っていて、いわば霧の髪粉がかけられていなかった。　—　すべての光景が我々の間近に寄って来ていて、靄は、それを通じて我々が見ているガラスから拭き取られていた。空気は蒸し暑くなく、香料の野原の上に不動に安らっていた。そして葉は垂れ下がっていたが、枝はそうではなく、頭を垂れた花は少し揺れていた。しかしそれは単に二匹の争う蝶の下で揺れているのであった。...それは四大の休憩日で、自然の昼休みであった。このような一日は、すでに朝が陶酔的な夕方の自然を有しており、すでに我々に我々の希望、我々の過去、我々の憧憬を思い出させるもので、しばしば生ずるものではなく、多くの者にとって生ずるものでもなく、その溢れる心にその一日が照らし出される少数の者達にとって、しばしば生ずることは許されないものである。その一日は、その一日に対して心を花卉のように開く哀れな人間達を余りに喜ばせるからであり、花々を嗅ぐよりも刈り取らなければならない重商主義的封建的土壌からこの人間達を余りに遠く魔術的アルカディアに運び去るからである。　—　しかし君達、金融業者よ、農業経営者よ、小作請負人よ、ほとんど四季のすべてが皮膚や胃に奉仕しているのであれば、何故一日が　—　殊に鉱泉の客にとって、　—　単に余りに柔和な心のために取っておかれることがないのか。君達に苛酷さが許されるのであれば、何故君達は柔和さを許そうとしないのか。君達は、君達感情の欠けた魂よ、そうでなくても十分に侮辱している。より美しく、より繊細な魂は君達にとって単に重要でない、滑稽なものだ。しかし君達はその魂にとって煩わしく、その魂を傷付けている。　—　人々は他人に時折、才能の長所を認めるのに、しかし決して情感の長所を認めることがないということ、人々は自らの分別[理性]に対して間違いを認めるが、しかし自らの趣味に対しては間違いを認めないということ、これは奇妙なことである。

森の木々という見通しのきく欄干が、ティドレ島の緑が映えているインド洋と我々との間にただなお見えていたが、我々は、覆い被さってくる背丈の高い草の間を抜ける小道を進み、人里離れた地、あるいは一軒の孤立した家のそばを通りかかった。その家はこの花の大洋の中に余りに魅力的にあって、人々は通り過ぎかねた。あるいは騎乗して去りかねた。我々は刈り取られた芝地に陣を張った。家の右手で、草原の中心部に隠れている丸い小庭の左手であった。貧しい小庭には（寛容な国家のように）同じ苗床に豆類や豌豆、サラダ菜、カブラハボタンがあり、育てられていた。それでもこの矮小な庭に一人の子供が

なおその滴虫類の小庭を有していた。まばゆく赤い鳥小屋の中で一人のすばしこい女性がまさにいい匂いの野外パン屋を開いていた。二枚の子供のシャツが庭の垣根に掛けられていて、更に二枚は玄関に立っていて、その二枚を着た二人の褐色の子供達が戯れながら我々を観察していた。 — 子供達にとって今朝、裸の足を太陽にさらすことほど快適なものではなかった。自然よ、至福よ。御身は善行のごとく好んで貧乏と隠されたものを探し出すものだ。

私が今日言ったこと、そして多分言うであろうことで、最も賢いものはきっとこの家の隣での朝の草原講話であろう。私がこんな具合に常設の天、風の風ぎ、葉の風ぎを眺め、その風ぎの中、蝶の重要な羽根と青虫の毛とが真っ直ぐなままであるのを見ると、私は言った。「我々とこの青虫は三つの全能の海の下、海の中にいる。つまり大気の下であり、水の海の下であり、電氣的の下である。それでもこれらの大洋のざわめく波、一つの陸地を壊せるこのマイル単位の大波は、とても滑らかで、温和しく、それで今日は安息日が出現している。このときには蝶の広い翼を微風が動かすことはなく、羽根の鱗粉をむしり取ることもなく、子供は静かに四大のレヴィアタン[水に住む怪物]の間で巫山戯て、微笑んでいる。 — これは無限の精霊が強制したものでないとしたら、我々はこの精霊に我々の将来の運命と我々の将来の世界の合成を認めるのではないとしたら —」...

いや、大地の無限の精霊よ。御身の胸に我々は、嵐が鎖から外されて押し寄せてくるとき、我々の子供らしい目をぴたりと寄せるつもりだ。 — 我々を鉄のごとき死が、通りかかって眠り込ませるとき、御身の全能の熱い心に沈み込むつもりだ。 —

かくて我々は無邪気に満ち足りた思いで、急ぐこともなく、激しくもなく、フェンクの別荘に打ち寄せる波の方に歩いて行った。我々が自発的に我々の静かな、震え続ける享受を外的対象から受けるのを許す（そうすることで我々はいつもと違って真のストア派とは反することになるが）日々があるのは奇妙なことである。 — 更に奇妙なのは、幾多の日々このことが本当になされるということである。 — つまりこの意味である。ある種の、こっそりした、波の穏やかな満足状態が — 徳操によって得られたものでなく、熟慮によって戦い取られたものでなく — 時に我々に一日、一時間恵まれるということで、この時にはすべての情けない卑小なことや縁飾りは、これらから我々の同様に細かく矮小な人生は縫い合わされているのではあるが、 — 例えばこのときには（今日生じたように）天には雲がなく、風は眠っていて、ティドレ島へ運ぶ渡し守は準備されていて、別荘の主、フェンク博士はすでに一時間前から待機していて、水は平で、ボートは乾いていて、着岸の港は深く、万事順調であるのである。 — まことに我々は皆このように戯けた足場に立っているのであって、次のことは — ドイツでは、しかしイタリアとポーランドではもっとはるかに少ないが、 — 時に一匹か二匹の蚕を掴まえることが、人間の喜びの一つに数えられ得るのであって、この人間の喜びについてはツェルプストの宗教局評定官のジンテニス[Sintennis, 1750-1826]が二巻本をまとめている。...従ってこのような楽園的な一日を体験したければ、ストア派的エネルギーの時間に飛び越えられるような卑小なことすら邪魔してはならない。火鏡で利用しようと思う太陽の上には一点の小雲もかかってはならないようなものである。...私は今や熱くなって、こう請け合う。私は我々の人生ほど、我々人間ほど、そしてこうした阿呆なことについての我々の見解ほど何かもっと阿呆なこと[戯けたこと]は考えることができない、と。

インド洋は騒がしい市の広場で、中国の大河のようなものであった。どこでもその上では喜びや人生の光輝が、その表面から、天の第二の半球がその太陽と共に震えているその奥底に至るまで、活発であった。別荘では壁は白色であった。「ただ炎と明かりの見られる自然から狭い庵に入ってくる人間にとって（とフェンクは言った）、この庵の色は、悲しく狭小な印象をそらすために、どんなに明るい色でも十分ではないからである」と。

それから我々は休憩した。我々は島の影の草の[盛り土]ベンチを次々と移り、白樺の葉やインド洋の波から微風を受けて、 — それから音楽を奏し — それから正餐を摂った。最初は亭主の食卓で、この亭主は陽気なやり方で、上品で繊細な作法を心得ていた。二番目はすべての方角に開け放たれている窓辺で、ここにいると外にいるかのように、更に一層喜ばしい自然のすべての渦に引き込まれるのであった。三番目は我々の各人が片手で摂った。その手は享樂の柔らかな果実を、押し潰すことなくもぎ取る術を心得ていた。

— オットマルは夕方来る。 — 二人の娘達は花々の許で、幸せなグスタフは影の下で没頭している。 — 伝記作者はこの伸びてくる草の上に法律家のバルトルス[Bartolo, 1314-57]のように横たわっていて、すべてを描写している。 — フェンクは夕方の準備をしている。 — 夕方ようやく我々の今日の喜びの十全たる光が射し込むことだろう。私は今自分の伝記上のペンで追い付いてきていて、自分がまさに報告している以上のことは決して知らないことを天に感謝している。私はこれまでいつも余計に多くのことを知っていたのであり、喜ばしい場面を伝記的に記して楽しんでいるときに悲しい未来を承知していて味気ない思いがしていたのである。しかしその代わり、次の十五分後には我々皆世界の海に溺れているかもしれないのに、今の十五分間はその海に微笑みかけているのである。

私はかくも落ち着いていて、散歩には出掛けたくないのに、私は私の作品によく登場する散歩に関して明察を披露したい。分別と論理を有する男であれば、思うに、すべての散歩者を、東インド人のように、四つのカーストに分類することだろう。

第一のカーストでは最も惨めな者達が歩く。彼らは虚栄心と流行[ファッション]から行うのであって、自分達の感情か衣服、歩行を見せたいのである。

第二のカーストでは学者達や肥満者が駆けるが、運動を行うためであり、享受するためというよりは、自分達がすでに味わったものを、消化するためである。この受動的無邪気な部門には、何の理由もなく何の楽しみもなく行う者、あるいは同伴者として、あるいは良い天候に対する動物的な快適さから行う者も入れられるべきであろう。

第三のカーストに入るのは、その頭部には風景画家の目が備わっているもので、その心には万物の大きな輪郭が浸入してくる者達で、測りがたい美曲線を見つめる者達である。この美曲線は蔦の繊維ですべての生命の周りを取り巻き、太陽や血の滴、豌豆の丸みを形成し、すべての葉や果実を円の形に切り抜くものである。このような目が山々や沈んで行く太陽や首を垂れる花に安らうことはいかに少ないことか。

第四のより良いカーストは、第三のカーストの次にはあり得ないと思われるであろう。しかし創造物に対し単に芸術家達目ではなく、神聖な目を向ける人間が存在するものである。 — この花咲く世界に第二世界を移植し、被造物の下に創造主を移植する人間であり、 — 千もの小枝の、葉の密な生命の木がざわざわと騒ぐ中、自分達が単にその木の許のそよぐ葉にすぎないが故に、跪いて、その中を吹き抜ける精霊と語ろうと思う人間、

方と、死を目撃した目を有している。相変わらず彼は一人のサフリで^{*原注 1}、これは大地のすべての花の茂みやすべての草地を透視して、大地の下に横たわっている動かない死者達を見通している。とても穏やかで、嵐のようであり、とても諧謔的でメランコリックであり、とても親切で、屈託がなく、自由である。彼は主張していた。大方の悪徳は、悪徳を避けようとして生ずる。 — 悪しき行いをするという恐れから、我々は何もせず、もはや偉大なことは何も勇気を有していない。 — 我々は皆が多くの人間愛を有しているので、もはや名誉心を有していない。 — 人間を大事にする心、人間愛から、我々は何の率直さも、何の正義も有していない。我々は欺瞞者、暴君を倒さない等々と。

彼はベアータを不思議に思った。彼女は我々の話に通常の無理強いに関心ではなく、募って行く関心を寄せた。というのは彼はこう思っていたのである。女性とは天国や地獄、神や祖国について話すことができるが、それでも女性が全体耳を傾けながら考えているのは、自分の容姿、立ち居振る舞い、衣服のことだけである、と。「私はまずは」とフェンクが言った、「すべてを例外とする。次に観相学をも例外とする。観相学には皆が聞き耳を立てる。皆がその観相学を早速利用できるのだから」。

魔術的な夕べはますます多くの影を投げかけて行った。とうとうすべての生命を夕方の揺する膝の上に受け入れて、自らの許に収め、静かに穏やかに陽気にした。我々五人の島の住民もそうだった。我々は皆外の、小さな人工的高台に上がって、太陽が大洋を越えてアメリカへ航行して沈む前に太陽をその階段まで見送った。突然向こうの別の島で五人のアルプスホルンの音が聞こえてきて、その単純な音色が絶えず高くなったり低くなったりした。音楽が状況に作用を及ぼすよりも、状況はもっと音楽に作用を及ぼす。我々の状況では — このとき人々は耳ではすでにアルプスの源泉の許にあり、目では夕方の金色に輝く氷河の先端上にあって、アルプス山中の牧舎の周りにはアルカディアやテンペの谷、青春の沃野が広がっていて、このとき我々はこの空想を沈んで行く太陽の前で、そして最も美しい日中の後に飛翔させていたのであるが — 心はこのアルプスホルンに対して、着飾った聴衆で一杯のコンサートホールに対するよりも大きな鼓動で聞き入るものである。 — 喜びへの入場許可状は立派な心であり、それから静かな心である。 — 世の賢人がすべての情感について要求する暗く、雲の多い、ほの白く輝く概念は、自らを享受すべきときには、ゆっくりと魂の上を移って行くか、全体静止しているかしなければならぬ。ゆっくりと移る雲は良い天候を、飛んで行く雲は悪しき天候を告げているようなものである。「有徳な日々というものが」とベアータは言った、「あります。そのときにはすべてが許され、すべてを自分に関してなすことができます。そのときには喜びが心の中で跳び、もっと長く続くよう祈っています。そしてすべてが私どもの中で快活であり照らし出されています。 — そのことで満ち足りた思いで泣いたら、この思いは大きくなって、すべてがまた過ぎて行きます」。

「私は」とオットマルは言った、「むしろ嵐の揺れる両腕の中に飛び込む。我々は単に輝く、燃え上がる瞬間のみを享受するのである。この石炭は激しく投げ飛ばされなければ

*原注 1 スペインのサフリは閉ざされた大地を透視して、その宝物に達する。大地の死者達、大地の金属の許等に達する。

ならない。恍惚の燃える輪が出現するようにするために」。

「それでも」と彼は言った、「今日は沈んで行く太陽よ、御身の前で私は楽しい。...楽しい一時間、一週間があればあるほど、その次の時には一層激しい嵐が来たものだ。 — 人間は花のようなものだ。嵐が激しくなればなるほど、その前に花は芳香を放つものだ」。

「貴方は私どもをもはや招待する必要はありませんね、ドクトル殿」と微笑みながらベアータは言った。しかし彼女の目は喜びよりももっとそれ以上の何ものかの中を泳いでいた。

「貴方は私どもをもはや招待する必要はありませんね、ドクトル殿」と微笑みながらベアータは言った。しかし彼女の目は喜びよりももっとそれ以上の何ものかの中を泳いでいた。

赤く染まった天の下で太陽はその最後の階段に、多彩な雲に取り囲まれて踏み込んで行った。アルプスホルンと太陽はあつという間に消えた。雲が次々に青ざめて行き、最も高い雲がなお輝きを帯びて下に懸かっていた。ベアータと私の妹は女性らしく、この照明を受けた霧は何であろうかと冗談を言っていた。 — 一方の女性はそれは薔薇色の赤いリボンを付けたクリスマスの子羊、赤い天の飾帯と見なしていた。 — もう一方の女性はヴェールを被った燃えるような目あるいは頬と — 赤と白の霧の薔薇 — 赤い日除け帽等々と見なしていた。...

ポンスがとうとう殿方達のために運ばれてきた、と思う。殿方の一人はそのポンスを大いに節制して飲み、それでまだ夜の二時半にこの扇形を書くことができる。それから我々は天の涼しくざわめく木の下をあちこち逍遙した。その木の花々は諸恒星[太陽]で、その果実は諸惑星である。楽しさに導かれて我々是一緒になったり、別れたりした。各人が同じように、仲間と一緒に享受したり、仲間なしに享受したりすることができた。ベアータとグスタフは他人の愛や喜びを思いやって、自分達の特別な愛や喜びを忘れていて、ただの友達の間の中でやはり友達であるにすぎなかった。心を血と同様に濃くする悲しみだけを締め出すように説教し給え、喜びは締め出さないで欲しい。喜びはその酩酊した踊りの中で両腕を単に一緒に踊り手の方に差し出すだけでなく、よろめいている惨めな者にも差し出して、その喜びを見守っている嘆きの目から通りすがりに涙を拭いて行くものだ。

— 許すべきものは何も見いだせなかったけれども、今日は我々はすべてを許そうと思っていた。許すべきものは何もなかったと私は申し上げている。というのは星が次々と影となった深みから溢れ出て来て、私とオットマルとが一羽のさえずる小夜啼鳥に背を向けて、離れたところからその嘆き声の弱められた音栓を聞こうとしたとき、我々が二人っきりになって、愛の純なる音色と形姿に囲まれて、並んで立っていて、私がこらえきれずに大いなる現在と将来の天の下で、私の心を、私がかつて見たことがあり、愛したことがある心の持ち主に対して呈示したとき、そのようなことは許しとか和解ではなく、 — — これについては後日記すことにしよう。

変わりやすいグループとなって、 — あるときは二人の娘だけに、あるときは三人目の男と一緒にあって、あるときは全員になって — 我々は草へと変装した花々を踏んで、二羽の恋敵のような小夜啼鳥の間を歩いて行った。一方の鳥は我々の島を、他方の鳥は別の島を、歌い称えていた。この音楽的なポプリーの中で、草花の花弁はその芳香のポプリーを閉ざしていた。しかしすべての白樺の葉はその花弁を開いていて、我々はわざと散って、早々と我らの魔法的なタヒチ島から船出できないようにした。 —

とうとう我々は偶然ある柏楊の下で鉢合わせることになった。その雪の降ったような葉は夕方の輝きを放って、我々を集合させたのであった。「そろそろ去る時刻です」とベア

一タは言った。しかし我々がその気になって、あるいはその気にならなければならないとき、月が昇った。木々の格子状の扇の背後で、月はとても謙虚に、静かに盲目の夜の上を過ぎたとき、その雲の隙を開けた。月の目が流れ込んで来て、月は我々を率直さのごとく見つめた。そして率直さの方も月を見つめた。「ともかく残ることにしよう」 — とオットマルは言った。その熱い友情の手を握るとどんな女性的友情の手もなくて済ませたくなりそうであった — 「湖面がもっと明るくなって、月の光が谷にまで射し込んで来るまでは — こんな場面は二度とないかもしれないから」。とうとう彼は付け加えて言った、「いずれにせよ私とグスタフは明日早朝旅立つことになる。天候はもはや長く持たないだろう」。それは七週間の知られざる旅で、これについては、これまでとても重要に、謎めいて思われていたすべての推測を私はここで喜んで撤回することにする。

我々は再び留まった。会話は寡黙になり、思いは冗長になり、心は余りに一杯になった。昇る寸前の欠けて行く月が満月にも見えたようなものである。一度ある一行が、すでにドアの取っ手に手をやっていたのに取っ手からまた離してしまえば、この延期はより大きな享受を期待させるものであるが、この期待は当惑を生じさせる。 — しかし我々は互いに一層静かになり、楽しい時が鷹の翼のように過ぎて行くことへの我々の溜め息を隠した。ひょっとしたら幾多の反らした目は月に犠牲を捧げたのかもしれない。この犠牲[涙]は最も悲しい時の人間と最も嬉しい時の人間が目に対して拒むことが難しいものである。...

丁度今私は再び外の月の光の中に出て行って、また自分の写字台に戻って、そして夜のヴェールに感謝している。このヴェールは宇宙を二重に取り巻いていて、このヴェールは人間の最大の苦痛と歓喜の上で褻になるものである。...従って我々はこの小島でとても憂鬱な思いで黙っていた。悦ばしい永遠の門の許にいたようなものであった。国々に広がっている春がその素晴らしさと共に — その[湖面に]沈んだ生温かい月と共に — その煌めく金星と共に — その崇高な真夜中の赤みと共に — その天上的な小夜啼鳥と共に五人の人間達の前を過ぎて行った。春はこの五人の幸せすぎる者達にその蕾みを、その花々を、その薄明の光景と希望を、その千もの天を投げかけ、重ね、そしてその代わりに奪ったものは彼らの言葉だけであった。いや、春よ、御身、神の地球よ、御身、覆いのない天よ。いやはや、今日は御身の上のすべての人間の中で心が喜ばしい動悸となればいい。かくて我々皆が並んで星々の下、跪いて、熱い呼吸を一つの歓喜の声の中へ、すべての喜びを祈りの中へ、注ぎ込み、そして高い心が高い天の青空へ向けられ、感極まって、苦悶の溜め息ではなく、歓喜の溜め息を発するようになって欲しい。天への溜め息の道のりは棺への我々の道のりほどのものなのだから。...しばしばただ不幸だけの人々の間で楽しい者であるという、汝、苦い思いよ。そしてただ幸福だけの人々の間で悲しい者であるという、汝、甘い思いよ。

とうとう上昇して行く月の光からも憂い鉾津が流れ去った。月は言い難い有頂天のようにより高く天の夜の中にあって、天の背景から前景へと描かれていた。蛙達が水車のごとく、夜を叩き続け、その絶えず響く多声の鳴き声は一つの沈黙のような効果があった。

— いや、どの人間が死によって一人の地上を飛ぶ天使へと変えられてしまっていたのに、この地球上に落下してきたものではないのだろうか、そして現世の葉陰で、その現世の、月光を受けて、銀色の地上で（陽光を受けて金色になるように）自分の去ってきた天国のことを、その昔の人間の沃野を、その昔の、この世での春を、花々の下でのそのかつ

での希望を思い出していないのであろうか。

君達書評家よ。せめて今日は私のことを許して、続けさせて欲しい。

とうとう我々はカロンの小舟に乗り込むようにゴンドラに乗り込んで、うっとりとしてしぶしぶと、茂みの岸と、水面から木々の葉の光の反映から立ち退いて行った。最大の満足と最大の感謝は、水平にではなく、垂直に心の中に届く隠された根を張るものである。それ故我々は、今夜は喜びの場から立ち去らないフェンクに対して多くを語れなかった。

一 私にとっては他の誰よりも大事な友よ、ひょっとしたら君は、朝方にかけて万物がより静かになり、月がより高くなり、より純粋になり、夜がより永遠になると、地球が君に与えてくれたものと、地球が君から奪ったもの双方について泣き始めるかもしれない。

一 愛しい友よ。今この瞬間に君がそうするのであれば、私も一緒にそうしよう。一...

我々がボートに最初足を踏み入れたとき（多分フェンクの指示で）アルプスホルンがまた夜に響いてきた。夜その音色はどれも一つの過去のようにどの和音も別世界の春を求めての一つの溜め息のように響いた。夜霧が森や山々の上で戯れ、煙りを上げて、人間の境界のように、将来の世界の朝方の雲のように我々の春の地球の周りを移って行った。アルプスホルンは我々の耳許で初恋の声のように次第に消えて行き、我々の魂の中では一層声高になった。櫂とボートは水面を微光の銀河のように割って行った。どの波も一つの震える星であった。揺れる水面は月を震えながら映し出していて、我々は月が二重化されるよりは数千倍化されたらいいと思ひ、その月の穏やかな百合の顔は波の下でより一層青白く、より一層優しく花咲いていた。一 四つの天に、つまり青空の奥の天と、地上の天と水中の天と我々の中の天とに取り囲まれて 一 我々は漂う花々の中を船で進んで行った。ベアータはボートの端の方で、他の端と、つまり月とそれから彼女の優しい魂の友に向かい合って座っていた。一 彼女の視線は容易に月と友の間を上下に滑って行った。一 彼は自分の朝方の旅とちょっと長い使節の旅とを考えていて、我々皆に、自分が今我々の許でそうであるように常に良き者であるように、文書で記念に書いてくれるように頼み、ベアータに、彼女も自分に一筆書いてくれるという約束を思い出させた。彼女はもう書き上げていて、今日別れるとき彼に渡した。楽しい一日と楽しい夕方、天上的な夜とが彼女の目を千もの心と、流れないでいる二つの涙で満たした。彼女は一方の目を白い布で覆って、拭き、もう一方の目でグスタフを鏡像のごとく純粋に涙を流しながら見つめた。...善良なる魂の君は、もう一方の目も隠したいと思っていた。一

とうとう 一 いやはや、汝、永遠の絶えざる「とうとう」よ、一 我々の銀色の波の航行は岸辺で終わった。向こうの岸辺は荒涼と影に覆われていた。オットマルは極めて憂愁な思いにかられて、身を離し、スイスの[アルプスホルンの]音が止む中で、この私の新たな友は言った。「またしても過ぎ去った 一 すべての音色が消えて行く 一 すべての波が沈み 一 最も美しい時間が終わりを告げ、人生が流れ去って行く 一 御身、我らの頭上の天よ、我々を満たすもの、幸せにするものは全く何もない 一 ご機嫌よう。私はどこへ行くことになっても諸君に別れを告げたいと思う」。

アルプスのエコーは遠くの夜の中へ戻って響き、音色の吐息となって終わった。この吐息は青春の思い出ではなく、遠い幼年時代からの思い出に似ていた。我々は、享受に満たされて、露を含む茂みや、屈み込んで寝ぼけていて、露に酔った野原の中をよろよろと歩いて行った。野原からは眠り込んだ花を引き抜いて、朝の花弁を閉じた寝姿を見ることに

した。我々は今日の朝方の夜明け前の小道のことを考えていた。我々は音を立てずに矮小な小庭と小さな家の前を通り過ぎた。子供達やパンを焼いていた夫人は微睡みの死の腕に抱かれて、編み込まれていた。時は月を、シジフォスの岩のように、天頂にまで押し上げて、また落下させていた。東側で星々が昇り、西側で星々が沈み、天の中心では小さな、地球から送られた星くずが砕けていた。 — しかし永遠は黙して偉大に神の傍らにあって、すべてが神の前で消滅し、すべてが神の前で生じていた。生命と無限との野原が我々の頭上間近に低く、稲光のように垂れかかってきていた。そしてすべての偉大なもの、すべての超現世的なもの、すべての滅したもの、すべての天使が我々の精神をその青い圏の中に持ち上げ、その精神に向かって沈み込んできた。...

我々はようやく、私は私の妹の手を取って、グスタフはベアータの手を取って、我々が朝立ち去ったときよりも、より静かに、より満ち足りて、より神聖になって我々の小さなリーリエンバートに足を踏み入れた。グスタフはまず私から別れて、こう言った。「五日後にまた再会しましょう」。彼はベアータを彼女の小屋に導いて行った。その小屋は月の銀色の炎を浴びて、燃え上がっていた。「隠者の山」ではピラミッドの白い先端が谷への緑の長い道のりを離れて、夜の中をこちら側へと低く微光を発していた。 — このピラミッドの傍らで二人の幸せな者達が初めて自らの心を与え合ったのであり、その傍らで一人の友が自分の生からの眠りに就いており、その白い先端は、その友の春がもっと美しい地を示していた。 — 彼らはテラス台の木々の葉のささやきと、あの生命の木々のささやきを耳にしていた。その生命の木の下で日没後に彼らは二度目に自分達の魂を与え合ったのであった。...いや君達二人の浄福すぎる者達よ、善良なる者達よ。今や良き熾天使が君達のために、より美しい大地の中に横たわっている喜びの海から銀色の一分を汲み出している。 — この素早い滴に天使が中に住まう楽園の全眺望が煌めいている。この一分が君達の許に滴ってくるが、しかし、嗚呼、何と速やかにそれは過ぎ去っていくであろう。

ベアータは、別れの合図として、請われていた手紙をグスタフに渡した。 — 彼はその手紙を差し出した手を自分の静かな口に押し当てて — 感謝もご機嫌ようも言えずに — 彼女のもう一方の手を取った。そしてすべてが彼の中でこう叫び、繰り返していた。「彼女はまたおまえのものだ、永遠にそうだろう」。そして彼は自分の浄福について泣かざるを得なかった。ベアータはほとぼしる心の彼を見、そして彼女の心は涙として溢れ、そのことをまだ知らないでいた。しかし最も聖なる日の涙が薔薇の頬を伝って、この薔薇の花弁に震える微光と共に懸かったとき — 彼の握りしめる手と彼女の握りしめられた手が涙を拭くことができないでいたとき — 彼が燃えるような顔をして、浄福すぎて砕けそうな胸の思いでその涙を引き受けようとして、地上で最も美しいものの方に徳操への歓喜のように身を傾けて、自分の顔で彼女の顔に触れたとき、そのとき地球を愛する天使が、二人の最も敬虔な唇を一緒に消しがたい接吻へと導いた。 — そのときすべての木々が沈み、すべての太陽が消えて行き、すべての天が飛んで行った。そして天と地とをグスタフは彼の胸元のたった一つの心で支えた。 — そのとき御身が、熾天使よ、鼓動する両心臓の中へ入って行き、その心に超現世の愛の炎を与えた。 — そして御身はグスタフの熱い唇から吐息となった声が行くのを耳にした。「大事なあなた、報われぬ方、とても善良な方、とても善良な方」。

十分であろう。 — 至福の時は流れ去って行った。 — 地上の時はその朝焼けをす

でに天に送っている。 — 私の心は休むがいい、他のどの人の心も休むがいい。

第五十四扇形、あるいは第六の喜びの扇形

この夜の翌日 — ベアータの手紙 — 珍しいこと

私がこの夜、余りに多くの隠喩と余りに多くの炎や騒ぎをなしたのであれば、批評に許しを請いたい。喜びの扇形となると（それについての批評同様に）このようなことは甘受する必要がある。いつか著者が、私がしたような具合に、クエン酸や茶の花、サトウキビ、アラク酒の同様な積み過ぎの荷を甘受することになり次第、そうする必要がある。

私は今日は全く横になっておれなかった。鳥達がすぐにまた歌い始めて、夢が過ぎた芝居を四十回以上また閉ざされた目の前で上演したかと思ったら、私はまた目覚めた。太陽に照らし出されたからである。

夜通し目覚めていて喜んだ夜の後、残される朝は次のようなものである。この朝には甘美なくつろぎの中、感受されるというよりは空想され、夜の間の音色や踊りが我々の内部の耳許で絶えず響き続けて、我々が一緒に過ごした人物が我々の心を魅了する美しい薄明かりの中、我々の内部の目の前に浮かぶものである。実際一人の女性をこれ以上なく愛するには、このような夜の後を措いてない。朝食を摂る以前の朝を措いてない。

私は、夜明けに五日間の旅に出たグスタフと、一緒に出かけた堅固なオットマルのことを今日千回も考えた。君達は、薔薇の下に刺さっている茨より他の茨に出会って欲しくない。君達にはすべての青空を残して、ただ燃え上がる円盤のみを隠す雲より他の雲の下に足を踏み入れて欲しくない。君達の喜びには、君達はその喜びを我々にまだ語ることができないという喜びより他のものは欠けて欲しくない。

すべての陽光がただ高められた月光のようにリーリエンバートのすべての影の通路を魅惑的に覆っていた。前の夜が私にとって今日の明け方にまで続いているように見えた。いかに私にとって、まだその消え去った微光と共に低く西の方に雪片のように懸かっている月が好ましく歓迎すべきものとなっていたか言うことができない。困窮と夜の青ざめた友、月よ。私はまだ御身の楽土的微光を、御身の涼しげな光線を思い出している。御身はその微光と共に小川や木陰道で我々の供をし、悲しい夜を遠くから眺められた日中へと仮装させてくれた。我々がそのために燃え、泣いている未来世界の魔法的な背景画家よ。亡き人が美化されるように、御身は未来世界を我々の現世の世界に描いてくれる。現世の世界がすべてのその花々や人間達と共に眠ったり、黙って御身を見つめているときに。 —

昨日の幸福な者達の許に訪問することができたら、今日私は最も高貴な表敬訪問さえ棄てることだろう。しかしそれはならない。ベアータでさえ今日は母親の訪問を受けている。私の目が彼女に関して捉えることができたのは五本の白い指だけで、その指で彼女は窓辺の植木鉢の向きを、小枝の影から、回して変えたのであった。我々の先の生活が、我々の遊歩廊がまた始まり、すべてがまた一緒に暮らすのであれば、学者の共和国は何という読むに値するものを得ることになるであろうか。

今日その共和国に渡せるのは、グスタフ宛のベアータの通行証[同伴の手紙]の他にはない。その手紙は単に書き写すだけでいいからである。その後で私はまた野外に抜け出て、私の頭の中の海図に従って昨日の道をもう一度航行する。私は、昨日我々の一杯の手から

こぼれ落ち、散乱した華を遅咲きの花として選び出してみると、私はより高い花[詞華]を見いだしている。 — 次のベアータの文では、彼女は — ひょっとしたら自分の心と同様に、カトリックの外面的背教者にすぎない自分の父親によって欺かれて — ニコライやルター派女性のシュマルカルデン（商品）条項が許すよりもっと多く天使達や自分の祈りのことを信じていると私が前もって述べておくと、人々は若干の箇所を大目に見てくださるであろう。というのは弱い女性、しばしば途方にくれる女性は、この地上から高く登ろうとせず、困窮のときにはよく自分の依頼や溜め息を聖母マリアや故人、天使の前で開陳するのである。しかしより強固な男性は、そのような慰め文の妄想を大目に見て非難することはないであろう。 —

私の友への願いごと

「天使達は危機にある人間の周りにおいて、その喜びの最中でも、母親が喜び事や仕事の時でも、自分の子供達を見守るように、見張っているというのは妄想ではありません。御身ら、未知の不滅の方々、御身らはただ一つの天の下にいるのですか。寄る辺ない地上の息子が気の毒に思えないのですか。 — 私どもの涙よりもっと大きな涙を御身らは拭き取ってやらなければならないのですか。創造主がその愛を私どもの中同様に御身らの中に植え付けたのであれば、きっと御身らはこの大地に沈んできて、月の下で、嵐に倒された心を慰め、抑圧された魂の周りを飛び、御身らの手を干涸らびた傷に当てて、哀れな人間達のことを考えてくださることでしょう。

この地上で、いつか御身らに似るであろう精神が歩むとき、御身らは御身らの同志を忘れることができますか — 喜びの天使よ。太陽が昇るとき、私の友と御身の友と一緒にいてください、そしてあの方に素敵な敬虔な朝を青々と恵んでください。 — 一人の女友達の遠方からの溜め息を受け入れ、それであの方の溜め息を涼しげなものにしてください。太陽が退くとき、あの方と一緒にいて、そしてあの方の目を、白い喪服で昇って行く月に向けさせ、月と御身と一緒に回る広大な天に向けさせてください。

涙と忍耐の天使よ。しばしば人間の周りにいる御身よ、私の心と私の目のことは忘れ、それらに血を流させてください。 — 喜んでそうするのはです。 — しかし死のように、私の友の方の心と目とは静めて、それらには地上では、地上の向こう側の天だけを示してください。 — 嗚呼、涙と忍耐の天使よ。御身は、あの方のために流す目と心とを御存じです。御身はあの方の魂を人々が花を夏の雨の中に置くように、それらの前に導いてください。しかしそれがあの方を余りに悲しくさせるのであれば、止めてください。忍耐の天使よ、私は御身を愛します。私は御身のことを良く知っています。私は御身の両腕の中で死ぬつもりです。

友情の天使よ。 — ひょっとしたら御身は先の天使ですか。...嗚呼。...御身の天上的な翼があの方の心を覆って、その心を人間ができないほどに立派に温めてくださいますように。 — 嗚呼、あの方の熱い心が冷たい心に、温かい手が凍える鉄に触れるときのように、貼り付いて、血を流しながら離すとき、御身は別の地上で、私はこの地上で、涕泣することでしょう。...あの方を守ってください。しかしそれができないときには、あの方の嘆きを私に伝えないでください。

御身ら、別な諸惑星でいつも幸せな者達よ。御身らにとって死ぬものはなく、御身らは何も失わず、すべてを得ています。 — 御身らは愛するものを、永遠の胸に抱きしめています。御身らは有するものを、永遠の手の中に保っています。御身らは向こうの輝く高みにいて、その永遠の魂の同盟の中でこう感じ取ることができますか。つまりこの地の人間どもは別れていて、私どもが互いに手を差し出すのは単に沈む前の棺の中からのみであって、嗚呼、死が人間どもを分かち唯一のものではないし、最も痛々しいものではないということ。 — 死が私どもを散らす以前に、幾多のより冷たい手が迫って来て、魂と魂とを引き裂くのです。 — — そうすると目も涙を流し、心は嘆きながら、あたかも死が砕いたかのように沈んでしまいます。丁度皆既月食のとき、比較的長い夜のときのように露が生じ、小夜啼鳥が嘆き、花が閉じてしまうようなものです。

— すべての良きこと、すべての美しきこと、人間を幸せにし、高めることすべてが私の友の方と共にあれかしと願います。私のすべての願いをまとめるのは、私の静かな祈りです。

*

私はこの願いをすべて、ただグスタフのためだけではなく、私の存じ上げるすべての良き人のために、そして他の方々のためにも、共に祈念します」。

**

すでに夜の十一時であるが、たった今過ぎて行った何かメランコリックに素敵なお話を私は読者に対して告げなければならない。歌う生き物が我らの谷を通過して、しかしまだ月が昇っていないので、葉や薄明に覆われて過ぎて行った。それは私がかつて聞いたことがないほど美しく歌った。

- 誰でもなく、どこでもなく、決してない。
- 落ちる涙。
- 照らし出す天使。
- それは黙す。
- それは悩む。
- それは期待する。
- 私と君は。

明らかにどの行にも半分の片方が欠けている。そしてどの答えにも問いが欠けている。すでに私は何度か思い至ったのであるが、我らの友を地下で育てた精霊は別れ際に彼に問いと不協和音とを残し、その答えと説明とは自分で持ち去っていたのである。思うに私はそのことを読者に語ったはずである。グスタフがいればなあと思う。しかし精霊も我々のリーリエンバートの喜びの花綵に加わってくるといふ喜びを考え出す勇気は私にはない。

— 花々の背後でこの未知の胸から引き出されたフルートの音色を相変わらず私は耳にしている。しかしこの音色は私を悲しませる。ここには私が今日我々の昨夜の小道から拾い集めた永遠に眠る花々が、私が引き抜いたばかりの開花し、目覚めつつある花々の隣にある。 — これも私を悲しませる。 — 私と私の読者にとっては、私どもが先からの生活を続けるために、今や新しい喜びの扇形を始めるより他に必要なことはないだろう...

いや、リーリエンバートよ。汝がこの世にあるのは一度きりだ。もう一度汝が存命する

とすれば、汝の名は V - zka だ。[Venzka]

最後の扇形

+++++

私ども不幸な鉱泉の客。リーリエンバートの喜びは過ぎてしまいました。一 上の扇形の題は、私の兄がマウセンバッハに急いで行く前に添えたものです。グスタフが牢獄にいるからです。すべてが理解できないことばかりです。私の友人のベアータは、私どもが得ている、次の私の兄宛のフェンク博士殿の手紙で今日届いた知らせを聞いて臥せっています。妹にとっては、自分がいつもただ悲しい出来事のとくにだけ兄の代わりに筆を執らなければならないのは辛いことです。多分次のヨブの郵便でこの本全体と私どものこれまでの美しい日々が閉じられることになりましょう。

<私は、大事な友よ、貴兄を女性のようにいたわるつもりはなく、一気にとんでもない打撃の全体を貴兄に語ることにする。我々の幸せな時にこの打撃に見舞われてしまったが、大方は我々二人の友人達が見舞われたものだ。

我々の素敵な夜の三日後、一 貴兄は歓喜の後の危険性についてのオットマルの一種の見解をまだ覚えておられるかい 一 ホッペディーツェル教授は、マウセンバッハの館に押し入ろうという無茶な冗談を実行しようとした。抜け目ない猟師のロービッシュは丁度不在で、貴兄の前任者の参事官のコルプと一緒に盗人ども狩りに出掛けていた。これは彼らが好んで行うものだった。ここでは偶然でも為しがたいような幾多の諸状況や人物が絡み合っていることに注目して頂きたい。

教授は六人の仲間と一緒に来て、梯子を一つ持参してきて、それをアウエンタールの方が眺められる数年前から破損中の窓の方に立てかけることにした。しかし彼が窓の下に来てみると、すでに一本の梯子が掛かっていた。彼はそれを幸いな偶然だと思い、皆がほとんど後に続いて登って行った。上では一本の手が銀の剣帯を取り出し、それを差しだそうとした。教授はその双方を掴み、窓から侵入しようとした。そこにいたのは、彼がそう見せかけていたもの、盗人で、この盗人は手下を梯子の上で待っていたのであった。盗人の実在論者は、この唯名論者に憤然と死ぬ気で襲って来た。一 梯子のギャラリーは次々と後を追ってきて、戦う騒動が激しくなった。床での衝撃の物音は聞き耳を立てているレーパーを眠りから目覚めさせるというよりはベッドから起こして、一 レーパーは家中を起こし、家中はその捕吏を起こした。一 要するに、レーパーは数分で、この吝嗇家が財産を救い出し、維持する際の憤激で、冗談からの盗人と本当の盗人を捕らえてしまった。本当の盗人はもっと暴れ回りたかったかもしれず、教授はもっと議論したかったのかもしれない。今や皆が取り押さえられて、貴兄を待っている。

いやはや。一 貴兄に全部話しても、貴兄は耐えられるであろうか。巡察者のコルプとロービッシュはマウセンバッハの周辺で逮捕された盗人の一味を見つけ 一 森へ浸入し 一 あたかも糸口を見いだしたかのように 一 洞窟に入っていく、一 地下の人間世界を見いだした。一 いや、まさに汝が、不幸なことにそこで遭遇せざるを得なかったとは、無垢の男よ、不幸な男よ。今や汝の穏やかな心も牢獄の壁に面して鼓動している。一 貴兄に貴兄の友人グスタフの名をこの男だと告げるべきであろうか。一 急

ぎ給え、急ぎ給え、事を別な風に展開させなければならない。

見給え。貴兄の胸ばかりでなく、この日は私の胸にも激しく飛びかかってきた。私が更に語ると貴兄は耐えられるであろうか。―― オットマルがまだ存命なのは単に偶然にすぎないということに。どの繊維も別の戦慄と戦うという彼の性質の恐るべき抵抗を示しながら、彼は私に耳を傾け、六本指の男が捕らえられなかったか私に尋ねた。「私は例の森の洞窟で」（と彼は言った）「重大な誓いを立てたのだ。我らの地下での盟約を誰にも打ち明けない、私が死ぬ一時間前を除いて、と。フェンクよ、私は君に今その盟約全部を打ち明けよう」。―― 私が抵抗し、嘆願しても無駄であった。彼は私にすべてを打ち明けた。「グスタフは弁護されなければならない」と彼は言った。―― しかしこの話はどこでも安心できるものではなく、最も忠実な胸元でもほとんど安心できず、いわんやこの手紙ではできない。オットマルは彼の所謂破滅の瞬間に襲われた。私は彼の手を私の手から離さなかった。彼が彼の一時間を持ちこたえて、自分の誓いが破られるようにするためであった。―― 人生を軽視する人間ほど気高いものはない。この高貴さの中で私の友は私の前に立っていた。この友はすべてのシェーラウ人達よりもその洞窟の中でより多く挑戦し、より良く生きたのであった。―― 彼が死のうとしているのを私は見て取った。夜であった。我々は蠟製のミイラが黒い花束と一緒に立っている部屋の中にいた。このミイラ達は人間に、人間はいかに取るに足りないものであったか、いかに取るに足りないものであるか思い出させるものである。「君の頭を」と彼は言った（というのは私は彼にくっついていたので）「どけて、私がシリウスを見られるようにしておくれ。―― 私が無限の天を覗き見て、慰めを得られるように、―― 私が地球を多かれ少なかれ飛び越えられるようにするために、そうしておくれ。―― 友よ、死をそんなに辛いものにしないで―― 怒らずに、悲しまずにいておくれ。―― 御覧、天全体が一つの無限から別の無限へと微光を発し、生きており、向こうでは何も死んではいない。―― この蠟製の死体のすべての人間がああ青空の中には住んでいる。―― 御身ら、逝った者達よ、今日私も御身らの許に行く。たとえ私の人間的火花がどの太陽の中へ跳ねて行こうとも、その肉体が溶け落ちたら、私は御身らを再び見いだすことだろう」。――

どの十五分間も過ぎ去るたびに、それまで私の心を刺してきていた。しかし最後の十五分の時の音は私には弔鐘のように聞こえた。私は不安げに彼の両手と歩みを見守っていた。彼は私に寄りかかってきた。「違う、違う」と私は言った、「今は別れではない。―― 君がそんなことを考えていたら、私は君を墓場まで憎むぞ。―― 私を抱擁しないでおくれ」。―― 彼はすでにそうしていた。彼の生命全体が鼓動する心臓であった。彼は友情を感じ取りながら逝こうとしていた。彼はその胸を私の胸に、その魂を私の魂に押し付けた。「私は君を」（と彼は言った）「この地上で抱きしめる。―― 死が私をどんな世界に投げ込もうとも、私は君のことを忘れない。私は向こうでこの地球を見つめ、私の両腕を現世の友人達に広げよう。私の両腕が抱きしめるのは私と一緒にここで苦しんだ、私と一緒にここで大地を担った人々の忠実な胸、苦労した胸だけだ。...御覧、君は泣いていて、私を抱擁しようともしない。愛しい者よ。―― 君の許では私は地上の虚栄心を感じない。

―― 君もやはり死ぬことだろう。...大地の上の偉大なる本性よ。...」―― ここで彼は私から身を離し、跪いて、祈った。「私を壊し給うな、私を罰し給うな。―― 私はこの地球から去る。御身はどこに人間は至るか御存じだ。御身は地上の生活と地上の行為は

いかなるものか御存じだ。 — しかし神よ、人間は二つ目の心を、二つ目の魂を、つまりその友を有する。私に私の生命と共にまたその友を授け給え。 — いつかすべての人間の心臓が止まり、すべての人間の血が墓場で腐るとき、善良で愛する本性よ、人間に息を吹きかけ、永遠に対し、人間達の愛を示し給え」 — 一つの跳躍 — 私への一つの飛行 — 抱擁する一つの潰滅 — 壁への一打撃 — 壁からの一射撃 —
しかし彼はまだ存命だ。

フェンク>

アウエンタールの満足した学校教師マリーア・ヴッツの生涯
一種の牧歌

満足した学校教師のヴッツよ。君の生涯と死は何と穏やかで海の風であったことか。晩夏の静かで生温かい天は君の生涯の周りを雲で覆わず、薄靄で満たした。君の画期的出来事は百合の揺れで、君の死は、その花びらが立っている花々へ舞い落ちる百合の最後であった。 — すでに墓場の外で君は穏やかに眠っていた。

しかし今は、私の友の方々よ、とりわけ暖炉の周りに椅子を近付け、飲み水の置いてある台を我らの膝に近付け、カーテンを引き、ナイトキャップを被らなければならない。そして露地の向こうの上流社会やパレ・ロワイヤル[王宮]のことは誰も考える必要はない。私はただ、満足せる学校教師の静かな話を語るだけなのだから。 — そして私の親愛なるクリスティアンよ[Christian Otto, 1763-1828]、君は人生の唯一の耐火性の喜び、家庭的喜びに対して吸引する胸を有しているが、大型安楽椅子の肘掛けに腰を下ろして、この安楽椅子から語っている私に時折少し寄りかかっておくれ。君がいると私は迷うことがない。

スウェーデンの時代からヴッツ家はアウエンタールの学校教師であった。誰一人として牧師や教区民から苦情を受けることがあったとは思われない。結婚後八年か九年するといつもヴッツとその息子は分別をもってその職に就いた。 — 我らのマリーア・ヴッツは彼の父の許ですでに自分が、何の役にも立たない綴り方を習得したその週に ABC を講じた。我らのヴッツの性格には、他の教師の授業同様に、何か戯れのもの、子供っぽいものがあった。しかしそれは苦悶の点ではなく、歓喜の点でそうであった。

すでに子供時代に彼は少しばかり子供っぽかった。というのは二種類の子供の遊びがあるからで、子供っぽい遊びと真面目な遊びの二種類である。 — 真面目な遊びは大人の模倣であり、商人遊びや、兵隊遊び、職人遊びである。 — 子供っぽい遊びは、動物どもの猿真似である。ヴッツは遊びのときには兎とか雉鳩とかその雛、熊とか馬、あるいはそれどころか馬車といったものにしかならなかった。いいかな。熾天使なら我々の教授団や講義室を見ても何の仕事とも思わず、単に遊びと見なすことだろう。熾天使が高く見積もっても、かの二種類の遊びでしかない。

しかしながら彼も、すべての哲学者同様に、極めて真面目な仕事や時間を有することがあった。夙に彼は — ブランデンブルクの成人の聖職者達がただ五本の種類の糸の多彩なガウンをまとう以前に — 立派な聖職候補生の職務服たるファウスト博士のマントより聖職者の祭服としては稀な青い前掛けを午前中身にまとして、この空色のミサの衣装で父の女中に、天国や地獄を奪いかねない多くの罪のことを説教するということによって、大いなる偏見を打破していなかっただろうか。 — いや彼は自分の父親を、午後には攻撃した。というのは彼が父にコーバー[Cober, 1682-1717]の『私室説教師』を朗読するとき、時折二、三語あるいはそれどころか数行自分の考えを挿入して、この加筆も一緒に、あたかもコーバー氏自身が父親と話しているかのように読み上げたからである。思うに私はこの身上書で彼と彼の或る冗談に多くの明かりを当てているのではないだろうか。つまり彼は後に説教壇で、牧師の代わりにやはり午後教会参詣人達に対しポストィラ[該当日の説教]を読み上げたとき、多くの戯れに挿入した自らの出版物や織物を混ぜて、それで悪魔もお手上げで、悪魔の従者も感動する次第となったのである。「ユステルよ」と彼は

後で四時に妻に向かって言った。「下の教会席では分からなかっただろうが、上の方では立派なものだ。殊に説教後の賛美歌のときにはな」。

彼が生意気盛りの頃にはどんなであったかは容易に彼の中年の頃に問い質すことができよう。中年の十二月彼はいつも明かりを一時間遅く持って来させた。この時間のときに、彼は少年時代を — 毎日彼は違う日を思い描いた — 再要約したからである。風が彼の窓を雪のカーテンで暗くし、暖炉の継ぎ目から炎が彼を見つめるとき、彼は両目を押さえて、凍った平原の上に夙に朽ち果てた春を溶け出すようにさせるのであった。すると彼は妹と一緒に干し草の山の中に住みついて、荷馬車の建築学的にドーム状化された干し草の山の上に乗って帰り、その上で目を閉ざしたまま、今自分がどこを通っているか推し当てた。夕方の涼しい時には、頭上に燕の小競り合いを聞きながら、下半身は脱衣して、脚という普段着を喜びながら、鳴き叫ぶ燕となって飛び回り、自分の雛のために囲いをした。

— つまり羽根を粘着された木製のクリスマスの雄鶏が雛で、 — 木の嘴の付いた泥の円形の囲いを作り、その後、巣のためにベッドの麦藁や羽毛を運んだ。別の復活の冬の夕刻のためには、華麗な聖三位一体の祝日が（私は三六五日の聖三位一体の祝日があればいいと思う）取っておかれた。その日には自分の周り自分の中の鳴き声の春の中において、朝方鍵束をがちゃがちゃ鳴らせながら村を通して庭園へいばって歩き、露で涼を取り、火照る顔を露のしたたるスグリの灌木の中へ押し込んで、丈の高い草で身長を測り、二本のか弱い指で長老殿とその講演台のために薔薇を折り取った。まさにこの聖三位一体の祝日には、 — これは同じ十二月の夕刻の二番目の鉢料理で、 — 背に陽光を受けながら、オルガンのキーを押したり離したりし（まだそれ以上はできず）、「高き所の神に栄光あれ」の賛美歌を弾いた。そして短い脚を一段目の鍵盤へ差しだし近付けようとしたができずに、父親が彼に代わって正しい音栓を引いた。彼が上述の両夕刻に、自分が何を子供の頃の十二月に計画していたか思い出したら、てんでに違うことを撒き散らすことになる。しかし彼はとても利口で、ようやく三番目の時間に次のことを思い出したのであった。かつて夕方は窓の錠戸を閉めることを楽しみにしていた次第を、今や自分が全く安全にとりわけ明るい室内に収まることになったからで、それ故彼は錠戸越しに反射する窓ガラスから広がっている部屋を長く覗き込むことを好まなかったのであった。更に自分と自分の兄弟姉妹が母親の夕食の調理を覗き見して、手伝ったり、邪魔したりした次第を、そして自分と兄弟姉妹が目目を閉ざして、父親の胸壁たる大股の間において迫ってくる獣脂蠟燭のまばゆさを期待していた次第を、そして自分達が宇宙の果てしないドームから切り取られた、あるいはその中に建てられた自分達の部屋というクローゼットの中でかくも守られていて、かくも温かく、かくも満ち足りていて、かくも幸せであった次第を思い出したのであった。...そして毎年彼がその少年時代と狼月[十二月]の往復乗車をするたびに — 明かりが点されると — 自分が[聖母マリアの]ロレットの小家のように子供時代のカナーンの地から呼び寄せたその小部屋に自分が今まさに座っていることを忘れていて、驚くのであった。 — そのように彼は少なくとも自らそのルソー風の散歩におけるこの思い出のオペラ・セリアを描写しているのであり、私はそれを目の前に置いて、嘘を付かないようにしている。

しかし私はある種の極めて重要な状況を彼の男盛りの時期から取り出し、早速今起草して抜け出さないと、私は自分の足を絡まった根や藪に取られてしまうことだろう。しかし

その後からはきちんと先験的に始められて、この学校教師の年齢を追って、三つの上昇宮のものと、また他方では次第に下降して行く宮のものとで進行し、最後はヴッツが我々の前の最も低い階段の足許で墓場に落ちる予定である。

私はこの比喻を使わなければ良かったと思う。私はラーヴァーターの『断編』やコメニウスの『世界図絵』やある壁の許で七つの人生の留[十字架への受難の道]の断頭台や葬儀台を見るたびに — いかにか描かれた被造物は体を長く伸ばしながら、蟻のピラミッドをよじ登り、三分間上方で眺め回すと、這いながら他の面を下って行き、短縮されて、このゴルゴタの周りに横たわっている前世に転がり落ちることかと思守るたびに — そして一つの天を飲み干すべき春や香りで一杯の薔薇の顔の前に進み、数千年ではなく数十年がこの顔を外れた期待で一杯の縮こまった無残な顔に干涸らびさせてしまっているのを見るたびに、[そう思わざるを得ない]。しかし私が他人のことで悲しんでいると、階段そのものが私を持ち上げ、そして沈めてしまうものである。だから我々は互いにそう真面目に思わないことにしよう。

よく言われるように、彼に前もって聞くことがとても大事な重要な状況というもの、つまりヴッツは自らの文庫を — この男は文庫を購入できなかったので — 自らの手で書き上げたということである。彼の執筆道具は彼のポケット印刷機であった。新しい見本市のたびに、この教師殿がそのタイトルを目にすると、早速執筆され、購入されたも同然となった。というのは教師殿は早速腰を下ろして、作品を造り、それを立派な書架に寄贈したからであり、その書棚は、異教徒の書棚のように、全くの写本から成り立っていたのである。例えば、ラーヴァーターの『観相学的断編』が現れると、すぐにヴッツは多産な頭脳にほとんど遅れを取らずに、自分の雑誌用紙を四つ折りにすると、三週間ばかり椅子から離れずに、自分の頭をこね回して、観相学的胎児を作り出して（ — そしてこの胎児を書架に寝かせておいて）、遂にはスイス人のラーヴァーターに倣って書き上げたのであった。このヴッツ風断編に彼はラーヴァーターと同じタイトルを付け、こう述べた。

「自分は印刷された『断編』に何も異存はない。しかし自分の筆跡は中間ドイツ文字印刷といったものより上等とは言えなくても、同様に読みやすいものだ」と願う。彼は原物を持って来て、しばしばその大方を活字にする忌々しい模刻者ではなかった。彼は原物などは手にしなかったのである。このことから二つの事実が立派に説明され得る。第一に、時に彼は行き詰まって、例えば空間と時間についてのフェーダー[Feder]による論文[1782]全体の中で船倉[船の空間]についてと、女性の場合月経と呼ばれる時間についてだけ論ずるという結果になる事実のことである。第二の事実は彼の信仰の件である。彼は数年にわたって彼の書架をこのようなやり方で一杯書き上げ、調べ尽くしてしまい、こう思うに至ったのである。つまり自分の手書きの本が本来の規範的原典であり、印刷されたものは自分の手書きのものの単なる模刻にすぎない、と。「ただこのことだけは」と彼は嘆いた、「人々がその代わり自分に大管区を差し出そうと — 理解できない。何故、どのようにして出版者は印刷物をはなはだしく偽造し、書き換えてしまい、それでまことに、人々が事情を知らないのであれば、印刷物と手書きのものは二重の著者を有すると誓いたくなるではないか」と。

例えば彼をからかって或る著者が自分の作品を根本的に書いても、つまり横長二つ折り判で書いても、 — あるいは機知的に、つまり十六折り判で書いても簡単なことであっ

た。というのは共著者のヴッツは瞬時に取りかかって、その全紙を横長にしたり、十六折り判に縮めたりしたからである。

ただ一冊の本だけは家に取り寄せた。見本市のカタログである。というのはカタログの最良の目録記載作品に長老殿のところでは余白に黒い筆跡で印を付けてもらい、かくてそれらの作品を速やかに仕上げて、この復活祭市の一番刈り干し草を書架の第一胃に、聖ミカエル祭[九月二十九日]の二番刈り干し草の出現する前に刈り入れ収めるようにしたからである。私は彼の傑作を記したくない。この長老殿、つまり彼にとってのフリードリヒ・ニコライが彼の書き上げるべき余りに多くの良きものに印を付け、その印付けられた筆跡で彼の筆に刺激を与えたときに、このことでこの男はいつも最大の損害を蒙ったのである。

一 週の半ばに至る便秘と他面では鼻風邪である。彼の息子はしばしば、自分の父親が何年もの間、文学的産出の仕事の余り、ほとんどくしゃみもできなかったと嘆いたものである。彼は一度シュトルムの『考察』改訂版とシラーの『群盗』、カントの『純粹理性批判』を世に贈らなければならなかったからである。これは昼間行われた。しかし夕方にはこの善良な男は夕食後南極にまでこぎ出て行き、そのクック風な旅をしてドイツの息子にはほとんど三言の洒落た言葉もかけてやれなかったのである。というのは、我らの百科全書派のこの男は、決して内部アフリカや単なるスペインの駄騾[雌ロバと雄馬の交配種]小屋に足を踏み入れたことがなく、あるいはその双方の住民と話しをしたことがなかったので、それだけに一層、その双方とすべての諸国について豊かな旅行記を提供する時間と能力とを有していたからである。一 つまり統計学者や、人類の歴史記述者や私自身が種本として利用できる類いの旅行記のことで一 これは第一に、他の旅行ジャーナリストもしばしば旅行しないで旅行記を書くからであり、第二にはまた、旅行記というものはそもそも他のやり方では作成が不可能であり、いまだにどの旅行記作者も、自分がシルエットを描くその国の前とか中に立って眺めたことはないからである。その理由はとなれば、どんな阿呆でもライブニッツの予定調和説から頭に入れていることであろうが、魂は、例えばフォルスター[Forster, 1754-94]やブライドン[Brydone, 1741-1818]、ビヨルンステール[Björnstahl, 1730-79]の魂は一 総じて化石化した松果腺の絶縁体に鎮座していて、南インドやヨーロッパについては、各魂がそれに関して自ら考え出したものしか、外的印象の総体的欠如に際して、自分達の五つの盲蜘蛛の分泌腺から糸を出して撚りをもどしているものしか記述できないからである。ヴッツもその紀行記を他ならぬ自分から引き出したのである。

彼は何にでもそれについて書いている。彼が『ヴェルターの悩み』の印刷の後五週間にして古い羽根箒を取って、一本の古い羽幹を選び出して、それで直ちにそれ、つまり悩みを書いて一 全ドイツがその後彼の悩みの真似をした一 ということに学的世界が驚いているとしても、誰もこの学的世界に対する驚きが少ないものは私を措いてないであろう。というのは、ヴッツが書いていて、本日までまだ彼の文書の中にあるルソーの『告白』を学的世界が目にし読んだとは思えないからである。この『告白』の中で J.J.ルソーあるいはヴッツは(これは同じことで)自分について、ただ言い回しが異なるがこう述べているのである。「自分は筆を執って、最良の作品を残すようなことは、そのためには単に財布を開けて、それを買い求めるだけで良いのであれば、実際そんな愚かなことはしないであろう。しかし自分は財布の中には二つの黒いシャツのボタンと汚いクロイツァーしか

有していない。従って何か気の利いたものを読みたいときには、例えば実用的な薬理学とか病人の世界史の本を読みたいときには、滴る窓枠に腰を下ろして、乞食[くだらぬこと]を算段しなければならない。フリーメーソンの秘密の背景を聞き出すために誰に相談したものか、自分自身の両耳の他、誰のディオニュシオスの耳[シラクサの僭主、監獄の囚人の声を聞けるようにした]に相談したものかと思う。この自分の頭に付けられた耳許でとても良く聞き取れるものだ。自分が書くフリーメーソンの演説を正確に読み出し、理解すると考えると、結局のところかなり変わったことに気付き、広く知識を得ることになり、厳密に考えると危険に感付くようになる。自分は化学や錬金術については墮落した後のアダムのように、すべてを忘れてしまったも同然で、それで自分はまことに立派に『プラトンの輪あるいは自然の物理的・化学的説明』を鍛え、鉛の土星の周りのこの銀の指輪、多くを、脳と金属とを目に見えなくするこのギュグスの指輪を鍛えて喜んだものである。というのはこの本から、自分が一度はきちんと理解すべきとなれば、すっかり道理が分かるようになるからである。 — 我々はまた彼の子供時代に戻ることにしよう。

十年が過ぎると彼はシェーラウの町の[白人と黒人の混血色の、黒コートの]寄宿学校生徒、上級[上から数えて]第五学年生となった。次のように敢えて私が報告しても、それは私が私の主人公に対して塗る白い化粧ではないと彼の試験官は私の証人となってくれるに違いない。つまり彼は第四の名詞変化まで後一頁というところまで進んだのであって、彼はすべての[第三変化の]性の例外、thorax, caudex, pulex[que] を五級生以前に目覚まし時計のように披露したのである。 — ただ規則の方を彼は知らなかった。寄宿学校のすべての壁龕の中で一つの壁龕だけがとても掃除され、整頓されていた。ニュルンベルク女性の綺麗な台所ようであった。これが彼の壁龕であった。というのは満足した人間は最も整頓好きであるからである。彼は自分の財布からニクロイツァー出して釘を買い、自分の部屋にそれを打ち付けて、とても効果的に特別な釘となるようにしていた。 — 彼は自分の筆記帳を長いことかけて平にして、その背中が垂直に重なって置かれ、プロイセンの前線のように見えるようにした。彼は月光を浴びてベッドから抜け出し、長いこと自分の靴を点検し、靴が平行に並ぶようにした。 — すべての拍節が整うと、彼は両手をこすって、両肩を耳のところまで持ち上げて、上に飛び、ほとんど頭を下に振って、はなはだ笑った。

彼について、彼が寄宿学校で幸せであったと更に証明する前に、このようなことは冗談ではなく、ヘルクレス的難行であったと証明したい。百ものエジプト的苦難は苦難と見なされない。それらは単に青春時代に見られるからであり、青春時には倫理的傷や複雑骨折は、物理的傷同様にすぐに癒えるのである。 — 若く青い木材は干涸らびた木材のように簡単に折れない。すべての装置が、寄宿学校はその最古の規定に従えば、プロテスタント的な少年の修道院たるべく仕向けられている。しかしその際注意しなければならないのは、このような予防の刑務所を別荘に、このような厭人校を博愛校に変えようという気を生じさせるべきではないということである。このような侯爵設立校の幸せな生徒達は三つの修道院の誓いをする必要はないのではないか。まずは従順の誓いで、修道院長や修練士監督はその黒衣の修練士の脇腹に最も頻繁な厭わしい命令や殺戮の拍車を当てるものである。第二は清貧の誓いで、修練士は消化できないものとか普通のパン屑を消化し、耐えるというのではなく、来る日も来る日も凌いでいくのである。カルミナティ[Carminati,

1750-1830]ならば傷病兵の病院全体を神学校や寄宿学校の余剰胃液で完治させることができよう。その後では貞潔の誓いは自ずとなされる。人間が一日中走り回り、断食するようにさせられ、消化の蠕動運動以外の運動は欠けていないということになると自ずとなされる。重要な諸官職に就くためには市民はまずなぶられなければならない。しかし単にカトリックの新参者のみが僧侶となるために殴られるに値するのだろうか。それともブレーメンの惨めな丁稚のみが番頭となるために煙蒸消毒に値するのだろうか。それとも躰けのない南アメリカ人のみが酋長となるために、この双方とか、もっと多くの、私の抜粋帳記載の難儀一式で仕上げられ、昇華されるに値するのだろうか。ルター派の牧師も同様に重要であって、将来の使命のために同じように鍛錬する拷問が必要ではないだろうか。幸い牧師は拷問を得ている。ひょっとしたら先の世は諸シュールプフォルタ[王立学校]の壁を単にそのせいで高くしているのかもしれない。そこの[密室教皇選挙の]枢機卿の随員達は総じて真の奉公人の奉公人なのである。というのは他の学部であれば肉体と精神のこの磔刑、車裂き刑は用いられることが余りに少ないからである。 — それ故にともしばしば非難されてきた寄宿学校生の合唱、露地合唱、葬儀合唱はプロテスタントの僧侶を彼らの中から育てるまことに立派な手段でもあろう。 — 彼らの黒いコート、外套の規範的なモール人色の覆いは僧衣と幾らか似ている。それ故にライブツィヒではトーマス教会の生徒達は、いずれ聖職者達は鬘の垂れ肉を掛けなければならないので、少なくとも頭被の小鬘たる双葉を着用しているのであって、これは頭上に片流れ屋根のごとく、あるいは鞘翅の半分のごとくあるのである。昔の修道院では学問は処罰であった。ただ罪のある者達のみがラテン語の賛美歌を暗記したり、作家を清書しなければならなかった。 — 立派な貧しい学校ではこの処罰は等閑にされず、そこでは乏しい授業がいつも、哀れな生徒達を折檻し、侮辱するための無邪気な手段として整備されている。

ただこの坊や学校教師にはこうした十字架の学校はほとんど問題とならなかった。一日中彼は何かを期待したり、喜びとしていた。「起床する前には」と彼は言った、「僕は朝食を楽しみにし、午前中一杯は昼食を楽しみにし、夕べの礼拝のときには夕べの礼拝パンを楽しみにし、晩には夜のパンを楽しみにしている。 — かくて寄宿学校生徒のヴッツはいつも何かを目指しているわけだ」。深く水を飲むと、彼は言った、「これは我がヴッツの気に入った」。そして胃のあたりをさすった。くしゃみしたら、彼は言った、「お大事に、ヴッツ」。 — 凍えそうな十一月の天候のときには露地で温かい暖炉を思い描いては、手を交互に外套の中に、温かい家の中のごとくに、差し入れるという他愛ない喜びで元気を回復した。一日が全く、とんでもなく風が強い日であっても、 — 我々小人にとっては、このような追い出し猟みたいな日があるもので、その日には地球全体が追い出し猟場となって、苦しみが楽しい仕掛けの噴水のように歩くたびに噴きだして、ずぶ濡れにするものであるが、 — この坊や教師は抜け目がなくて、その天候の下に身を晒して、それを一切気にしなかった。その心は、避け難い厄災を受け入れる忍従でもなく、感じ取れない厄災に耐えるという鍛錬でもなく、希薄化された厄災を消化するという哲学でもなく、報いの厄災を克服するという宗教でもなく、温かいベッドへの思いであった。「夕べになると」と彼は考えた、「やつらは僕を好きなように一日中、つねったり、追い回したりするがいい、いずれにせよ温かい布団の下にいて、鼻を静かに枕のそばに押し付けることになる。八時間にわたって」。 — そしてとうとうこのような受難の最後の時に、自

分の掛け布団の下に潜り込むと、その中で身震いをして、膝を臍のところまで縮めて、こう自分に言った。「ほらね、ヴッツ。過ぎてしまった」。

いつも楽しげであるというヴッツの技法の別の一節では、いつも楽しげに起きるという第二の策があった。 — そしてそれを可能にするために、彼は第三の策を利用して、いつも一日前に朝方のために何か快適なものを準備した。焼いた団子とか『ロビンソン』からのとても危険な頁とか、ロビンソンは彼にはホメロスよりも好ましかった — あるいは雛の鳥とか若葉の植物で、どれほど夜の間に羽や葉が生長したか朝方調べてみるのであった。

楽しげである彼の技法の第三の、ひょっとしたら最も考え抜かれた節を彼が考案したのは、ようやく彼が第二級生となったときであった。

彼は恋をしたのであった。 —

この仕上げは私の腕次第であろう。...しかし私はここで私の生涯で初めて、私の木炭筆で描写された恋という花の絵に取りかかるので、明日六時に炎がもっと燃え落ちていない状態で魅了されるべく、ここで即座に中断される必要がある。ヴェネツィアやローマ、ウィーンそれに歓楽の町の[帝国議会]席の全てが一緒になって、子供達が八時から十一時まで踊り続けるヨーディッツの黒い楽長の部屋の中央で行われるようなカーニヴァルを私に贈ろうとしても、(それほど我らのカーニヴァルの時間は続き、その間我々は踊り続けてカーニヴァルの黍への食欲を失ってしまっていたものである)、かの様々な首都は何かとんでもないもの、滑稽なものを作り出せようが、しかし寄宿学校生のヴッツにその楽しいカーニヴァルの朝を再び届けようと思っても、ヴッツがお客の下級第二級生として朝十一時頃に彼の父の舞踏の部屋、学校の部屋できちんと惚れ込んだときのような、そんなとんでもないものは作り出せないことだろう。そんな楽しいカーニヴァル — 親愛なる坊や学校教師よ、君は何のことを考えているのか、 — しかし彼はユスティーナのことしか考えていなかった。私はアウエンタールの人々のようにユスティーナをユステルとは稀にしか、いや決して呼ばないつもりである。この寄宿学校生は踊りながら(ギムナジウムの生徒と一緒に踊るものは少なかったことであろう、しかしヴッツは決して気位は高くなく、いつも虚栄心があった) — 瞬 — 自分のことすら頭になくて — ユステルのことを考えて、彼女は可愛く、敏捷な女で、すでに手紙を書け、分数では三数法[比例法]であり、長老夫人の代子であり、十五歳になっていて、単にお客として一緒に部屋で踊っていると考えると、お客の踊り手の男の子としては、このような場合になされるべきことをした。彼は、すでに申し上げたように、惚れたのである。 — すでに最初のワルツのときに、高熱のように彼に飛びかかってきて — 第二のワルツの整列の際に、彼は静かに立って、彼の右手の温かいポーズの手を考え、感じ取っていたとき、それは不釣り合いなほど高まった。 — 彼は踊りながら明らかに愛とその罠にはまって行った。 — その上彼女が赤い帽子のリボンをばらばらにし、それをはなはだ投げやりにむき出しの首の周りにひらひら舞わせたとき、彼はもはやコントラバスの音を聞いていなかった。 — 彼女がとうとう赤いハンカチを涼しげに振って見せ、それを彼の後ろや前にちらつかせると、彼はもうどうしようもなかった。仮に四人の偉大な予言者と十二人の小予言者が窓から説教して聞かせようとも甲斐はなかった。というのは女性の手にあるハンカチを見ると彼はいつも即座に更に抵抗することなく屈したからである。ライオンが回された車輪に、象が

鼠に屈するようなものであった。村のコケットな女達は町のコケットな女達が扇子でなすのと同じ野砲や戦闘機をハンカチでなしとげる。しかし布地の波は扇子の多彩な軍鎚の甲高い雄七面鳥の側回転よりも心地よい。

いずれにせよ我らのヴッツはこう釈明できよう。つまり自分の知る限り公の喜びの場所では、多くの場[スペース]を必要とするすべての感受性に対する心、犠牲に対する、勇気に対する、はたまた愛に対する心を更に広くする、と。 — 勿論窮屈な役所の部屋、仕事部屋、市庁舎や、枢密会議室では我々の心は同様の乾燥室や乾燥窯にいるのと似てきて、皺が寄るものである。

ヴッツはその愛のガスで充満した高く揚げられた心の風船と共に喜んで寄宿学校に戻ってきた。誰にも一音節も漏らさず、ハンカチの旗手の娘自身にも全くもって漏らさなかった。 — 臆したからではなく、彼は現在以上のものを求めなかったからである。彼は自分自身が惚れ込んでいることだけを喜んでいて、それ以上は何にも考えなかった。...

何故天はまさに青春時代に愛の五年間を定めたのであろうか。ひょっとしたらまさに寄宿学校や事務室や他の砒石精錬場で喘いでいるが故に、愛が花盛りの灌木のようにかの受難の窓辺で立ち昇り、揺れる影の中に外部の大いなる春を示すのかもしれない。というのは、そなた、我が指揮者殿や私、それに貴方、寄宿学校の有益なる小使いさん、我々は賭をしようではないか、貴方は満足したヴッツに重ねて、[贖罪用の]山羊革のシャツを着せるとする(実際彼は一つ着用している) — 貴方は彼にイクシオンの車輪やシジフォスの賢者の石、貴方の子供の習歩車を動かすようにさせるとする — 彼を半死半生に飢えさせたり、殴られるようにさせるとする — 貴方はこのようにひどい賭のせいで(そんなことは貴方はしないことと思うが)彼に対して全くの鬼となるとする。それでもヴッツはヴッツのままで、いつも心に少しばかりの楽しい喜びを実践するのである。哀れな熱い犬の日々であっても。 —

彼の暑中休暇[天狼星休暇]については、ひょっとしたら彼の『ヴェルター喜び』におけるほど明確に記述されている箇所はないかもしれない。その喜びを伝記作者はほとんど単に書き写せばいいであろう。 — 彼はその頃日曜日ごとに夕方の教会礼拝の後、アウエンタールに帰って、すべての露地の人々に対して、彼らがそこに留まっていなければならないことに同情を抱いていた。外界で彼の胸は自分の前に構築されている天と共に広がって行き、半ば酩酊してすべての鳥達のコンサート・ホールの中で二重に浄福となって、あるときは羽毛のソプラノ歌手達[小鳥達]に聞き入り、あるときは自分の空想に聞き入った。ただ胸の、岸辺を越えて鼓動する自分の生命力を反らすために、彼はしばしば七分半ばかり駆け足で走った。彼はいつも日没の直前や直後にある種の悦楽的な酔った憧れを感じてきたし — しかし夜となると比較的長い死が人間を崇高にし、人間から大地を奪うもので、 — それで彼はアウエンタールに着くのをかなり長く逡巡して、散って流れて行く太陽が村の前の最後の穀物畑を通して、まさに穂先に掛かっているその黄金の糸で彼の青い制服を刺繍し、川を越えて山の麓にかかる自分の影が巨人のようにさまようのを見届けた。それから彼は過去からのように鳴り響いてくる晩鐘の下、村の中によろめいて入り、すべての人間達に対して、指揮者に対してさえ、優しかった。それから自分の父親の家の周りを歩き、上の屋根窓に月光の反射を見、一階の窓越しに彼のユスティーナを見た。彼女は日曜日ごとにきちんとした手紙の書き方を習っていた。...それから彼が人生のこの

楽園的な十五分の後、五十歩歩く距離、部屋と手紙と村とを自分の許から消え去らせることができ、自分の周りとは手紙執筆の娘の周りに単に人気のない薄明のテンペの谷を引いて来ることができるのであれば — 彼がこの谷で自分の酔った魂と共に、途中すべての生命の周りに自分の両腕を回したこの魂と共に、自分の最も美しい生命の許でくずおれることが許され、自分と彼女と天と地とが、一つの燃え上がる瞬間、人間的歓喜の焦点を前に沈んで、砕けて流れ去ってしまうのであれば、[どんなに幸せなことか]。...

しかし彼はそのことを少なくとも夜の十一時にはした。それ以前も悪い気分ではなかった。彼は父親に対し、しかし本当はユスティーネに対して自分の学業計画を語り、自分の政治的影響力を行使した。彼は父親が彼女の手紙を直す際の非難に対して、然るべき文芸批評家の有する応分の重みで対抗した。彼はまさに温かい気持ちで町から帰って来たので、一度ならず機知を手にしていた。 — 要するに、眠り込みながら、彼は自分の踊りながら揺らめく空想の中で、天球の音楽だけを聞いていた。

— 勿論、ヴッツよ、君はヴェルター喜びを起草できる、いつだって君の外部と内部の世界は二枚貝の貝殻のように互にくっついていて、君をその中の貝の身として包んでいるのだから。しかしここ暖炉の周りに座っている我々哀れな者どもにとっては、外部世界が内部のご機嫌な気分のリピエニスト、合唱者であることはめったにない。 — せいぜい我々の許で魂柱[音栓]がすべて倒れてしまっていて、我々がぶつぶつ不平を言うときならば一致することだろう。あるいは別の比喩で言うならば、我々の鼻が詰まっているときに、花で盛り上がった楽園全体が我々の前に置かれるとしても、我々は匂いをその中で嗅ぐことはしないだろう。

訪問するたびにこの坊や学校教師は自分のヨハンナ＝テレーゼ＝シャルロッテ＝マリアナ＝クラリサ＝エロイーズ＝ユステルに胡椒入り菓子と一人の君主のプレゼントをした。この両方については納得の行くよう説明しよう。

君主達を彼は自分自身の出版で有していた。しかし帝国枢密官房がその侯爵や伯爵を少しばかりのインクと羊皮紙と蠟から作成するとすれば、彼は自分の君主達をもっと高価に、つまり煤と脂肪と二十もの色彩から仕上げた。即ち寄宿学校では多数の君主達の額縁の薪で暖房がなされていて、この君主達を彼は先に述べた材料ですべて複製にし、あたかも自分がその侯爵であるかのように、代理させる術を心得ていた。彼は一枚の四つ折り判の紙を、蠟燭の先端とその後暖炉の煤で塗り、 — この紙の黒い面を別の紙の白い面に重ねて — この両紙の上でどこかの侯爵の肖像画を置いた。 — それから彼は壊れたフォークを取り出して、その圧力のある先端で支配する君主の顔と体を突いて行った。 —

この圧力で黒い紙から白い紙に着色される君主が二重化されることになった。かくて彼はヨーロッパの王座の下に座っているすべての者について、まことに賢い複製を得ることになった。しかし私が決して隠すことではないが、彼の接ぎ木のフォークはロシアの女帝（先の女帝）と多くの皇太子をはなはだ引っ掻き、傷付けてしまい、それで額縁の道に行く他使い物にならなくなったのである。しかしながら煤の四つ折り判の紙は単に栄光の支配者達の孵化板、腐刻盤、あるいはまた支配者達の養魚池、産卵池であって — しかしその育成池あるいは支配者達の仕上げ加工機となったのは彼の絵の具箱であった。この小箱で彼はすべての支配者の家系を彩色した。そしてすべての貝殻[皿]を利用して唯一人の大侯爵を着せ付けて、そして皇妃達は同じ絵の具用貝殻から頬紅や恥じらいの赤み、化粧

を得た。―― これらの支配者の美形達を彼は彼の支配者たる女性に贈ったが、彼女は
この歴史的肖像画の陳列室をどうしていいか分らないでいた。

しかし胡椒入り菓子については、自分がその菓子を食べればいいと分かっていた。一人
の恋人の女性に胡椒入り菓子を贈るのは難しいことと私は思う。しばしばそのプレゼント
の直前に自ら食べてしまうからである。ヴッツは最初の胡椒入り菓子のためにすでに三ク
ロイツァー払ったのではなかったか。彼はその褐色の方形のものをすでにポケットに忍ば
せていて、それを持ってアウエンタールの、宣告の期日の一時間手前まで旅してきていな
かったか。いや甘い奉納額はポケットから十五分おきに取り出されて、まだ四角であるか
検分されなかっただろうか。これがまさに不幸のもとであった。というのは彼が行った実
見によるこの検証で、いつも菓子からわずかな些細なアーモンドを欠いてしまったからで
ある。―― このようなことを彼はよく行った―― その後彼は（円形の求積法の代わり
に）、四角的円を再び純粹に円に直す問題に取りかかった。そしてきれいに四つの角をか
み切って、八角形、十六角形を作った。―― というのは一つの円は無数の四角形である
からである。―― その後この数学的加工の後ではこの四角形は少女に対してははや差し
出されないものとなった。―― その後ヴッツは飛躍を行って、言った。「いや、自分で
食べることにする」。出たのは溜め息で、入ったのは幾何学的像形である。どのような機
械仕掛けの神でヴッツはこの件を片付けたか聞かされて満足しないような[フリーメーソ
ンの]スコットランドの親方とか大学の評議員、学士候補生は少ないであろう。――
二つ目の胡椒入り菓子で彼はそうしたのであって、これを彼はいつも最初の菓子の壁の隣
人、ポケットの隣人として一緒に差し込んでいたのである。彼が一方の菓子を食うと、他
方の菓子が毀損されずに到着することになった。彼は防火壁や近衛兵の具合に双生児で他
方を守ったのである。しかしその結果次のことを自ずと悟ることになった。つまり彼はア
ウエンタールに単なる一つのトルソ、原子を運ぶことにならないようにするには―― 近
衛兵、あるいは胡椒入り菓子を週から週に増やしていかなければならない、と。

彼の父が我々の惑星から別の惑星、あるいは衛星に移ったのでなければ、彼は一級生と
なったことであろう。そこで彼は自分の父親の土地改良を模倣することを考え、二級生の
席から教師の椅子に滑り込もうと思った。教会のパトロンのフォン・エーベルン氏が両足
場の間に割り込んできて、彼の用済みの料理人を手許に置いて、この料理人を官職に就け
ようとした。この官職に彼は適したものとなっていた。この官職では彼の先の職同様に乳
豚^{*原注1}を死ぬほど鞭打てるし、光沢を付けてやれるからである。もっとも食べることはな
かったのであるが。私はすでに或る注の中で学校制度の検査を指摘し、ゲーディケ[Gedike,
1754-1803]氏の拍手を得たものである。つまりどの百姓の若者にも成長しきっていない学
校教師が見られるのであり、数年の教会通いで大きく編曲され得るのであり、―― 単に
古代ローマが世の執政官を鋤や畝から養成できたばかりでなく、今日の村も学校の執政官
をそうできるのであり、―― 英国では同じ身分の人々から裁判を受けられるように、こ
こでも同様に同じ身分の人々から教育され得るのであり、そしてまさに各人が大方の知識
内容を教わることになる師が、各人に最も似ているのであり、即ち各人自身が師なのであ

*原注1 周知のように、乳豚は鞭打たれて死ぬと、より美味しい味となる。

り、一 町全体（アペニン山脈の麓のノルチャ）が単に四人の無学の市参事会員（四人の無学者）によって支配されることを望むのであれば、村の若者は唯一の無学の男によって支配され殺られるべきことになろうし、一 そして私が先のテキストで述べたことを是非考えてみて欲しいのである。ここでは注自身がそのテキストなので、私はただこう言いたい。自分はこう述べた。村の学校には十分に人員が足りている。その学校には1) ギムナジウム館長あるいは牧師がいて、毎冬司祭服をまとして学校を訪ねてきて、恐れさせる一 2) 教室には校長、兼副校長、兼准校長がいて、これを学校管理人が一人でこなしている一 3) 下級クラスの教師として学校では教師夫人が採用されており、その誰かさんに女子校の美形教育学が任された場合、同時に彼女の息子が三級教師、兼野人として任され得るのであり、この息子に生徒達は勿論合金させ、施しをしなければならない。息子が生徒達にその課を暗誦させないようにするためであり、支配者が家にいない場合、息子がしばしばプロテスタントの学校圏全体の帝国代理職をその両肩に担うのである。一 4) 最後に臨時教員の青虫の巣全体、つまり学校の生徒そのものがある。当地ではハレの孤児院におけるように、上級の生徒達がすでに下級の教師達に成長してきているのである。一 これまでは多くの勉強部屋から実科[實在]学校が叫ばれてきたので、このことを教区長や学校管理人は聞き入れ、それでなすべきことを喜んでなしてきた。教区民は教師の椅子に、すでに織物師や仕立屋や靴屋の台座に座してきて、それ故いくばくかのことを期待できるただこのような教育学的尻を選んできた。一 勿論このような男達は、注意深い施設の前で制服や長靴、築[やな]、それに一切を作ることによって、名目学校を容易に実科学校に変えて、製品を作る術が学ばれている。学校教師はこれを更に発展させて、日夜、実科学校管理を考えている。大人の家長、あるいはその召使いの仕事のなかで、村のストア主義者達に関わり、訓練しない仕事は少ない。午前中はずっと派遣のゼミが出たり入ったりしてなされ、薪が割られ、水が運ばれたり等々であり、それで教師は実科学校の他にはほとんど何も経営せず、そのわずかばかりのパンをその一 学校で汗して難儀して稼ぐことになる。...劣等で怠けた村の学校もあると私に教える必要はない。ただ大部分の数がすべてこうした長所、私が今お蔭様としている長所を実際に見せているのであれば、十分である。

私は私の恒星の光行差[外れ]、新しい光行差となるであろう言葉で弁解したくない。フォン・エーベルン氏は料理人の優秀な後任を得られていたら、料理人を学校教師に就けていたことだろう。領主は、台所と学校を一人の人物で管理させることにしたら、革新かもしれないと考えたので一 もっともむしろ学校の従者と領主の従者との分離、二重化こそがはるかにもっと大きな、より古い革新であったのであり、というのは九世紀ではパトロンの教会の牧師は同時に教会内陣のパトロンに従者として仕え、準備等しなければならなかったからである。^{*原注 2} 両職は後になってようやく、幾つかの職同様に分割された、

一 それで領主は料理人を残して、寄宿学校生を招聘した。彼はそれまでとても賢明で、惚れたままであった。

私は自分が手許に有し、ヴッツが教区監督から得た称えられるべき証言を全面的に採用

*原注 2 ランゲの『聖職者の法』、534 頁。

することにする。彼の試験はひょっとしたら近世に私が耳にした中でなお最も厳格で最も幸運なものの一つであったかもしれないからである。ヴッツはギリシア語で主の祈りを祈って見せる必要があったのではないか。その間試験官団はそのピロードのズボンにガラス用ブラシを当てていたのであるが、 — その後でアタナシオスの信条をラテン語で述べる必要があったのではないか。受験者は聖書の各書を正確に、次々に数え上げることができたのではないか。その際朝食を摂っている試験官のコーヒー盆に描かれた花々やカップに躓くことがなかったのではないか。彼は単に一ペニヒを当てにして来た貧しい少年に教理問答を教える必要があったのではないか。もっとも少年というのはその下級試験官[ヴッツ]のように合格せず、本物の家畜同然であったのであるが。彼は指先をお湯の入った五つの鉢に入れ、洗礼児の頭に十分に適した温度の鉢を探し出す必要があったのではないか。最後に三グルデンと三十六クロイツァー払う必要があったのではないか。

五月十三日彼は寄宿学校生として寄宿学校を出て、公の教師として自分の家に入った。そして破裂した黒い寄宿学校の蛹から楽長という多彩な蝶が野外に飛び出た。

六月九日彼はアウエンタールの祭壇の前に立って、ユステルと結婚した。しかし五月十三日から六月[七月、作者のミスとベーレント]九日までの楽園的期間ときたら。 — 死すべき定めの人にとって八週間のこのような黄金の年は二度と天から落ちて来ない。ただ教師殿にだけ地上の星座の沃野に露の降りた天全体が煌めいたのであった。 — 君はエーテルの中に揺れていて、透明な地球を通じて自分が丸く天と諸太陽とに取り巻かれているのを見て、もはや重みを有していなかった。しかし我々自然の寄宿学校生にとってはこのような八週間は手に入らない。一週間もなく、ほとんど丸一日ということもない。このときには我々の上の天と我々の中の天がその純粋な音をただ夕焼けと朝焼けとで彩るのであり、 — このときには我々は人生の上を飛び過ぎて行き、すべてが我々を喜ばしい夢のごとく持ち上げてくれるのであり、 — このときには事物の制御できない激しい奔流が我々をその早瀬や渦の中で押し潰し、揺さぶり、車裂きにするのではなく、煌めく波の上で我々を揺すり、弧を描いて垂れてくる花々の下に連れて行くのであり、 — その日までは過ごした日々の中にその日の兄弟を探しても無駄であった一日であり、その日が過ぎると他の日々が終わってしまうたびに、その日以来二度とそんな日は来ないと嘆く一日である。

私がこの歓喜の八週間、あるいは歓喜の二ヵ月を詳細に描写したら、我々すべてが穏やかな気分になろう。それは全く類似した日々から成り立っていた。家々の背後から一つの雲も湧き上がって来なかった。一晩中天の下の方には移って行く夕焼けがあった。その天の許では沈んで行く太陽がいつも薔薇のように燃え上がりながら咲き終えてしまうのであった。すでに一時に雲雀が鳴いて、自然は一晩中小夜啼鳥のハルモニカで戯れ、即興演奏をした。彼の夢の中へ外部のメロディーが浸入して響き、その夢の中で彼は花盛りの木の上を飛んで行ったが、その夢の木に彼の開けられた窓辺の本物の樹がその花々の息を添えていた。夜明けとなっていく夢は彼を穏やかに、ささやく母親が子供をそうするように、眠りから目覚めへと導いて行った。そして彼は大気を飲み込む胸と共に自然の喧噪の中へ踏み出して行った。そこでは太陽が地球を新たに創造して、両者が一つのざわめく悦楽の世界の海へと互いに合流していた。人生と喜びのこの朝の洪水から彼は自分の小部屋に戻って、より小さな喜びの中に諸力をまた探した。彼はそのときには何にでも喜んだ。光で

輝く窓をすべて、光で輝かない窓をすべて、掃除済みの部屋を、自分の官職の実入りで賄われる朝食を、自分が二級生クラスに行く必要がなくなった七時を、自分の母親のことを喜んだ。母親は毎朝ご機嫌だった。彼が学校教師となって、自分が慣れ親しんだ家から出て行く必要がなくなったからである。

コーヒーを飲みながら、彼はゼンメルパンの他に『救世主』のためのペンを切った。当時彼は最後の三つの歌を除いて、何と歌い終わっていた。彼は細心の注意を払って、叙事詩用の筆を間違っただけで切るようにした。杭のように切るか、割れ目なしにするか、あるいは二番目の余計な割れ目を入れてだだ漏れするようにした。というのはすべてが六歩格[ヘクサーメター]で、それも理解できないような六歩格で記されるべきであったので、この詩人は、どんなに努力しても皆目理解できないようにはできなかったことから、―― 一つでも彼は瞬時にどの行も、どの詩脚、韻脚も記しており、―― やむを得ず思い付いて、六歩格をすべて読み取れないように書くことにして、これは上手く行った。この詩的自由によって彼は造作なく理解を防ぐことができた。

十一時に彼は自分の鳥と、それから自分と母親のために四つの引き出しの付いた食卓で食事の準備をした。テーブルの上よりも中にもっと多くのものがあった。彼はパンを切って、母親に白いパンの皮を切り取った。自分は黒い皮の方は好まなかったのであるが。友の方々よ。何故ドゥ・バヴィエール・ホテルとかレーマー広場ではヴッツ家のカウンターで食するときほどに満足して食べることができないのであろう。―― 早速食事の後、彼は六歩格は作らず、料理用スプーンを作った。私の妹自身はそれを一ダース貰っている。彼の母親が彼が切り分けたものを洗っている間、両人はその魂に味わいを与えないわけではなかった。母は彼に自分と彼の父親の人柄を語って聞かせた。彼女の知識とは父のアカデミックな経歴のせいで余りに父との距離があった、と。―― そして彼は母の前で自分の将来の家政の作戦や設計図を謙虚に提案した。彼は家長であるという考えを何度反芻しても飽き足らなかったからである。「私は家政を」―― と彼は言った―― 「とても分別をもって執り行うことにする―― 聖なる祝日に向けて乳豚を一頭購入する。多くのじゃがいもの皮や蕪の皮が出ているから、肥らせることができるだろう。どんなに肥るか分からないほどだ。―― それに冬に備えて、義父が小フーデル分の藁（柴）を持って来るに違いないし、部屋のドアには全面的に裏地が張られ、クッションが付けられなければならない。―― だって、母さん、子どもはその教育学上の仕事を冬に行うわけで、そのときには寒さがこたえるのだから」。―― 五月二十九日には更にこうした会話の後、子供の洗礼があった。―― それは彼の最初の洗礼で―― その洗礼は彼の最初の実入りであった。大きな収入用帳簿を彼はすでに寄宿学校で綴じ合わせていた。―― 彼は数グロッシェンを眺め、あたかも別のグロッシェンであるかのように、二十度も数えた。―― 洗礼盤に彼は盛装して立ち、観客は二階席と支配階級用の棧敷に汚れた平服で立っていた。―― 「汗をかく難儀な仕事だ」と彼は行事の三十分後に言って、その金でいつもと違う時間に一ネスセルのビールを飲んだ。―― 私は将来の伝記作家に二、三実用的指摘を期待しているが、それは何故ヴッツは単に収入用帳簿を綴じ、支出用帳簿を綴じなかったのか、何故彼は収入用帳簿の上の欄に、ルイ金貨、グロッシェン銀貨、ペニヒを記載したのか、最初のルイ金貨は学校の租税の中にある筈がなかったのかということに関するものである。

行事と消化の後、彼はテーブルを外の桜桃の木の下に運ばせて、腰を下ろして、自分の

『救世主』の中の若干の読みがたい六歩格の仕上げをした。夕食の骨付き腿肉を嚙って、削っている間でさえ、彼は二、三の叙事的詩脚の彫琢をして、その脂身のせいで幾つかの歌が少しばかり脂じみて見えると私はまことに良く気付いている。陽光がもはや路上ではなく、家々に横たわっているのを見ると、彼は母親に家政に必要な金を渡して、野外に出て行き、静かに思い描いた。秋や冬、聖なる三つの祭日の際には学童の間では、自分自身の子供達の間ではどんな具合になるであろうか、と。

しかしこれらは単なる平日のことである。しかし日曜日には、ほとんど祭壇画にも見られないような栄光に燃え上がる。 — そもそもこの世紀の魂の中では、楽長や学校教師に宿っている魂の中でほどに日曜日についての大きな概念が見られるものではない。彼らがこのような接見日に、謙虚なままでいられないとしても私は全く驚かない。我々のヴッツでさえ隠しておれなかった。千人もの人々の許で一人でオルガンを弾き、 — 真の世襲職を守って、聖職者の戴冠式用外套を長老に掛けてやり、長老の道化役、従者のモール人であること、陽光を受けて輝く合唱団全体の領主支配権を行使すること、職務上の合唱団長としてオルガンの侯爵席で、牧師が司教区の散文を司令するよりも、その司教区の詩学をもっと上手に支配すること — そして説教の後、手すり越しに上から侯爵の諸命令をすべてざっくばらんに大きな声で与えるというよりは読み上げるといふことは、何を意味するか隠しておれなかった。…まことにここを措いて、私が私のヴッツにこう呼びかけることが必要な箇所はないであろうと、思われることであろう。「数ヵ月前まで自分が何者であったか思い出しなさい。必ずしもすべての人間が楽長になれるものではないと思いを致して、身分上の有利な格差を利用しなさい、その際この格差を乱用することなく、この格差故に私や暖炉の周りの聴衆を軽蔑することのないようにしなさい」と。 — ー しかし私の名誉にかけて、そんなことはない。立派な教師殿はいずれにせよそんなことは思っていない。百姓達はただとても賢明であって、君の滑稽な、微笑を浮かべた小走りに歩く、手をこすり合わせている上機嫌な君の苦みのない甘ったるい心を覗いて見たことがあって欲しかったものであろう。百姓達は何を見いだしていたであろうか。君の二つの心室における喜び、君の二つの心耳における喜びを見いだしていたことだろう。私が長く付き合えば付き合うほど好きになる[スイカズラ]の良き人よ、君は単に聖歌隊席の上で、教会席にいる将来の学童の少年少女の数をまとめて数えていて、すべて彼らを早くも君の教室に座らせて、それも君の小さな鼻の周りで、そして毎日午前と午後一度は前もって涙をすすっておいて、鼻でくしゃみするように計画していて、それも単に君の教室一同が憑かれたように声を合わせて叫び、「お大事に、楽長さん」と叫ぶようにするためではなかったか。百姓達は更に、塔の時計の文字盤の数字のように長いこと二つ折り判の数字の植字工であるという君の心の中の喜びを見いだしていたことだろう。つまり君は日曜日ごとに黒い歌の黒板に公の印刷をして、次の歌は何頁にあるか教えたものだ。 — 我々著者はもっとひどい道具で印刷されて登場する。 — 更に君の義父と君の花嫁に歌のとき前もって歌って見せるという君の喜びを人々は見いだしていたことだろう。最後に、酸っぱい味のする聖体拝領のワインの澱をこっそり飲み干すという君の期待を見いだしたことだろう。より高い本性[神]は報告している本性[ジャン・パウル]同様君に対してとても善意であったに違いない。神はまさに君の八週間の楽園の期間[五年]に君の恵深い教会のパトロンに聖体拝領を命じたからである。このパトロンはとても明察を有していて、十字架上の

キリストの飲み物に相応して模した聖体拝領のワインの代わりに、キリストの涙[銘酒、ラクリマ・クリスティ]を地下貯蔵庫から取り出して来たのであった。しかし澱を飲んだ後、君の肢体のすべてに何という天国が広がったことだろう。まことにそのたびに私はまた感嘆の声を挙げたくなる。 — しかし私やひよっとしたら君達にも何故この学校教師の満足した心はかくも多くの喜びを与えるのだろうか。 — いや、ひよっとしたら次のせいかもしれない。つまり我々自身はその喜びを十全に得ることはない。それは地上の空しさという思いが我々にはあって、その思いが我々の息を押さえ付けているからであり、芝や花で覆われた黒い墓地の大地を、教師殿が跳ねて人生を送っているその下の大地を、すでに見ているからであろう。

上述の聖体拝領のワインは夕方になってもなお彼の血管の中で泡だっていた。彼の安息日のこの最後の時をまだ私は描く必要がある。単に日曜日に彼は自分のユスティーンと散歩に行くことが許された。その前に彼は夕食を義父の許で摂った。しかし余り有益ではなかった。すでに食卓での祈りのとき、彼の猛烈な空腹は萎え、その後のオードブルで全く目に見えないものになった。私が読めるのであれば、この晩のすべての模写は彼の『救世主』から得られるであろう。その中に彼はその晩のことをありのままにその第六の歌として編み込んだ。丁度すべての偉大な作家が自分の経歴を、妻や、子供達、田畑、家畜をその全集の中に編み上げているようなものである。彼は、印刷された『救世主』にもその晩はやはり書かれていると思った。彼の『救世主』では叙事的にこう書かれていることだろう。百姓達が畦を渡ってきて、茎の丈を測って、彼に川越しに彼らの新しい格式のある楽長として挨拶した。 — 子供達は葉を使って、シャルマイの音を出し、安物フルートを吹いていて、そしてすべての茂み、草の花々や木の花々の萼はすべての声部の満たされたオーケストラであって、その中から何ものかが歌ったり、ぶんぶんうなったりしていた。

— そしてすべてが結局荘厳になって、あたかも地球自身が日曜日であるかのようにあり、高い所や森はこの魔法のような圏の周りで煙っていて、太陽は北の方へ照明された凱旋門を通じて沈んで行き、そして月は南の方へ青白い凱旋門を通過して昇って行った。いや、御身、光の父よ。何と多くの色彩や光線、照明弾で御身は、御身の青白い地球を縁取っていることか。 — 太陽は今や這うようになって一本の赤い光線となり、それが夕焼けの反射と共に花嫁の顔に集まって来ていた。そして花嫁は、ただ黙した感情にのみ慣れ親しんで来ていたが、ヴッツに言った。自分は子供時代よく憧れたものだ。夕焼けの赤い山々の上に立って、そこから太陽と共に、夕焼けの背後に横たわっている美しい、赤く描かれた諸国に降りて行きたいものだ、と。彼は彼の母親の晩鐘の音を聞きながら、自分の帽子を膝に置いて、両手を組み合わせずに、太陽が最後に残っていた天の赤い箇所を見、そして深い影を運ぶ下の流れていく川を見た。あたかも晩鐘が世界に対し、そして今一度彼の父に対し休息するよう鳴っているかのように思われた。 — 彼の生涯で最初にして最後、自分の心が地上的場面から抜け出して行った。 — そして何ものかが、上の晩鐘から、彼は今や満ち足りた思いの余り死ぬであろうと叫んだかのように思われた。...激しく、有頂天になって、彼は花嫁を抱きしめて言った。「とても愛しているよ、永遠に愛するよ」。河からフルートの音のように、また人間の歌声のように音色が下ってきて、間近に聞こえた。我を忘れて、彼は彼女を抱き寄せて、一緒に果ててしまいたくなって、こう信じた、天上の音色で自分達二人の魂は地上から吹き消されようとしており、二人の魂はエデンの

園の沃野の露のきらめきのように舞い散る、と。歌声はこうであった。

神の創りし大地は何と素敵なことか
大地では享受するに値する。
だから私は灰の身となってしまうまで
この素敵な大地を喜びとしたい。

それは町からの一艘のゴンドラで、幾人かのフルート奏者と歌う青年達を乗せていた。彼とユスティーネは進んで行くゴンドラと共に岸边を歩いて行き、互いに手を握りしめた。ユスティーネは小声で真似て歌おうとした。幾つかの至福の天が彼らの傍らを過ぎていった。ゴンドラが木々で一杯の岬を回って去ると、ユスティーネは彼を穏やかに止め、もう付いて行かないようにした。船が奥に消えると、彼女は最初の接吻をして彼の首を抱きしめ顔を赤らめた。... 忘れがたい六月一日よ、と彼は書き留めている。 — 彼は遠くから船の音色の供をして、聞き入っていた。そして両者の周りで様々な夢が戯れて、とうとう彼女が言った。「遅くなったわ。夕焼けはもう遠くに去ってしまった。村のすべてが静かだわ」。彼らは家に帰った。彼は月の光で明るい自分の部屋の窓を開けて、すでに眠っている母親の許で小声でお休みなさいと言ってそっと通り過ぎて行った。

毎朝、自分は結婚式に、六月[七月]八日に一晚眠った分近付いたという考えが朝日のように彼を照らし出した。日中は、自分と結婚式のベッドとの間に置かれている楽園的日々をまだ抜け出していないという喜びが彼と共に付いて回った。かくて彼は、形而上学的ロバのように、頭を両方の干し草の束の間に、現在と未来の間に置くことになった。しかし彼はロバとかスコラ学者ではなく、両方の束に一度に食み、むしり取った。...まことに人間は決してロバであってはならず、無関心主義のロバでも、木製のロバでも、バラムのロバでもあってはならない。その理由が挙げられるが、...しかし私はここで中断する。彼の結婚式の日を描くか、描かないかまだ熟考するつもりであるからである。ちなみにその為のモザイク画の鉛筆は小東全部有している。

しかし実際は私は彼の名誉の日に列席していず、自分自身の経験もない。それで私はその日を上々に描いて、自分も一緒に — 私はさもないと何も有しないであろうから — 楽しいパーティーをすることにしよう。

私が耐えているものを読者が思うのに、そもそもここほどより適した場所、あるいは全紙を私はそもそも知らない。私自身がいるのは、魅惑的なスイスの一帯で、 — 私の目が向けられているのはアポロやヴィーナスの形姿 — 崇高な祖国、そのためには私が命を、前もって貴族とされた命を、捧げることになる祖国、 — 私が入って行く新婚の床、こうしたもの一切は他人あるいは自らの指で単に — インクあるいは印刷所の黒色インクで描かれたものである。そしてただ御身が、天上的女性の御身よ、御身のためなら誠実に尽くし、私のためなら誠実でいてくれる御身、一緒に牧歌的七月の夜散歩をし、一緒に沈んで行く陽の前に立ち、昇って行く月の前に立ち、御身のためならすべての御身の姉妹を愛することになる御身が、ただ御身が — いてくれさえすればいいのであるが。しか

し御身は一枚の祭壇画で、私は御身を見いだせない。

ナイル川や、ヘラクレス、他の神々にも確かに、私同様に、単に模造の娘達を捧げた。しかしその前には彼らは実在の娘達を得ていたのであった。

我々はすでに土曜日学校、つまり結婚式場を覗いて、結婚式当日のためのこの準備日の諸前提を少しばかり前もって押さえることにしよう。日曜日にはその時間はないのだから。かくて世界の創造も（ちょっと昔の神学者達によれば）わけがあって、六日間の平日になされたのであり、決して一分間でなされたのではない。つまり天使達が自然の本を、その本が次第にめくられていくなれば、見通すことがより容易になるであろうからというものだったのである。土曜日新郎は目立って二つの慈善団体、つまり牧師館と学校に出たり、入ったりして、牧師館から学校に四つの椅子を調達した。彼はこの台座を長老から借りた。貸主自身を自分の領主司教としてその椅子に座って貰い、長老夫人には花嫁の名親として、それに寄宿学校からの准指揮者と、花嫁自身とに座ってもらうためであった。新郎のこの借用の贅沢はいかほど擁護できないものであるか私は他人同様承知している。勿論この巨大な借用の椅子は（人間や椅子は今縮んでいるが）、青い布地による背もたれや座部の偽の牛皮の房のカールをしており、黄金の釘による銀河が黄色の縁の上に稲光として散っており、二重の尻を持っているかのように柔らかくこの椅子の縁に座ることになるというのは確かなことである。一 申したように債権者と借用者のこの尻の贅沢を私は決して手本として称賛しなかった。しかし他面ではシュルツ[Schulz]の『パリについて』[1791]を読んだことのある者は誰でも、パレ・ロワイヤルやすべての宮廷での贅沢は明らかにもっと大きなものであると告白するに違いない。全く、この厳密な慣例のメソジスト教徒達の目をヴッツの祖父の椅子、安楽椅子の側にどうして向けさせたらいいだろうか。この椅子は、四本の木製の獅子の前足で大地を掴み、その足は四つの横木で、一 元気なアトリや鷲の止まり木で 一 つなぎ止められていて、その編髪は花模様のある革で余りに豪華という以上に立派に張られていて、二本の木製の有毛の腕を、年を経て人間の腕のようにより一層干涸らびているが、座る者に対して伸ばしているのである。…先に「いいだろうか」と疑問符を付けたことを、長い総合文の後では多くの者が失念しているかもしれない。

新郎が更にその領主司教から借りて来た錫の食器セットは、それが競売にかけられたら、オークションの宣伝者の許で、私の許で聞くよりももっと読者は理解が深まることだろう。結婚式の客達がわきまえていたのは、サラダ皿やソース入れ、チーズのための小皿、辛子入れは、まずはどんな役割の前にも洗い落とされたものであるということであった。

ナイル川、アルペイオス[川の神]全体がどの部屋の床にも注がれ、それで十分な庭の土が洗い流されて、ベッドの支柱や窓枠に注がれ、通常の洪水の沈殿物 一 つまり砂を残した。長編小説の法則から言うと、教師殿が服を着て、野原の上や、草や花々の波打つ覆いの下で身を伸ばし、そこで愛の夢に次々と襲われて、沈み込み、涙するということが必要であろう。一 しかし彼は雌鶏や家鴨をむしり取り、コーヒーや焼き肉用薪を割り、焼き肉そのものを裂き、土曜日に日曜日の毒味をして、義母の青い前掛けを借りて、五十もの台所の準備を命じ、実行し、頭を毛巻き紙で角状にし、髪をリスの尻尾のように高く結んで、前後に飛び跳ね、至る所跳ね回った。「毎日曜日が結婚式というわけではないの

だから」と彼は言った。

些細な楽しみ事のために百もの先触れの走者や騎乗者を見たり聞いたりすることほど厭わしいものはない。しかし自ら先触れの走者や騎乗者となることほど甘美なものはない。我々が見るだけでなく分配する忙しさは、後で我々自らによって蒔かれ、注水され、収穫された果実への喜びをもたらすものである。その上待機という心痛に襲われることがない。

しかし親愛なる天よ、ただ土曜日のことを報告するのに土曜日全体を私は要した。単にヴッツの台所をちらっと見たにすぎないのに — 何というせわしない、何という煙りであろうか。 — 何故殺害と結婚式とはそれについて語っている二つの戒律同様にかくも間近なのであろう。何故侯爵達の結婚式がしばしば人間達にとって一つのパリの血の結婚式であるばかりでなく、何故また市民階級の結婚式も家禽にとってそうなのであろうか。

しかし結婚式の家でこの喜びの二日間、二羽の四のアトリと三羽の鶯ほど面白くなく、忌々しい思いで過ごしたものはいなかったであろう。これらをきれい好きな、鳥好きな新郎はすべて拘禁した。 — 前掛けを用いたり、ナイトキャップを投げて追い込むことによって、 — そしてその踊りのホールから対の針金の籠「カルトウジオ修道院」へ移り、マンサード屋根の中で跳ねながら、壁に掛け下げるようにした。

ヴッツはその『ヴッツ家の原初の歴史』と『中年の子供達のための読本』の中で、夕方七時には、仕立屋がこの結婚の神に新しいズボン、チョッキ、上着を試着させたので、すべてがピカピカに韻が合って、新しく生まれ変わった、自分自身を除いて、と報告している。新しい装いの輝くような部屋のどの椅子、どのテーブルにも言い難い休息が見られた。混乱した部屋では、自分は今朝のうちにも退去を言われた住まいから退出しなければならぬと思うものである。

その夜の上を（次に続く夜同様に）私と太陽は飛び去って行く。そして彼が日曜日、今日の天国のことを考えて、顔を赤らめ、電気が走って、笑顔の結婚式の部屋へと階段を降りて行くとき、我々はその彼に出会う。その部屋は我々皆が昨日大いに苦勞し、大いにインクを使って、化粧水や — ヴィーナスのハンカチ、化粧の布きれ（ぞうきん） — 髪粉箱（乾燥砂の鉢）その他の化粧道具で飾ったものである。彼は夜のうち七回目が覚めて、七回その日のことを楽しみにした。そして二時間早く起床して、二時間を一分ごとに消化していった。私はあたかも教師殿と一緒にドアから入って行くような気がする。彼の前では一日の分秒が蜜の巣房のように並んでいるのである。 — 彼は分秒を次々に汲みだして、そしてどの分秒もが更なる蜜の尊を有している。生涯にわたる年金生活のようなものを得て、楽長は今や日曜日や陽光や歓喜が見られないような家をこの地球上で考え出すことができなくなっている。できるものではない。 — 下のドアの後で彼が開けた第二のものは上部の窓であった。上下に舞っている蝶、 — 漂う銀のспанコール、花の箔、アモールの似姿である蝶を — 結婚の神の部屋から追い出すためであった。それから彼は前もって騒がしい一日を予期して鳥籠の中の彼の鳥の聖歌隊に餌をやった。そして窓から父のバイオリンでワルツを奏した。このワルツの音で彼はカーニヴァルから結婚の夜まで踊って来ているのであった。ようやく五時になった。親しき友よ、余り急がないことにしよう。我々は二エレの長さの首巻きタイと（これを君は同様に、以前花嫁を踊りな

がら巻いたように、母親が他の端を持っていて、踊りながら巻き)、弁髪リボンとを滑らかに、まだ鐘が鳴らない丸々二時間前に着用させよう。私と私の聴衆とが今透明な風の精へと希薄化する術を心得ていたら、私が陪席している祖父の椅子と暖炉と引き換えに喜んでそうすることだろう。我々同朋一同がばたばたしている新郎の静かな喜びを邪魔することなく庭まで追って飛んで行き、そこで彼が女性の心のために、ダイヤモンドの心でもイタリヤ製の心でもないその心に、そんな人造の花を折るのではなく、本物の花を折るのを

— 花びらからきらめく甲虫や露の雫を振り落とし、蜂の吸い口[吻]を待っているのを、母親らしい花の胸が最後にと吸い付かせたその吻を待っているのを — 彼が自分の子供時代の日曜日の朝を思い出して、苗床の上での窮屈すぎる足取りと、長老によって彼の花束が置かれた説教壇とを思い出しているのを目にするようになるだろう。家に帰るがいい、汝の先祖の息子よ、そして六月[七月]八日には黙した、六フィートの厚さの墓地が幾人かの友人達の上にある西の方を見渡さずに、君が太陽と、牧師館の扉、君の飛び込んで来るユスティーネを見ることが出来る東の方を見渡すことだ。彼女の髪を名親の夫人は親切に整えていて、彼女のコルセットを締めようとしている。花嫁の周りを飛ぶために私の聴衆がまた風の精に希薄化されたいと願っているのに私は容易に気付いている。しかし彼女は見られたくないのだ。

ようやく天上的に青い上着が — 製粉屋と教師のお仕着せの色が — 黒い縁のボタン穴が付けられて用意され、すべての屑を払う母親の手が教師殿の体にかけて、教師殿はただ帽子と賛美歌の本を手にはすれば良いだけになった。今や — 私とて、豪華なものを知っている。侯爵の結婚の際の侯爵的豪華さ、つまりその際の祝砲や照明、教練、調髪である。しかしヴッツの結婚式ではそのようなものを私は決して準備しない。ただこの男を追って見てみればいい。彼は花嫁への日輪の道、天国の道を行き、向こうの寄宿学校への別の道を見てはこう思うのである。「四年前は思いもしなかったことだ」と。私は彼を見送り給えと申し上げている。水を運んでいるけれどもアウエンタールの牧師館の小間使いもそうしていないだろうか。そしてすべての房飾りに至るまでもこのような豪華な服をその脳室、衣装室に掛けていないだろうか。彼は髪粉をかけられた鼻先と靴先とを有していないだろうか。彼の義父の赤い門扉が開けられていて、彼がそこから歩を進めて行き、一方美容師によって仕上がられた婚約者の女性は中庭の小さなドアから忍んで行くのではないか。かくも装着され髪粉をかけられて、二人は互いに会って、二人は互いにお早うという勇気を持ってないではないか。というのは二人はその生涯で今日の自分達ほどに何かより豪華なもの、より高貴なものを見たことがあったらどうかという次第だからである。この仕方ない当惑の中で、小さな弟が裁断し、姉に渡す長い木片は、幸いその周りに葡萄の支柱のごとく、楽長のボタン穴のために花々や匂いの束を巻き付け、締め付けるのに役立っているのではないか。私が私の筆を浸して、それで花嫁の盛装を、髪の毛の中の揺れる飾りピンの代わりに揺れる金箔、ドイツの皇帝達^{*原注 3}の細密画の入った胸元の三

*原注 3 多くのドイツの一带では娘達はドゥカーテン[金貨]を三枚首にかけている。

個の黄金のメダル、より下の、ボタンとして鑄造された銀の延べ棒を描いたら、嫉妬深いレディー達は私の友のままでいるであろうか。...しかし私のヴッツとその良き花嫁が、印刷されたとき、コケットな女達や他の悪魔どもに嘲笑されていると気付かされたら、私はその誰かさんの頭に筆を投げつけるところであろう。しかし君達、町の蒸留され刺青された売笑婦達よ、君達は男どもすべてを測り、愛するが、その心を除いて愛するが、私とか私の大方の読者の殿方がそれに対し無関心でいるとか、我々は皆が、君達の立派に張った頬や、ぴくつく唇や、君達の嫉妬と欲望で焦がす目や、君達のどんな偶然をも利用する腕や、君達の冗談に満ちた長広舌でさえも、唯一の場面と引き換えにはしなないと思ってくれるだろうか。つまり愛が羞恥の朝焼けの中にその光線を屈折させ、無垢の魂がすべての人の目の前に、自分自身の目は例外にして、その姿を露呈し、百もの内的戦いが透明な顔を生气付ける場面、要するに私の新郎新婦自らが演ずる場面、義父という老いた陽気な男が兩人のカールさせた髪の白く輝く頭を手にして、兩人を賢明に接吻へと強いる場面と引き換えにはしなないと思ってくれるだろうか。ヴッツよ、君の嬉しそうな赤面ときたら ー それにユスティーネよ、あなたの恥ずかしそうな赤面ときたら。 ー

そもそも現伝記作者自身の他にその婚約の贈り物の直前にこのような事柄、類似の事柄をより鋭く考え、その後でより繊細に戯れる者がいようか。

露地での子供達や桶屋の喧噪、ライブツィヒでの書評家達の騒ぎのためにここですべてを詳細に述べることはできない。つまり新郎がオルガン賛美歌の各行を弾く際の豪華な袖の留め金、三重のカフス、 ー 彼がその選帝侯の冠を合唱のために掛けたときの木製の天使の翼 ー ペダル鍵盤のパイプのユスティーネの名前、二人が互いに礼拝式序書の(結婚生活政府のこの金印勅書、帝国基本法)の前で、右手を出して、彼がその薬指[指輪指]で彼女のくぼめた手をベッド衝立の陰でするときのようにからかったときの彼の冗談と陽気さ ー 結婚式場への入場を詳細に述べることはできない。この部屋ではひよっとしたら村の最も偉大な、最も高貴な人々と料理が互いに会ったのかもしれない。牧師[長老]に牧師夫人、副指揮者、それに花嫁である。しかし私が脚を動かして、それで結婚式の食卓や式の野原、午後を飛ばして、夕方の出し物を聞くことにしたら拍手を得ることだろう。

ー 副指揮者は一、二の踊りを指示する。すでに本当は皆が我を忘れていて。 ー 煙草の大群の煙りとスープの蒸気浴とが三本の明かりの周りで波打っていて、各人は霧の席で互いに隔てられている。 ー チェロ奏者やバイオリン奏者は楽器の腸を撫でるといよりは自分の腸を満たしている。 ー 窓下の腰壁ではアウエンタールの全ての人がギャラリーとして覗き込んでいる。村の若者は外で、オーケストラから三十歩離れて、全体まことに愛らしく踊っている。 ー 老いた村の子守女が自分の最も重要な履歴をくしゃみして、咳き込んで話していた、各女性が自分の歴史の用を早く足したくて、他の女性がまだ座していると不機嫌である。 ー 長老は画家達が杯を手をしている姿を描いている寵児ヨハネの寵児のように見えて、説教するときよりも大きな声で笑っている。指揮者は優男として動き回っていて、誰からも掴まえられない。 ー 私のマリーア[ヴッツ]はぴしゃぴしゃと下の楽園の四つの川の中を進んで行き、歓喜の海の大波が彼を抗いがたく持ち上げて揺さぶっている。 ー ただ花嫁先導の女性だけが(その胼胝の多い身分の割には

余りに優しい肌と魂を有して) 歓喜の太鼓の音を木霊のように弱められて聞き、王侯の葬儀のときのようにヴェールで覆われているように聞いていて、静かな喜びが溜め息の形をして孤独な胸を引き締めている。 — 私の学校教師は(彼は二回台所画に登場して良いだろう) その結婚相手と共に玄関に立ち、その装飾壁面は燕の巣であるが、自分の上の黙してかすかに光る空を見上げてこう考える。どの大きな恒星も一人のアウエンタール人のように見下ろして、窓から中を覗き込んでいる、と。...揮発して行く一滴の時の上を樂しげに航行するがいい、君ならできよう。しかし我々皆ができるとは限らない。一方の花嫁先導の女性もできない。 — いや私も君のように結婚式の朝、不安げな、花々に捕らえられた蝶に出会ったならば、君のように萼に閉じ込められた蜂に、君のように七時で止まってしまった塔の時計に、君のように上の黙した天と下の騒がしい天に出会っていたら、私もこう考えざるを得なかったであろう。風が我々の小さな花々をかき乱すこの嵐のような地球上では休息の地、我々を静かにその香りで包んでくれる休息の地は見いだせない。あるいは埃のない目を見いだせない、かの嵐が我々に投げかける雨粒のない目を見いだせない、と。 — 喜びの閃光を發する女神が私の胸の間近に立っていても、私はかの灰の小さな塚に、太陽から生まれて、我々の氷の地帯から生まれたのではない女神が、その抱擁ですでに哀れな人間どもを石灰化してしまったその小さな塚に目を向けていたことであろう。 — いやはや、すでに大きな満足の先の描写が私をかくも悲しい思いにさせて残したのであれば、まず御身が、測りがたい高みから低い大地まで差しのべる手の御身が、私に、太陽で育った花のような一つの満足をもたらしてくれるならば、この父なる手に喜びの一滴を落として、余りに弱った目と共に人々に背を向けるようせざるを得ないことだろう。...

このことを述べている今、ヴッツの結婚式はとうに過ぎて、彼のユスティーネは年取って、彼自身は墓地にいる。時の奔流は彼とこうした微光の日々をすべて四層、五層の澱の下に押し込み、埋葬してしまった。 — 我々の許でもこの埋葬する沈殿物はますます高くなって行く。三分するとこれは心臓に達し、私や君達を始末してくれる。

この気分の中では誰も私に、彼の喜びの指南書からこの学校教師の多くの喜びを、特に彼のクリスマスや教会堂開基祭や学校での喜びを伝えるようにと要求する者はあるまい。

— ひょっとしたら後で私が供する追伸の遺稿の死後出版では可能かもしれない。しかし今日はできない。今日は満足したヴッツの臨終を見届けて、去って行くのが良いだろう。

私はそもそも、 — 彼の玄関前を三十度も通り過ぎたけれども、 — 去年の五月十二日に老いたユスティーネが玄関の許に立っていて、私が歩きながら写字帳に没頭しているのを見かけて、こう呼びかけていなかったら、この男のこと全体につきほとんど知ることにはなかったであろう。つまり私も作家ではないかと聞かれたのである。 — 「それ以外の者ではありません」 — と私は答えた — 「年中私はそのようなことをしていて、後で一切を読者に届けています」。 — だったら小一時間自分の夫と会って欲しい、夫も作家ですが、でもとても疲れているのです、と彼女は続けた。

卒中のために老人は、ひょっとしたらうなじの疥癬を治療してターラー貨幣大にしたためか、それとも年のせいか、左側が麻痺してしまっていた。彼はベッドに枕を背もたれにして座っていて、私が早速詳述することになる在庫の全部を掛け布団の上で展開してくれ

た。病人は旅行者と同じで、他の何者でもないから ― すぐに昵懇になるものである。かくも足と目がより崇高な世界の間近にいと、このかさぶたのある世界ではもはや遠慮をしない。自分の老夫人に三日前から執筆者を探し求めさせているけれども、誰も、たった今を除いて、得られなかったとこぼした。「しかし自分は自分の文庫を引き受け、整理し、調査する人が一人必要で、全文庫に書かれている伝記の中で、自分が死ぬ間際となったとき、最後の時間を仕上げのために書き加えてくれる人が必要なのだ。自分の老夫人は知識がないし、息子は三 ― 週間の予定でハイデルベルク大学に行っている」と。

彼の痘瘡と皺の播種の具合は彼の丸い小さな顔に極めて楽しげな明かりを与えていた。その一つ一つが微笑した口に見えた。しかし彼の目がかくも閃光を發し、彼の眉毛と口許がかくもびくつき、彼の唇がかくも震えていたのは、私と私の症候学に不吉であった。

私は詳述という私の約束を果たすつもりである。掛け布団の上には緑色のタフタの子供帽があつて、そのリボンの一つは千切られていて、更に草臥れた金箔の塗られた子供用の鞭、錫の指輪、一二八折り判の小人本の箱、壁時計、汚れた筆記帳、指の長さのアトリ用罫があつた。彼の遊んで過ぎた子供時代の残り屑、奥手の果実であつた。これらの彼の古代ギリシアの芸術貯蔵室は以前から階段の下にあつた。 ― というのは、ただ一本の系統樹の花桶、温室である一軒の家ではこれらの品は五十年にわたって同じ所から動かずにあるからである。 ― 彼の子供時代から、彼の玩具のすべては史的秩序のままに保存されるというのが彼の許での帝国基本法であつて、一年にわたって階段の下を覗くのは彼しかいなかったのので、それで彼は臨終前の予備日になおすでに死滅した生のこの骨壺を自らの周りに置き、もはやこの先に喜びは見いだせなかつたので、振り返って懐かしむことができたのであつた。勿論幼いマリーア[ヴッツ]よ、君はサン・スーシ宮やドレスデンの古代式神殿に足を踏み入れ、そこで芸術による美しい自然の世界精神の前にひれ伏すことはできなかつた。しかし君は暗い階段下の子供時代の古代の仮礼拝堂を覗くことができ、そして復活する子供時代の光線が、馬小屋にいる幼子イエスの絵の中の光線のように[コレッジョ作]、陰気な片隅で輝くのである。君よりももっと多くの人々が自然の温室全体から、運命によって結び付けられたぎざぎざの葉から君が吸い上げる程度の甘美な果汁や香りを吸い上げるのであれば、そのときは葉ではなく、庭が享受されているのであり、より良い、もっと幸せな人々は、満足した教師殿が存在し得ることにもはや驚くことはないであろう。

ヴッツは語って頭を書架の方へ傾けた。「私は私の真面目な作品を読んで訂正するのに疲れたら、何時間もこれらの得難いがらくたを眺めるのです。物書きにとって恥ずかしいことではないと願っています」。

私は世間に対し、これらの工芸品やがらくたの詳しいカタログ、この病人が私に見せてくれたカタログを披露することほどこの瞬間にふさわしいものはないように思う。錫の指輪は先の牧師の四歳の娘が、二人で互いにままごとできちんと立派に結婚したとき、結婚の証として彼の指に嵌められたものであつた ― この惨めな錫はより高度な金属がより高貴な人々を結び付けるよりも堅固に彼と彼女を結び付けたのであつた。その結婚生活は五十四分間続いたのである。しばしば彼は黒衣の寄宿学校生として後に彼女が頷く羽根飾りの旗と共に染みだらけの優男の細い腕にすがって散歩するのを見かけるたびに、この指輪のこと昔のことを思い出した。そもそも私はこれまで、彼が女性のように見えるものす

べてに対して惚れやすいということを隠そうと無駄な骨折りをしてきた。彼の類いのすべての陽気な者達は同じことをしている。ひょっとしたらそうするのは、彼らの愛が愛の両極端の間であって、両者から借用しているからかもしれない。丁度胸がプラトニックな刺激とエピキュリアン的な刺激の絆、混血児[クレオール]であるようなものである。 — 彼は塔の時計を巻く父親の手伝いをしていたので、かつて皇太子達が父親と一緒に会議に臨んだようなものであるが、この些細なことがヒントとなって、ラックを塗られた小箱に孔を開けて、決して進まない壁時計を削って作ることになった。しかしその時計は、幾つかの国家同様、長い分銅とぎざぎざの歯車を有していて、これらはニュルンベルク製の玩具の馬の台から取られたもので、かくて何かより立派なもののために使われることになった。 — レースの縁取りのある緑色の子供用帽子は、かつての四歳児の唯一の遺物で、今は大きなヴッツへと成長した小さなヴッツ少年の胸像、石膏像であった。日常の衣服は故人のイメージをその肖像画よりも親密に表現するものである。 — それ故ヴッツはその緑色を憧れの喜びを抱いて眺めた。あたかも老齢の氷から夙に雪で覆われていた少年時代の緑の芝地がほの白く輝くように思われた。「フランネルの下着だけは」と彼は言った、「手に入れたいものだ。いつも私の腋の下に巻いていたものだ」。私はプロイセン国王の写字帳も教師ヴッツの写字帳も見たことがある。両者の筆跡を知っていて、それで私はこう判断できる。国王は成人のとき、教師殿は子供のとき、もっと下手であった、と。「お母さんよ」と彼は妻に言った、「おまえさんの夫はどれほど立派にここで（写字帳で）、そしてあそこで（壁に釘で掛けてある封侯状の習字的傑作で）書いているか見て欲しいものだ。まだ愛おしくてならぬ。お母さん」。彼は自分の妻の前でしか自慢しなかった。結婚生活を通じて夫はその前で遠慮なく心ゆくまで称賛できる第二の自我を得ることになるという結婚生活の長所を応分に高く私は評価する。まことにドイツの読者は我々著者のこのような第二の自我となって欲しいものである。 — 小箱は指幅カレンダー書式のリリパットの[小人的]宗教パンフレットの本棚で、このパンフレットには彼が聖書から一節を書き写し、綴じ、そしてただ「またしてもまことに立派なカバー^{*原注 4}ができた」と言って、出版したものであった。他の著者もこのようなことはできるだろうが、しかし大人になってからであろう。彼は私にその青春時代の執筆活動について報告するとき、こう述べた。「子供のときにはどうしようもなく愚かなもので、しかしすでに当時執筆欲が芽生えていたわけで、ただ勿論未熟な滑稽な形をしていたわけです」。そして微笑を浮かべて現在の執筆活動に満足していた。 — アトリ用の罌も同様なものであった。ビールを塗って、それで蠅の足を捕らえた指の長さのアトリ用罌は、腕の長さのアトリ用罌の先駆けであって、その罌の背後で晩秋彼は素敵な時間を過ごしたのであった。その上ではアトリ達が最も忌まわしい時間を過ごしたわけであるが。捕鳥は全く自ら自足した静かな人物を要することだろう。

彼の最大の病床での楽しみが古いカレンダー、そのカレンダーの粗末な十二の月の銅版画であったのは容易に分かることである。一年の毎月彼は画廊の監督官の前で帽子を取っ

*原注 4 コーバーの『私室説教師』 — ここでは二十もの現今のあく抜きされた説教の山よりもっと多くのエキスが見られる（勿論しばしば馬鹿げたものであるが）。

たり、画廊をノックしたりすることなく、帽子を取ったりノックしたりする他のドイツ人達よりももっと多くの絵画的芸術的楽しみを味わった。つまり彼は十一月の装飾画を — 彼がさまよっているその月の装飾画は除いて — すべてさまよい — 木版画の場面の中へ、自分やその場面が必要とするもの一切を投じて空想するのであった。勿論元気なときも病気のときも、彼が一月の冬景色の中で葉の落ちた黒い木に登って、(空想の中で) 大地を圧迫している雲の空の下に身を置き、その空が野原や畑の冬の眠りの上に天蓋のように身をかがめているのを見るたびに、元気が湧いてきたに違いなかった。 — 彼が自分の空想に六月の風景画を孵化させるたびに、小鳥の筈でしかない小さな十字架が灰色の印刷紙の中で飛んでいて、彫刻師が茂った葉の模様を葉の骸骨へとあく抜きしている六月全体がその長い一日と長い草の丈とで彼を取り囲んだ。しかし空想を有する者は、どんな切り屑からも一つの奇蹟の聖遺物を、どんなロバの顎からも一つの泉を作り出すものである。[士師記、15,15 以下参照] 五官は空想に対して満足あるいは不満足のためのボール紙、ただの下塗りとなるにすぎない。

病人は五月をめぐり飛ばした。いずれにせよ五月は家の外に見られたからである。歓喜の月、その緑の髪を飾る桜の花や、その胸の前飾りの薔薇として香るたんぽぽの匂いを彼は嗅ぐことはなかった — 嗅覚は消えていた — しかし彼はそれらを眺めて、幾つかは病床の側の鉢に入れた。

私は、私や私の聞き手に五、六頁分悲しい時から目や耳を反らすという意図を上手に果たしてきた。この時には我々皆の前で死が我らの病気の友のベッドの前に来て、ゆっくりとその氷の冷たい手を彼の温かい胸に差し入れて、満足して活動している心臓を驚かせ、握りしめて、永久に停止させるのである。勿論いつかはこの瞬間とその同伴者とがやって来る。

私は一日中そこに残っていて、夕方、自分は夜見守っていることができる旨言った。彼の活発な脳、彼のぴくつく顔を見ていると、夜卒中が繰り返されるであろうことは確実に思われた。しかしそれは生じなかった。このことは私と教師殿にとって本当に好ましいことであった。というのは私にこう告げられていたし — また彼の最後の宗教パンフレットに記載されていることであったからである。 — つまりある晴れた日に死ぬことほど美しく容易なことはない。魂は閉ざされた目を通じて高い太陽をまだ見るであろうし、魂は干涸らびた肉体から外の広大な青い光の海の中へ昇っていくことだろう。これに対し暗く、うなるような夜、温かい肉体から出て行かざるを得ないこと、自然全体そのものが居座っていて、目が臨終で閉ざされながら、墓場への長い落下を孤独に行うこと — これは余りに苛酷な死であろう、と。

夜の十一時半にヴッツの二人の最良の友、つまり眠りと夢とが今一度彼のベッドに、さながら別れを告げるためにやって来た。それとも汝ら二人はもっと長くいるのだろうか。汝ら二人の人間の友こそはひょっとしたら、殺害された人間を死の血まみれの手から受け取って、母親のように汝らのあやす両腕で冷たい冥府の洞窟を通じて、明るい国へと運ぶ者達、人間を新しい朝日と新しい朝の花々とが目覚めた生へと吐き出す国へと運ぶ者達なのだろうか。

私はその部屋に一人っきりで残っていた。 — 私は病人の息遣いと、彼の短い生涯を測る私の時計の音だけを耳にしていた。 — 黄色の満月が南の方に低く大きく懸かって

いて、その喪の明かりでその男のたんぽぽと止まりがちな壁時計と子供のときの緑の帽子を霜のように覆っていた。 — 窓の前のささやき声の桜の木は部屋の床に月光を受けて、影からなる震える葉飾りを描いていた。 — 静かな天では時折煌めく流星が落下して、流星は人間のごとく消えて行った。 — 今では墓の黒く張られた控え室となっているこの同じ部屋に四十三年前の朝、五月十三日にこの病人は移って来て、この日に彼の樂園的な八週間が始まったのだということに私は気付いた。 — 当時この桜の木に芳香と夢とを与えられていた者[ヴッツ]がそこで抑圧するような夢の中で嗅覚もなく横たわっていて、ひょっとしたら今日のうちにもこの部屋から去って、そしてすべてが、すべてが過ぎ去り、二度と戻って来ない様を私は見ていた。...そしてこの瞬間ヴッツは萎えた腕で何かを捉えた。あたかも落ちて来る天を捉えようとするかのようであった。 — — — そしてこの震える瞬間に私の時計の月針はぎしぎし言って、十二時となったので、五月十二日から十三日に移った。...死は私に私の時計を指しているように見えた。私は死が人間と人間の喜びをかみ砕く音を聞いた。世界と時間とは腐敗の奔流の中で奈落に落ちて行くように見えた。...

私は、私の月針の真夜中の移行が生ずるたびに、この瞬間のことを思い出す。しかしこの瞬間は、私の他の諸瞬間の列の中で二度と生じて欲しくないものである。

臨終の者は — この者はこの名前を長くはもはや有しないだろうが、 — 二つの燃えるような目を開けて、私を長いこと見つめ、私を見分けようとした。彼は自分が子供となって、自分の下で沸き立つ百合の花畑で揺られている夢を見ていた。 — この花畑は高く昇った薔薇の雲と合流して、その雲は彼と共に黄金の朝焼けの中を、煙る花畑の上を移って行った。 — 太陽は白い娘の顔をして彼に微笑みかけ、照らし出して、最後には光線で包まれた娘の姿をして彼の雲に沈み込み、そして彼は自分の萎えた左腕では娘に手出しできないことに不安を覚えていたのであった。 — — — その次には彼は自分の最後の夢、あるいはむしろ最後から二番目の夢から醒めた。というのは人生の長い夢においては夜の様々に小さな多彩な夢が空想の花のように刺繍され描かれているからである。

彼の頭の中での人生の奔流はますます速く、ますます幅広くなっていった。彼は再三若返っていると思った。月を彼は雲に覆われた太陽と見なしていた。彼は自分が天翔る洗礼盤の天使であって、虹の下、たんぽぽの鎖に吊されて、無限の弧を描きながら上下に揺れて、四歳の指輪を贈ってくれた少女によって深淵から太陽へと揺すり上げられているように思われた。...朝方の四時頃、すでに朝焼けは部屋の中に見られたけれども、彼は我々をもはや見るができなかった。 — 両目は化石化して無意識に眺めていた。 — 顔の痙攣が次々に生じた。 — 口はますます微笑んで一つの喜びを散らしていた。 — この人生でもあの世の人生でも見られないような春の幻想が沈んで行く魂と戯れていた。

— とうとう死の天使が青ざめた喪のヴェールを彼の顔に落下させ、その背後で花と咲く魂をその最も深い根と共に有機化された大地で一杯の肉体の温室から引き上げた。...死は崇高である。黒い幕の背後で孤独な死は静かな奇蹟を行い、別世界のために仕事をする。そして死すべき定めの人達は濡れた、しかし鈍い目をして、超現世的光景の傍らに立っている。...

「お父さんよ」と彼の未亡人は言った、「誰かがあなたに四十三年前にこう言えたとしたらどう思います。つまり、あなたは例の八週間が始まった五月十三日に墓に運ばれる運

命だと」。　一　「彼の八週間が」と私は言った、「また始まるのです、でももっと長く続きます」。

私が十一時に立ち去ったとき、大地はさながら神聖なものに見え、そして死者達が隣を歩いて行くように見えた。私は、あたかも果てのないエーテルの中のただ一方向にその亡き死者を探し出せるかのように、空を見上げた。そして私がアウエンタールを覗き込める山上で、今一度受難の劇場の方を見て、煙の上がる家々の下にただ喪の家のみが煙を出さずに静まりかえっていて、墓掘人がその上の墓地で塚を掘っているのを見たとき、そして彼のために弔鐘が鳴るのを聞き、未亡人が無言の教会の塔の下で涙を流しながら綱を引いていると考えたとき、私は我々皆が無であると感じ、かくも無意味な人生を軽視し、この人生に値することをし、この人生を楽しむことを誓った。

ヴッツよ、結構なことではないか、つまり私がアウエンタールに行き、君の草むした墓を探して、君の墓に埋葬された蛾のさなぎが羽とともに這い出してきた、君の墓が巣くうミミズや、這いずり回るカタツムリや、動き回る蟻どもや、かじる青虫の行楽地になっていて、一方君は深くこの虫どもの下に身じろぎもしない首のまま鮑屑の中において、君の棺の板を通して、亜麻布の付着した目にも愛しい光線が差し込むことはないと知って嘆くときに、こう言えることは結構なことではないか。「彼がまだ生きていたときには、彼は我々皆よりももっと人生を楽しんだ」と。

友の諸君、もう十分だ　一　十二時になっており、月日針は新しい一日をさしており、我々に二重の眠りを思い出させた、短い夜の眠りと長い夜の眠りである。...

伝記と牧歌の読者に対する終わり鐘、あるいは七つの最後の言葉

六月二十一日、あるいは夏至の日

そんなわけで、私のささやかな役割は、少なくとも最初の登場としては今日で終わりとなる。私は七つの言葉を書き尽くしてしまったら、私と読者の方々とはお別れである。しかし読者より私の方が悲しい思いで別れる。ある遠くの目的地への道を終えた人間はこの道を振り返って見て、通って来た街路を不満げにそして新たな願いを一杯抱いて覗き見る。この街路はその人間の乏しい時間を測ってきたのであり、その街路にその人間は、王女メディアのように、生命の肢体を振りまいたのである。今日夜にならないうちに、私はこの本から落ちたすべての紙の残物を棺に収めた。しかし他の著者達のように灰にはしなかった。――同時に私は、もはや私に新たに手紙を書けなくなっている友人達のすべての手紙を地上の審級では完結した訴訟の文書として整理し、中に収めた。――人間はそのようなものは常に預けて、すべての喜びの花々を、乾燥しているとはいえ、薬草の本の中に張り付けるべきであろう。その古い燕尾服や毛皮付きトグルコート、フロックコートすらも（他の衣装は性格表現が少ない）贈り物にしたり、競売にかけたりするべきではなく、その空洞化された時間の覆いとして、飛び去った喜びの蛹の殻として、上納服、あるいは死滅した歳月から思い出として残る死手譲渡として吊しておくべきであろう。...

――私は今日この日、この本同様にとっても長い日、この葬儀が終わったら、人生の夜同様にとっても短いこの夜、外に出掛けた。...今ここで私は空の下に立っていて、いつものようにまたこう感じている。この世ではすべての登られた階段はより高い階段への足場へと短縮され、どの登攀された王座も新たな王座への足台へと縮小される、と。――人間は運命の大きな踏み車の許に住み、それを動かしながら、そこで進んで行くときに、登っていると思うものである。...何故私はもうまた新たな本を書き、この本の中で、先の本では見いだせなかった休息を期待しようとするのであろうか。――採石場の上に屈み込んでいる、ここの高い茂った岩のところ、私は写字板を置いて、この本の結末を書こうと思っているが、六月の夜のことで、この六月を画家達は死に神のように、大鎌の姿で描くものである。――十一時を過ぎている。私の上の消えた青い大空の大洋では、ただここかしこに震える小さな点が見られる。――アークトゥルス[牛飼座の一等星]は西側からその小さな閃光をその惑星と私の惑星に投げかけている。――大熊座は北方から輝き、アンドロメダ座は東側から輝いている。――幅広い月は地球の下、新世界の正午[南]の隣にあるが――しかし沈んだ夕焼けは（この多彩な太陽の影は）新世界の夜明けの微光を旧世界へ屈折させていて、私の周りの十もの葉に覆われた村々を越えて、黒い、ただ音を立て続けている奔流、千年単位で計り続けていく時のこの長い水時計を越えてその微光を投げかけている。――

矮小な人間はかくも惨めなものである。人間は一冊の本を終えると、すべての遠くの恒星に目を向けて、その恒星が自分を見ていないかと思う。人間はより一層謙虚であっても、自分は単にヨーロッパとそのインドの植民地で注目されていると思うことだろう。――

私はここでケルビムや熾天使に、あるいは単に山の精であれ、写字板と愚かさを有する自分を気付かれたいと願っている。むしろ一人の人間に、立っていて書いている自分を見て貰いたい。その人は穏やかになって、自分自身の心から、他人の心の弱さに耐える

術を学んでいることだろう。脆い人間は次のことを感じ、大目に見ることだろう。つまり誰もが、自分が座っていて、びいびい鳴いている自分の巣、自分が嘴と尻を突き出す唯一の場であるその巣を宇宙の焦点であり、正面棧敷、円形建物であると見なし、他の木々のすべての巣を自分の焦点の巣の農舎と見なしていること、を。...いやはや、君達、良き人間達よ。我々が互いに三十分であれ侮辱し合うことがどうして可能なのであろう。一 何とまあ、人生のこの危険な十二月の夜に、高く、あるいは低く我々から離れている未知の者達のこの混沌の中、この覆われた世界、我々の埃となって散る小地球の周りのこの震える夕べに、どうして見棄てられた人間は、唯一の温かい胸を抱きしめて、その胸には自分と同じような心があって、その心に向かってこう言えるはずなのに、「私の兄弟よ、君は私と同じで、私のように苦しんでいる。お互いに愛し合えるだろう」と言えるはずなのに、それができないのであろうか。一 合点のいかない人間よ。君はむしろ短剣を集めては、君の真夜中に、良き天がそれで君の胸を温め、守ってやろうとしているその類似した胸に突き刺すのである。...いやはや、私はこの影となった花床を越えて見やっては、自分にこう言う。ここで六千年間その美しく高貴な人間達が去っていった。我々の誰一人胸に抱きしめることのできなかつた人間達だ。一 更に何千年もこの地を過ぎて、その間天上的な、ひょっとしたら悲嘆の人間を、我々に出会うことはないけれども、せいぜい我々の骨壺を目にするだけで、我々がとても愛するであろう人間を送り出すことになる。

一 そして単に哀れな二、三十年が我々に数名の去って行く形姿を我々に案内し、彼らはその目を我々に向けて、その中には我々が憧れる同朋の心が我々のために収まっている、と。これらの去ってゆく形姿を抱きしめ給え。しかし単に君達の涙から君達は、自分達が愛されていたことを知ることになる。

一 そしてまさにこのこと、つまり人間の手は数年もしたら差し出されるということ、その手はわずかな良き手を握ることができるということ、このことが本を作るときの弁解となるに違いない。その声はその手よりも遠くに達し、愛のその狭いサークルはより広大なサークルに流れ込む。そしてその人間自身もはやいなくなっても、その余韻の考えは紙の叢の中でそよぎ続け、別の散って行く夢同様に、そのささやき声やその影を通じて幾多の遠くの心によって重苦しい時間の間、戯れて去って行く。一 これはやはり私の願いであるが、しかし希望ではない。しかしながら美しく柔らかな魂の人が存在していて、その内面と思い出と空想とが一杯の魂であり、それで私の弱々しいそれらの空想の許でも溢れるようであるならば、一 自らと、押さえきれない涙で一杯の目とをこの物語で隠す人ならば、この物語の中に自分自身の友、逝った友、過ぎ去った日々、涸れた涙を再び見いだすので、そう隠す人ならば、そのときには、愛しい魂よ、私は君のことを、君とは面識がないけれども、考えていたのであり、私は、君の知人ではないけれども、君の友だ。君がもっと劣等な人間達に、君がもっと上等な人間達に見せるものを隠すとき、君の中の神々しいものが、神のように、高貴に見えないままであるとき、君が涙さえもヴェールで覆うときには、もっとより良き人間達が君の友であり、君の知人であることになる。

一 硬い手が突き出されて、それが目と共に涙を押し潰してしまうからである。雨の後イギリス庭園のすべての緑の先端が更に芽吹くことのないよう下にしごかれるようなものである。

一 乙女座の穂先の明るい星、あるいは露の雫が今地平線の下に落ちて行く。一 私

はまだこの花香る地上に立っていて、こう考える。古き良き地球よ、汝は汝の花々、人類の子供達をまだ太陽の許に運んでいる。母親が乳呑み児を光線にさらすように、―― ー
まだ汝はすっかり汝の子供達に囲まれ、ぶら下がりられ、覆われている。鳥類は汝の肩の上で羽ばたいていて、動物どもは汝の足許で動いていて、羽根のある金色の点は汝の巻き毛の周りを漂っている一方、汝は直立した高い人類を汝の手で空を通じて導いていて、我々すべてに汝の朝焼けや、汝の花々、そして無限の父親の光り輝く家全体を見せていて、汝の子供達に、彼らがまだ見たことのないこの父親について語っている。―― ー
しかし良き母親たる地球よ、千年紀が過ぎたら、すべての汝の子供達が死滅することだろう。そして炎の太陽の渦は汝を余りに間近の食い尽くす回転の中に引き込んでしまっているかもしれない。そうなったら汝は、孤児となって、膝の啞の者達と一緒に、死の灰をまかれて、荒涼と黙したまま汝の太陽の周りを回ることだろう。朝焼けが来て、宵の明星が輝くだろうが、しかし人間どもは皆汝の四つの世界の腕の上で深く眠り、何ももはや目にしないことだろう。...皆がそうなるだろうか。―― ー
いやはや、そうなったら、より高い慰めの手が、最後に眠る我らの同朋の孤独な目の上にためらうことなく最後のヴェールをかけて欲しいものである。...

...夕焼けがすでに北の方でほの白く輝いている。―― ー
私の魂の中でも太陽は沈んで、その縁で赤い光がびくつき、私の自我は暗くなる。―― ー
私の前の世界は深い眠りに陥っていて、何も聞いていないし、語ってもいない。―― ー
私の中では納骨堂から青白い世界ができあがってくる。―― ー
昔の時間が塵となって飛び、あたかも地球の境界で一つの破壊が始まったかのように、ざわめき声がし、私は太陽の砕く物音を耳にし―― ー
奔流は留まり、すべてが静かになり―― ー
黒い虹が雷雲の中からこの寄る辺ない地球上に背をかかめるようにかかった。

―― ー
見給え。ある形姿が黒いアーチの下、歩いて来る。六月の花々の上を音もなく測りがたい骸骨が大股で、私の山の方に寄って来る。―― ー
それは恒星を飲み込み、惑星を潰し、月を蹴り出して、虚無の中に高く入って行く。―― ー
高く白い骸骨は夜を裂いて現れ、二人の人間を手を抱えていて、私を見つめてこう言う。「私は死だ―― ー
私はそれぞれの手に君の友人を持っている。そうとは分からないだろうが」。

私の口は大地に転げ落ちた。私の心は死の毒の中を漂った。―― ー
しかし死にながら私は死が語るのを耳にした。

「私は今やおまえをも殺す。おまえは私の名前をよく口にした。私はおまえの語るのを聞いた。―― ー
私はすでに一つの永遠を砕いてきた。そしてすべての惑星に介入して、潰すのだ。私は諸恒星からおまえらの鈍く暗い片隅に降りて来ている。そこでは人間の硝石が結晶化し、私はその硝石をこそぎ落とす。...死ぬ定めの人よ、おまえはまだ生きているのか」。...

すると私の流血している心は人間の苦悩についての一つの涙に溶けて行き、―― ー
私は打ちひしがれて起き上がり、この骸骨や、この骸骨が披露するものを眺めず、―― ー
私はシリウスに目を向けて、最後の不安にかられて叫んだ。「姿の見えない父上、御身は私を破壊するのですか。これらの者達も破壊されているのですか。苦悩の人生は一つの粉碎で終わるのですか。砕かれてしまう心臓は、御身をかかも短い期間しか愛せなかったのですか」と。

見給え。すると向こうの夜の青い空から明るい一滴が落ちて来て、涙ほどの大きさのもので、そして育ちながら一つの世界から次の世界へ落ちて行った。 — その雫が大きく、千もの色彩の稲光と共に黒いアーチを通過して行くと、このアーチは虹のように若く咲き、そのアーチの下にはもはや諸形姿は見られなかった。 — そしてその雫が太陽のように大きく煌めきながら五つの花の上に落ちたとき、一つのさまよう炎が緑の野原に流れ出て、目に見えないまま地球を包んでいた黒い紗を照らし出した。紗は膨れながら無限のテントへと広がって、世界から千切れ、一つの喪のヴェールとなって落下し、墓に留まっていた。

— すると地球は夜明けの天となって、星々からは明るい点の温かい雨となって砕け落ち、地平線上に白い柱が配列されて立っていた。 — 西側から小さな雲が波打って来て、真珠のように明るく、緑色に戯れて、赤く輝いた様で、どの雲にも一人の少年が眠っていて、その呼吸の西風が流れ出る香りと戯れること白い花々と戯れているようで、その雲を揺すっていた。 — 生温かい西風の波が雲々の縁を洗って、雲々を導いて行った。 —

ある波が私の息に流れ込んで来たとき、その波の中で私の魂は委ねられて永遠の休息へ散って行こうと欲していた。 — はるか西の方では雷雨と嵐の下、一つの暗い球が揺れていて — 東からは私の大地に黄道光が一つの影のように投げ込まれていた。...

私は東側の方を向いた。すると一人の静かで大きな、徳操で浄福な、月のように昇ってくる天使が私に微笑みかけて、こう尋ねた。「君は私を知っているかい。 — 私は平和と休息の天使だ。君が死ぬとき君は私をまた見ることだろう。私は君達人間を愛し、慰めている。君達の大きいなる苦悶の際に立ち会っているのだ。 — その苦悶が余りに大きくて、君達が苛酷な人生で傷付き倒れるとき、私はその魂を傷と共に私の心に受け入れ、あちらの西の方で戦っている君達の球から運び出し、微睡んだその魂を死の白い雲の上に寝かすのだ」。

いやはや、私はこの雲の上の、二、三人の眠れる形姿とは昵懇だ。...

「これらの雲は皆その眠れる者達と共に東の方へ移って行く。そして大きいなる良き神が太陽の姿をして昇ってくると、彼らは皆目覚めて、永遠に生き、歓声を上げるのだ」。

見給え。東の方の雲は一段と高く輝き、一つの烈火の海の中へまとまって行く。 — 昇ってくる太陽が間近に来て、 — 微睡んでいる者達は皆、覚醒に向かって、その浄福な夢から一層生き生きと微笑している。 —

君達永遠に愛しい馴染みの形姿よ。私が君達の大きな、天上的に酔った目の中をまた覗き込むことができるようになるのであれば、[どんなに幸せなことか]。...

陽光が高く差した — 神が第二世界の前で燃えながら休らっていた。 — 閉ざされていた目がすべて開かれた。

いやはや、私の目も開かれた。ただ地上の太陽が昇っただけであった。 — 私はまだ諍う西側の球の上にへばりついていて。 — 最も短い夜が私の微睡みの上を、あたかも人生の最後の夜であったかのように素早く通り過ぎたのであった。

それも結構。しかし今日私の精神はその地上の諸力と共に起き上がっている。 — 私は私の目をこの人生の上の無限の世界に向ける。 — もっと純粋な祖国と結び付けられた私の地上の心は御身の星々の天に対して高く鼓動する。無限の方よ、御身の際限のない形姿の星々の像に対して鼓動する。そして私は私の最も高貴な内面の中で御身の声を通じて偉大になり永遠になる。御身が消えることは決してないであろう。 — —

そして私と共に、平和の天使が出現し、地上の抱擁から貴重な魂を引き出した一時間を
思い出す者は、余りに多くを失った一時間を思い出す者は ー 憧れを抑えるがいい。そ
して私と共にしっかりと雲を見上げて、こう言うことだ。君達去った愛しい者達よ、君達
の雲の上でいつまでも休み給え。君達は君達の夕べと君達の朝方との間を流れ去る諸世紀
を数えることはない。君達の塞がれた心にはもはや墓石しか石は置かれていない。そして
この墓石が押さえ付けることはない、そして私どもを思って君達の休息が乱されることさ
えない。...

深く人間の中には何か不動のものが休らっていて、これは痛みによってもただ麻痺させ
られるだけで、負かされはしない。 ー だから人間は人生を、最良の者でも果実の代わ
りにただ葉を付けるだけの人生を、耐えられるのである。それ故に最愛の人間達が愛する
胸を越えて遠く離れた人生へと去って行き、現今の人生には単に思い出の余韻だけを残す
この西側の球の様々な夜を、あたかもアイスランドの黒い夜から白鳥が渡り鳥としてバイ
オリンの音色と共に飛んで行くような具合の夜を、この人間はしっかりと目覚めたままで
いるのである。 ー しかし御身、二人の眠れる形姿を愛して、私に彼らの友と私の友と
をその二人が残すことになった御身、私が永久に敬愛するクリスティアン・オットーよ、
君こそはこの世で私の側に留まってくれ給え。[Christian Otto, 1763-1828。二人の眠
れる形姿は、Adam Lorenz v. Oerthel, Johann Bernhard Herrmann]

『見えないロッジ』解説

恒吉法海

『見えないロッジ』はジャン・パウル(1763-1825)の処女作で、日記によると 1791 年 3 月 15 日から 1792 年 2 月 29 日まで執筆で、原稿を 1792 年 6 月 7 日 Karl Philipp Moritz(モーリッツ)宛に送り、その仲介でその義兄ベルリンの Matzdorff の出版社から 1793 年 2 巻本で出版されたとされている。[ハンザー版、第 1 巻、1241 頁、以下引用はハンザー版、1970 年]。モーリッツを感嘆させたものであるが、ジャン・パウルが世に広く人気を得たのは『ヘスペルス』1795 年以降である。

まず『見えないロッジ』の梗概を記そうと思うが、かなり面倒なことになる。簡略して言えば、「精霊」と言う名の敬虔な若者に地下で八年間育てられた主人公グスタフがヒロインベアータの愛を得るという物語である。主人公が生まれる前は、母親が父親（一応騎士貴族）とチェスをさせられ、猫の手で勝負をご破算にし、母親は結婚に至る。母親がチェスに負けるということが結婚の条件であったからである。地上に復活してからは、グスタフは一時行方不明になるが、よく似た肖像画を掛けられて戻ってくる。父親の元の恋人、現貿易仲介業のレーパー夫人の仕業である。父親のこの元恋人との間の息子は小説ではずっと行方不明である。グスタフの牧歌的な少年時代と田舎娘との初恋。グスタフの一家は冬シェーラウ侯国で過ごすことになっている。その途次グスタフは目を傷付けられたアマンドゥスと知り合い、友情を結ぶ。アマンドゥスの目は父親のドクトル・フェンクの手術で治る。その後グスタフは幼年学校に入る。彼の生活を描写すると称するへぼ作家のエーフェルも登場するが、主人公の家庭教師は、ピアノ教師兼裁判官兼伝記作者のジャン・パウルで、全体はジャン・パウルが読者と（スターン風に）戯れながら執筆するという趣向で、このジャン・パウルは片足が短いとされる。グスタフは若い正義感を発揮して、レーパーの密輸と思われるものの摘発を行い、そこで幼少時遊んで以来初めて会ったレーパーの娘、ベアータの気持ちを案ずる。散歩中のベアータはアマンドゥスの前でグスタフの所持していた肖像画を奪い取る。アマンドゥスもベアータに惚れているが、嫉妬しながらも、最後はグスタフと和解して病のために夭逝する。その死後アマンドゥスの墓地で、グスタフが夢を見て、ベアータに告白していると、現実のベアータの手を握ることが生ずる。丁度仮死状態から蘇った国王の庶子オットマルの弾くオルガンの音でグスタフは墓地での眠りから覚めたのであった。オットマルの館には友人フェンク等の蠟人形が置かれている。エーフェルの斡旋で上流社会に出入りすることになって、グスタフはベアータが付き添いをしていた弁理公使夫人の気に入られ、夫人の誕生日ベアータと芝居、実は実の兄妹ではないという芝居をする。ベアータはその夜国王の誘惑を退けるのに対し、グスタフは弁理公使夫人の誘惑に屈する。グスタフとベアータは若干の行き違いの末、湯治場リーリエンバートで和解する。最後にドクトル・フェンクの手紙で、グスタフが逮捕されたと知らされる。オットマルらの秘密結社の陰謀が露見したというものであるが、筋としては未完である。

ジャン・パウルは主な作中の時を 1791 年としているが、この点に関しては、すでにベーレントの詳細な報告がある。カレンダーを後に掲載するので、点検してみると面白いかと思う。カレンダーなしではただ学術的に見えるだけである。ベーレントの見解は以下の通り。「しかし証明されるのは、カレンダーの呈示として現実の執筆年の 1791 年から 1792

ものを一種のフィクションと見なすジャン・パウルの基本的性行の反映であろうと思う。カレンダーは考えてみれば、365日をどのように分割しようとその民族の風習であり、勝手であるからである。

『見えないロッジ』はすでに鈴木武樹氏による訳があり、再度翻訳する必要は感じなかったのであるが、コメレルの『ジャン・パウル』を訳したとき、『ヴッツ』と比較してこう述べられていたので、挑戦してみる気になった。「[『ヴッツの生涯』の]言葉は魅力と温かさを有するが、すでに『見えないロッジ』に見られる登攀のし難さ[Unersteiglichkeit]は有しない」[Jean Paul, S.288]。コメレルでも読みにくかったわけである。これはおそらくジャン・パウル独自の世間理解に由来するものであろう。「非自然的なものとして医師は1) 覚醒と睡眠、2) 食事と飲むこと、3) 動き、4) 呼吸、5) 排泄、6) 情熱のことを言っている」とある原注[S.49]で述べているように、要するに普通自然なものが人為的に見える視点を有するのである。普通の人々が自然なものと思っている、カレンダー、自我、表情、言葉が作為的に見えているために独自のジャン・パウル世界が生じていると思われる。

印象的なその世界を思いつくままに列挙していく。

『見えないロッジ』でよく引用されるのは、グスタフが初めて日の出を見るシーンである。富士山の初日の出を拝むような特別な場合は別にして、我々は普通日の出、日の入りを気にしない。グスタフは普通の日の出を世界で初めて生じたかのように見るわけである。我々の誕生や死も考えてみれば、世界で初めてなわけであるが、普通は特記に値しない何億人もの自然な日常の流れの中に埋没している。しかし主人公グスタフの最初の日の出は前代未聞の按配である。

くしかし彼が最初の凝固の後、自分の精神をこの奔流に対して広げ、引き裂いたとき
— 宇宙の高貴な魂が自分をかき抱いている千もの腕を彼が感じたとき — 彼が自分の周りの緑色の酩酊した花々の生命を目にし、そして自分の百合よりも生気があるように見える顔く百合を目にすることができたとき、そして彼が震える花を踏み潰しかねないと恐れたとき — 彼の再び上方に向けられた目が深い天、無限なものの開口部に吸い込まれたとき — そして彼が行き交う暗赤色の雲の峰々と自分の頭上で漂う国々とが壊れて落ちて来るのではないかと恐れたとき — 山々が我々の大地の上に新たな大地のように横たわっているのを見たとき — そして無限の生命が、雲の傍らを羽毛を付けて飛んでいる生命や、足許のぶんぶん言う生命、すべての葉の上で這っている黄金色の生命、巨大な木々の生き生きとして、自分に目配せしている腕や頭部が彼を取り巻いたとき — そして朝の風がやって来る聖霊の大きな息吹に思え、風になびく木陰道が語りかけ、林檎の木が彼の頬を一枚の冷たい葉で触れたとき — 最後に彼の圧迫された目が、夏の鳥[蝶の意も]の白い羽根を追って行き、その鳥[蝶]が音もなくひっそりと多彩な花々の上を越えて、広い緑色の葉に薔薇の耳飾りのように銀色に止まったとき、...天は燃え始め、去って行く夜からは夜の外套の後追いの縁が燃えながら消え、そして大地の端には、神々しい王座から沈んだ神の王冠のように、太陽が横たわっていた。グスタフは叫んだ。「神がそこにいます」。そして眩惑された目と精神と共に、そしてまだ子供らして十歳の胸で言えるかぎりの最大の祈りと共に、花々へ駆け寄っていった。..> [S.62f.]

作中の倫理の教授ホッペディーツェルについて Beatrix Langner はその伝記『ジャン・

パウル』(C.H.Beck) 2013 年の中でこう論評している。「ホッペディーツェルという名前はデュッセルドルフのカーニヴァルの大衆的な人物、ホッペディーツェルを思い出させる。デュッセルドルフには周知のようにフリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービがその莊園ペムペルフォルトに住んでいた。、{信じられた} キリスト教世界の護教家である。この世界はある得難い場面、新約聖書のカナンの地の結婚式のパロディ的場面で図解されている。ホッペディーツェルは友人達にワインをもてなすが、それを水と称し、彼らの酩酊を想像と説明し、信仰なくしては何ら超自然的奇蹟は生じないことを証明している」(S.158)。水を酒に変えたキリストのパロディと見ているわけであるが、筆者はこの場面では少しも宗教のパロディを感じない。感ずるのは自然な酔いを素面で演ずるという擬態への愛好である。

この場面のコメレルの解釈はこうである。<それは多くの、ダッシュによって分離された主文の形式である — 挿入文の形式とでも呼んでいいかもしれない。すべてを感じやすい感情の繊維の激しい震えの状態と並列させる、すべてを力の位階に並列させるのは酩酊の状態に相応しい> [Jean Paul, S.38]。<同時にこの形式は笑いの酩酊の形式であり、『見えないロジ』がその一例となろう。シェーラウの倫理の教授ホッペディーツェルは五人の客の一人一人を脇に呼んで、他の者達を騙すようにと約束する。自らは染めた水を飲んで貰うが、本当のワインを飲む他の者達に熱心に勧めて欲しい、と。皆がそこで酔っ払いの振りをし、他人を本当に酔っていると思う。結局或る者が気付いた。「その中でも彼の杯同様水であった — 稲妻のように半ば道化で、彼はすべての水の神々の杯を試飲した — すべてが水であった — そこで彼は皆に打ち明けた — 海軍全体が飛ぶように試飲して回った。誰もが真面目に、自分は酔って、腹一杯なのか語るようになった」(第十四扇形[S.120]) > [Jean Paul, S.39f.]。

人間の表情と意図、外面と内面、記号と内容の齟齬は一貫したジャン・パウルのテーマであろう。孫引きであるが、その基本的問題意識は次の手紙に凝縮されている。

「我々が肉体的にあるいは外面的に無限の者の前で行うことすべては、つまり考えでないものすべては、即ちすべての声高な祈り、拝跪、指を組み合わせての合掌は儀式である、...そしてこうしたことすべては逆にしても同様に成立し得る。祈るとき跪かずに立っていて、頭から帽子を取らずに(ローマ人のように)被っていても同様に敬虔と見なされるであろう。...我々哀れな肉の胸甲に包まれた人間、我々肉体の鋭い鎖に投げ飛ばされた荒れた魂、我々は、我々の高貴な自我が羽ばたくとき、この内面の動きを我々の殻の外的動きによって明らかにしなければならない。どのようにか。例えば、手や唇の圧力と愛する熱い感情との間にはほんのかすかな類似性、かすかな関係があるだろうか、この感情はその圧力と共に痛々しく甘美にその牢獄から愛する魂の別な肉体の牢獄に合図しているのであるが。私が愛情を一杯に抱いて私の腕を愛する形姿に巻き付けるとき、この記号と表示された事柄との間にはほんの少しでも類似性があるだろうか、しばしば悪漢は、絞め殺すために同じように抱くのであるから。頭を振ることは、これは多くの民族の間で否認を意味しているが、まさしく一つの肯定を示すことがありうるのではないか。我々の重苦しい魂はその比喩の為の舌も色彩も有しないので、それで誰も、魂がせっぱ詰まった感情の中で使用する色彩を貶めてはならない」。1795年4月15日、エマヌエル宛。

これに関して Kurt Wölfel は以下のように論を展開している。「この手紙の箇所は『美学入門』の考えとははっきりと言葉で記帳されている矛盾である。内面と肉体の間には「ほんの少しでも類似性」はなく、「ほんのかすかな関係」もない。そこでは反映は行われず、何らかの表現手段を求めての本質的に好き勝手な魂の触手の動きがある。霊的なものを肉体化させるという難しさ、これについては『美学入門』で、言うなれば単に軽くあしらって文体的芸術家的問題として語っているが、この難しさがその根を見せている。勿論肯定の為に頭を振る民族はない、しかしこれが何の証明になるか — 同様に多くの意味と正当さをもって民族はそうするかもしれない。 / ジャン・パウルの作品を見れば、彼の諧謔的人物は、魂と肉体の全体的不調和の感情に深く貫かれて、それに応じた振る舞いをしていることに気付く。肉体が示していることは、魂の中で生じていることと何の関係があるか、痛みは涙腺と、喜びは笑う際の顔面の歪みや口の開放と何の関係があるか」。[先の手紙を含め、拙訳の e-翻訳『翻訳・ジャン・パウル論考（9編）』参照]

ホッペディーツェルに関して言えば、要するに、酩酊と酩酊の演技とに何の違いがあるかということになる。更に言えば、接吻と接吻の描写、セックスとセックスの描写に何の違いがあるか、現実と芸術の違いはあるか。無論違いはあって、こうした問題意識はすべてを人為的に再構成する芸術をジャン・パウルが選び取っているから生じている問題である。人生は短く、芸術は長い。長い方が好きだというわけである。単なるスケッチなのに「彼の絵で永遠の生命を付与する」[S.260]云々の会話がほとんど無意識的に生じている。勿論酒飲みは本当に飲むのが好きであって、ホッペディーツェルの客人達にはファルケンベルクによって本当のワインが振る舞われてから帰されている。

自然の再構成はなぜ必要か。「何故我々は冬に、春を把握し、あるいはむしろ春を仕上げるよう空想を調教しないのか。というのは我々は自然に対して見ているものを享受しているのではなく（さもないと外で森林官と詩人とは同じものを享受することになるであろうから）、見たものに対して詩作するものを享受しているからである。自然に対する感情は根本において自然に対する空想である」[S.396]。ジャン・パウルは明らかに酩酊よりも、酩酊の描写を好むのであるが、しかしその審美主義の行き過ぎ、描写のために町を焼き払うとか、拷問することは批判している。「エーフェルは詩となるような不幸が起こるたびに神に感謝した」[S.290]。

更にホッペディーツェルに関して言えば、彼の怒りに関する描写は技法的にジャン・パウルの擬態的笑いの基本となるものである。「彼は怒りとか何らかの情熱に拉致されてしまう男ではなかった、真の禁欲主義者[ストア派]であって、常に正気であった。そこから何故次のようなことをしたか説明できよう、つまり彼は、エピクテトスやセネカは、人々を制御するために、ストア派の者達に、禁じられた内的怒りを怒りの外的見せかけで置き換えるよう勧めているので、この怒りの見せかけにすら励んで、悠然と彼の拳を化石化し、この握りをこの件に明かりを見せない彼の妻のかの四肢に照明弾として投じたのであった」[S.117f]。コメレルの分析が参考になる。「ジャン・パウルがありふれた素材の償いとしているのは、これらの通常の身振りを比喻によって極めて込み入った多様性へと紛糾させ、愚かな粗放性に由来するものに哲学問題の下地を与え、一瞬に終わるものを、部分的運動にくだくだしく分解し、詳細に引き延ばしてしまうという技法である。或る身振り

は、それに不似合いな間合いが与えられることによって滑稽なものとなる」。更に続けてコメレルは次の場面を紹介している。<もっと楽しいのは第四十八扇形のコツコツ打つ従兄弟のフェッターラインとジャン・パウルの体験である。従兄弟は血縁の女性の最後の時を語って、ジャン・パウルを感動させるが、同時に彼の指を何かにコツコツ当て、はじくことで、最後にはジャン・パウルの掴んだ手の内側に当ててはじくことで、笑いを押し殺す羽目に陥らせる。そこでも観念の対立、両、表象する自我の対立、儀礼的に表明された気分とジャン・パウルの本当の気分の対立の他に、身振りの解釈が面白い。「かくて私はもう十分な気がして、彼のオルガンを弾く困った指を掴んで、それを逮捕して発した。『いやはや、私の愛しい従兄弟のフェッターラインさん』」[S.369]>。[Jean Paul, S.50f.]

ジャン・パウルの擬態の技法はその擬態が一見では判じがたいということである。酩酊が素面の演技でも区別し難かったように、徳操は徳操の振りと区別しがたい。

「しかし私は私の作品では、あたかも徳操や、しばしば熱狂と呼ばれているかの陶醉から、立派なものを作り出しているかのような振りを余りに頻繁にしていることの正当化の他には余り紳士達に苦情を述べるつもりはない。物分かりのよい人々が私の振りを真面目に考えることに対し実際心配していない。徳操という名前の代わりに徳操そのものを有したいと思うことの滑稽さは我々双方とも承知していると期待している」[S.25]。

贅沢と見えるものは吝嗇と区別しがたい。引用するのも気が引けるような冗漫な文である。「浪費というのが、とても外観上はそう見えても、彼を不恰好にしているのではなかったと私は確かに承知しているので、すべての[浪費の]外観を次の報告で取り去りたいと思う。つまり彼は土曜日ごとに一ポンドの肉を一人前買ったが、しかし — というのはこれはさもないとまだ何も証明しないからで — 食べることをしなかった。彼は確かに一つを、スプーンで食べたが、しかしこれは先の土曜日の分であった。つまりこの不完全な性格は土曜日ごとに肉屋から自分の礼拝の肉を取り寄せて、それで日曜日の野菜料理を高尚なものとし、飾った。しかし彼は野菜部分しか食しなかった。月曜日にはその動物部分をまだ有していて、それで第二の野菜料理の風味を付けた。 — 火曜日に煮られた肉は新たな火と共に新鮮なキャベツの文化に関わった。 — 水曜日には彼の前で肉はスープの脂肪の玉となって別のキャベツ・スープの中で色目を使わなければならなかった。 — そのように進展し、遂には日曜日となって、その日浸出してきた肉の縞模様は自ら食事[食物]となって、しかし別の意味で、そしてレーパーはその一ポンドの肉を実際食べた。同様に人々は一ポンドのライブニッツの考えや、ルソーの考え、ヤコービの考えと共に著作者達の紙[葉]作品で一杯の船舶用釜を力強く煮立てることができよう」[S.151]。

擬態好きが高じて、ホッペディーツェルは冗談での盗賊を考案するに至っているが、作品中こんな感懐も述べられている。グスタフの教育に関してであり、常にただ再構成以前の白紙の自然と向き合うことが前提されているのである。ジャン・パウルの試みは言語で、言語以前を意識しながら世界を再構成するものであり、現実と芸術とが常に意識の中にあると言えよう。<しかし私の方としても洒落を有していよう。私は返答を思い付くことだろう。「同僚殿、最大の悪漢と、貴殿の訳される最大の喜劇詩人の間に違いがあると思っておいでですか。 — 勿論あります。カルトゥーシュの立派な計画は、詩人ゴールドーニの立派な計画とは、カルトゥーシュは喜劇を自ら演ずるのに、ゴールドーニはその喜劇を役者達に演じさせる点で違います」[S.172f.]>。

仏教では自我は元素に還元すれば無であると説かれるが、ジャン・パウルでも自我の肉体は常に変化しており、不動の自我はありえず、それ故借金は無効であり、結婚生活も続いているわけではないといったことが、同工異曲でよく脱線的话题となっている。

結婚生活の例。「自分の不義密通を正当化し得る上述の肉体交替で、宗教局はその決定を根拠付けなければならない。というのは人々がしばしば結婚後九年、十八年して、まだ結婚生活で一緒にいて、然るにすべての生理学者が、二人の新しい結婚の肉体が存在していて、しかも司祭の祝福なしに同棲していると承知しているとき、今や宗教局の義務は、これに介入し、攻撃し、二人の異なる肉体を、二、三の命令で引き離すことであるからである。それ故、良心的な宗教局が、すでに結婚生活を行っているキリスト教徒を離婚させるに難儀するとは実際耳にしたことはないのである。しかしまた他方、宗教局は、結婚を互いに単に約束しただけの人々を、何の苦もなく別れさせるということもほとんど耳にしない。 — まさに当然なことである。というのは、先の長い結婚生活では真の不義密通は、結婚していない肉体が存する故に離婚命令によって避けられるからである。しかし後の婚約の場合では、契約をなした肉体はまだ完全に存しており、離婚の資格を得るまで、まず長く結婚生活を送らなければならないのである。これが見かけ上の矛盾の真の解決である」[S.74]。

国王の借金の例。これは代理という言葉で詭弁を弄している。「第一に、第一等のランクの大使であれ、あるいは第三等のランクの大使であれ、その大使は、借金を賠償しようとするれば、最古の公法学者達の説を侮辱することになる。つまり支配者の単なる代理人で、模刻の硫黄製品の彼は、原物から離れる諸権利を有せず、従って支払いはなされないのである。第二に、侯爵は — さもないと我々は大学の午後の授業を一言も信じてはならないことになるが — 国家の真の総体的概念、かつ代表者であり（使節がまたこの代表者の代表者であり、あるいは小国におけるポータブルの国家であるように）、従って彼に一クロイツァー貸すすべての国家の部分を、あたかも自分が部分そのものであるかのように代弁するものである。従って、このような自分の代表する自我に属する部分が彼に貸すとき、彼は根本的には自分自身に貸していることになる。よろしい、と人々はそれを認める。しかしそれならば次のことも認めなければならない。即ち、侯爵たる者が自分自身の領民にまた支払おうとしたら、滑稽になるであろうということで、丁度スヴォロフ将軍の父親と似たようなもので、この人は自分自身に貸しだした資本に対して正直に国内で通常に利子を支払って、両替法に基づいて自らを罰したのである」[S.113f.]。これは自我の場合、記号と内容は不可分なのに、分離させているが故の詭弁と言えよう。無我と悟った高僧が存在しなくなるわけではない。このスヴォロフの父親の例は面白く、『フィヒテ哲学の鍵』でも言及されている。「私の絶対的自由あるいは自我性は、行動し反応するために、前もってこの抵抗（非自我）を自らに行う。この自由はスヴォロフの父親に似ていて、これは自ら金を借りて、手形を振り出し、しばしば手形の拒絶証書を作成し、自ら手形法に従って十分厳密に取引するのである」[Bd.3.S.1042]。人間の記号と内容が分離すればまた無責任体制の仕組みができあがる。「偉いさんとか最高位者は代理されるか、あるいは自ら代理するものである。しかし彼らが実際何かであることは稀である。別な者達が彼らの代わりに食し、書き、享受し、愛し、戦いに勝たなければならない。そして彼ら自身がまた別な者達のためにそうする」[S.199]。

ジャン・パウルでは言葉で皮肉を言ったり喧嘩する際の技法を学べるようになっている。西洋文化のマナーと云っていいだろう。

＜夫は八分間黙って彼女を見守っていた。「悪魔の名にかけて願いたい。おまえがすべての特権的騎士階級の中で最もだらしのない女だ」といい　—　と彼は言った。彼女は嵐や不正に見舞われると、単に他人の怒った誇張法に注目するので、私もしばしば控訴院法律顧問としてそうせざるを得ないが、今回も彼女は巧みに証明して見せた、「だらしのない女に用はない」　—　そして熱くなった騎兵大尉を更に激昂させるのは、自分が全く否認できないものの誇り高い証明を措いてなかったので　—　かくていつものようなことになった＞[83f.]。

うるさい町のコンサート会場について。＜「そういうことがないとしても」私は言う、「それでも真に音楽的な表現が過剰に見られます。誰もがそこでは自分の情感を、当惑の情感や硬直の情感を楽器で表現します。不協和音は強く、協和音は弱く演奏するというバッハの規則はホールでは誰もが承知していて、協和音はとても穏やかに溶け入ってしまっているので、人々はほとんど協和音が聞こえず、単に不協和音の音のみが聞こえると言います」＞[S.107]。

弁護士黒い服について。＜その法服には次の根拠がある。というのは我々の依頼人は我々を養い、我々に支払い、金よりももっと権利と困窮を得ているので、我々パトロン[弁護士]は彼らを悼んで、黒い喪服を着ているのである。これに対してローマ人達は、出すよりも得ることが多かった依頼人達が、パトロンのために、パトロンがひどいことになったとき、喪服を着たのであった＞[S.107f.]。

皮肉な称赞。＜私はビュルガー氏がこの有益な説教をすでにその印刷物の中に加えたかどうか、知らない。しかしこう称えたからといって、彼のそれ自体は立派な説教には眠り込ませる本来の力がひょっとしたら欠けているのではないかと告白するのをためらうものではない。これは読んだときにも聴いたときにも感じられる一つの欠点である＞[S.389]。

人間の成長を再構成するとすれば、恋愛は大事な要素であろう。

一般的恋愛指南もある。筆者にとってはもう遅すぎる指南であるが。＜彼の第三の主張、奸策はこうであった。男達は単純さの価値や率直さの崇高さ、「あなたを好いている」という率直な請け合いの崇高さを感じるものであるが、しかし娘達はこの請け合いに技巧的装飾、繊細さ、婉曲さを欲している。生長した花によるトルコ風な音信は娘達には詩的花による音信よりも好ましく、言葉によるお世辞よりも動作によるお世辞の方が好ましい、と。　—　私の主張は、彼の言は正しいというものである＞[S.271]。

この本では侯爵、男性によるベアータ誘惑とブーゼ・弁理公使夫人、女性によるグスタフ誘惑が対照的に描かれている。侯爵の弁舌は失敗し、弁理公使夫人の誘惑は成功する。二人ともエーフェルのドラマ、実は実の兄と妹ではないというドラマを誘惑の釣り針としている。近親婚の排除のテーマはカレンダーが閏日を有するように、科学の裏付けを得ているものであろうから、啓蒙主義者のジャン・パウルが無闇に古代エジプトのイシスとオシリス伝説の復活とかを目指したものではなかろう。むしろ自明のものを新たに学習したものと言えよう。太陽を初めて見るような流儀である。呼吸を意識して呼吸する術を学び、そして無意識にするようなものである。侯爵の誘惑が失敗するのは、『フィガロの結婚』風で読者の期待通りであろう。＜「猛禽類と同様に彼は、忍び入っても無駄と分かったと、

跳躍して捉えた。「いやできる」（と彼は言って、アンリの愛の告白を自分の告白とした）
「マリーよ、私は貴女の兄ではないのだ」。女性というものは、ある種の説明を余りに長く聞き入れる気がないときには、―― 明白極まる説明しか手にしないものである。彼はその上彼女の前にアンリの身振りであった。「冗談ととるか」と彼女は言った、「本気ととるか選ぶのは免じてください。―― 芝居の外では、薔薇祭の賞に値することも等閑にすることも私にはもっと難しいものです。しかし貴方はいつでもその賞をただお与えにならなければならない方です」>[S.351]続けて述べられている。<恵み深き侯爵におかれましては、自分は今日起きていることほど体に悪いものはないとドクトルに言われていますので、―― 私自身の表現で言うならば、―― 失せやがれ、と>[S.352]。

弁理公使夫人の誘惑は成功する。ブーゼ夫人は名前の通りに胸を少し見せる色仕掛けとリュートの音楽で情緒を醸し出している。言葉は「お兄様」という言葉だけである。おそらく最後にそれ以外に余計な言葉がなかったから成功したのであろう。これ以降のジャン・パウルの小説では言葉が色仕掛けを醒ますことになって、ジャン・パウルの主人公達は誘惑されない。<「兄が存命の間は決して不幸ではなかったのです」。彼女はそこで、自分の妹としての胸にかけていた兄の肖像画を、少しばかり、しかしやむを得ず胸を露わにして取り出し、彼の目に少しだけ、自分の目には十分にその絵を披露した>[S.341]。<彼が最も激しい情緒の動きを見せたとき、呆然と夢中になって、震える目をして、心は圧倒されて、さまよう魂と共に―― 彼に対して「お兄様」とくずおれた>[S.348]。

また肉体の仮死という点で失神女性のエロチックな死とオットマルの仮死という男性の死の把握が対照的に描かれている。

失神女性の場合。これは他愛もないものであるが、学術的なエロスが楽しい。「このようなレディー達の芸人的死は別の側面からも観照され得る。このような女性は自分の徳操の強度や試練に対して、失神に至るまでのある喜びを感じ得るのである。更にはこの徳操の受難や敗北に対して、これまた失神に達せるまでのある悲しみを感じ得る」[S.256]。

「私は大臣夫人の徳操的な失神、あるいはエロチックな死に話を戻す。しかし私は例えばこう言っていると頑固に主張するつもりはない。昔の哲学が死ぬことを学ぶ技法であるように、フランスの宮廷哲学もそうであるが、ただもっと快適なものであるとか―― あるいは、機知的にこう言える、つまり死に方を知っている者は強制されない、とか―― あるいはカトーについてのセネカの言葉を引用して、死は最初るときよりも、もっと大きな勇気で繰り返されると主張するつもりではなく、―― 単に何故彼女は上部シェーラウのいたるところで失神女性と呼ばれるのか語りただけで、―― 単にこうなのである。つまり彼女が重要な裁判に対して怠った権利除斥にもかかわらず勝利するにはどうしたらいいかという質問に対してある紳士がこう答えたからである、欠席[失神]によって、と」[S.256f]。

オットマルの仮死については印象的なコメレルの説明がある。<それからオットマルの独自の言葉がある。「私は死と話した、死は死後には死の他にはないと私に請け合った」[S.303]。これは単に内容であるばかりでなく、身振りである。諧謔の気分が（情緒的言葉をお許し頂きたい―― 言いたいのはジャン・パウル的諧謔ということである）かすかに、しかしただ一層不可欠なものとして、この文にある。これはエマーヌエルの文ではあ

り得ない> [Jean Paul, S.55]。続くオットマルの手紙文もよく引用されるものである。<私の精神は起き上がった。私は私がまだそうであった自我に向かって話しかけた。「おまえは何か、ここに座していて、思い出し、苦悩を有するものは何か。 — 汝よ、私よ、何ものかよ — 三十年前からこの自我の許を過ぎ去って行き、幼年時代、青春、人生と呼ばれていたあのもの、色の付いた群雲は一体どこに行ったのか — 私の自我はこの描かれた霧の中を通じて進んで行った — しかし私は霧を捉えられなかった — 霧は私から遠く離れて何か堅牢なものに見えた、私の許では滴る露の雫、あるいは所謂瞬間だ — 従って人生とは瞬間（つまりこの時間の露の小球）から瞬間へと移って行くことだ。… さて私が今や死んだのであれば、現に私が今そうであるもの、これが、目的であったのであろうか」 [S.305f.]。瞬間と *Augenblick* が同内容なのは人間の言葉として興味深いものがある。生死事大、無常迅速とくれば、禪的世界であるが、司馬遼太郎氏によると、禪の説明は簡単である。「武士層は、新来の禪に凝った。禪とは、おのれは何かという単純勁烈な一項目にのみ思いを集中する方法である。やがて解脱という昇華に似た作用がおこることを期待した。蒙古襲来のときの執権北条時宗の心構えと指揮のやり方こそ、政治の中の禪の真骨頂だったとっていい」。[『この国のかたち』五、文春文庫、168 頁]。ジャン・パウルは根本的に自我を再構成しようとしていると思われるが、しかし文章にこだわる点が東洋の禪とは違うと言えそうである。

次にジャン・パウルの世界理解について述べる。ジャン・パウルはマルクス以前であるから世界を一義的に経済的視点から把握していない。ただなぜか人間は憎しみ合っており、世界は利己主義者の総体であって、例外的に高人がいるだけである。

「憎しみの世界という石だらけのアラビアにあって、子供達は何と再び我々を元気づけてくれることだろう。子供達は互いに愛して、その善良で小さな目と小さな唇と小さな手はまだ仮面を被っていない」 [S.95]。フロイト以前でもある。

「人間ときたら。何故汝のすぐに塩と水と土とに砕けてしまう心は別の砕けてしまう心を叩きつぶそうとするのであろうか。 — 汝が、汝の振り上げた死者の手で叩き潰す前に、その手は墓地に沈んでしまうというのに。 — いや、汝が敵の胸に傷口を作る前に、胸は落ち、傷を感じはしない、そして汝の憎しみは死んでしまうか、あるいは汝も死んでしまうというのに」 [S.216f.]。このような感慨は後の作品でも頻出する。

その例外はこの『ロッジ』で披露されている高人である。その定義はこうである。「そうではなく、私が思っているのは、多かれ少なかれこうした長所の全ての程度に加えて、この地上では稀なものを若干有する人間のことである。 — 即ち、地上からの超出、すべての地上の行為は取るに足りないという感情、我々の心と我々の居場所との間の居心地の悪さの感情、我々の大地の混乱した藪と反吐の出る好餌に向けられた眼差し、死の願いと雲の上への視線である」 [S.221]。

もっとも世の人も悪人ばかりではない。世の人々を見てみれば、そう単純には行かない。「君が一人の人間を伝聞で憎んでいるとき、その家へ行って見守るがいい。つまりその会話の中に幾多の友好的特徴を、その人が愛している子供や妻に対するその人の振る舞いに愛の幾多の印を見いだしたとき、君が持参した憎しみの気持ちをまた持ち出せるものか見守るがいい。現著者がその生涯で何かに含むところがあったとすれば、それは偉いさん達

であった。しかし現著者がシェーラウでのピアノのレッスンで幾多の偉いさんと一つの天井画の下に立つ機会を得て以来、自らこれらの巨人達と飛び回ることになって以来、民衆を抑圧している大臣は自分の子供達を愛しており、会議室での人間の敵は、自分の妻の裁縫台の許では人間の友であり得ると気付いている。かくてアルプスの尖鋒は遠くでは禿げて急峻な眺めであるが、近くでは広場や立派な薬草が十分にあるのである」[S.190]。

フランス革命の時代にあつて、ドイツでは例えば社会のシステムが善4割、悪6割ぐらいに感じられた場合、革命よりは上からの改革というのが費用対効果の面で妥当と思われたのであれば、ジャン・パウルの処世も考えられるのかもしれない。善悪の割合は筆者の何の根拠もない思い付きにすぎないのであるが。いずれにせよ、ドイツではナチの時代を経験し、今は難民問題があるわけで、作家の言動は長い目で検証されるべきものであろう。目下情勢ではマルクス主義がこけたので、世に見られる文系の研究からは理論と実践という点で緊張感が薄くなったと思えてならない。

粗筋からはジャン・パウルによる政治的改革的具体的なプログラムが見えているわけではないが、差し当たり子供の教育にあたって、教育者に対し要請されていることは機知である。

「私の最大の依頼は — 私が何年も前に印刷させたことですが、 — 貴方が私の家で最も冗談好きの男であることです。楽しさがあれば、子供達にとってすべての学問分野が砂糖の甘い分野となります」[S.126]。

「ただ機知の発展だけが、これは子供の場合考える人がまれであるが、最も害が少ない。 — これは単に軽い須臾の緊張の中でのみ働くからで — また最も有益である」[S.135]。

『巨人』ではアルカディアが実現しても更に良き世界、ユートピアを目指し、憧れが消えることはないであろうと述べられているが(Vgl. Bd.3. S.222)、すでに処女作でそれと似た感懐が述べられている。グスタフの盟友オットマルの言である。「しばしば私は考える。ひょっとしたら何もないのかもしれない、ひょっとしたら死後もまたこうかもしれない。おまえは一つの天から別の天へと憧れることになる — 」[S.218]。

ゲーテを思わせる思索も述べられている。「人々から遠く離れて原理が育つ、人々の許で行動が育つ。孤独な無為は書斎のガラス鐘を出ると、社交の活動へ成熟する。すでに人々の下に来たとき善良でなければ、人々の下でより良い人間になることはない」[S.236]。よく知られたゲーテの言葉を思い出させるものである。「才能は静かさの中で形成される、性格は世間の奔流の中で形成される」『タッソー』。

作家は若くても人間観察が鋭いには感嘆させられる。「彼[オットマル]は主張していた。大方の悪徳は、悪徳を避けようとして生ずる。 — 悪しき行いをするという恐れから、我々は何もせず、もはや偉大なことは何も勇気を有していない。 — 我々は皆が多くの人間愛を有しているので、もはや名誉心を有していない。 — 人間を大事にする心、人間愛から、我々は何の率直さも、何の正義も有していない。我々は欺瞞者、暴君を倒さない等々」[S.406]。どこぞの国の揶揄かもしれないが、筆者の在職したとおぼしき今は懐かしい部局を思い出しても、なるほど人間愛故かこの文を読んで納得できて何か幸せな気がする。

あとがき

この翻訳は解説でも記したが、すでに鈴木武樹氏がジャン・パウル文学全集、第1巻『見えないロッジ・第1部』1975年11月25日、第2巻『見えないロッジ・第2部』1976年8月30日発行として公刊しているものであり、初訳ではない。翻訳に当たっては Hanser 版を基本とし、Berend 版、Klaus Pauler 版(1981)、オンラインでの英訳 *The invisible lodge, by Charles T. Brooks, 1883* を適宜参照した。しかし段々一応2, 3頁訳しては鈴木武樹氏の訳と比べるとという形に落ち着いた。鈴木武樹氏の訳には詳細な注が付いているが、拙訳の場合訳注はハンザー版の部分を部分的に[]で記すに留めた。Klaus Pauler の注など見れば切りがない感じで、専門的に読む人はドイツ語の注を参照するであろうから、簡略なものでいいだろうと思った。

鈴木武樹氏の訳には大変助けられた。既訳のあるものを訳すと、初訳に挑戦する勇気がなくなりそうであった。

オンラインでは通読が面倒であろうが、しかし引用された原文の文脈確認といった場合には参考になろうかと思う。

ジャン・パウルはどんな作家か一般に無料で紹介できる時代となり、ジャン・パウルへの理解が少しでも深まることを期待したい。

2016年11月 恒吉法海